THE CENTRAL REVIEW

中央公論

11-1929

十一月號

46

第四十四年 第十一號 第五百二

昭和四年十一月一日發行（毎月一回一日發行）

健腦は人生の幸福なり



腦病良藥

健腦丸

主効

▲腦充血 ▲神經痛
▲腦膜炎 ▲腦貧血
▲逆上症 ▲卒中
▲頭痛 ▲眩暈
▲健忘 ▲耳鳴
▲便祕 ▲中風

特長

健腦丸は、腦に榮養を補給し根本的に、頭腦を健全ならしむ要素を備ふ。

本舗 大阪 東京 丹平商會

價 五十錢より十圓迄。各藥店にあり

東京帝國大學教授
文學博士

木村泰賢先生著

好評十版出來

佛教の正しき見方

眞空より妙有へ

四六判四三〇頁
ポプリン裝函入
定價金二圓八十錢

◇不朽の名著◇

本書は曩に出版界を震駭せしめ一擧十萬部を賣り盡せる前著『解脫への道』に收錄した以後の論文の一切を蒐錄して餘さず、未發表のものを併せて十五種、正しき文獻に基礎を置きながら常に新しき立場より佛教の人生觀的意義を見出し、以つて佛教精神より個人及び社會を動かす原理を導き出さんとせられしもので、自然、叙述も一般論より特殊論に及び一名佛教概論とも稱すべき著者懸命の力作である。敢て萬人必讀の思想書として推賞し、御愛讀を祈る。

內容目次

東京帝大教授文學博士
木村泰賢著

縮刷

解脫への道

一切は永遠に解脫して行く經過で、而も一切を永遠の解脫に向ける所に人生の價値が存するといふ著者の新しき佛教觀。新裝縮刷版出來す。

定價壹圓
送料八錢

東京市赤坂區
青山南町六丁目

甲子社書房

振替口座東京五〇〇三九番

フリードリヒ・アルバアト・ランゲ原著

慶大教授 文學博士 川合貞一譯補

唯物論史

卷之上 既刊
卷之中 新刊
卷之下 嗣出

卷之上 菊判 四五〇頁 定價 四圓

卷之中 菊判 六二九頁 定價 五圓卅錢

送料各廿七錢

唯物論の意義の批判

ランゲの唯物論史はクラシックと謂はれて居るが、然し唯物論の歴史としてこれ程纏つたものはマダ他に現はれて居ない。出版後半世紀を經て居るのに尚この事實あるは、その眞價の如何なるものかを裏書するものではないか。之は單なる唯物思想の歴史的羅列ではない。彼はこの著に於て人類文化の歴史に於ける唯物論の位置を批判的態度を以て突き留めやうとしたのであつて、現代に於てもその意義を愈々發揮する。上卷は古代及び十七世紀、カント以前の唯物論を盡してホッブスに及び、中卷に於ては譯筆さらに暢意潤達、夫れ以後の唯物論及カントの唯物論を主調とする。「カントの世界觀の使途」ランゲは玆に完き姿を提示してをる。書中しばしば簡淨適切の補註があるから、讀者は一層の利益を享ける。蓋し現代に於ける唯物論の意義の批判は斯の如き名譯に俟つ可きではないだらうか。

東京日本橋通

大阪 神戸 京都 名古屋

丸善株式會社

横濱 福岡 仙臺 札幌

東京＝神田・三田・早稲田・丸ビル

寫眞界の權威

アグファ會社の新發賣品

モウベックス、カメラ

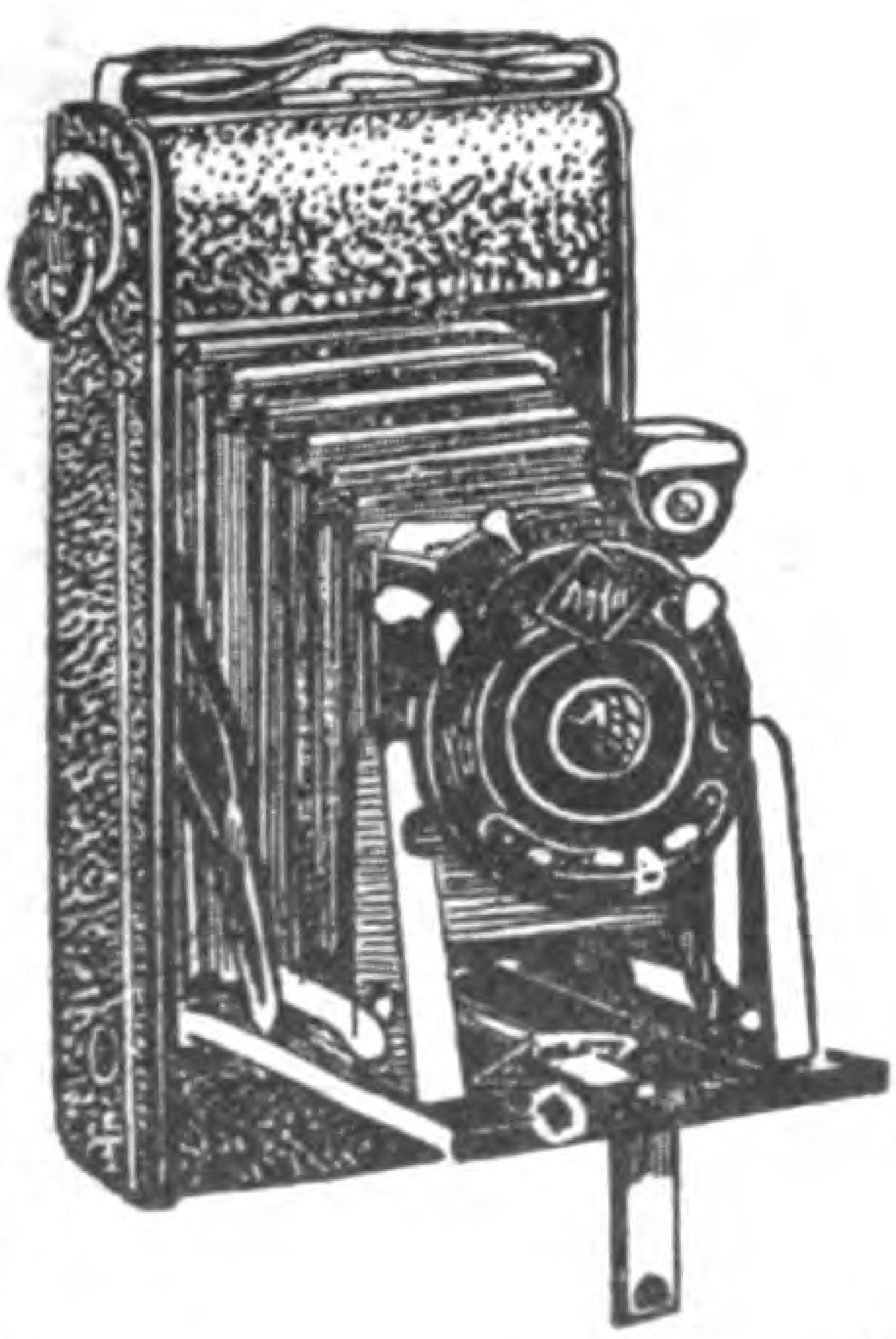
十六ミリ活動寫眞機（四十呎）

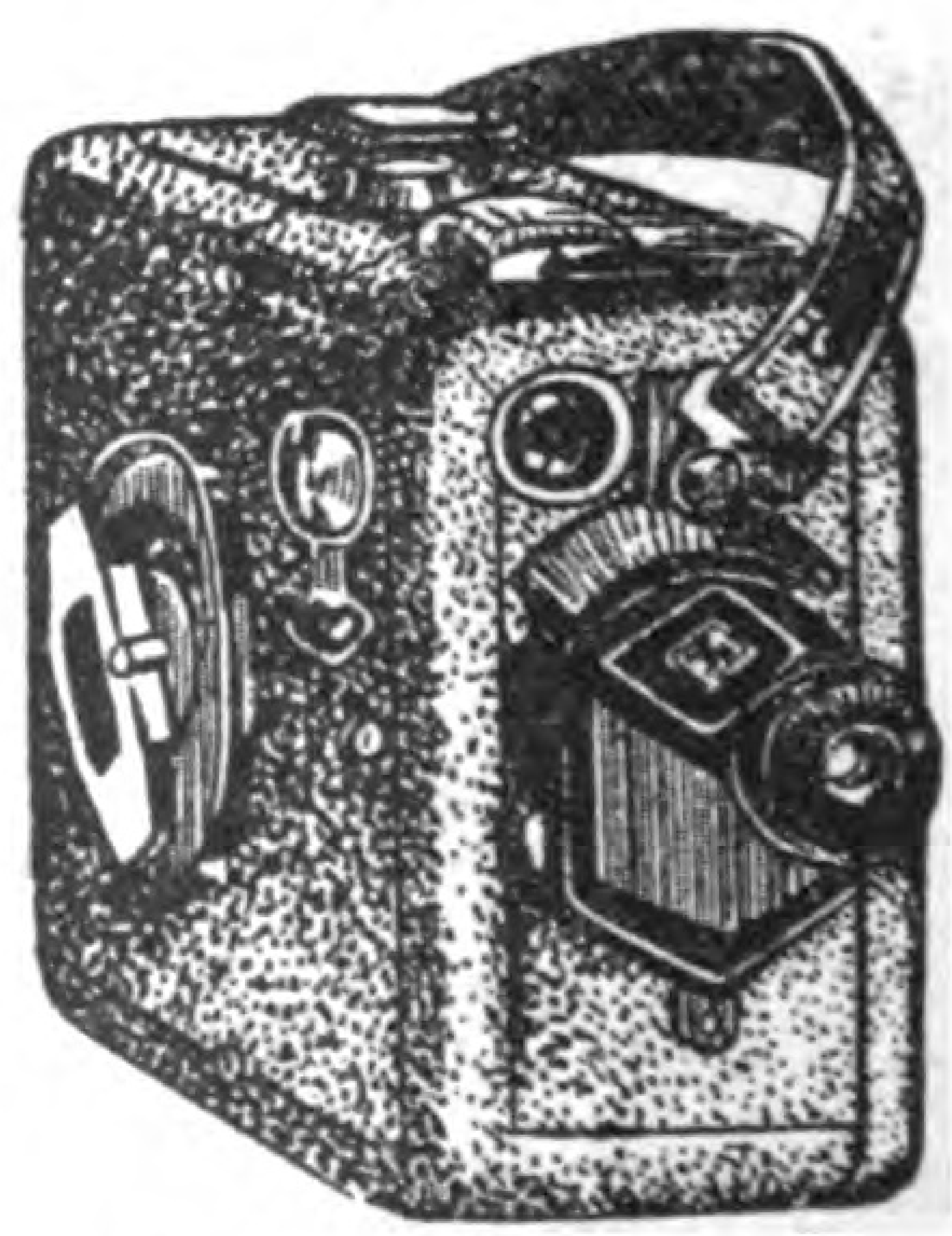
最も新しくて、最も廉價です

ビリー、カメラ（ブロニー形）

全く初めての方でも

文句なしに好く寫せます





アグファ合名會社

東京　大阪

賄賂考

編輯代表 齋藤茂吉 藤澤古實

東京 振替 口



赤彦全集

日本民族のみの有する短歌道に於て格調の雄大至高なるは萬葉時代に及ぶものなく、明治大正六十年歌人としての風格一世に高きもの島木赤彦に如くはない。その詠風の森厳荘重簡古蒼老なる、雄大深奥清虚悠久なる、正に現代歌壇の盟主たるべくその高く位置せる姿は人麿赤人二歌聖と列座して萬葉調歌風に於ける鼎の重きをなす。彼の作歌道は明治の先覺者子規左千夫の正道を繼承し兩者の眞髓を兼ねて短歌寫生の大道を完成せるもので、その全人格全性力を傾注するを自己生道の信念となし寂寥幽遠の窮極所を目ざして三十年須臾も止まることなく至上境に達してなほ死に至るまで歩みを止めなかつた眞に信仰的修道者である。彼の唱道せる寫生道鍛錬道が如何に現歌壇に廣大なる影響を與へ正鵠なる指針となりしかを見る時思ひ央に過ぐるものがあらう。然してその萬葉論は深き洞察と高き詩心の披瀝とによつてよく人心を捉へ其他多くの歌論は啻に作歌者のみならず文學に關心を持つ者の必讀すべき好文字である。また新體詩の古朴高邁なる、童謠の味ひ豊かなる隨筆散文の高手、何れも歌人赤彦の一面を傳ふ。今此の全貌を始めて覗ふべく全集八卷に整へて世に送る。切に江湖の贊助を仰ぐ。

豫約募集

內容見本進呈

締切 10月31日

全八卷　**一册四圓**

平福百穗畫伯
装幀

菊判十ポイント一段組
頁數平均六百餘頁
毎卷木版手摺見返付
布装函入天金

略規

- ▼全八卷分賣せず
- ▼申込者のみに頒つ
- ▼申込金二圓（最終會費中より控除す）
- ▼會費毎月拂四圓 一時拂三十圓
- ▼申込期限 十月三十一日
- ▼配本十一月より毎月一册宛（但し第一回分は十月初め出來）

神田神保町
座東京七四四一六
岩波書店
電話九段 一〇二二・一二八一 二一〇八・二一〇九 二六二六



渡り鳥　　安田靫彦筆

露伴全集

豫約募集

內容見本進呈

締切 10月31日

全十二卷

菊判十ポイント
一段組
每冊平均八八〇頁
別製手織布表紙
天金
函入

一冊 四圓五十錢

略規

▼全十二卷分賣せず
▼申込者のみに頒つ
▼申込金貳圓（最終會費中より控除す）
▼會費　每月拂四圓五十錢　一時拂五十一圓
▼申込期限　十月三十一日
▼配本十一月より每月一冊宛（但し第一回分は十月中旬出來）

發刊の辭

露伴幸田先生はすでに生ける古典である。古典とは何であるか？ 古典とは、一國の文學中にその永遠の意義と價値とを確認され、苟も根柢ある敎養を築かんがためには何人もそれを讀まねばならぬ底のものを言ふ。年少紅葉と並んで明治文壇の雙璧と謳はれてより、爾來幾十年、小說に戲曲に、論說に傳記に、紀行に人物評論に、考證に評釋にはた訓詁に、その筆益々靈妙を加へつつある先生。その博學と、その卓識と、その風懷と、その氣魄と、明治、大正、昭和を通じての文界の大人格たる先生。

斯くの如き先生の全集を我々が今迄持たなかつたことは、全く一つの大きな不幸であつた。しかしそれは偏に、先生が自ら持することと堅く、その刊行を何人にも許されなかつたに因つたのである。しかし竟に我々の願ひは聞屆けられた。我々は多年の宿願を達してここに先生の全集を刊行する。それは我々の誇りであると共に又我々の幸福である。我々は、總ての、敎養ある、また敎養を望む日本人が、この誇りと幸福とを我々と共にせられんことを願ふ。あらゆる世代に亙つて、この生ける古典がその全き姿に於いて、書齋の飾りとなり、日常の精神的糧とならんことを期待する。

東京神田神保町
振替口座東京七四四一六

岩波書店

電話九段 一〇二二・一一二八一 二一〇八・二一〇九 二六二六

婦人

十一月特輯

結婚淨化

貞操趣味論……與謝野晶子

約婚時代を利用せよ……市川源三　山田わか　吉田紘二郎

スマートな貞操泥棒……鏑木駿二郎

私の戀愛と結婚……三宅つや子

女流作家三宅やす子氏令孃つや子さんと二科の新人阿部金剛氏とが藝術家同士の理解ある愛に結ばれた。が形式的な結婚はしないといふ「結婚を無視した戀愛？當のつや子さんにはこの問題をどう考へてゐるか。

婚約受難記……浦河武夫

家庭を捨てゝ婦人記者になるまで……正岡滿子

妻に聞く

貴族院夫人、重役夫人、サムリマンの妻、文士の妻、彼女らの落漠木枯しの野にも等しい家庭生活を赤裸々に打ちあけた。娘よ、妻よ、良人よ、われら今家庭について、結婚について何を考ふべきか？

モダン結婚哲學

武者小路實篤・三宅やす子
柳原燁子・近衛秀麿・長谷川
時雨・米田和歌・菊池寛

漫畫・漫文

美人の妻と不美人の妻
NANA子とルン・プロ映畫鑑賞會スナップ

不良外人事件祕話……柳澤幸三郎

公論

結核患者と結婚……佐々木秀一

結婚してはいけない婦人……正木不如丘

明日の結婚

□結婚改良私案・上田文子
□私の理想結婚・鳥居幸子
□愛！愛！愛！・安藤和子
□何を求むべきか・加賀あい子

結婚敗殘者の手記……上田以彌子

詩人萩原朔太郎氏との十年の形骸結婚を逃れて彼女の手記は世に何を訴んとする？

聰明美論……細田民樹

見合ひ結婚禮讃……片岡鐵兵

世界獨身順禮 ▽紳士發見記……吉屋信子 ▽乘る乘らぬの記……北村兼子

聯業婦人の罹り易い病氣と攝生法……岡田道一

疑獄をめぐる涙の裏面……大和晩二

黑い影が思ふ存分に跳つたあと、幕の陰には立派な人物が登場してゐた。前大臣、前賞勳局總裁、代議士、實業家、勳一等、勳二等……曾つてない疑獄事件である。が、囹圄に呻吟する彼よりも一層みじめなのはその家族の姿である。天岡直嘉氏と小川平吉氏の家庭に哀しき裏面を見よ！

いよ〳〵白熱化せる

美人投票

カフエ退治漫談……大泉黒石

田中大將と婦人

皇女殿下御誕生と報道戰

宇野千代氏の處女時代

九州大學評判記

キッス雜考

日本娘の死

將來の政界に於ける「金」

——（卷頭言）——

一、小川平吉の瀆職事件をや、善意に解する者は云ふ、取つた金で私腹を肥やしたのではなからうと。然るに之を打消して殆ど全部を自己名義の財産中に加へ以て近く總裁の後釜に据らんとするの準備に齷齪して居つたと難ずる者もある。それにしても、其器に非ずして黨首たらんとする野望を動機とするとは云ひ、結局蓄ひ得た財産を政黨の用途に捧ぐるの考であつたことは疑ない。然らば小川の行爲は客觀的に評して之を政黨黨費を作る爲になされたものと論ずるも過言ではあるまい。而して之は一面に於て最近政黨の莫大なる費用が如何にして調達せられて居つたかの秘密の一端を曝露するものと謂ふことも出來る。

二、さう考へると我々は直に斯うした金の作り方は獨り政友會に限つたのではなからうと云ふ事に想到せざるを得ない。官僚内閣時代には無論の事、民政黨（又は憲政會――但し此政黨は政友會程政權掌握の機會に惠まれなかつたから從て惡事を爲す機會が已むを得ず乏しかつたのかも知れないが）内閣だとて嚴格に調べたら丸で無瑕といふ譯には行くまい。是此種の瀆職事件が何れの内閣に在ても概して大目に見られた所以、少くとも呑舟の魚が巧みに免れて刑なかりし所以であらう。

三、然らば今度の民政黨内閣が敵黨の巨頭小川を槍玉に舉げたのは何と謂ても破天荒の事である。舊式に云へば武士の情を缺く仕打ち、從て之を敵黨窘迫の黨略に出づると誣ふる者もある。局外の我々に取ては黨略に出でようが出でまいが大きな顏して惡事を營む圖太い奴のどし〳〵捕まるのは唯々痛快の至りである。併し何よりも深く我々の注意を要するは、之が亦同時に民政黨に取ては背水の陣になることであらう。何となれば同じ樣な手段で黨費を作ることは今後嚴重に民政黨にも封ぜられるであらうから。

四、或る種の財源が今後政黨に斷たれると云ふことは慥に政界革新の第一歩たるに違ない。我々は斯かる醜汚の早く政界から跡を絕たんことを冀望して如何に惡戰苦鬪したことか、それ丈け今度の事をば多大の滿足を以て迎ふる者であるが、併し他の一面に於て、若し金力の跋扈が今後の政界に於て從來の如くならざるべしと信ずる者あらばそは大なる誤りだと思ふ。

五、既成政黨の人達が政界に於ける「金」の威力を信ずることは昨と今と毫末の差を見せない。現に後繼總裁の詮衡に際し政友會には、犬養氏の擁立に金力的背景なきの理由を以て難色を見せ、頗に實力派中より其人を公選すべきの説があるではないか。於是我々は、例へば小川一件に於て危い綱渡りをして金を作る冒險に苦盃を嘗めた政友會も、今後は他の安全なる方面に於て必要な金を作る事に却て一層狂奔を新にすべきを推測せざるを得ない。今後の政局に注意するものは此點を計算に入れて置くことを忘れてはならぬ。

六、政權に結托する金權に二種類ある。その各の特徴は一言にして盡し難いが、一は本來の資本家であり二は政治家の手先となつて利權を漁る片々たる成業家連である。從來この第二種の嘖々者流を使つて過分の金を作つたことは、一面に於て第一種の有産階級とも密接な關係を保ちつ、又能く彼等の隈くなき影響より免れ得た理由であつたが、今後若し專ら第一種の有産階級より潤澤な黨費の供給を仰ぐことともならば、下らない刑事的の蹟きは免れ得んも、西洋に於ては既に早く要へられて居る樣な、金權完全に政權を支配する」の端緒は我國に於ても之より如實に開かるることにならう。何れにしても我々は一難を突破して更に他の大なる厄難遭遇したことを覺悟せねばなるまい。

中央公論



第四十四年第十一號
十一月號
五百○二號

昭和疑獄の具體的特殊性

大山郁夫

一

某前大官、某前高官、某前顯官、前内閣某閣僚、等々。

最近日本の民衆は、かうした言葉によつて、一種異樣の眩暈を感ぜしめられた。過去幾十月間、我々が毎朝眼をさまして新聞紙を擴げる時、それが何新聞であらうと、全紙面のうちで最も強く我々の視線をその上に集中せしめるやうに大活

字を以て印刷されてあるのは、それらの言葉以外の何物でもないのだ。

そこで、それらの言葉によつて逸早く囚へられた我々の注意は、一體どこへ導かれて行つた？ 路は唯一つ、——いふまでもなく疑獄事件へ！

某前大官、某前高官、某前顯官、前内閣某閣僚。旗が亂れて伏兵があることを知るには名將の叡智が必要であつたにしても、かうした言葉の散落するところ、その裏面に——もしくはその表面に——疑獄事件の記事が展開されてゐることを言ひあてることは、最も平凡なる街頭人の常識で間に合ひすぎるほど間に合ふやうになつた。さうした言葉が疑獄事件の——當面の政治的腐敗事件の——指標となり、象徴となり、合ひ言葉となつて來たからだ。

政治的腐敗事件！ 人は最早かうした言葉に聞き飽きてゐる。官僚、政黨、政商、利權、贈賄、收賄……あらゆるかうした言葉は、明治時代から、大正時代を通じて、昭和時代の今日に及ぶまで、日本の立憲政治の記録の上を、一本の赤い線を曳きつゝ、どこまでも際限もなく走つてゐる。

單なる政治的腐敗事件は、かくて今日では、一個の日常茶飯事とさへなつて來てゐるのだ。從つて、その方面に現はれて來るすべての事件は、それが尋常一樣の紋切型のものである限り、最早民衆を魂の底からひつくりかへらせるほど驚倒せしめる力を全然喪失してゐる。萬一それが異常の大規模のものであつた場合には、それは或ひは一時的に一大センセーションを捲き起すであらう。だが、唯それ切りのものだ。それは、夏の夜空の花火のやうに、瞬間的に一大效果を擧げた後は、永久に忘却の闇の中に消え失せてしまふであらう。そして人は、次の事件が勃發した時には、もう一度驚きを新たにするだけであらう。

ところで、今我々の眼前に展開されてゐる疑獄事件も、矢張りさういつた種類のであらうか？

この問ひに對しては、人は何かなしに、「否！」と答へる衝動を感じるであらう。人は、たとへ何等かの明確な説明を用

意してなくとも、肯定の聲よりは否定の聲が先に立つて出て來ることを、どうともすることが出來ないであらう。

この心持こそ、大衆が今眼前の所謂昭和疑獄に對して本能的に感じてゐる心持であらねばならぬ。大衆はそれから何等かの異常の意味を讀み取らうとしてもゐるし、またそれに何等かの異常の意味を讀み込まうともしてゐる。

異常の意味――大衆は、學者がするやうに、それを微細に亙つて『分析究明』したり、權威あるもの丶如くに裝はれた言葉で說明したりすることは出來ない。だが、それを直感してゐる。何物かの手が、それを大衆に強く暗示してゐる。その暗示は大衆の魂に執拗に喰ひ入つてゐる。大衆は何處へ行つても、その魅力から脫け出すことは出來ない。現前の日本の社會的雰圍氣が、隅々端々までも、それに充ち滿ちてゐるのだから。

さういつた異常の意味が、昭和疑獄に附き纏つてゐるのだ。如何にも一面から見れば、昭和疑獄は、明治時代から大正時代を通じて見られた一聯の諸疑獄事件を維ないでゐる長き鎖の末端におかれてある一結節であり、この意味に於て、それらの過去に於ける一切の諸疑獄事件の繼續であり、集積であり、總浚へである。そして、この視角から見れば、昭和疑獄は、明治疑獄とも、大正疑獄とも、共通の外形および內容を持つてゐる。それは何人にも、あまりにも容易に感知され認識され得ることだ。

それにも拘らず、昭和疑獄には、それのみが持つ獨自の一面があり、獨自の特徵がある。それは、明治疑獄や大正疑獄の繼續であり、集積であり、總浚へであるには相違ないが、同時にさうしたもの以外の新しき何物かである。換言すれば昭和疑獄はあくまで昭和疑獄であつて、他の何物でもあり得ない。それは、昭和疑獄を產んだ昭和時代が、明治時代や、大正時代の繼續であり、集積であり、總浚へであると同時に、昭和時代といふ一個獨立の新しき何物かであるといふのと相關聯してゐるものである。

昭和時代の、もしくは昭和時代の日本の社會の所產である昭和疑獄は、必然に昭和時代の日本の社會を反映してゐる。

人は昭和疑獄を通じて、昭和時代の日本の社會を知ることが出來る。それ故にこそ、昭和疑獄は、どこまでも一つの獨自性を持つ昭和疑獄であつて他の何物でもあり得ないのだ。そして、所謂昭和疑獄に附き纒ふ異常の意味といふものは畢竟その一點から出て來るものに外ならないのである。

二

では、何が昭和疑獄を昭和疑獄たらしめたか？

昭和疑獄を昭和疑獄たらしめたものは昭和時代の日本の社會だ。

かういふのも、一つの答でなくはないが、しかし同時に答にならない答でもある。少くとも、それは餘りにも高飛車的な答であり、殊に當面の問題の具體的特殊性から餘りにも懸け離れた答である。何となれば、若し我々がそれに幾らかでも具體的內容を持たせるやうにそれを論じ進めようとすれば、我々はどうしても、昭和時代の日本の社會そのものを全面的に說明しなければならなくなるからである。さうしてゐると、その結果は本篇のやうな短き論文よりは、寧ろ特殊社會學上の一著書になつてしまつて、しかもその內容が必然に、當面の問題とは直接の關係を持たない多種多樣の諸項目をも包含しなければならないことになるであらう。

人が當面の問題について要求する解答は、斷じてさうしたものでないことは明かである。否、それは何よりも、殊に、當面の問題の具體的特殊性を說明するものでなければならない。

といつて、さうした解答を與へることも、決して容易ではない。殊にこの一文を數時間內に早急にまとめあげることを要求され督促されてゐる筆者には、その困難さが骨の髓まで泌み透るほど鋭く感じられる。だが、ともかく筆者は、茲でその解答の試みになりとも着手してみなければならない羽目に追ひ詰められてゐるのだ。

この火急の場合を切り抜けるために、筆者まづ、當面の問題の表皮を形づくつてゐるものとも見るべき昭和疑獄の外面的諸表象中の最も顯著な部分を取り上げ、そこから一ト皮づゝ剝ぎ取つて行つて最後にその核心を抉ぐり出す、といつたやうな『戰術』を取らうとしてゐるのである。もとより筆者は、それが幾らかでもの成功を擧げるであらうといふやうな期待を全然持ち合はせてゐないが、しかし成功とか失敗とかの問題は別にして、ともかくこの一文を、昭和疑獄を生ぜしめた現在の日本の政治社會に關して何事かを示唆するものだけにはしたい考へでゐる。

三

某前大官、某前高官、等々といつたやうに、退職したばかりの内閣の指導的地位を占めてゐた一聯の政治家たちが珠數つなぎに疑獄事件の引き合ひに出されたことは、とにかく非常に珍らしい現象である。さきには民政黨内閣の若槻首相が、退職後例の松島遊廓事件に關聯して、法廷に立たされたことがあつたが、しかし、それはたゞ證人としての資格（？）に於てゞあつた。ところが、今度の事件では、前閣僚の或るものまでを含めた某々前大官の一團が單に事件の飛沫を喰つた程度の關係者としてゞなく、實にその渦卷の中心に見出されてゐるのだ。かういふことは、たしかに珍らしい現象だとふいことには間違ひはないのである。

と同時に、それは珍らしい現象ではあるが、しかし考へられない現象ではない。政治家といふものが何か神祕的な超人的存在かでもあるかのやうに思はれてゐた時代は、疾つくの昔に過ぎ去つた。古代ローマ人の諺に、侍僕の眼中には英雄がないといふ意味のものがあるが、しかし今日では、一般民衆の眼にも、國家の大官連の日常生活の現實はよく暴露されてゐる。少くとも多少の文字ある一般民衆は、常人の間に起り得ることが、國家の大官連の間にも起り得るものである位のことを知るには十分な教養を得て來てゐる。そして、さうした教養の最も大なる部分が日刊新聞から來てゐるものである

ことも、また、我々の常識となつてゐることだ。

だが、悪漢、痴漢、詐欺漢、低能漢、賭博常習者、殺人狂者、等々々、もしくはさうしたものに共通の素質をもつもの、闇の王者、黒手組、社會の排泄物、等々々、かうしたものが『國政整理』の大任を帯びて傲然と一世を睥睨する大政治家閣中に群棲するといへば、それを聞いて驚くもの、方が、それこそ當然だと言つて濟まし込むものよりも幾萬倍もあることは事實だ。であればこそ、某前大官以下の一系列の言葉を業々しく並べ立てた新聞記事の前に、一般民衆は只管大きく眼を見張つて、それを何かの天變地異にも等しい出來事であるかのやうに不思議がるのである。我々はそこに、封建的教養の遺習か、まだ／＼全社會の基底に深き根を固く張つてゐることを見逃がすことは出來ない。

だが、某前閣僚の或るものまでを含む某々前大官の一團が事件の渦中にあるといふことは、大衆の間に一大センセーションを捲き起す原因になりこそすれ、決して昭和疑獄の獨自性もしくはその具體的特殊性をなすものでなく、從つてそれに伴ふ異常の意味を説明するものではない。

マルクスの『ブリユメール十八日』を讀めば、その主人公――畸形的な外貌を持つた凡庸漢、野心と空想だけが無闇に發達した政治的痴呆病者、投機に沒頭する借金王、等々々としてのあらゆる如何はしき素質を一身に具備するルンペン貴族ルイ・ボナパルト――が如何にその亡命の貧窮生活からフランスの元首の地位にまで登つて行つたかの經路を敍述してゐるが、我々はこの一卷を讀んでその中に出て來るすべての人物と田中内閣の閣僚の面々との類比を求めるとき、自然にこみ上がつて來る微苦笑を禁ずることができないのである。

四

現在我々の眼前に展開してゐる昭和疑獄について、次に今一つ注意されることは、それが内閣更迭後間もなく明るみへ

持ち出されたといふ一事である。

この事は、非常に意義深い一面を持つ。もとより表面的に見れば、最初に擧げた一點、即ち某々前大官といふ言葉で示唆されてゐる前内閣の歴々が事件の渦中の人となつてゐるといふやうな、いはゆるニュース・ヴァリューに多分を持つ事實に比べると、それは如何にもケバケバしさを具へてゐない。ミジであり、クスんでゐる。刺激性が乏しい。從つて「俗受け」の要素が貧弱であり、更らにセンセーションを捲き起す原動力を缺いてゐる。

だが、さういふのは、たゞ表面上だけのことである。内面的に見れば、事件が内閣更迭の直後に持ち上げられたといふ事實は、同じ事件に關聯する他の如何なる事實よりも遙かに意義深いものである。それは、問題の中心點に、從つてその具體的特殊性により近く迫つてゐる。たゞし、この點を或る程度に滿足に闡明するには、稍々複雜な手續が要る。少くとも我々は、その目標に到達するまでには、多少の廻り路を避けることが出來ないのだ。

斷るまでもなく、我々が民政黨内閣によつて疑獄事件が明るみへ持ち出されたことに或る深い意義を見ようとしてゐるのは、我々が民政黨内閣の一枚看板にされてゐる「綱紀肅正」とか「公明なる政治」とかのスローガンに毛程の信頼をでも懸けてゐるからではない。善良な小市民諸君の間では、「民政黨内閣は政友會内閣ほどは惡るいことをしないであらう」といふやうな會話が屢々交はされてゐるのが聞かれる。だが、さういふことは、我々には丸ツ切り緣のないことだ。成るほど事實問題としては、少くとも現在までのところで、民政黨の幹部の人々は、政友會の幹部の人々ほどは、少くとも個人としては、善良なる小市民諸君がいふやうに、『惡るいこと』――即ち現行法律によつて罪を問はれるやうな行爲――を、或ひはして來なかつたかも知れない。否、して來なかつたといふのが大體本當であらう。そして、小市民層の間に於ける民政黨の評判が、遙かに政友會のそれを拔いてゐるやうに見える事實があるのは、おそらく大部分はそのためであらう。だがいはゆる『惡るいこと』――違法行爲もしくは犯罪行爲――をしないといふだけのことが、それほども立派なことに見

られるのは、明かに小市民的見解から來てゐることだ。ブルジョアジーの階級的武器として現行法律の本質を理解してゐるものには、そんな考へ方は『犬に喰はしてしまへ』位で片附けてしまふべきものほどにしか評價ができないものだ。のみならず、假りに『惡るいこと』といふ言葉の意味をもッと廣汎に解しても、個人として惡るいことをしないといふことは、さうした個人の幾人かによつて構成される政府が惡るいことをしないといふことを意味するものでは斷じてないのである。

無産階級戰線の上に立つ我々の立場から見れば、民政黨内閣にせよ、政友會内閣にせよ、どちらも資本家地主の政府である、といふ一點には毛頭變はりがないのである。そして、この意味に於て、兩者は共に全然その本質を同じくするものである。若し兩者の間に何等かの差異があるとすれば、それは程度上の差異にすぎないものである。だが、そこへ來ると、民政黨内閣は政友會内閣よりも、金融資本への、よりよき番頭としての折紙のついてゐるものである。從つて、この點から見れば、資本家地主の政府としては、前者は後者よりも役者が一枚上である。要するに、民政黨内閣が政友會内閣よりは好ましい内閣だといふやうな小市民的な考へ方は、無産階級的立場から見れば、徹頭徹尾無意味なものである。

五

といつて、我々はまた反對に、政友會の有象無象が『民政黨内閣による疑獄事件つゝきだし行爲は明かに政略的意味をもつ司法權の濫用だ』といつてガヤ／＼と騷ぎ立てゝゐる態度を、爪の垢ほども肯定しようとしてゐるものではない。政友會の連中がさういふ泣き言を並べるのは、仰向いで唾するやうなものである。彼等が幾ら『司法權濫用』の一點張りで民政黨内閣に喰つて掛つたところで、それは少しも彼等の『公明正大』さの證明にはならないのである。といふのは、彼等が脛に傷持つ身でさへなければ、民政黨内閣の『司法權濫用』は唯民政黨内閣それ自身を傷けるだけにすぎない譯であるからだ。

如何にも政友會の人々がいふ如く、民政黨內閣の疑獄事件の檢擧には、多分に政略的意味が含まれてゐるに相違ない。だが、いくら政略的意味から出たものにせよ、疑獄事件の根據となつた樣々の具體的事實そのものは、決して民政黨內閣が特別に製造したものではない。否、それらの具體的事實は政友會側の人々によつて既に完成されてゐたものであつて、民政黨內閣にとつては、それらは唯檢擧のために恰好の既存材料であつたにすぎないのである。

凡そ政黨內閣である以上、如何なる內閣といへども、反對黨いぢめをやる必要を感じないものはない。もとより民政黨內閣としても、その例めしに漏れるものではない。否、相手は特別に憎い政友會、恨み重なる年來の敵、政友會である。わが國では、無產黨がまだ、あらゆる意味に於て微力であるために、ともかく現在の瞬間に於ては、ブルジョア諸政黨間の對立がいまだに消え失せてゐないで、特に民政黨と政友會との間の對立關係は相當に深刻である。

そればかりではない。民政黨は折角政權にありついたものゝ、衆議院內では現在百八十にも足らぬ議席をしか持たない少數黨であつて、從つてその基礎の上に立つ新內閣は、文字通りに少數黨內閣である。少數黨內閣である以上、それは當然――近き將來に於ける客觀的狀勢の上に或る急激なる一大變化の突發が豫想されない限り――次の議會の解散およびそれにつゞく總選擧を見越して戰術を立てなければならない。少數黨內閣として總選擧に直面してゐる民政黨內閣。――しかも政權維持の必要からその總選擧を通して自黨のために絕對多數の議席を狙つてゐる民政黨內閣。――この內閣が成立早々先づ當面の戰術として、政友會への徹底的打擊の途を擇んだことは、別に不思議でも何でもないのである。

かうした視角から見て、民政黨內閣による疑獄事件の檢擧は、多分の政略的意味を含んでゐるものであることは、政友會員ならずともいへる。だが、それはそれだけのことゝして見れば、別に異常の出來ではない。民政黨內閣としては、單にやりさうなことをやつたまでのことだ。否、民政黨內閣でなくとも同じ事情の下におかれてゐる內閣ならばやりさうなことをやつたまでのことだ。從つてそれは少くともその事自體單獨では、昭和疑獄の具體的特殊性を說明するものではない。

昭和疑獄の具體的特殊性は、疑獄そのもの、基礎的材料としての樣々の具體的事實を政友會側の人々が作つたといふことから生じたものでない通りに、それはまた、それらの具體的事實を民政黨内閣が反對黨いぢめのために利用したことから來たものでもないのである。

六

それにも拘らず、私は敢て言ふ、昭和疑獄が内閣更迭の直後に明るみへ持ち出された事實は、昭和疑獄の具體的特殊性を闡明する上に於て、非常に重要な意義を持つものだ、と。

といふのは無論、昭和疑獄は民政黨内閣がやつたとか、政友會がやられたとかのためではない。問題は別のところにある。

それは、どこにあるか？内閣の更迭といふことの上に！政友會内閣が倒れて民政黨内閣が產れたといふことの上に！

内閣の更迭がなかつたなら、昭和疑獄は闇から闇に葬り去られたであらう。何となれば、政友會内閣がそれを明るみへ持ち出す筈がなかつたから。

内閣の更迭があつたからこそ、昭和疑獄は明るみへ持ち出されたのだ。何となれば、民政黨内閣が產まれた以上、それを闇から闇へ葬つて濟ます筈がなかつたから。

これだけは自明の理だ。だが、何故に民政黨内閣があの際出現しなければならなかつたか？

この疑問は、内閣更迭の當時の事情を顧みれば、決して不自然な、わざと捻ね出されたやうな、必然性の缺けた疑問だとは、決して言へないのだ。

内閣更迭當時の事情を玆で細々と述べる必要はあるまい。不戰條約に絡まる問題を契機として實現された田中内閣の倒

壞と、そのあとに政權を引き繼いだ濱口內閣の出生との間に、樞密院や元老が介在してゐたので、その間の諸關係が可なり複雜に見えたが、しかしこれだけのことは、はつきりと言へる。それは、田中內閣は決して民政黨に倒されたのではなく、從つて濱口內閣は民政黨が政友會の手から戰ひ取つたのではない、といふ一事である。

といつて、田中內閣を倒して濱口內閣を起たしめたものは、元老や樞密院でもない。元老や樞密院は形式上はともかく實際上は內閣を作つたり倒したりする最後の力ではなく、今日では形式上に於てさへも、もはや內閣倒壞に關する政治的責任を取ることを極力回避するやうにすらなつて來てゐるのだ。

田中內閣を倒し濱口內閣を起たしめた最後の力は民政黨でもなかつたし、元老や樞密院でもなかつたとすれば、それは一體何であつたのか？

「政治は經濟の集中的表現である。」政治的關係の動きを決定する最後の力は經濟的諸關係である。

かうした今日我々の常識となつて來てゐる基礎的原理を考慮のうちに置いて當面の政局の推移を觀察するとき、田中內閣の倒壞――濱口內閣の出現といふが如き、一見甚だ異樣に、不可解に思へる現象も、その因つて來るところがあることが明瞭になり、それが何等の理由もなしに發生した一個の偶發的事實でないことが知られるのである。

昭和時代の日本の社會に於ける經濟的諸關係の複雜なる動きのうちに於て最も顯著な一傾向として見られて來たものは金融資本の支配が時の經過につれて次第に益々强固に基礎づけられつゝ、進んで來たといふ一事である。それは日本の資本主義が完全に帝國主義の段階に進み入つて、世界帝國主義の鎖の一鐶をなすに至つたといふ事實との聯關に於て見られるべきものである。無論私は、今この點を細論しようとしてゐるのではないが、しかし當面の政局の推移の觀察に於ては、この趨勢がその中心的事實をなすものとして見られなければならないといふことを强調しておかねばならぬ。

かうした事態の下に於て、金融資本家の覇權の下に結合する××家××のブロックの政治的代理人として出て來る政府

は、いづれとして金融資本の支配の××に××することをその中心的任務としないものはない。そして、この一點に於ては、若槻内閣にしても、田中内閣にしても、濱口内閣にしても、少しも變つた本質を持つたものでないのである。だが、金融資本の支配は絶え間なく進む。そして、その或る段階には或る政府がそれに最も適合するものと見られ、他の段階には他の政府がそれに最も適合するものと見られる。かくて金融資本の支配の一路前進の途上にも、あまりにも屢々内閣の更迭が見られるのである。

昭和二年春の金融恐慌直後の擾亂收拾のためには、何を措いても思ひ切つた荒療治をなし得る鐵力的内閣の手腕が必要とされた。金融財閥救濟のために幾億圓の負擔を全被××民衆に强制したり、益々尖鋭化しゆく××闘爭の上に火の出る樣な彈壓を加へたりするためには、若槻内閣の腰は充分に强さうに見えなかつた。で田中反動内閣がそれに代つて出て來た。そして未曾有の强硬手段を以て、自己に宛てがはれた任務を極力遂行した。濟南出兵や××××への彈壓などに於て、この反動内閣の反動的特徴の現はれは、まさにその頂點に達した。だが、最近に至つて金融資本の支配は、更らに一轉換をした。それにつれて金融統制の事業は更らに一進展を遂げなければならなくなつた。しかもそれは益々國際的形態を帶びて來なければならなくなつた。世界の帝國主義諸國家は今や、益々增大し行く内在的・外在的諸矛盾――各帝國主義國家内の階級闘爭の尖鋭化、帝國主義諸國家相互間の對立、母國と植民地との間の對立、帝國主義諸國家聯合とソヴェート・ロシアとの對立、等々――の深化・激化の顯著なる傾向から資本主義を再び安全にしようとして、極度に焦慮し、絶體絶命的に努力しだしてゐる。曰く、賠償會議。曰く國際司法裁判所。曰く、國際聯盟總會。曰く、海軍々縮會議。等々々。かうしたすべての國際的協調統制機關の運轉が益々急調子を帶びて來かけたのは、帝國主義諸國家間の諸矛盾の益々深化し益々激化して來たことの反證である。更らにさうした國際的協調統制の各機關も、それ自身また益々烈しく内在的・外在的諸矛盾を暴露しつゝある。だが、さうしたことの一切は更らに帝國主義的諸國家を驅つて益々國際的協調統制の必要を

強く感ぜしめる。帝國主義列強の間に伍してゐる日本は、無論この潮流の外に立つことが出來なくなり、何れの國際會議にも『欣然參加』しなければならなくなつて來てゐる。

か丶る狀勢の下に去つた田中內閣の跡釜として濱口內閣が出現した。それは組閣早々『如何なる犧牲を拂つても金解禁問題を解決する』と高らかに宣言した。まさに濱口內閣の×を×じて發せられた金融資本魔の叫びである。だが、濱口內閣がそれの適當なる擴聲器として白羽の箭を立てられたのは、如何にこの內閣が、現在の瞬間に於ては、金融資本家のために田中內閣よりは、より善き番頭として、そのお目鏡に適なつたものであるかを物語るものである。と同時に、この內閣のこの際に於ける出現は、金融統制の事業の一進展を指標してゐるものと見るべきものである。

八

政治的腐敗は資本主義經濟の不可避的隨伴者である。商業資本主義時代、產業資本主義時代、金融資本主義時代――資本主義經濟の歷史的發達の各段階が各種各樣の政治的腐敗の頻出によつて赤ベタに塗り散らされて來たことは、近代の政治史に消えざる文字を以て記錄されてゐることである。

金融資本主義時代に至つて、政治的腐敗は益々その頻出の度を增して行くと同時に、益々その範圍および規模を擴大して行く。それは、金融資本主義そのものが、あらゆる種類の政治的腐敗の黴菌を養つて行くに最も適合した素地をなしてゐるものだからである。即ち、金融資本主義は資本主義經濟の歷史的發達の最後の段階に於ける××の形態であつて、それを支へてゐる帝國主義××は、靡爛腐敗して紛々たる惡臭を放つ肉腫を以て蔽はれた『生ける屍』になりか丶つて居り、そしてその上に各種各樣の形態と色彩とを示して開發する『惡の華』こそは、當面我々の問題になつてゐる利權政治であり、それが現在昭和疑獄の形に結晶して現はれ、日々の新聞紙を賑はしてゐるのである。

かうした「惡の華」を咲かせてゐる金融資本主義の「生ける屍」は、勞働者、農民、無産市民、植民地民衆、等々の全被壓迫民衆の生々しき×××を×ることによつてのみ、やつとその×えか〻つた命脈を維ぎ留めてゐるのである。産業合理化、帝國主義戰爭準備、租税公課の際限もなき加重等々。かうした諸般の手段は全被壓迫民衆から××取られた×を運ぶ輸送管である。かくて、××××の××の行はれるところ、都市に、農村に、工場に、不平・不満・怨嗟・咒咀の聲が充ち満ちてゐる。そして××に泣くにも泣けなくなつて來るとき、××××の呻吟は遂に××××の×の聲に變はる。欺瞞政策、彈壓政策、白色テラーがそれに×××。

かくて、政治的腐敗と政治的反動とは、金融資本主義の門頭に掲げられた魔神ヤヌスの兩面であり、帝國主義的政策の實行者たる資本家地主の××のシンボルである。かくてまた、田中反動内閣は同時に田中腐敗内閣でもあつた。そのことが、今や昭和疑獄を通じて白日の下に暴露されてゐるのである。

殊に田中反動内閣の閣僚切つての反動政治家の親玉と目されてゐた國粋大臣こと小川前鐵相が鐵道疑獄の張本人の一人として、今日獄窓裡に絹夜具に包まれながら、夜々不安の夢を結んでゐるといふ事實は、そのこと自體、昭和疑獄の具體的特殊性を最もよく說明してゐるものである。

そして、昭和疑獄の具體的特殊性を知ることは、同時にまた、昭和時代の日本の社會の具體的特殊性を知ることになる。

そこにこの問題の意味の異常性がある。

ところで、我々はまだ安心してはならない。たとへ小川前鐵相が獄窓につながれても、田中前首相が不歸の客となつても、金融資本の支配はまだ續いてゐる。そして、濱口内閣は田中内閣以上に、より善き××××の番頭である。

だが、我々は斷じて××してはならない。××××の××はたとへ掉尾の一躍を試みたといへ、その運命は豫知されてゐるな。それは最早「生ける屍」となりかゝつてゐるのだ。(完)

裏から覗いた軍縮

稻原勝治

一

軍縮なるものを、裏から覗いて見た場合、鉦や太鼓で宣傳せられて居る額面通りの價値に於いて、それを受取ることが頗る遠慮される。然らばと云つて、云ふところの平和、人道、負擔輕減と云ふやうなことが、軍縮と全然無關係だと云ふのではない。唯これ等のことは、軍縮の目的でもなければ、また必然的結果でもない。云はゞ偶發的現象たるに過ぎないと、云ふまでのことである。例へば軍縮は平和也と云ふ命題である。ワシントン會議以下の軍縮會議を一皮剝くつて見れば、平和どころの騷ぎではなく、會議そのものが全然一個の戰爭である。主力艦のやうな、戰爭、然かも攻擊を主とする艦型、換言すれば國防の比較的重要ならざる部分については、何れかと云へば、和氣藹々として、軍縮會議の名に相應はしい場面を展開するけれども、議一度び巡洋艦とか、潛水艦とか、苟しくも國防の重要部に觸るゝや、すなはち最前の和氣藹々振りは、何處にかケシ飛んで終ひ『若し君が、十の力を以て攻めて來た場合には、我輩は六の力を以て防ぐことは、出來ないではないか』とか『君が潛水艦を主張するのは、我輩の國を敵視するものであるに相違ない』とか云つた、穩やかならざる言葉が、會議を占領して終ふことになる。斯んな平和があるものではない。平和どころか、斷然不平和である。

人道だつて、然うである。戰爭の道具である軍艦を、制限もしくは縮小することを、人道と云ふなら、戰爭の原因を制限、もしくは縮小することは、ヨリ多く人道的行爲であるに相違ない。然るにその方は一向お構ひなしで、やれ軍縮だの、やれ國際聯盟だの、やれ不戰條約だのと、足袋を穿いて風呂に這入る

底の獻立てを、次ぎから次ぎへと並べて見たところで、タイした意義を爲す事柄ではない。武器を制限することによつて、百人殺すところを五十人殺すのが、人道だと云ふならば、原料、食糧に困つて、その爲め大きな死亡率を出す國を援助するのも、同じく人道でなければならぬ。否、この方が、何れほど大きな人道だか、分つたものではない。それを棄てゝ置いて、軍縮だけが人道であるやうに、針小棒大に太鼓を叩くのが、英米。この太鼓の中繼放送をせなければ、時勢に後れるやうに考へるのが、ソンジョそこらの政界のモボ共である。

それから負擔の輕減と云ふも、これは單に紙上に存在するのみで、實際にはユートピア的事件である。ワシントン會議に主力艦を制限し、その爲め主力艦の費用は助かつたに相違ないが、この費用は、巡洋艦の建造競爭費に化けて終ひ、差引き負擔はチツトも輕減して居ない。來るべき軍縮會議に於いて、如何なる艦種が制限されるか分らぬが、これが爲めに租税が輕くなるなどと考へて居るならば、それは飛んだ間違ひである。現に英米間に略ぼ議が纒まつたと云はれる巡洋艦制當て、英國一萬トン八インチ十五隻、小巡洋艦卅五隻、總計三十三萬九千トン、米國一萬トン八インチ二十一隻、小巡洋艦十五隻、總計三十一萬五千トンを標準とし、然して我國が、當局者の固執しつゝある七割案を貫徹すると假定すれば、我國としては少なくとも大小巡洋艦四五隻の增艦、すなはちそれだけ負擔の輕減とは、正反對の現象に見舞はれる譯である。斯くて我等は軍縮會議に於いて、現實的なる軍擴を贏ち得、加ふるに制限されざる艦種に於いて、さらに可能的軍擴を與へらることになるかも知れない。然る時は云ふところの負擔の輕減は畢竟行衛不明。加ふるに軍縮會議、改め軍擴會議と云ふことにならざるを得ない。

二

斯う云ふ外觀と內容のソグはぬものを、軍縮の名によつて世界に投下したのは、云ふまでもなく米國である。尤も米國としては、ヤミクモに投じ出した譯では決してなく、一定の確乎たる目的があり、その目的を達するの手段を、軍縮と云ふ形式に籍りたまでのことである。だから、形式に、如何に不備の點があらうと、また如何に結果が名前を裏切らうと、そんなことには一向に頓着はない。負擔が輕減されなくとも(輕減されゝば尙ほ好都合であるが)人道と兩立せなくとも(兩立すれば一層結構であるが)會議が平和でなくとも(平和的に進行すれば、それに越したことはないが)そんなことは、敢て米國の關心を現はすに足る事柄ではない。要はその目的を達成しさへすれば、

すなはち是れである。この點は、米國は極端に、主義の上に超然として居る。目的は手段を正氣づけると云ふ營業方針の上に、泰然として居る。

目的の爲めに、主義を蹂躙し、如何にも米國らしい色彩を發揮したのは、米國が今年一月一萬トン巡洋艦十五隻建造案を、確定したことである。この時は所謂ケロッグ不戰條約が、元老院を通過した際であるから、時を同じふして海軍大擴張計畫が出來上ると云ふこと自體が、非常な矛盾である上に、搗て、加へて、この時は、既に軍縮會議召集の腹案が、米國當局者のプログラムに、チヤンと載つて居た時であるのだから、米國の自家撞着振りは、自乘せられた程度に增大する譯である。併しながらそんなことに頓着せないところが、米國の偉大さである。目的の爲めには、矛盾が何んだ。自家撞着何するものぞと云ふのが、米國の態度であり、且つ實行である。否、米國は腹の底では、軍縮會議召集に意があつたればこそ、一萬トン巡洋艦十五隻建造、と云ふ軍備の大擴張が、必要になつて來たのだと、超然として考へて居るに相違ない。軍縮の爲めに、軍擴が必要だと云ふこと位、矛盾した命題はあるものではない。軍縮を軍縮として、すなはち軍縮以外の何ものでもないとして、正直に受取る輩は、この大矛盾を、如何に説明するであらうか。

米國の態度の説明は、その目的が軍縮にあらず、實は軍備擴張にありと見ることである。軍備擴張こそは、米國が軍縮と云ふ形式によつて、到達せんことを期する目標なのである。尤も一口に軍備の擴張と云ふも、これは必らずしも絶對的の擴張を意味するものではない。已むを得なければ、絶對的の擴張に突進するかも知らぬが、相成るべくは、これを比較的の擴張に止めんことを念とする。比較的の擴張と云ふのは、自分の軍備を、その儘に差置いて、他國のそれを切落とすか、或は自分の軍備を少なく、然して他國のそれをヨリ多く切落とすか、何れかと云ふことである。これが米國の僞はらざる軍縮の目標。矛盾こゝに於いてか起り、撞着こゝに於いてか發し、その極軍縮の爲めの超特急式軍擴が、實行せられなければならぬことにもなるのである。

そこで問題が起る。問題と云ふのは、米國が、その軍備擴張（絶對的と比較的とを問はず）の相手と觀ずるものは何國かと云ふことである。米國軍擴の相手は、フランスやイタリーでは、無論ない。乃至ドイツでも日本でもない。唯一の英國である。英國を對象物として、軍擴せんが爲めに、先づワシントンに、ついでジユネーヴに、然して近き將來に於いて恐らくロンドンに、軍縮會議なる形式の下に、世界戰爭直前に於ける英國に對する

ドイツ以上の熱心と、執拗と、實力と、背景とを以つて、ヒタ押しに押進みつゝあるのが、米國である。この狀態を、外交上の方程式に取纒めて云へば、すなはち米國の對英爭覇戰。軍縮會議を、如上の角度から觀察するものにして、始めて事態の正觀を得る。

三

米國の對英爭覇戰は、多角的であり、且つ世界的である。實例を以つて云へば、その一つはメキシコである。「メキシコ名物革命」は、何もメキシコ人自身が革命的だから起るものではなくて、その石油を狙ふところの米國が、英國を追出さんとするところに發するものである。すなはちボンドに對するドルの爭ひが、革命と云ふ形式で、外部に發表されるまでのことである。一九二七年メキシコ油田に於ける投資總額五億二千萬ドル、內三億强が米國、二億弱が英國。すなはち英國は徐々に、併しながら確實に、米國によつて取つて代られつゝあるのである。メキシコが近年比較的安靜を保つ所以は、大體ドルが勝ち、ボンドが負けて終つたからのことである。今後米國の投資が、さらにその割合を增し、英國がそれだけ後退する時、「メキシコ名物革命」は、單に歷史上の名前に過ぎないことになるであらう。

つぎは南米である。南米は、米國がモンロー主義により、埒內に入るべからずとの禁札を掛けて居るところであるから、無論ドルが橫行濶步して居るに相違ないと思ひきや、事實はその正反對だから妙である。一九二七年の計數によれば、英國の總投資額百億圓、米國のそれは四十四億圓。然かもこの內產業投資は、英七割三分、米四割五分となるから、米國の南米に對する把握の貧弱さは、ます〱以つて顯著にされる譯である。米國として、この狀態に甘んずるものとは、蓋し何人と雖も考へまい。

東洋に向つては、門戶解放、機會均等を主張する米國が、ラテン・アメリカに向つては、モンロー主義を、國際聯盟規約に接木するの醜態を冒してまで、排他主義を嚴守して居るのは、すなはち現狀に、慊たらざるの證だと見ることが出來る。唯、この方面に於いては、英國が賣られた喧嘩を買つて出やうとせないものだから、往年のヴェネズエラ事件のやうなイザコザが、起らぬと云ふだけのことである。ラテン・アメリカに於ける米國の對英排戰は、密閉されたる戶の彼方で行なはれつゝあると、云ふことが出來る。

南米とは異なる、米國が公然として英國に打掛つた顯著なる實例としては、ペルシアがあり、メソポタミアがある。共に油田が、爭ひの林檎を形造つて居る。內メソポタミアに就いて、彼

少の解説を附するならば、メソポタミアに採らんとする米國の態度には、法律的に弱味がある。それは何故かと云ふに、米國は舊聯合國の對敵國講和條約に參加して居ない上に、メソポタミアは、英國の委任統治地域であり、つまり米國とメソポタミアとの間には、何等の法的關係が存在せないからである。併しながらソンなことを、氣にかけるべく、米國人の論理的頭腦は、餘りに卒疎である。或は換言すればメソポタミアの油田は米國をして、些々たる法律問題に拘泥せしむべく、餘りに貴重である。そこでサン・レモ會議直後米國は、英國に向つて『聯合國共同の獲物であるメソポタミアを、英國が獨占するのは怪しからぬ』と、威猛高になつて抗議を提出し、爾來兩國間に、數次に亙る外交交渉が繰返へされ、兩者の關係の惡化したること、世界戰爭以來曾てないところと云はれた。惡化の程度は、英國の一議員が、下院に於て公々然として、米國と開戰の場合、陛下の政府は成算あるかと、政府に向つて卒直なる質問を試みたことによりて、それを推察することが出來やう。然るに泣く兒と、地頭と、借金主には勝たれぬ道理。ヤツサモツサの揚句の果、英國が遂に横紙破りの米國の前に屈し、利權の二割三分七厘を、米國石油團に提供することに泣寢入つて、事件は一先づケリを告げた。昨年七月のことである。

四

米國の英國に對する挑戰は、上掲二三例に盡きた譯ではない。ロシアに於いても、支那に於いても、歐洲自身に於いても、我等は時々刻々米國によりて意識的に遂行されつゝある對英爭覇戰の形相を見せつけられて居る。この狀態を、便利なる言葉を以つて締括るならば、英國はドイツを擊滅して、一安心と思ふ間もなく、こゝに『第二のドイツ』を、米國に於いて見出したと云ふことである。この背景から打算され得る結論は、米國が、曾てドイツが英國に對して爲したる如く、海上に於ける英國の地位に挑戰すると云ふことである。歷史は確かに繰返へす。唯米國とドイツとの相違點は、ドイツが遮二無二軍備擴張を以て、英國を脅迫したのとは反對に、米國は軍備縮小の形式に於いて、英國に衝掛るところにある。然かも米國の軍縮は、比較的軍擴を意味すること、前に述べた通りであるとすれば、道行きの形式に於いてこそ異なれ、究極に於いては米國とドイツとの間に、天地月鼈の相違がある譯ではない。強いて相違を求むるならば、ドイツのを積極的軍備擴張と呼ぶべくんば、米國のを消極的軍備擴張とでも云ふべきか。

さて英國海權に對する挑戰としての軍縮會議は、その第一回

のものは、米國に取つて思ひ設けぬ勝利に結果した。ワシントン會議に於ける主力艦の英米同等と云ふ獲物は、英國を屈服するの第一着手として、誠に申分のない出來榮えであると、米國が自慢の鼻を撫でたのも、滿更無理ではない。英米各五十二萬五千トン、日本三十一萬五千トン。米國の我田引水式論法によれば、主力艦に於いて、既に屈英第一歩を踏出した以上、巡洋艦その他について、英國を取ッちめることは、蓋し朝飯前の仕事であると。この論法を三段卽自大式論法と呼び、米國の如き自惚れが强く、鼻息の荒い國民が、數次陷るところのものである。何となれば英國が世界戰爭直前に、海軍の二國標準主義を棄て、ワシントン會議に一國標準をすら放棄し、次ぎの海軍力と同等と云ふ立場にまで墜落したのは、事が主力艦に關するが故である。主力艦は、攻擊用のもの。現狀維持を國是と爲し、また國是と爲さなければならぬ英國としては、攻勢用の武具の必要は斷じてない。寧ろ出來得べくんば、これを全廢し、以つて他から狙はれる危險を避けたい位に考へて居る。英國がジユネーヴに、主力艦トン數引下げ案を提出し、來るべき軍縮會議にも、また恐らく同樣の案を提出するだらうと思はれるのは、これが爲めである。だから、主力艦に於いて、米國と同等になること位は、何等の苦痛を感ずる事柄ではない。苦痛を感じないから、容易に米國の提案を聽いて、米國と同等にまで落ちたのである。悲しいかな、ザツクバランの米國人には、このデリケートな（我等に取つては餘りデリケートではないが）區別が分らぬ。從つて前記のやうな間違つた三段論法を捏つち上げて、有頂天になつて居るのである。然るに世の中の事は、然やう簡單には參らぬ。英國が米國に讓つたのは、主力艦だからこそ讓つたので、米國が自分の好都合に考へるやうに、主力艦に於いてすら、米國に向つて冑を脫いだものでは斷じてない。だから米國が、自分の勝手に取極めた英國の態度を、その論理的結論に持來さんとするや、こゝに忽ちにしてガツーンと、石壁に頭を打ッつけて終つた。

五

米國が無殘にも石壁に頭を打ッつけたのは、一九二七年ジユネーヴ軍縮會議、世にこれをジユネーヴの悲劇と呼ぶ。ジユネーヴに於いて米國は、ワシントンに於いて樂々として得たる對英對等主義を、補助艦にも適用せんとし、英國はドツコイ遣らじとばかりに喰ひ下り、こゝに二進も三進もならぬ事態が、中歐の山の上に展開されたのである。原因は、前に述べた米國の樂觀的錯誤にあつて、他にはない。英國は、そのパンを海外に仰いで居る。英國が海上に持つ通商路、これを俗に「パンの路」と呼ぶ。その一年間に要する食糧は、以つて國民を、五十日間

養ふに足らず、殘餘の約三百六十日分の食糧は、遠く海を越えて運ばれて居る。故を以つて英國の立場から見れば、制海權は食糧の別名である、米國が何と云はふが、また他の國が如何に惡聲を放たふが、また如何にこれが爲めに負擔を痛感しやうが、苟しくも餓死せざらんとするならば、斷じて棄てることの出來ないものである。これを換言すれば英國の制海權は、伊達や冗談ではない。食ふか、食はないかの分れ目なのである。これ位眞劍なことが、またと世の中にあらうか。

然るにジユネーヴに於ける米國のプログラムは、英國のこの急所に向つて、無慈悲なるメスを當てるものであつた。米國のプログラムと云ふのは、巡洋艦の對等と云ふことである。提案者は、主力艦すら對等、故に補助艦に至りては、無論對等であるべきものだと云ふ立場を執り、英國は主力艦が對等、故に補助艦は對等なるべからずと云ふ態度を、固執するのだから、何處まで行つたつてピントの合ひやうがない。トドのつまり兩方とも怒り出して終ひ、米國は『海軍均等の原則は、ワシントン會議に於いて認めたではないか。英國はウソつきだ』と云ふやうなことを云ひ出し、これに對して英國は、バルフオーア卿の口を藉りて均等は認めて居る。併しながらそれは戰鬪力として均等であつて、通商防衛の爲めの巡洋艦は、全然別である、とムキになつて遣り返へすと云ふ、ワシントン會議の際とは似ても つかぬ雰圍氣が、會議を包み、會議はこゝに豫定の如く喧嘩分れとなつた。

思ふに軍縮問題を挾む英米の關係は、ワシントンが除外例でジユネーヴが、その當さにあるべき形相を示して居る。喧嘩が本體、平和はカムフラージ。米國としては、ドイツが世界戰爭に向つて點火した所以の目的を、戰爭なしに到達しやうとする。然ればドイツが危險率のある乾坤一擲の一六勝負を爭つたとすれば、米國は危險性のない英國引卸しの大芝居を打つて居るのだと云ふことが出來る。異なるところは危險性の存否、目的とするところは、すなはち從つて英國にして、猥りに引卸されまいとする以上、喧嘩なくしては、濟まない理窟になる。

六

目下そのオル・ドウブル時代にあるロンドン軍縮會議は、斯くして米國の對英爭覇戰の第三幕目であることが分らう。問題は云ふまでもなく、ジユネーヴから持越された補助艦、主として巡洋艦の均勢、乃至均勢に近い狀態を、出現せしむること。この企てに於いて、米國が如何なる程度にまで成功するかは、別言すれば米國が、如何なる程度にまで、その對英爭覇に成功するかと云ふこと。この意味に於いて、來るべき會議は、非常なる興味を、我等をして感ぜしむる。

補助艦についての英米の衝突點、換言すれば爭鬪上の切線は、艦種と艦型との二つに取纏めることが出來る。別言すれば米國は、各艦種について英國と對等を主張し、加ふるに艦型も大いなるものを希望する。然るに英國は、前者は國情が異なるが故に不可能、後者は大型軍艦は、戰鬪用のものであるが故に不可と云ふ態度を、執つて居る。兩國が、この二つの點について全然に反對の立場を固持して居る以上、妥協は必らずしも容易でないし、また容易でないのが、本筋である。何となれば表面的に艦種、艦型の爭いである兩國の關係は、實のところ制海權爭奪戰に外ならぬからである。

米國が大艦を主張する魂膽は、英國の通商防衞の爲め小艦を必要とするスキに乘じ、事實上戰鬪艦であるところの一萬トン八インチ巡洋艦の多數を持つことによりて、英國を第二流海軍國に蹴落とさんとするところにある。だから米國としては、英國がその必要とする小巡洋艦の總てを持つ上に、さらに相當多數の大巡洋艦をまで持ち得る餘裕のある總トン數を、これに許す筈がない。反對に總トン數をば、成るべく低位に切詰め――然して斯のことは軍縮の精神に副ふ所以だと、屋根の上から公然として叫ぶことを得る――英國が所要の小巡洋艦をこれから引去ると、大巡洋艦に振向けるトン數は、幾らも殘つて居ないやうに仕向けるのが、米國の根本的策戰である。然ればこそジュネーヴに、英國が巡洋艦總トン數四十五萬トンを提案し、米國が一も二もなくこれに反對して、二十五萬トン乃至三十萬トンを提案したのである。また然ればこそ今回の豫備的妥協に於ても、英國を三十四萬トン、米國を三十一萬五千トンとし、以つて大體ジュネーヴの主張を繼續して居るのである。時に出鱈目とすら見える米國の提案が、案外に數字的根據を持つて居ることは一個の驚異である。

巡洋艦總トン數を、三十萬トン見當に切下げることが、如何に米國に取つて重要な意義を持つて居るかの具體的說明は、簡單に出來る。英國はその「パンの路」を防衞する爲めに、最小限度六インチ小巡洋艦三十五隻を必要とする。そこでこの三十五隻分のトン數を、その割當てられた總トン數三十四萬トンから差引くと、一萬トン八インチ大巡洋艦は、僅かに十五隻しか造られないことになる。總トン數が與へられ、絕對必要なる小巡洋艦が與へられて居る場合、英國は否應なしに大巡洋艦を切詰めなければならぬことになる。これが米國の魂膽である。然らば米國の大巡洋艦は如何と云ふに、英國の十五隻に對して二十一隻、すなはち四割方優勢の原案を、提出して居る。無論米國はこれが爲めに、小巡洋艦に於いて、英國の三十五隻に對する十五隻の劣勢に、落ちなければならぬけれども、イザと云ふ場合、六千トン六インチ級の巡洋艦は、一萬トン八インチ級の

それの前には、恐らく猫の前の鼠以下として度外視されて差支えない。然る時英米兩國の關係は、何うなるかと言ふに、ワシントンの規定によりて、主力艦に於いては同等、然し今また戰鬪巡洋艦に於て、後者前者に優る四割と云ふことにする。この狀態を換言すれば、米國の對英爭覇戰は、こゝに血を流さずして勝たれたに近いと云ふことになる。斯うなつては米國の大勝利、然して米國の大勝利は、英國の大敗を意味する。この立場から見れば、英國が米國の保有すべき大巡洋艦二十一隻は多きに過ぐる。宜しく三隻を減じて、十八隻と爲すべしと主張しつゝあるのは、尤ものことだと云はなければならぬ。

七

併しながら米國の保有すべき大巡洋艦が、二十一隻と云ふを削減されて、假りに十八隻として片づくとしても、尚ほ且つ英國の對米屈服と云ふ事實は、曲げることが出來ぬ。程度に相違ありとしても、屈服は屈服である。それも屈服だけなら宜いとして、萬一の場合、劣勢の海軍を以つて、優勢の海軍に立向はなければならぬ破目に、自からを陷れるものである。問題はこの狀態を、英國民が、果して冷靜に眺め得るだらうかと云ふこと。それから又如何に反佛向米主義のマクドーナルド內閣なりとは云へ、そこまで思ひ切つて英國の傳統蹂躙を、敢てするだらうかと云ふこと。我等はこの二個の疑問を懷いて、マクドーナルドの渡米を、靜かに觀察して居る。

マクドーナルドの遣り口は、その表面に現はれて居る限り、明らかに歷史の結論を外れて居る。歷史は、英國が、米國の爭覇戰に對して、勇敢に奮鬪すべきことを敎へ、然して我等が眼前に見る事實は、明確にその正反對である。この歷史と現實とのヒラキを、如何に說明すべきであらうか。現在までのところこれを合理的に說明すべき何ものも、表面的には我等に與へられて居ない。併しながら何ものかゞ存在し、若しくは近く存在するに至るだらうと云ふことは、苟しくも國際關係の推移に關心を持つものによつて、臆測され得る。如何にロンドン政府が保守的のボールドウインから、自益主義のマクドーナルドに移つたとは云ひ條、何ものかゞ存在することなくして、これほどの方向轉換、これほどの冒險を、マクドーナルドの爲せるが如く、簡單に遣つて退けると云ふ法はあるものではない。これ我等が歷史と、現實との間の橋梁とするべき何ものかゞ存在し、若しくは近く存在するに至るだらうと考ふる所以。

然らばその橋梁とは何かと云ふに、形式は兎も角もとして、實質的には、少なくとも來るべき數年間は、英米兩國の關係から、戰爭の可能性を、拂拭するに與かる性質のものでなければならぬ。それが何等かの形ちを取り、例へば太平洋に關する四

因協約のやうなものにするか、或はまた一九二七年の軍備協定的のものになるか、または仲裁々判條約の形を取るか、或はさらに直接には何等具體的形式を取らずして、間接なる好意の表明に結果するか、その邊のことは一切分らない。唯何れにしても何等か政治的背景を豫想することなくして、マクドーナルドの態度、政策を說明することは一切困難である。だから政治的背景のない場合、軍縮は恐らく不可能となり、すなはち米國は他の方法による對英爭覇戰を、案出せなければならぬことになるかも知れないと、我等は考へて居る。然るに若しこれに反して、我等が豫想する如く、軍縮が政治の背景を取得するならば、軍縮會議はすなはち成功、換言すれば英米の爭覇戰は一時休日、乃至中幕とすることに結果すると、我等は觀察して居る。マクドーナルドの渡米は、この觀點に於いて價値を發見せらるべきであり、單に二十一隻の大巡洋艦を、十八隻に値切る爲めのみだなどと考へて、安心して居るべきではないと思ふ。

八

斯くて軍縮なるものは、實質的に云へば、英國に對する米國の挑戰である。強いて軍縮であるとしても、英米兩國間の軍縮である。從つて今年四月米國がギブソンによつて、軍縮提案を聲明して以來、今日に至るまでの軍縮的會議が、主として兩國間に交換され、他の日本なり、フランスなり、イタリーなりが、觀覽席に第三者として殘されて居る狀態は、笑止千萬なものだと云はなければならぬ。特に日本はワシントン會議に於いて、海軍ばかりでなく、日英同盟とか、山東とか、所謂廿一個條々約の一部だとか等、々、苟しくも捥ぎ取られ得る總てのものを、悉く捥ぎ取られて終つたのであるから、最早骨のシヤブり粕見たやうなもので、餘り利用の方法はない。方法があるとするならば、それはオトリとして、或は英米の喧嘩を清算するの補助機關として、乃至はアテ馬として、利用される場合のみに限る。日本が五大國、若しくは三大國の一であつたりなどした時代は、ワシントン會議を一轉機として、既に過去の領域に吸收されて終つたことを、我等は遺憾ながら承認せなければならぬ。またタトへ我等にして承認せなくとも、列國は今日我國を以つて五大國の一つだなど〻、斷じて考へては居ない。況んや三大國をや。

併しながら畢竟世界は一つである。日本が五大國の一でなくとも、三大國の一でなくとも、英米の喧嘩は、容赦なく我が國に波紋を投げかける。例へば前に述べた如く八インチ巡洋艦英米それ〳〵十五隻、二十一隻と、決定するとするならば、或は米國を十八隻としても、我が國として七割位を固執する以上、當然軍擴となる。そこで「軍擴では困るではないか」と、抗議

み申込むと、英米は「それなら七割とか何とか云はず、實際的に軍縮になる程度に、六割にでも、或はさらに五割にでも減じたら宜からう」と、容赦なきながら逆襲する。「それでは當方は國防に缺陷を生ずる」と、再抗議を申出でると、今度は世界平和の爲めの軍縮を、妨害するものは、日本である。日本は平和の敵、軍國主義の親玉、人類の敵であると云ふことに、世界の輿論を導びくべく有らゆる宣傳機關を、反日運動の爲めに動員する腕立てが、チャーンと出來上つて居るのだから、如何とも致し方はない。詮ずるところ英米の喧嘩の飛ば散りで、觀戰武官大日本が、引つ被らなければならぬやうな仕組みに出來上つて居るのである。この點は、我が國は、萬一の場合右往左往の醜態を演じないやうに豫じめ覺悟を決めて置かなければならぬ。

それから英米兩國のプログラムには、潜水艦全廢と云ふ案が載つて居る筈である。英國の原則的立て前は、潜水艦は商船破壞の具、從つて平和侵略の道具である。斯る兇器の存在は、許さないでもよいと云ふにある。この原則は英國によりて、ワシントン會議以來、口癖のやうに繰返へされて居る。米國としても潜水艦戰は餘り得意でないところから、また潜水艦による通商の被害は、恐らく英國に次いで最も多くを受くる國情にあるところから、潜水艦の全廢には、必らずしも反對でない。英米の主張に一理あることは、申すまでもない。併しながらこれを他の反面から見るならば、潜水艦は小額の經費を以つて、比較有效なる國防の實を擧ぐる所以の具であり、すなはち自衛的の精神に合致するものであるのだから、軍縮會議に於いて、大いに奨勵されなければならぬ約束のものであると云ふ議論も、立たないことはない。この二個の異なつた主張を、如何に採配するか。將に我が國の如く、またフランスの如く、潜水艦に國防の少なからざる部分を依頼する國に在りては、これが全廢と云ふやうなことは、全く不可考的のことに屬すると云つて、極力排斥するに相違ない。其場合に於いて、日本や、フランスが世界平和、正義人道と云ふやうなもの、反逆者であるかの惡宣傳が、飛ばされることは、頗る迷惑である。そも／＼問題の起原が、英米、就中米國にあり、他の列國は單なる取巻き、それも強要されたる取巻きたるに過ぎない。強要されて取巻かせられて、それで居て責任となると、全部オッ被せられると云ふのでは、到底ソロバンの取れッこがない。斯く云へばとて、軍縮と云ふことに、我等は何も反對なのではない。軍縮は結構であると考へる。從つて假りに英米兩國の喧嘩の結果、世界が軍縮に向つて突進したとしても、我等は天の配劑妙なるかなと云つて喜ぶ。併しながら喧嘩の結果、軍縮が置忘れられて、軍擴になつたり、また責任が、その歸着すべからざるところに押附けられることには、強硬なる抗議を申出でなければならぬ。

（十月五日）

ソヴィエト產業統制問題

茂木威一

ソヴィエト聯邦の經濟發展に關聯して、今日では其の產業統制機關の改造問題が一般の喧しい問題になつて居る。曾てソヴィエト經濟が新經濟政策に移つて行つた時期に設定された產業統制システムは其後絕へず改造されつゝ今日に及んで居るが、夫等の統制機關は最早今日の經濟狀態にとつては不適當なものになつてしまつたばかりでなく、卻而將來の經濟發展を攪亂し、停滯せしむる虞さへ生ずる樣になつた。

顧つてソヴィエト聯邦內の產業統制システムの變遷を考察する時は、最近六ケ年間に二大改造を經て今や第三回目の大改造期に到達して居ると云ひ得る。第一回の改造は丁度一九二三年四月十一日に公布された「トラスト布告」と關聯するもので、當時の經濟界は原料の不足、市場聯絡の缺除等に惱まされた破壞期から、新に商業主義を原則とする產業組織に移ることに依り漸く脫出しかけた時期であつた。彼の有名な「商取引を學べ」と云つたレーニンの標語が高唱されて、經濟政策に新方向が與へられたのは丁度この改造期の少し前と考へればよい。隨つて之の標語の反映として現はれた商業主義に基くトラスト組織は尤も當時の經濟的要求に適應したものであつて、之れに依り產業復興の正道が比較的迅速に見出された。かくて企業間の經濟的聯絡が強固となり、企業と消費團體（協同組合）、原料調達機關との間の、經濟聯絡も強固になつた。而して產業統制機關の第二回目の改造は一九二六年―二七年諸企業が經濟計算へ轉移して行つた時期に行はれた。之の時期には市場經濟聯絡も略ぼ成り、產業復興も漸く終りを告げたが、商品飢饉の爲めに最も困りぬいた時期だつたので、愈々生產擴張に要する產業固定資本の動員を必要とし、之を中心に新規諸問題が續出した時代であつた。

かくて產業統制機關は全力を企業に對して傾注し、勞働生產力、生產の合理化、機械と原料の動員等が每日の標語として高唱された。かくて漸く第二回目の改造期即ち「產業の工業化」「產業技術の改造」を當面の重要問題として居る今日の經濟狀態に移つたのである。勿論今日とても決して企業が全部完全に經濟計算に移り終へたといふのではなく、また之と關聯した產業の合理化も既に完成されたと云ふわけではなく、尙ほなほ之の方面に於ては頑强な踏張りを必要とするが、然し今日のソヴィエト經濟界は今や「產業の工業化」「技術の改造」を中心問題として最後の理想に向つて一大雄飛を試みんとして居る。隨つて今日はひとり諸企業に於ける統制問題のみならず、更に「トラスト」「シンジケート」及び最高國民經濟會議等に於ける統制システムの大改造さへ叫ばれて居るのである。是に於て之等の具體的成案を得んが爲めに本年八月十一日黨中央統制委員會幹部會とソヴィエト聯邦勞農監督人民委員會參議委員との合同會議に於て、ソヴィエト聯邦產業統制システム調査委員會の創設を決議した。而して同委員會の議長には、最近獨逸の產業統制の實況を親しく研究して歸つた「ゴリツマン」氏を舉げ、同委員には專ら有力なる經濟家を網羅し、一ヶ月の期限をきつて具體的成案の起草を委囑した。之と同時に聯邦勞農監督人民委員會は、右調査委員會の作製せるテーゼを本年八月十三日プラウダ紙上に發表し一般の輿論喚起に努むると共に、黨中央統制委員會と勞農監督人民委員會の最後的審議に資する等、尤も愼重なる態度を以て之の產業統制システム改造の實現を期して居る。右のテーゼは企業、トラスト、シンジケート等に項を分ちて細部に亙つた研究をして居るが今日のソヴィエト經濟狀態の要求する統制システムのハッキリした概念を捉へるには極めて都合よく書いてある。＊

＊之の外にも最近ゴリツマン氏が獨逸から歸つて研究を發表した「露獨產業統制比較論」（本年七月十八日から三回に亙つてプラウダ紙上に掲載された）があるが之も亦今日のソヴィエト產業統制問題を研究する者にとつては好個の資料であらう。

因つて今玆に右テーゼの要點を簡單に紹介して見たいと思ふ。

抑もソヴィエト聯邦內の產業組織は、新經濟政策の採用と共に一大變化を來した、即ち計畫機關が產業統制作用から獨立したのである。而して一切の產業計畫は最高國民經濟會議の手に集中され、產業の直接統制機關としては別に經濟計算の原則に立脚する多くのトラストが創立された。之の最高國民經濟會議は生產主務管理局と中央計畫經濟局とから成り生產主務管理局は自己の管理下にある夫々の產業部門を計畫指導する機關で、

中央計畫經濟局は各獨立產業部門の諸計畫を更に統一する機關である。而して產業の直接統制に任ずる「トラスト」又は生產企業の總資本を管理し、與へられたる計畫の範圍內で、その有する貨幣資本と物的資源とを自由に運轉する權限を與へられた。而して之の「トラスト」に對しては生產の低廉化と企業生產力の最大限度の發揚とが課せられた。

然るに其の後數年間に國內の經濟的實質は著しく變化し、全國民經濟に於ける社會主義的「セクトル」は私經濟的無政府的「ファクトル」の上に壓倒的優勢を示し、指導的勢力をさへ振ふ樣になつた。そこで最高國民經濟會議內の計畫、統制兩機關の分立が漸く問題となつた。同時に之の經濟狀態は最高國民經濟會議の生產企業經營の上に及ぼす影響の擴大と產業技術の改造プロセスに對する指導勢力の强大とに立脚し產業規制、統制機關の單純化を要求するに至つた。

又露國ブルヂョアの遺產である時代遲れな生產技術を成るべく速かに排除し、生產企業の經營に最近の技術的進步を可成速かに利用する觀點からして產業統制システムの改造は一層必要の度を增して來た。隨つて第十六回黨聯合會議の左記引用決議に現はれた改造方針も亦時代の要求に外ならない。

『產業、運輸統制システムの改造に方つては左記條項の保障を先決問題とする、即ち

(一)　最高國民經濟會議及び交通人民委員會は從前の如き單なる計畫經濟指導機關たるに止まらず更に歐米及びソヴィエト聯邦の科學、技術の進步に基礎づけられた實際的技術指導機關たるべし

(二)　企業の技術的改造を指導するトラストの役割を擴大し專門化を目的とする企業統一を期する爲めトラスト企業群の再審査を必要とし工場及び獨立職場の經濟的獨創を一層强力ならしむべし』

同樣にまた、一方最高國民經濟會議及び經濟計算產業聯合の產業諸機關と他方市場に於ける配給竝びに販賣に從事する諸產業團體との聯絡を一層强固ならしむる必要を生じた。

尙ほまた產業輸出入貿易のソヴィエト聯邦產業經營に及ぼす影響增大せるを以て現行法規竝びに外國貿易獨占に關する特別法規の適用範圍內に於ける產業團體と外國市場との接觸を一層緊密ならしむる必要を生じた。

併し之等の目的實現の爲めには何よりも先づ產業組織形態發達の客觀的分析を第一にしなければならない。而して最近數年間に於ける產業、商品流通發展の方向を決定する尤も特質的なモメントとして左記諸因子を擧げることが出來る、即ち

(一)　トラストそれ自身の强大と生産の獨占化とは諸トラスト間の競爭を殆んど完全に排除した。その結果曾てトラスト事業中尤も重要視された購買、販賣組織に關する任務は縮少し、他の生産組織に關する任務に比較し殆んど問題視されなくなつた。

(二)　卸賣市場が殆んど全部シンジケート・システムに依り包括され、小賣市場も亦協同組合と國營商業機關(トルギ)の特別網とに依り抱擁されてしまつた。之のプロセスの完成と同時に全商品流通は事實上「トラスト」の管理を離れてしまつた。但しゴム・トラストの如き同一産業部門に屬する全企業を一括してトラストとシンジケートとの役割を同時に演ずる「トラスト・ウェクウム」を除く。隨つてトラスト改善事業としては僅かに「産業の合理化」と産業改造事業とだけが殘された。

(三)　一九二七年六月二十九日附命令に基き工場企業は經濟計算に移された。右命令は未だ完全に實施されては居ないが兎に角、販賣及び原料調達市場に於ける企業とシンジケートとの直接聯絡が廢され、また實施中にある生産の合理化事業に於ては企業はトラストの細かい干渉より解放された。それと同時にトラストに對しては産業技術の改造に關する一層大きな指導的任務が要求される樣になつた。

凡て之等のプロセスには工業生産發展に對する一層强力な計畫的規制力が作つて來たし、また現在も尙ほその規制力を作つて居る。而して將來の生産發展が主として、新規な投資と合理化(計畫化に大きな關係を有つ諸因子)に依つて基礎づけられて居る關係上、生産の計畫的規制は將來一層容易となるだらう。それと同時に生産の發達と大なる關係をもつ工業生産の商品流通關係は競爭現象から殆ど完全に解放されて、寧ろ意識的計畫に依つて指向せらるゝプロセスの性質を有つ樣になつた。生産竝びに商品流通に於ける計畫的要素の增加するにつれ産業に對する財政的指導圈内に於ても亦計畫化の發展を認める樣になつた。

産業統制システムの將來の發展に特別なる影響を及ぼすものは卽ち黨に依り指導せらるゝ國家工業化政策と、之に關聯した最新技術本位の産業改革とである。而して新規企業の建設に對する大規模投資と、舊式企業の根柢的改造とは資金竝びに時間の最少限消費に依り而も世界最新科學、技術の齎らせる經驗を實際に利用する爲めのあらゆる方法手段の採用を要求する。

又資本家的企業との技術的聯絡が頻繁となり彼等の技術的經驗を利用する必要が增すに隨つて(技術的援助、技術官の招聘に關する協定等)之等聯絡の規制問題、最新技術の實際的利用

問題、舊式メトード、不要メトードの大膽なる廢棄等の諸問題が直面して居る。

尙ほ産業の組織形態をして變轉極りなき國内經濟狀態に適應せしめ産業技術の改造諸要素に適合せしむる爲めにはあらゆる方法を講ずる必要がある。併しながら産業統制改造問題の解決に方つては、凡てのスキマチズムを排斥し、各産業部門の特質を十分に考慮し、誤れる劃一主義に陷らざる用意が必要である。

要するにテーゼは企業の經濟計算の實施を以て出發點とし企業が『産業統制全システムの基礎的聯鎖である』といふ正しい見方をし『企業の經濟計算への轉移は企業の生産プロセスの計算を合理化しその計算を大衆に近づける爲めの第一歩である』と述べ、産業經營に向つて勞働大衆を引きつけることの必要を高唱して居る。蓋し之の勞働大衆を實際に産業統制にまで誘引することが出來なければ如何なる統制システムも改造も、遂に今日の官僚氣分を一掃することが出來ないからであらう。それから『企業の各職場、成し得れば各勞働班が自己の作業成績を明瞭に見得るが如く計算システムを作らなければならない』といふ注意も凡て勞働者の大衆的管理の途を開かうとする用意であらう。次にまた再びトラストの問題に移る。『トラストは諸企業の指導機關として、企業經營上の有責機關として、更に機械、原料、燃料、勞働力、財政等の合理的利用の監督機關として殘る』『トラストの地位は各企業の經濟計算實施と各企業に對する配給及び企業生産品の販賣組織システムとに依つて決せらる』『之のシステムはトラストに對し只だ配給と販賣とに關する計算事業を殘すのみでトラストからは全然商行爲を取り除いてしまう』等の文句を見るが、要するに發展せるソヴイエト産業界はトラスト事業をも更に新軌道へ移すに到つたのである。勿論ソヴイエト・トラストは諸國の資本家的トラストとは全然異つたものであるが、更に之のトラストから商行爲を取り除いてしまうのである。勿論その商行爲は今日既に事實上シンジケートの手に移つて居る。蓋しシンジケートと同じ仕事を分擔する時は企業とシンジケートとの中間に介在して屢々兩者の業務を阻害するからで、自然トラストの商行爲が淘汰されたのである。然らば今日のトラストは如何なる任務に從事するかと云ふと先きにも擧げた樣に專ら企業の技術的改造と合理化とを指導するのである、蓋し今日の經濟的諸條件に於ける之のトラストの任務は極めて大きな意義を有つ。抑も技術的指導は之れまでの産業統制システム中尤も薄弱な部分であつた。さればこそ第十六回黨聯合會議も先きに述べた樣な決議をなし、産業諸機關の前に技術指導問題を緊急問題として提議した次第であつた。要する

に本問題は尤も短期間內に解決を要する重要問題なのである。

更に產業システムの高級聯鎖である最高國民經濟會議の組織に關しては同會議內の生產主務管理局（グラフキ）とシンジケートとの業務上に於ける時代錯誤的並行主義は今日當然撤廢を要する問題である。之の統一に依つて產業計畫、統制機關內の餘計な聯鎖の一つが脫落することになる。尙ほまた「グラフキ」とシンジケートの融合に依つて創設さるゝ企業聯合は經濟計算を原則とするに到るであらう。而して之の企業聯合に依り、企業とトラスト間、トラストと企業聯合間の餘計な計算の全系列が廢止され得る。之と同樣に貿易人民委員會と財務人民委員會の業務も亦大に簡易化されるであらう。何となれば之等人民委員會は將來產業諸部門と交涉を有つ場合、之れまでの樣に多くの主人公を相手とせず單一な主人を相手とするに至るからだ。

之を要するに新しきソヴィエト產業統制システムの出現は國內產業組織全般に亘つて目醒しい合理化が達成されることになる。而して之の產業統制システムの改造に依つて達成さるべき根本義は、蓋し五ケ年計畫の要求する發展テンポを保持するに足るべき組織的條件の建設にあると考へらる。斯くてソヴィエト產業の發展は步一步社會主義的指導、計畫的範內へ誘かれて行くのであらう。

戰爭文學の復活とラマルクの「西部戰線異狀なし」（抄譯）

アンリ・バルビウス

帝國主義戰爭の繼續中、卽ち一九一四―一八年の間、戰爭に關する文學は、殆んど決定的とも云つていゝほど一般の愛顧を失つた。私が十分に價値があると思惟する原稿を推薦したのに對して、フランス及び其他の國の出版業者は、いつも定つたやうに「讀者は此種の文學の過剩を感じてゐる。戰爭のことなど耳にするさへ嫌つてゐる」と返事するのであつた。これはブルジョア讀者としては極めて自然のことだ。彼等はたゞ娛樂や、氣分の轉換をのみ書物の中に求めてゐるからである。

だが、最近事情はすつかり變つた。讀者と出版業者は再び戰爭文學に對して大なる興味を向け始めた。

この運動は獨逸から招來された。しかも獨逸ではこの運動は何よりも先づラマルクの著「西部戰線異狀なし」を中心として勃興された。續いてそれは英國及フランスにも傳播された。「中略」

ラマルクの作は若い十八歲の兵卒の日記である。この著書の內容においては、作者の眞實さと、レアリズムの故に、純眞な、響きの高い、悲劇の場面が見出される。が他の頁にはわざとらしさ、深さとスケールの不十分さが無いではない。それは特に作者が皮肉を云ひ、諷刺せんとした個所においてさうである。

私はラマルクの天才、並に彼の作品が一般的水準を遙かに高く擢んでてゐることを認めるに吝かでない。だがそれにも拘らず彼の作品の素晴らしい成功は、或る特別な事情に起因するものであるやうに思はれる。卽ちその特別の事情とは、著者が戰爭の原因と結果とに關する問題を此作から迴避することに努めたことこれである。「中略」

ラマルクのこの作は戰爭否定の傾向を取つたものであつて、卽ちそこには戰爭に參加してゐる者の苦惱が描かれ且つそれは多くの程度までプロシヤの軍國主義を嘲笑し、それに對する反抗を目ざしたものである。併しながら作者は外交的な用心深さをもつて、資本主義的搾取の犧牲者―卽ち中隊、聯隊が、一軍を形成してゐる、兵卒の服裝をした、この灰色の牧羊―が、如何なる賠價を取得すべきであるかについての答へを避けてゐる。「以下略」

最近小作爭議の實相

杉山元治郎

物には榮枯盛衰がある、爛熳と花咲く春もあれば木枯しの吹きすさぶ冬もある。各國の社會運動の歴史を見ても亦皆な然りである。順調にトンく拍子に進歩發展したものはない、幾多の苦難を經て今日の地位を贏ち得たのである。其に比較すれば日本の農民運動の如きはまだく無難な順調な道を歩んだと云はねばならぬ。併し未曾有の田中反動内閣の出現と共に受難期に差しかゝつたのである。一時燎原に火を放ちたる如き勢を以つて全國に燃え擴つた小作爭議も今日では表面的に稍々沈退の傾向である、卽ち農林省調査による昭和三年度の小作爭議總件數は千七百四十四件であつて、大正十三四年頃の貳千數百件に比すれば非常なる減少である。其には何等かの理由がなければならぬ。今其の原因とも見るべきものを二三擧げて見ることにしやう。

第一、爭議件數減少の理由

(一)小作料減免運動の一次的成功　從來の小作料が如何に不合理であり、如何に高率なるものであるかは最早論ずる必要はない。少し物の道理を辨へる地主であるならば其を承認する位である。彼等は小作爭議を回避するために設ける土地利用組合によるも大概從來の小作料より一割五分乃至一割七分位低下してゐるのである。斯る情勢にあるを以つて前述の如く全國各地に小作料の合理化運動勃發するや、到る處農民組合のあるなしに拘らず其の影響をうけて小作料が漸次低下し、或所は二割或る所は三割、最も多きは三重縣の如く五割以上も輕減せられたる部落があるのである。

斯の如く小作料輕減運動は第一期的に先づ成功したと云ふて

良い。然らば現行小作料は全く公平なるものかと云ふに然りでない、まだ／＼高率であるのである。だが、農民はお人善しであり、誠に良い心理の持主である、まだ／＼封建的氣持を多分に持つてゐる。だから現行小作料は理論的に或は又實際的に高くとも、そう／＼矢繼早に小作料輕減の追擊戰をやることは地主に對してお氣の毒である、だから組合運動も暫らく休まう、小作爭議も大した減收のない限り中絶しやうと云ふ形である。若い指導者達が其は敎育の不足だ、階級的意識の不鮮明なからだと云はれるであらうが、事實農民の心理にはさうしたものは根強く働いてゐるのである。斯の如く小作料輕減の一次的成功は現在の如く稍々小作爭議を減少せしめた一つの所以である。

(二)農民組合運動の不活潑　何時の時代でも民衆全體が自覺するものでない。先覺者があり、指導者なるものが民衆を指導誘掖するにあらずんば社會運動が發達しない。地主達は煽動者があるから小作爭議が起るのだといふが、煽動者であるか指導者であるか、其は立場の相違見方の違ひである。指導者としての農民組合が勇悍に鬪爭する處には小作爭議も活潑に行はれるのである。地主王國と呼ばるゝ新潟に於て幾多の彈壓に抗しつゝも農民組合が勇悍に鬪爭するが故に爭議件數は少しも減少しないのである。今新潟縣の調査による大正四年以來の小作爭議件數を表示すれば次の如くである。

明治四十一年	一
大正四年	一
〃六年	三
〃七年	一
〃八年	二
〃九年	二
〃十年	二五
大正十一年	四〇
〃十二年	六〇
〃十三年	一二六
〃十四年	二〇四
〃十五年	三四一
昭和二年	三七九
〃三年	三九八

新潟縣は特殊の例として全國各府縣に於ては中頃無産政黨の出現と共に農民組合の勢力が二分されたのである、即ち組合即政黨の形であるために同一人が經濟的にも、肉體的活動にも二重の負擔をせねばならなくなつたのである。神でない限り同一人が二つの仕事を全力的にすることは六ケ敷い。活動の鈍るのは當然である、之に搗て加へて無産政黨の分裂のため引いて農民組合の分裂となり、戰線の混亂に加へて對立的な内部抗爭となり、肝心の向けるべき鬪爭の鋒先が或る期間殆んど味方の陣營に向けられたのである。斯の如く農民組合の力が分散し、然かも内部的鬪爭となり、經濟的にも肉體的にも幹部間に疲勞を感じた時、小作爭議の減少も察するに難くないのである。

猶ほ農民組合運動の不活潑に陷つた所以は鬪士の減少である。即ち前川中反動内閣は稀に見る暴壓振を發揮し、香川、愛媛

の如く組合の叩き潰しに狂奔したるのみならず、不幸にも昨年の三・一五事件、本年の四・一六事件のために多くの鬪士が奪はれたのである。新潟縣の如く次から次へと鬪士の補充のつく所は良いが、多くの聯合會は其が出來ず文字通り敵を腹背に受け所定の十分の一の活動も出來なかつたのである、其のみならず意識の低い組合員中には斯る行動に恐れを抱く者が生じいよいよ沈滯の空氣を濃厚ならしめたのである。

(三)鬪士の活動は圖上戰術に陷りしこと　前述の如く組合は多くの鬪士を奪はれ活動が鈍らんとしてゐるに拘らず、僅かに殘つた指導者達は右に或は左に分れ、互にデマを飛ばし臓窩敗の勇悍なる鬪爭に浮身をやつしたのである。農民は其樣なことを要求してゐるのではない、自分達の生活を一歩でも前進する樣に、一寸でも引上げる樣に希ふてゐるので其の爲に親切に働いてくれることを望んでゐるのである。然るに鬪士の活動は圖上戰術に陷つたり、高度な鬪爭を意識の低い民衆に強ひたために一時盛なりし組合も漸次昔日の面影なく沒落し、從ふて其の鬪爭即ち小作爭議の如きも自然鈍り勝ちとなつたのである。

(四)地主の自覺　地主組合の擡頭も亦見のがすことの出來ぬ一つの原因である。農民組合の創立せられたる當初に於ては、農民組合に加入すると云ふ言葉にすら驚いて小作料の一割や二割は輕減したのである、併し地主が漸次追ひ詰められるに及んで自覺し、或者は小作人の先手を打つて引下げ、或者は協調組合を作つて懷柔し、或者は地主組合を作つて勇悍に對抗する樣になつたのである。此のために伸びんとした小作爭議が如何に抑制せられてゐるかは云ふまでもないことである。

第二、小作爭議形態の變化

(一)小作料より土地へ　小作料の輕減は農民の端初的な要求である。だから今日の小作爭議に於ても猶ほ重要な部分を占めてゐるのである。例へば昭和三年度の千七百四十四件中、一時的小作料減額は九百四十九件、永久小作料減額は百二十六件であつて兩者合すれば約六割強に當るのである。併し今日の小作人は小作料の輕減を以つて終始するとは思はない。小作料の不納をする時地主は必ずや小作米の請求訴訟の後ろに契約解除、土地返還の迫まり來ることを承知してゐるのである。今日では單なる小作米請求訴訟はない、必ず土地引上げは喰付いてゐるのである。だから農民の要求は小作料より土地へと轉換しつゝあるのである。昭和三年度の爭議件數中に、小作權並に永小作權の確認十二件、小作權及び永小作權の賠償四十九件、代地交付六件小作地買受十四件等は其の一班を現はすものであつて、農

民組合並に無産政黨のスローガンに「土地立入禁止絶對反對」『土地を農民へ』と叫ばるゝに至つたのは其間の消息を物語るものである。今日の小作爭議が最初は小作料問題で爭ふても、地主は直ちに小作人の苦手である土地引上げを以つて迫り來るが故に、結局は土地問題になることを覺悟してゐるのである。

（二）純農村より都會地附近へ　小作爭議が土地問題に展開すると同時に純農村より都會地附近の農村へと推移する傾向がある。即ち都會地附近には郊外電車の敷設があり、住宅地としての區劃整理が行はれ、或は各種の企業會社並に多くの文化施設が出來るので其等の爲に小作人の土地が引上げられんとし、最初から土地に關する爭議が展開されるのである。例へば大阪府南河内郡大草村の爭議は地主兒山某が數百年來の小作地を小作人に無斷で住宅經營會社である關西土地會社に賣渡したことから始まるのである。會社はあらゆる方法を以つて小作人を切崩し反當り七拾圓位で追拂はんとしてゐるが、數百年來我子の如く肥培して來た土地を僅か七拾圓位の端た金で手放しは出來ぬと頑張つてゐるのである。其他大阪府聯合會の取扱ふてゐる爭議の大部分は殆んど斯うした種類のものであると云ふも過言でない。和歌山市外鼠島の爭議は是れまた蘆荻の低濕地を小作人が紀の川より年々數百荷の砂を撒ぎ入れて今日の美田としたのである。然るに地主は之を築港敷地として賣拂ひ小作人には僅かの涙金で追拂ふとしてゐるのである。

大阪府南河内郡金岡村に陸軍の敷地買收のため、陸軍と地主と小作人が三巴になつて相爭ふてゐたが、此に類する者は埼玉縣越谷町在の陸軍火工廠設置に關する土地二十五町歩取上げに關する反對運動である。組合を作つてゐるものも未組織のものも打つて一丸となり耕作權擁護同盟を作り勇悍に鬪爭してゐることである。多くの婦人連は嚴重な警戒線を突破して陸軍省にまで押掛け、小作人を死地に突き落す樣な土地取上げに絕對に反對であると陳情したのである。

少しく種類の變つた社會相の一面を見る樣な小作爭議は前記の大草村に於ける關西土地會社のゴルフ場設置並に兵庫縣武庫郡良元村の阪神急行電鐵會社のゴルフ場、別府市外に於けるゴルフ場設置による土地引上げである。小作人が働いても食へぬ時にブルジョアのドラ息子共が腹へらしのために二十數町歩の土地を取上げ、小作人を失業の憂目に落し、米や麥の立派に取れる土地を其樣な荒地にすることは道德的にも亦社會的にも大に糺彈せねばならぬことである。如何に所有權の絕對權が許されてあるとしても斯る社會の公安に害のある行爲は輿論の力を以つて絕滅する樣にしたいものである。併し資本主義社會の欄

熱と共に斯うした土地問題も小作爭議中に織込まれるに至つたのである。

（三）個人的より團體的へ　『團結は力である』、小作人は此の信條に立籠つて戰ひを宣すると共に、地主もだん〴〵自覺し土地會社或は地主協會等を以つて對抗する樣になつたのである。だから從來の個々分散的のものよりいよ〳〵團體的なものとなつたのである。鳥取縣聯合會の代表的小作爭議は山陰土地會社に關するものである。昨年來小作人は不納同盟を以つて對抗して來たが、米子警察署の第一次、二次、三次の調停にも頑迷なる地主側が應じなかつたので五千名の關係者は一人當二十圓宛の爭議資金を積み、立毛差押或は立入禁止の襲來に備へ、一方見張番を設けて鬪爭準備に熱中してゐるのである。今や戰機熟し戰ひを待つばかりで、大なる團體的鬪爭の演ぜられることは火を見るより明かである。

今日全國農民組合中最も鬪爭的な新潟縣聯合會は本年秋の減收に對し、次の樣な運動方針を立て指令を出してゐる、卽ち『大地主別鬪爭組織』を確立することである。地主はやはり團體的に鬪爭形態を取つて來るから是を引放して孤立せしめ小作人側は其の地主線に沿ふて組合のある所は勿論、未組織地の農民をも其の地主に所屬する者は一時に立ち上らしめ、小作人は緊密なる連絡の下に鬪爭しやうと云ふのである。最早今日は昔日の如く一地主對一小作人と云ふ樣な小作爭議は少しもない、一地主對多くの小作人組合か乃至土地會社或は地主組合對小作人組合の團體的鬪爭となつたのである。

（四）陽性より陰性へ　前述の如く從來の小作爭議は相當廣い範圍に亘る小作料減額並に改正の運動であつた。最近には其が比較的狹い範圍に小作地返還を中心とする爭議が激增するため、其だけ爭議が深刻になり核心に觸れて來た譯けである。而して猶ほ地主も小作人もいよ〳〵團體的となり、要求も筋が通り、爭議の性質も複雜になつて來たのであるが、地主の最後的手段卽ち耕地の立入禁止、或は土地の假處分等の法廷戰に連關し、之を阻止せんとする大衆行動が行はれ、爲に感情の激する所、公務執行妨害、暴力行爲、騷擾事件等を引起したことは珍しくないのである。例へば香川縣の金藏寺事件、山陰の箕蚊屋事件、新潟の長平橋事件等に枚擧に遑がない。併し最近の爭議傾向を見るに地主が法廷戰に主力を注ぐ樣になり、其に搗て加へて農民運動を抑壓する樣な法律、例へば暴力取締法案の如きものが出來たので、農民の要求手段も過去の陽性より次第に陰性へと變化しつゝあるのである。今日猶ほ一部の指導者間に大衆動員を云々しつゝあるが、餘り昔日の如き大衆動員の利かないのは他の

原因もあらうが又斯る情勢によるものであらう。

第三、新民訴と小作爭議

十月一日から新民事訴訟法が施行せらるゝ樣になつた。新民訴の重要なる點の一つは訴訟期間を短縮することである、或は二三回の辯論で決審さるゝであらうと豫想されてゐる。然るに從來の小作爭議の法廷戰は唯一の手段並に戰術として長く引延ばすことであつたのである、或る爭議の如きは三年や五年で片付かなかつたのである。例へば大阪府三島郡山田村の大地主吉川某との爭議の如き足掛七年越しで漸く最近調停を以つて解決したのである。斯るが故に地主組合は常に裁判所に早く決審の出來る樣にと常に陳情してゐたのであるが、新民訴施行の結果地主側の希望が大に入れらるゝことになつたのである。是によつて今後の小作爭議の戰術に非常な變化のあることが豫想されるに難くない。今日の如き無數の土地返還請求訴訟が二三回の辯論で簡短に片付けられたとしたならば如何であらう。我が子の如く愛着して來た農民より土地をもぎ取ることになるのである。其では將來に大なる禍根を殘さぬであらうが、一時は弱い小作人が泣き寢入りをするであらう。併し斯る憤激が積り積る時爆發して大なる問題が惹起さるゝのである。此邊の消息を解せずして只だ法律一遍に實行さるゝならば少しく減退せし騷擾事件の如きテロ問題が又もや多くなるに違ひない。爲政者並に當局者は豫め此處に留意せられたいものである。

新民訴で早く片付いて困るとすれば農民達は一つの戰術として殆んど小作爭議調停法に廻はすことになるであらう。然らば地主は譯けもなく拒否するであらうが、早く勝つには如何にも新民訴が都合が良い。併し物には一長一短があつて何も彼も都合の良いことばかりでない。新民訴によれば辯護士は準備書面を精細に作らねばならぬ爲めに其の費用を多く請求することは當然であつて、又凡ての事件が一回や二回で片付かれては辯護士の儲けにならないのである。だから準備書面で其の入り合はせをすることは想像するに難くない。然らば新民訴によると多くの金を要し、調停法によれば金が全く掛からないで解決が出來るとすれば慾に拔目なき地主は何れを採るかと云ふことである。地主には此のヂレンマがあるが故に調停法の活用も相當效力あると信ずるのである。斯くして今まで顧みなかつた農民團體も新民訴に對して一戰術として調停法の利用が多くなるであらうと信ずる。

印度資本主義素描

上田貞次郎

一

「印度資本主義の現段階」について何か書けといふ御注文であるが、私は昨年の十二月から今年二月へかけて一箇月餘の間インドを旅行して見たといふだけであつて、勿論此國民につき深い智識を有する次第ではない。實は歸朝後色々調べて見たいと思つたが本職の方で考へなければならぬ問題があるため、それに追はれてインドの研究などする餘力は全くなかつた。所が右の御注文に接して彼の尨大なる而して複雜な社會關係を有する「古くして若き國」インドにおける旅行の記憶がむら〳〵と復活して來たので、その爲めに半日の閑を偸んで筆を執つて見る氣になつたのだ。「資本主義の現段階」といへば、東西古今を通じて資本主義の發達する所には必ず一定の發展階段といふものが型の如くに現はれて來るといふ一種の歷史哲學を前提しておいてさてインドは其發展階段の第一期にあるか、第二期にあるか、或は初期にあるか末期にあるかといつたやうな問題を取扱はねばならぬやうに思ふけれども、私自身は右にいふやうな歷史哲學をもつて居ないのだから到底注文通りの解答を與へるわけには行かない。たゞ印度の資本主義的企業は大體こんな狀態のものだといふことを一旅行者の印象として述べさせてもらふ。

二

ボンベイ埠頭に上陸して先づ目につくものは英皇行幸紀念に建てられた大理石の大門ゲイト・オブ・インデアであるが、此門に續いてホテル・市役所・博物館・停車場等の大きな建物の相峙つ壯麗な廣場や大通りがある。そこを自動車で走れば實に歐洲第一流の都市に入つたやうな感がある。又去つて貨物の輸出される港の區域へ行つて見れば無數の棉花の俵が山のやうに積ま

れてゐるが其價額は常に幾千萬圓に達するさうである。更に方向を轉じて工場地帶に入れば大小八十五の紡績工場が盛に煙を吐いてゐて、其職工の住宅なる不潔極まる三四階の大きな建物が並ぶのをも見る。此市は其美しい一面も穢い一面も共に全く近代的である。カルカッタへ行つて見た感じも同じことで彼の大公園を取かこむ所の立派な市街と河に沿ふて設けられたジユート工場や造船場の煤煙の立のぼる光景とは是亦全く近代的である。併しながらインドは決して此等の都市の光景が示すだけに近代化され、資本主義的になつてゐるわけではない。一度郊外へ出て農村の狀態に眼を放てばそこには幾千年前からやつてゐる同じ方法で畑に水を注ぐ所の農夫がある。又村には必ず土器を燒く職人があつて手でロクロを廻して粘土の水壺を作つてゐる。更に內地に進んでヒンドウ教の巡禮の集まる聖都とか、英政府の下に半獨立の國を治めてゐる諸王の城下とかへ行つて見れば大通りに面して鍛冶屋・ブリキ屋・指物屋等の手工業が店を開いてゐる。貧弱な小間物屋の店頭を覗へば日本製かと思はれるガラス器・玩具等と共にインド人の手工品が列んでゐる。インドには現在三萬七千マイルの鐵道があつて急行は一時間四十マイルも走るやうになつてゐるのに、何うして都市と田舍の生活がこれ程ちがふのであるか。その解釋は次の事實に求めなければならぬ。卽ち第一にはインドの資本主義は土着の人の發達せしめたものでなくして外國から輸入された制度であることと、第二には此國の人種的宗教的關係が錯雜を極めてゐて、其中に西洋資本主義を採用し得るものと然らざるものと交つてゐると。

三

インドで經濟上の大動脈をなす所の鐵道・海運・銀行は殆どすべてイギリス人の資本とイギリス人の經營に賴つてゐる。工業ではボンベイを主とする木綿工業とカルカッタに集中されたジユート工業とが最も重要なものであつて各三十萬人の勞働者を使用し、此二大工業で工場勞働者の總數百四十萬人の四割を占めてゐるが、面白いことには木綿の方は殆ど全部インド人の資本と經營に成り、ジユートの方は是亦殆ど全部英人の資本と經營の下にある。右の二大工業以外に歐洲戰爭中から急に發達を始めた製鐵業があるが、之は、インドの岩崎家ともいふべきタタ一家の事業と英人の事業とに分れてゐる。併し、インドの人口三億に比すれば工場勞働者の數百四十萬といふのは小さな數であつて、此一事から見ても此國が農業國であることはよく分る。農業國で大資本を投ずべき企業は先づ鐵道・海運・銀行であらうがそれは英人が支配してゐるといつてよい。インドの經濟學

者サルカル氏は大戰前の投資額外國人の分五十一億八千萬ルーピー、土着人の分二億四千萬ルーピーと計算した。大戰以來木綿・製鐵等が大發展したから資本金額が大に增加したであらうけれども內外人の投資額の割合は著しく變化してはゐないと想像されるのである。尙內外人の投資額を合せて五十四億ルーピーといふ數字も國の大さから考へれば案外小さなものであつて、こゝにもインドの農業國たることが示されてるわけだ。

イギリス人が來る前のインドはモーガル帝國崩解の後に遺された無數の貴族の領地に分れてゐた。今でも大小七百の土王があつて半獨立の國を立てゝゐる。大きな國は人口一千萬以上、小なるものは僅か數ケ村から成つてゐるといふ。此等の貴族は各自領內の農民から取る所の稅金によつて中々豪奢な生活をなしてゐる。何れの地へ行つても寺院とか宮殿とかツーリストの注意を惹く程の建物は皆王樣の持物である。だからインドの富の一大部分は今でも封建貴族の手にあるといつてよろしいわけだ。政治上の改革をするにしても此の王權を無視することは出來ないのである。そこへイギリス人が來て國內の平和を維持し資本主義的に富の開發を企てゝゐるのである。卽ちブルジョワ的勢力は重に外から入つて來たのである。ボンベイやカルカツタは此外人の建てた町なのである。日本の資本主義も西洋から輸入されたといつてよいが、日本では日本人自ら進んで國を開き廣く智識を世界に求めた。インドの場合には外國人が資本主義を持つて來て植付けた。そこに大きな差違がある。

四

併しながらインドのブルジョワ的勢力は全部外國人のものといふわけではない。インドの農村には昔から金貸が勢力をもつてゐた。又インドの商人は此大きな國の隅から隅まで產物の集散をやつてゐた。今でも田舍には此種の商人の巡回する盛な市が開かれるさうだ。それのみならずインドの商人はシンガポール以西アフリカの東海岸まで行つて現に貿易を營んでゐるのでその趣は支那商人の活動と似た所がある。ボンベイの棉花市場などで大投機をやるのは此種のインド商人である。

更に重要なるはインド商人の中から有力な工業家が輩出してゐることだ。旣に述べた通りボンベイの紡績業は殆ど全部インド人の資本でインド人が經營してゐる。日本の綿製品の輸入と對抗してインドの紡績業のために保護關稅を設くべしとの主張を以つてインド議會を動かすのは此連中に外ならない。インドの實業家は今猛烈な國民主義を唱へ一般に保護論を支持し海運の如きもイギリスの會社の獨占を打破するために沿岸航路の閉

鎖を主張しつゝある。是はインドの資本主義が漸く其力の充實を自覺し初めた證據であらう。

唯こゝに注意しなければならぬことは我々が一口にインド人といふ中に種々の人種、種々の宗教が錯綜してゐて、其或ものゝ發展は他のものに直接影響を及さないことである。日本では如何なる山間僻地へ行つても日本語の通用しない所はないがインドでは大都會の停車場に集まつた群集の中にも忽ち十種位の異つた言語が話されてゐる。而して言語の異ふだけに風俗習慣が異つてゐて、經濟上にも異つた考へ方をする。例へば右に述べた金貸商人は勿論金錢の事に鋭くして貯蓄心に富んでゐるが、此特性は或特別のカーストの特性であつて此氣風は同じカースト以外には中々移り傳はつて行かない。前に述べた大金持のタタ一家はボンベイで紡績工場を有するのみならず、同市の電氣全部を一手に供給する一大水力發電所を經營し、又カルカツタ方面でも製鐵製鋼の大會社を起し、家長の名を冠した新市街を築きつゝある。卽ちインドの岩崎であるが、此一家はパーシーと稱する特に理財に秀でた人種に屬してゐるので、そのパーシーの人口は全國に散在するのを總計して僅か十萬位しかないさうだ。さうして見るとインドの資本主義の現段階といつても人種により、カーストによりて大なる隔りがあることを考へなければならない。同じくスワデシとかスワラジとかいつてインドの國民主義を經濟上に現はさんとする企ての内にも前記の實業家の保護關税主義になる分子もあり、又ガンヂ氏に從つて機械製の綿布の代りに手製の綿布を着やうとする分子もある。前者は外國資本主義に對する內國資本主義の擁護であり、後者は內外に拘らず機械文明に反對するので徹底的に行けば資本主義はおろか、社會主義にも反對しなければならないものである。兎も角鐵道が開けてゐるに拘らず手工業が盛に行はれ、又紡績業が發達したに拘らずまだ手織綿布の使用を宣傳する餘地のあるといふことはインドの資本主義の段階の如何に錯綜してゐるかを如實に示してゐると思ふ。

インドは面積においても人口においてもロシアを除く歐洲全部と匹敵するだけの大國であつて、その歐洲が二十七國に分れてゐるのに對して兎も角一國になつてゐるのが不思議ともいへる。而してその一國をなしてゐる理由如何といへば歐洲で各民族が夫々一地方を占領してゐるのにインドでは多くの民族が入亂れて雜居してゐるからだ。中々一口にインドとか、インド人とかいへない道理ではないか。(一九一九年九月二十一日)

現代エロチシズムと三つのイデオロギー

村松正俊

一

内閣が變つた。警視總監が變つた。緊縮の聲は都にも田舍にも擧つた。――さうして淨化の聲と共に、カフエ、バア、ダンシングの類は嚴しい取締りを受けはじめた。噂に依れば、カフエの前には正服巡査が立つてゐるし、ダンサアは私服に尾行されるといふことである。

こんなことは大したことでないかも知れない。實際市井の一些事であらう。しかし事柄は大したことでないにしても、その間に含まれてゐる問題は充分に我々をして考へしめるものを有つてゐる。

エロチシズムも變化する。エロチシズムそのものは、假に、本能が殆ど變化しないと見て、やはり同樣に變化ないかも知れない。しかしエロチシズムの形はいつでも變化する。その故に現代には現代特有のエロチシズムがあり、舊時代には舊時代特有のそれがあつたわけである。此の變化を見ないで、一律に取締らうとするところに、何か食ひ違ひが生ずるのであらう。その食ひ違ひはいたるところに見出される。警視總監の考へが現代と食ひ違つてゐるのか、現代のエロチシズムが社會と食ひ違つてゐるのか、それは別のこととして、現代社會にはいくらも食ひ違ひがある。エロチシズムに現れたのは、その一つに過ぎない。

ある人々は、カフエ、ダンスホールを眼の敵のやうに憎み、直ちに之を滅却しなければならないと呼號する。いふ心は、それが「日本固有の道德」を傷けるからであるといふ。大阪の商業會議所でキャフエを取締れといふと、何々婦人會とかは、藝妓遊びを止めろと抗議して來た。――これはみんな何らかの食

ひ違ひの結果生じたことに違ひない。

此の食ひ違ひのもとは、イデオロギーの相違である。三つのイデオロギーが低迷してゐる。封建のイデオロギーが一番ひろく、又一番深く、社會の全層に、多かれ少かれ泌み込んでゐる。これは意識的に、イデオロギーと稱せられないほど、深いものである。さうして、その代表者は甚だ多い。某少佐だか、中佐だかの夫人が夫のあとを追つて自殺したといふと、その事柄の内容も極めず、是非を問はず、一せいに起つて稱揚する。これがその一つの現れである。化石した道德感として、萬人の胸にひそんでゐるものである。それは本能化した習慣ともいふべきである。既に習慣である。それが他の批判を須ひずして、盲目的に新しいもの、新しく來たもの、新しく生れたものに反感をもつのは當然であらう。心的反射作用である。それは何でも新しいものを嫌ふが故に、いたづらに歌舞伎の美を稱へ、武士道を云々し、大和魂を高唱し、封建時代の道德を固守し、舊時代の美學に凝りかたまつてゐる。それがマネキンを忌避し、キヤフエを好まず、ダンスを排斥するのも當然ではなからうか。

自由主義的イデオロギーがある。ブルジョアのイデオロギーである。しかし自由主義そのものを卽ちブルジョア的とする一部の見解には同意し難い。しかし現代日本に於ける自由主義的イデオロギーにはブルジョア的臭味が多い。それは否定し得ざる事實である。

此のイデオロギーは多分に個人主義的色彩を有してゐる。その道德的見地も同樣である。個人の自由を第一に主張するが故に、官權の干渉を拒む。このイデオロギーは當然、享樂は個人のものである。それに干渉するのは怪しからんと憤慨するのである。その故に新内閣が緊縮を呼號すれば、それは個人の自由に任すべきだといひ、キヤフエで酒を飮むのに何の遠慮がいるものかと、息まくのである。

第三はプロレタリアのイデオロギーである。いふまでもなく、無產階級のもつイデオロギーであつて、單的にその特徴をいへば、合理的であり、科學的である。それは理論的に自由主義的イデオロギーと對抗するが、同時に又封建のイデオロギーとも衝突せざるを得ない。

さて、かやうなイデオロギーが、現代日本のマンタリテを指揮してゐるが、それは必らずしも明確に分たれてゐるわけでない。屢々同一人混交して存在するが故に、それの顯現も亦複雜を極めてゐる。大體からいへば支配階級は封建的イデオロギーを主とし、それに僅か自由主義的傾向を加へ、被支配階級は封建的イデオロギーを主にし、それに僅かプロレタリア的イデオ

ロギーを加へてゐるといふ現狀である。詳しくいつてみれば、支配階級の内でも社會的支配階級が自由主義的であり、權力階級が封建的であるのは當然推察されるであらうし、被支配階級の内でもプロレタリア・イデオロギーを主にして、それに自由主義的傾向を加味したのもあるであらう。かく混然としてゐるが故に、それの表出も亦一樣であり得ない。さうしてそれの食ひ違ひも亦錯雜を極めてゐるのはいふまでもないであらう。

二

ところで、エロチシズムはどうであるか。エロチシズムも亦それぞれのイデオロギーに從つて、その發現の形體も意味も異つて來る。今更料理屋待合の榮えた時代のことを回顧しなくともいいであらう。回顧？ そんな筈はない。それは今でも儼として存在してゐるではないかと反對する人があるであらう。當然である。今存在してゐるのみならず、又最も勢力のあるものであらう。丁度歌舞伎が最も有力であり、優勢であるのと同じく、又舊道德感、化石した道德感を抱く人が最も多いのと同じである。さういふ人が最も多いが故に、さういふ人たちのエロチシズムの發顯として、それらが有力なのである。それは封建的イデオロギーにとつては、何の不思議もない存在である。さうしてそれは資本主義的、自由主義的イデオロギーと結びついて、更に畸形的發達を遂げた。それは今日では封建と自由主義との混合物の如き形を示してゐる。さういふエロチシズムを愛するのが、權力階級、資本階級だけだといふ事實が之を證する。——しかしそれは既に過去のものである。回顧といふのに不思議はあるまい。

當然、自由主義的イデオロギーの發顯なるエロチシズムがあるべきである。しかしながら、日本の自由主義が充分に發達しないで、一面封建主義と結合し、一面、プロレタリア・イデオロギーに吸收されてしまつた如く、エロチシズムもその傾きがないでもない。それはカフエとダンスホールに明かに見られる。それは立派に日本的存在を示してゐる。それは直輸入でなくして誤譯である。誤譯であるが、日本に存在する一切の事物が誤譯であるが如く、當然の誤譯である。

こゝに示されたエロチシズムは、更に未來のエロチシズムとしてのプロレタリア・イデオロギーさへ含んでゐる。愈々混沌たるものとなつてゐるではないか。

それは同時にモデルニテを示すものとして、一面、舊來の人達から非難され、同時に、モデルニテそのものが、即ち悪い意味のエロチシズムだとして排斥されてゐる。モボといつたり、

モガといつたりするが、それが一體何であらうか、內容のない、新しがりの青年士女が少しばかり出たところで、それが一體何だといふのか。それはいつでも存在してゐたし、又いつでも存在してゐるものである。旗本の次男坊、士の不良共は、つまり今日のモボ、モガではないか、それを單純にいやがるのは封建の化石した感情のせいである。そのせいで、一切のモデルニテを排斥する。その排斥の對象となつたのが、現代エロチシズムである。

三

現代エロチシズムは、右に述べた如く、種々なるイデオロギーを含むが、それらの外面を被ふモデルニテのために、モダンなものの一切が非難されてゐる。そのモダンと稱するものは何か。それは何でもない。西洋のものといふことである。キャフエは何年前からパリに存在してゐたか。もしジャン・ジャック・ルイが、アラビヤ人の服裝をして、コメディ・フランセーズの前にあるキャフエ・レジャンスに出入したといふなら、東京の新しがりも驚くであらう。君はワルツを踊るといふか。ワルツが初めてパリで踊られたのが千百七十八年の十一月九日であつたといへば、その古いことは推して知られよう。七百五十年も前のことである。キャフエやダンスが新しい代表として彈壓されるといふなら、キャフエとダンスが泣くであらう。

しかもそれは、日本にとつては新しいのである。日本にとつてはモダンなのである。さうしてそれが誤譯の一つなのである。それは古い封建の道德感にたしかに一つのショックを與へるに違ひない。そのショックを感ずるものは、民衆である。封建のイデオロギーで固つてゐる民衆である。支配者が彈壓すると考へるのは大きな誤りである。支配者はこの民衆のショックを、丁度地震計が擴大された振動を示すやうに、擴大して感じて、それに彈壓の手を下すのである。封建イデオロギーが最も民衆の間に泌み込んでゐない限り、政府者もそのイデオロギーを持つて權力を握つてゐられないわけではないか。支配階級のイデオロギーは明かに大多數の被支配階級のそれを反映する。

ところがそれだけでは不充分であつた。資本主義の發達は、支配階級のイデオロギーをそれだけに止めしめなかつた。そこにあるは歪められた自由主義がなければならなかつた。それはエロチシズムに對する彈壓の手を、プロレタリア・イデオロギー及びそれに傾いた自由主義の方に向けて、支配階級自身の內部にある自由主義的なエロチシズムへは手を觸れないことである。貴族院の連中や政黨の幹部連の行く待合などにさういふ手

が及んだことがあらうか。それは封建イデオロギーの發現だから當然だといへるかも知れない。しかしプロの行くキャフエやダンスホールは抑壓するが、大料理屋や某侯爵邸のダンスは取締られないといふのは、それを示しはしまいか。大多數の民衆のイデオロギーが封建的であり、支配階級のそれもさうであるのが事實として、それが嫌ふところの新しいもの、モダンなものを最初に味ふのが、いはゆる上流階級であり、それを味ふのが個人の自由であると主張するのは、正しくそれを證明する。この連中に依れば、享樂は全く個人的なものであり、その個人的なことに、國家が干渉するのはいけないのである。

最後にプロレタリア・イデオロギーもやはりある段階に於て、モデルニテを非難する。それの根底に封建的道德感が固着してゐるいゝ例である。プロのくせにダンスをすると非難される。しかも一面、科學的であるといふ點と、個人主義を排して集團主義をとる關係上、個人の享樂でも取締るといふ氣持ちがある。そこへ共産主義的男女關係、自由戀愛を高唱して、以つてブルジョア的自由主義なるキャフエやダンスを攻撃する。こゝにも種々な混合のあることが知られるであらう。

一般的にかく新しいものに對してのみ非難の聲を浴せるのはどういふわけであらうか。それは單に社會學者のいふ、好新性や惜新性だけの問題ではない。それは日本に特有な生活關係の更改といふ大問題から來てゐる。それは社會學の問題でなくして、哲學の問題である。モデルニテを排斥しようといふのは、さういふ日本の生活であるが、そのモデルニテの全部を、エロチシズムとして排斥するのは、封建のイデオロギーである。その封建のイデオロギーが、支配階級のみならず、被支配階級、無産階級の心の底にも深くしみ込んでゐることは前に述べた通りである。

四

かく三つのイデオロギーがそれぞれに混沌として入り組んでゐるが故に、それの現す現象にも矛盾したことが多い。例へば權力者が、多少自由主義的見地から、廢娼の方へ動き出さうとすると、封建イデオロギーが之を阻止する。而その封建イデオロギーは自由戀愛や自由結婚を極端に憎惡してゐる。他の例でいへば、スポーツが盛になつて來ると、封建イデオロギーは之を抑壓しようとする。その道德感は、學生は學問をするものだといふ先入觀念に囚はれてゐるのと、さつきもいつた新しいものに對する反感で、スポーツを憎まずにはゐられないのである。それが權力階級を通じて示される。然るに一方、プロレタリア・

イデオロギーが先づ第一に知識階級、特に學生に迎へられるがために、他の支配階級なる資本主義は之に對して危險を感ずる。そこで之を阻止する方法を考へるのであるが、結局スポーツを盛んにしなければならないといふことに落ちつく。

此の皮肉な矛盾の間に立つて、支配階級はどうしていゝか分らないのである。同時にプロレタリア・イデオロギーの方でも、最初はスポーツは支配階級の與へる毒藥だなどと言つてゐたが、つひにそれを取り入れなければならなくなつてしまふ。

同一の矛盾はどこにもある。自由主義イデオロギーは、戀愛は自由だといつてゐても、封建イデオロギーはそれを風俗壞亂として取締る。キャフエを開いて女給を置くのはいゝが、そこに生ずる戀愛はいかん。いや戀愛はいゝが、賣笑はいかんといふ。それでゐてその區別などはどこにあるか分らない。

こんなに複雜に入り組んでゐるが、大體からいふと、國家は封建イデオロギーに支配され、社會は自由主義に、及び、プロレタリア・イデオロギーに支配されてゐるとしたらいゝであらう。國家が封建的イデオロギーを把持する限り、それは「國家」として「不正」は働かなかつた。エロチシズムに對する態度でも「不正」ではなかつた。「惡い」と思つて、その「惡い」事をあくまで取締るのであつて、社會のイデオロギーがかはり、それに應ずるものが出來ても、それを自分のイデオロギーで批判することには、間違ひはなかつた。その目的が國家にある以上、國家に間違ひがあつては濟まないからである。男女關係もそれで規定された。エロチシズムもそれで決定された。不義は御家の御法度などといふのもそのせいである。

然るにブルジョア・イデオロギーが侵入して來るに及んで、國家は此處に危險を感ぜざるを得ない。國家の正義はそれによつて蹂躪されるからである。之に對して封建イデオロギーが反抗するのは無理もないことである。政友會が正しかつたのは、封建イデオロギーに支配されてゐた頃であつた。それが資本主義政黨になるに及んで、それの政治は全く國家を危くするものとなつた。今の疑獄さわぎ、特に賣勳騷ぎは國家のもつてゐた正義を無にするものでなくして何であらう。

民政黨はその意味から言つて、政友會よりも一歩遲いといつていゝ。封建イデオロギーを持つことが、政友會よりも多量なのである。このことは「國家」の立場からは、大に歡迎すべきであり、同時に民政黨の喜ばれる所以である。その警視總監がやつきになつて、風紀純化につとめるのは、理の當然であらう。それを多くの人々が是認してゐるのも尤もであり、一部のブルヴョア・イデオロギー、或は政友會で惡口をいふのも尤もであ

る。自由主義イデオロギーは、國家よりも大切なものを認めるからである。「おれの金で酒を飲むのに、何の不都合がある」と反問する心は正しくそれである。その考へが發展すれば、私鐵疑獄にもなり、樺太事件にもなり、朝鮮總督府事件にもなる。それと反對に、民政黨流の考へ方で行けば、うつかり夫婦連れの散歩をしても巡査に咎められ、學生が晝休みにカフエに入つても、檢束されるやうになるであらう。然し理論は通つてゐる。

五

さてこゝまで進んで來ると、現代エロチシズムに對する取締りといふ、一見、市井の一些事に過ぎないものも、甚だ重大なものとなつたといはなければならぬ。イデオロギーの交錯に伴ふ當然の結果である、それと共に社會が複合的であり、構成的であり、有機的であり、進化的であることの當然の結果である。一つの些事といへども全體に關係せずして生ずることはなく、全體の變化に一つの小事件の影響を忘れることは出來ない。

その意味から言つて、一つの事物にも、善のみでなく、惡もあるといふことが分る。モデルニテを惡いといつて排撃する人は、それがいゝところと相伴つてゐることを忘れた人である。エロチシズムを單純に排斥するものは、それの必然的な存在理由を無視したものである。そこに危險があらう。

今日の支配階級は、モデルニテの全價を理解してゐない。プロレタリア・イデオロギーも、日本が世界に位置してゐる限り、日本の資本主義がそこにまで進展して來た限り、それの擴まるのは當然である。それを押へようとするには、押へるだけの根本的理解がなければならぬ。エロチシズムに對してもさうである。危險だと感ずる思想だけは取締りたい。また近代的なエロチシズムだけは取締りたいと思つて、他面それと必然的に相伴ふべきもの、輕い例をとれば、トーキーでも、スポーツでも、ツエッペリンでも、或は比例代表制普通選擧でも、さういふものだけを迎へようと思ふは大間違ひである。日本人がそもそも斷髮して、洋服を着るやうになつたことが、今日日本を「一等國」にならしめたのではなかつたか。そんなら、それに伴つて、あらゆるモデルニテが入るのも當然であらう。ジャズがあれば、ダンスがあり、洋酒があれば、バアがあり、外國語を尊重すれば、危險思想の入つて來ることは無論のことであり、世界第三位の海運國とあれば、アメリカニズムの横溢するのも當り前であらう。

エロチシズムが本能に根ざしてゐる限り、それを「取締る」ことの無理なのはいふまでもない。それが時代に伴ひ、イデオロギーに從つて、いろいろな形をとるのも仕方がないことで

ある。モデルニテの一特徴としての現代エロチシズムは、それだけで必然性を持つてゐる。そこを忘れて、モデルニテの形式をそなへたものだけを取締らうといふのは、間違つてゐる。この間違ひは、政友會が、國家機關をブルジョア・イデオロギーに變改させようとした時の危險と同じ危險を生むものである。注意しなければならない。取締るものが、あるときは、自由主義イデオロギーに從ひ、あるときは、封建イデオロギーに服して、その節度を異にするといふことは、現代日本のごとき混沌たる時代に有り勝ちである。その危險も注意しなければならない。反對する分子も同じく混沌としてゐる。取締らうといふ方が封建であれば、享樂は個人の問題だから、國家の容喙を許さぬといきまくのは、自由主義である。その享樂を側で見てゐるプロレタリアは、封建に反對しながら、その自由にも反對してゐる。――行くところは何處であるか。

第一に哲學を持て。その哲學のみが、イデオロギーを批判し得るのである。さうしてモデルニテに對しても、エロチシズムに對しても、充分なペルスペクチブを以つて、考量するところがあるであらう。

――これが結論である。この結論は流行のマルクス派の人たちの與へるところの結論と少しちがふやうである。

「風俗警察」と「思想警察」

性的要求と社會的要求とに對する警察力の干渉

長谷川如是閑

A　警察官吏
B　筆者

一　「風俗警察」と「思想警察」との規準の相違

A「現代は秩序に對する尊敬心も服從心も薄くなつて、同時に善良の風俗を維持しやうとする社會的關心も失はれてゐる有樣です。犯罪者の心理や性格もこれに從つて、秩序や風俗の破壞そのことに興味をもつやうな傾向になつてゐる。動物的の慾望と危險思想とが協力して社會を搖り動かしてゐる。之れに對し「風俗警察」と「思想警察」とが相携へて活躍を要する時です。」

B「「風俗警察」と「思想警察」とは、何うして相携へることが出來ます？」

A「不良の風俗と危險な思想とは同じ程度で警察の對象となるべきもだのからです。」

B「危險な思想を不良の風俗と同視したのは古代の警察のことです。大昔の家族的又は氏族的の社會に於ては、警察官——その社會の長老——は社會人が何を考へてゐるかを取締つたのです。何となればその時代に於ては、人々が全く同じ考へをもつことによつて一つの社會が出來上つてゐたからです。別の考へをもつものは異る社會に屬したもので、敵對關係に在るものです。さういふものは一つ群の社會人として許される筈がないから、思想警察は、全く社會的の目的をもつた強制手段であつたといつていゝ。然し、發達した社會では、社會そのものが各種の異る群意識をもつた異種群の合成體です。生活方法を異にするに伴つて、生活態度を異にし、從つて生活意識を異にするいわ

いろの群が、協同して、又競爭して、一つの社會群を爲し、その異種の接觸と綜合とから複雜高級の文明が生れたのです。だから發達した社會程、思想の傾向が不統一です。それは異人種の混淆のみが人類の進步を促すのと同じ理屈です。さうなると思想警察は、それ〴〵の群で各別にそれ自身の思想警察をもつ譯です。農民には農民の考へ方があり、大工には大工の考へ方があり、石工には石工の考へ方があるから、彼れ等は皆別々の「思想警察」をもつてゐました。さう細かく分かれない迄も少くとも職人は職人、農民は農民で別々でした。つまり違つた考へ方をするものを仲間から排斥しました、それが彼等の「思想警察」です。」

A「國家も、だから「思想警察」をもつのが當然です。」

B「然し、各種の社會群の「思想警察」はめい〳〵の異る思想を異る形で保存又は發展せしめんための警察です。即ち生物の發達のためには變種の發生が缺くべからざる條件であるやうに社會の發達のためにも、思想の變種を發生せしめねばならぬので、さういふ變種を產むために異種の思想の接觸を必要とするのです。社會的の「思想警察」は、このいろ〳〵の異種の思想を保存發展せしむるための警察です。だからそれ自體は統一思想の強制でも、全體的には各種の思想の競爭又は協同となるわけです。國家の「思想警察」は之れに反して、全體的に統一思想を強制して、異種の思想の發展による變種の發生を壓迫するものですから、社會の發達を阻止する力となるのです。」

A「それなら「風俗警察」もやはり、發達した社會では生活を異にする群にはそれ〴〵異る風俗があるから、それを國家が警察力で強制的に統一するのは、社會の發達を害することになりませう?」

B「いかにも社會は、多くの生活群に分かれてゐて、それらが何れも異る風俗をもつてゐます。が「風俗警察」は「思想警察」と違つて、決してそれらの異る風俗を統一して全く同じものにさせやうと強制するものではありません。風俗警察は、一つ社會の多くの異る群を通じて、一般にもつてゐる感覺に叛いた風俗だけを禁壓するもので、風俗を統一しやうとするものではありません。然るに國家の「思想警察」は、すべての社會人に國家者の考へるやうに考へろといつて強制するのです。反之、風俗警察はすべての社會人に、國家者のやうな風俗をしろと強制するものではなく、昔の風俗警察などは、その反對に、めい〳〵別々の風俗をすることを強制したものです。今の風俗警察はそれ程でもないが、然しわれ〳〵が軍服をきてサーベルや勳章をブラ下げて步るくと必ず罰せられる。「風俗警察」と「思想警察」

とは決して手を摂へることは出來ないものです。一方は思想を統一しやうとするのであり、他方は、風俗を別々にしやうとするのである。』

A「今日の風俗警察は決してそんな意味ではない。やはり風俗に關する、社會的の感覺を統一しやうとするのです。「善良の風俗」の統一的標準によつて不良の風俗を取締るのです。』

B「そこがまだ「思想警察」と違ふ點です。御說の通り、社會的感覺が、「風俗警察」の規準です。必ずしも國家的支配者群の感覺のみによらない所に「風俗警察」の存在理由があるのです。之れに反して「思想警察」は、社會的思想傾向を排斥して、國家的支配者群の思想傾向のみを規準とするのです。社會人が考へるやうに考へてはいけない、國家者の考へるやうに考へろといふのが「思想警察」です。風俗警察は、それと反對に、社會人の感覺に叛いてはいけないといふのです。これならば、社會生活の上で許されてゐる警察力の發動だといつてもいゝわけです。』

A「然し、思想でも、如何なる思想が社會にとつて危險であるかといふことを社會的感覺の規準で決定するのですから、風俗の危險性を決定するのと同じことです。危險な風俗が禁壓されねばならぬならば、危險な思想も禁壓されねばならぬ。」

B「その意味の「危險」ならば、無論思想でも風俗でも同じく取締りの對象となるわけです。然し所謂「思想警察」は全然さういふ意味のものではない。思想の危險性を決定する規準は、社會的感覺ではなく、階級的感覺です。國家者階級の思想傾向は決して最もよく社會的感覺の規準に合つたものではありません。封建時代には國家者階級は自分が道を歩く時には、「下に降らう」と怒鳴つて百姓町人を土下坐させたものです。こんなことは、決して百姓町人自身が彼等同士の社會ではやつて居ないことで、殊に國家者階級のみにある思想傾向です。さういふ思想で、一般社會を取締るのが「思想警察」です。百姓町人は、この思想を否定する思想を抱けば首を斬られます。何となればそれは「危險」な思想だからといふのです。俺達の社會ではそんな眞似はしてゐないと云つたゞけで、それは危險思想であると認めるのが「思想警察」です。現實自分達の社會ではそんな眞似はやつてゐないからやつてゐないと云つたのが、何で危險なのか、社會的感覺ではわからぬことです。即ちそれは國家者だけの感覺によつて、始めて「危險」と感じられるのです「思想警察」の感覺の規準はその國家者階級の感覺です。風俗警察の感覺の規準は社會的感覺で、決して一緒にはいはれません。」

二　人間的欲望に對する警察の干渉

『然し、風俗警察の取締の對象は、人間の慾望です。性的慾望の發現に對して禁壓を加へるのです。國家の力でさういふ個人的慾望の自然を抑へるといふことは、貴下の立場からいへば許され相にも想へませんが？』

B『「國家の力」といふやうなものは、思想に對して無力であると同樣に個人的慾望に對しても無力なものだと考へる外はありません。然し「風俗警察」は決して無力であつてはならない。』

A『何故國家の力は個人的慾望に對して無力だといふのですか？無力ならば「風俗警察」も根柢がない譯ではありませんか？』

B『國家の力といふものは、これを社會的に觀るならば、特殊の階級的勢力で、社會の力とは別のものです。國家の力も無論ある程度に於て、社會の力と一致することのあるのは、その一致なしには國家の力は一日も力ではあり得ないからです。國家的統制は社會的統制とは、根柢を異にするものではあるが、形式に於て多くの點で一致してゐなければならないものです。最も善良な國家は、最も多くこの一致をもつものです。然し國家の統制と社會的統制とがいかに、一致を見た場合にも、ある局限に達すればその一致は必ず破れる。即ち國家の階級的存在が社會的の力で危くされんとする時には、國家は斷乎として、社會と對立する地位をとる。ナポレオンは、その最良の國家的地位に於て、ある點まで當時のフランスの社會統制――それはブルジョア社會の統制で、階級的ではあつたが、その階級的統制そのものはある點まで社會統制に一致したものでなければならなかつた――と一致した法的支配者――即ち國家的支配者――であり得たに拘らず、自己の階級的勢力を維持するためにはフランスを犧牲とすることをも憚らなかつたのです。ナポレオンはフランスを敵としたわけではないが、フランスの敵を敵とした譯でもなく、彼れ自からの階級的地位に對する敵を敵としたのである。又ナポレオンの敵も、ナポレオン國家を敵としたのであつて、決してフランス社會を敵としたのではない。誰れもは、ナポレオン國家とフランス社會を全く別物と見た。國家は絕體絕命の時には、社會と別物であるといふ正體を現はすものである。尤も支那の國家のやうに、絕體絕命にならなくとも、常不斷に支那の社會とは全く別物であることを明確に示してゐるものもある。』

A『それが人間の思想に對する警察の干涉を否定しながら、人間の慾望に對する警察の干涉を肯定する貴下の說と何の關係があるのです？』

B『ですから「風俗警察」といふものは、社會的見地からいふと、國家の警察とは別の根柢の上に成り立つてゐるものだとい

ふのです。國家の力が人間の慾望に對して無力であることは思想に對すると異らないのだが、社會は、人間の慾望に干渉する必然の性質をもち、力をもつてゐるのです。國家の「風俗警察」はこの社會の力と一致することによつて、――ブルジョア階級的統制のナポレオン・コードが當時のフランスの社會の統制意識と一致したことによつて存在理由をもち、力をもつたやうに――今日の自由主義社會に於て存在理由をもち、力をもつのです。」

A「社會は人間の慾望に對して干渉する力をもつといふが、その社會の力――國家の力の元になるといふ社會の力とはどんな力なのです？」

B「その社會の力とは、貴下方をして、知人に出喰はした時にお辭儀をさせたり、「御機嫌よう」など、いはせたりするその力です。また貴下方をして來客の面前で素裸になつたり、知りもせぬ婦人の面前で、猥らなことをしやべつたりすることをさせないその力です。このやうな作爲不作爲を貴下方に強制する力が社會の力です。それはわれ／＼の孤獨の生活に於ては決してわれ／＼の上に働かない力ですから、社會的生活の爲めに、われ／＼の上に加へられる力だといふことがわかります。「風俗警察」はこの力の上に成立するものです。國家の力など、は何の關係もない根柢の上に立つ警察力です。」

A「然らば、性慾のやうな人間自然の慾望はその社會の力による干渉位で澤山で、國家の力で干渉する必要なんかはないぢやありませんか？「風俗警察」の存在理由はどこに在るのです？」

B「もし人の前で素裸になることを禁ずる社會の力を感じない人間があつた時には、社會の力は意識的に特に強く約束されることになります。電車の掲示板にあるやうに、「ふともゝを出す事」を禁ずる約束は、普通の人の爲さぬことを平氣でする人間のあるために出來た約束です。「ふともゝ」位ならば制止だけで社會は我慢するが、もしそれ以上に斷じて露出すべからざる所を露出せしめてゐる人間が電車の中にゐるならば、社會はこれを異常者と認めて、それに對して精神病者に對する取扱をするでせう。それをする時に、その人間に對して強制力が必要となるのだが、その強制力の行使には、國家的支配の存在する場合には、その國家的權力の作用が一番有力なのです。だから社會は國家の力を利用して「風俗警察」を成立せしめるのです。」

A「然し、ふともゝを出さうが何處を出さうが、抛つて置いたつていゝぢやないですか？風俗なんか何うだつて、時代が變れば何でも無くなるのだから、社會がそんなことをやかましくいふのが間違ひで、それは丁度國家が危險思想をやかましくいふのと同じぢやないですか？「思想警察」はいけない「風俗警察」

はいゝといふのは變ですね。」

B「敵の武器を奪つて敵に迫るといふ論法でせうが、御氣の毒ながら貴下は敵の武器の刃の方を摑んで振り舞はして居る。風俗を亂すものは性的慾望で、貴下等の所謂「公の秩序を亂す」ものは社會的慾望です。社會的慾望も「生存權」などゝ呼ぶと大分性慾に近いことになるが、それは、一言でいへば社會的生活組織に對する慾求です。いひかへれば、社會制度の變化の要求です。それは「生存權」といふやうな漠然たる慾求ではなく、現實の生活組織の變化に對する具體的の運動です。思想が危險だといふのは、この組織の變化に關する意識だからです。だから變化により進展する社會そのものにとつては、それは危險でも何でもない。汽車に乘つて旅行しやうとするものにとつては、汽車の進むのは危險でも何でもない。汽車の進行を危險だといふものは、汽車に轢かれるやうな地位に居るものです。思想を危險だといふのは、轢かれんとするものが、汽車を走らせてゐる機關手を危險人物と呼んでゐるやうなものです。風俗に至つてはそれとは話が違ふ。」

A「『風俗も、變化を求めるものが多く風俗を亂すものと認められます。遊廓で慾を充たすものは許され、變化を求めてカフエー、ダンスホールで同じことを求めるものは罰せられるとなつてゐるのも變化が否定されてゐるのではないですか？」

B「風俗に於ても變化そのことが壞亂と認められる場合もある。然し、「風俗警察」はさういふ變化に對するものではありません。性的職業を遊廓に限定するといふのは國家的支配の秩序でよりはより多く社會的統制の秩序です　その方法を採つてゐるから、その以外の方法によるものを罰するので、これは變化を罰するものではなく、一定の方法――それは結局社會科學的であらねばならぬ――による組織を維持するものです。その方法の科學的能不能は別として、それは社會的見地によつて立てた約束を勵行するまでゞす。然しわれ〳〵は今日の風俗警察の方法が科學的に當を得てゐるや否やをいつてゐるのではなく、「風俗警察」の根柢は性的生活に於ける社會的約束の上に成立するものだといふことをいつてゐるのです。」

A「すると貴下は「風俗警察」に於てはファシズムをとりますか？」

B「大違ひです。風俗に關する警察的干渉は、感覺的判斷に依る場合には極度に寛大ならんことを要求するものです。殊に青年の性的要求については最も寛大でなければならない。」

A「感覺的判斷による場合とは？」

B「風俗に對する一般的感覺は極めて保守的なものです。善良の

風俗を破る場合にも保守的の破り方をしたものに對しては社會は極めて寛大です。これはさういふ保守的の破り方に對しては社會的感覺が鈍つてしまつて、少しも侵かされたといふ感じを持たないからです。之れに反して、少し新らしい方法に出ると社會的感覺は甚だ強い刺戟をうけて、大に不安を感ずるのです。衣服でも、友禪紋樣などは可なりけばけばしいものだが眼に馴れてゐるので刺戟が極めて平凡に感じられる、然るにもし強い單色に裸體美人などをぬき出した羽織などを今から十年も前に着て歩く女があつたなら人は精神異常者だと思つたでせう。所が今日ではそんな羽織を現に着て歩くものがあつても、人々はたゞやゝ目に立つ位に感じて、氣違ひとは感じない。もし單なる感覺に依賴して風俗に干渉すると、十年前に裸體美人の羽織を着たものを精神病者として取扱ふことゝなるのです。カフエやダンスホールの出現は、要するに舊式の性的享樂の形式が廢たれて、キネマや外國文學の影響をうけた先覺者(?)の要求から生れた新しい形式が發展したまでゝす。從つてその「弊害」も、舊式の性的享樂機關に比べてどれだけの差があるかは問題で、目下の處は、新らしい形式に對する恐怖が大分働いてゐると見ていゝでせう。』

三　性的享樂機關の墮落と其の防止

A『然しそれが本場のパリやニューヨーク式に發展することは社會的に防止せねばならぬでせう?』

B『そこです、われわれは、それをたゞ感覺の上だけで定めてはいけないのです。西洋の大都會に於ける性的享樂の形式の墮落はその社會的動因を究めることなしに、それに赴くことを避ける道は絕對にないのです。唯あゝなつてはやり切れないといつて嚴重な法律を作つて見たところで、西洋各國至る所に存在するあの「非合法的」組織が潛行的に發達するまでのことです。『治安維持法』式防禦法が、方法的に全く無意義であることは、性的運動に對しても同じことです。あれは恐怖の感覺がさせる盲目的防禦です。青年の性的生活も時代によつて新しい形式に移るのは當然で、それは全く一般生活形式の變化に對する慾求と伴つてゐます。ですからわれわれの生活が西洋のブルジョア文明に向つて進んで行く限り、パリ、ニューヨーク式の性的世界への突進は脫れ難いことです。』

A『然らば、「風俗警察」は何をしたらいゝのです?』

B『風俗の變化は單なる保守的感覺によつて排斥し得る現象ではないのです。歐米型の風俗の侵入をわれわれの感覺の上から歡迎することは少しも干渉すべきことではありません。もう今日では向ふ脛の隱れてゐるやうな長いスカートの女を見ると、

嫌悪の感じをさへ持たされます。それは必ずしも舊いものを嫌つて、新しいものを喜ぶからではなく、強いて舊型を頑守する態度を悪むのです。然し此の感じによつて、長いスカートの女を處罰することは風俗警察の爲すべき所ではない。それと同じく、新らしい性的感覺の要求に應ずる形式を舊感覺によつて處理するのは「風俗警察」でも何でもありません。それは姑爺の若夫婦に對する干渉です。』

A『然らば貴下は、歐米の大都會のそれと同樣の形式に進んで行く事を防ぐのも風俗警察の義務ではないといふのですか？』

B『義務ではありませんが、あつたにしても、それは力及ばないことです。いつかも、女子のスポーツに「ふとも、」を出すことを禁じやうとした文部大臣があつたが、この頃も踊り子が足を露出させ過ぎるといつて、取締らうとしてゐるさうです。さういふことを「風俗警察」と考へるのは、國家的權力で風俗が取締れると思ふ間違ひから來てゐるのです。風俗は前にいつた社會の力だけが取締ることを得るのです。』

A『歐米式形式に陷ることを社會の力が何うして防止します？』

B『それは決して風俗のみの問題ではなく、一般社會統制の問題です。將來の日本を構成する人間に一定の性質を與へる社會組織の如何が問題なのです。青年の性慾がいかに統制されたかといふことは、性慾自體の問題ではありません。社會組織の問題です。』

A『といふ意味は？』

B『その意味をいつてゐては長くなりますが、青年の慾望は甚だ複雑なもので青春期には性慾が主として支配するとはいひ條、人間は決して動物のやうに性慾生活の專門家とはなり得ない。無數の生活の慾求がそれと競り合ひます。……』

A『生活の慾求といふと？』

B『それはあらゆる方面に亘ります。青年は性的慾望の他に、そろ〳〵生活の獨立を欲することに伴ふ經濟的慾望、事物の盲目的受け入れに滿足しなくなるに從つて生ずる知的慾望、遊戲的慾望は漸く生活的となつて專門的職業的生活の慾望に轉ずる。同時にその正反對に急激に生活の現實に當面することのために却つてそれを回避する諸傾向に伴ふ慾望——藝術的慾望、宗教的慾望、哲學的慾望、及び滿たされざる性的慾望に伴ふ消極的生活の慾求等——が發生する。その他矛盾した諸傾向が雜然と積極消極の慾求として混在する。これらのあるものは、環境に順應せんとするものであり、他のものはそれに反抗するものである。青年が社會に對してその傳統を支持する役目をとる

か、その傳統の崩壞に乘じて新らしい社會を形作る要素となるかは、この青年時代に於ける彼等の環境と、それによつて彼等の内に持ち來たされた諸種の慾望の生存競爭によつて決定されるのです。「青年」とはその名の如く性慾の充足のみを主張するものではなく、この複雜な要求の主張者です。』

A『それが性的生活の將來の形式を決定することに何う關係があるのです？』

B『だから、經濟的、知的、職業的、藝術的、宗教的、哲學的等との互に撞着する諸慾望は青年の社會的環境の如何によつていろ〳〵に彼れに對して作用して、諸種の慾望自體の生存競爭が起り、性的行動の獨裁的發展を阻止するのです。青年男女はたゞ茫漠と性の世界に歩み出すものではなく、社會そのものに進出しやうとしてゐるものです。彼等は、右に掲げた諸慾望の盛衰に應じて、それと青年期の性的慾望をも結合させ鬪はせながら、それによつて性の世界へも、亦外の諸種の生活の世界へも乘り出すのです。その時、彼等をして如何なる態度に出でしめるか——向上か、墮落か——はその環境に對する彼等の諸慾求の生存競爭によつて定まる。』

A『優劣な慾望の勝つたものが向上し、然らざるものは墮落するといふのでせうが、その淘汰を行ふものは何だといふのです？』

B『それは社會的生活の興味です。慾望が動物的に個人的となるか、人間的に社會的に發展するかゞ、彼等の岐れ道です。社會的慾望の强いものは、恐らく個人的慾望も强いでせう。「英雄色を好む」といふのは少し當らないが、社會的慾望と性慾とは兄弟分です。然し、色を好むことによつて失敗しなかつたものだけが英雄となることが出來るやうに、性慾によつて支配されることからの解放は、社會的生活の第一條件です。この慾望の生存競爭に於て社會的生活慾をして性慾に勝たしめる方法の組織的に發達した社會は、性的生活の墮落を最もよく防ぎ得る社會です。』

A『さういふ社會はどんな組織の社會です？』

B『さういふ社會の實例を擧げることは困難だが、その反對の社會ならばいくらでもある。』

A『それは何處にあります？』

B『昔の軍國的掠奪生活の組織の上に成立した社會と不勞所得による生活組織に立脚する社會とは、正に性慾をして生活慾に勝たしめる組織の社會である。西洋の大都會に於て殊に性的享樂の形式が墮落してゐるのは、西洋の大都會が昔からこの二種の寄生的生活の組織の中心だからです。社會生活から游離し

た、暴力の組織と富の組織とは性慾をして生活慾に勝たしめる最も有力な動因です。これらの組織の下に於て風俗警察などは全く無力です。昔の大名の社會に「風俗警察」などは決して存在しなかつた。何となれば、さういふ社會の力が風俗に對して無力だからです。』

A『では「風俗警察」を最も有力ならしめる道は？』

B『一般人の社會的要求を強烈ならしめることです。殊に青年の社會的要求を熾烈にすることです。青年は社會の進化過程を直覺するに最も鋭敏な資格をもち、最も便利な地位に在ります。彼れは自分の頭も白紙ですが、社會的地位も白紙です。崩壞過程を思ひ諦めるに何の執着も持たないものです。殊に無産階級の青年は然りです。この青年をして、その社會的欲求を熾烈ならしめ、性慾の專門家たる經濟的餘裕も時間的餘裕も頭腦の餘裕をも少なからしめることが彼等をして暴力的寄生々活者や利潤生活者の態度から離れしめる所以です。それは、寄生々活者の最も進歩(?)したもの丶溢れてゐる歐米の大都會を後進國に發生せしめない唯一の道です。』

A『何うしたら青年をさうすることが出來ますか？』

B『何うしたらそれが出來るかは篤と考へねばならないが、差向きは、何うしたらそれが出來なくなるかを考へて見るがいゝのです。貴下が「風俗警察」と手を携へるといつた「思想警察」こそはそれを出來なくする最も有效な方法なのです。』

A『何うしてゞす？』

B『青年の社會的衝動を壓迫するのが「思想警察」ではないですか？彼等の方法は、ある時には、青年の慾望を社會的のそれから性的のそれへと押しやることをもつて――即ち風俗に關する取締を寬にして思想取締を厳にするといふ方法で――危險思想を防止しやうとしたことさへありました。然るに今日では、思想の危險は、自づから性的危險をも伴ふものだといふので、性的危險性をも厳に取締ることになつたといふ話です。貴下の所謂「思想警察」と「風俗警察」の提携とはさういふ意味でせうが、青年は「思想警察」によつて社會的慾求を壓迫されることによつてそのエネルギーを性的慾求に向けるものです。そこで性的慾求がまた壓迫されるといふことになれば、勢ひ「非合法」的性生活が發達します。「思想警察」と「風俗警察」とは相携へて風俗を奈落に押しやります。』

A『然し「風俗警察」を一番眞面目にやつてゐるのは日本の警察だといふことです。』

B『その代り「思想警察」も眞面目にやつてゐるから、つまりプラスマイナスです。』

（終）

資本王國の財産調べ

―三菱王國論―

高橋龜吉

一、三菱王國の産業支配網

三井一族の産業投資は、前號已述の如くすべて三井合名を通じて行はれてゐる。之に反し、三菱一族は、なる程、その大部分を三菱合資を通じて投資してゐるが、その外に尚ほ、岩崎一族それ〴〵が、獨立して別個に各種事業に投資してゐる。即ち三菱一族の資本統制は、三井のそれに比し惡く云へば不統一であり、ルーズであり、良く云へばそれだけ自由であるわけだ。此の點が、三井と三菱との資本の統制を異にする第一の點である。

三菱王國の事業投資が三井のそれと異る第二點は、三井の投資が多くはその支配的又は準支配的會社に對するものにて、單なる關係會社（單に大株主又は重役を出すに止り、當該會社に對し未だ支配的勢力たり得ざるもの）としての投資少きに對し三菱に於ては單なる關係會社に對する投資が少からぬ數に達することである。即ち、三井の投資はその産業の支配と云ふことに著しく鋭敏なるに對し、三菱のそれは單なる貨殖目的が少からず織込まれてある。思ふに、兩王國の投資の間に斯くの如き差異を生ずるに至つた根因は二重である。第一に、三井の子會社的事業投資は、專ら物産、鑛業、王子製紙等の第一線の産業を中心とし、銀行、信託の如きは單に一個の兵站部に止り、自

ら事業投資をなしてゐない。之に反し、三菱のそれはその第一線の産業の外、三菱銀行、東京海上火災、明治生命保險等、自らが少からず事業投資をやつてゐる。之れ三菱に關係會社多き第一根因だ。更に、三菱王國に單なる關係會社の多き第二因としては、三井一族が資力を合名に總動員して、所謂「國家的」事業か乃至は同業の誼等にて、交際上出資を拒み得ざるもの、外關係會社としての投資を極力抑制せる跡あるに反し、三菱一族に於ては、三菱合資にプールせる資本以外の一族の資本を、單なる貨殖目的(産業支配の目的を含まない)のために電力會社その他に少からず投資してゐる傾が見えることである。

以上の如き事情のため、三菱王國の産業支配網は、少からず廣汎に亙つてゐるが、しかし、その支配下にある事業は、三井王國のそれに比し割合に少い。例へば、筆者の調査し得たるもの丶みにても其の總數は別掲第一表の如く百二十社(三井は百二十七社)に達するが、しかし、その中、五十四社迄は單なる關係會社(三井は二十七社)であつて、殘り六十六社が支配的であるに過ぎない。而して、これ等諸會社は、已述の如く更に三菱合名と岩崎一家との二つを中心にして、直系、傍系及び單なる關係會社等いろ〳〵の關係に分れてゐること別掲第一表の示す通りである。因にそれ等會社の資本金その他の内容については後述第三及第四項について參照せられたい。

(一)三菱系諸會社數關係別表

會社數	三菱合資 直系	三菱合資 傍系	岩崎一族 直系	岩崎一族 傍系	小計	外に直接關係會社 三菱合資	外に直接關係會社 岩崎一族	合計
直接支配會社	一七	八	五	四	三四			三四
子會社 支配的會社	一五	一〇	—	二	二七			二七
子會社 準支配的會社	五	八	二	—	一五			一五
關係會社	一	一二	一	三	一七	一八	九	四四
合計	三八	三八	八	九	九三	一八	九	一二〇

以上は、單に三菱系事業の會社數であるが、いま、その會社名各會社の資本系統等の關係を、圖解を以て一目瞭然たらしめば別掲系統圖の如くである。先づ系統圖に由つて明かなる如く、一口に岩崎一家と便宜上稱するも、しかしその内容は久彌、小彌太、俊彌の三家にそれ〳〵分立してゐる。即ち、系統圖の會社名下に、(久)(小)(俊)あるはその附號であつて、(久小)とあるは久彌、小彌太共同の分である。又、系統圖の直系、傍系の子會社中、*印のあるは支配的會社たるを示し、無印は準支配的、△印は單なる關係會社(或は大株主たり或は重役を出しる

三菱系諸會社系統圖

（備考）表中＊印は三菱の支配力が大體に決定的なもの「無印」は同じく準支配的なもの。△印は三菱の支配力未だ以上の如くならざる關係會社である。

三菱合資——地所部

直系諸會社

- 三菱造船——＊三菱電機。＊三菱航空機。＊日本光學工業。日本電池。
- 三菱製鐵——＊東京鋼材。△朝鮮鐵道。
- 三菱鑛業——＊九州炭鑛汽船。＊雄別炭鑛鐵道。＊美唄鐵道。＊中島鑛業。朝鮮無煙炭。△古河電氣鑛業。△日本セメント。山陽中央水電。
- 三菱商事——＊日本生絲。＊清作製材。日本ソリデチット。千代田石油。日魯漁業。△日清製粉。△大北漁業。
- 三菱海上火災
- 三菱銀行——＊（×東京海上火災保險）。三菱倉庫。菱華倉庫。＊共同倉庫。＊共同運輸。△日本銀行。△横濱正金銀行。△昭和銀行。△百十銀行。△日佛銀行。
- 三菱信託
- 日本郵船——＊近海郵船。＊横濱船渠。＊朝鮮郵船。日清汽船。
- 明治製糖——＊明治商店。＊明治製菓。＊スマトラ興業。＊河西鐵道。十勝開墾。
- 若松築港

傍系會社

- 東京海上火災（三菱銀行子會社）——＊東明火災海上保險。＊豐川鐵道。＊明治火災保險。東洋海上火災保險。帝國火災保險。大福海上火災。東京サルヴエージ。福壽火災保險。日本火災保險。△大倉火災海上保險。△大日本製糖。△東京電燈。△大同電力。△東邦電力。△九州水力電氣。△富山水力。△四國水力電氣。△東京瓦斯。△三井信託。△日本電氣證券。△三信鐵道。
- 滿蒙殖産
- 東京イーシー工業
- 朝鮮水電。東洋織布

關係會社

日本無線電信。日本航空輸送。北樺太石油。大源鑛業。北樺太鑛業。東洋製鐵。帝國劇場。東亞興業。山東鑛業。明治漁業。金福鐵路公司。九州送電。東京發電。東洋窒素業。程ケ谷ゴルフ。鶴見臨港鐵道。中華滙業銀行。大阪毎日新聞。

岩崎一家

直系會社

- 三菱製紙（久）——△日本フエルト。
- 旭硝子（小、俊）——昌光硝子。——日米板硝子。
- 東山農事（久）。子安農園（俊）。立川農園（俊）。

傍系會社

- 明治生命保險（久）——△九州水力電氣。△三重合同電氣。△東邦瓦斯。△東武鐵道。
- 富士瓦斯紡績（久）——＊富士電力。
- 日本窒素肥料——＊朝鮮窒素肥料。
- 麒麟麥酒（久、小）

關係會社

東京電燈（久）。大同電力（久）。東邦電力（久）。東邦證券（久）。九州水力電氣（久）。矢作水力（久）。汽車製造（久）。長崎紡織。東京毛布。

るも未だ支配的でない會社の意味）たるを示すものである。

尚ほ、系統圖に出ると、三菱電機、三菱航空機の兩社は三菱造船の子會社であり、三菱倉庫は三菱銀行の子會社である。しかし右は單に資本系統を示すに止り、實際事業上の統制は、右三社は三菱合名に直屬してゐる。又、三菱信託は圖表上には合資の直系であり、實質も亦さうであるが、しかし、統制上は合資の支配を受けず、獨立した傍系會社の形式を採つてゐる。されば、三菱合資自らが直系會社と云ふは、右三社に、三菱信託を除いた圖表の直系會社を加へた合計九社である。

三菱王國は亦、以上の外、三菱合資直屬の地所部を主管として、丸ノ内を中心に土地建物を經營してゐる。地所部の下に幾何の土地と建物を所有してゐるか全國的のことは發表せぬので不明であるが、しかし、その大部分は丸ノ内の一廓であることは周知のことである。而して、三菱合資が丸ノ内に所有せる土地は五萬七千五百坪、ビルヂング四十二棟、同建坪一萬八百坪同延坪數四萬一千七百坪(以上昭和三年末)の大を算し、これ等は三菱系事業のオフィス用たるの外、貸地及日本最大の貸事務所事業を營んでゐる。

以上に由つて、窺ひ得る如く、之をその外形より見る限り(内容については後述する）三菱王國の産業支配網は、三井のそれに比し一見左程に遜色を示してゐない。之れ、思ふに、世間の多くが、資本的にも、産業的にも三井と三菱とを略ぼ同格に見る所以であるであらう。それは兎に角、これ等の事業は如何に支配せられてゐるかと云ふに、それの統轄者、それの總本部は云ふ迄もなく資本金一億二千萬圓の三菱合資である。が、それの組織その他については次項に於て述べるであらう。

尤も、已に言及せし如く、三菱王國の事業は、すべてが三菱合資に由つて統轄せられてゐるわけではなく、三菱合資とは別個に岩崎一族が私的に經營してゐる事業がある。これ等の事業は、それ〲個々の岩崎家に於て之を主宰する。例へば岩崎久彌の直屬關係事業は、岩崎家庭事務所に於て之を統制するが如きである。

二、三菱王國の人的支配網

三井の舊家に比すれば、三菱は謂はゞ明治維新以來の成金だ。それだけに、新進氣鋭の人的内容を有すべき筈であるのに、却つて三井の新進氣鋭なるに對し、三菱は宛かも封建末期の大名然と保守と傳統に生きてゐる所がある。思ふに、此の原因は色々である。しかし乍ら、その最も根幹的な原因は、由來、三菱王國は政府の大官との特別關係に生きる御用商人として大を成

し、しかもいま尙ほその事業の中心が、專ら政府の特別保護の如何に由つて盛衰する軍國的產業に集中してゐるからであらう

例へば、三菱の中心產業は、三菱造船、日本郵船、三菱製鐵三菱鑛業(就中鋼關稅の厚き保護)等、何れも、その事業盛衰の決定權は、政府保護の如何に在るのである。從つて、三菱王國に於ては、その事業繁榮の最大關心事は、政府關係をウマク料理することであつて、市場の競爭裡に勝利を得る手腕は寧ろ從である。尠くとも三菱の高い幹部級になればなる程、後者の資格よりも、前者の資格の方がモノを云ふ。しかも、その他に於ける三菱の一大事業たる地所部は、貸家貸地業で、所謂「差配」人級の人物しか要らない。然るに、三井に於ては、その事業の中心は三井物產だ。なる程物產と雖も、シーメンス事件の如く御用商人的手腕を必要としてゐないわけではないが、しかし、その事業の主要部は一般資本家的活躍だ。尠くともその方が三井に於てはモノを云ふ事情に在る。之れ、歷史から云へば三菱の方が、三井よりも遙かに新進でありながら、三菱の方が、今日著しく保守的であり、官僚的であり、從つて人物も少く、緊張味も薄いと、喧傳せられる所以であらう。之れ、後ちに闡說する如く、三菱の事業の少からぬものが、その成績の不振である人的背景をなすものだ。

而して、三菱の此の早老的事情は亦、日本財界全體としての最も典型的縮圖である。蓋し、日本經濟のこれ迄の發達は三菱と同じく專ら政府保護の翼下に成人したものであり、且つ、いま尙ほ、その前途の發展を專ら政府に依賴せんとしてゐる。從つて、財界に人物乏しく、所謂財界の名士、大實業家の多くは政府關係をウマク料理する手づるを有する者に主として限られてゐる。斯樣にして、之を一般的に云へば、日本の財界は、三菱と同じ原因の下に早老的狀態にある。

讀者は、以上の如き一般的背景をソット頭に入れて置いて三菱の人的支配の陣立を見られたい。さて三菱合資の表面上の首腦は、云ふ迄もなく三菱合資の出資社員たる岩崎一族であるがその出資は、久彌四千萬圓、彥彌太(久彌の長子)五千萬圓、小彌太(先代彌太郎の弟彌之助の子)三千萬圓、合計一億二千萬圓である。しかし、三菱合資の社長の椅子は久彌が退いていま小彌太にゆづられ、將來、再び彥彌太に廻る筈である。かくて現に岩崎一族が名を列してゐる諸會社は左の如くである。

岩崎　久彌　三菱銀行取締役

岩崎小彌太　(三菱合資會社社長)三菱倉庫取締役、三菱製鐵取締役、三菱鑛業取締役、三菱造船取締役、三菱海上火災保險取締役、三菱銀行取締役、旭硝子監査役、三菱商事取締役、三菱信託取締役、橫濱正金銀行取締役。

岩崎　俊彌　旭硝子取締役社長
岩崎　正彌　東京イーシー工業取締役
岩崎　康彌　東京毛布取締役

しかし乍ら、三菱王國を實際に統率する者は、合資の理事會（執行機關たると共に議決機關）であつて、會長は木村、理事には串田、三宅、武田、三谷等の各直轄會社長之に連り、社長小彌太の決裁を得て之を執行するものである。尚ほこゝに一言に値するは、三井一族がすべてを番頭に委せるに反し、岩崎一族に於ては、理事會で色々と發言、決裁すると傳へられることである。いま、これ等の將軍及諸星の陣容を一表に綱めて見れば左の如くである、

三菱合資

社長	岩崎小彌太
總理事	木村久壽彌太
常務理事	靑木菊雄
同	三好重道
理事	永原伸雄
同	奥村政雄

三菱銀行	串田萬藏
	瀬下清
三菱造船	濱田彪
三菱製鐵 三菱航空機	舟越楫四郎
三菱鑛業	三谷一二
三菱倉庫	三橋信三
三菱電機	武田秀雄
三菱商事	三宅川百太郎
三菱信託 三菱海上火災 東京海上火災 日本郵船	各務謙吉

右に由つて、讀者の容易に看取し得る如く、三井がその傍系會社の將軍として、藤原、岩原、磯村等の諸星を有するに反し三菱は各務一人で之を背負つて立つてゐることだ。卽ち、各務は啻に三菱傍系事業の大双璧たる日本郵船と東京海上火災の長たるのみならず、直系の三菱信託、三菱海上火災の長を兼ね、且つ後述の如くその他にも幾つかの「長」を兼ねてゐる。三菱が如何に人物に缺乏してゐるかを思はしめる。

而して、以上の最高幹部は又自ら重役として、他の三菱系事業の多くに君臨してゐる外、その幕下の部將を重役として、更に各種三菱系事業に配置してゐる。いまその重なる配置を左に列擧する。

木村久壽彌太　（三菱合資會社總理事）若松築港取締役、三菱倉庫取締役、三菱海上火災保險監査役、三菱銀行取締役、三菱鑛業取締役、三菱製鐵取締役、三菱電機取締役、三菱商事取締役、三菱造船監査役、日本郵船取締役、東京海上火災保險取締役、三菱航空機取締役、三菱製紙取締役、三菱信託取締役。

靑木　菊雄　（三菱合資會社常務理事）三菱造船監査役、三菱製鐵監査役、三菱倉庫監査役、旭硝子取締役、三菱銀行監査役、三菱海上火災保險監査役、三菱鑛業監査役、三菱商事監査役、三菱電機監査役、汽車製造監査役、菱華倉庫取締役、三菱倉庫監査役、古河電氣工業監査役、三菱信託監査役。

三好　重道　(三菱合資會社常務理事)三菱造船取締役、東京鋼材取締役、朝鮮無煙炭監査役。

永原　重輝　(三菱合資會社理事)三菱航空機監査役、三菱電機監査役、三菱造船監査役。

奥村　政雄　(三菱合資會社理事)三菱海上火災保險取締役、大源鑛業取締役、東洋織布取締役、九州送電取締役、關東水電取締役、北樺太鑛業取締役、東洋窯業工業取締役(代表)。

佐藤梅太郎　(三菱合資會社参與兼總務課長)三菱商事取締役、東洋織布取締役(代表)、東洋窯業工業監査役、關東水電監査役。

串田　萬藏　(三菱銀行取締役會長)三菱造船監査役、百十銀行取締役、三菱鑛業監査役、三菱海上火災保險取締役、三菱製鐵監査取締役、程ケ谷ゴルフ監査役、三菱商事監査役、明治生命保險取締役、三菱倉庫取締役、日本無線電信取締役、東京海上火災保險取締役、三菱信託取締役、三菱銀行常務取締役。

瀬下　清　(三菱銀行常務取締役)、菱華倉庫監査役、三菱海上火災保險取締役、昭和銀行取締役、日佛銀行取締役。

加藤　武男　(三菱銀行常務取締役)三菱倉庫監査役、日本電池取締役、三菱信託監査役。

江口　定條　(三菱銀行取締役)中華滙業銀行監事、明治製糖取締役、東亞興業取締役。

三宅川百太郎　(三菱商事取締役會長)三菱製鐵取締役、三菱航空機取締役、三菱造船監査役、日本生絲取締役社長。

高橋　錬逸　(三菱商事常務取締役)大北漁業取締役、清住製材所監査役日本生絲監査役、菱華倉庫取締役、日本ソリデチット監査役、日清製粉監査役。

山岸慶之助　(三菱商事常務取締役)菱華倉庫取締役、清住製材所取締役日本ソリデチット取締役。

加藤　恭平　(三菱商事常務取締役)三菱電機取締役、清住製材所取締役日本生絲取締役、千代田石油監査役、東洋織布取締役。

永峰　承受　(三菱商事取締役)日本生絲專務取締役。

濱田　彪　(三菱造船取締役會長)三菱航空機取締役。

舟越楫四郎　(三菱製鐵取締役會長)三菱航空機取締役會長、三菱造船取締役、東京鋼材取締役。

武田　秀雄　(三菱電機取締役社長)日本光學工業取締役會長、東京イーシー工業取締役、三菱航空機取締役、三菱製鐵取締役、三菱造船取締役。

三谷　一二　(三菱鑛業取締役會長)美唄鐵道取締役、古河電氣工業取締役、雄別炭礦鐵道取締役社長、山東鑛業取締役。

船田　一雄　(三菱鑛業常務取締役)雄別炭礦鐵道常務取締役、山陽中央水電取締役、美唄鐵道取締役、九州炭礦汽船取締役。中島鑛業取締役。

河手　捨二　(三菱鑛業常務取締役)雄別炭礦鐵道常務取締役、中島鑛業監査役、美唄鐵道監査役。

三橋　信三（三菱倉庫頭取常務取締役）菱華倉庫取締役會長、共同運輸取締役社長。

各務　謙吉（東京海上火災保險取締役會長）三菱信託取締役會長、三菱海上火災保險取締役會長、明治火災保險取締役會長、東明火災海上保險取締役會長、大福海上火災保險取締役、日本郵船取締役社長、東京サルヴエーヂ取締役、東京報知機取締役、近海郵船取締役、日本電氣證券取締役。

田原　豐（三菱製紙取締役會長）日本フエルト取締役。

桐島　像一（東山農事專務取締役）三菱製紙監査役、三菱銀行監査役、明治生命保險取締役、麒麟麥酒取締役、東明火災海上保險監査役、東京イーシー工業取締役、日本窒素肥料取締役、大阪毎日新聞社監査役朝鮮水電取締役、東京海上火災保險取締役、朝鮮窒素肥料取締役、

末延　道成（東京海上火災保險取締役）三信鐵道取締役社長、豐川鐵道取締役社長、東明火災海上保險取締役、明治生命保險取締役、北樺太石油取締役、明治火災保險取締役、北樺太鑛業取締役。

志村源太郎　富士瓦斯紡績取締役、日本窒素肥料取締役、朝鮮水電取締役、帝國冷藏倉庫取締役社長、富士電力取締役會長、朝鮮窒素肥料取締役。

三、三菱王國の資本網

三菱王國の資本源の第一は云ふ迄もなく三菱合資の資本であり第二は合資以外に持つてゐる岩崎一族の資本だ。第一の三菱合資の資本は已述の如く表面上一億二千萬圓だ（三井合名の三億圓に比し十分の四である）。しかし、筆者の調査し得たる三菱合資の投資額（拂込額）のみでも十七會社、一億四千二百六十三萬七千圓に達する。――その計算法は總株數中三菱合資の所有株の割合を出し之を拂込額に乘じたものだ。故に新舊株數の差に由り多少實額とは異る――尤も、その投資會社の内容は紙數の制限上之を玆に詳示し得ざるも、後ちに闡說する如く、三井のそれのやうに優秀なるもの少く、從つて、その實際價値は平均して拂込額の二割以上に之を評價する餘地は極めて限られてゐると見ざるを得ないであらう。が、さうすると右投資額だけで、合資の資本額よりも約五千萬圓多い。

然るに、三菱合資は此の外に、已述の如く土地とビルヂングを持つてゐる。即ち、その大部分を占むる丸ノ内附近、即ち麹町區内のそれは、地所約五萬九千坪、ビルヂング（丸ノ内のみ）四十二棟、同延坪數約五萬九千坪であるところで、丸ノ内の地價は第一銀行へ賣却の分一坪二千圓、帝國生命へ賣却分千八百圓だと傳へられる。だが、空地尚ほ多く、場所の善惡もあり、その賣却乃至利用も何時のことやら分らず、又、貸地の分は地代は時價に比し、遙かに安いから假りに平均一坪千三百圓と見れば右地所だけで七千七百萬圓である。更に、四十二棟のビルヂングであるが、これは歐洲戰中戰後賃銀物價の尚ほ高い時に

建設せしものも少からず、且つ震災の打擊ありしも、又歐洲戰前の物價安き際に建築せしものも少くない。假りに延坪當價格平均三百圓と見ても約千七百萬圓の價値はある。大體二千萬圓は下るまい。

果して然らば、三菱合資は、その投下株式に拂込二割以上の含み大してなく（それ等會社の內容は後述の如く平均して優良と云ひ難く從つてその實價は平均して拂込金以上二割を出ないから）、從つて、その資產上の含みとしては大體に土地とビルディングだけだと云ふことになる。ところで、丸ノ內の土地は明治二十三年政府から百五十萬圓で拂下げたもので、其後、三菱は租稅の關係上、此の記帳價格をできるだけそのままにして居る筈であるから、土地の記帳價格は見積價格の十分の一にも及ばず、それだけ、資產の含みとなつて居るであらうと考へられる。事實、信ずべき筋の話し振りも之を肯定して居る。さうすると、三菱合資の實際資產は、所有株約一億七千萬圓、土地約八千萬圓、ビルディング約二千萬圓、合計二億七千萬圓となる。この外、他になほ土地其の他あり、評價漏れのものもあらうから、これらを合計して約三億圓と見て大過ないのではあるまいか。

この外、三菱王國は、岩崎一族それぐの名に於て資產を管理統轄してゐる。その投資會社名及び拂込金の詳細は紙數の制限上之を記載し得ざるも、その合計は、筆者の調査し得たるもので三十一社、拂込金三千四百五十萬圓（計算法前述の如し）だ。外に東山農事が七百萬圓、尙ほ子安、立川の兩農園がある。又各一族それぐに大なる邸宅その他を持つてゐる。それ等を合計して岩崎一族が三菱合資以外に管理せる資產は約六千萬圓と見て大過あるまい。然らば、之に合資の三億圓を加算すれば三億六千萬圓となる勘定だ。以上は可なり內輪に見てのこと故、三菱王國の純資產は、大體に此の三億六千萬圓から五億圓の間ではあるまいか。

顧るに、前號に於て、筆者は三井王國の純資產を八億乃至十億圓（十億內外かと推算したが斯く訂正する）と推算した。之に比すれば、三菱の資產は大約五割程度、即ち三井の半分しかないと云ふことになる。之れは世人の多くが、大雜把に三井三菱とを同格に見てゐる常識とは少からず違ふ。しかし、事實に於て、寄附ごとその他に際し、三井と同格に取扱はれることは、三菱の常に苦痛とするところなること消息通の明かに認めてゐるところである。

以上は專ら、三菱王國の純資產について見たのである。だが、三菱王國の資本源には此の外に、銀行、保險等の金融資本があ

る。その資金は、別掲第二表の如く、總計十億八千五百萬圓である。尤も、第二表中、銀行及信託を除けば、その運用には傍系會社故に多少遠慮せねばならず、又、保險會社の準備金が銀行信託の預金となつてダブッテゐること等をも考慮せねばならぬ。が大體に十億近くの金融資本が三菱王國の支配下にあることだけは明かだ。而して、この中、三菱合資及岩崎一家の出資は僅かに三千四百十四萬圓にして全體の三%一四に過ぎない。即ち三菱王國はその出資額約三千四百萬圓を以て、その約三十一倍の資金を支配してゐるわけだ。

（二）三菱支配の金融資本高表（昭和三年末現在但し三菱銀行のみ四年六月末）

	株主勘定（千圓）	預金又は責任準備金（千圓）	（A）合計（千圓）	三菱合資持株（千圓）	岩崎一家持株（千圓）	（B）以上計（千圓）	（B）の（A）に對する%	（C）三菱系持株（千圓）	（C）の（A）に對する%
三菱銀行	一三三、〇〇〇	五八一、〇三三	七一四、〇三三	二八、六八一	一、八五〇	三〇、五三一	四・二八	四〇、六三三	五・六九
三菱信託	八、四〇〇	二一、八九八	三〇、二九八	一、二五〇	三七五	一、六二五	五・三六	三、二七七	一〇・八二
三菱海上火災	二、四三〇	七、〇〇〇	九、四三〇	*一、二五〇	—	一、二五〇	一三・二六	一、二五〇	一三・二六
明治生命保險	二、五〇〇	九四、六五七	九七、一五七	—	七三五	七三五	・七六	八四一	・八七
東京海上火災	三七、五〇〇	五三、〇〇〇	九〇、五〇〇	—	—	—	—	八、五六五	九・四六
明治火災	三、三五〇	一三、一〇〇	一六、四五〇	—	—	—	—	三、二〇六	一九・四九
東明火災海上	一、三三八	五〇〇	一、八三八	—	—	—	—	—	—
以上小計	一八八、四一八	八七一、二五七	一、〇五九、七二五	三一、一八一	二、九六〇	三四、一四一	三・二二	五七、七七二	五・四五
東洋海上火災	七五〇	一、九五〇	二、七五〇	—	—	—	—	二〇六	七・四九
豐國火災保險	一、二五六	二、六二九	三、八八五	—	—	—	—	二四八	六・三八
大福海上火災	四八〇	一、二五〇	一、七三〇	—	—	—	—	八〇八	四六・七一
福壽火災保險	五〇〇	一、四七〇	一、九七〇	—	—	—	—	一五六	七・九二
日本火災保險	四、五〇〇	一〇、五〇〇	一五、〇〇〇	—	—	—	—	三、九四六	二六・三一
以上小計	七、四八六	一七、七九九	二五、二八五	—	—	—	—	五、三六四	二一・二一
總計	一九五、九〇四	八八九、〇五六	一、〇八五、〇一〇	三一、一八一	二、九六〇	三四、一四一	三・一四	六三、一三六	五・八二

（備考）＊印は不明につき全部合資と見做す。

而して、右の金融資金は、或は三菱合資に直接融通せられ、或は右銀行、保險會社等が自ら三菱系諸會社に投資し（因に三井王國は此の形式を殆んどとつてゐない）。或は三菱王國の直系傍系會社に融通せられて、專ら、三菱系諸會社の戰闘實力となるものであるが、云ふ迄もなく、その或る部分は公債その他に利用せられる。以上金融資本に、三菱王國の資產約三億乃至四億圓を加へたものが即ち、三菱王國の中心的産業資本である。

扨て、三菱王國は、これ等の資本力を以て、如何なる事業を幾何支配してゐるか。いま、その關係の親疎に由つて、例の如く、之を直系、傍系、關係會社に三大別し、更にそれ等の子會

(三) 合資及岩崎家直接會社支配表（昭和三年末現在）

會社名	公稱資本（千円）	拂込資本（千円）	三菱合資所有(A)（千円）	同上割合（%）	岩崎一家所有(B)（千円）	同上割合（%）	AB合計（千円）	同上割合（%）	三菱系所有（千円）	同上割合（%）
三菱造船	五〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	二九、五二〇	九八・四〇	九〇	〇・三〇	二九、六一〇	九八・七〇	二九、八〇五	九九・三五
三菱製鐵	二五、〇〇〇	二五、〇〇〇	二一、九七五	八七・九〇	七五	〇・三〇	二二、〇五〇	八八・二〇	二四、八四〇	九九・三六
三菱鑛業	一〇〇、〇〇〇	六二、五〇〇	三六、四八一	五八・三七	一二五	〇・二〇	三六、六〇六	五八・五七	四〇、一六六	六四・二七
三菱商事	一五、〇〇〇	一五、〇〇〇	一四、二七六	九五・一七	一五〇	一・〇〇	一四、四二六	九六・一七	一四、六七九	九七・八六
三菱海上火災	五、〇〇〇	一、二五〇	#一、二五〇	#一〇〇・〇〇	—	—	#一、二五〇	#一〇〇・〇〇	#一、二五〇	#一〇〇・〇〇
三菱銀行	一〇〇、〇〇〇	六二、五〇〇	二八、六八一	四五・八九	一、八五〇	二・九六	三〇、五三一	四八・八五	四〇、一六五	六四・二四
三菱信託	三〇、〇〇〇	七、五〇〇	一、二五〇	一六・六七	三七五	五・〇〇	一、六二五	二一・六七	三、七七七	五〇・三六
＊三菱製紙	一〇、〇〇〇	八、〇〇〇	—	—	#八、〇〇〇	#一〇〇・〇〇	#八、〇〇〇	#一〇〇・〇〇	#八、〇〇〇	#一〇〇・〇〇
＊旭硝子	一三、五〇〇	六、八七五	—	—	#五、三九四	#七八・四六	#五、三九四	#七八・四六	#五、三九四	#七八・四六
＊東山農事	一〇、〇〇〇	七、〇〇〇	—	—	#七、〇〇〇	#一〇〇・〇〇	#七、〇〇〇	#一〇〇・〇〇	#七、〇〇〇	#一〇〇・〇〇
小計	三五七、五〇〇	二三五、六二五	—	—	—	—	一五六、四六二	六六・三六	一七五、一一〇	七四・三二
＊子安農園	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
＊立川農園	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	三五七、五〇〇	二三五、六二五	—	—	—	—	一五六、四六二	六六・三六	一七五、一一〇	七四・三二

（備考）＊印は岩崎一家關係の分。#印は不明につき全部、合資、又は岩崎家の所有と見做して算出す。三菱系とは、三菱合資、岩崎一族、直系及傍系會社、並に木村、青木、串田、各務、瀨下の所有株式の合計である。尚ほ、所有拂込資本金の算出については、本項冒頭の本文參照。以下諸表亦同じ。

社を支配的、準支配的、關係會社に細別し、且つ叙述の簡潔上以下之を一表に纒めて見るであらう。

所謂三菱王國の直系會社には別掲第三表の十二會社を數へるが、その中、星印の分は岩崎一家の私的企業である。これ等十二の直系會社は、鑛業、銀行、信託の三社が外部の資本を介入

(四) 三菱直系子會社支配的子會社表

會社名	公稱資本	拂込資本	三菱系所有	同上割合
	千圓	千圓	千圓	%
三菱電機	一五、〇〇〇	一〇、五〇〇	九、二七五	八八・三三
三菱航空機	五、〇〇〇	五、〇〇〇	四、七〇〇	九四・〇〇
三菱倉庫	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	九、七四〇	九七・四〇
日本光學工業	二、四〇〇	二、四〇〇	一、〇六五	四五・二〇
九州炭鑛汽船	五、〇〇〇	四、二五〇	二、五七〇	五八・一二
雄別炭鑛鐵道	五、〇〇〇	五、〇〇〇	四、八九五	九七・九〇
日本生絲	五、〇〇〇	五、〇〇〇	四、七五〇	九五・〇〇
東京海上火災保險	三〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	八、五六五	二八・五五
以上小計	七七、四〇〇	七二、一五〇	四五、四六〇	六三・〇〇
東京鋼材	四〇〇	四〇〇	—	—
中島鑛業	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	—	—
菱華倉庫	一、〇〇〇	九〇〇	—	—
共同運輸	六〇〇	六〇〇	—	—
清住製材	四〇〇	四〇〇	—	—
合計	八九、八〇〇	八四、四五〇	△五三、二六三	△六三・〇七

(備考) △印は、三菱系所有分明のもの丶率を以て不明の分までも合計推算したものである。以下諸表同じ。

せる外他は全部大體に三菱系の投資である。しかし、各會社それぐ\に於ける資本關係、及び資本の高は之を表示にゆづり、いまその總計について見るに、その拂込資本二億二千五百六十餘萬圓、此の中三菱自身の所有分一億五千六百餘萬圓にして、全體の六九%三六に相當し、三菱系所有分(第三表の註參照)一億七千五百餘萬圓、七七%六一である。

以上直系會社は又、前掲系統圖の如く少からぬ子會社を持つてゐる。うち、三菱が支配的勢力を有するものは別掲第四表の諸會社である。

第四表のうち、最初の三菱電機、同航空機、同倉庫は統制的には三菱合資の直轄たること已述の如くであるが、資本的には系統圖の如く、三菱造船及び三菱銀行の一個の子會社に過ぎない。これ等諸會社の拂込資本八千四百四十餘萬圓、うち三菱系所有は六三%七である。更に別掲第五表は直系會社の準支配的子會社であるが、その合計拂込資本四千三十餘萬圓の中、三菱系はその平均一二%五二を所有してゐるに過ぎない。

以上の外、直系會社の關係せる諸會社にして、三菱勢力の未だ支配的ならざるものが前掲系統圖の如く十二會社ある。その拂込資本總計二億一千三百八十萬圓にして、三菱系所有は平均その三%七である。又、傍系會社にも同上のものが十一社、拂込

（五）三菱直系準支配的子會社表

會社名	資本金	拂込資本	三菱系株式 高	同上割合
日本電池	三、五〇〇	一、七五〇	五五〇	三一・四三
日魯漁業	二七、〇〇〇	一六、九九三	一、七九八	一〇・五八
小計	三〇、五〇〇	一八、七四三	二、三四八	一二・五三
朝鮮無煙炭	一〇、〇〇〇	八、〇〇〇	—	—
日本ソリデチット	六〇〇	六〇〇	—	—
千代田石油	五〇〇	五〇〇	—	—
*昌光硝子	三、〇〇〇	三、〇〇〇	—	—
*日米板硝子	四、〇〇〇	三、五〇〇	—	—
總計	四八、六〇〇	四〇、三四三	△五、〇五一	△一二・五三

（千圓、%）

(備考) *印は岩崎一家關係の分

資本合計二億三千百三十二萬圓、うち三菱系所有平均一%七を算する。が、以上何れも紙數の制限上、その內容を省略する。

轉じて傍系會社を見るに、別掲第六表の如く、その三菱系資本の厚薄は色々であるが、或は資本關係、或は重役關係、或は金融關係或は販賣關係等を通じて、大體に、これ等は三菱の傍系會社と見做されるものだ。その會社數十二社、拂込資本合計二億千百萬圓、うち合資及岩崎一族所有の分合計で全體の僅か四%二七、三菱系所有の分合計で全體の一〇%七三である。

（六）三菱合資及岩崎家傍系會社支配表

會社名	拂込資本	三菱合資及岩崎一族所有	同上割合	三菱系所有	同上割合
日本郵船	六四、二五〇	三、九七一	六・一八	七、三三七	一一・四二
明治製糖	三四、八〇〇	七六六	二・二〇	九五四	二・七四
若松築港	二、二五〇	四三二	一九・一九	四三二	一九・一九
東京海上火災	三〇、〇〇〇	—	—	八、五六六	二八・五五
*日本窒素肥料	二七、七五〇	九二四	三・三三	一、八五〇	六・六七
*明治生命保險	二、〇〇〇	七三五	三六・七五	八四一	四二・〇五
*富士瓦斯紡績	三四、〇〇〇	四八六	一・四三	四八六	一・四三
*麒麟麥酒	八、三〇〇	一、三六〇	一六・三八	一、三六〇	一六・三八
小計	二〇三、三五〇	八、六七四	四・二七	二一、八二六	一〇・七三
滿蒙殖產	一、〇〇〇	—	—	—	—
東京イーシー工業	五〇〇	—	—	—	—
朝鮮水電	五、〇〇〇	—	—	—	—
東洋織布	一、二〇〇	—	—	—	—
合計	二一一、〇五〇	△九、〇一二	△四・二七	△二一、八二六	△一〇・三三

（千圓、%）

(備考) *印は岩崎一家關係の分次表亦同じ

こゝで注目に値することは、三菱系傍系會社の最優位を占める東京海上火災(各務氏主宰)は、資本的には三井銀行の子會社であつて、三菱合資も、岩崎一族も直接には之は投資してゐないことである。こゝに、銀行の資本を以て、三菱王國が、東京海上火災、及びその子會社の厖大なる一連の產業を資本的に支

配してゐる典型を見るのである。尚は第六表中星印の分は岩崎一族の投資に基く傍系會社であつて、合資とは關係のないものである。

（七）傍系會社の支配的子會社

	資本金	拂込資本	三菱系所有 三菱系高	三菱系所有 同上割合
	千圓	千圓	千圓	%
近海郵船	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇	九,九六〇	九九・六〇
横濱船渠	五,〇〇〇	五,〇〇〇	一,六九六	三三・九二
朝鮮郵船	三,〇〇〇	三,〇〇〇	六三〇	二一・〇〇
明治製薬	五,〇〇〇	三,四〇〇	二,九六三	八七・一六
スマトラ興業	四,〇〇〇	二,四〇〇	一,四一〇	五八・七七
河西鐵道	一,五〇〇	七五〇	七二五	九六・六七
豐川鐵道	四,八〇〇	一,九五〇	三八五	一九・七四
明治火災	一〇,〇〇〇	三,二五〇	三,二〇六	九八・六六
*富士電力	二五,〇〇〇	六,二五〇	二,三六一	三六・七七
小計	六八,五〇〇	三六,〇〇〇	二三,三三六	六四・八四
明治商店	三,〇〇〇	一,五〇〇	—	—
東明火災海上保險	二,〇〇〇	二,〇〇〇	—	—
朝鮮窒素肥料	一〇,〇〇〇	二,五〇〇	—	—
合計	八三,五〇〇	四一,〇〇〇	▲二六,四六一	▲六四・五四

傍系會社の支配的及準支配的子會社は別掲第七及第八表に示す通りである。支配的子會社の拂込資本合計は四千百萬圓、うち三菱系會社所有高は平均全體の六四%五四だ。又準支配會社のそれは二千四十七萬圓、五三%九七だ。傍系會社の子會社の

（八）傍系會社の準支配的子會社

	資本金	拂込資本	三菱系所有 三菱系高	三菱系所有 同上割合
	千圓	千圓	千圓	%
日清汽船	一六,二〇〇	一〇,一二五	四,四八八	四四・三三
東洋海上火災	三,〇〇〇	七五〇	二〇八	二七・五〇
豐國火災保險	三,〇〇〇	七五〇	二四八	三三・〇〇
大福海上火災	五,〇〇〇	二,〇〇〇	八〇八	四〇・四〇
東京サルヴェージ	一,八〇〇	一,三五〇	六五八	四八・七七
福壽火災保險	二,〇〇〇	五〇〇	一五六	三一・二五
日本火災保險	一〇,〇〇〇	四,〇〇〇	三,九四六	九八・六六
小計	四一,〇〇〇	一九,四七九	一〇,五一〇	五三・九七
十勝開墾	一,〇〇〇	一,〇〇〇	—	—
合計	四二,〇〇〇	二〇,四七九	▲一一,〇九〇	▲五三・九七

支配は著しく決定的なることを窺ひ得る。

以上の外、三菱合資及び岩崎一族が、直接投資して、或は大株主となり、或は重役を出してゐるが、しかし、三菱に支配的勢力を有してゐない所謂關係會社がある。その關係は前掲系統圖に示せる通りにて、合資關係十八社、岩崎一族關係九社、合計二十七社を數へる。而して、その拂込資本合計は九億九千四十六萬圓を算するが、うち、三菱王國所有高の分明のもの十六社に於ける三菱所有高は全體の平均三%五四である。いま之を以て全體を推算せば、三菱の所有拂込株金は二千二百二十一萬五千圓となる。これ等の詳はしき數字及び會社名は、しかし、紙

數の制限上省略する。但し、會社名は前掲系統圖を見れば分る。

四、三菱王國の資本的支配力

いま、以上第三項に詳述せし三菱王國支配の諸會社を綜合すれば、別掲第一表の如くにて、その拂込資本は、支配會社五億六千二百餘萬圓、準支配會社約四千四百萬圓、以上合計六億五百九十五萬圓にして、その公稱資本金は九億千六百五萬圓の巨額を算する。顧るに、前號已述の三井王國のそれは東京電燈を除き、公稱資本十二億六千二百萬圓、拂込資本八億七千七百餘萬圓であつた。されば、之を表面の拂込資本金より見れば、三菱王國の支配會社は、三井王國のそれの約六割九分だと云ふことになる。

だが、三菱王國の支配會社の實質は、三井王國のそれに比し後述の如く著しく劣つてゐる。即ち、大雜把に見て、三井のそれは拂込資本の平均約二倍と見做し得るに對し、三菱のそれは平均約二割と見込み得るに過ぎぬ。果して然らば、三菱王國の支配會社の實質資本は七億二千六百萬圓を算することになるが、しかし、三井王國のそれが十七億五千四百七十萬圓を算するに比せば、三菱の支配會社資本は三井の大體に四割だと云ふことになる。顧るに、本文の第三項に於て三菱の資産は大約四億乃至五億圓にて、三井の八億乃至十億圓なるに對し大約五割だと云ふことが推算せられた。いま、その支配會社の實質資本高に於ては、これに近い四割だと推算せられるのである。

(一) 三菱系支配の諸會社資本表

	(A) 三菱系の支配下になるもの 公稱資本	(A) 拂込資本	(B) 同上準支配下のもの 公稱資本	(B) 拂込資本	以上合計 公稱資本	以上合計 拂込資本
	千圓	千圓	千圓	千圓	千圓	千圓
直系十社	三五七、五〇〇	二二五、六一五	—	—	三五七、五〇〇	二二五、六一五
傍系十二社	三一四、六五〇	二一一、〇五〇	—	—	三一四、六五〇	二一一、〇五〇
直系子會社	八九、八〇〇	八四、四五〇	二八、六〇〇	二三、三五〇	一一八、四〇〇	一〇七、八〇〇
傍系子會社	八三、五〇〇	四一、〇〇〇	四二、〇〇〇	二〇、四七五	一二五、五〇〇	六一、四七五
合計	八四五、四五〇	五六二、一一五	七〇、六〇〇	四三、八二五	九一六、〇五〇	六〇五、九四〇

(備考) 直系會社中岩崎一家の子安農園及立川農園二社は資本金不詳につき之を除く、以下諸表同じ。

斯く、その支配會社の實質資本高に於ては、三菱は三井の約四割に過ぎぬ。しかし、この外に、三菱は三井よりも遙かに多くの關係會社を持つてゐる。例へば別掲第二表の(ロ)及び(ハ)の如く、その拂込資本合計は約十三億二千萬圓の巨額に達する。而して之に支配會社の分を加ふれば、三菱王國の支配又は關係してゐる會社の拂込資本合計は實に十九億二千五百六十餘萬圓を算するのである。詳はしくは第二表を參照されたい。

扨て、問題は、以上三菱系諸會社の資本中、三菱王國それ自ちの投資額はその幾何に達してゐるかである。別掲第三表は此れに答へるために作成せられたものである。

(二) 三菱系支配及關係諸會社資本高表

	公稱資本	拂込資本	同上實價
	千圓	千圓	千圓
(イ)三菱系支配諸會社	九一六、〇五〇	六〇五、九四〇	*七二五、九四〇
(ロ)三菱系關係諸會社	一、〇三七、八五〇	八〇四、五八九	八〇四、五八九
(ハ)直系及傍系關係會社	六四三、〇〇七	五一五、一三六	五一五、一三六
(ニ)合計	二、五九六、九〇七	一、九二五、六六五	二、〇四五、六六五
(ホ)三菱合資資本金	一二〇、〇〇〇	一二〇、〇〇〇	一二〇、〇〇〇
(ヘ)總計	二、七一六、九〇七	二、〇四五、六六五	二、一六五、六六五

(備考) *實價とは(イ)の拂込資本の大約二割増と見て一億二千萬圓を拂込資本金に加へたものである。

(三) 三菱系會社資本と三菱合資及岩崎家の投下資本

諸會社の位地	公稱資本	拂込資本	三菱系所有	同上割合	三菱合資及岩崎家所有	同上割合
	千圓	千圓	千圓	%	千圓	%
三菱合資	一二〇、〇〇〇	一二〇、〇〇〇	一二〇、〇〇〇	一〇〇・〇〇	一二〇、〇〇〇	一〇〇・〇〇
直系十社	三五七、五〇〇	二二五、六二五	一七五、一二〇	七七・六二	一五六、四九二	六九・三六
傍系十二社	三一四、六五〇	二一一、〇五〇	二一、八二六	一〇・七三	九、〇一二	四・二七
支配的直系子會社	八九、八〇〇	八四、四五〇	五三、二六三	六三・〇七	―	―
支配的傍系子會社	八三、五〇〇	四一、〇〇〇	二六、四六一	六四・五四	―	―
以上小計	八四五、四五〇	五六二、一二五	二七六、六六〇	四九・二二	一六五、五〇四	二九・四四
準支配的直系子會社	四五、六〇〇	四〇、三一三	五、〇五一	一二・五三	―	―
準支配的傍系子會社	四二、〇〇〇	二〇、四七五	一一、〇五〇	五三・九七	―	―
以上合計	九三三、〇五〇	六二二、九一三	二九二、七六一	四七・〇〇	一六五、五〇四	二六・五七
合資及岩崎家關係會社	一、〇三七、八五〇	八七四、五八九	二二、二二五	二・五四	二二、二二五	二・五四

第三表に由ると、三菱系所有の資本高は、直系會社に於ては平均七七%六一、傍系會社に於ては平均一〇%七三である。傍系會社に於ける三井のそれが二六%三三なりしに比し、三菱の傍系會社支配の深度が三井のそれに及ばないことを看取し得るだが、子會社に對する直系又は傍系會社の資本所有の割合は、三井に比し遙かに大であること表示の如くである。かくて、三菱系支配會社全體の拂込資本總額約六億二千三百萬圓中、三菱系所有のものは平均してその四七%〇〇である。だが、之を三菱王國自らの所有分、即ち三菱合資竝に岩崎一族所有の分について見れば、その割合は二六%五七に過ぎない。即ち、三菱王國はその投下資本の四倍近くに相當する會社資本を支配してゐるわけだ。

以上に於ては、しかし三菱王國が、それ自らの資本を以て、幾何の會社資本を支配してゐるかの内容を知ることが出來ぬ。何となれば、所謂三菱系所有資本は、その全部が三菱王國それ自身の投資でなくて、三菱王國がその幾割を占むるに過ぎない直系又は傍系會社の投資を多分に含んでゐるからだ。こゝに於て右の關係を更らに詳示すべく作成したものが別掲の第四表だ

之に由ると、直系會社に於ては、三菱王國はその投下資本の約二倍二割四分に相當する資本を支配してゐるに過ぎぬが、しかし傍系會社に於ては三十倍二割四分に相當する資本を色々の程度に於て支配してゐる。傍系會社に於ける財閥の資本支配力が如何に累積的に膨大するかに驚かざるを得ぬ。かくて、直系及傍系を合計すると、三菱王國は、それ自身の投下資本の三倍七割六分の會社資本を色々の程度に於て支配してゐることになる。尚ほ三菱系所有資本と以上の諸關係、その他詳はしき諸關係については、紙數の制限上第四表の數字にその說述をゆづる

(四) 三菱の支配會社資本と三菱の投下資本との割合

	直系會社	傍系會社	合計
	千圓	千圓	千圓
(イ)親會社拂込資本	三五、六三五	三一、〇五〇	四三六、六五五
(ロ)支配的子會社同上	八四、四五〇	四一、〇〇〇	一二五、四五〇
(ハ)以上小計	一二〇、〇八五	一五三、〇五〇	五六三、一二五
(ニ)準支配的子會社同上	四〇、三四三	一〇、四七五	六〇、八一八
(ホ)總計	一六〇、四二八	一七〇、五五五	六二三、九四三
(ヘ)現會社に於ける三菱系所有高	一七五、一二〇	一二、八六六	二九六、九六六
(ト)同上三菱合資及岩崎家所有	五六、四九七	九、〇三三	一六五、七〇四
(ヘ)に對する(ハ)の%	一七九%〇七	一、一五四%八三	一八九%四二
(ト)に對する(ハ)の%	一九八%一四	一、七九六%八六	二二九%六四
(ヘ)に對する(ホ)の%	一〇〇%一一	一、一四八%八六	三三六%一一
(ト)に對する(ホ)の%	一二三%九	三、〇四〇%〇〇	三七六%三九
(イ)に對する(ホ)の%	一五五%三三	一一九%一三	一四一%九六

轉じて、三菱王國の支配する會社資本が、日本全國のそれの幾パーセントを占めるかを見る。別掲第五表は、各種の方面から此の問ひに答へるべく作成したものだ。

(五) 三菱支配の資本と全國會社資本との割合

拂込資本及び出資資本計	三菱關係會社資本(百万円)	全國會社資本總計に對する%	全國商工鑛運輸業計に對する%	全國商工鑛業に對する%
(イ)三菱關係諸會社	二、〇四五	一六・一九	一六・四五	一八・〇三
(ロ)同上實際價値*	二、一六七	一七・五五	一七・四三	一九・四三
(ハ)三菱合資及同支配會社	六八二	五・四二	五・四八	六・一一
(ニ)同上實際價値*	八〇二	六・三五	六・四五	七・一九
(ホ)三菱支配及準支配會社	七一六	五・七五	五・八四	六・五三
(ヘ)同上實際價値*	八四八	六・七〇	六・八〇	七・五八
(ト)(ホ)より運輸事業控除	六三九	五・〇六	五・一四	五・七三
(チ)(ヘ)より運輸事業控除	七五九	六・〇一	六・一〇	六・八〇

(備考) 三菱關係のものは多く昭和三年末、全國會社資本は昭和二年末現在。而して、本表中の全國會社資本總計は百二十六億三千四百萬圓。同じく鑛工商運輸業計は百二十四億三千五百萬圓。同じく鑛工商業計百十一億六千萬圓である。*、印は三菱合資の資本一億二千萬圓を二倍したるもの。

之に由ると、三菱關係の一切の會社資本が、全國のそれに對する割合は一六%一九である。しかし、三菱王國の支配下にあるそれに限つて見れば五%七五、同上實際價値のそれは六%七〇(三井は一三%)に過ぎぬ。尚ほ詳はしくは第五表について見られたい。だが、三菱も亦三井と同じく、電力、瓦斯、鐵道會社等の公共事業に投資してゐない。そこで、いま、全國會社資本から農業、水産業、運輸業を除き、且つ、工業中より瓦斯電氣水道等を差引いた全國會社資本と、三菱系事業中より電氣と運輸業とを差引いた會社資本とを比較するに、別掲第六表末尾の如く、その割合七%二八、同上實際價値に於て八%六六である。尚ほ他の側面よりの割合については紙數の制限上之を表示の數字について參照されたい。

(六) 三菱關係事業方面に於ける三菱支配の會社資本と全國會社資本との割合

拂込資本及出資額計	(A)三菱關係諸會社(百万円)	(B)全國商工鑛業計ヨリ瓦斯電氣水道等控除(百万円)	(B)に對する(A)の%
(イ)三菱合名岩崎一家及同支配會社	六八二	八、六八五	七・八五
(ロ)同上實際價値*	八〇二	八、六八五	九・二三
(ハ)三菱系支配及準支配會社	七一六	八、六八五	八・二六
(ニ)同上實際價値*	八四八	八、六八五	九・七四
(ホ)(ハ)より電氣及運輸業控除	六三二	八、六八五	七・二八
(ヘ)同上實際價値*	七五二	八、六八五	八・六六

五、三菱系事業の位地

已に槪說した通り、三菱系事業の中軸は、厚き政府保護の下に始めて存立し得る(しかもその厚き保護にも拘らず、今日尚ほ收益能力に乏しいが)ものである。例へば、直系會社のみでも造船、製鐵、航空機、鑛業(三井鑛業が石炭中心なるに反し

三菱鑛業は鋼が多い）等何れもそれで、以上の拂込資本合計は一億二千二百五十萬圓に上り、直系會社資本合計二億二千五百六十萬圓の過半を占める。而して、之に傍系の優たる日本郵船を加へ、その子會社の近海郵船、横濱船渠、朝鮮郵船、日清汽船を加へ、更に商事の子會社日魯漁業を加算せんか、その總拂込資本は實に二億三千百七十萬圓の巨額に達する。これだけが主として軍事的立場からの政府の特別保護ありて始めて存立し得る事業だ。實に、三菱王國は、その發達がさうであつた如くいまも尚ほ、政府の軍事的特別保護ある事業を中心としてゐるわけだ。

しかし乍ら、シベリヤ出征の失敗を劃期とする我國の軍閥熱の行詰、歐洲戰後を劃期とする世界の軍縮熱の兩方面から、これ等の軍事産業は何れも、多大の打撃を蒙つた。例へば、三菱製鐵は連年損失を續け、大正十三年拂込資本金三千萬圓を二千五百萬圓に減資したが、いま尚ほ百圓の利益をも擧ぐるに至らず、金解禁後は又々少からぬ損失を表面に出す外ないであらう。又、三菱造船は、海軍縮少の飛沫と海運界衰微の打撃のためにいま漸く八分の配當を行つてゐるに過ぎぬが、之れも、金解禁後は更に難局に面するだらう。

三菱鑛業亦、その所有鑛山何れも古くして稼業に困難なるもの多く、ために、少しの鑛産品價の下落が、事業利益に致命的打撃を與ふる事情にあるかの如く觀察せられる。例へば、大正十年上期には一割三分八厘の利益を擧げながら、その下期には僅々四分一厘に急減して爾後十三年迄三四分台に陷り、最近銅價の回復等にて再び一割台に復せしが如きである。だが、金解禁は、更に打撃を及すであらう。三菱の鑛山が古くて稼業に困難だと云ふことを語るエピソードとしては、斯界に左の如き話しが語られてゐる。こゝに鑛山の賣物が出る。三井鑛山はコンナものは駄目だと斷るが三菱鑛山は之を買ふ。何故と云ふに、三井も三菱も自社の鑛山を基準にして他を評價するが、三井は自社の鑛山が良いので、コンナものは稼業に難しとする時、三菱は自山が已に古くて稼業に困難故、三井が捨たものでも尚ほ自社の鑛山に比すれば採算がつくので買ふ」と。眞僞はもとより保證の限りでないが、筆者が色々の方面より聞合せた所は、大同小異、右のエピソードに盛られた内容を肯定してゐる。しかし、三菱は、この鑛業株を戰時景氣のよい時、プレミヤム付で募集して社員に買はした關係上、三菱自身は、その配當を離退して、其他の株主に辛ふじて八分の株主配當を保證せざるを得ざるに至つた。此の期間は實に大正十年下期より十四年上期まで、及び昭和元年上期を算してゐる。

斯く、三菱王國直系事業の中心たる造船、製鐵、鑛業は何れも振はない。にも拘らず、その決算の仕方を見ると、銀行を除

けば、何れも、減價償却が十分でなく、無理な株主配當をしてゐる跡が歴然としてゐる。例へば別掲第一表を見られたい。

（一） 三菱三井比較決算表（昭和三年下期）

	三菱系 利益率	三菱系 株主配當	三菱系 利益保留率	三井系 利益率	三井系 株主配當	三井系 利益保留率
造船	一三・四%	八・〇%	一五・三%	—%	—%	—%
鑛業	一一・二	九・〇	六・一	一〇・六	八・〇	一六・三
製紙	一三・八	一〇・〇	〇・二	一三・七	一五・〇	三〇・二
銀行	五九・三	一〇・〇	七・五	一八・一	一〇・〇	三・四

（備考） 本表の數字はダイヤモンド社の銀行會社年鑑に由る。

即ち、鑛業會社に於ては、三井は一割六分餘の利益保留率を示すに對し、三菱は僅かに六%一だ。しかも、鑛山の良否から云つても、又、ここには紙數の制限上省略するが、その積立金から云つても、その決算の含み(餘裕を見て評價する)から云つても、連年三井の方が遙かに三菱に優り、従つて減價償却の必要は三菱の方がヨリ緊切であつて尚ほ此の始末である。更に製紙會社を見るも、三菱は僅かに〇%二の利益保留しかしなくて尚ほ一割の配當をやつてゐるとき、三井系の王子は三〇%二の利益保留をやつて一割五分を配當してゐるに過ぎぬ。造船のそれも、三井系の他種事業に比し遜色あることを窺ひ得るであらう。

かゝる中に於て、三菱系事業中異彩を放つてゐるものは、直系の三菱銀行と傍系の東京海上火災だ。この二つは、三菱王國事業中の花形である。だが、資本系統に於ては東京海上は外部資本の少からず混入してゐる三菱銀行の子會社であつて、三菱合資も岩崎一族も關係してゐるわけでない。かくて、三菱銀行は三菱系事業中のピカ一である。實に、いま、三菱の威信を背負つて立つてゐるものは三菱銀行だけだと云つても大した誇張でもないであらう。さり乍ら、顧みて、三井王國の花形が「物産」であり、製紙であり、銀行であり信託であるに比すれば、三菱のそれが單に銀行と保險の二金融業に止り、現實の事業界にそれを一つも有せざることは三菱王國のため少からず淋しい。

いかにも、三菱にも、三井の物産に相當する三菱商事がある。しかし、何しろ大正七年の創設で、未だスタッフが揃はぬ。明治初年から鍛えて、スタッフを養成して來た三井物産とは未だ〳〵到底太刀打ちが出來ぬ。現にその賣上高も三井物産の十五億圓に對し約四分の一の四億圓だと云ふ。勢ひ、アセルところがあると見えて、屢〻大失敗をやる。最近に於ては、販賣權欲しさに大正製糖と日魯漁業に投資して、それ〴〵二百萬圓ばかり、合計四百萬圓の大損をしてゐる。就中、大正製糖の失敗は大倉が最近洋モスで失敗したと好一對の大へマであつて、三菱

商事の能力に對する信用を傷けること大だつた。現に、その責任を負つて、商事の重役の一人は引退してゐる。が、問題は一人や二人の責任者の引退ではない。それ等の大失敗を通じて、御大名的な三菱王國が、今後どれだけ醒めるかだ。顧るに、三井が今日の大をなした根本原因は、明治初年と二十年代の初め一大危機に陷つて、人材を擧け、弊風を一掃したからだ。幸か、不幸か、三菱には未ださうした大整理が一度も行はれてゐない。最近の大失敗や直系事業の多くの不振が、いま、その一大改革の刺戟となり得るならその犠牲は安いものだ。

以上の外、三菱王國の中心事業の一つとしては、丸ノ內一帶の貸地とビルヂング經營がある。已述の如く、地所のみで九千萬圓近く、ビルヂング四十二棟、その中の丸ビルだけで震災の修繕費を入れると總工費千七百三十萬圓を算する。しかし、ビルヂング經營はその收益力が極めて低い。何しろ、戰中戰後の高物價時代に建築したものが多く、從つて最近新築の安上りのビルと競爭が困難な上に、ビルヂングの供給過剩で愈々收益力は減る一方だ。しかし、ビルヂングが更に新築されねば、丸ノ內に尙ほ廣く殘つてゐる空地から收入が這入らぬ。こゝで、三菱の地所部はヂレンマに陷つてゐる。その上に、來年一月からは東京驛に裏口が出來る。さうなると槇町方面にもビルヂングが出來て、競爭地帶は大に擴大せられ、丸ノ內の地價も下落的影響を蒙らう。地租も改正せられて賃借價格で課稅せられる。その上將來、無產政黨の進出と共に、益々土地課稅は累增するであらう。それは、必然に又、地價を下落せしめる。かれこれ考へると、丸ノ內の地主業家主業もその收益力から云ひ、將來の傾向から云へば、いま、地價幾何、ビルヂング建設費幾何と評價せられてゐるよりも遙かに割引いて考へねばならない。卽ち、三菱の一大資產を形成する丸ノ內一帶の地所及びビルヂング業も亦、儲かる事業ではないわけだ。

以上、筆者は三菱系事業の多くが、不振の點を餘りに多く列擧して來た。世人が三菱の資產を、漫然と三井と同格に餘りに高く評價してゐることの間違を指摘する必要のために、知らず〱、さうなつたのである。之に反し、前號の三井王國論は三井の實力が世人の想像以上だと云ふことを示さんとしたがために知らず〱、その優秀部分を餘りに力說した形になつてゐる。これは、三菱王國にとつて、誠に御氣の毒な廻り合せであるが、これは、筆者が、それ〲の調査に於て示さんとした焦點の差異から來た飛沫である。此の點は、讀者にもその旨を御含み願つて置きたい。が、以上に由つて筆者が、本文の第三項乃至第四項に於て、三菱王國の資產及びその支配會社の實質資本が、それ〲、三井王國の約四割位か、と推算したことの基礎が、何處にあつたかの大體を了解して戴けたと思ふ。

賄賂考

政治に内在する矛盾

青野季吉

賄賂や瀆職の歷史をしらべたことはないが、その始原は恐らく、政治の歷史と共に舊いであらう。ギリシヤやローマの昔でも、さういふスキャンダルは行はれたことであらうし、支那の政治史の大半が、さうした事實で埋められてゐることは、誰でも知つてゐる。日本だつて、オーソドックスの歷史には書いてないが、その例に洩れまいと思はれる。

また贈收賄や瀆職の對象にしたところで、何と言つて『禁制』になつてゐるものは無い。砂利を喰つたと言つてはヒドイと言ひ、勳章までたうとうシヤぶつたと目をみひらくが、「こんなものは寧ろ生やさしいので、昔は王冠までその對象となつてゐたし、徹底したのになると、祖國をそつくりそのままその對象としたほどで、世界戰爭の當時なども、そんな大がかりのスキャンダルが傳へられた。宗教社會などは、さういふ俗取引と最も緣の遠い範圍のやうに考へられて居り、西洋の宗教家や、日本の坊主は、さも淸淨らしい樣姿をしてゐるが、この『聖域』内が、反つてさういふ俗取引の市場であることも、一寸教會史をのぞいたものは誰でも知つてゐる。

であるから、贈收賄や瀆職の事實が曝露されたつて、我々には少しも驚目的ではない。たゞ、その對象が、或は軍艦であつたり、砂利であつたり、板舟であつたり、或はキラ〳〵する勳章であつたりするので、それに多少の興味を持つのも、登場人物が、尤らしい軍人であつたり、大浦や小川のやうな一國の『政治的指導者』であつたりするので、それに多少の注意を惹かれるに過ぎない。

新聞でさういふスキャンダルをセンセーショナルに取扱ふのは、勿論さうあつて然る可きことだが、我々ばかりでなく一般でも、その曝露で大したセンセーションを起さない。尠くとも今日は、さうした事件にたいする道德的憤激性が、一般の心の中によほど麻痺してゐると言つてよいのである。この社會的心理は、大いに注目に値する。

だが、この社會的心理の出つて來るところは、至極簡單に說明がつく。贈收賄や瀆職が政治の歷史と共に舊く、政治社會とはさうした行爲の一大貯水池であること、時たまにその一隅を叩いてホコリを立てて見たところで、それでその社會がクリーニングされるものでないこと、これは最早一般人の常識的認知となつてゐる。それに政治家や軍人

が、その職祿をどれほど蓄藏したところで、ある巨萬の富と、廣大の邸宅を私有し得るものでない位ゐは、一寸金の勘定の分る人間なら、誰でも考へ得られることである。

そればかりではない。いまの全社會の經濟的組織原理が、貨幣報酬に基いてゐる以上、どんな道德的な行爲でも貨幣で測定され、報酬されるのは必然で、一般の人々も、それぞれの關する範圍で、多かれ尠かれそれを實踐してゐるのである。たゞそれが國家機構や官吏社會に行はれると、非合法的な行爲となるに過ぎず、反道德的と批判されるに過ぎない。だが、今日何人と雖も、政治家や軍人を、自分等とは別個の人間だと考へるものはない。したがつてその『非合法』『反道德』が、それほど一般の胸に響いて來ないのである。

尤も一般の人々も、さうであるからさういふスキャンダルを何でもないことだとは考へてゐない。軍艦賣買には憤激し、砂利や板舟や瓦斯の取引には眉をひそめ、勳章を喰つた男の家族は、『社會から指彈』される。が、この社會的の心理は、決して國家や政治の尊嚴性や、勳章の神聖性と關聯のあるものではない。それよりもさういふスキャンダルによつて共同社會の利益が傷けられることにたいする、漠然たる知覺が、一般人にそれを反撥せしめるのである。これを言ひ換へれば、さういふ行爲の反國家性よりも寧ろ反社會性の方が、一般社會人をして、それを排斥せしめるのである。

贈收賄や瀆職が、爾く、これまでの政治社會の一般的事實であるのに、それならば何故、時々思ひ出したやうにその政治社會の一分枝に過ぎない司法當局が、それを曝露して、『市懸り』の戰法などで、攻め立てるのであらうか。これも極く簡單に說明がつく。

第一が國家といふ存在である。我々から見れば、全體としての國家は、その時の支配階級の支配の機關に過ぎないが、しかし國家といふものをその現實の姿のまゝで、人々の上に押しつけたのでは、何よりも先づ、被支配階級が承知しない。それでは支配の機關として役に立たない。そこで國家は、階級支配の機關ではあるが、それを隱して超階級的な、乃至は階級と階級の中間に位置する、機關であると言ふ樣姿を執つて、人々の上に君臨しなければならない。と同時に、さういふ樣姿に相應するところの行爲を多かれ尠かれ一般に示さなければならない。それでなければ被支配階級が、その空手形をすぐ見破つてしまふからである。司法當局の曝露は、第一にこの必要に基づいてゐる。これを別の言葉で言へば、さういふ曝露は、謂ゆる國家觀念なるイデオロギーの注射だと言つてよいのである。

これは原理的な說明だが、これだけではまた、それならば具體的に、無數に伏在する瀆職行爲から、何故彼此のそれが司法當局の手につかみ取られるのか、と言ふ疑問が解けない。このつかみ取りにはいろんな特殊な事情が作用する。が、大は權力を握つた政黨が反對黨を仆すためといふ政黨的目的から、小は個人的對立までが、それに作用し得る。が何と言つても決定的なのは、右の政黨的目的の方である。政友會が政權をにぎれば、遠く大浦がやられ、近く安達がねらはれ、三木が手

足をとつて引立てられる。代つて民政黨が天下をとれば、小川が曝しものにされ、山梨が洗ひ立てらる。

尤も政治的目的と言つたところで、政黨は宙に浮いてゐるものでなく、その背後に何等かの經濟的勢力を持つてゐる。政友會がより多く三井金權の勢力を政治的に表現してゐるのに對して、民政黨は三菱金權をそつくりそのまま政治的に代表してゐることは、今日では周知の事實である。そこで政治的目的と言つたところで、結局は、經濟的對立の政治的表現に外ならないのである。こゝに觀點をおいて、現實に洗ひ立てられ、つかみ取られる贈收賄を考へて見ると、算術の答のやうにはつきりと說明が出て來る。

司法當局は、さういふ原理的、特殊的な必要に押されて、曝露戰術を用ひるのであるが、こゝに注意しておく可きことはその曝露には自ら一定の制限が在るといふこと、是である。

叩けば無際限にホコリが立つ。そのホコリを無際限に立てゝゐては、司法當局とその背後の政治的勢力との依つて立つところの、國家そのものゝ存立が××くる。これが第一の制限である。たとへば町議、市議、縣議、國議であつて、叩いてその五體からホコリの立たないものは、若干の無產黨議員を除いて、皆無だと言つてよい。そこでその全部をつかみ取つたら、政治社會は事實上、崩壞して仕舞ふ。それでは彼等にとつて問題にならない。そこで飽までも、今日の政治社會の秩序を攪亂しないといふ制限が必然について來る譯である。

第二にはこれも原理的な制限だが、たとへ一端つかみ取つたスキンダルでも、それが徹底的に根を掘り、土をくつがへさないといふ制である。それは、もしそれが徹底的にやつてのければ、その盡くるところを知らないからばかりでなく、それは多くの場合、他と交錯してゐるからである。そのいい例はつい昨年の瀆職市議の檢擧である。あれを徹底的にやれば、當時の政權把持黨の內部に波及することは明らかである。そこであれも、同類の多くの場合と同樣、尻切れトンボに終つたのである。

曝露對象の方になると、大した制限はないかのやうに、見える。たとへば神聖そのものゝやうな勳章でも、法廷に持ち出される。勳章の神聖を傷けることは、國家の神聖を傷付けると同然で、それの曝露は、觀やうによつては國家の不利益とも思はれるが、しかしそれは餘り顧みられない。それよりも反對黨への肉薄の必要がヨリ強く働く。とは言つても曝露對象に制限がないとは言はれない。若しそれがスキャンダルの對象となつたとしたところで、國家の存立と直接に、緊密に結びついてゐるやうなものは、自らそれの曝露のはばかられる場合がある。

かう言ふわけで、今の社會のこの種の法的曝露は、橫にも縱にも中途半端であり、おまけに時間的にもムラがある。これは根本的に言へば、階級社會の存續、保持を基礎とした今の社會にとつては必然であつて、若しこれが階級社會の解消を基礎とした社會であつたら、事情はすつかり變つて來るに相違ない。と言ふのは、さういふ社會では、すべての法的實踐は、國家の××の方向を執るに相違ないからである。

その場合、この種の法的曝露が何等かの意味から制限されねばならぬといふことは、考へられないからである。

政治の腐敗とか、政黨の墮落とか言つたお定りの言葉が、かういふスキャンダルの曝露される度び毎に叫ばれる。が、誰の眼にだつて明らかなのは、政黨をあやつつて行くには、第一金がいるといふ、至極簡單な、鐵のやうな法則である。近い例が謠曲を唱はれた故加藤高明にだつて『珍品事件』があつたし、何十年かの『苦節』を守つた犬養でも、政友會と合流する時に、たゞ一言、政黨を持つて行くには金だと悲痛な告白をしてゐる。餘計な泣言や、尤らしい口實を設けないで、この鐵の法則を率直に簡單に言つてのけたのはさすがに犬養の頭のよさが、そこに證明されてゐる。尤もこれだけのことは苦節何十年の經驗がなくとも分り切つてゐることで、お終ひに降伏する位なら、そんな長い年月をこの鐵の法則と戰はなくともよささうなものだつたと言ひ度くなる。

だが、政黨に貨殖の手段がある譯でなく、政黨の首領が金鑛の持主である譯でない。そこで政黨をやると、金はどこからか引張り出して來ねばならぬが、誰だつて政黨の首領を人格的に崇拜して金を出すものはないし、政黨の國家的貢獻にさい錢を投げるものはない。今日の世の中では如何なる場合でも、貨幣は利益と交換に渡されるのだ。この交換行程を洗つて見れば、ことごとく疑獄の對象となり、非合法の性質を持つてゐることは明らかである。

まだ政治が若い頃には、ずゐぶん理想的な要素があつた。自分の祖先傳來の田畑も山林も賣拂つて、政治的活動の燃料にして、たうとう貧乏してしまつて、政治界からも見すてられた老政客が、いまでも田舍にはごろ／＼してゐる。かう言ふ連中の活動した時期は、まだ政治が多かれ尠かれ理想化されてゐて、今日のやうに營利的目的の對象とはされなかつた。この時代であれば贈收賄のスキャンダルは、今日に比して遙かに尠なかる可き理由があるが、それだからと言つて皆無とは言はれない。否、その時代から今日まで政治界に生き殘つて、相當の財をつんでゐる政治家連は、既に當時から政治を理想化などはしてゐなかつたから、今日の彼等が在るのだと言へる。

私の知つてゐる或る老政治家は、犬養が政友會と合流乃至それに降伏した時に、半生の政治的活動を閉ぢた人だが、彼は微醉するとよく、『とるも盜し、とらねば物の數ならず、すつ可きものは弓矢なりけり』と、淨瑠璃の一句を低唱して、內心の寂寥をやつてゐたが、この弓矢は今日では金なのである。まことに、とるも盜し、とらねば物の數ならず、である。

この事情は、無産政黨においてだつて變りはない。無産政黨をやつて行くのにも、やつぱり金がいる。この眼前の必要にせまられて、そのまへに降伏してしまつた指導者も、既に曝露されてゐる。日本大衆黨內部の清黨運動などはその一例である。だが、無産政黨の場合は、金がいるからと言つて、どんなことをして才發して來てもいいと言ふ理屈はない。既成政黨の場合だと、それが一種の約束となつてゐるが、

無産政黨ではそんな約束は毛髮一本もない。無産政黨の場合では、その困難を無産者の階級的勢力で飽まで切拔けて行くところに特色がある。この特色を失つては無産政黨が無産政黨でなくなつてしまふ。

贈收賄や瀆職にたいする私の觀察は、爾く悲觀的である。今日のブルジョアジーの政治とは運命的に結合されてゐるもので、こゝでは清黨運動や、司法權の活動も、部分的な、極く一時的な『效果』しか持ち得ない。尤もそれだからと言つて、さう言ふスキャンダルをそのまゝにして、好き勝手な眞似をさせておいていいと言ふ理論は成立たないが。そこで我々にとつては、ブルジョアジーの政治界をクリーニングするとか、腐敗した世界人道を建直すとか言つた、ヂャーナリスチックな立場からでなく、ブルジョアジーの實際政治に內在する矛盾を曝露し、彼等の自己崩壞、彼等自身の手による彼等の墓穴を掘る仕事に拍車を與へるといふ立場から、それの曝露を歡迎するのである。(一〇・五)

賄賂の社會學

室伏高信

今でも鐵道省に勤めてゐる一屬僚が大學時代の同窓であつた一評論家を訪問した時の話。

「前大臣もたうとうやられたね」

「うん、小が平がし」

「驚いたね」

「驚いた？　何が？　たうとうじあないか、たうとうね、やられるやつがたうとうやられたんじあないか？」

「でも前大臣だからなあ」

「前大臣だつて？　君、そんなもなあ、フォードの古と同んなしだよ、二十圓出しあいくらでもあるじあないか」

「でも五十萬圓とつたつていふね」

「うん、現大臣なら五十萬圓、前大臣なら二十圓、分つたか？　つまり大臣の椅子は五十萬圓、この椅子に腰掛けた平吉さんが二十圓といふことが」

「江木翼は、では、五十萬圓？」

「江木が今は五十萬圓、それから二十圓の方の候補者……どうだね、君も一つ五十萬圓の椅子に腰掛けて見ちあ、十年腰辨じあ友達としても恥かしいよ」

「僕も死ぬまでに一度鐵道大臣にでもなりたいなあ、でも六かしいだらうなあ……第一今じあ江木がゐるから」

「江木か、あんなもなあ君突き落すんだ、構はないから、それが政黨政治だ。見給へ江木だつて小が平を突き落したじあないか、濱口が田中を突き落したやうに」

「でも、えらい人がつかへてゐるから」

「えらい人？　小が平とか、山半とか、おらが大將とか、狹心症とかねえ、……君だつて、しかし、おらがおらが位ゐはいへるだらうじあ

ないか」

「でも、あゝなるにあ矢つ張りいゝところもあるだらうよ」

「まだでもか、でもいゝところ位ゐはあるだらうさ、つまり賄賂をとつたり、機密費をくすねたり、乾新兵衞をだましたり」

「いや、學問や何んかさ、學問とまでは行かなくてもつまり智勇辯力が」

「智勇辯力だつて？　智とは欺術のこと、勇とは押し、辯力とは二枚舌のこと……」

「いや、濱口なんか、第一學者だらう、それに雄辯家じあないか」

「うん、濱口はたしかに學者だ、何にしろ雌伏十年とかの間に死線を越へてや、英雄待望論やそれからマルクス資本論まで讀んだつていふからね、大いしたものだよ、二十圓の値打ちは十分だ……それに顔がいかめしくつて聲が大きい、大臣はやめてもサイレンの代りにあなるね、ライオンかサイレンか、君はあのサイレンの演說筆記を讀んだことがあるだらう、あの掛け聲ばかりの。杉森孝次郎先生の言葉でいふと原則缺乏を。……君だつて一度宰相の印綬を帶びたら……帶びさうにはないがね……帶びたとして見給へ、西にタイガア、東にライオン位ゐはいへるだらう」

「うん、僕だつてまさか英雄待望論は讀まんからね」

「どうだね一つ十年腰辨から一躍五十萬圓は」

「いゝね、でも取つたら第二の小が平だから」

「取るとじあない、分るとだらう？」

「取ると分るよ、ちきに」

「分るもんか、見給へ、分つたのは小が平、山半、それから勳章やの何んとか位ゐだから」

「つまり取つたのが分つたんだ」

「いや分つたのが分つたんだ」

「天網恢々疎にしてもらさず……」

「天盲晦々疎にしてもらさす……」

「もれたのを知つてゐるか？」

「もれたのを知らない人があるか」

「そんなら誰々がとつたつていふか？」

「誰々が取らないつていふか？」

「政友會にだつて高橋是清のやうな清廉な政治家がゐるじあないか」

「高橋か、あれは君、日本銀行の總裁か何かだつたね、それに今は安田の大番頭、つまり餘剩價値の直接搾取だ、プルウドンの所謂盜、老子の盜夸だ、だから賄賂はとらなかつたんだ、餘剩價値の上前ははねる……だが君、自分の金は使へば減るといふことの簡單な理論が達磨さんにあ分らなかつたんだ。高橋は自分の足を食つてゐたんだよ。だから見給へたうとう追ひ出されたのを。あれはブルジョア前期の政治家だ」

「政友會には一體惡るい奴が多いね」

「うん、昔、島田三郎が星亨を攻擊して公盜の巨魁といつたことがあつた、政友會の領袖といふのはみんなこれだよ。星亨然り、原敬然り、

横千然り、小平然り、山半、おらが首相‥‥これが政友會の傳統的精神‥‥」

「政友會は公盜團‥‥」

「政黨とは凡て公盜の集團だ。政友會だつて民政黨だつて、保守黨だつて、自由黨だつて‥‥エドマンド・バアクなんぞいふやつあ分らずやだね、政黨とは凡てが一致する原理のうへに立つ、國民的利益を增進するための團體だなんて、‥‥僕なら次のやうに定義するねえ、政黨とは私腹を肥やすことを目的とする權力亡者の集團にして常に欺僞、陰謀、脅喝、嫉妬、排擠、收賄、買收、爭奪、暴力、罵詈を事とするものの集團なりと」

「民政黨の方はいゝじあないか？」

「遠くは大浦事件、近くは箕浦事件、あれはどうした？」

「あれ位ゐのものじあないか、濱口は人格者だと新聞に書いてあつたよ」

「うん、人格者さ、自分の生活費がどこから出てゐるのも知らない位ゐだらうからね。いや、少くとも知らないふりをしてゐるだけの道德家だから‥‥第一鎌倉の別莊は鎌倉第一といふし、本邸も何百圓とする家賃だつていふじあないか。十年も、在野黨でのらくら遊んでゐてさ、それでこれだけの生活ができて人格者なら、人格者もまたいゝ商賣だね。‥‥代議士をしてゐたつて？ うん代議士か、年俸三千圓、運動費が一文もかゝらないにしても月二百五十圓だ。せい／＼三十五圓位ゐの家賃でいゝ。それ以上はくさいね、くさくないといふなら財產や收入を公開するが當然だよ。小平の財產を調べるとかいふが、それなら自分の方を先づ公開するのが當然でもあり、禮儀でもある。第一、政治家といふ政治家は財產をみんな調べるがいゝさ。暗いところのない人が幾人あるか？ ムッソリニだつたよ、あいつがまだ政權を掌握しない前に、大臣たちを全部牢屋へ入れろといつたのは」

「濱口は黨から金をもらつてゐるといふ話だが‥‥」

「黨からか、三菱からかは知らないが、苟くも他人の寄附によつて生活するなんて、獨立の生計の營めない奴、オスカア・ワイルドぢあなかつたかねえ、物乞ひするのは盜むよりも惡るいつて。君は沙門のほかに乞食人格論の餘地があると思つてゐるのか？」

「でも、一黨の總裁としては相當の生活が必要‥‥」

「相當の生活？ うん相當でいゝよ、三十五圓の家賃でね。それ以上は身分不相當だよ」

「一黨の總裁の面目‥‥」

「一黨の總裁だから公明正大の生活が必要なんだ。分らないねえ君は、苟くも天下を口にするなら身をもつて天下に範を垂れべきだ。道之以德、整之以禮。——これを導くに德をもつてす。今の政治家に孔子を說いて見てもはじまるまいが、しかしだ、口に緊縮を唱へ、いやこれを一枚看板にしてゐる以上は、民衆をおだてるだけじあ‥‥尤も濱口なんぞにおだてられる馬鹿は少いだらうが‥‥濱口のラヂオ放送に感心して國債償却の資金につて何圓か寄附した人があるつて？ うん、だがその君の所謂一代の人格者濱口大宰相は一體いくら寄附したね？」

「しかし、濱口は賄賂はとらないだらう」
「直接には。つまり法律に觸れるやうには……」
「間接にだつて……」
「君にきゝたいが、あの仙石といふぢいさんがゐたね、あのぢいさんの效用は一體何んだと思ふね？」
「鐵道屋さ、僕のやうな」
「鐵道屋なもんか、鐵道屋なら矢つ張り君と同じ腰辨だよ」
「じあ、どうして大臣になつたんだ、矢つ張り賄賂といふのか？」
「賄賂じあない、賄賂の問屋だよ。あれはねえ君、君だつて知つてゐるだらうが、岩崎の政治顧問さ。このぢいさんが民政黨内にもつてゐる隱然たる勢力を見給へ、正に民政黨の大御所だから。若槻は議會の答辯はぬらりくらりでうまいが、このぢいさんの御機嫌取りが駄目だつたのだ。そこへ濱口さ、同じ土佐犬……じあない、土佐閥でさ、つまり濱口人格の背後に阿彌陀さんが光つてゐるんさ」
「民政黨は岩崎財閥の政治的執行委員會といふわけか？」
「大ざつぱにいふとね、それからもつとひろくいふと、日本の金融資本閥の政治的機關だ」
「民政黨の臺所がさうした財閥によつて賄はれてゐるといふのか、それともこれ等財閥の利益を代表するといふ意味か？」
「兩方さ、むろん。臺所を賄はれてゐてだ、もしその役にたたなかつたとして見給へ、山半だよ、欺僞だよ。問題は欺僞か賄賂かといふことに歸着する」
「君は見てきたやうなことをいふが、一體證據でもあるのか、民政黨が賄賂取りだといふ？」
「看板が出てゐるのが君には分らないか？　政黨といふ看板を、あの看板に賄賂と書いてあるのが分らんかね、それが色盲とか認識不足とかいふやつだ。ね君、考へても見給へ、總選擧の度に何百萬圓つて金のかゝるのを。そしてどこからこの金が出るのかを。直接か間接かは別にしても、何等かの形でコラプションが存在しなくつて、どうして政黨が存在し得られるか？政黨の存在それ自身が腐敗だ、プライベリイだ、賄賂の集積を政黨と思つたら間違ない。政黨とはコラプションの時代の政治的象徴なんだ。政治上のはれもの、できものといつてもいゝね。だからこの不景氣に、不景氣内閣といはれる民政黨の景氣のいゝことを見給へな、朝花除、田花無。いゝかね、いつの世でも同じだが、政治が盛んにて人民は益々飢えるんだよ」
「緊縮を說くものが贅澤をして、說かれるものが無い袖でねえ」
「それから國粹大臣――停車場の左書きでさへ風教に害ありといふえらい人格者が、五十萬圓とつてさ、つまりこれが所謂思想善導の正體だよ。忘れんなよ、この實物教育の赤裸々な事實を」
「後藤新平の政治の倫理化が必要だと、だから僕は思ふ」
「その後藤と神戸の鈴木閥との關係を君は忘れたのか？　鈴木が潰れてからの倫理化さ」
「でも倫理化そのものは惡いと思はないねえ」
「丸ビルの日本化ができたらね。君、もうモンテスキユウ以前に歸る

のはよさうよ。モンテスキユウは政治と倫理とをちやんと區別したじあないか。むろん、政治と倫理との一致が說かれた時代もあつたんさ。王道といふのはこれだ。だが、王道は德だよ、大同だよ、無爲だよ、道だよ、天上は下之れあるを知るだよ、人民はわが自然といふ、わが自然だよ。政治じあなくつて倫理そのものなんだ。ところがかういふ時代はとつくに過ぎ去つたんだ。倫理の時代から政治の時代がきたんだ。德の時代から經濟の時代がきたんだ。つまりゲマインシャフトといふやつが過ぎ去つてゲゼルシャフトといふやつがきたんだ。宗教が前の時代を象徴したやうに政治が後の時代を象徴してゐるんだ——敎會が前の時代を、政黨が後の時代を。前の時代の倫理はお布施、後の時代の倫理は賄賂。賄賂は君、政黨時代の大動脈なんだ。動脈硬化症の濱口の內閣だつてこの大動脈だけはあるんだ。だから政界淨化なんてことはこの大動脈を切斷しろといふことなんだ。尾崎咢堂先生の政黨黨費公開論だつてそれだ。賄賂禁止は政黨禁止だ。いやひろく政治の禁止だ。もつとひろくいふとこの經濟的社會、或は一層適切には政治的・經濟的・社會の否定だ。」

賄賂・賣勳雜感

向坂逸郎

一

私の友人でやはり勳章を買つた男がゐる。だが無論まだ檢事局の活動にもならなければ、新聞紙の特種にもなつてゐない。幸な事には彼はこの勳章をドイツで買つたのだ。而もベルリンの町はづれの小さな古物商で買つたのだ。だから彼は勿論賄賂をつかつたのではない。何ら恥ぢるところなく白晝公然と勳章と貨幣とを交換したのである。それでも彼はその爲めに數萬マークを費した。尤も當時、戰後のドイツではマーク相場下落の爲め、數萬マークは僅に吾々の五十錢にも當らなかつたのではあるが。

この勳章は、革命前のドイツに於て實戰に於て勳功厚い者のみに授けられたかの鐵十字であつた。物好きなこの私の友人はこの鐵十字を何んの爲めに買つたか？ 彼はこれを文鎭の代用にする爲めに買つたのであつた。それは實際、文鎭としては多少輕過ぎはしないかと思はれたのであつたが、鐵の地に銀のふちがとつてあつて、ごて〳〵してゐず、少しも勳章らしい感じを與へない氣持のいゝ、一寸風變りな文鎭であつた。

ドイツ革命直後の混亂時代に於ては、以前の勳章などは一文の價値を有しなかつた。だから多くの家で他の拂ひ物と一緒に屑屋や古物商に賣り飛ばしたものであらう。當時のベルリンの場末の古物商のショウインドの中にはよく鐵十字を見かけた。この友人の買つたのもそれであつた。

鐵十字は實戰に於ける戰功に對してのみ與へられたるものであるときく。この友人の買つた鐵十字も恐らく最初には誰かの××や××を

代價として購はれたものであつたに相違ない。それは何者かの血なくしては得られなかつた。『祖國』の爲めに失つた兩腕と胸間に輝く鐵十字とは彼の誇りであつた。だが今やその鐵十字は五十錢でゞも、異國から來た物好きな男の他には買手があらうとは思はれない。

マルクスは、人類自身の一定の社會關係が商品なる形態で物と物との關係の如き幻想的形態として現はれ、人と人との關係の生産物が人類自身を支配するところの現象を指して商品の拜物敎的性質と名づけた。この鐵十字も亦人類の兩腕や片足を甘んじて失はしめる程に高價なものでない事は確かだ(五十錢)。鐵十字をして光あらしむるものはやはり一定の人と人との關係に外ならない。こゝに吾々は鐵十字に於ける拜物敎的性質を見る事が出來やう。この性質を失つた鐵十字は五十錢にも當らない。人を支配せずして、弊履の如く人に棄てられて顧みられなかつた。

鐵十字の拜物敎的性質を理解するには難解な『資本論』を讀破するには當らなかつた。古物商のショウウインドウをのぞいたゞけで足りた。けれどもドイツ・ブルジョアは商品の拜物敎的性質を理解しないと同樣に鐵十字の拜物敎的性質をも理解しなかつたらう。

その後私の友人はかの鐵十字をどうしたか聞いて見たら、日本へ歸つてから近所の子供が欲しがつたのでやつて了つたさうだ。今頃はその子供のエプロンの胸に光を放なつて居る事であらう。否なそれともこの子供ももう忘れて了つて、彼の玩具箱の一隅に色褪せてゐるかも知れない。

二

大學敎授と雖も一定の年限を無事に勤め上げさへすれば勳章を貰ふものである。

これはある地方の大學の話であるが、この一定の年限に達した敎授達に授けられる勳章を何時とはなしに小使が各敎授の自宅へ配達する習慣になつて了つてゐたらしい。そこでこの大學の或る時の評議會——讀者の中には御存じない方もあるであらうが、評議會とは各學部から選ばれた二人の長老的敎授と各學部長とから成る總長の諮問機關、從つて多くは老敎授から成る——で、一人の評議員、海軍機關中將とか大將とかで、新しいものなら何んでも嫌ひ——尤も魚だけは新鮮なのが恐らくは好きだらうと思ふが——といふ工學部の何んとか云ふ敎授は憤然と立つて云つた。從來いやしくも勳章を小使に持たしてよこすなどゝいふ事は不都合極りなき事である。今後は必ず授與式を行ひ學部長その他の立會の下に總長自ら授與すべしと。これには總長一言もなくあやまつてこの敎授の提議通りに行ふ事に一決した。

私は今賄賂で勳章を買つたといふ記事が毎日の新聞紙を賑はしてゐる際、この勇ましい敎授の姿を思ひ出す。彼の怒りに震へてゐるであらうところの姿を。

三

私が大學を首になつた時には、それでも私にしては大金が送金の通

知として到着した。そこでこれをもつて生れて始めての大金——といつても幾月も食へはしない——を受取るために近所の三等郵便局に行つた。私の送金通知書を熱心に見てゐた官吏の古手らしい頭の毛の薄い、白髪交りのドジョウひげを生した人のよささうな三等郵便局長は、自分の事でゞもあるかの樣に深い溜息と共に云つた。

『惜しい事ですなあ！　今お辭めになつちや。もう八年（？）すると恩給もつくし、その中に勳章も貰らへるし。』

　といはれて見た所で自ら好むと好まないとに拘らず、先方で辭めさせるのだから仕方はないのだが、一々說明する氣にもならず、苦笑するより外なかつた。

　今賣勳の記事と共にこの善良らしい、心から恩給と勳章の好きな、といつて幸に三萬圓の賄賂を出して勳章を買へる程の力も勇氣もなさゝうなこのプチ・ブル氏を思ひ浮べる。そしてこの人々に對する勳章の魅力を想ふ。

四

　ずつと以前に何かの本で讀んだものか話に聞いたものか、はつきりした記憶ではないのだが、かういふ話を思ひ出す。やはり鐵十字に關する話しだ。

　ビスマルクが戰功のあつたある兵士を呼んで、

『おまへの戰功に對して鐵十字か、一時金か何れかを與へやうと思ふがおまへは一體どちらを望むか？』ときいた。

　兵士は卽座に、

『鐵十字の製造費だけ差引いて一時金と鐵十字と兩方いたゞきませう』

　この兵士皮肉で云つたのかどうか知らない。まさか當時鐵十字を文鎭代りに使ふ氣でゐたのではあるまいと思ふが。だが諷刺的にとればとれる。

五

　資本主義的經濟に於ては私有財產によりて分離せる資本家が、相互に競爭しつゝ價値增殖を行ふ。この基調は社會の凡ゆる生活に何等かの形で現はれなければならぬ。ブルジョア的政治黨派も亦決してこの基調の外にあり得可きものでない。否な最も露骨にこれとの關係を示してゐる。何處からとなく政黨に流入する巨額の黨費、選擧費等々、政權を握れる政黨、その大臣等々のポケットに這入るとされてゐる巨額のものは、要するに主として資本の自己の利益の爲にこれらのものを動かさんとする方法に過ぎない。だからブルジョア政黨そのものは資本の利益を代表して動かなければならない。卽ちそれは資本の私利を代表するものに他ならない。

　從つて例へばある新聞紙の傳ふるが如く、小泉遞相が、小川氏の收賄を許して、彼の收賄が事實とするも、彼れはその巨額の收賄を私利私慾の爲めに費消せずして黨の爲めに使用した事に相違ないであらうとなして、暗に黨利（ブルジョア政治家によれば彼等の政黨は國民一般

の利益を代表する）を私利から區別してこの『國士』を救はんとせるが如きは、勞働者階級の立場よりすれば何等の意味をなさない。勞働者階級にとりては彼等の血と汗の產物が、一小川氏の宏壯なる邸宅となると、政友會内の一握の小『國士』の手に這入るとの區別は本質的ではない。畢竟共に資本の私利を勞働者階級の彈壓に於て伸長せしめんとする手段となるに外ならないものであるからである。況や小川氏によりて黨内にばらまかれたる巨額の金が小川氏にとりて何等かの地位を準備するものであつたと言はれるに於てをや。

凡ゆる資本の間に決して完全なる利害の階調がない樣に、ブルジョア政黨に於ても同一黨内に各政派の抗爭あり、各ブルジョア政黨相互間に又利害の衝突があり、政權の爭奪がある。こゝに於て恰も、資本間の競爭が次第に資本自身の姿を明瞭に浮上らしめる樣に、各政黨、政派間の政權を中心とする抗爭は次第にそれら政黨、政派の本質を自ら暴露して行く。

『共產主義者』より何より先に、先づブルジョア政黨自身がブルジョア政治の何であるかを民衆に示す。かくてブルジョア政黨自身、資本主義的發展と共に、自らの墓穴を準備する。

その『正義』的批判

前田河廣一郎

かういふ問題に就いて、誰しも、第一に、筆者に期待するところは、ブルジョア政黨の細密な系統、組織、資本閥、階級的構成の闡解を容易にした、明快な、肯定的なそして裁斷的な批判であらうとおもふ。私自身も、さういふ種類の解りいい批判ならば、どんなことをしても讀みたく思つてゐる。

だが、いろいろな事情から、そのことはさほど觀念的に私達が希望するやうに、效果的な批判が出來ないのではないかしら、といふ懸念がうかぶ。何故か？――もつとも大まかな推測に從つて述べても、それは特別にその方面に技術と興味と、相當の年月を經た研究とを經たものでなければ、その輪廓をだに捕捉することが出來ないといふ理由からである。私はその任ではない。

だが、一般人の一人として、誰でもが日常の新聞欄の社會面を見て、いくぶん、新聞記者の、編輯方針や、着色の方法、含蓄ありげないひ廻はし、知りすぎてゐるやうな微笑、さういふものの懸念を抱きながらも、そこに摘發された問題に對して、あるひは笑ひ、驚き、憫み、手を叩いて喜ぶといつた風な、ごく常識的にいろいろな事件を知りかつ判斷しようとする心理からいへば、現在『某大官』とか、『某大實業家』とかいふ名でセンセーショナルな各種の收賄事件――即ち商品化されたる政府行動の摘發には多大の興味を持つものであることを、私は告白する。

新聞とともに笑ひ、泣き、あるひは喜ぶ、といふ近代人だけが持つ不思議な紙の上の生活は、往々にして一般社會が、單純に紙の上の出來事だけに終りやすい。それは、支那の戰爭のやうな場合が多い。深刻に戰爭をしてゐるときには、世の中は知らないで、戰爭をしてゐるな

い場合に、戰爭が起つてゐるやうな話が多い。新聞記者が、包みきれずして、事件を一時間、あるひは十分な爭ふて發表するときには、かならずしもその事件が、血煙をあげてゐるほど鮮々しいのではなくて、新聞の報道乃至は報道の方法が鮮々しいのである。であるから、十年も埋れてゐた事件が、俄かに蓋を開けられると、そこから展開する遠景（ヴィスタ）が、新しい光線に觸れて、さながら昨日の事件のやうに生々と眼に映じ得ることもある。

かういふ、一つの事件に對して持つ視線の角度を、先づ始めにその事件の史的意義に合せておく必要が、一般新聞讀者程度の私達に、もつとも必要なことだらうと思ふ。

ブルジョア政黨の腐敗！

これは、今日始まつたことではない。さうかと云つて、ブルジョア政黨の歴史は、竹越三叉の『二千五百年史』には載つてゐない。それは、三度ほどの國際的戰爭によつて、日本の貧弱な、家庭工業式資本主義が、次第に世界の大資本主義の一環と結びつき、帝國主義的色彩を帶びて來はじめた時代からの發生であり、腐敗であつた。

寧ろ、資本主義そのものの持つ崩壞性が、たまたま一つの政黨、あるひはその政黨内の個々人を通じて、外部にその腐蝕作用を曝露したことにすぎない、——と云つた方が正しいかもしれない。

同じやうな現象を、他のいろいろな國のブルジョア政黨に求めたとすれば、私達は、今日『朝日新聞』、『日日新聞』などが大ミダシを使用して、天下に訴へてゐるよりも、より大きい事件が、より糜爛した情況のもとに、しかも平氣（マター・オブ・ファクト）で聞き流されてゐることを發見するであらう。又、これは私自身の單なる想像にしかすぎないのであるが、今の一聯の瀆職收賄事件と雖も、もつと拘泥するところなく、昔の哲學者の編んだ法律のやうに、直線的に、ひたすらその線の盡きるところまで法理的探索を敢へてしたとすれば、恐らくその結果は、『朝日新聞』、『日日新聞』などのつねに懸念して居るのであらうと思はれる、急激な資本主義の土崩瓦壞が來ないとも限るまいと思ふ。

これは、ブルジョア法理學者の間にも、『限界』の問題とされてゐることにちがいない。又、かういふ諸事件を摘發した當事者としての政黨乃至は政府に於いても、飽くまで眞理を探究するといふやうな、小學生第五年程度のナイーヴなアスピレーションを以つて出發してゐるわけでもあるまいと思ふ。

米國の一富豪の邸宅では、學者を雇つて、そこへ無心に來た人間や、手紙類の社會學的分類を試みた。そのために、その學者は一册の本を著述したといふ事實がある。一人の富豪の裏面を、あるひは裏面の一部を、あからさまにしても、しかく複雜なものである。況んや、一つの大政黨、有力な、陰謀的なブルジョア政治家、と云つたものの裏面を科學的に分析探究してみたならば、恐らく一棟の圖書館が出來あがるかもしれない。讀む暇がないのでそつとして置いたのであるが、今急に思ひついて、ワーナーといふ人間の書いた『タマニイ・ホール』といふ大型の五百七十頁ほどの著述を、私は漫然と取り上げて、その頁をめくつて見てゐる。これは、タマニー・ホールの現在までの發達史（罪惡史！）ともいふべきもので、その政黨の首領株の、個人個人の動きに就いて描き出し、その當時の諸新聞紙の漫畫やエピソードをも網羅し

た、極めてヂャーナリステックな、同時に興味ある叢書である。私は、同じ本から、漫然と眼を外らして、誰か日本にも『自由黨――政友黨史』といふやうな、有益な著述を試みる智識階級の闘士がないかと考へる。

いろいろな『罪惡史』、『金權史』、『門閥史』などが市場に見受るのであるが、さういふ種類の本は、大概研究の方法が主觀的であり、政策的であり、時には政黨的でもあり、徒らに『正義人道』などといふ概念の羅列にとどまつて、廣い意味の、さういふ事實の發生に對する社會科學的見解がないところから、明治三十五年時代の縣會議員の選擧應援演説を承つてゐるやうな馬鹿々々しさを感じる。

私達は、滿鐵にどういふ事件が起らうと、朝鮮總督府がどんな政略的『事業』を起さうと、又、軍人が死を賭してまで購ふところの國家奉仕の記念章であるメダルが、小器用な政商や藝人に下げられたとしても、又、誤つて火を失した山林にどいふ醜交が出て來ようと――それ等は、寧ろ現在のブルジョア政黨としては、暴露さる事件の數が夥な過ざると思はれるほど、當然な話である。ブルジョア政黨のメカニズムを構成する諸要素のうちで、その比較的一般人に共通する問題を取上げたとすれば、恐らくその資本閥あるひは財閥關係の裏面を覗かせることが、一つの暗示の方法でもあらう。しかし、この複雜なメカニズムを構成する他の幾多の部分、例へば、その思想系統、その暴力的統治、その軍國主義との結びつき、等、等、等、がどうして問題にならないのであらうか？

それが、第一、不均衡な暴露の方法である。

それは、東京市の傳染病菌を検査するために、ただ水道橋附近の溝水だけを試驗管に入れることであるに過ぎない。

だが、それでも依然テスト・チユーブへどこの溝水も入れないよりはいいではないか、といふ正義派もあるには違ひない。それは、一應の理窟である。と同時に、その正義派は、かういふ事を忘れる。即ち、シーメンス事件なら、シーメンス事件だけを解決して了つて、そのシーメンス事件を生んだ社會的環境、史的必然性を没却する事である。又、その社會的環境、史的必然性を没却する爲に、シーメンス事件だけがさつさと片付けられてしまひたがる癖が、ともすると生じるといふことだ。

だから、[illegible]運動も、阿片事件も現行法律の關する範圍で取り上げられたものだけを、特別に大ミダシをつけて、鳴り物入りの記事を書く新聞も新聞であり、又、その奧の、事件を取扱ふ手心も手心であり、更に又、その奧の奧の、手心を生ぜしめるブルジョア・イデオロギーによつて統治される社會――これ等一聯の諸現象が、ここに私達に、ちがつたプリズムのもとに反映しなければならぬ次第である。

もう一つ。現在の、日本に於ける二大政黨の對立から生じる、微妙な政治的雰圍氣、といふものも考慮に取り容れられねばならない。そこに政黨に動員される個々の政治家達の個人的色彩を、大まかに反映した政黨的感情といふものが、恐らく、直接、三井と三菱とが植民地先に於て猛烈な市場爭奪戰を行ひつつあるよりも、もつとこの政黨といふ上部構築の方が、感情的對立を保持し得る可能性がある。その顯著な二つの發熱體の中間に生じる雰圍氣のやうなうちで、殆んど公約的に取扱はるべき『事件』といふものは、その現狀が決してブルジョア政黨の軌道を外れることなく、一種の騎士道的名乘り上げによつて

行はれるので。ある議會のブルジョア代議士達が、反對黨にむかつて、どんなに鋭い質問の機關銃を猛射したところが、その質問は、やはり同じ標幟のうちに包まれた同士討ちの模擬戰としか私達には見えない。自分の屬してゐる政黨の政策方針を裏切つてまで非ブルジョア的質問を試みるブルジョア代議士があるだらうか？

で、この種の諸事件の摘發には、私達は時どき飽きが來ることがある。いつそ、物々しい摘發などがなくて、いつも、ブルジョア社會萬歳！といふ風に、新聞も緘默し、法廷もプチ・クリミナルだけに滿ち、そして闇のなかの軍艦の衝突のやうに、大きい資本閥と資本閥とが相接近して、誰も知らぬうちに崩壞の過程を辿つてゐてくれた方が、私達一般人には、小うるさくなくていいやうな氣がする。

もう一つ別な方面から見る。この種の『正義』的摘發事件を欣ぶ日本人の社會的正義感——否、國家的正義感といふものを見てみたい。私は、それには、かなり封建的要素が殘つてゐるものと思ふ。絕對大の權力の前には、たよりなき日本人はいつも慴伏する心理を持つてゐる。しかし、中間的權力と云つたものに對しては、いつも批判的であり、穿鑿的であり、闘爭的である。それには、いつも正義とか、道德的潔癖とかいふごく概念的な言葉が都合よく利用し得るのである。話が少し細かくなるであらうが、この『正義』といふ概念にも、それの正式な手續、あるひは型らしい物が、多分の官僚的色彩を帶びて日本人の一般政治意識の中には發達してゐるやうに思はれる。

ここは、支那人などと全然ちがふところであると思ふ。そのよつて來たる所以が、封建時代以前からの國民の支配階級の主權者的統治政策によつたものとしても、かなりの程度までブルジョア文化に隨伴するリベラリズムを取り入れた今日の日本に、この種の狹くるしい、潔癖すぎるほどの直線的正義感だけが、ぽつんと取り殘されてゐるやうな感じがするのは社會現象としては少しむらである。

私情を話すことも氣が咎めるが、最近、私の本誌に連載した『支那』に闘する、一人の文學者の批評を讀んでみたが、その人の抱いてゐる支那革命觀は、どうもトレチヤコフなどの詩的『支那』に影響されてゐるとみへて、複雜な支那の革命運動を構成する諸要素のどんなものであるかを知らぬらしい批評であつた。これは獨りこの批評家だけではなく大部分の日本人が支那革命に同情したり、あるひは自ら身を投じたりして、暫くたつてから、

『支那は解らない！』と云つて歸國する動機なのである。

支那人には、日本人のやうに陶冶された、洗練された、系統化された、時に、極端にまで倫理化された『正義』感がないと私は斷言したい。だから、決して、その本質的な動機は疑はないとしても、所謂『革命家』に對しては、正義感の熾烈な日本人の考へる樣な革命家を求めて、求め得まいと思ふ。遜文の如き、近代の生んだ革命家中の比較的正義感の高かつた人はいざ知らず、彼れのエピゴーネンの多くには、強烈な古代支那的遺傳性と近代的唯物觀とを併有した環境の子達を見るだけである。

ブルジョア政黨が、内部から腐敗し頽廢しつつあることは事實である。しかしその腐敗を、その頽廢を取り除くものは、決して普通一般人の抱懷してゐる『正義』感から出發する批判の方法ではない。それは、プロレタリアートの、新興社會によつてのみ置き換へられる。

政界はどうなる

吉野作造

（一）政界の近状

失策だらけの田中內閣の跡を襲いだ爲めもあらうが濱口內閣の評判は大體に於て惡るくない。さう云ふ事情がないとしても、少くとも其の眞劍なる努力の點に於て近時歷代內閣中出色のものと認められて居るやうだ。之れからの成績の上に這の期待を裏切る樣の事が起らないとも限らぬが、今の所多數の國民に著しき不滿なく、少くとも他の政黨に代つて貰ひたいと云ふ程の不平は全く聞かない。尤も無產黨の陣營からは——左翼からは無論だが右翼からも同樣に——其の重要政策の根本基調が要するに有產階級の偏頗な保護を出でないと云ふ意味の攻擊が頻りに亂射されて居る。之は一應理由のある攻擊だと思ふ。我國當今の著大なる社會的不安を如何にして救治すべきやの根本策の究明が與へられた仕事だとすれば、以上の如き無產黨の批判を第一に顧慮せずしては決して適當な解決策の見出されぬ筈だと思ふからである。併し乍ら當面の政治問題としては、根本的見地よりする抽象的批判も全く無用とは云はぬが、主として着眼せらるべきは與へられた事實ではないか。例へば濱口內閣は金解禁の準備として所謂緊縮政策を執つた。緊縮政策の波及するところ頗る多岐に亘り其の何であるかは一言にして盡し得ぬが、其の既に着手せるものあり又未だ着手せざるものあり、既に着手せるものと雖も絕對に之を改め難しと限らないが未だ着手せざるものに付ては固より改良の餘地に富むのだから、金解禁その事を根本的に非なりとするに非る限り、我々は各々其の見る所を披瀝して政府の施設の到らざるを補ひ又其れより來ることあるべき弊害を豫め阻止することも出來る筈だ。無產黨

が濱口內閣の緊縮政策を難ずるは既成政黨を以てひとしく皆有產階級の傀儡たりとする前提に基くものだとすれば別問題だが、假りに必ずしもさうでないとして、其の緊縮政策非難の立場が我々の考へる樣に之からの施設のやり方如何に依ては必ずしも滿足な結果を見得ざるに非ずとの期待をも排斥するものなりやは、何等かの機會にモ一度よく聞いて見たいと考へて居る。

金解禁は當然の話——今頃問題にするは寧ろ遲きに過ぎる位——この爲めに必要とあれば緊縮も已むを得ないと覺悟する。と云つて政府の爲すが儘に放任して置いてい〻問題ではない。成る程濱口內閣には前內閣の爲さざるべからざる所を斷行した勇氣と誠意とを許さざる譯には行かぬ、併し財界——主として有產階級の利害の倚る處たる——の安定のみを見詰めて爲めに不景氣のもたらす無產階級の異常の困厄を等閑に附されては困る。之を恐れて無產黨側に早くも痛激なる反對の聲を放つものある次第であらうが、如何に之に伴つて或は生ずることあるべき弊害が恐しいからとて、今更緊縮をやめ金解禁を無期延引するわけには行かない。そこで我々としては政府の政策は其儘に進行せしめ、併せて民間に於て別に之に對する健全なる牽制的意見の唱へらるるを冀望せざるを得ないことになる。其等の牽制的意見が即刻效を奏して政府の施設を矯むるや否やは別問題だ。互に相反對する意見が如何にして國運の進展に協動するものなりやは別の考察に讓るとして、甲の施設あれば直に之に對立する乙の牽制的意見を生ずるは健全なる政界の常態、而して後者は實に在野黨に期待せらるる重大使命なのである。

斯う考へると當面の政局に對する政友會の責任は頗る重大だ。然るに當の政友會が一向之を感じて居ないかに見へるのはどうしたものか。政友會も在朝時代から主義としては金解禁の必要を認めて居つた。之を斷行するの勇氣を缺いたのは假に緊縮に轉回し難き事情に在つた爲めだらうが、今や現內閣が緊縮に由つて近く金解禁を斷行せんとするに際會して、徒らに感情的の反對を呼號するに止るのは不親切の至りだと思ふ。今日の政友會は當さに先きに容易に緊縮政策に轉回し得ざりし事情に自ら顧みて、緊縮政策の將來に與ふることあるべき不祥の結果につき、一つには嚴しく政府に警告し一つには大に國民に勸誘する所なくてはならぬ筈だ。緊縮政策に對する牽制的意見の一端の僅かに無產黨側から叫ばるるを横目に見流して、實行豫算とやらが憲法違反だの井上藏相の演說に言ひ損ひがあるのと下らぬ揚足を取つて騷ぎ廻るだけでは、彼れは到底この重大なる

時局に對し野黨としての本來の使命を全然閑却するの譏りを免るるを得まい。

田中内閣時代の失政、之に加ふるに最近順々に曝露されて居る瀆職事件、それ等の結果として蒙つた不評判を少しでも輕減すべき何事をも示さぬ間に、總裁田中義一の急死はさらでも浮き腰の政友會を一層震撼せしめた。尤も田中總裁の引退は時期の問題とせられ、何人を後繼總裁に擬すべきかは彼れの生前から寄り〳〵祕かに論議せられてゐたやうだ。田中を取去つた政友會は正に群雄割據、加之その群雄たるや何れも皆野心滿々たりと認められ、後繼總裁の決定は或は政友會を分裂の危機に導くことなきやを懸念され、之を懸念すべき理由が濃厚であれば背に腹は換へられずと姑く現狀維持に甘んずると云ふことになり、田中自身が能くこの馬鹿々々しき立場を甘受する限り、後繼總裁の選定に依る難局は他日に延ばすことに依つて幾分之を緩和し得べしとせられて居つた。然るにだ、天は意地惡くもこの艱難の瀬戸際に突如として唯一の安全瓣たる田中大將を奪つたのである。政友會に取つてはよく〳〵の不運だが、併し政友會に眞に人あらば、此一大打撃に頓悟覺醒して全く新しき更生の道を見出し得ぬこともない筈だ。新聞傳ふる所の如く此際若し後繼者選定の問題に心なき暗鬪を續け折角の大政友會をして四分五裂の窮狀に導くことあらば、吾人に於ては格別痛痒を感じないが、日本の政治家の名譽の爲めに聊か之を惜まざるを得ない。

併し私はどんな最惡の場合を考へても、四分五裂拾收の餘地なきに至るが如きを想像することは出來ない。そは必ずしも政友會の策士に多少の誠意と聰明とを信ずるからではない。彼等が熱心に政界に馳驅する所以の其の特殊の動機を看過し得ないからである。その特殊の動機とは何か。云ふまでもなく露骨なる政權慾だ。茲にわざ〳〵露骨と云ふ形容詞を使つたのは、凡そ政治家は誰しも政權慾を有するには相違なきも、今日の無產黨の人達の如く初めより政權の近く自家に落下するを期待せざるあり、又犬養翁配下の舊革新派諸氏の如く政權掌握の甘夢に誘はれて政友會に身賣りせるもあり、政權は握りたいが其の爲めに何物も犧牲にしたくないと云ふに對して、今日の政友會の連中などを私は特に政權慾に驅られる族と指稱するのである。そこで斯うした慾望が彼等の政治家としての活動の根本動念だとすれば、如何に後繼總裁の選定に絡まる暗鬪が激烈でも、其の結果たる分裂が分れた各々をして遂に舊革新派の如く精々四十五十の少數黨の運命に落すが如きことはあるまいと考へる。尤

もさうした事實が實現すれば、當分民政黨内閣に取つては萬々歳を壽ぶべきも他面一黨專制の弊害を他日に馴致するなきやを恐るべき理由がないでない。民政黨をそれ程強いものにして其間に内閣以外の強大な傳統的權力團を始末させるも妙案だと考へられぬでもないが、權道は要するに常に推奬すべきものに非ず、現狀の許に於ては矢張り政友會の奮起に期待するの外はない。政友會にこの點の自覺に基く奮起ありやは疑問だが、幸にして別の理由が可なり根強く彼れを結束に押しやらうとして居る様である。如何に下院に優勢を誇る内閣でも何時意外の事で倒壞を餘儀なくさるるか分らぬと云ふ我國特殊の政情の下に於て、野黨に對し常に大命を拜受するの準備を怠る勿れとの誘惑は相當に強いと云はなければならぬ。況んや内閣倒壞の威力を擁する傳統的勢力は目下の所概して政友會に多分の好感を寄すると云ふに於てをや。斯う云ふ事情を考へると、二三の野心家と之を圍繞する陣笠との妄動が事前に於て如何に猛烈でも、一旦總裁の決定を見んか忽ちにして嵐の後の靜けさに復すべきは明白である。大勢が斷じて斯の如くならざるを得ざらしめて居るからである。且つ其の新しい決定に不滿なるものも、今更大政友會を脱け出して鶴見祐輔君などと一緒になる氣にもなれまいではないか。但し新總裁統制下に於ける政友會が從來の如く堅き結束を維持するや否やは總裁其人の手腕威望に依りて定まるだらう。今日の暗鬪は形式上政友會を四分五裂の慘狀に導くことはなからうが、場合に依り内部の結束を弛緩するの原因として殘ることあるべきは認めないわけに行かない。

私の觀測では政友會の表面上の陣容は總裁問題の難局に由て甚しく崩れないと考へる。内心解散回避を念ずる者の各方面に多かるべきは之を疑はぬも、之を目的とする新團體の發生する模樣は更に見へず、之に關する政府側の陰險なる策動もない様だから、今期議會の解散せらるべきは間違のない所だらう。選擧の結果に就ては別の機會に於ても述べたことがあるが、瀆職事件の頻發による政友會の一層の不評判は益々吾人をして民政黨の勝利を信ぜしめる。

(二)　瀆職事件の影響

次の選擧で政友會が勝つかも知れぬとの豫測が相當強く信ぜられぬ限り、政界の將來に付て論ずべき根本問題は先づない。そは唯現狀の繼續と觀ていゝ。若し別に近き將來に於て我々の關心を促がす重要問題ありとすれば、それは例の瀆職事件究明の影響であらう。此事件は打ッちやつて置いても相當の影響を將

來の政界に及ぼすものである。更らに事件究明の精神を徹底し十二分の效果を政界に現はさしむるには、モ少し國民の目覺めたる協力が要るのかも知れない。理想をいへばその精神を獨り政界と云はず社會の全面に浸透せしめたいものだ。この意味に於ても瀆職事件に關しては特に讀者諸君に聞いて頂きたい事がある。

先づ話を順を逐うて進める。

第一に私は今度の瀆職事件に現はれたやうな醜行は之に觸れた人に特殊な出來事ではないと云ふ事を指摘して置きたい。と云ふ意味は、例へば小川平吉の犯した珍らしい罪業と云ふのではなく、外にも政友會中には同じ樣な犯行ある者多かるべく、謂はば政黨に在つて日常茶飯事とされて居た事が偶々小川平吉に於て運わるく司直の檢擧する所となつたに止まり、且つ斯の如きは實は政友會ばかりでなく昔の藩閥官僚內閣時代は無論の事民政黨又は其の前身たる憲政會とても決して完全に無瑕ではあり得ないと考へるのである。尤も憲政會や民政黨は政友會の如く屢々天下を掌握するの機會を惠まれなかつたから自然職權濫用の機會も少なかつた。それでも洗ひ立てれば多少のボロは出る。同じ過誤を犯す犯さぬに付き彼れは本質的に政友會と異る所はないのである。從て私は今度の瀆職事件は前內閣時代に犯されたるの故を以て單に之を政友會の罪惡とのみ考へたくない。日本の政權圈の一樣に犯せる罪の一つの現はれとして、民政黨も亦同時に道德上の責任を感ずべき筋のものと考へる。

そこで第二に私は直接檢擧究明の衝に當れる民政黨の立場を以て少くとも此種の事件に關し背水の陣を布いたものと認めざるを得ぬ。尤も政府が背水の陣を布くと云ふ健げな決心を以て此事件を剔抉したのか如何は私の與り知る所でない。一部の人の謂ゆる如く或は黨略に出でたものかも分らぬ。黨略とすれば聊か武士の情に缺くる所あるが如きも、政友會自身に之を採つて抗辯の料とする資格なきは勿論だ。世上一般は黨略であれ何であれ大きな顏して惡い事をした奴の時を移さずドシ〳〵檢擧收容されることを寧ろ痛快と喜んで居る。併しそれ等の點はどうでもいゝとして、我々の茲に最も注意せねばならないのは、從來久しく政界の通弊として默認され而も檢擧の手を伸ばし得ずとせられた事件の今日以後は遠慮會釋なくほぢくられ呑舟の魚亦終に遁るるに處なかるべきことである。而して斯の如きは元と我國政黨共通の過誤なりしとせば、今回の快擧は民政黨亦自ら將來に之を封ずるの結果を來たすものにして、彼れが之を意識せると否とに拘らず、形の上では正に雄々しくも背水の陣

を布いたものと認めざるを得ないのである。

第三に私は右の結果として最近の瀆職事件に現はれた樣な政黨界多年の積弊は、假令一時に影を潜めぬまでも、今後漸次跡を絶つに至るだらうことを推測する。是亦政界革新の一進展たるを失はぬが、併し之を以て廓清の能事了れりとすべきに非ることは云ふまでもない。革新の途上に一步を踏み進ましめたるの功を許す代り、更に革新の實を一層堅くする爲めに今の民政黨内閣にやつて貰ひたい事が差當り少くとも一つある。

民政黨内閣は專ら瀆職と云ふ點から今度の事件を洗ひ立てて居る。今まで檢擧された事件を細かに觀て居ると、中には天岡直嘉の場合の樣に其地位を利用して富豪の金を掠め取つたものあり又小川平吉の如くボロ會社を不當の高價で買上げつまり國庫に莫大な損失をかけて其の上前を刎ねたと云ふもあるが、其他にまた樺太森林拂下の如く「利權」の爭奪に絡まる不正事件も數々ある。共に瀆職事件には相違ないが、實際的見地からすれば單純な瀆職と利權に絡まる瀆職との間に多少の差別を設くの必要あるやに思はるる。何となれば後者は「利權」あつての瀆職たる場合多く「利權」はたしかに意志薄弱なる黨人に取りて強烈な誘惑たるを失はぬからである。於是私は民政黨内閣に希望したいのは、瀆職を檢擧究明すると同時に又それ以上の熱意を以て「利權」その物を絶滅する方法を講ぜられんことである。

今度の事件に限らず、最近數年間に起つた政治家關係の犯罪事件を見るに、一として「利權」を中心とせざるはない、中には「利權」でもないものを無理に「利權」に作りあげて不正の財を貪るのもある。例へば樺太森林の「利權」の如き第一次の拂下權利者が直に幾倍かの値段で轉賣すると云ふのだから、詰り百圓の價値ある物を十圓で賣ると云ふのが「利權」の「利權」たる所以なのだらう。是れ不當に國庫を損するもの、會社ならば正に背任罪を構成すべき所だ。百圓の物なら何故百圓の値段で賣らないのか。從來の政治家は故らに相場を十圓ときめ許否の權を一手に收めて祕かに好きな奴に之を拂下げて居たのである。斯う云ふ例は外にも多からう。之を此儘にして置いては幾ら官吏に綱紀肅正を戒めても、政界の腐敗の絶へる期は到底なからうと思ふ。

利權屋の最も喜ぶものに遊廓若くは二業地の指定と云ふのがある。指定を得れば地價が上る。豫め安く買つて置けば莫大の利益を得る。其の利益を見越して幾部を指定を得るための運動費に使ふ。富田前警視總監などは此點に於て頗る世上の疑惑を招いて居るが、彼れの親友平渡信君の如きは蓋し此種の利權屋

としては近代稀に見るの傑作であらう。本渡君が例の松島遊廓事件を目論見んだ計算を聞くに、敷地差當り十萬坪、一坪の買値五十圓、それが若し指定を受くると坪價少くとも一躍六百圓に暴騰する、さすれば坪五百五十圓の利益即ち總計五千五百萬圓の儲け、そこで指定を受くる爲めの運動費に千萬圓位使つても樂なものだと云ふのであつたとやら、否千萬圓も使へば指定を受くること疑なしと彼れは今日の政治家を頭から見縊つて掛つたのであるらしい。今や彼れは囹圄の人となり、賄賂を使つた點は成る程法の制裁を免れまいが、計劃その者は何等天地に愧ぢる所なしと相變らず豪語して居るとやら。思惑の當つた商賣と觀れば其處に不正はない様なものの、考へて見れば、坪五十圓の土地が六百圓になり總計五千五百圓と云ふ浮いた金を漫然「利權」として世上に放置し、狡奴の奪ひ去るに委せねばならぬ理由は一體何處にあるか。社會の進運に伴れて騰貴した地價に對してすら土地增價税と云ふ論がある、況んや遊廓地の指定と云ふが如きは行政官の當然の職務執行に出づるものではないか。之に由て生ぜる「利權」は全部之を國家に歸屬せしめても文句の出よう隙がない。乃ち斯種のものを「利權」として放任して置くのが土臺間違ひだと私は思ふのである。

概して云ふに所謂「利權」なるものは本來公有たるべき性質のものが多い。公有たるの明白なるものを「利權」とするの不都合なるは申すまでもないが、當世の通念に於て性質や、漠然たるものと雖も何れかといへば之を公有とすることにこそ最多分の道理があるのである。是れ私が民政黨内閣に向つて更に一歩を利權絶滅の方向に進められんことを希望する所以である。況んや「利權」の絶滅は同時に亦瀆職の一重要根源を塞ぐ所以たるに於てをや。

序に私はもう一つの希望を述べて置きたい、それは政界の瀆職行爲を剔抉したと同じ精神を更に實業界にも振つて貰ひたいこと是れである。

政界に在て惡狡い奴が上手に立廻つて重要の地位を占め其地位を惡用して不義の富を積みその金の力で以て勢力を張り、陰で人柄の下劣を惡口され乍らも、やがて押しも押されもせぬ一流どこの幹部級に收まる。之と同じ様なことは實業界にもないか。

鈴木常務を誹謗する意圖はないが便宜上東京瓦斯會社を例にとる。先きの東京市との契約に依れば、瓦斯料金の値上げは承認するが株主の配當は年九分以上にはしない、將來配當が下つて利益を生じたら之を株主と市民とに分け、一定の標準により

一方には配當を増し他方には料金を引下げると云ふのであつた。然るに今日は炭價に著しき下落を見せて居る、先きの約束に從て料金を引下げ配當を増すべき時期は來たのだが、會社は一向之を實行しようとせぬ、而して利益はちつとも無いと嘯くのではないか。世間は會社の提示する計數をごまかしと決め、寧ろその資産隱匿の巧妙なるに舌を捲いて居る樣である。過去の歷史を見ても不義を押通す爲めに怪げな金を使つたことに於ては札付きの瓦斯會社だ。最近の疑獄に現はれた所に依ても不正の目的に投ぜらるべく隱された財源の如何に豐富であるかは一寸想像も及ばない。之に依て私は疑ふ、市民と株主とに歸すべき金の如何に多くが會社重役の掠め取る所となつて居るかを。

私の臆測する所を無遠慮に告白するを許さば、我國の會社組織は株主と公益とを犧牲に供することに依て少數重役の公然私を營む仕組みであると斷じたい。尤も極度に株主と公益とをふみにじつては公然と其事業を經營し續けることは出來ない。それでも公益の方は制裁力の薄弱なる爲めかどんどん侵略を恣まにされ、斯くして割き獲たる富の一部を分配して無智の株主にも多少の滿足を與へるが、大部分の利益は皆重役の手で上手に隱してしまうのである。今日の會社經營者はピンからキリまで皆此類を出でないのではないか。何れも憎むべく賤むべき醜類であるが、更に立入つて考へて見ると之にも二つの種類がある。一つは單に一味の私腹を肥やすに止まる者で他は少くとも其大部分を利用して政界に何等かの因緣をつける者である。

東京で一流の實業家といへば、其本來の地位聲望に依て然る者も無論あるが、何處から見ても其器に非ずと思はるる者が單に政界に對する財的融通力を有するの故を以て一流の中にうごめいて居るの尠からざるを見る。その反對に何の點から觀ても立派な實業家で大財閥の背景もなく又自ら不義の富を擁せざる爲めに一流の仲間入りを許されざるも多い。一流と指目さるるとされざるとは其人に於て固より相關せざる所であらう、會社の金を掠める樣な惡辣の徒が一流顏して社會の表面に盜動するのは片腹痛くもあるが第一社會の禍害たるを看過し得ない。之も畢竟する所政界の人が彼等を歡迎する所から來る一つの弊害だ。之を何とかして貰へぬだらうか。

單純なる背任橫領はまたそれ丈けの問題として考へ樣もある。政界の策士と持ちつ持たれつする輩に至ては、それの格別の庇保を豫期しての惡辣橫暴はひどく我々の眼を打つ。法律上の制斷は異らんも政權の濫用による公益の蹂躪たる性質に於ては德義上全然其罪責を同うするものと觀ねばならぬ。必ずしも同一だ

から之も取締れと云ふのではない。民政黨内閣が折角手を染めた政界廓清の大鉈も、此處まで其精神を浸透させなくては社會の根本的に潔まる見込は斷じてないと思ふのである。

(三) 今後の政界に懸念さるる一大要患

私の注文が完全に聽かれたところで今後の政界は奇麗になるだらうか、私はさうは思はない。今日の政界は右述べた所の外まだ外に澤山の病根を持つて居る。蕩樂者が大奮發で待合入りを廢めたと云つても其代り妾を一人殖やしたと云ふのでは何にもならぬ。況んや其の待合入りの斷念と云ふも頗る怪しきに於てをや。私の一ト通りの注文すらが十分に採用され難きの今日の政界に對しては、一面に於て民政黨内閣の奮起に由る一進展をよろこび乍らも、他面更に其の奧底に伏在する弊根に向つては決して熱心なる監視を怠つてはならぬと考へる。

要するに百弊の根本は政黨には莫大な金が入用だと云ふ事實に歸する。其の金をどうして作るか。此點に潔癖な國では政黨は一向發達しない。本誌前號に學友馬場恒吾君は政黨は金なきに榮え金を擁して滅ぶと說かれて居たが、私も同君の說かるる意味に於ては其說の謬らざるを信ずるものである。併し政黨が單に政黨として活潑の發達を示すことは必ずしも政黨政治の發達を意味するものではない。政黨の發達が政黨政治を確立するまでには一黨又は數黨聯合を以て優に議會に過半數を制するの勢を作らねばならぬ。而して其勢力の組織と云ふ點から云ふと、數黨聯合では甚だ覺束ないので遂に大政黨主義を推奬すべしと云ふことになる。斯うなるとどうしても金なしには問題は發展しない。餘計な金は切りつめる、單に絕對必要な額だけに止めるとした所が莫大の額に上るのである。斯うした金を絕對に封じては、遠い將來は知らず、少くとも當今の時勢に在ては直に政黨政治の衰頽を來すべきや鏡にかけて見るよりも明かだ、況んや官僚軍閥竝に之を取捲く舊式政治家の尠からざる我國當今の政界に於てをや。論點をこゝに移せば馬場君といへども必ずしも私の所說に著しき異議を有たることはあるまい。理想としては金の事などに屈托せずに政黨の伸び行くことを希望するの切なるものであるが、事實の問題として金を有たせずに政黨を發達せしめ又由て以て民衆政治の確立の期し難きを如何ともすることが出來ぬのである。尤も民衆政治は必ずしも政黨に由るを要せずとの見地を固執すれば別問題だが、既に政黨組織を中心に立てて來た國柄に在ては政黨の發達振はざるは民衆政治の禍である。今日民衆政治が兎も角も相當の形にまで發達したのも實は金の力だと云へる、金の問題を除外して政黨を論ず

ることは出來ない。現に政友會でも後繼總裁の詮衡に當て頻りに「實力」を云々して居るではないか。或は財力を缺くの故を以て露骨に犬養推戴に反對するの叫びも聞える。之を汚いと罵るのは間違ひだ、全く金に緣を絕つては政黨は滅ぶるからである。後繼總裁は犬養翁に落着くか否かは分らない。傳ふる所の如く犬養に金の手蔓がないのなら彼れの總裁は暫定であらう。暫定でなくて彼れでもいゝと云ふ位なら他に一層適任な高橋是清がある、樞密院に於ける政友會の別働隊伊東巳代治平沼騏一郎等にも挨うに總裁のお鉢は廻つた筈だ。手腕聲望の一流を差措いて金に緣の有りそうな粒の小さい所が問題となる點に、我々は政黨と金との關係の意外に重要なるを想ふべきである。

政黨にはどうしても金が要る、どんなに正しい途を執つても巨額の金が入る。之をどうして得るか。之は各國の政黨に取て未解決の問題である。既成政黨の樣な隱れたる金穴を有せざる無產政黨に於て特に肝要な問題と認められて居るが、既成政黨とても――我國のそれは暫く除くとして――決して之を解決し了つたものとして居るのではない。英國に賣爵の慣例あるは有名な話だ。但し金を持て來さへすれば誰れにでも爵位をやると云ふのではないそうだ。惡例ながら努めて之を善用せんとするに細心の注意を拂つて居るとは云ふが、理に於て之を許して可なりとするものは流石に一人もない、何とかして之をやめたいと誰しも冀ふて居り乍ら、他に之に代はるべき安全な途のないのに惱んで居る。ロイド・ジョージでさへも必要な選擧資金を之に依て作るを餘儀なくされたことを告白して居る。米國の共和黨が財閥の寄附に倚つて居ることは是亦隱れもない事實だ。その結果民衆政治の途に財閥政治に墮するの恐れなきかが大に懸念される。民主黨では多數の支持者を廣く民間に求めて之から少額の據金を掻き集めんとの策を取ては見たが、斯んな事では到底必要な金の幾部分も作れぬことが明となつて困つて居る。大陸諸國の無產諸黨は他のブルジョア政黨の樣な便宜を缺く所から、主として所屬の團體及び黨員個人から出捐を徵集するの方法を執つて居るが、更に之に新聞刊行圖書出版等に依る所謂事業收入を加ふるも、なほ經常費の支辨にすら足りないとの事である。我國の無產黨などは所屬黨員よりの徵集が勵行されず、それに各派對立抗爭の形勢は一層會費の徵集を不便ならしめて居るが故に、この點から謂つても近き將來に於ける飛躍的發展の可能が危まれる。要するに政黨の金はどうして作つたらいゝか、之は世界的に未決の大問題である。思ひ惱んだ揚句國庫をして幾部を負擔せしむべしとの說も唱へられたが、我國でも現にたしか永井柳太郎君に依て選擧國營論の叫ばれたこと

があつたと記憶する。一理ある議だが財政上の均衡の點から何處でも具體的の問題にはなり得ぬ樣である。

金は飽くまでも入る、而して之を得る正しい途は開かれて居ない。と云へばその結局の行く途は問はずして知るべきのみだ。

それにモ一つ私は政友會が格別金の入つた政黨であることを注意して置きたい。明治十四五年自由黨改進黨と並んで發達した兩黨の中、憲法發布後自由黨系がぐん／＼發達して大政黨の結束を遂げたのは全く金の力ではないか。星亨も偉い、併し之に金の力が加はらなければ到底あれ丈けの統制力は立て得なかつたと思ふ。自由黨が強くなる。流石の藩閥も之には弱はつた。眞向から鬪ふの無駄なるを悟りて遂に裏から妥協の手を出すの策に出たが、その時政府は全然改進黨を無視したのであつた。自由黨と藩閥との提携はお互に相手方を利用しようとの懸引に終始したので、永續きせなかつたのは致方はない。一旦その破るるや今度は自由改進の兩黨が連合の勢容を以て一擧に藩閥の牙城に迫るの概を示したが、不幸内訌の爲めに腰が碎け、再び藩閥の勢威を盛り返すことになる。其後改進黨の因循爲す無きに反し、自由黨の更に陣容を樹て直したのは、啻に板垣を棄てて伊藤を總裁に迎へた爲めばかりではない、要するに裏面に動く金の力のお蔭である。斯んな事を細かく述べ立てては際限が無いから略するが、兎に角政友會は金の力に依て多數の黨員を統制し之に依て見事に天下を藩閥の手から奪還したのである。金を得るの手段の何であれ、藩閥政治を意外に早く覆へしたと云ふ效績は我々の十二分の、感謝に値するものである。

私は憲法發布前後の政論を讀み、最も卓見に富む學者にして尚且我國に於ける政黨政治の確立をば百年の遠きに期せるの常なるに鑑み、其半ばに到らずして閥族政治を屛息せしめたるの偉功を想ふて、時に案を拍ち政友會よくやつたと感嘆することがある。併しその爲めに政友會は他面隨分罪を重ねた、罪を重ねずしては藩閥を倒すの實力は養へぬのだから致方がない。功罪を比較したら或は其功を大なりとすべきであるかも知れぬが、たゞそれだからと云ふて必要のない今日又は事情の變つた今日まで、惰勢的に昨日許されしものを漫然として明日に續けられては堪つたものでない。政友會は今日目が覺めなくてはならないのだ。覺むるを知らざれば、折角の過去の功勞をも自ら之を泥土に委するものと謂はなければならぬ。

藩閥を前に置いては急いで「數」を集める必要があつた、其の爲めに惜氣もなく金を振りまいた。今は相手は變つて同じ敵の反對黨である。藩閥は何としても急いで倒さねばならぬ、反

對黨は唯正しい方法に依てのみ倒すことが許される。不當に金を作つた辯のある者はとかく不當の多數を故造して不義の勝利を政戰に占めたがる、一時の快は貪り得ても夫れでは今日の世間が許さない。世間の惡評にも拘らず依然として金で統制力を築き上ぐるの樂な途を取り必要以上に金の調達に苦心するのが政友會の近狀ではないか。

以上は專ら政友會の關する所だけれど、相手が斯う出れば民政黨とて自然之に釣られぬものでもない。民政黨も此頃のやうに再々天下を取るの幸運に惠まれると、折角握つたものを放すまいとして知らず〱無理をせぬとも限らない。政友會の惱みは矢張り同時に民政黨の惱みでなければならぬと思ふ。

ひとり政友會ばかりではない民政黨でも同樣だが、瀆職行爲に依て黨資を作ることを封ぜられた政黨は今後その償ひを何處に求むるであらうか。それだけ無ければ無くて濟むと云ふわけに往かぬことは前段述ぶる通りである。どうしても入るとなれば必ず何處かに埋め合せを探すに相違ない。それには一應從來政黨は如何の處に費用の供給を仰いで居たかを想像して見るの必要がある。無論各黨派とも之を公表して居ないのだから凡てが想像に頼るの外なく、又極めて抽象的な觀察に止まるも已むを得ない次第である。

從來の黨資には大體二つの財源があつたのではないかと思ふ。其の第一の種類は廣義の寄附である。之に黨員の出すものと黨員外から來るものとの細別があるだらう。(一)黨員の出すものの中最も大なるは總裁たるべき人の提供に相違ない。總裁以外幹部級の人達も相當に出すには出すだらうが、總裁の負擔に比較すれば云ふに足らぬものと推測される。勿論之等の人達にはその私財を割いて數名の代議士の當選を助けて居ると云ふ樣な事はあらう、其外種々の手段に依て若干の所謂子分なるものを有つて居るに相違ない。この子分の數とその提供せる出資と其の擁する財力とが其の多少の手腕と相待つて幹部としての彼れの地位を定むるのであらう。されば幹部の仲間入りするには全體として可なり金の掛ることには相違ないが、之を總裁の負擔に比すれば固より云ふに足らぬものと觀るべきである。田中總裁は三百萬圓の持參金と持囃されたが、其後隨時の必要に應じて幾らしぼられたか分らない。何事が起つても金で黨員に迷惑をかけぬのが總裁の隱れたる一つの任務なのだ。從つて一黨の總裁たるには先づ無盡藏の財源を用意して取掛らねばならぬのである。而してそれだけの金が所謂私財の提供に出て賄ひ切れる筈はないから、そこで直に疑問が起る、そは必ずや第

三者の寄附に出づるものであらうと。所で當節そんな大金を無條件で出す奴がない、あつたとしても唯で貰つて默つても居れまい。於是請求さるる形になつてるるか否かの差はあるとしても、其の大金の提供に對して必ずや一種不當の義務の附隨するを免れないことになる。(二)次に直接に黨外より來るものは我國に於て案外に尠いやうだ。尠いのではない大部分は黨内の有力者を通ずるを常とするからである。選擧の時などには有力な會社にして朝野兩黨に等分の寄附をする習慣があるそうだ。今は政友會一方の立物たる内田信也君がまだ青年實業家として横田千之助あたりにこぢき廻されて居つた時、憲政會總裁加藤高明に珍品五個を送つたと云ふ例もあるから、意氣地ない實業家の中には八方美人的に萬遍なく各方面に秋波を送ると云ふも稀な例ではあるまい。之等には固より何等の義務も附かぬのであらう。寄附する者も多少の好意以外何等の報償を期待するものではないやうだ、從て其額も亦決して大なるを得ぬ。全體の費用から云つたら九牛の一毛にも足らぬのであらう。

して見ると寄附の中最も重なる部分を占むるものは矢張り總裁(又はその腹心の幹部數名)と有力なる財閥との間に行はるる暗默の取引に依るものと謂はねばならぬ、而してそは額の大きいことと極祕の間に行はれて殆んど漏洩の恐れなきことを特色とする。從て時として之と次の第二種とは僅かに紙一枚の隔りに過ぎぬと云ふ樣な場合もあらうと思ふ。

第二の種類は總括して地位の濫用に由る臨時收入と云ふことが出來る。天岡事件の如き單純な瀆職行爲は別として、(一)小川平吉の場合の如く寄附を條件として直接に利權を許與するあり、(二)許否の權を有する者との關係を潤し利權の獲得に運動するを約して金品を收授するあり、(三)許否の權を有する者が祕かに政友に勸めて利權獲得の競爭渦中に投ぜしめるものあり、外に(四)利權問題を黨勢擴張の用に供することもあるが之は不義の利をくらはす點に變りはないが直接に金品を收授するのでないから問題外とする。さて以上の方法で收め得た金品は全然私用に使消するもあらうが、額が多ければ何時までも私腹に蓄へることは許されぬ、時を移さず黨會計に出すこともあらうが、姑く自分の計算の下に置き結局は黨の爲に支出するを辭せぬと了解さるる場合が普通であらう。何れにしても此種類のものは手段方法は決して以上に盡くるに非ず凡ゆる方面を喰ひ荒し從て金額も可なりの巨額に上ることはもはや公然の祕密となつて居る。

こゝまで述べて來たら聰明な讀者は直に今度の檢擧究明に懲りて跡を絶つのは所謂この第二種の臨時收入だけで、第一種の

寄附は依然として存續するだらう否益々之に頼るの度を増すだらうことに氣づかれる筈だ。然り、此點にモ一つ重大な問題は實に我々の檢討を待つて居るのだ。嫌な利權屋の漸次蹤跡を亡くするは愉快な話だけれども、巨大な財閥の魔手が知らぬ間に政界に伸びるのは怖しい。

さうすると、或は財閥の政界攪亂は從來とても同じ事なのだ、今頃そんな事に氣が付くのは迂愚の至りだなどと譏る人があるかも知れない。殊に一知半解の青年間に共産主義の社會革命の公式が無批判に信奉せらるる我國の現狀に於て、此事は一應の說明を要する事柄なのかも知れない。我々の間には分り切つた事なので今頃斯んな說明を試むるのは實は幾分氣恥しい思ひもするのである。

私は（一）今日まででも財閥が巨額の寄附を政界に提供しその對償として不當の義務を政權に課した事實を認めぬではない。併し乍らその對償として求むる所は常に概して極めて消極的のものであつた。甚しきは昔の町人が大名の我儘を免れんが爲めに御用金を差上げたと云ふ樣な性質のものもあれば、俗な意味での一寸した社會的榮譽の許與又は物品納入權の獲得など云ふ事位に滿足したと云ふのもある。昨今實業家が勢揃ひして政府に或種の提言をすると云ふ樣な事もあるけれども、其の無力なるは現に諸君の見らるる通りでないか。今日の既成政黨の政策が概して資本家本位に偏するは彼等が自ら資本家の仲に伍するか又は少くとも在來の傳統に引摺らるるの結果にして、財閥が意識的に政治家を左右して居るが爲めではない。日本の財閥は政權に對立し之を命令する程にまだ獨自の健全なる發達を遂げては居ないのである。（二）而してその事の一つの理由を我々は日本の產業が由來殆んど例外なく官權の庇保の下に生れ從てその厚き保護に慣れ必要なきに到りても戀々として之を棄て難しとせる歷史に見出すことが出來ると思ふ。馬鹿な横車は押さぬからいゝ樣なものの、今日我國に官憲から旋毛を曲げられてもビクともせずに切拔け得る產業が果して幾つあるだらうか。（三）だから今の所はどうしても政權金權を支配する世と見なければならない。政權も巨額の寄附を求むる以上丸で金權に頭を下げぬ譯には行くまいが併し主從の關係は未だ紊されては居ぬらしい。請托といふ所までは漕ぎつけても命令といふ所まではまだなか／＼往つて居ないと考へる。（四）それに政黨の財源が大財閥の寄附のみでない、假令不正の方法であつても政黨自ら別に之を作る術を有つてゐたといふことも亦政權に取つての一つの強味であつたらしい。斯う云ふ事情を考へると、

金權の政界に於ける威力は漸を以て伸びつゝあつたと云ふことは之を認めざるを得ぬも、財閥が西洋に於けると同じ樣に早くから有力に政界を左右して居たと說くのは、全然我國にあてはまらない說である。

そこで之れからは如何なると云ふのが私に取ての大問題だ。政黨には金が要る、之が供給を受くる途は今後最早唯一つしか殘されてゐない。之に就いては（一）政黨の側に於て西洋の無產黨がやる樣に又我國の無產黨が今後是非ともやらねばならぬ樣に黨員自ら醵出すると云ふ困難な途を擇べば問題は別だが、こゝまでの醒覺を今日の既成政黨に期待するは無理だ。選擧民に不當の利をくらはすことに依て發達せる既成政黨の永い間振り蒔いた惡習の爲めに、今日の無產黨がどれ丈け黨費を集めるに苦んで居るかを思へば、遺憾の事だが右の意味に於ける政黨自らの醒覺は絕望と認めねばならぬ。次に（二）財閥自らが政權の要求を斷乎拒絕して呉れるなら是亦問題はない。併し乍ら今日の資本階級に政權を左右するの快味を諦めしめんとするは、娼婦に向つて節操を確持せしむるよりも難い。私の考では政權が彼等の門を叩く前に却て彼等が出張つて政權を誘ふのではあるまいかと思ふ、況んや兩者の慣合ひは疾くの昔から既に始まつて居るに於てをや、

さすればどうしても今後は政權の方が我から頭を下げて金權の哀を乞ふと云ふ新關係の展開を豫想せざるを得ぬ。陰密の間に自然の變化の上に水のにじむ樣に進むのであらうから、何時からと明瞭な區劃をすることは出來ないだらうが、大體今日を境として政權金權の結托が漸く主從の關係を顚倒し、資本閥の露骨な政權支配と云ふ大勢が順次その姿を白日の前にさらすのではあるまいか。之を馬場君の樣に怖るるに足らずとするも一つの見識であるが、假令怖るべからずとしても國民の眼からは兎に角新に始まれる政界の一大厄難たるに相違はない。之と鬪ひ之を突破して眞正の民衆政治を樹立し得べしとせば這の難關も亦歡び迎ふるに足るとなし、心中に之を突破するの自信を蓄ひ起すべきであるも、一面に於ては又一難を去つて更に一難を加へたるの現實を見誤らず、瀆職事件の檢擧究明について新に課せられたる問題の何たるかに更に我々の注視を嚴にするは、喫緊の必要と謂はねばならぬのであらう。



人間勞働史物語

石濱知行

(一)

『勞働と社會は、それから人類が發達し來つたところの歷史的子宮である』――ドイツのある經濟學者は、その著書の中でさう言つてゐる。この短かい、がしかし含蓄ある一句のうちに、何十萬年にわたる長い間の人間の歷史的發展の最も根本的なる條件が、巧みに、そして比喩的に言ひ表はされてゐる。

われわれ人間は、それ自身がすでに自然的產物であるのみならず、また、その日常の生活に於いて常に自然から離れることが出來ない。われわれの住居たる家屋は、木材または石材等から成り立つてゐる。われわれの衣服は棉花または獸よりの生產物、あるひは羊毛等より出來てゐる。またわれわれの食物は、米麥野菜等の農作物、肉等である。そして、われわれは自然である土地の上に、太陽の光を浴び、空氣を吸ひ、水を飲まなければ、一日といへども生きて行くことが出來ない。これらのわれわれの生活に直接關係あるもつとも重要なる品々は、考へるまでもなく、ことごとく自然の產物である。だから、その點をのみ觀察すれば、人間は自然に全く隷屬してゐるがごとくである。

しかし、われわれは、自然との密接なる關係に於いて、決して受働的にのみ、自然から成果をうけてゐるのではない。人間は常

廢した土地を耕作地に變じ、沼澤を埋立ててそれを人間の生活に適するやうに利用する。水を沸かして、蒸氣をつくりその力で機械をうごかし、汽車汽船を動かすことを知つてゐる。オランダには、風の力を利用する風車が、美はしい青空に廻つてゐる。鬼怒川の急湍はせきとめられて水力電氣をつくるために利用せられてゐる。これらはほんの僅かな一例に過ぎない。とまれ、人間は、自然からは一日といへども離れることが出來ないが、と言つて自然の力に受働的にのみ服從してゐないで、すゝんで更に自然を、人間の生活に都合の良い樣に、利用し、應用し、變形し、調節し、統制する。乃ち自然に對して人間は能働的にはたらきかける。けれどもまた、この人間の自然への能働的作用には自ら一定の限界がある。二十世紀は科學の時代と言はれてゐる。そして科學の時代に生れたわれわれは、『自然の征服』を豪語してゐる。けれども、人間は冬の眞中に稻を植ゑてそれの成長を期待することは出來ない。山林を、濫伐することによつて『征服』すれば、洪水の復讎をうける。だから、自然への働きかけにも、ある一定のミニマムがある。それは自然の法則である。

上にのべたことを要約する。人間は自然の影響のもとにあるが、しかし、同時にまた他方では、自然の法則に準據することによつて自然に對して積極的なる能働作用をなす。從つて、人間と自然とは相對立し、そのうちの一方のみが他方に對してヘゲモニーを有つといふ理論——そのうちで著名なるものはミリユー・テオリーと言はれる——は誤謬である。この二つのものは、相對立はするが、その關係は相互的である。この自然との間の相互作用によつて、人間はその存在、生存、發展の可能性があたへられるのである。

かくの如く、人間が自然に關係するに當つて、自分自らの行爲によつて、自然との代謝を仲介し、統制し、管理する一行程をわれわれは勞働と呼ぶのである。そして、人間は勞働をするにあたつては、勞働の目的物であるところの自然に對して、人間の勞働力を傳へるところの手段乃ち道具、機械等の廣い意味での器具を稱して勞働の手段といふのである。だから、われわれ人間は、自然との相互關係に於いて、勞働手段を使用して勞働を行ふことによつてはじめて、その存在、生存、發展が可能とせらるるのである。この意味に於いて、勞働は『凡ゆる人類生活の第一の根本條件であり』『人類生存の缺くべからざる第一の基礎』なのである。今日に至るまでの人類の歷史は、從つて、勞働あつてこそ初めて可能であつたのである。少しく誇張的に言へば、人類の歷史は人類の勞働史である。あのギリシヤ、ロ

ーマに於ける苛酷なる奴隷の勞働がなかつたならば、あの燦爛たるギリシャ、ローマの文化、藝術、宗教――從つてまた第十五世紀の文藝復興も亦なかつたのである。靑丹よし奈良の都は咲く花の、にほふがごとくいま盛りなり。奈良の文化の陰には營々として勞働をいそしんだヤカトの汗があるのである。「アドリアチックの花嫁」と呼ばるるヴエニスのサンマルコの寺院、美はしきラインに沿ふケルンの大伽藍、それら選ばれたる藝術も又人間の貴き勞働の結晶である。

人類の歷史は人類の勞働史 (Geschichte der Arbeit, Histoire du Travail, Evolution of Labour) である。

(二)

ドイツの經濟史家として有名であるカール・ブユッヘルといふ人は、その代表的著作である『國民經濟の成立』に於いて次の如く言つてゐる。

『人間は極めて長い間勞働せずして生存してゐたことは疑ふ可らざる事實である。若し望むものあらば、今日なほ地球上に西穀米、芭蕉、パンの樹、コヽア樹、無漏子樹によつて、ごく僅かの勞力を費して生活し得る地域を發見することは決して困難ではなく、そここそ屢々現はれ來る所謂パラダイスであつて、人間の故鄕である。』

すなはち、彼の言ふところに依れば、人類はその原始時代に於いて、勞働せずして生活した時代があつたのである。けれどもこのビユッヘルの說は次の點で間違つてゐると考へられる。

なるほど當時に於いて、椰子樹やパンの樹が繁茂し、そのまゝで食用に供しうる草根木皮が充分であり、特別なる努力を、はらはずして生存し得たやうな熱帶の地方があつたことは事實であらう。しかし、かゝる『パラダイス』は、はなはだすくなかつたのみならず、當時に於いて、人類が最も數多く、しかも高度の發達をなしたのは、それらの物質の豐富である熱帶の地方ではなくして、反對に、物資のよりすくない、住心地のよくない地方であつたのである。加ふるに、地球の發展の途上には大氷河時代なる時期があつて、この間は永く續いて、多くの植物や、動物はこれがために死滅してしまつた。ひとり人間のみが、この苦難なるべき氷河時代を切り拔けて、連綿として今日にいたるまで繼續し來つてゐるのである。かゝる時代に、なほビユッヘルの言ふがごときパラダイスをそこに想像し得られるであらうか。否な全く反對である。かゝる惠まれざる環境のうちで人類のみがわずかに生存し得たのは全く勞働の賜物である。『熊の皮』の上に座して、長い受難の時代を經過し得るとは何人か考

へ得らるゝか。またこれを一般的に言つても、人類が永い間勞働せずして生活して、その後に於ける人類の文化的發達を果して期待し得ることが出來るか。人類は絕えず勞働を續けたればこそ、その後に於ける高度への發展がはじめて、可能であつたのである。ビュッヘル自身、さきに擧げた一句の次に、『男子は普通、たゞ弓箭又は投木を裝ひ、女子はその主たる道具として尖れる棒の土掘杖を携へて塊根を探すの用に供してゐる』と言つてゐる。簡單なりとは言へ、すでにかゝる勞働手段を人類は製作する能力を有してゐたのである。道具の生產、それはすでに立派なる勞働である。

ビュッヘルは、ごく僅かの努力で生活し得たパラダイスを描寫して、そこにはいまだ勞働のないことを論じてゐるが、彼はまた他のところで、勞働よりも以前に遊戲が先に存在したことを說いてゐる(彼の著作、四つの概要)。がしかし、スペンサーはその著書である『心理學の基礎』に於いて、遊戲は、それの內容をなす勞働を模擬するところ、かゝる勞働の現實的興味を再現せんとするところにおこることを述べ、プレハーノフは、『再び原始民族の藝術について』なる論文のうちで、『遊戲は力の實際的な行使乃ち勞働によつて得られる滿足を再び經驗しようとする衝動によつて產み出される。』と言ひ、ヴントは、その著作、『倫理學』のなかで、『遊戲は勞働の子供である、といふのは自明である。時間的に先行する眞面目な勤勞の任意の形式のうちに、自分の模型を有しないやうな遊戲の如何なる形態も存在しない』と明言してゐる。遊戲は勞働に決して先行するのではなくして、遊戲は勞働の子供であり、從つて、勞働は當然遊戲に先行し、遊戲は勞働を摸倣し再演するところから、はじめて發生するのである。女の子が人形遊びをするのは、女子に子供を產みそれを育てるといふ事實があるからである。男の子が兵隊ゴッコをするのは、戰爭といふ事實があつたからであり、チャンバラ遊びは、それより前に幕末の活劇があつたからこそ生れ出でたのである。未開人の遊戲たる動物踊りは、彼等が狩獵といふ勞働をしたからこそ、それを再演せんとして行はれるのである。勞働は遊戲に先行する。

また遊戲といふことを、僅かな勞働、僅かな努力と解するならば、當時の勞働が今日の勞働のごとき『苦しき』もの、『嫌惡』すべきものじなかつたことは明白である。何故ならば、今日の勞働を行ふものは、その成果の僅か一部を享受するだけで、他の大部分は雇傭主に取られ、雇傭主は、出來るだけ多くを生產せしめんとして、勞働するものを強制するから、勞働は勞働するものにとつては苦しきもの、嫌惡すべきものである。がしかし、

原始人は勞働の成果を蓄收し得、且つ必要な丈け勞働すれば、それ以上勞働を強制するものはなかつた。從つて彼等にとつて勞働は、苦しきもの嫌惡すべきものではなくして、むしろ樂しきものであつたであらう。だから、ビユツヘルの言ふ意味が、「當時に於いても勞働は存在してゐたが、それは今日の勞働のごとき苦しきもの、嫌惡すべきものでなかつた」といふのであれば、それはまさしく正しい。

とまれ、人間の歴史に勞働なき時代を推測することは、理論上事實上ともに認容し得ざることである。人間の歴史は、終始、勞働の歴史である。

(三)

人間は勞働によつてその後の高い文化を建設して行つた。勞働は實に人類生活の根本條件である。けれどもそれに對してある人は言ふであらう。動物のうちにも、人間の勞働に比すべき行動を行つてゐるものはあるが、人類のやうな高度の文化的發展をなし得なかつたのは何故であるかと。もつともな疑問である。土撥鼠は自らの巢とともに多くの穀物を貯藏する庫をたてる。激流をさけてそのほとりに自らの住家を作るために木幹や枝葉をもつて流をせきとめる海狸は、仲間と一緒に一種の勞働團體をつくり、木を倒し、それを運んで住家をつくる。蜜蜂、蟻は團體的な行動をし、各成員に適當なる仕事を與へ、生計の保證をしてやつてゐる。またわれわれが猿のあるものについて、食料聚集及び外敵防禦のために、棒または石を使用することを觀察するならば、そこに動物も亦、道具を使用して勞働らしき行動をなすのを見ることが出來る。

だが、以上舉げたやうな動物の行動と人間の勞働の間には、次に述べるやうな差違を發見することが出來る。なるほど、蜘蛛がその巢をつくり、蠶が絲をつくることは頗る巧妙であるに違ひない。また、蜜蜂や海狸がその住家をつくる藝術にはわれわれも驚きの眼をみはる。けれどもこれらの動物が最も原始的未開な人類にも劣ることは、動物は、それらの行動をするに當つては、天與の自分の身體に具はれる器官をもつてのみ行ひ、高々自然をそのまゝの形態に於いて(例へば木の枝、石等)を使用するに過ぎないのに反して、人類は、天與の人體の器官のみならず、さらにそれの作用をより大ならしむるために、道具をつくることが出來る。たとへそれがごく簡單きはまる打製石器にしろ、また木の枝の先を僅かに削つた粗末なる矢にしろ、ともかく自然物をそのまゝの形態に於いてではなしに、それに幾分かの加工を施すことによつて、それから操作の目的に適合するやうに

道具をつくり、それをもつて勞働することを知つてゐる、が、棒や石切の使用を知つてゐる動物さへも、たゞそれだけで、決してそれ以上に達することが出來ない。猿は今日に於いてもなほその祖先と同じやうに棒や石切を使用するにすぎない。そして、いかなる猿の巧妙なる手と智慧をもつてしても、最も粗雜なる石斧（それは原始時代人類の普遍的な道具であつた）をすらつくることが出來ない。だから猿は燧石によつて火をつくり、それでもつて火を生活に利用することを知らない。ゆえに、最も高い程度に發達した動物の達し得るところは、ごく粗朴な方法で、道具として利用しうるところのものを自己の周圍において發見し得るにすぎないのに反して、人類は道具を工夫し作製することを知つてゐる。動物は道具として使用しうるものを finden することは出來るが、erfinden することは出來ない。消費財の生産と道具の使用とは人間を動物から區別するものではない。しからば、人間に特有なるものは何かと言へば、乃ち生産、防禦、攻撃の役に立つ道具の生産、これである。動物は自然において精々道具を見出し得るに過ぎないのであつて、それを作り出すことは出來ない。動物は自らの直接の使用のためにものを生産することは出來る。住居を作り、食物を貯藏することは出來る。しかし、直接の消費には役立たないが消費財の生産には役立つところのものを生産するほどの考へには到らない。生産手段の生産とともに、動物的人間の人間化がはじまつた。かくて彼は他の動物界から分離し、自分自身の王國を建設した。この王國は、一種特別の發展を持ち、他の自然界に於いては全く知られず、又全く比類なきものである」とカール・カウツキイは正當に言つてゐる。

しからば、かゝる道具の生産は何故、人類にのみ可能であつたか。

人間はもとから人間であつたのではない。ダアウヰンは、人類の祖先である特に著るしく發達した類人猿について我々に語つてくれてゐる。それは毛深く、髯や突出た耳朶があり、樹上に群棲してゐる動物である。この動物は樹上に生活してゐたが、地上に下りた場合は立行してゐた。立行はその結果として、四肢のうちの前二肢を歩行以外の操作に使用し得るに至つた。乃ち手である。長い年月にわたる練習と使用によつて可能となつた手の獨立は、人間を動物から分離さす最初の大きな出來事であつた。手の獨立は、及び獨立物としての手のしばしばの使用は、手の筋肉および骨骼を發達させ、手の運動をますます自由に、種々の方法に各種の操作に適するやうに、した。このことは人間の發達に二つの可能性を與へた。腦髓の發達がその一であ

る。立行するに至つたこと、樹上生活をやめて地上に下り食物の變化を生じたこと、勞育相關の法則によつて手の獨立、發達は人體の他の部分の發達を促したこと、手の使用に對する腦髓の度々のそして種々の方法をもつてする使用、これら及びこれらの間の相互作用は、人間の腦髓の發達を異常に進展せしめた。かゝる腦髓の發達は人類の勞働の上に次の如き特質を與へた。『一匹の蜘蛛は織匠とおなじやうな活動をする。そして一匹の蜜蜂は、その巢をつくるにあたつて、多くの人間の大工をも恥ぢしめるほど巧妙である。しかし、もつとも拙劣なる大工でも、初めから巧妙なる蜜蜂に優つてゐるところは、蜜蜂が巢をつくるごとく部屋をつくるまへに、先づ頭のなかでその部屋をつくり上げることである。』乃ち、他の動物と違つて、人間は勞働によつて最も合目的的になさんとするものを、先づ精神的に準備するのである。勞働の計畫的遂行は全く人間の腦髓の發達によるのである。人間が立行して手の獨立が出來るやうになつた結果の一は、いまのべた腦髓の發達であるが、他の一は、その手によつて道具をつくる可能性が與へられたことである。手が步行のために不用となるや、この手は人間の勞働力の使用の能率をさらに大ならしめるために、ここに自然に對し勞働力を傳へしむる勞働手段たる道具を作製するにいたつたのである。アリストテレスの言葉を借りれば、手は、『道具の道具』となつたのである。

かくして腦髓の發達と、道具の作製は、ここに人間の勞働を質量ともに發展させ、人類をしてより高度の文化への飛躍的進展を可能かつ必然的ならしめたのであつた。カール・フォン・ノイマンは、その著『原始世界の驚異』のうちで、言つてゐる。『ある人は、かつて、人類の文明史を簡單に定義して、人類の腦髓および人類の手の歷史であると言つた。――むかし、燧石で斧や小刀をつくつたところの手、自然の岩窟の壁を繪畫をもつて飾つたところのその手は、後代に至つてミロのヴイーナス像をつくり、ローマ法王宮殿ヴアチカノのある聖マドンナの名畫を描いた。又そのおなじ手は都市をつくり、華美なる宮殿をいとなみ、大きな汽車汽船をつくり、つひには、飛行機または飛行船を建造するに至つた。』

かくして、道具が人間の手によつてつくられ得るに至るや、弓矢等による狩獵、木槍、魚扠、網等による漁獵はますます盛になつた。その結果として、從來の菜食以外に、魚、鳥、獸等の肉食を容易ならしめたのである。肉食は人類の腦髓の發達を更に顯著ならしめた。もつとも重要なる作用は、肉食の腦髓におよぼす影響であつて、腦髓の榮養發達上、必要なる物質は、以前よ

りもより多く供給されるにいたり、從つて代を經るに從つて、ますます急激に、ますます完全に、腦髓を形づくることが出來た。……人間は肉類なしには生存し得ない。』

道具の發達、肉食の增加は、そこに火の發明を促がした。プロメテユースは天の火を盜んで地上に知らしめたる罪をもつて天の神々のために、黑海の岸に貪欲なるからすの攻擊をうけつつ岩にしばりつけられた。この『縛りつけられたるプロメテユース』の神話が物語るやうに、人間の火の發明は、大なる革命であつた。原始人類は、落雷によつて燒けつつある森林、噴火によつてほとばしる火などによつて、火の恐るべき作用を見たであらう。しかし、これを、自分達の生活に利用することをうるに至つたのは、人間が手を自由に働かせて、道具をつくるに至り、石を打して燧石をつくり、あるひは發火器をつくるに至つてからのことである。現在われわれが使用しつつある火といふ字は元來發火器の象形文字である。乃ち火の元の字形は业である。下の一は木の臺であり、たての｜は同じく木より成る棒であり、左右の二つの點は、人間の手である。すなはち、兩手によつて棒を廻轉して、それと下の臺との摩擦によつて火を發せしむるのである。發火器がさらに發展するとともに、兩手の代りに、轆轤が使用せらるるに至つた。かゝる方法による火の發明は人間の生活のうへに大なる影響をあたへた。第一に食物の調理法が變革し、食物の數が增加した。第二に、火の發明及び使用を知つてからは、人間は、氣候と地形とから獨立することが出來るやうになつた。從來は、高い山の上及び北方の地方は寒いので人類は生活し得なかつたのであるが、火によつて溫暖をとることを得てからは、寒いことを考慮する必要がすくなくなつた。また、從來は川のほとりとか、海岸でなければ食料を得ることが出來なかつたのであるが、火の使用によつて種々の調理法を覺えてからは、如何なるところでも、食物の材料を獲得することが出來るやうになつた。だから、これまで、人類は地形のよいところとか、氣候の良好なる地方とかに限つて住したのであるが、火を發明し、氣候、地形から獨立し得るとともに、人類は地球上いたるところに散布するやうになつた。火の發明は、第二に肉食をますます盛とならしめ、その結果として、從來狩獵したりし獸を牧するに至つた。ここで牧畜が行はれた。牧畜の起源に關して、エドゥアルド・ハーンは、その著、『家畜と家畜の人類經濟生活との關係』のなかで、牧畜の起源は禮拜より生じたものであるとしてゐる。その說によると、例へば、月蝕の時などに、月神(Mondgöttin)に、犧牲として捧げる必要から、野生の牛を平常から養つて置く。また、禮拜のときに、牛に車を輓か

すために、不常から牧して置く。それが牧畜の起源だと言ふのである。しかし、牧畜の起源を宗教におくこの説は、すべてを唯心的に解しやうとする觀點から見た説であつて、恰度トーテムの制度を魔術から説明せんとする説と同じで、本末を顚倒した説である。トーテムの起源は、原始時代に於ける原始人の生産の必要から發生し、それが、當時の人類の生活に必要なるところからトーテムといふやうなノルム的な制度として後に殘るに至つたのである。牧畜も同じで、肉食が發達し、火の使用による調理法が進んで來るとともに、動物に對する需要が激増しその必要が、牧畜の發生を促したのである。宗教的禮式は、牧畜が起つてから發生したと解すべきである。

人類の勞働は、さらに進展して農業を行ふに至つた。かくして人類の歴史は、さらに高度の段階に入つたのである。

（四）

さきに、遊戯と勞働との關係を論じて、勞働は遊戯に先行するものであるといふことを述べておいたが、ここではすこしとどまつて、勞働と諸種の文化形態との關係を觀察して見やう。

先づ言語について見やう。猿、鹿、野馬、その他の鳥獸のうちには、食料探索の際には、年長のものが全群を案内し、所々に歩哨を立てて、叫と鳴聲とをもつて相互に諸種の通告をする。アルプスの山に棲む羚羊は巧妙なる獵夫をもしばしば失敗させる。それは彼等のうちのあるものが、獵夫を見つけたら、一種の叫をもつて、それを全群に傳へ、危難から全群を救ふからである。オツトセイは、必ず一人の斥候を岩の上に立てて危急を全群に知らしめる。また、われわれは、森を行くときに、つぐみ、鵯鳥、掠鳥等の小鳥が悲鳴を舉げてわれわれの來たことを警戒し合ふのをきくであらう。動物はかかる方法で、ごく簡單に、相互に傳言をしあふ。人類もまた原始時代には、同じやうな不完全なる傳言方法を利用したのである。しかし、人類の社會的結合と、勞働と腦髓の發達は、この不完全なる叫聲を言語にまで發達せしめた。勞働の發達は、殊に原始時代に於いては、相互扶助、共同動作の必要を感知せしめ、從つて共同動作をもつて勞働を營むにあたつては、相互のあひだに意思を傳達し合ふことが必要であつた。そこに言語が生じたのである。言葉の發生を勞働から説明し、また勞働によつて説明するのが唯一の適當なる方法である。文字は言語が更に發達したのち同じ必要から發生したものである。われわれは古い歴史のうちに語部なる特殊の身分の存在するを知るであらう。これは過去の事蹟を言語をもつて一つの時代から次の時代へ、つぎつぎに傳へて行

く役目を帶びた人達である。しかしかゝる方法は、不完全であり、時代の經過とともに不可能になつて來た。それが記述的言語すなはち文字の發生をうながしたのである。だから、文字もまた、言語を通じて、勞働の所産であるといふことが言ひ得るであらう。

次に學問と勞働との關係を見よう。歴史をひもどくときに、黄河のほとり、あるひはチグリス、ユーフラテスの河のほとりに、またナイルのほとりに、天文學、數學等の今日に於いても高等なりと考へられてゐる學問が、古き時代にすでに發達したのを知つて驚かずには居られぬであらう。これはまことに理解し難き一つの事象である。しかし、當時、それらの地方に於いて農業的勞働が主たる勞働であつたことを知れば、理解は容易となるであらう。乃ち農業勞働にとつて何よりも必要なことは氣候、天氣の測定である。ナイルの河は一年に一度は必らず氾濫する。そしてその都度、沃土を流し來る。この沃土がエヂプトの農業にとつては絶對的に必要であつたのである。だから、一年のうちの一定時期に來る洪水の時期を知ることが必要であつたのである。また農業にとつては、雨を知り、暴風雨の襲來を豫知することが大事である。これらのことから、天文學、暦學、數學等の學問は必然的におこらざるを得なかつたのである。だから、これらの學問を發生せしめたものは實に勞働であつたのである。

前に述べたドイツの學者ビュッヘルには「勞働と韻律」といふ著書がある。これは、音樂と勞働との關係を論じたすこぶる興味ある著述である。ドイツの哲人ショーペンハウエルは「音樂は現象界から全く獨立せるもので、謂はば現象界が全く存在せずとも、音樂はなほ成立し得るものである」と言つて音樂をもつてまつたく超自然的なものと看做してゐる。ビュッヘルはこれと反對の見解を有し、音樂をもつて勞働より發生し、勞働をもつて音樂の基礎的要素としてゐる。彼の云ふところをきかう。人間は勞働を行ふに當つて、身體の單調なる筋肉の運動を排し、その能率を上げ、勞働を長く繼續せしめんがために、勞働をリズミカルに行はんとする。そのために、もし道具を持つて勞働せるときには、その道具を或は板に、或は道具同志を打合せて拍子をとる。もし道具を有しないとき、例へば車を挽く時、歩行する時には、人工的の手段をもつて韻律をつくる。すなはち、その一は人間の聲であり、他は樂器を用ゐる。かくして、勞働をリズミカルに成さんとするところから音樂が發生したのである。そして、それらの韻律は、與へられた生産の技術によつて規定されるのである」また、それらの勞働に隨伴する歌謠

の內容も勞働そのものを內容とする。」ビュッヘルは結論して言ふ。「その發達の最初の段階に於いて、勞働、音樂および詩歌は最も緊密に相結合してゐた。しかしこの三位一體の基礎的要素は勞働であつた。自餘の二要素は從屬的な意義を有したにすぎない。」かくして田植唄は田植勞働より發生し、ヨイトマケは、綱を曳いて勞働を共にする協業から發生したのである。

舞踊の發生は、勞働の再現である。原始人の間に行はるる動物踊、狩獵踊、大漁踊、農業踊を見よ。ビュッヘルは言ふ。「原始民族の多くの舞踊は、それ自身一定の生産的行動の意識的な摸倣以外のなにものでもない。かくて、この摸倣的描寫に際しては勞働は必然的に舞踊に先行しなければならない。」

私は今を去る數年の昔、秋深きイルム河畔のワイマールを訪ねた。落葉に埋れたリスト・ハウスをたづね、その足で同地の博物館を見た。そこにはテューリンゲンの地に於ける古代人類の殘した種々の藝術を見た。そのうちでも、いまなほ、私の記憶に鮮かに殘されてゐるのは、原始人が壁に描いた繪畫である。それは一人の男が牛とおぼしき動物を狩獵してゐる圖である。いかにも原始人の藝術らしく單彩をほどこした素朴なるものである。その後、ある本でブッシュマン族の狩獵の繪を見て、その似てゐるのに非常におどろいたことがある。私は、ワイマールに殘された原始人の狩獵の繪の繪畫を買つてかへり、いまなほ珍藏してゐる。「アルタマリヤの洞穴、ドルドーニュにその棲息の遺跡を發見せられた古代の狩獵民族が、彼等らしく上品に畫けることを知つてゐた民族であつたことは疑ふ餘地はない。彼等は、既に狩の獲物を獲得した場合、或ひは自然の都合で狩獵が出來ない場合は、自分達の住む洞穴の壁や、馬の骨や、マンモスの牙や、馴鹿の角に、觀る者を恍惚たらしめる狩獵のスケッチを一面に描いた。又骨を刻んで動物や人體の姿を描いたが、それは信ずることのできないほどの正確さを以てよく均勢を保ち、純粹に眼に訴へた作であり、純粹に實物に即した作であり、そこには何等の文學的宗教的な寓意は見出されない。これらのものは……あらゆるシムボリズム、あらゆる非感官的能的意義とは全く無緣のものであり、豐かに潤澤な動物學的、人類的觀察力の反映である。グロッセは或る實驗者の談ずる所に據つて、かのドルドーニュの前期石器時代の狩獵人、及び同時代のその他の遺跡發掘の場所と文化の程度に於て等しい小ブッシュマン族が、その藝術を「純粹に表現慾に刺戟せられて作る」といつてゐる。」（ハウゼンシュタイン著「藝術と社會」）ここにも藝術たる繪畫と勞働との密接なる關係を見る。かかる關係は如何に解すべきであるか。

それに對して、プレハーノフは次のごとく答へてゐる。「非常に低級な狩獵種族――譬へば、ブッシユマン或はオーストリア土人――すら繪を描くことは事實である。彼等のところには、私が他の手紙で論ずるであらうやうに、眞の畫郎が存する。チユクチ及びエスキモーはその彫刻細工によつて有名である。それに劣らぬ藝術的傾向によつてマンモス期にヨーロッパに居住した種族が知られてゐる。……原始狩獵人の藝術活動の性質は明かに、有用な對象の生產及び一般に經濟的活動が藝術の發生に先行し、從つてまたその上に最も鮮明な刻印を押してゐることを證明してゐる。チユクチが狩獵に從事し、次に自分の狩獵を繪畫に再現し始めたのは明かである。全く同樣に、若しもブッシユマンが殆ど專ら動物、孔雀、象、河馬、鴕の鳥、及びその他を描いてゐるとしたら、それは動物が彼等の狩獵生活において絕大な決定的な役割を演じてゐるからである。最初に人間は動物に對して一定の關係に立つた（彼等を狩獵し始めた）、次に――而も正に彼が彼等に對して一定の關係に立つた故に――彼のところにこれらの動物を描寫せんとする衝動が生まれた。では何が何に先行したのか、勞働が藝術にか、それとも藝術が勞働にか？」

勞働と文化の諸形態との關係は上にのべた通りである。その他、裝飾、文學、等についても勞働との關係を述ぶべきであるが、こゝにはそれを略することゝする。

人間の腦髓が發達して、精神的活動が、豐富かつ多種的に發達し來るとゝもに、かゝる勞働と諸文化形態との關係が、恰も正反對に說かるゝに至つてゐる。それは、社會に於ける精神的物質的の諸現象が複雜となり、兩者の關係が原始時代ほど素朴に見えないからである。そこに兩者の關係の倒錯的理論が行はるゝに至るのである。

（五）

勞働は、あらゆる人類生活の第一の根本條件であり、あらゆる時代を通じて、人間の歷史的發達の基礎をなしてゐるのである。勞働なしに人類の生活は不可能である。

しかし、勞働は、歷史の各段階において決して同一なる制度のもとに行はれるのではない。勞働そのものは千古を通じて渝らず人類の歷史の根本をなすが、その形態、制度、關係は、各段階に於いて各々ことなる特質をもつてゐる。

人類が血族制度と生產手段の總有によつて生活してゐた原始共同體の時代においては、勞働は大規模の共同的計畫のもとに行はれる。オーストラリアの土人及びアメリカ・インディアンの

中に存在したトーテム制度なるものは、實にかゝる共同勞働制度が過去に於いて行はれた證據である。この段階に於いては、勞働の成果は各人に平等に分配せられ、そこでは利己的感情が稀薄であつて、もつぱら、全體もしくは他人のための道徳が行はれてゐる。財産の不平等は存在せず、從つて階級の區別がない。そのことは勞働の收奪なる現象をもち來さない。勞働も共同的に行はれゝば、勞働の成果も亦共同的の所有に屬する。しかしかゝる段階は、村落共同體を最後として、次の段階に入る。村落共同體は原始時代に於ける共同關係の最後の形態であつて、そこにはすでに、次の段階に於けるいろいろの關係が、共同的の關係とゝもに混在する。

原始共同體につぐ段階は、古代社會である。こゝでは、勞働は奴隷制度なる形態をとる。奴隷制度なるものは、奴隷なる勞働者を必要とするほど生産が發展し、また奴隷をやしなふに足るほど餘剩の生産が可能なるに至つてはじめて發生するのである。奴隷は人間であるが、同時に奴隷所有者の所有に屬する一個の財物でもある。奴隷は捕虜、債務不履行者、遺棄された子供、奴隷市場で賣買された奴隷等から成る。奴隷には人格もみとめられなければ、自由もみとめられてゐない。勞働力の實際的所有者は奴隷であるが、實は奴隷所有者である。奴隷は主人によつて最低度の生活を保證せられてゐるが、そのために、奴隷の勞働より生ずる成果はこと〴〵くみな主人の手に歸する。奴隷は主人所有の財物である。しかしこの財物は勞働力といふ價値を生産する潜在的な力をもつ。だから、主人はこの財物たる奴隷を出來るだけ勞働させてその潜在的な力を充分發揮させ、それより生ずる價値を全部自己のふところに入れやうとする。奴隷の勞働はそれゆゑに苛酷である。「バビロンの囚虜」、ギリシヤ、ローマの奴隷、スパルタのヘロット、支那の奴婢、雜戸、隨民、蛋戸、日本の官戸、陵戸、家人、公奴婢、私奴婢（所謂五色の賤民と言はれてゐた）は乃ち各國に於ける代表的奴隷である。奴隷は勞働を強制せられ、それに從はざるの時は嚴刑を課せられ背中に烙印を押され、牢獄（ローマにはエルガストルムと稱する奴隷專門の牢獄があつた）に投ぜられた。有名な「サムソンとデリラ」の物語にあらはれたサムソンの苦惱を見よ。奴隷制度の盛期には、奴隷以外のすべての人は奴隷勞働の上に寄生した。社會はたゞ一に奴隷勞働のうへにのみ生存した。そしてこの奴隷勞働の上に美はしき文化の花が咲いた。燦爛たるアテネ、ローマの文化は奴隷の汗と屍の上に咲き「咲く花の香へるごとき」奈良朝の文化は同じく奴隷の汗の結晶より成つたのである。ローマに於いては、農業、工業に於ける勞働はもとより、

奴婢、看護婦、給仕、醫者、俳優、力鬪士、學者に至るまで奴隷であり、軍人、警官の大部分もまた、奴隷より成りたつてゐたのである。富有なる階級は、コロセアムで奴隷の力鬪士（グラディアトル）を虎、獅子等の猛獸と鬪はせ、その血を見て長き一日を享樂し、富有なる階級の婦人は、女奴隷より成る隨行婦を從へてパラティノの丘を遊歩して、自分のもつ隨行婦の數をきそつた。全ローマの社會は、それこそ文字通りに全部、奴隷の勞働の上に寄生したのである。奴隷勞働の能率減退、戰死、戰爭の終熄による奴隷そのもの、數の減少、苛酷なる奴隷制度に對するキリスト敎の攻擊批難、等はさしもの奴隷制度のその後の存續を不可能ならしめんとした。奴隷の勞働の上に立つてゐたローマ帝國が、それにつれて崩壞したのはきはめて自然といふべきである。

古代社會につぐ段階は、中世封建社會である。この段階に於ける典型的勞働制度は農奴制度である。農奴は奴隷のごとく主人の財物ではない。自由も人格もみとめられた自由人である。奴隷は、結婚さへ禁じられたが、農奴はかゝる禁令からは自由であつた。しかし、それはたゞ名目だけにすぎなかつた。農奴は土地をかりて耕作をなす代りに、領主に對して、多額の貢納、賦役、雜役雜納、等を強制せられ、あまつさへ「初夜の權」に服從する義務をさへ強行せられた。日本でも、農民は物成、小物成のほかに、運上、役を強制せられ、その他多くの雜稅雜役を負擔せしめられたが、助郷の役務のごときその一つである。百姓と胡麻の油は絞れるだけ絞れといふ有名な政策が行はれた。ヨーロッパでは、その他、結婚すれば結婚稅をとられ、蜜蜂を飼育すれば蜜蜂稅をとられ、敎會からは十分の一稅をとられ、小供が學校に通學すれば通學稅をとられ、行往坐臥ことごとく徵稅の理由とせられた。だから、農奴は、形式上は自由であつたが、事實上は全く自由を剝奪せられて、完全に「土地にしばりつけられた」のである。ロシアの農奴、ドイツ及びオーストリーの「ヘーリゲ」及び「ライプアイゲンシヤフト」、イギリスのサーフドム、コッタース等は乃ち代表的の農奴であつた。

中世の末期に、中世都市が勃興し、各都市には、商人及び工業者の組合たるギルドが成立した。ギルドは親方より成り、親方のもとには徒弟制度が行はれた。これは、徒弟、職人、親方の三階級よりなり、徒弟は一定の年月と手腕とにより、漸次上の階段に上り、つひには親方となつて獨立するに至る。この徒弟制度は協調的溫情的なもので、徒弟、職人は、親方と同一家屋のもとにて生活し、同一食卓で食事をした。しかし、後代に至つて親方の數が增加するとともに、かゝる順序はくづれて、職人

及び徒弟は永久に、下積となつた。親方のために終生勞働すべき運命となつた。日本にも、座、仲間組合のごときギルド的團體が發生した。又徒弟制度にも比すべき丁稚制度が、德川時代の商人、手工業者の間に存在した。

中世の終焉に近く、大陸發見、新航路の開通が行はれて、世界商業の區域が擴大し商人は多くは資本を蓄積した。商人はこれらの資本をもつて家内工業をいとなみ、地方農民および都會の手工業者の勞働力を利用して巨富を獲得した。

産業革命は、中世封建社會を崩壞せしめて、そこに資本主義制度を樹立した。機械が發明せられ、蒸汽機關が發明せられ、工場制度が完成して、そこに賃銀勞働者なる階級を發生せしめた。賃銀勞働者は奴隷のごとき財物でもなければ、農奴のごとき半自由民でもない。それは完全なる人格をみとめられ、形式的には如何なる階級にも隷屬してゐない。雇主と自由なる契約によつて、勞働力を提供するとともに、その反對給付として、勞賃を受取るのである。しかし、雇主は、或は勞働力を強度に使用せしむることにより、或は勞働時間を延長することにより、勞賃より以上の價値を得てゐる。勞働より生ずる剩餘價値の獲得、それが資本主義の一つの特質である。

(六)

ごく簡單ながら、原始時代より今日にいたるまでの勞働史を略述した。それを通觀するとき、勞働はあらゆる人類生活の根本條件であるにもかゝわらず、勞働を行ふ勞働者は、原始共同體時代を除いたほかのすべての時代に於いて、最下の階級に呻吟してゐることを諒解しうるであらう。そして、自ら働かざる階級が、その上に座して勞働者の汗によつて安慰なる生活を送つてゐるといふ不可思議なる現象を見たであらう。「働かざるものは食ふことを得ず。」さうしたさけび聲がいづくともなくきこえて、その聲はだん〲力強くなりつゝある。

(附言) 本篇は勞働史をごく判りやすく趣味的に書いたものである。紙數の制限があるので、總論ともいふべき(一)から(四)までが長くなり、本論とも言ふべき(五)がごく簡單になつて終つた。日本には勞働史に關する文献が一つもない。暇が出來たら、それをまとめて見やうと思つてゐる。讀者のために、外國語で書かれた參考書を二三擧げて置かう。

アルベール・トーマ、勞働進化史。
ブリソン、勞働及勞働者の歷史(そのうちの一部分は中世職人史と題して日本語に譯されてゐる。)
シユタム、勞働の歷史。
ヘイソード、ジヨンソン共著、勞働の進化。

切符

宇野木忠

汽車も電車も乘合も芝居も又は隅田の一錢蒸汽でさえ今は切符制度である、勘定するには之れ位便利なものはないが、然し國有鐵道などの切符整理などはドーシてなか／＼並大底ではない。玆では主として日本の國有鐵道に對する切符の出産から死亡する迄の一生涯の働らき振りを書いて見る、說教強盜の流行する昨今だけに切符にも不良靑年やモボ、モガ等があつて本來善良なるべき切符の本性を沒却される事が往々ある。無理もない事である。一ケ年間に四億萬枚内外の切符が生れるのだから。

切符の種類
——薩摩守も相當ある——

一寸考へると、切符なぞといふものは極く單一なるもので普通吾々が旅行する時、停車場で買求める切符それだけ位に思はれるがイヤ實に複雜多岐なもので尋常人の想像にも及ばない。

先づ普通多く使用されるのが片道乘車劵、それから補充乘車劵更に定期劵、回數劵、團體劵、貸切劵、廻遊劵、社外連絡劵、急行劵、寢臺劵、引換劵、官用證、入場劵、定期入場劵、割引劵等先づザッとこんなものである、是等を總計して一ケ年間の發賣枚數驚く勿れ四億三千萬枚、官用證及び割引證を除いたものだけでも四億百七十六萬七千六百四十枚といふ莫大なる數字を示してゐる、明治五年、東京橫濱間に始めて鐵道が開通した當時の一ケ年乘車劵發賣數は、僅かに四十九萬五千七十八枚であつた。尤も鐵道哩數もウント延長して最近の調査では、國有鐵道營業總哩數八千哩に達してゐるから此の增加率も必らずしも不思議ではない。若し更らに私設鐵道を見る時は地方鐵道三千百十七哩軌道千七百三哩に達してゐる。尙目下鐵道省に出願中のもの又は免許を得て土地買收にかゝつてゐるものを加へると地

方鐵道で二千哩あるから合計五千哩あるわけだ。此の大世帶だから鐵道疑獄だの買收だのといろ〳〵の面白くない出來事が起るのも止むを得ない事である。

複雜多岐な ——切符の使ひわけ——

片道乘車券は普通のものである。補充乘車券は東京から京都とか大阪とかいふ平素相當發行する大都市の驛以外例へば東京から長野の村井驛とか又は中央線石和驛とかいつたやうな一ヶ月又は一ヶ年に何枚か發行するに過ぎないやうな小驛の切符を求めらるゝ場合に、出札口で驛名を印刷してゐない：より：までと書いた所謂豫備切符乃ち補充切符に乘客の要求する驛名を書き入れて發行するもので、之には隨分間違ひが生じ易く且又驛員が誤間化しする事も此補充切符が一番多いと。それから貴族院議員衆議院議員其他鐵道省のお役人の乘車券等は、其都度發行するのでないから、明細に計算は出來ないが、假りに賃銀を拂ふとしたら斯う迄に無駄な乘り方はせまいと思はれる程無賃の特權を亂用して得々たるものである。そして斯うした特權者に限つて一等少なくも二等室を占領するのだから眞面目に金を拂ふ人が三等室に押し込められるなんぞお考へて見ると不平の出るのも無理からぬ事である。已に十數年前からであるか中央線の一等車を廢したのも原因は此の邊にあつたらしい。

切符の出來てから ——人手に渡る迄——

切符の紙は種類によつて違ふが大體に於て富士製紙會社の製造にかゝるもので、之れを東京とか仙臺、名古屋といふやうな六ヶ所に分布されてある鐵道局の印刷所で印刷される。東京の方は芝口のガード下にある。印刷所で取扱ひ、出來上つたものは紙幣のやうに隱れ文字などを入れずに全國三十九の運輸事務所に發送され、そこから各驛に所要數量を割當てる、勿論それには極めて嚴密なる調査を施して一枚たりと雖も無駄にせず違算のないやうに有價證券と同樣に大切に取扱ふ。各驛では驛長なり助役なりが調査して出札掛の方へ廻す、之は必らずしも毎日〳〵割當てられるのではなく必要に應じ其都度補充する事になつてゐる。此方の掛りは鐵道局附屬の運輸事務所の主任出納官吏が居つて專任に其事務を取扱つてゐる。斯うして客の手に入つた切符が目的地の驛に移つて行く、驛では之れを調べて運輸事務所に發送する。事務所は之れを本省經理局調査課に届け、調査課では金と切符とを照り合はして、符合するかせないかを見、符合せない場合例へば不足金が生じた場合には其發送驛に通知して追徵金を仰せ付ける。それが若し出札係の違算から生じた事

であれば出札掛が自分の懐から身銭を切つて拂はねばならぬ。東京驛などの女出札掛員が時によると意氣銷沈たる態度で窓口に顔を出してゐるのを見受けるが之れ等は其前日あたり追徴金でもとられて大いに失望落膽してゐる光景と見て差支ない。

使ひ古しの
―切符の行衞―

使ひ古しの切符は如何に内輪に見ても五六萬貫あるといふから塵も積つて山となるの例へ、十五六年前迄は出納官吏が全國から集まつた古切符を大きな麻袋に入れて封印し恰かも紙幣のやうに貴重品使ひとして汽車に積み込み富士製紙會社の富士驛工場に運んで會社の社員數名付添ひ出納官吏監視の下に、蒸溜釜に入れて還元作用を施してしまふ、そして會社からは確かに釜に入れたといふ證明書を作成して官吏に渡す。官吏は安心して引返す。それでも長い間には種々な弊害が起つてこの狀態を續けて行つては到底防止する事が出來ないと見た當局では其後斷裁機械を利用し官吏立會の下に機械で之れを寸斷し紙屑として入札に附したり、又は富士製紙會社に拂下げたりして來た。それが今日迄尙續いてゐるが、斯かる特種な紙の製造はどの製紙會社でも製造し得るといふのでなく從來の關係上富士製紙會社が取扱つてゐるだけに古切符の還元作用にも、又製造にも富士製紙が大部分取扱つてゐる。斯うした具合だから、切符は還元々々で古衣服の縫ひ直しをやるやうに何度でも使ふ事になる、而して其正體は何であるかと言へばスカンヂナブイアから輸入されるパルプとそれに紙屑とを適度に混合したもので、更に色は主として獨逸の染料を利用してゐるからあの切符は實に三ケ國の原料が集まつて出來るものである。國産奬勵の上から染料などは内地品を使用する事に努めても褪色が激しいから矢張り獨逸品を使はねばならぬ。

現金を集める
―金櫃輸送列車―

切符の行衞は大體斯うした道程を辿るのであるが、更に切符を賣つた金の流れはどうであるかと言へば之れは又切符以上に現金であるだけに取扱上頗ぶる面倒なものである。あの厖大なる鐵道豫算の大部分は切符や荷物運賃の收入から之れに充當されるのであるから、更に言ひ換へれば上は鐵道大臣より下は小使給仕に至る迄鐵道で飯を食つてゐるものは總計して廿一萬人ある、此の大臺所を切り盛りして行くのだから容易な事ではない。各驛で出札掛りが賣つた切符の現金は、驛長なり助役又は大都市の驛になると鐵道局附屬の運輸事務所の出納官吏が出張して其れ〳〵賣上高を精査し之れを金護と稱する麻袋に入れ堅く

錠を下ろして翌朝始め、東京市内なれば翌日の午前一時頃乘客から見ると最終車に金櫃輸送列車が一般の乘客の列車の後尾に付いて輸送される。その金櫃輸送車が通過する時には、豫め其通過各驛に通告されるから各驛では其時刻に間違ひなく前日の收入金全部を所屬運輸事務所に輸送される。それと同時に片道切符何枚の賣上金とか、又は寢臺券何枚の賣上げとかいふ明細な事は書かずに只切符何枚の賣上といふ概要だけを書いた書類を金嚢と共に輸送する。それであるから此の場合には果して計算が正當か又は間違つてゐるかといふ事は判らずに只いくらの金をお屆けするといふ事にし、詳細なる勘定は後日する事にする。

無利息で流用する――日本銀行

零碎な乘客の賃銀が各驛に依つて集められ、それが金嚢に收まつて運輸事務所に運ばれる。出納官吏は傳票と現金とを突き合はして正確なものとなつたらそれを毎日出張してゐる日本銀行の行員に渡し銀行に預託金として一時の假預金をする。總じて鐵道は特別會計で一般會計とは切離して運用されるから、自然乘車賃銀も一般の收入とはなつてゐない、日本銀行では此の一時の預託金を相當有利に他に利用してゐる事だらうが、鐵道省としては常時一千萬圓や一千五百萬圓は必らず預托して置くから銀行では實に有難い無利息の金を使用してゐるわけである。之れを見込んだのは例の大藏省預金部である、大藏省には郵便貯金とか其他の金が相當あつて之れが預金部運用委員會の決議に基いて民間の公益事業又は委員會に依つて決定されたものに金融を計る事になつてゐる。處が此の預金部で審査し萬間違ひないとして貸した金さへ回收困難なのが澤山ある、例へば國際汽船だとか又は某漁業會社などは其一部である。尤も預金部でも近頃は非常に嚴密なる審査を遂げて融通してゐるから最近のものに對してはそうした失敗は餘り繰返さずに濟むそうである。

收入金の流用に――引張り凧の預金部

日本銀行が一千萬圓の金を無利息で預かつてゐる。其チャンスに喰込んで來たのが大藏省の預金部である。預金部では鐵道省に向つて交渉を開始して來た、それには斯うした好餌を獵らして來た。日本銀行に預金して置いたとて一文の利子さへ貰へないではないか、それよりも預金部に金を預けたら臨時預金でさへ二分五厘の利子を附する、若し半ヶ年以上の定期預金ならば年五分の利子を拂ふから是非預金部の方へ廻して貰ひたい、そうした切なる交渉が再三あつたので、鐵道省の方でも考へだ

した、成程年五分とすれば一千萬圓で五十萬圓、例へ假預金であつても二十五萬圓は寐かして置いて手に入る、といふので相手預金部の方へも廻す事になつた。日本銀行の方では少々儲け口が減つたが之れ迄隨分甘い汁を吸ひ通して來たので今更之れを拒むわけにも行かない。斯んな調子で日本銀行の預托金は近時減少して固定貸は大藏省の預金部に廻されてしまふ。以上は東京を中心とした話であるが、地方の驛の金はどうするかと言へば之れも東京同樣管轄鐵道局附屬運輸事務所に毎朝金鞄を金櫃輸送列車に積んで送致し出納官吏の調査によつて日本銀行の其地代理店に引渡すと、それを代理店なり支店なりから本店假預托金に繰入れてしまふ。

不足額に對しては容赦なく追徴金

然し鐵道省は前述の如く政府の一般歳入として計上せずに特別會計に屬するから、各驛の從業員の俸給や其他經費や釣錢に出す（一驛平均二百圓から四五百圓位）金等は驛長なり、助役なり、又は出納官吏が便宜上繰替拂と稱して、事務所に輸送する乘車賃銀の中から控除する場合がある。之れは特別會計の有難さで一一現金を以て收支をせなくとも繰替拂の傳票で處分するから、其點は大いに便利である。斯くして其日々の收入金だけは毎日處分するが、實際の嚴密なる精算は切符と共に調査せなければ一厘一毛の微細の點迄は判らない、そこで本省經理局の調査課（目黑と千駄ヶ谷の二ヶ所にあるで一ヶ月一回直收入密査をする。それは全國國有鐵道から送つて來る使ひ古しの切符全部を調査課に送つて、そこで澤山の女事務員がコツ／＼調べて果して切符と金と符合すればそれで無難であるが、若し金が不足してゐるやうな場合には調査掛の檢算員が更に調べる、尚不足が明瞭になつた時には訂正の上追徴金を徴收する、追徴を受けた驛では出札係員が自腹を切らねばならぬ。多くの場合に於て不足なればとて多過ぎるやうな事はない。何といつても四億三千萬枚の乘車券中普通の乘車券乃ち片道乘車券と補充乘車券のみでも一ヶ年間の賣上金は二億五千萬圓に達してゐるから之れに携はる調査も他の民間の私鐵會社と異りなか／＼單一には行かぬ。

きせる乘りと定期券融通業

以上は切符の動きで之れに依つて金の流れも大體述べたが、從來の例に依つて見るに切符の僞造はないが切符を惡用することは非常に多い、之れは單に乘客ばかりでなく驛員でも手辯の惡いのがあつて濱の眞砂ではないが種々防止方法を講じては見

るが手癖の悪い奴は當局の考へるより以上の悪辣なる手段を案出するからなかく／＼やり切れない。勿論二等切符を買つて二等に乘つて平氣でゐる位の事は朝飯前の仕事であるが、それ以上なかく／＼油斷の出來ぬ事が澤山ある。その一つ二つを擧げて見る事にする。煙管乘りといふのがある、例へば東京の住人で大阪にでも出張した時の歸りに大阪驛から京都迄又は米原邊迄の切符を買つて東京に來る、若し其人が大森邊から東京迄の定期券でも持つてゐる場合には東京驛に着する時にはその定期券で誤間化してしまふ。兎に角斯うした具合に其發車驛から附近迄のものと着車驛の附近からの切符とを求めて途中は檢札のない限り澄ました顔で通過してしまふ。乃ち後先だけ金がついてゐるから之れを稱して煙管乘りと稱するのである。更に田町驛から中央線の小野驛の切符を買ふ場合、そんな切符は常に備へて置かないから驛名を書き入れる補充切符を使ふ。此の切符は銀行の小切手帳のやうに二つに切離して其保存する部分にも乘客に渡す切符同樣驛名や番號を書き入れる。其際に客の方には正確な小野驛と書くが保存の方には中央線與瀨驛と書く、さうすると實際は田町から信州小野驛迄の賃銀を受取るが控へ切符には神奈川縣與瀨としてあるから小野驛迄の賃銀よりも遙かに小額の賃銀を受取り、殘金は出札員の懷中に飛び込んでカフエーや活動寫眞の方へ廻つて行く。然し之れは乘客と出札員とが馴れ合ひでなければ都合が悪い、そして其乘客は目的地に着したら途中下車しますと稱して切符を持つたまゝ、驛を出てそのまゝそれを棄てゝしまふ。近時此の手は大分流行して來たが、當局としても之の巧妙なやり方にはさじを投げてゐる。

定期券を利用する ——巧妙な商賣人

之れは昨年あたりから現はれて來た新手で大森邊の人で專業にやつてゐるものがあるといふ事だ。それは甲が一年位の大森東京間なり又は中野東京間なりを買つてそれを一ヶ月乃至二ヶ月位づゝ貸與するので、借りる方では鐵道省から直接に買ひ求めればよいのであるが甲の方では一ヶ年の定期であるから一二ヶ月の定期と異なり餘程高率な割引がある、それを乙に、鐵道省より買ふより何程か安く貸與するか、又は鐵道省と同一の値段位で後拂で賃貸する。甲の方では其割引の差額を利益するので一種の高利貸である。勿論定期には年齡や姓名が書込まれてあるから都合の悪い事もあるが、それは貸す方で適當に案配するので借り方は一人や二人でないから其差繰りは高利貸だけに巧妙を極めたものである。斯うした事は近來大部流行して來て丸ビルに或金融業者の事務所があるがそこでは「定期券低利融通致します」といふ看板を入口の中に掲げて大びらにやつてゐる。斯んな事は當然反則なやり方で萬一發見される場合には定期を

とり上げられるのであるが何分にも多数の客を相手の仕事でありそう厳密に一一調査する事は到底出來ない事であるから、こんな商賣が成り立つて行くのである。

私設鐵道の ―切符の處分

自動車專用道路が漸次發達して來たのは歐米の轍を踏んだのであつて、今後尚相當自動車網は發展する餘地があらうと思はれる。之れは經費の點に於ても、維持費の點に於ても、線路を敷設して車を走らせるよりも無軌道の自動車を運轉手と車掌と二人きりで走らした方が遙かに有利である。しかし之れは將來の問題で、過去に於ては矢張り鐵道や電車に據らねばならぬのであつて、前述の通り最近の調査に依るも、私設鐵道の開業哩數は總計三千百十七哩軌道一千七百三哩の多きに達してゐる。そこで是等の會社が發賣する切符はどうするかと言へば地方は地方の印刷所に注文するが東京郊外の電鐵會社などは鐵道省に注文する、鐵道省では自分の切符印刷に忙殺されてゐるが多少の期間を置くと印刷してくれる。それは市中の印刷屋に注文すると時にとつて贋造切符が現はれる、現はれぬ迄も印刷した切符が不揃ひで統一を缺くおそれがある。第一印刷の紙が不統一である、印刷のインキが一律一態に刷り上りが出來ない等の弊害が有り安い。そこで多くは鐵道省に注文する、値段の點も民間で注文したよりは割安である。然し地方の小鐵道あたりになると薄い紙で芝居の切符のやうなものを使ふ、之れは極く略式なもので印刷も簡單であるがそれに掛員が重役の印を押してゐるのもある。鐵道の法規の上からは一種の違反事項であるがそれ迄は當局の目も屆かぬと見える。

民間會社の切符は ―燒却釜に投入

民間會社でも嘗ては富士製紙會社の工場に賣却した事もあつたが輸送運賃に負ひたをされ、古切符を賣るために金を持ち出さねばならぬといつたやうな不成算的な事を餘儀なくせねばならぬ愚を棄てゝ、各會社は三百圓内外を投じて會社附近又は適當な場處に燒却釜を設けて一週に一回又は一ヶ月に一回位社員立會の下に燒却してしまふ。之れは丁度日本銀行で紙幣を燒却すると同樣、例へそれが古切符にせよ再び世の中に現はれるやうな事があつては整理上甚だ困る事が出來るから最後の始末をつけるためには嚴格なる方法を以て行ふ。切符は紙幣と違つて油手でそう使ひこなすものでないから紙幣のやうに燒却に骨が折れる、それに厚いボール紙のやうなものであるから。斯うして切符は鐵道省でも民間會社でも生れ落ちるから御用濟になつた後までも丁鄭に取扱はれ一生涯を通じて優遇される事は貨幣と同一の値打のあるものだからである。

荒畑寒村の『自殺未遂』始末

『遺書』六通の全文、及び註釋、説明、感想、附記等

堺　利彦

公人には私事がない。あり得ない。私は同志たり友人たる荒畑寒村の『自殺未遂』に就いて、こゝにその始末を明記して社會に報告する。私は今、この事についての、自分の感慨等を詳細に語る暇を持つて居ない。若し夫れ、對策、善後策等に就いては、今こゝに語るべき、適切の時機でも、場所柄でもないと考へて居る。

寒村は『自裁』について、同志と、友人と、妻と、宿とに對する、六通の手紙を遺した。その『遺書』を發表する事が、今私の任務である。それが即ち私の報告である。その外、私は只、その『遺書』に對し、必要と認められる點について、多少の註釋を施し、及びその前後の事共について、多少の説明的記述を加へ、猶ついでに、私のツイ思ひ浮かべた少しばかりの評語、若しくは感想を附記しただけの事である。

昭和四年九月廿一日午後三時頃、私の家に電話が掛つて來た。それは新宿一丁目の東京ホテルの支配人からで、只今、荒畑勝三さんとおつしやる方が、私方で『間違』を起して居られるから、直ぐ來いと云ふのであつた。

支配人は電話で委しい事を語らうとしなかつた。私の妻は直ぐ、大久保百人町の『花ずし』に取次電話を頼んで、寒村の妻のお玉さんを呼んで貰つて、それだけの事を報告した。

私は妻と二人で直ぐ東京ホテルにかけつけた。寒村は、まだ死んでは居なかつた。多くの警察官と、川上醫師と、ホテルの支配人藤村鐵藏氏と、看護婦さんと、女中さんとが居た。寒村は只だ昏々と眠つて居た。然し意識はあると云ふ事だつた。

私は直ぐに又、私の平生から深く信頼して居る、そして私共の同志と友人の多くが常に屢々治療を受けて居る（私共のグル

ーブの間に、半ば戯れに『黨醫』（パーチードクトル）と呼ばれて居る）、芝三田四國町二番地の奥山仲君に電話をかけて、來診を求めた。

少し氣が靜まつてから、私は奥村のベッドのそばに立つて、靜かに彼の手を握つて見た。手は可なり冷たかつた。彼のトロンとした目が漸く私を認識した。そして急に眉をひそめ、顔をしかめて、苦悶の狀を現はしながら、何か短い言葉を、強い聲で四五へん繰返した。私には初めそれが、ハッキリ聞き取れなかつた。四へん目くらいに、初めて分つた。『ダメだつたんかなア』『ダメだつたんかなア』と云ふのであつた。

私は彼の手を握つたまゝ、何も云ふ事が出來なかつた。彼もそれまで何も云はなかつた。

奥山君が程なく來てくれた。大丈夫だらうと云ふ事だつた。

然し私は先づ『遺書』の發表を急がねばならぬ。

『遺書』は三通あつた。ホテル宛のもの一、玉子夫人宛のもの一、堺宛のもの一。先づホテル宛のもの、左の通り。『遺書』（第一號）

『飛んでもない御迷惑をかけることを甚だ相すまなく思ひます、深く御詫します。明朝、小生の死を知られたら、早速左記へ電話にて御通知を願ひます。

麹町區麹町八丁目二十四番地
堺（サカイ）　利彦氏
電話、九段一、一〇五番

器具等に對してもし損害を及ぼした節は、必ず相當の償ひをして呉れると思ひます。

御迷惑をかける段は、深く御詫いたします。

九月二十一日
荒畑（アラハタ）勝三

東京ホテル御主人へ

次に玉子夫人宛のもの、左の通り。（第二號）

『僕の骸は田村（夫人）の寺の墓地へ葬つて下さい、決して横濱の僕の家の墓地へ葬らないで下さい、この悲しみ、苦しみを與ふる僕の罪、妻をも家をも想はないで一身の安きをのみはかる氣まゝな利己主義を許して下さい、最後まで御身を愛してゐることを信じて下さい。

僕は未來があつて御身と再び一緒になれたらいかに幸福だらうと思ひます。

勝三

愛する玉子よ

用紙は、赤い罫の、兩面刷の、廿字廿行の原稿紙で、封筒の表面には『市外大久保百人町三〇七荒畑玉子樣』とあり、裏面には『荒畑勝三』とあつた。

こゝに『田村(夫人)』とあるのは、我々が平生から、常に屢々『お禮さん』として寒村夫婦の口から聞かされて居た人、そして勿論、私共も毎度會つて善く知つて居る人で、云ふまでもなく、寒村夫婦が最も親しく交はつて居た人である。この人の寺の墓地へ葬つてくれと云ふのは、『私と一緒に葬つてくれと云ふ事なんですよ』と、お玉さんが云つて居られた。

寒村とお玉さんとの間柄について、若し私が何か云ふ事を求められるならば(或は、それを許されるならば、或はいつか、さうした機會が都合よく與へられるならば)、私は實に、多く云ひたい事、云ふべき事を持つてゐる。然し今、そんな必要も、暇もない。『未來』云々についても、今は只そのまゝの興味として殘しておく。

次に堺宛のもの。表面には『麴町區麴町八丁目廿四番地堺利彦樣』そしてその左脇に『(お玉を決して獨りで置かないで下さい)』とあり、裏面には『九月二十一日午前二時過認ム　荒畑勝三』とある。表面の括弧内の言葉の意味は、説明を加へるまでもあるまい。

堺宛の封筒の中は、堺個人宛のものと、同志及び妻宛のものとの二通になつて居た。先づ堺宛のもの。(第三號)

『先生、僕を許して下さい。

あなたは何を措いても健康の恢復に力めて下さい。どうか餘り氣をアセらないで下さい。僕の此の日頃の無禮の數々を許して下さい。

『二十數年間の先生の御訓陶に、萬分の一の御恩も返さず、こんな醜狀をさらして、再び御心勞をかける罪をどうか御許し下さい。

自分の身、父、妻、勞農、一切のことが一度に重なり合ひました。僕にはその重荷を荷つて行くだけの力も無ければ、その苦痛に堪へるだけの力もありませんでした。打ち挫かれた薄志弱行の一凡人の、悲慘な最後を見て下さい。でも僕は、××や××や其他の日本共產黨の書生共のやうに、嘲けるべき破廉恥漢であつたでせうか。

『父と妻の事を思ふと、頭が割れさうになります。先生、どうかお玉をかへりみて下さい。これが、これだけが、先生の忘恩の一弟子の最後の懇願です。

あなたは以前、自分は老いたし、山川君は病氣だし、君は

まだ若いから面白い日に會へるだらうと云はれましたネ。その僕が今、こう云ふハメにならうとは、誰にも思ひ及ばなかつたらうと思ひます。

『奥さん、御達者におくらし下さい。どうかお玉の事を願ひます。

一九二九年九月二十日　　荒畑生百拜』

堺先生

私(堺)が今、可なりの病人である事は、云ふに及ばない。『此の日頃の無禮』云々には多少の意味がある。私共の雜誌『勞農』と、それの經營者たる『勞農同人』との内事について、寒村君は今正面の當事者であり、私はむしろ局外の半隱居であるので、私が折々持出したりする、無遠慮の、恐らくは心なしの――そして又、確かに私の病的の氣短かさからも來て居る所の、――性急な註文や批評が、時としては寒村君と私との間に、多少の氣まずさを作りだす事が無いでもなかつた。それを彼は『無禮』と誇張して、老人をいたはつて居るのである。『此の日頃』とは『近日』を意味するものと解釋される。彼は私の罪をも、彼一人で脊負はうとしたのである。

『重なり合』つた『重荷』については、深く、切に、同情すべき理由がある。それは猶ほ次々の書中で明瞭になる。こゝでは先づ只、『薄志弱行の一凡人』が『悲慘な最後』を前にして、『日本共産黨の畜生共』を罵つた所に、彼の面目が躍如として居るのを見る。『××』を用ひたのは、私の婆心に過ぎない。誰に對するのか自分にもシツカリ分らないが。

彼は『忘恩の一弟子』といふ、例の誇張の言葉を以て、『妻の事』を私に囑した。『父の事』については、後に少し書く。

最後の『面白い日』の事。實際、誰もが、どんな『醜狀』を見せ、どんな『ハメ』に落入り、どんな『悲慘な最後』をするか分つたものではない。只だ私も寒村と共に、『破廉恥漢』にならないだけの用心はしたいと考へてゐる。

次に『哀れな妻』及び『同志諸兄』宛のもの(第四號)左の通り。以下、括弧内は堺の註。

『日本橋からタキシで新宿の東京ホテルへ着いたのが十二時頃だつたから、湯へ入つたり何かして、今はもう恐らく一時を過ぎてゐるだらう。もうアト數十分すれば、いよ〱僕の自ら生命を絶つべき時が來るのかと思へば恐ろしい。

(日本橋とは、前記の田村お禮さんの家。)

『生の執着くらゐ恐ろしいものはない。今朝、裁判所へ出かけると云つて家を出て、大久保驛から明日出頭する、今日は

もう一日のばすといふ意味の電報を豫審判事に打ち、更に四谷郵便局から速達を出してその旨を云つてやつた。

（この日、寒村君は裁判所に出頭して、その都合次第では直ぐ保釋を取消されたかも知れないと云ふので、多くの同志が送りに行きたいと云つて居たが、それも餘り仰々しい樣だから、堺が代表のつもりで、一人だけ裁判所まで同行しようといふ打合せになつて居た。所が、同日朝、寒村君から電話が來て、裁別所行は一日延ばすと云つて來た。別におかしいとも何とも思はなかつた。）

『それから或る家（黒田君、乞ふ意を安んぜよ、決して君のヒンシユクを買ふやうな家ではない）に行つて、數通の遺書をワクワクしながら、涙をふきながら一時までかかつて認め了つた。定めし無茶苦茶なものだらうと思ふ。

（『或る家』の下の括孤は荒畑君自身がつけたもの。黒田壽雄君は、我々の同人中で、品行上に最も厳格な、云はゞ木人參であるので、寒村君がこれだけの、多少ユウモア的の辯明をしたのである。この『或る家』は即ち日本橋の田村のお禮さんの家である。この家で書かれた『遺書』は、第二號（玉子夫人宛）第三號（堺個人宛）、第五號（山川外三名宛）、第六號（勞農同人宛）の四通だと思はれる。そして第五號と第六號の二通を一つに封じて田村夫人に托しておき、第二號と第三號を自分の手に持つたまゝ、そこを出たものと思はれる。）

『すぐ其處を出たが、頭は走馬燈のやうで、とても落ちついてゐられない。活動に入つた、歩いた、タキシを飛ばす、飯を食つても甘くない。熱を病んでゐるやうに口ばかり渇く。歌舞伎座に入つた。彌次喜多はヤッパリおかしく感じたが、幕になると心は鉛のやうに重くなつた。意味もなく切ない苦しい感じが全身に押しかぶさる。

（このあたり、文學者たり、文藝家たり、詩人たる寒村、多感、多情、多恨の寒村、そして又、同時にいつも多少のユウモアを忘れ得ない寒村が、最も善く現はれてゐる。殊に、この彌次喜多見物の一節に依つて、『遺書』の全體が大いに振ひ、大いに光つてゐる。）

『十時半に座を出て、雨の中を銀座街を歩いた。何處かに宿を求めなければならぬが、それは即ち僕の最後の墓場を求めることだ。宿につきたうない、クタビレた足をひきずつて、日本橋の先まで歩き通した。妻の行末、彼女の身も心も砕き去るであらう悲しみ、同志の悲嘆、一部の同情、多數の嘲罵、それ等の思ひが胸一杯に湧き起る。苦しい、切ない、どうし

やうか、だがもう免かれられぬ、やはり初志を断行する外はないと思ひながら歩いた。

（『宿につきたうない』『もう免かれられぬ』この謂ゆる人間味を『嘲罵』し得る者があるだらうか。）

『いま階下の時計が一時を報じた。

諸兄は必ず僕のこの行動に、悲しむよりも先づ驚くであらう。或は理由を解するに苦しむかも知れぬ。僕自身すらも、こんな結果にならうとは、こんなキャタストローフに會さうとは、こんな運命が俟つてゐやうとは豫期しなかつた。要するに僕の薄志弱行の致すところだ、僕に信念の缺如せる結果だ、熱情やうやく衰へたためだ。どんなに苦しくとも、その苦しみが如何に長くとも、將來の希望に燃えて堪へ忍ぶだけの勇氣が無いからだ。いかなる非難、嘲罵、譏笑、指彈も今は甘んじて受くる外はない。

（私はこのあたりを讀んで、私自身の『薄志弱行』を何者かから鞭うたれるやうな氣持がした。）

『僕の四十二年間の生涯は、結局失敗だつた。僕の一切の言說、一切の行動も、遂にこの最後の一擧に依て悉く自ら粉砕し去つたに等しい。「終りまで忍ぶものは救はるべし。」終りまで忍び得なかつたゝめに、僕は遂に自ら全生涯を破壞しつくす結果に立ち至つた。

『若し僕が一身の安きを求め、ユダの得たる銀の如き自由を得んと欲したならば、その道は開かれてゐる。だが、僕にして日本共産黨の首領等と伍することを甘んずる位なら、僕は父を苦しめ、妻を泣かしめ、同志に背いてまで、自ら生命を絕つやうなマネはしなかつたらう。僕の自殺は、この人生の一失敗者が有する唯一の誇りだ。

（『銀の如き自由の道』が寒村の爲に『開かれてゐる』といふ言葉の意味は、『遺書』第六號と讀み合せて、初めて充分に理解される。寒村は實に一個の大なる『誇り』を以て自殺を企てたのである。）

『再び父と、妻と、先輩と、同志とに慚謝する。僕の現在の健康、殊に弱り果てた神經の力を以てしては、僕は今後の牢獄生活、既に幾度か經驗せる、あの苦しみに到底耐え得られない。然も僕は承認すべからざるを承認してまで、自由を購はんとするが如き破廉恥を犯すには、餘りに潔癖的である。僕の取る途は他に存しないではないか。僕を怒り、罵り、怨み、咒ひ、嘲る前に、少しく僕の心事のいかに哀むべく、僕の境地のいかに苦しく、僕の煩悶のいかに大であつたかを推察してくれたまへ。

(前に『日本共産黨の畜生共』を罵つた時の、『破廉恥漢』といふ言葉の意味が、こゝの『破廉恥』に依つて、初めてハッキリ分つて來た。卽ちそれは『承認すべからざるを承認してまで、自由を購はんとするが如き』事を意味するのであつた。寒村は實に『潔癖』の『誇り』を以て死なんとしたのである。)

『あゝ四十三年！　何といふ慌しい身世であつたらう。十九の春に死別した母の面影は眼底にある、六歳まで育てられた里親の聲音は耳底にある、アケビを採つた野庭村の雜木山がアリアリと思ひ浮べられる。だのに、もう死ぬのだ、明日はもう存在しないのだ、父も妻も同志も友人も吾が家もこの町も愛する犬も無くなつて了ふのだ。僕はもつと生きたい、生きてゐたい、僕は白狀する、僕は少しも死にたくないのだ。

(又詩人が出て來た、文藝家が出現した。然し我が寒村は決して死を讃美したり、死の幸福と光榮と價値とを力說したりする、精神的ブルジョア文士と全く其の選を異にして居た。彼は死にたくない事を、『白狀』したのでなく、宣言したのである。)

『僕はカルモチンを二百錠用意してゐる、これで果して死ねるだらうか、僕は死ねると信じてゐる、死ぬるまでに苦しむだらうか、生き返るやうな事はないだらうか、どうかそうで無い事を望む。

『苦しかつた半生よ、失敗に終始せる生涯よ、僕は自分で信ずる限り、自分の力で能ふ限り、誠實に努力して來た。しかも兩三日前、大阪からわざ／＼僕をスパイに來た二人の勞働運動者があつた。同志を裝はふて僕の好意を利用して、同志的好意を裏切つた××のやうな奴がある。鍋山君とも遂に離れて了つた。××には裏切られた。僕が半生の努力は、竟に徒勞であつたのだ。

『妻よ許してくれ、僕はだれに對するよりも一番お前にすまぬ、僕はお前を殺すに等しい、お前は何といふ氣の毒な不幸な人だらう、幼ない時からあらゆる人生の苦痛をなめて來てそして終にこんな悲慘な目を見せられるのだ。そしてお前自身には、何の責任もないのだのに。僕はお前の腕によつて死ぬか、お前を僕の腕にいだいて死なせたかつたのだ。僕がナゼ、家で自殺しないで、わざ／＼こんな所へ來て死ぬのかと云へば、僕はお前のそばでこんな死に方をして、お前の心を破るに忍びなかつたからだ。

『堺先生、山川君、大森君、僕のために御病氣に影響を及ぼしはせぬかと、それのみを心苦しく思つてゐますが、もうど

うにも仕方なくなりました。どうか許して下さい、許して下さい。

『いま二時を打つた。

『鈴木君、君の好意を謝する！　君に背く罪を許してくれたまへ。

『もう何も書く勇氣がない、どうか僕の不幸な妻を省みてくれたまへ、諸兄に背く僕を許してくれたまへ。

『僕のことのために、諸兄の仕事を等閑に附さないでくれたまへ。

九月二十一日午前二時過　　荒畑勝三

哀れな妻よ

同志諸兄よ

次の手紙二通は、翌日の夕、寒村の家で、寒村からお玉さんの手を經て私に渡されたものである。その時、そこに來て居た前記のお禮さんが、前々日あづかつて居たのを持つて來たのであつた。私はそれを一讀して、『たしかに受取つた、善くわかつた』と寒村に告げて、その日はそれで別れて歸つた。これが私の、寒村に口をきいた二度目であつた。（第五號）

『どうか僕の薄志弱行を許して下さい。これ以上に何も云ふことが出來ませぬ。

『山川兄と大森兄はどうか一日も早く健康を恢復して下さい。僕がどんなに兩兄を愛してゐたか、僕の平生の兩兄に對する愛は、此度の行動に依つて、特に兩兄の心を惱ませる罪の幾分かは償ふであらうと信じてゐます。

『僕は健康のため、無力のため、幾度かしばらく退ぞいて靜養したいと思ひ乍ら、遂にそれが出來なかつたのは、實に鈴木君と黑田君との難局に立つて日夜奔走してゐるのを見捨てるに忍びなかつたからです。

『橋浦君には會へないでしまつた、もう何も書けないから書かぬ、折があつたら、金咲君に僕の好意を傳へてくれ玉へ。

『僕の哀れな妻をかへりみて下さい、どなたか可愛相な僕のレボを飼つて下さい。

『菊榮さんと振作君、大森夫人と映ちやんに僕の最善の挨拶を傳へて下さい。

『皆さんに迷惑をかけることを實に心苦しく思ひます。僕はこんなキヤタストローフが俟つてゐやうとは思なかつたのです。

一九二九年九月二十日　　寒村生

小川兄

大森兄
鈴木兄
橋浦兄

寒村がナゼ右の手紙と次の手紙とを、お禮さんにあづけておいたかの理由はよく分らない。只お禮さんがこの日それを持つて來るのを少々待ちかねて居た樣子で、取られはしなかつたかと氣遣つて見たりして居た。實際、左の手紙は、最も重要な者である。(第六號)

『諸兄、僕は自裁に先だつてこの手紙を諸兄にのこす。

『諸兄が僕の自裁を知つたならば、事の餘りに意外なのに驚ろいて、或は僕が發狂したのではないかと怪しむかも知れぬ。そして僕が自裁する理由を知つたならば、必ず薄志弱行としてデカダン的だとして、非難されるであらうと豫期してゐる。

『誠に僕がこの擧に出づるのは薄志弱行のためであり、確かにデカダン的(苟くも吾々の平生、懷抱主張せる所の如き思想を有する者として)の譏笑を甘受せざるを得ない。それは僕にもよく分つてゐる。此の點では、僕は決して一言半句なりとも、敢て抗辯しようとは思はない。

『諸兄、僕は諸兄の知らるゝ如く、いま自分の承認を肯んせざる他人の陳述を承認して、以て保釋を繼續せらるゝか、又は飽まで之を否認して再び自由を奪はるゝか、此のオルタネーチヴを選ぶべき自由(!)を與へられてゐる。所が困つたことには、僕はこの孰れをも欲しないのだ。前者の理由に就ては敢て云ふ迄もあるまい。一群のレネゲードの陷穽に自らはまつて、自由を購はうと思ふ程に僕はまだ腐つてはゐない。彼奴等は畜生といふ罵倒すらも勿體ないほど、腐り切つた蛆蟲だ。アンな奴等と伍するのは、想つたゞけでも堪へられない。

(この邊の言葉を、前の第四號の『承認すべからざるを承認』云々の處と對照し、猶ほ次の二節を充分に熟讀するならば、寒村がした事の理由が、初めてハッキリして來るであらう。)

『若し僕が眞に意志と身體とに於いて、諸兄と伍するに羞かしくないだけに強靱健全な人間であるならば、僕には問題の解決は實に易々たる事であつて、僕は飽くまでも否定を否定とし、その爲に自由を奪はれて敢て悔いないと云ふ態度を取つたであらう。悲しむらくは、僕はそれ程に意思が堅固でない。この事は實に自ら認めるのは耻かしく思ふのだが、僕は

これからまた拘禁せられ、更に公判の終了を俟ち、そして結局、彼奴等の陥穽にはまつたゝめに、ズル／＼に何年か知らぬが牢獄の生活を送らなければならぬのは、到底堪へ得られないのだ。

「諸君の知るが如く、僕の健康はスッカリ損はれてゐる。自分の欲するやうな治療を受けられず、服用したい藥を服することが出來ず、またあの眠られぬ夜がつゞき、監獄の自動車にのつてもすぐ嘔吐を催ほすやうな狀態に戾つたのかと思ふと堪へられない。それに、八十に餘つて絕えず此の不孝の子を思ひ惱んでゐる父！　同棲二十年、殆んど一日の心を安めた事のない氣の毒な妻！　その上に思ひを馳せると堪らない。此の兩三日間、僕がいかに諸兄と愉快さうに談笑し、嬉戲してゐたか、諸兄はよく知つてゐる。僕は獨りゐるに堪へなかつたのだ。獨りゐて是れ等の事に思ひ到ると、僕の心が寒くなるのに堪へられなかつたからだ。

（寒村が、今度の入獄をおとうさんに知らせまいとして、お玉夫人と共にいろ／＼苦心した事などが思ひだされる。實は今度の事で、おとうさんに少なからぬ影響があるだらうと、誰も心配して居たが、當日おとうさんは新聞を見て、「これには、いづれ何か深いいきさつがあるだらう、こんな事ぐらゐで死ぬるやうな、氣の小さい倅ではない、折角それほど思ひこんだものなら、思ひどほりにさせてやりたかつた」と、云はれたと聞く、何とエライ八十翁だらう。

「諸兄、僕は何もかも書きたい。書くことがウンとあるやうに感ぜられる。それで胸が一杯詰まつてゐるやうな氣がする。然し書けない、絕えず何かに後から急き立てられるやうな氣もちで、到底ゆつくり書いてなんか居られない。頭が割れるやうで、考へなんか些ともまとまらない。

「今、吾々に取つて寸刻を忽がせにする能はざる際、惡戰苦鬪をつゞけてゐる諸兄を殘して、獨り安易な途を取る僕は、諸兄を裏切るに等しい。諸兄、僕がいかに諸兄を愛してゐたことか！　僕は諸兄の間の最後の者であり、最も小さき者であつたが、諸兄を愛し、吾が勞農を愛する上に於て、僕は決して諸兄の何人にもおくれなかつたと自負してゐる。勞農を死守してくれ給へ、勞農の進むべきコース、その取るべき方針の確定の上に、諸兄のインテンシイヴな、積極的な、必死の努力を傾注してくれ給へ。殘されたる種々の難問題の解決に、諸兄の意圖に添ふだけの能ふ限りの奮鬪をしてくれ給へ。

「山川兄との關係の復舊、これを外にして是れ等の最善な解

決の方法はないのだが、僕の自裁は何等この問題を理論的に解決すべき手段でないので、僕はそれを最後の遺憾とする。然し僕が最後まで、その一點に苦心焦慮してゐた微衷をだに諒察してもらへるならば、山川兄及び諸兄が相共に最善の解決法を見出すことに努力して呉れる一つの力となると信ずる。此の確信は、僕に最後の喜びを與へてゐる事實を忘れないでくれ給へ。

(『山川兄との關係の復舊』云々若しこれを充分に註釋しようとするなら、百枚の紙を許されても恐らく足りないだらう。山川君が『勞農』の中心人物であつた事は誰知らぬ者もない。然るに其の山川君が今は勞農社から脱退してゐる。山川君は今でも深く『勞農』を愛して居り、又實際上、大いに『勞農』を助けて居る。然し彼は勞農同人たることを辭してゐる。勞農同人は今でも常に、多くの點に於いて山川君に事を謀り、その教を受けてゐる。然し勞農社は矢張り彼を同人として引止める事が出來ないで居る。何といふワケの分らない事だらう。一體、その理由、その原因、その救濟策は何處に在るのか。寒村は實にその『關係の復舊』を切望しつゝ、『苦心焦慮』して居たのである。『遺書』第三號に彼が種々なる『重荷』の一つとして『勞農』を擧げて居るのは主として此の點にあると思ふ。

(こんな謎のやうな書方をしたのでは、この事件の意義を幾分でも讀者に傳へる事は出來ない。然し私は今、その意義を傳へるべき任務を帶びて居るのでなく、只この事件の如何に難問題であるかの一片鱗を示して、寒村の『苦心焦慮』を想像させる一材料としたに過ぎない。然るに悲しいかな、寒村の『微衷』は今だに『諒察』されて居ないのである。)

『此の事だに頼んで置けば、他に云ふ程の事もない。諸兄が最後まで、僕を愛してくれた厚誼を、僕は涙を以て思ひ返してゐる。此の多難な日に際して、諸君を見捨てる僕の裏切(もう取り返す事のできぬ!)を許してくれ給へ。もう書けないから止める。

一九二九年九月二十日

荒畑寒村泣拜

勞農同人諸兄

『遺書』の發表はこれで終つた。あとは前後の雜事數件。

寒村君が餘り永く寢て居るので、ホテルの者が少し不安に感じて、試みに起しに行つたのは、午後二時頃(?)であつた。ドア

には内から錠がおろしてあつた。それを合鍵で外からあけた。ベッドの上には黄色な物が多量に吐いてあつた。その爲にこそ彼は助かつたのであつた。

奥山さんが寒村君の腕に注射をしはじめた時、初はろくに氣もつかない樣子であつたが、やがて氣がついて拒絶しだした。イヤだ、イヤだ、注射をしてはイヤだと、弱い聲で云ひだした。奥山さんがそれをすかす樣にして、また注射を續けようとすると、彼は遂に狂ひだした。非常な勢ひであばれだし、怒鳴りだした。奥山さんは止むなく治療を中止した。

私はその時、いろ〳〵の矛盾を感じた。人が自ら死を選ぶ時傍らから無理やりそれを妨げるのが、果して善であるかと云つた樣な氣持もした。(然しそれが、周圍なり前後なりの種々の事情に依つて決せらるべきものである事は無論で、寒村君の今度の場合、私など、今ではズット違つた、反對の結論に到達して居る。)

こうした、私の矛盾の感を奥山さんに私語すると、奥山さんは、もちろん醫士の任務として『自分は只だ飽くまで毒と戰ふのだが、何しろ今日は失敗した』といふ意味の事を語つて居られた。何しろ本人があばれて治療を拒絶するのでは、お醫者さんも仕方がない。

それから寒村君は猶ほ數回、苦しそうな嘔吐をした。その中、我々は奥山さんの意見を聞いた上、彼を大久保百人町の宅に運ぶ事にした。寢臺自動車が來た。彼はわけなく運ばれた。あとで聞けば、彼自身はこの前後の事を幾許も意識して居なかつたらしく、只お玉夫人が、『内へ行きませうね』『内へ行きませうね』と云つたのだけを覺えて居ると云つて居た。

彼は東京ホテルの宿帳に『神奈川縣鎌倉大町塔の辻一〇七、大井健三』と記して居た。所が、おかしい事には、このアドレスは大森義太郎君ので、『大井』の『井』の字も、初は『森』と書いて次にそれを消して『井』に改めた痕跡が見えてゐる。『健三』は『淺原』のを思ひだしたのだらうか。

その日、裁判所からは、改めて呼び出すまで出頭に及ばぬといふ通知が來てゐた。

その後、寒村君は大久保百人町三七三の渡邊醫士の治療を受け、經過は頗る良好で、果物や流動物は既にズン〳〵攝取されてゐる。報告は先づこのくらゐの所にとゞめておきます。

渡邊千冬論

馬場恒吾

目下の政界に展開されつゝある疑獄事件は或意味に於て劃時代的と云へる。今より約十年前の原敬の政友會内閣時代にも滿鐵、阿片、瓦斯等の大疑獄があつた。併し其時は時代の思潮が今日程尖鋭化してゐなかつたが爲めに、それらの疑獄は如何に政友會の政治が腐敗してゐるかの印象を與へたのみで、それに依つて日本の政治組織の改革が問題にはされなかつた。然るに今回の疑獄に至つては、勳章と利權とが交錯して、政治の芯の芯まで腐つてゐる事が公衆の前に曝露された。勳章の方は別として、前鐵相小川平吉氏の事件は、若し現在迄に曝露された事實が事實であるならば、それは小川一個の問題でなく、彼れの屬する政黨若くは彼れの屬する政界の本質的な問題である。現在の政黨首領は莫大な資本を所有する事を必要とする　小川は政友會の總裁候補者の一人であつた。だから金を拵へる必要があつた。これは最も簡短な三段論法であつて、現在の政黨政治を認めるものは此論理を認めなければならぬ。だから今回の疑獄事件はそれを論理的に押し詰めて行けば、現在の政黨政治を否認しなければならぬ結論になる。それが今後事實の上にどう發展するかは豫言出來ないが、今日の時代思潮に反映して事に依つては劃時代的な意味を有するに至る。

此疑獄の鍵を握つてゐるのは云ふ迄もなく司法大臣である。貴族院研究會の革正運動の頭目であつた渡邊千冬子が司法大臣となつてゐる。濱口内閣の大臣であるけれども、民政黨の黨員ではない。

七月二日濱口内閣が組織される日の朝、濱口邸から渡邊子の所へ電話があつて、今日は一寸用事があるかもしれぬから外出せずに居て呉れと云ふ事であつた。渡邊はそれを承知して家に

居ると午後になつて、話し度い事があるから、濱口邸に來て呉れと云ふ電話があつた。行くと濱口は

『君は何の政黨にも屬してゐないのだから、司法大臣になつて貰い度い』

と云ふ。渡邊は今迄研究會の幹部であつたが故に、二三の研究會幹部に相談したいから、暫らく時間の猶豫を與へられたいと云つた。濱口は重ねて

『實は出來るならば、今日中にも內閣を組織したいと思ふ。成るべくは卽答を願ひ度い』

それで渡邊は司法大臣になる事を承諾した。此會見は僅かに十分間で濟んだ。

濱口首相が非政黨人である渡邊子を法相にしたのは、司法權が政黨的に行使されると云ふ疑惑を起さしめない爲めであつたと見へる。前の憲政會內閣の時は黨人の江木翼氏が司法大臣であつた。其時は松島事件と云ふ大疑獄が起つた。檢擧されたものには政友會、政友本黨の有力者の外に、憲政會の長老箕浦勝人氏も居たのであるが、然かも世間には政府が此疑獄を黨略の爲めに起したと云ふものがあつた。司法權は公平でなければならぬ。だがそれのみでは不足だ。公平でないとの疑いを受けてもならぬ。其所に渡邊子の起用される一つの理由があつた。世間の興味は彼れを中心として湧く。彼れは果して如何なる人物か。

私は妙な事から彼れに興味を感じてゐた。大正十二年清浦內閣が成立した頃に、新聞記者團と護憲運動の連中が、研究會の事務所に乘り込んだ事がある。研究會幹部が主謀者になつて、貴族院の特權を笠に着る貴族院內閣を拵へたのは怪しからん。一つ研究會幹部と談判しやうと云ふのであつた。私も新聞記者をしてゐた時なので、此談判に行く人々の中に居つた。そして階級としての貴族が、其階級の特權を利用して政權を握る事を憎々しく思つてゐたから、研究會幹部と對陣したとき、散々に其態度を攻擊した。それ迄に私は研究會に出入した事がなかつたので、其所に居並ぶ幹部の誰れが誰れだかを知らなかつた。何れも華族らしく、フャけた顏をしてゐると思つた。處で、其中の一人が、始めから終りまで攻擊の矢面に立つて討論し、逆襲する任に中つた。立場が防禦的である丈けに、隨分無理な理屈を捏ね廻はしたのであつたが、兎も角も二院制度を認めて居る日本の憲法を楯に採つて、貴族院としての立場を一歩も讓らなかつた。私は隣りの人を顧みて、あれは誰れだと聞いた。

『あれは渡邊千冬さん』

「貴族らしくなく、まるで野武士だなア」

「前に代議士だつたのだ」

それ以來、渡邊子と顔見知りになつて、議院の廊下で會ふと互に微笑する程度になつた。

彼れが代議士になつたのは明治四十一年であつて、其時彼れは滿三十歳幾ヶ月で衆議院の最年少者であつた。彼れは信州諏訪の生れであるが、其處には小川平吉が立候補してゐた。小川も彼れも共に非政友、非憲政であつたが故に、當時は大選擧區であつたけれども、彼れは小川に遠慮して南信には行かなかつた。其選擧に臨むとき、彼れの汽車が輕井澤に着くと、地方の有志が來て、紙切れに何か書いて渡した。それを見ると『一、お辭儀を丁寧にする事。一、増税反對の演說をする事。此二ヶ條を守れば必ず當選する』とある。彼れは此個條を守つて、選擧戰を行つた。小諸、上田、須坂を中心として一日四ヶ所宛演說して廻つた。そして、初めての立候補で當選したのである。だから比較的樂な選擧であつたと見へる。

併し私の見る所では、如何に樂な選擧でも、一度代議士選擧を經て來た男は、落選と、當選とに關らず、何處か異つた所がある。私が知つてる連中でも、選擧の前と後を比較すると、人間が産れ更つたやうに出來て來る。鐵も鍛錬しなければ切れない。貴族院議員の中で、代議士上りの渡邊千冬はそれ丈けの價値はあつた。

護憲運動に對しては彼れは矢面に立つて防禦したが、實は彼れは心では當時の清浦内閣の組織に關しては不滿であつた。彼れは其内閣が出來つゝある際に、研究會の同僚に向つてさう云つたのである。研究會が貴族院内の一政黨として、自から内閣を組織すると云ふのなら、その善惡は別として、兎に角一つの意義はある。然るに今組織されんとする内閣は、貴族院内の汎べての會派から閣員を採ると云ふのだ。それでは單に貴族院で内閣を組織したと云ふ外に何らの意義を有たない。其結果は貴族院と衆議院と抗爭する事になつて、甚だ面白くあるまいと說いた。併し其說は研究會の大幹部に依つて用ひられなかつた。

護憲運動が起つて、新聞記者などが研究會に乘込んだ時、彼れは反對黨が民衆を騙つて研究會を威嚇するものだと見た。それに屈する事は彼れの闘志が許さない。それ故に彼れは一人で論難攻擊の衝に當つた。だが後に、彼れは會の大幹部に向つて、

「君等は僕の說を用ひずして、清浦内閣を組織した。そして世間が八ヶ間敷なると、少しも顏を見せないで、反對の僕等に尻拭いをさすじやないか」

と云つた。

後に彼れは研究會の革正運動の頭目となつたが、其端緒は此邊から出發してゐる。世間が貴族院を攻撃するけれども、其眞意は貴族院全部を攻撃するのでなく、貴族院内の研究會を攻撃してゐるのだ。それも研究會全部でなく、其幹部が政治ブローカー的の行動があるだらうと疑ふからである。だからさうした疑いを起さしめる幹部專制を打破しなければならぬと。これが彼れの意見であつた。併しそれは只意見であるのみで急には實行に現はれなかつた。

此運動が政界の表面に現はれて來たのは昭和二年田中内閣が成立した頃からである。彼れの同志は彼れに向つて革正運動の先頭に立つ事を要求した。初めは彼れはそれを拒否してゐたが後には何日となしに其中心人物として見られるやうになつた。研究會の幹部青木信光子等が策動して、初めは研究會より大臣を出さんとし、中頃十五銀行の救濟を要求し、後に、馬場鍈一氏を勸業銀行總裁に就任せしめた事實があつて、革正運動の主張が裏書された。近衛文麿公などの公侯爵議員は研究會を脫會して火曜會なるものを作つた。研究會幹部は最早安閑としてゐられなくなつた。渡邊は青木に會つて、幹部の地位から退くべき事を薦めた。青木は承諾した。渡邊には依然幹部として殘れと勸告するものもあつたが、彼れはそれを聞かなかつた。青木を退けて自分が殘つては恰かも、革正運動が青木排斥運動であるかの如く見られるからであつた。そして此騷ぎの結果として研究會の幹部は全く一變して了つた。

昨年十一月の研究會幹部改選に際しては、渡邊を中心とした幹部を作れと云ふ意見があつた。渡邊は青木を退けて自分が殘らなかつた如く、自分が復活して青木を復活させないと云ふ事は出來ないと主張した。御大典に際して、皆んな京都に往つてゐた頃、十一月六日の南禪寺近くの渡邊の居所で、研究會の十人會を開いた。それ前から存在してゐた所の研究會の頭目の會であつた。其席で青木も渡邊も共に常務になる。其他の振り當てはかく〳〵と全部決定した。只多額議員から出す役員の數を案分比例で二人としたのが、東京に歸つてから、三人にせねばならぬ事が發見された。當時幹部の顏振れに關する交涉が東京まで持越されて來たと云ふ噂があつたが、それは事情に通ぜざるもの、云ふ事であつた。かうして組織せられたる幹部は最早以前の如く幹部專制を行ふ力なく、從つて政治ブローカーと見られる仕事を爲すに適さなかつた。それは今年春の議會に於て、私鐵買收法案其他多くの法案が握り潰しの運命に遭つた事が證明してゐる。研究會の所屬議員が自由投票をなし得た結果である。これ丈けは革正運動の效果と見られる。

今年秋の幹部改選に於ては、青木子一派の舊幹部が全部復活した。それは渡邊子が大臣になつた事に對する反動だと世間は解してゐる。若しそれが事實とすれば、彼等は鬼の留守に命の洗濯と云ふ下心であると見られる。果して彼等の云ふ意味での命の洗濯が出來るか否かは、今後を見なければ判らぬ。

渡邊子は昨年床次竹二郎氏が民政黨を脱して政友會に走る迄は床次を支持して來た。併し其交際は比較的に近頃の事で震災後床次が一時麻布仙臺阪の渡邊邸の隣りに住んでゐた時から始まる。其頃二人は會見した。渡邊は床次に傾倒した。他の政治家が利害の勘定に忙がしい時に、床次の話しが割合に利害を超越してゐる。餘りに打算的ではない。單純に天下國家の事を話してゐる。其所に感心して、かうした政治家と事を共にすべきだと考へた。そして彼れは憲本聯盟の發案者になつた。

清浦内閣が衆議院を解散した大正十三年一月三十一日渡邊は品川のすざき館で會食してゐた。それは彼れの飲み仲間の會であつた。始めは飲中八仙會と云つて、八人の會であつたが、八人では少な過ぎると云ふので、倍數の十六羅漢をこぢつて、羅漢會と云ふ事にした。其會があつて、其席には後に總理大臣になつた若槻禮次郎氏も居た。其時は渡邊は研究會、若槻は憲政會であるが故に、正に火花を散らす戰の相手であつた。併しかうした私的會合になると彼等は打解けて話した。渡邊は政友會が目的の爲めには手段を擇ばない行き方に對して反感を懷いてゐた。政治は正しき手段で正しき目的を遂すると云ふ事でなければならぬ。當時の政友會の働き手であつた横田千之助氏の如きが、金を遣つて鷄鳴狗盗の輩を集め、それで貴族院を威嚇するなどは、其目的が善くても正しい政治の行き方ではない。だから將來は正しい行き方をする政治家の結合に依つて、國家を擔任すべきだ。それには憲政會の連中は政友本黨の床次と聯結した方がよい。さうすれば目的の爲めには手段を擇ばないと云ふ政治を改める事が出來る。憲本聯盟に依つて日本は救はれるのだと說いた。憲本聯盟の言葉は此時始めて生れたのであらう。若槻は英國流の立憲思想を體得してゐる男だから、大に渡邊の說に共鳴した。行く／＼はさう云ふ方向に進まうと云つた。

處ろで間もなく清浦内閣は總選擧に負けて辭職して、憲政、政友、革新の三派聯立内閣が出來た。其後にも渡邊は若槻に向つて憲本聯盟の事を云つた。併し其時は若槻は木で鼻を括つたやうな挨拶だ。今は政友會と聯立内閣を作つてゐるのだから、僚友を裏切るやうな行動は出來ないと云ふのである。渡邊は濱口にも話した。首相の加藤高明伯には再三其話しを持ち出した。何れも趣旨には贊成であつたが實行には移らなかつた。

所ろで大正十四年に三派聯立內閣が潰れて、憲政會單獨內閣が出來た。さうなると、憲政會は今迄顧みなかつた政友本黨を顧みるに至つた。首相の加藤は研究會から政務官四名を採用する。床次を引き付ける爲めには、先づ其親類の研究會を擒にすると云ふのであらう。翌年首相になつた若槻は本黨に向つて聯立內閣を提議した。それは不成立に終つたけれども、其翌年には憲本聯盟が正式に成立した。其直前に行はれた三黨首妥協は今日に至つても尚評判が悪るいが、此三黨首妥協を、憲本聯盟の序幕として見れば其所に新らしき意味が發見せられるであらう。憲本聯盟が出來た後に若槻內閣は潰れ、それが民政黨となつたとき、若槻は濱口に總裁の席を讓つた。若槻と本黨の間には目に見へざる因緣でもあるやうだ。

憲本聯盟から民政黨に行く迄には渡邊は裏面に働いてゐた。床次の爲めには陰になり、日向になつて其立場をよくせんとした、所ろで、民政黨が出來て一年ばかりの後、床次は再び脫線して新黨を作り、後には政友會と合流した。此民政黨脫黨と共に、渡邊と床次の緣は切れた。渡邊の意見では、政治家の進退は自分のよしと思ふやうに、自由に決めてよいと云ふ譯のものではない。政治家にはそれに付隨して行く多くの人が居るのだから、少くともそれらの人を納得をせしめる丈けの理由がなくては、容易に進退を決すべきでない。床次が民政黨を脫黨した理由として發表されたものには、成程これは左だと思はれる理由がない。恰かも手段を擇ばずして目的に走るの觀がある。だから政治上の行動を共にする譯に行かなくなつたと云ふのである。

文學に於て、形式が內容を決定すると云ふ議論が、或程度迄は成立つ如く、政治に於ても、形式は或程度迄內容を決定する。渡邊は政治は正しき手段で行くと云ふ信條を有つてゐる。さうした信條は司法權に最も有效に適用される。

濱口首相は渡邊が黨人でないが故に彼れを司法大臣にした。渡邊自身も今回の疑獄を司る事に於て、公平そのものを唯一つの目標としてゐる。彼れは司法大臣になつても、司法官及司法省の役人を政友會內閣時代の儘で使つてゐる。彼れは其直接部下の秘書課長をすら更迭しなかつた。今の疑獄を司つてゐる司法官は政友會內閣の任命した司法官である。だから、例令、今檢擧される中に政友會の人が目立つてゐても、政友會がそれを以て司法官の公平を疑ひ得ないやうに出來て居る。

外部から見れば今少しく檢擧の手が延びてもよさゝうに見へる點がある。檢擧さるべくまだ檢擧されない人、問題にせらるべくして問題にされてゐない事柄があるやうに見へる。それを突込んで、渡邊に聞いた人もある。然るに渡邊の性格はほじくり出して、罪人を一人でも多くすると云ふ風でない。現在の社會は餘り多くの罪を含蓄してゐる。目に餘るもの丶みを檢擧し

ても尙且つ今日の如く疑獄の繁多を來たす。國の綱紀を維持する爲めに已むを得ず、檢擧すると云ふ樣子である。これは彼れの人間味である。

其代りに檢擧すべきものを檢擧する事に付いては、何人の干涉をも肯んじない。それは取調の進行を中間的には閣議へも報告しない事を見ても判る。彼れが報告するときは、最早檢擧とか收監とかゞ決定した時である。中間報告をすると、それが世間に漏れて、色々の注文や運動が起る事を惧れてゐるらしい。

約十年前原内閣の時代に東京瓦斯會社の疑獄が起つたとき、時の司法大臣大木遠吉伯は新聞記者に向つて、此事件を芋蔓式に檢擧して行くと社會組織を破壞する事になる。だからいゝ加減の所ろで打切るのだと云つた。社會組織を破壞するとは元より誇張した言葉に過ぎない。法律上の罪人をいくら檢擧してもそれは只社會秩序を維持するのみだ。大木の考へてゐたのは社會組織ではなく、只其時の政界巨頭に及ぶと云ふ意味であつた。今の渡邊法相が大木の如き妥協的心持ちのないのは、政友會の總裁候補者であつた小川を檢擧したのを見ても明かである。

彼れは宮内大臣をしてゐた渡邊千秋子の實子で、渡邊國武子の養子である。そして相當の財産を有する華族である。其生涯は寧ろ順調すぎる程順調であつた。代議士になるさへ大なる惡戰苦鬪をしなかつた。かうした環境の中に育つた彼れの頭は純理に動く。彼れの論理は何日でも明晰で、生一本である。其上に彼れは養父から多少の禪味と多分の強情さを受け繼いでゐる。それが彼をして、常に利害を忘れて純理に突貫せしめる。

元より彼れは社會組織を破壞すると云ふ如き大それた考へを懷いても居らず、懷く筈もない。然るに實際の社會的の變化は、危險なる左翼理論を唱へる者よりは、却つてさうした意識はなくして、只純理の指さす所に猛進するもの、手に依つて行はれる事が多い。彼れの如き純理の人が司法大臣となつてゐるとき、吾々は特に司法權の活動を刮目して見て居る必要がある。

渡邊に人間味の豐かなる事は前にも云つた。それが彼れに文人墨客の風を與へてゐる。曾つて興津の西園寺公の別莊が出來上つたとき、東京からの政客が其所に集まつた。西園寺公は彼れに向つて、君一つ、此家に名を付けて呉れんかと云ふ。渡邊は考へて、「坐漁莊」がよからうと云つた。太公望が渭江の岸に坐つて釣りをしてゐると云ふ事に引つかけたのであらう。それが別莊の名になつたと聞いた。

彼れが井上雅二氏に與へた手紙に

『僕はまだ夢を見てゐる。然し僕は失望しない。人は夢を見ることが出來る間は幸福である』と書いて居る。何の夢を見てゐるか明かでない。併し彼れの性格は純理の指さす所に行く外はない。そして純理は明日の社會を指さしてゐる。

中間物選集

發行所
東京市丸ビル五階
中央公論社
振替口座東京三四番

四六版三百餘頁・瀟洒たる装幀・定價 各冊八十錢・送料八錢

地球は廻る。時代は移る。社會は急速なテンポで時々刻々進展して行く。ジヤズ、ダンス、ラヂオ——鹿爪らしい道學者面は止め給へ。蒼白く深刻ぶるのも時代遲れだ。輕妙に、快活に、ちよいと空を仰いで見るここだ。ほら！ツエツペリンが流れて行くよ。プロペラアの響に合せて歌ひ給へ。その歌がこの『中間物選集』だ、これこそ全く時代人への相應しいプレゼントだ。

1 巴里を語る

柳澤健著

内容　巴里を語る。名優ギトリイの死。ポールモーラン。日本から歸つた三人。今日の佛國文壇。愛怨遺事。他十五篇。

モン・パリ！　モン・パリ！　巴里への憧れは現代人の最も切な情熱だ。だが眞の巴里はシネマや小唄の傳へる所で想像したとてその姿は掴めまい。眞の巴里に接したい人は此の書に就き給へ。筆者は人も知る外交官で且つ詩人だ。巴里にゐること五年、その間凡ゆる盛り場、凡ゆる裏街を歩き、畫家、詩人、賣笑婦、女優等、パリージヤンの眞骨頂に觸れた。巻中、文藝談あり、紀行談あり、物語あり、漫筆あり、眞に當代希な好文字である。

2. 山へ入る日

石川欣一著

● 内容　山に登る理由。山と女。山と煙草。アルプスの思出。可愛い山。スキー場の娘子。米國娘。中年者の幻想。他三十篇。

山はいゝなア！　春は新緑・夏は雪渓・秋は紅葉・そして冬はスキーといふ奴があるぢやないか。過去の詩人も山を愛した。だが現代人はそれとは別の意味で山を愛しはじめた。昔の人は山を山として眺めて樂しんだが、現代人は山を征服し、山を抱いて凱歌を擧げてゐる。健康で、堂々としてゐて、男性的で、然も無限の變化を藏してゐる。山！　山に憧れる人は日本一のスマートな山男たるこの著者に從いて山へ分け入りたまへ。

3. 都會の點描派

淺原六朗著

● 内容　都會の交響。現代令孃氣質。マネキンガール素描。感想と論議。散景の人。自己を語る。街の天使。他四十篇。

高速度な變化の中に都會は生長して行く。この生長の中に近代の一切がある。ブルヂョアは高價なカクテルをホテルの一室ですゝり、プロレタリヤは電氣ブランを酒場の樽の上で傾ける。失業者は履歴書を戸毎に撒布し廻り、サラリーマンは月給袋をカフェーの女給に破らせる。これ等すべての階級と層のめまぐるしいテンポの交錯を身輕に間切りながら舗道を行く近代人の姿こそ最も本書に躍如たるものがあらう。

文壇ヘゲモニーの檢討

大宅壯一

一

「プロレタリア文學派の批評家たちの多くは、必ず一致して既成文藝の壞滅を叫び、プロレタリア文學の勝利を高唱する。文藝界の狀勢を鵜呑みにしたやうなこの斷定が、果して實際的に、具體的に當つてゐるであらうか？ 實際に卽しないで、抽象的にならそれ〴〵の主觀で、認識で、如何なる斷定も下すことが出來るし、また、實際に卽さない理論を以てすれば、その斷定を如何樣にも理論化することが出來るのである。」（「新潮」十月號所載中村武羅夫氏の「プロレタリア文學の理論とその作品の吟味」）

日本にプロレタリア文學運動が起つて以來、かれこれ十年になる。だが、「文壇」に存在權を確保し得たのは、最近二三年のことである。それにも拘らず、プロレタリア派がすでに「壓倒的勝利」を占めたといふことは、一般的に承認せられてゐるやうであるが、果してそれは、「文藝界の狀勢を鵜呑みにした斷定」であらうか？

もつとも、惜しむらくは、今までのところでは、文壇におけるブルヂョア派とプロレタリア派の勢力關係を、はつきり具體的に示したものはない。最近一二年の文藝評論界は、まつたく廣い意味でのプロレタリア派の獨占に委ねられてゐるかの如き觀を呈してゐるにも拘らず、この方面のまとまつた、統計的な研究乃至評論が、私の知つてゐる限りでは、まだ一つも出てゐないのは甚だ遺憾である。それは頗る困難ではあるが、この際もつとも緊要な仕事の一つであるからだ。

二

幸ひ「文學時代」十月號には、「短篇小說二十五人集」と題して、代表的新人の大部分を網羅してゐるが、これは現文壇の特色や傾向に對して、鳥瞰圖的觀察を試みるには、甚だ好都合である。

で、私はこの際、これらの作品の一つ〳〵に、從來の月評式印象批評を加へることをやめて、全二十五篇を一つの長篇小說と見做し、その中に取扱はれたテーマなり、その中へ現れる主要人物や副人物なりを、統計的に調べてみたのである。この試みの精しい結果は近日東京朝日新聞に發表する筈であるが、今この論文に必要な點だけを、ごく簡單にかいつまんでいへば、次の如くである。

前記二十五作家のイデオロギー的分類

一、自らマルクス主義者たることを表明してゐるもの。（「戰旗」「文藝戰線」の兩派を含む）十二人。

二、廣義の社會主義傾向を示してゐるもの。四人。

三、プチ・ブルヂョア的自由主義、享樂主義、若くは虛無主義的態度をとつてゐるもの。九人。

これらの二十五作家の作品におけるテーマーの分類。

一、マルクス主義的のもの。　九

二、廣義の社會主義的のもの。　七

三、プチ・ブルヂョア的のもの。　九

これによつてみても、廣義のプロレタリア派及びマルクス派が、今日の文壇でいかなる地位を占めてゐるかゞ、大體わかると思ふ。しかもこの分類の對象になつてゐる二十五作家は、何等の黨派的偏見にも妨げられずに、ブルヂョア・ヂャーナリズムの「公平」なる基準によつて選ばれたのである。そしてその大部分が、最近文壇に進出したところの新進作家である點からいつて、現文壇の主流がいかなる方向に向ひつゝあるか、凡そ見當がつく筈である。

しかしながら、これに對して、或はかういふ反對說が出るかも知れない。卽ち、前記の分類及びそれから引き出された結論は、あまりに唯量主義的である、しかも、藝術の世界で問題になるのは、たゞ質あるのみであると。

この反對說は、一應はもつともである。文藝の價値は、議會のやうに多數決によるものでないことは明らかだ。

だが、それでは、「藝術派」若くは「ブルヂョア派」の文藝に、いかなる「質」があるか？　堂々とプロレタリア派に對立しうるのみならず、全文壇のヘゲモニーを獲得するに足るやう

なものが果してあるだらうか？

そこで私はまづ、「藝術派」若くは「ブルヂョア派」と目されてゐる作家群を支配してゐる主なる傾向を拾ひあげて、その本質なり、時代的意義なり、未來性なりを檢討し、次いでプロレタリア派にも及びたいと思ふ。

三

通俗雜誌の膨張と圓本の流行に基づく出版界の產業革命と、プロレタリア文學運動の勃興とは、從來比較的單一な組織をもつてゐた「文壇」に一大分解作用を生じ、既成作家の多くは生活的竝に文學的方向を見失ひ、或るものは無節操な通俗文學にのがれ、或るものは片々たる身邊雜記に墮した。そして前者は「藝術家」としての矜恃を喪失し、後者は「文學」に對する情熱を失つてしまつた。

さうした中で、急激な時代の流れに比較的無關心で、慌だゞしくそれを追ふこともなければ、捲き込まれることもなく、又押し流されることもなしに、依然として冷靜に、少しも偏見をしないで、ひたむきに自己の信ずる「藝術」に向つて精進してゐる人々がある。それは極めて少數ではあるが、一般讀書階級から、或る種の尊敬と、信賴と、期待とを迎へられてゐる。例へば、島崎藤村、山本有三、志賀直哉、十一谷義三郎といつたやうな人々で、彼等は「藝術至上主義者」であるといふよりも、むしろ藝術至上主義を生きてゐるのである。

これらの人々の存在は、一般ブルヂョア作家にとつて、プロレタリア派に備へる絕好の楯であり、「藝術至上主義」の生きた口實である。非プロレタリアの中にも、いかに優秀な、良心的な作家がゐるかを示すために、彼等がいつも引き合ひに出されるのは、この目的のためにである。かくて彼等は、無意識のうちに、「藝術」の名のもとに、極めて階級的な、卽ち支配階級に有利な役割を演じさせられてゐるのである。

又、文學的にいつても、彼等のかうした態度は、いはゞ文學的アカデミズムともいふべきものであつて、漸次時代的意義を失ひつゝあるのである。勿論、彼等の到達し、保持してゐる形式は、現在のやうな過渡期にあつては、他に見出しがたい完全なものである。だが、「完全」なる形式も、かつては凄じい鬪爭を通じて獲られたものであつて、それが彼等の場合のやうに、窮屈な個人主義的退嬰の殼の中に長く閉ぢこめられてゐるならば、いつかその內面的生命を失つて、干からびた形骸と化し去るであらう。

現に、藤村の「夜明け前」は、中堅や新進の間にも求められ

ないやうなアンビシヤスな作品で、一般に非常な期待をもつて迎へられ、事實、又、形式的には完璧に近いものではあるが、「破戒」や「春」における如き情熱が感じられず、「お能」のやうな枯死した完成美が見られるばかりである。

山本有三の創作態度は、かなり末世の佛師が佛を彫るやうで、一字一句もおろそかにしないで、入念に小說や戲曲を刻んではゐるが、出來上つた作品に、魂の躍動が感じられない。

志賀直哉の作品は、段々さびを帶びては來たが、それだけ又、內容價値の稀薄な日記文學に墮して行くやうである。

十一谷義三郎は、この系統の作家では一番若いにも拘らず、若々しいところがほとんどない。「唐人お吉」を書いても、なくてもいゝペダンチックな考證ばかりが目について、あの時代の生きた空氣や、お吉の情熱といつたやうなものが、さつぱり感じられない。いはゞ剝製の文學である。骨と皮ばかりで、血がない、肉がない。時代の求めてゐるヴィタミンが少しも含まれてゐない。

これを要するに、文壇アカデミズムは、藝術至上主義の萎れかゝつた花である。といふよりはむしろ造花に近い。この種の文學が、どんなに贔負目に見ても、今日のやうなシユツルム・ウント・ドランク時代の文壇を支配しうるとは、考へられない。

四

次に、「文學」を單なる技巧や、技術や、遊戲と認めることに滿足しない一派がある。彼等にとつて文學は、單なる藝術以上の人生的意義を帶びてゐるのである。彼等は、文學を通じて生命の擴充と成長——卽ち自己完成を企圖する。

この場合、彼等は大抵、古今東西の聖賢を擔ぎ出して、その口吻を眞似る。かくして、基督、佛陀、老子、親鸞、日蓮、トルストイ等の模造品が、次から次へと日本の文壇に姿を現したものである。かうした聖賢達を主人公にして創作を書けば、作者もその聖賢の列に加つたやうな昂奮と快感が感じられるし、讀者にもさういふ幻想を與へ、一時的にもせよ、お互にこの「濁世」から游離することが出來る。

かやうに彼等の自己完成法は、いたつて簡單である。どんなにくだらない「自我」でも、それを忠實に表現して行きさへすれば、その表現を通じて「完成」されて行くのであつて、資本主義が今どんな段階に到達してゐるかといふやうなことには、全然無關心なのである。

彼等にとつて一番大事なものは、彼等の「個性」である。その「個性」の表現に際して出來るだけ峻嚴でありさへすれば、

生活はどんなにルーズであつてもかまはないのである。

だが、今日の社會に於いて、かうした考へ方や、それに基づいて書かれた「創作」が、いかに馬鹿々々しいものであるかはいふまでもない。

今日の文壇に殘存してゐるこの派の代表者は武者小路實篤である。楠正成を書き、日蓮を書いた彼は、最近更に「二宮尊徳」を書いた。この三人物の名をあげただけでも、彼の作品が現代においていかに反動的な役割を演じてゐるかは、一目瞭然である。彼は、その「人道主義」的口吻にも拘らず、過去においては無意識に、現在においては意識的に、彼を育んだ階級の利益のために、その作品を通じて戰つて來たのである。だが、近頃の彼の作品は漸次緊張力を失ひ、近作「變な村」の如きにいたつては、あらゆる意味において取柄がなく、結局ちつとも「面白くないファース」に墮してしまつてゐる。

吉田絃二郎も大體この系統の作家である。武者小路よりも反省力はあるが、線が細く、弱々しくて、一人前の男の讀むものではない。彼の筆にかゝると、芭蕉も西郷南洲も引つくるめて女學校三年生的センチメンタリストと化してしまふ。

その他、倉田百三、石丸梧平、江原小彌太、大泉黑石等々、一時日本の文壇に續出した「模造聖人」達も、近頃は大部分姿を沒してしまつたやうである。

五

次に、從來の文壇では、「作家の墮落」としてかへりみられなかつたが、いろんな意味において、重要な地位を占めて來た作家群がある。それは、菊池寛、三上於菟吉、中村武羅夫、加藤武雄、大佛次郎、白井喬二等を代表者とするいはゆる「通俗作家」又は「大衆作家」である。

彼等の存在は、今日では、既成「高級作家」――干からびた文壇アカデミストや、自己を見失つた自己完成派や、營養不良の身邊雜記派などの全部を引つくるめたものよりも、遙かに大きな時代的役割を演じてゐる。

だが、彼等を「通俗作家」若くは「大衆作家」と呼ぶのは正しくない。何となれば、健全なる文學はすべて「通俗性」を帶び、「大衆的」であらねばならないからだ。一部少數のインテリゲンチャの偏した趣味に合致した不健全な文學のみを「高級」と呼ぶのは、たしかに智識階級的僭越以外の何ものでもない。

私の考へでは、彼等はむしろ「商品作家」と呼ばるべきである。もちろん、すべての文學は、印刷されて市場に出る以上商品的半面をもつてゐるし、純然たる商品の中にも商品價値以上

のものが含まれてゐるものであるが、大體において、彼等の作品は、百パーセントの商品價値を目的として製作されてゐるからである。

まづ第一に、彼等の作品はその量において壓倒的である。全國の各新聞や、各通俗雜誌や、娯樂雜誌に發表される作品の總量を計算すれば、一部の高級雜誌や同人雜誌(プロレタリア派をも含む)に限定されてゐる「高級」文學などは、全く九牛の一毛にもすぎないことがわかるであらう。

それ故に、この種の作品の經濟的意義は頗る重大である。キネマがアメリカにおいて、代表的輸出品として重んじられてゐるやうに、この種の文學の製作竝に販賣は、一つの重要な産業である。

又、現在の階級社會におけるこの種の作品のイデオロギー的意義を輕々しく看過してはならない。イデオロギーの世界におけるそれらの役割は、支配階級にとつて、恐らく數十個師團の常備軍にも相當するであらう。

從つて、この種の作品の製作者は、現代のヂャーナリズムにとつてもつとも必要な熟練工として、到底他の文壇的作家の及ぶところではない。

かうした條件は、必然的に、從來とは逆に、他の文壇的作家を彼等の影響下におくであらう。現に、既成「高級」作家の多くが、漸次この分野に脱落しつゝあるやうである。

といつて彼等が、現文壇のヘゲモニーを獲得してゐるとは考へられない。それは、講談社・イデオロギーが、全日本の學校教科書の内容を成してゐるでも、日本の思想界のヘゲモニーを獲得してゐるとはいへないのと同樣である。

そればかりではない。時代の進展と共に、從來比較的同質的だと考へられた「大衆」の間にも、漸次分解作用が起りつゝある。そしてそれは、作家の方にも反映して、彼等の間からも、プロレタリア派への「轉向者」が生れつゝあるが、この傾向は今後一層勢を增すであらう。「高級」派が行つた道を、時間的に少しおくれて進むだけの違ひである。

逆に、プロレタリア派の中からも、近き將來において、通俗性と、大衆性と、從つて商品價値とをもつた優秀な作家が續々現れて來るであらう。

六

その他、「藝術派」若くは「ブルヂョア派」の中には、これまでは比較的重視されてゐたが、最近頓にその光彩を失つた、さまぐな傾向や集團がある。

例へば、谷崎潤一郎や里見弴の名と共に連想される都會的頽廢派がその好例である。かつては彼等も、かなり廣大なる讀者層に積極的に働きかけるだけの魅力をもつてゐたが、今日では大都市の柳暗の巷に近い裏通りによくある有名な小料理屋のやうに、一部の通人や好事家の味覺を滿足させるだけのことである。

佐藤春夫や室生犀生などを代表者とする詩人的藝術至上主義者の一團も、芥川龍之介の死後、極めて影が薄くなつた。三百年前のポルトガルの尼さんのラヴ・レターに隨喜の涙をこぼしてゐるやうでは、文壇のヘゲモニーなどは思ひもよらない。今では、この派から育つてナップの「詩人的作家」となつた中野重治に、惡い意味において、影響の跡をとゞめてゐるくらゐのものである。

廣津和郎の「純情」も、その後發展せざることおびたゞしい。今日の社會は、すさまじいテンポで動いてゐる。いたるところ、闘爭で渦卷いてゐる。その間にあつて、昔ながらの「純情」を持ちつゞけてゐる彼の姿には、幼年時代を追憶するやうな懐しさと親しみは感じられるが、それだけではどうにもならない。もつとも、近作「探海燈の下を」では、幾分プロレタリア派への接近を見せてゐるが、この程度ではまだいつ後戻りするか知れない。間宮茂輔その他若い作家の間に、相當エピゴーネンもゐるやうであるが、今數段の飛躍を經ない限り、未來性にとぼしい。

横光利一、池谷新三郎、中河與一等のいはゆる「新感覺派」は、横光一人が、獨自といへば獨自のスタイルを持ちつゞけ、錯覺的な概念のコンビネーションを示す題名によつて、その存在を明らかにしてゐるだけで、その他の人々は、彼等よりも後から出て、一層「新感覺」的な、モダーン派などに、先を越されてしまつた形である。

その他龍膽寺雄などのモダーン派を初め、岡田三郎などのエロチツク派、中村正常などのナンセンス派、淺原六朗などのサラリマン派、久野豐彦などのダグラス派等々……ブルヂョア文壇のショウ・ウヰンドウには、次から次へと新柄が現れて來る。それらは、需要のある限り、言ひ換へれば、それらを必要とする社會群が存在する限り、決して顧客を失はないであらう。だが、それらの存在理由は、むしろ階級的並に文學的ヘゲモニーを斷念し、放棄してゐるところに存するのである。

七

最後に、いよ〳〵プロレタリア派であるが、一口に「プロレタ

リア派」といつても、その中にはいろんな要素がある。たゞ特に注意すべき點は、同じプロレタリア解放運動の中でも、組合運動や政治運動の分野では、「社會民主々義者」が少くないばかりか、現在の如き反動時代には、壓倒的勢力を占めてゐるやうに見えるが、文壇にあつては、自ら「社會民主々義」を名乘り、その意識のもとに文藝行動に從事してゐるものが、ほとんど見當らないといふことである。菊池寛は社會民衆黨の公認候補者であるが、われ／＼はまだ彼から、「社會民主々義的文學論」といふものを聞いたことがない。今から二年ばかり前、勝本清一郎が「新潮」の合評會で、ちよつとさういつたやうなことで口をすべらせたことがあるが、その後間もなく、彼はマルキシズムの方へ轉換してしまつた。

ブルヂョア議會においては、現在プロレタリア派は僅かに七名にすぎず、山本宣治が白色テラーに倒れてからは、自らマルクス主義を名乘るものが、ほとんどないといつたやうな有樣であるにも拘らず、文壇では、本論の初めに掲げた分類におけるが如く、マルクス主義をもつて任ずるものが、絶對多數を占めてゐる。この事實は、果して何を語るものであらうか？

もつとも、「文壇プロレタリア派」は、一般プロレタリア運動内の「特等席」といはれるほど、今のところでは惠まれた安全地帶にゐるからだといつてしまへば、それまでゝあるが、單にそればかりではなく、もつと深い理由にも基づいてゐると思ふ。

「社會民主々義」は、資本主義とマルクス主義の中間に介在するところの、いはゞ現實的必要から派生した一種の方便主義であつて、マルクス主義のやうに、一つのまとまつた體系的な世界觀を成してゐない。しかも、文藝行動にとつて、もつとも必要なものは、確實な、はつきりした人生觀、社會觀、世界觀である。

然るに、最近まで大多數の智識階級を支配してゐた自由主義的人生觀乃至社會觀は、資本主義の發展が高度に達すると共に、完全にその支柱を奪はれ、この社會群は全體的に、ナンセンス派に脱落せざるを得なくなつて來てゐるのである。その點からいつて、社會民主々義者も、又アナーキストも、同然であるといへる。彼等の立場はおしなべて、重大なる歴史的使命を帶びて必然的に擡頭しつゝある新興階級の世界觀である唯物辯證法の敵でないことは明らかである。

もちろん、「ブルヂョア派」といひ、「藝術派」といひ、「マルクス派」といふも、すべて同時代人であり、その多くはインテリゲンチヤである點に變りはないのだから、思想的に、生活

的に、相交錯してゐる點が決して少くない。だが、問題は重心のおきどころにあるのだ。

又、中村武羅夫氏は、前記の論文において、「プロレタリア文學」と銘うつた作品中にもプロレタリア的要素の案外稀薄なのもあれば、非プロレタリア派の作品中にだつてプロレタリア的精神を盛つたものもあるといつてゐるが、たしかにそれは事實である。だが、さうした作品を書いた非プロレタリア作家が、いつまでも非プロレタリア派として止つてゐるのは無意義であるのみならず、不合理であり、誰よりも彼自身に對して不忠實であるといはねばならぬ。

極めて粗雑な概觀にすぎなかつたが、以上のべたところによつて、現文壇のヘゲモニーがどこにあり、どの方向に向つて進みつゝあるかは、大體明らかになつたと思ふ。更に進んで、マルクス派の内部における諸傾向や諸對立、並にその間における現在及び將來のヘゲモニーについても言及しなければならないのであるが、すでに與へられた頁數が盡きたから、それはまた別な機會に讓つて、一まづ擱筆する。

フイルム戀愛學

森岩雄

（1）ラヴ・シインの定義

映畫上の戀愛場面とは、撮影監督の註文及び監視の範圍内に於て、主として男優と女優とが戀し合つてゐるかの如く演技して見せる場面を云ふ。

「主として」といふ言葉は、稀に男優同志、女優同志で戀し合つてゐる場合が要求されることがあつたり、又、戀し合つてゐる芝居をしなければならないのに、その實、ほんとうに戀し合つて了つてゐる例もあるので、その斷りの爲めである。

（2）ラヴ・シインの功利的價値

映畫上の戀愛場面は見物に二つの價値を發見させる。

第一は啓蒙的價値。

初心にして戀愛に陷つた男女があるとする。彼等は他に爲すところなく、徒に默し合ひ、體熱を感じ、横隔膜の膨張に惱される。斯く自ら惱むのみでお互に眞情を表現する術を知らない。たゞ空しく對座し、或は伴歩するのみである。稀に口を開けば

――いゝ月ですね。

――風が出て來ましたわ。

――隨分天氣が續きますね。

――もう降つてもいゝ頃と思ひますわ。

――僕も左樣思ひます。

かゝる人々に映畫の戀愛場面はよく啓蒙的使命を持つてゐる。彼等は映畫から戀愛を語る「字幕」を借用して己れが用に便ずるがよろしい。

――あなたの瞳は木曜島の眞珠だ。あなたの脣は南海の珊瑚だ。

――戀は死よりも強いものよ。

その上に、「字幕」ばかりでなく、映畫の戀愛場面にあらはれる「動作」「技巧」をも自家のものとする。媚びを以て微笑する法、片目をつむる合圖の仕方、手の握りしめ方、接吻の角度、抱擁の段階、その他男の女を遇する、女の男を遇する、あらゆる萬華鏡的戀愛技巧をも……

あゝ、併し讀者よ氣を弱くしてはならない。吾人は此の現象を嘆いて呪つてゐては不可ない。一九一〇年度の日本男女と、一九二九年度の日本男女の戀愛樣式がいかに變化してゐるかを、辯證法的に研究したならば、その間、いかに大きな啓蒙的役割を映畫が演じてゐるかゞ明瞭になることゝ思ふ。

戀愛劇の現在に至るも後を絶たないのは、かゝる要求の絶えないのに基因する。

第二は享樂的價値。

我々は常に美しい戀を夢想して、而も常に最も平凡な戀しか現實では味ふことが出來ない。長老は、だから戀人同志の結婚式に出席して戒しめる。

——結婚は一つの式典に過ぎない。眞の結婚はお互ひが補ひ合つて圓滿具足の境地に達するまでの努力修養を意味するのである。

かう、いかに我々の戀愛生活が不完全に滿ちてゐるものであるかを親切に暴露し、失望させまいとして警戒を與へる。それほど、不滿足な、非永遠的な傾向を結婚は持ちたがるものなのである。

キリストの一夫一婦に對するコロンタイ主義の出現が意義を生ずる所以も此處に存するのだ。ところで、映畫はかゝる我等の不滿を緩和し、或る場合にはコロンタイ主義を中和することすらある。

いかにして。

それは我々は映畫の中で常に遊蕩し、時には姦通し、不滿と憎惡と因習に封鎖された現實の結婚生活を忘れて了ふことが出來るからだ。映畫館は暗黒だ。一人毎の靜寂がある。大膽な空想が燃え擴がる空間を持つ。而も精神を麻痺させる音樂がある。かゝる雰圍氣の中に此の世にあるとは思へぬ戀愛が、粉飾し、欺瞞すべく粧はれた男と女とによつて演ぜられるのだ。

金錢をのみ口にする疲れた妻に飽いた中年の男は、直ちにその女優を戀人に、自らを忽ち二枚目俳優に轉身させる。又、貧弱にして暴虐、朝刊と夕刊以上の教養を持たぬ夫を憎惡する妻ならば、これとは反對に自らを美しき女優に置き替へ、力と美と若さと、自在なる機智とを持つ駿馬の如き男優を戀人とすることが出來る。

かくの如くして繰りひろげられる七、八十分間のロマンスは、完全に吾々を現實生活から遊離させることが出來る。たゞかゝる夫婦者は映畫が終つて、互に見合せる顏と顏との表情に注意することが肝要である。その瞬間忽ちに二人の表情が恐怖と苦笑と絶望とに滿ちるであらうから。

（3）ラヴ・シインの種類

戀愛場面を描く監督の癖、主張、個性、それには樣々の種類がある。

第一はロマンチストの一味である。

鳥が囀つて、日が照つて、小川がせゝらいで、遠くのセレナアドで、男は繪の如く徒に男しく、女は繪の如く徒に美しく、すべて十八世紀模樣に描き出さうとする人々である。

その巨頭は聖教徒D・W・グリフヰスだ。霧が立ちこめて街燈がほの蒼く、川面では船の笛が佗しく泣いてゐる。多感な支那の若者が可憐な白人の娘の傍におづ〱と寄り添つて靜かに戀を囁く「散り行く花。」木陰に坐した二人はぼんやり考へる。二つの心に一つの命、二つの命に一つの心。黒坊が歌ひ、牛が鳴く、二人はいつまでもそれを考へて坐つてゐる「東への道。」

フリッツ・ラングの戀愛場面はスケッチ的ではない、大伽藍の壁畫の壯大さがある。百花繚亂の庭前、ジーグリフリードとクリームヒルドとが手を取り合ふ端麗さ。街は大水。小高き臺に立つて伴と抱き合ふ「メトロポリス」のヒーローとヒロインの戀愛は、その代

表的のものであらう。

レクス・イングラムは華美で妖艶、寧ろ頽廢的な興味を中心に戀愛場面を構成する。紫色のタンゴの夢、明るい南海の夢にとりかこまれた……

新進ウヰリアム・ウエルマン、エドワアド・サザランドは流石新鮮な色彩を基調とする。明るくて、活力的で、生きのいゝ戀愛場面が續出する。見物は微笑して居ればそれでいゝのである。

第二の部類はスタイリストの群である。特別な型で彼等の戀愛場面を處理してゐる人々である。

漫畫的に誇張するのはマク・セネトである。露骨で皮肉で、突如スカアトが風に煽られ、戀人と語り乍ら川に落ち込み、牛の舌と戀人の唇と間違へたり、見物は概して笑つて了ふが、時々は苦笑しないと、低能を證據立てるやうな場面さへ作る。

誇大妄想式戀愛場面の模範型式はセシル・B・デミルのよくするところ、牛乳屋と女中との戀愛さへ、彼は恰もルイ十何世と何とか伯爵夫人との戀愛情景の如くに扱ふ。彼は戀愛をサーカスの如く商業主義的に演出して了ふのである。

フランスで有名なスタイリスト、マルセル・レルビエ、彼は眞面目でデミルの如き虚飾はないが、スペインの毒婦は飽までもスペインの毒婦らしく、パリの小娘は絕對にパリの小娘に終始させる程のスタイリストである。近頃評判のヨゼフ・フオン・スタンバアグは、燃ゆる心を冷い素振で白々しく裝ふ女の戀愛、心の陰影、それを盛んに狙ふ。併し、未だその點にかけては驚く程の才能は見せてゐない。天才ムルナウも戀愛場面は常に概念的で、甚だ凡庸である。

第三の部類は經驗派、經驗主義者の群である。豐富な戀愛經驗を持つて、それを作る映畫に應用してゐる連中である。

とりわけ、エリク・フオン・ストロハイムは、元々アナトールの都、ワルツの都に生ひ育ち、散々歐羅巴を遊び廻つた末が米國に來て活動監督になつた男だ。品のいゝ殺し文句や、自負心の強い婦人でも上氣させる位の扱ひ方に不自由は感じない。片眼鏡でグロテスクな彼、好んで不具の娘、醜婦、下女等を相手に、徹底寫實で押し切つて了ふ。それでゐて一脈の哀愁と侮り難い氣品とを見せるのである。恐ろしく味のある男だ。

エルンスト・ルビッチユは、時代物、現代物を通じ、實感味の勝つた生々しい性慾描寫に傑出した手腕を持つ當世濡場監督の代表的人物である。彼の手にかゝると香水、盃、椅子、帽子、何でもない小道具までが、すべて愛慾の世界に躍動して來るのである。たゞ調子に乗り出すと、いくらか圖々しい下品さが鼻につくことがある。是は主として獨逸人たる彼の食物のせいであらう。

ルビッチユに並んで、大眞面目に此の圖々しい精力主義を眞向にかざして進むのが、「曲藝團」のエ・ア・デュポンである。ある「姦通」をしとげた男が、「曲藝團」を見て、デユポンはたしかに自分と同じ「罪」を犯したことがあるに相違ないと主張してやまない人物があつたが、デユポン、果して此の罪を甘受するのが當然であるかどうかは別として、彼の

その方面の演出振の巧妙さは、時に鈍感無智なる女優すら最高級の演技を彼によつて發揮することがある。

ラウル・ウオルシユ、彼はドロレス・デル・リオを使つて「カルメン」を作つた人物である。それだけで彼が並大抵の人物でないことが知れやう。ダグラスの「バグダットの盗賊」を作らせるには勿體ない才能の持主である。

第四の群は變態的戀愛場面に興味を抱く人々である。

主役女優を戀した監督がその心を彼女に思ひ切つて告げることが出來ない。で、映畫演出の上で、相役によつて散々彼女を愛撫させ、或は虐げさせ、以て間接的に快感を味つてゐる例があると聞いたことがあつた。それが昂じて可成激しい場面さへ考へ出した例もあるといふ。是等は特殊な場合であるが、見物の心を惹く爲めに殊更さうした效果を企圖する輩も尠くはない。たゞ「檢閲」制度が世間の「體面」を維持する爲めに各國共に嚴重な干渉を行つてゐるから、それほど自由な描寫は期待することは出來ない。

最近では「妖花アルラウネ」に於けるブリギッテ・ヘルムに對する監督**ヘンリック・ガレーン**の變態的熱情が目ざましかつた。ヘルムがあれだけの妖美を發揮する爲めには、それだけの價値を夙に監督が知つてゐるか、又は見ぬいてゐなければ到底表現し得ないことのやうに思はれる。

「ジヤンネイの愛」「パンドラの箱」を作つた**G・W・パブスト**はいはゆる現代の尖端に立つ監督である。尖端とは行きづまつた時代の端か、これから興る時代の端か、何れにしても其の過渡期を表すのであらうが、パブストは此の意味に於いて最も尖端的であり、モダアンである。從て彼の好んで扱ふ女性も、戀愛も尖端的であり、モダアンである。

チヤアルズ・チヤプリンの戀愛場面も特色がある。彼は常に祕かに戀をし、殊更涙ぐみ、無理に苦しみ、他愛なく虐げられてゐる。彼はそれに快感を感じてゐる。末梢的な近代人の變態感がたしかに彼にはあると思ふ。

（4）各國ラヴ・シイン帖

A　いたゞお

「古代繪卷風」

拳鬪選手の如き美姫が、おこがましくも身に繊維をまとつて船の如き寢臺に横臥してゐる。筋肉のひきしまり過ぎたる綾少の二枚目、疲れたる眼して美姫の前にひれ伏し、「おゝわが太陽よ」と云ふ。美姫はナマ〳〵と打ち笑ひ、鯨の肉のやうな太い腕を、憐れな戀人の上に差し出す。取り圍む侍女の中に、中々の美人がゐる。

「現代スケッチ風」

手を水車の如くに動し、顏を上下に搖り、交通巡査の如くに忙しい、ヤセッポチの一枚目。女と申すはやたらに目のふちが黒くなつて、生毛だらけ、二の腕には疱瘡の跡がくつきりと見える。營養は大變よろしい。男は口惜しがりヘナ〳〵になつたボルサリノの帽子を地面に投げ棄て、やけに蹲みにちる。女は無器用なしなを作つて空を見上げて思入れ。遠くに燈臺、鳩ポッポ、見物が活動の種取りを見て語り合つてゐるのまで美事にカメラに入つてゐるとこがお慰み。

B ふらんす

「リヴイラ模樣」

海岸。

賭博場。

繁茂する南の植物。

快走艇。

ピストル。

背の盛んに高い色男と、盛んにほつそりとした美人とが、空想の如くに綺麗に語り、綺麗に接吻し、綺麗に嘆き、綺麗に別れる。

「當世巴里風」

巴里は美麗で花の都だ、嘘を吐け！ だから宣傳しなければならないのだ、アメリカ映畫はそこでやたらに巴里廣告に務める。實際壯大な美しさは、エッフエル塔位なもので、ほんとうの巴里はもつと小味な美しさにあるのだが、宣傳の手前、フランスの活動寫眞屋も到頭引込みがつかなくなつた。其處で、さう云はれてさうでないのも業腹だと、所謂の苦しいのも關はず巴里を壯大な美しいものに見せやうと飾り立てる。隙き間だらけだ。從て巴里の戀愛場面も廣告寫眞の如くに扱はれて不愉快を極める。「妖婦」「色魔」「これが巴里！」實際の巴里は映畫の如くにがさつな所では斷じてない。

併し、何れにしてもフランス映畫の戀愛場面は、常に長椅子が中心になる。映畫を見てゐて親子だか、忠臣なのか、最後まで解らない愚劣な映畫を作る監督でも、長椅子を扱つて男女戀愛の場面を撮らせると、俄かに描寫に生氣を帶びて來るのが不思議だ。

巴里——戀愛——長椅子。

此の三つを離してフランス戀愛映畫を考へることは出來ない。

C どいつ

「汎ゲルマニズム」

彼は午餐に豚の股の丸煮二百匁を喰べ、麥酒を三杯飲んだ。彼女は鷄卵四個より成るオムレツと麥酒二杯飲んだ。

その彼等は夕方相會ふた。彼等の優しい求愛の表情は是を一キロ米離れて眺めた時、相爭ふてゐるものゝ如くに見えた。

「浪漫主義」

ワグナーはまだ生きてゐる。

金髮の大工の娘が、頰の赤い大學生のことを忘れかねて、窓に凭つて泣いてゐる。クリスマスの鐘に交つて、彼を都へ運んで行つた車の鈴の音が聞える。

一九二九年、か〻る場面は伯林に於て未だ現代劇中のものとして通用する。

「プロレタリア風」

機械工が同盟罷工を煽動して檢擧された。逃亡して戀人のところに逃げて來た。ミシンに坐してゐる戀人は肺を病んでゐた。二人は相擁した。搜索隊が來た。ピストルが鳴つた。戀人が身代りに射たれた。機械工は彼女を抱いて泣いた。又、ピストルが鳴つた。恐る〳〵搜索隊に近寄つた。機械工も共に死んでゐた。

D あめりか

「ナンセンス」

片手でロードスターを運轉することを知らないものは戀人になる資格はない。何故なら片手は彼女の爲に必要とするから。ところが

その彼が飛行機で是を用ひ、美事に墜落した。慘死した二人は、併し、接吻したまゝであつた。

「初戀」

彼は一弗ステーキを頑張つてゐる。

彼女はオレンヂ・ヂユースと胡瓜のサンドウキツチを一片喰べた。

二人は嬉しかつた。彼はその時、戀愛は當つた石油株より貴いと思ひ、彼女は毛皮の外套より大切なものだと思つた。

アメリカ人にかうした瞬間が全然ないと云ふことは彼等を侮蔑するものだ。是は最も神聖なる彼等の一生に一度の初戀なのである。

「戀愛哲學」

金が總てゞはない。金より大切なものがある。女は斯う云つて、猪首の成金の誘惑をきつぱり退ける。

見物は喝采する。何故喝采するか。彼等はその誘惑を退けなかつたからである。

「市俄古風」

甲親分が乙親分を一發で射止めた。乙親分の妾で巡査の娘は甲親分に抱かれて、濟円をして笑つてゐる。

E　につぽん

「時代劇」

笈を負ふて、青山、田舍のみにあらんやと志を立てた書生、志を改め丁髷を被り、脇息にもたれ

──みどもはそなたを愛するぞヨー

と曰へば、「君戀し」を口ずさみ、コツクはカツレツのみをあげるカフエーの女給然たる女優が、ホホと打笑み、猿芝居の如く袖にて顏を蔽ひ

「お恥しうござります。」

併し乍ら、斯の如き情景も、時代劇の衣を借り、新時代の精神を表現せるもの也と云ふ製作者、批評家も存在する世の中である。油斷は大敵である。

「現代劇」

若し、映畫が我等の生活、我等の希望の反映だといふ說が眞理であるなら、我等の戀愛情景は、現在の日本現代映畫に取扱はれてゐる戀愛場面に等しいものだと云はねばなるまい。我々は此の說を修正しないでもいゝであらうか。

昭和疑獄に登場する人々

山浦貫一

『疑獄は政治的に發生し政治的に處理される』日本に於ける疑獄の定理だ。

或る日の閣議の席上、宇垣陸相が言ひ出した。『〇〇疑獄を掲載禁止にして、勲章疑獄を禁止しないのは片手落ではないだらうか。勲章の方は社會人心に及ぼす惡影響が深刻だから、〇〇よりも此の方をこそ新聞に掲載することを禁じた方がいゝだらう』

ところで、安達内務大臣、卽ち選擧の神様は、實にいやな顔をした相だ。そして『其の事はいろ〳〵考へもあるから僕と司法大臣に委せてをいて貰ひたい』と言つた。

胸に吊る勲章で選擧民を吊らうと考へてゐる安達氏のプランが、掲載禁止となつてたまるものではない。現に勲章事件が、如何に有效と、選擧準備の效用を發揮しつゝあるかの實例は全國到る處の遊說隊が體驗しつゝある。其の報告は詳細安達氏へもたらされてゐる。政友會の遊說隊が、緊縮政策、不景氣政策を攻擊しつゝある時、聽衆の中から、『賞勳はどうした!』『賞勳の內容を言へ!』と彌次が飛ぶ。もう滅茶苦茶だ。それ程效果的である此の事件をうつかり闇の中へしまつてをけるものではない。

昭和疑獄の數々には勿論煙のあがる所必ず火はあらう。政府の宣傳も輪に輪をかけてゐやう。が、すべては天皇の御名に於てする裁判が決する。黑白はそれ迄待たねばならぬ。お先走りの新聞や、サーベルの宣傳に乘つてはならぬ。日糖事件の安達謙藏等を見よ。松島事件の箕浦勝人翁を見よ。大隈內閣の大浦內務大臣を見よ。滿鐵事件の井上匡四郎、中西清一を見よ。大きい魚が無罪になつてゐる。

——御註文に應じる僕の筆も、法にふれぬ樣被疑者の名譽を損しない樣、その苦心で勞はひかたくなる。乞ふ諒せよだ。

小川平吉事件

小川平吉氏を擧げる迄の捜査上の必要によるといふ掲載禁止。それならもう解禁してよかり相なものだが、新聞社の幹部二十一日會の解禁運動も效果なく、未だに解禁されぬ。然るに新聞はどし〳〵書く。內務系統は小川氏拘引を書く事を熱烈に希望した事實さへある。罰金の最高額五百圓、何ぞ恐るゝに足らんや、といふ。書け〳〵大丈夫だといふ。それかあらぬか、新聞は盛んにかいたけれども未だ罰金を食つたのが一つもない。

それ位なら閣議で解禁を決定して自由に大つぴらに書かせたら可さ相なものだが、そこに底あり、一旦書かせてしまつて、扨て更に又、選擧の坂へかゝつた時に解禁をして、其

處で又むしかへして書かせて、一石二鳥。最も効果的に使用しやう、といふ肚ではないか。といふのは、朝日新聞の某幹部が、新聞研究所報へ發表した意見だ。さもありなん事柄である。どうせ宣傳するなら、男性的にやれ。天下國家を憂へるなら勲章に就ては特別に考慮するがいゝ。乃ち宇垣大將の説に贊成する所以である。

小川平吉氏に罪ありや否やは公判に待たう。そして小川氏が拘引された事件は、依然として書けない。新聞は最高五百圓の罰金を通信料と思つてゐるから構はないが、雜誌ではさうは行かないから一切内容にふれる事をさける。

さるにても小川氏は妙な運命だ。彼が收容されたのが九月二十六日、田中大將の死んだのが二十九日。もし、小川氏が此の世に、天日に照らされて住んでゐたならば、政友會總裁從て次の總理大臣は彼の獲得する所となつたかも知れぬ。何しろ生え抜の政友ッ子だ。犬養、鈴木、床次の殖民地的の代物とは事がちがふ。彼等の勢力爭ひは、引いて小川に有利な場面を展開してゐたらう。次の總裁が論ぜられる時に、鈴木、床次、小川の順序に數へられてゐた位だから——もし無罪になつても、もう駄目だ。機會は、前額に毛が生えてゐる丈けで小川氏の様に、頭はつる／＼に禿げてゐるから。

取調の檢事から田中總裁の死を聞いて、あの氣の強い男が呆然自失したといふのは、追悼の念と、口惜しいといふ感情とが混合してゐたであらう。

彼れは口惜しい。引つ張つたのが同郷の後輩渡邊千冬（法相）だ。渡邊と彼とは伊那と諏訪のつい隣合せで、小川が政友會の代議士になつたのが三十三年か四年なら、渡邊が同じ政友會の代議士になつたのが四十一年だ。司法大臣たることも小川が先輩である——後輩先輩を引つくゝる。因縁が過ぎる。もう一つ、小川氏の口惜しがるべきは江木翼氏だ。小川法相の次に江木法相が、小川氏のやつた人事から仕事からすつかり引つくり返した。殊に朴烈問題では職を賭して迄大喧嘩をやつた。江木が小川をねらつてゐることは不倶戴天以上だ。其の江木が奇縁、小川鐵相の後鐵相となつてのりこみ、前大臣のアラを搜のに馬力をかけて、遂々、引つくゝる迄の段取りをつけてしまつた。江木氏は仇を打つた。涼しい顔をしてをれば小川氏は爾後いためつけられて歯がみしてゐるであらう。

小川氏には總裁になる野心がたつぷりあつた。總裁たるには金が要る。一選擧に五百萬の金は少くとも用意しなくてはならない。小川平吉もし罪を犯してゐるとすれば、野心が因をなしてゐる。

政友會方面で傳へられる所によれば、今迄彼は一文も黨へ金を出してゐない。好意を以て見る者は、小川は實は大借財を背負つてゐる、といひ、惡口をいふ者は、總裁資金にためこんだのだらうといふ。何れが是か知る由もないが、政治的野心を遂行する爲めに金の要るのは常識である。

ポーツマス條約反對の急先鋒、日比谷燒打事件のリーダーとして河野盤州や、大竹貫一やと共に牢に叩きこまれた國士當時の小川氏には、野心はなかつたらう。又政友會が桂内

閥と妥協したのに憤慨して脱黨した當時の彼は竹を割つた様な正義の士であつたらう。更に又近衞篤麿公の傘下として對外硬をとなへ、東亞同文書院の設立に盡力した當時の彼は、支那浪人の風格をそなへた憂國の志士であつた。

然し、其の昔の氣風が昭和の今日迄殘つてゐて、日本主義(？)の爲めに賣名の左書を禁止したり、日本新聞を起したり、治安維持法制定の急先鋒だつたりして、盛んに國粹を發揮すると、時代遲れの反動政治家と惡評される。今の『大臣級』として反動ならざる者ありや、小川氏はたゞ正直に生地を出してゐるに過ぎないのだ。

彼は野心をもつに至つた。金が要る。國士であつたり憂國の志士であつたり、貧乏の極、結婚當夜執達吏に踏みこまれたりしてはゐられぬ。

其の小川氏が、然し子飼ひの子分を持たない。鈴木でも床次でも三十人位の兵隊はしつかり握つてゐるのに、是れは又二三人とはない。どういふものか子分が出來ない。其の中で、春日俊文といふ子分、熱心な子分、其の春日が因をなして小川氏は曾ては自らが長だつた司法官の取調べを受けねばならぬ破目に立至つたのである。

新聞紙傳ふる所によれば……と逃げてなく。……春日君は小川氏が鐵道大臣であるのを利用していろ〳〵な利權を試み、大金を獲得した。小川氏は、利權運動者に對して『春日に話せ』といつた。春日君が小川氏と情を通じ、取つた金を小川氏に渡してゐるかどうかゞ、ポイントである。檢事局はこれを摑むに苦心する。

春日君は小川氏と同郷長野縣人。若くは政友會系の人だが、最初當選した時は憲政會であつた。三木武吉、小山松壽其の他の彌次隊長と同等の位置に立つて、議會では政友會の大敵であつた。彼は武勇傳中の人物で、三木や小山の様に口先ばかりでない。身を挺して敵陣に突撃して鐵拳をふりまわす。政友會の強敵であつた。其の人が、コロリと政友會へ寢返つた。時の政友會内閣に弱い尻を握られてゐるからだといふ噂であつたが、更に今度は議會内で憲政會の方へ鐵拳をふりむける仲裁者の隊長になつてしまつた。柔道も有段者だが、腕力の方も有段者で、生命をかけて喧嘩する位は何とも思はない男だ。それ位だから、たとへば小川氏と情を通じて居たにしても、容易に口を割るものではあるまい。檢事局はその點に苦勞する。

日糖事件では、一切の罪を一人でひつかぶつた臼井哲夫が、今に勢力を維持してゐる様に、同じ惡いことをしても、僚友仲間の分捕かぶつてしまふ度胸がなければ、政略に一人前として適用しないのが通則になつてゐる。臼井氏のおかげで助かつた人に、今を時めく安達内務大臣などがゐる。安達氏は臼井氏の俠氣に對して毎に借金を感じてゐるから、勢ひ臼井氏の爲めにはかるのは當り前である。

政治家とは昔の俠客仲間と思へば間違ひはない。小川氏對春日君の關係にも變りはない。其の春日君は、内幸町の小川氏邸に近い大平ビルに事務所を構へて、二三の鑛山會社を經營してゐる。其の事務所が問題の人物等

と取引きする場所であつた。前回の選擧には前々と同じく長野縣二區から名乘りを擧げ、小川鐵道大臣が先頭に立つて應援演説をしてまわり、金も大分使つたらしいが、どうも人氣が悪く、前代議士になつてしまつた。然し彼は、決してへこたれない。

小川鐵相の爲めに汽車の發車時間を遲らせたとか、『俺を知らぬか』と鐵道大臣を笠に着て驛夫を毆つたとか、縣知事に命令を發したとか……新聞記事がたゝつたのである。それ程の人を國粹的に愛用する所に、小川氏の身上があるのかも知れぬ。兎も角兩人の間柄は一通り二通りの間柄ではない。親分子分を超越してゐた。さういふ小川氏に、他に子分の出來ない、人がつかないといふ事が不思議である。これが、氏の政治家としての弱味であつた。

小川氏は個人同士で交き合ふと誠にいゝ人だ。コップ酒をのんで、詩の話や、繪の話、さてはワイ談に到る迄、實に愉快な談話者であるが、扨てしらふの時に政治家として向ひ合ふと、何處かプーンと來るものがある。有力な人が寄り集まらぬ原因がそこに在る。『ふガ平』がそこに在る。

春日君の他に、重要な人物は、守谷一太郎といふ小川家の會計係である。新聞紙は會計係といふが實は家政總監督ともいふべき人物で、小川氏經營する所の日本新聞の經濟から小川家の經濟から一切を切り盛りしてゐる。小川氏が『金の事は知らぬ、守谷が一切やつてゐるから』といふのは事實だ。だから春日君と守谷君とをいぢめぬかなくてはタネが上らないので、逸早く引つくつたのだらう。其の守谷一太郎老人は、然し寧ろ小川氏の恩人だ。小川氏が第一回の選擧に立つべく郷里諏訪へ歸るのに着物がない。フロックを作つてやつたのも守谷君だ。貧乏な辯護士、國士、硬派の志士、小川平吉から今日に至る迄守谷老人は彼を監督し、家政のバランスを取つて來てゐる。此の人に對しては小川氏も心を痛めてゐやう。筆者も同情する。

扨て、結末は有罪？　無罪？　小川氏程の法律の大家、辯護士、代議士、大臣、がマサカに穴は作つてをくまいと噂されるが、何れにしても公判となれば同郷の友人田中内閣の同僚原嘉道氏をはじめ、花井卓造、鵜澤聰明、元田肇等々、天下の大辯護士悉く法廷に立つ筈だといふから物凄い。政友系の辯護士は勿論、昔辯護士會長をやつた關係から、有數の大家が無料で辯護を引受けるといふから、江木翼、渡邊千冬氏等、しつかりタネを擧げて、動かぬ所を摑むに苦心慘憺たるは無理からぬ所だ。

と共に、檢事局もうつかりした眞似は出來ない。後日に悔を殘す樣な調べは出來ないし、公判にまはつても裁判長は念に念を入れて裁判しなくてはなるまい。小川事件の公判にかゝる時は、若い司法官がヅラリと見學の爲め傍聽する。それ丈けでも偉觀である。

山梨氏と朝鮮疑獄

故人となつた田中義一男の人事行政の不始末を數へ立てるには忍びないけれども、山梨半造氏を朝鮮へもつて行くなどは久原氏を大臣としたより以上の失敗であつた。山梨は朝鮮へ何を殘した？　惡評と、疑獄と、田中男

の失敗それだけだ。

所謂朝鮮疑獄、其の數は數へ切れぬ程ある。少くとも僕の様な頭の悪い者には帳面につけてをかなければ判らぬ位で、曰く太田道灌の移轉。曰く賣官。曰く仁川釜山取引所設置、其の他……幸にして事豫審にかゝる故を以て數へ立て洗ひ立てる事を遠慮してゐられるから好都合だ。

抑も山梨半造氏の總督慾は、田中大將にすがることによつて漸く充たされた。世間や黨内の悪評を押し切つて朝鮮總督に据ゑたものは田中一流の人事行政で、兎や斯ういふて見ても始まらないが、さすがの田中男もしまひには見限つて、引導を渡した程の悪人事だつたのは事實だ。

山梨氏は田中男によつて榮位についた。それ迄は田中第一、政友會第一の旗を掲げて見たが、一旦ありついてしまふと、天晴れ朝鮮王氣取り、朝鮮總督は一黨一派のものではなくて頗る重要な位置だから、内閣の交迭毎に代るべきでないと宣傳し出した。勿論、世が移つて民政黨内閣になつて在野する下準備をはじめたのだ。世界に三枚とかよりないといふ立派な虎の皮……これが自殺で買つたのではない。某朝鮮華族から贈られたものを、時の在野黨總裁、久世山の住人濱口雄幸に贈つたものだ。政友會の連中が後に之を聞及び腕を捲つて憤慨に及んだ相だが、その小才を利かす位だから着任するや至公至平を衒ひ、閣員の交迭をやらぬと聲明し、重要な椅子である内務、財務、警務の三局長はもとより下つぱに到る迄前の引つぎであつた。

其の時に、早くも、『甘いぞ々々』と役人になめられ、おしまい迄なめられ通した。だから役人が言ふ事を思ふ様にきかぬ。機密は保てぬ。利權案が思ふ様に運ばぬ。從つて洩れる。ボロを出す。だから、殆どものにならなかつたに拘らず幾多の疑獄事件を惹起し、其の上民政黨内閣になつては松源氏にさへなぶられた上、やめなくてはならぬ破目に立至つてしまつた。さすがの田中大將も、其の内閣の末期には愛憎をつかし切つて、引導を渡した。一旦朝鮮へかへし、尻ぬぐひをしてやめて歸れといひ渡した位だ。が、朝鮮に歸つてゐる間に内閣は譲つた。未練でかぢりつかうとした。視察旅行と稱して行衞不明(?)にさへした。陸軍大將ともあらう者が、餘りに女々し過ぎた。

半造氏は女々しく、そして神經質で、しかも柄にない野望家だから政治の表面に立たうとして勢ひ金がほしい。そこへもつて來て夫人のおろくさんといふ女性が曉をつげる程度の確かり者で、金銭を好むこと亭主以上、亭主を尻に敷きかねない人だから、新聞紙は尾間玄關から利權の金の配け前を夫人に渡したなどゝ、ウソかホントか知らないが傳へる。

亭主山半、家の出入りに『行つて參ります』『只今歸りました』とおろくさんに挨拶するといふも、滿更の作りごとではない様である。

總督の機密費廿萬圓の中をおろくさんが、自分の金庫へ入れたなども理論的には割り出し得る確實性を帶びたゴシップだ。さういふことは總て『不德』といふ字で形づけられる。それはさうとして、山梨氏の過因は何處に在

る？　曰く、附き人が偉すぎた。肥田理吉、尾間玄踱の二君これである。疑獄事件の中心人物は常に此の二人で、此の二人は現在朝鮮の獄舍の窓に月か星かを眺めてゐるのである。

肥田理吉とは何か？　四十そこ〳〵の一介の浪人である。兄を肥田琢司といつて政友會の代議士、父は廣島縣の縣會議長をつとめそこなつた樣な人物であるが、理吉は腕と、度胸と、そして身體を張つても勝負をしやうといふ講談的人物で、前科も二犯位ある豪の者だ。凄腕だから、朝に一圓の金に困つて、夕べに十萬圓の金にありつくといふこともある。

山梨氏とは十年以上の交際で、財政的な援助、政治的の片腕とさへなつて、寧ろ山梨氏に恩を賣つてゐる。山梨氏が、政本合同に熱中した時分も肥田理吉は絲を引いてゐた。梅田寛一といふ代議士を政友本黨から五千圓で買つて、政友會へ移した時も肥田が金の工面をしてゐる。政友會に入つて一方の旗をふらうといふ爲めに要する政治資金では肥田に負ふ所が多かつた。

既に、彼は肥田に睾丸をにぎられてゐる。そこへもつて來て、臺灣總督運動に失敗し、朝鮮總督にありつく迄には、肥田は捨身の運動を試みた位である。この報酬がなくてなるものか。卽ち山梨氏が朝鮮總督になつてから肥田は、祕書官室を根城に、祕書官でも囑託でもない彼が種々の利權運動をはじめたのに不思議はなく、山梨とは、情を知つても知らなくても、肥田のやることに異議を申つけることは事實不可能であつた。尤も山梨氏が同罪であるといふのではない。いゝ樣に肥田に利用されたといふ迄の話である。親任官閣下が一介の浪人に利用される。人間の相違で仕方がない。

然し、肥田にして見れば、嚴正公平を衒ふ山梨氏に對して『無情冷酷、昔の恩を忘れたか』と怒鳴らざるを得ないのは、之亦無理がない。浪人者は、人情で行く。嚴正だの公平だのといふ屁理屈には赤の他人なのだから。それを知らぬ程山梨氏が斯界の素人でもなかつたらうに弱氣に立つては止を得ぬ。

も一人尾間玄踱がゐる。尾間君は僕もよく知つてゐる。僕等の先輩で、もと國民新聞の政治部長をやり、田臺灣總督の時に祕書官としてついて行つた。才物であり、知恵があり人心收攬術はたくみであり、利權の達人でもある。

彼もと〳〵山梨氏とは深い知己ではなかつた。

只だ臺灣へ行つた時は、總督府の高級囑託で田總督の顧問格的存在であつた故松本剛吉氏と懇親を結び、浪人してからも、自稱西園寺の使者松本の其の使ひ走りをつとめ情報を蒐めたりして重寶に働らいてゐたが、松本氏が田中內閣の情報係として囑託となり、單に勅選をもうけて滿鐵の高級囑託となり、田中大將と西園寺、乃至は床次竹次郎の間をかけ廻つてゐたのを笠に、尾間君を山梨氏に押しつけて祕書官にしやうとしたが、どつこい祕書官は內閣書記官長鳩山一郎氏が依光好秋といふ讀賣の記者を押しつけて契約が成立してしまつてゐた。仕方なく囑託、高級囑託に竄りこんだわけであつた。

これがいけない、肥田とはくされ縁で止むを得ないとしても、殆ど交際のない依光を鳩山の推薦だからといふて引受け、尾間を松本氏の推薦だといふてオーライして、成立早々からまるで自己なしになつてしまつた。之れを公平と彼は考へたのだらう。案の定、依光も尾間も、召使のくせに、總督に反感をもち、先方でも使ひきれなくなり、追ひ出す、おん出る、で別れてしまつた。其の後から尾間玄顯の疑獄事件、太田道廳移轉問題、賣官事件といふのが出現して、東京から朝鮮迄牢へ入りに出張した樣な始末である。

山梨氏は、腹中の臣肥田に頭が上らず、腹外の臣尾間に利用され、一身に疑獄の汚名を浴びて總督をやめてしまつた。憐れといへば憐れな人である。齋藤總督の如きは實は山梨氏以上に、其の方面の手腕家であることは玄人筋に定評がある。其の人にして、シーメンス事件にボロを出さなかつたと同樣、朝鮮前任八年ボロを出さずにため込んだのは何か！役人に押が利き腹心の祕書官の切り盛に委せて御大は茫洋として、無爲無策の過なきを有爲有策としたつゐさに任つた、其の事は宇垣陸相にきけば一番よく知つてゐる。宇垣氏は臨時總督で、齋藤氏の軍縮會議に行つた留守を預かつた。其の時にタネがあがつてゐる筈だ。

山梨氏にしてもし、利權を仕遂げ大いに儲ける位の才幹と腹があつたら斯ういふ不始末にはならなくて濟んだであらう。

士官學校からの同窓生、後年は恩人、田中男が死んでも顔を出さぬ。出せぬ。山梨氏も思へば氣の毒な男だ。猿が人間の眞似をすると失敗する樣に軍人がなまなか政治家を氣取つて野心など持てば、餅屋で酒屋を開業した以上の失敗をすることはわかり切つた話である。後家の色氣とサーベルの野心は禁物である。

田中大將の取柄

御大典をめがけて、內閣へ敍位敍勳を各省各方面、支黨からもちこんだ數は二千餘件であつたらう。其の當時の樣子を幾分知つてゐる僕は、欲しい者にはやつたらいゝぢやないか、何でそんなにけち〳〵する必要がある、と寧ろ憤慨した記憶さへある。ところが田中內閣は、田中大將は他の場合に考へる考へ方とは異つて、御大典を一生の最大事に考へたのは事實であつた。

大隈內閣が大正四年大正天皇の御大禮に際して行つた濫賞がいかに害をなしたかを想起した相だ。百萬圓出したといはれる大倉喜八郎氏に男爵を授ける件が事前に洩れて物議をかもし、遂に沙汰止みになつた事や、又は濫賞が議會の問題になつた事を想ひ起こしたのであらう。そこへもつて來て一世一代、世の中では御大典內閣とさへいつた位御大典にかぢりついた田中大將は眞劍になつたらしい。故人はかういふ點に取柄があつた。

大隈侯は御手盛で侯爵になつた。時の江木書記官長はお手盛で動一等の奏請等を他の書類の中へ入れておいたのを水野錬太郎氏に發見され、苦情をいはれて引つこめた。——それの恨みで、清浦內閣の最後に小橋書記官長が引ついだ水野氏前官禮遇の意見を加藤內閣の江木大書記官長が引つこませて江戶の仇を

うつた。さういふ事がいかに御大典の神聖を汚すか、を大將は考へたので、自分をはじめ、閣僚一切お手盛を遠慮した。それ位だから、敍位敍勳の儀も愼重に計らふ樣命じたのである。だから田中男が伯爵になることもなかつたし、閣僚の中から男爵其他を出すこともなかつた。萬事遠慮會釋のない田中內閣にしては、非常なやり口だ、と僕は皮肉な苦笑を禁じ得なかつた。だが、其れ丈けが取柄で田中將軍は存在してゐたのだともいへる。彼は惡めぬ好々爺であつた。

賞勳と天岡總裁

御大典を極度に神聖視するは勿論陸軍大將らしくていゝ。併も彼の失敗は、人事行政を極度に神聖視しなかつた所にある。天岡氏に罪ありやなしやは今、之れを斷ずることは出來ぬ。が何分にも彼は昔遞信省貯金局長時代に貯金一新組合をもうけ、今度と同じく友人鳴原亮や貯金魔吉川某に過まられて、破產の宣告をうけた人である。さういふ人を、先蹤桂公の女婿であるからといつて、所もあらうに賞勳局總裁の位置に泣く人事行政は亂暴であつた。

天岡氏の生涯は波瀾萬丈とでもいふか、通り一ぺんの『役人』ではない。岐阜縣、大垣藩の家老の家に生れたのはいゝが幼くして父を失なひ、型の如く貧乏をし、然し秀才で大學の銀時計組だから馬鹿にしてはいけないけれども苦學をした。日本中學へ通つてゐる間に桂太郎の長男與一と親交を結び、それが緣で桂家へ出入りしてゐる中に、太郎に惚れられ娘にも憎からず思はれ、自分も貧乏書生から宰相の女婿となることの算盤をはちき、斯くの如くにして桂公爵の二女輝子と婚するに至つた。

大學を出て直ぐに內閣へつとめ、長いこと內閣書記官をしてゐたから、こんな筋で內閣直屬の賞勳局總裁にはまつたのだが、それ以前に、遞信省の貯金局長に榮轉して出たのが病氣のはじまりだ。貯金魔といはれた吉川辰之助の甘言にのせられて貯金一新會なるものを作り、吉川に欺されて背負切れない程の借金を背負つた。或は約手の裏書をして引つかかり三十萬圓といふ、一役人としては半分背負ひ切れない借金の尻ぬぐひをしなければならなかつた。

桂太郎は生きてゐない、同じ女婿の長島隆二氏とて智慧はあるが財力はない。借金の仕末のしやうがないから、桂公から貰つた家屋敷を投げ出して足りず、破產の宣告さへ受けなければならぬ。恐らく現在でも十萬か二十萬の借財がかぶさつてゐる筈だ。これ位彼はルーズであり、お人好である。いつでも甘言にのせられて欺されて來た。

聞く所によれば遞信省をやめて、借金に苦しんで破產の宣告をうけていよ〳〵どん詰りになつた時に田中內閣が出來た。田中大將は恩人の女婿を何とか生かしてやりたいと豫て思つてゐた矢先きであるし、もし任官すれば破產の宣告も取り消されるといふ話を聞いたものだから發憤して賞勳局に据ゑたらしい。

而して、前半生、前記の如く、貧乏書生から宰相の女婿へ、策士惡鬼に乘ぜられて破產の宣告を受けて來たやうな人物だから賞勳局に入つてからも乘ぜられたに違ひない。

御大典に下賜される金盃は約百萬圓、記念章は二十五萬個、それを造幣局に造らせずに民間に命ずるといふ方針が立つた所へ、例の悪友、くされ縁の鳴原亮だとか、兄隆二の智慧を悪い方へ使つたら天下無敵といはれる長島弘とか、舊い知己の策士原口顯とかいふ者が、利用せずにおくものではない。大阪、京都、東京の貴金屬商が彼等の甘い口に乗つたとか、五十萬圓資金の日本勳章製作株式會社が御大典目あてに設立され、其の株が何處へ飛び、受貸ひがどういふ風に結ばれたとかいふことは、極めて有り得べき事柄である。

賣勳事件で僕に、第一の疑問は堤清六が三萬圓で勳三等を買つたといふ話である。

堤といふ男は僕も知つてゐるが、煮ても燒ても食へる代物でない。良心なんかは全然もち合はせぬ代りに、悪智慧はいくらでも持ち合せてゐる。丁稚小僧から叩きあげて日魯漁業の社長になる程の男だから一通りや二通りの人物でない筈だ。其の人が、勳章は賞勳局總裁で決定するものと思ふ樣な愚をする筈はない。もし欲しければ、直接田中總理大臣に談判するだらうし、さうでなければ鳩山書記官長にもちこむ筈だ。しかも、彼の會社の重役には、政友會の大幹部で、原内閣の書記官長であつた高橋光威氏がゐるのであるから、高橋氏に聴けば手續上の問題は直ぐわかると同時に、運動方法も簡單にわかる筈である。

堤が三萬圓で買勳したといふ新聞を見た時に、賣勳事件といふもの丶内容が大概わかつた樣な氣が僕にはした。

菊五郎、鳩山、海原

それから尾上菊五郎丈の勳六等が買勳だ、といふ新聞所報、あれは名優、江戸つ子の幸ちやんに對して氣の毒の至りだ。と同時に時の書記官長鳩山一郎氏もとんだぬれ衣だ。あの勳六等は鳩山氏が菊五郎の江戸つ子肌なのに感心し切つて、かういふ俳優は國家的存在だといふ樣な感激から結果されたものだ。

グロスター公殿下が聖上陛下にガーター勳章御贈呈の爲め御來朝。田中首相は官邸で大々的に、國際的御歡迎の宴を催ふした。餘興には菊五郎、彦三郎一座が出演した。其の當時の樣子を僕も知つてゐるが、菊五郎の熱心さは到底明治座の舞臺の比でなかつた。前日の日曜に一座を引つれて來て稽古をやつた。當日は勿論出演中の明治座を閉ぢて踊りぬいた。國賓殿下をはじめ奉り、外交團、各宮樣、總理、閣僚、一同大滿足だつた。彼も大いに面目を施した。

菊五郎及び其の一黨に對する謝禮の件になつた。彼は鳩山書記官長に對し「鐚一文も頂きません。え丶何んな物でも御禮なんか頂戴しません。さきが算盤づくの興業ならウンと貰ひますが、國賓殿下に御覧に入れて、それで御禮を頂いたなんてんぢや第一死んだ親父に顔向けが出來ません」

といつて、どうしても金を受けない。一座のものには手銭を切つて出演料を出すといふ次第であつた。さういふことになると、俠氣の好きな田中首相、坊つちやんで單純な鳩山書記官長、二人いつしよになつて菊五郎に惚れこんでしまつた。鳩山氏は其の當座會ふ人毎に「君、菊五郎つて愉快な奴だよ、迚も氣持のい丶奴だよ、踊りはうまいんだね、日本

一だよ」

と、其の實わかりもしない滿遍ほめ上げてゐた。鳩山氏は菊五郎を以て國家に勳功ある者と認定してしまつた。

それから、鳩山氏の手で、菊五郎の功勞を調査し出した。警視廳の調べによると、警察官慰勞の爲め日比谷音樂堂へ二度とか無料出演してゐる。これが一萬圓に相當するとか、其の他公共的な無料出演が大分あつて、其總計見積りが九萬圓になるといふことだつた。褒賞とか、勳賞とかの内規には、公共の爲め何ぼ以上寄附した者は何等とかある相だ。其の規定にはめて、幸ちやんは勳六等に叙せられたのだ。菊五郎の場合、少くとも賣勳買勳呼はりは、江戸つ子と坊ちやんに對して餘り殘酷すぎる。

海原淸平君が取りもつたことが、菊五郎に災をなした。尤も海原君が推薦しなければ、芝居道の素人である田中首相や鳩山翰長が、帝劇の女優劇位でお茶をにごしてゐたかも知れぬ。

海原君は、鳩山氏との關係は、政友本黨時代、海原君は床次氏についてゐた。昔床次氏が鐵道院總裁時代には祕書官もやつた。が彼のいふ所によれば床次氏は女性的で、煮え切らなくて面白くない。鳩山はいゝ男だから、政友本黨を脫して同交會を作つた時について行つたのだ相である。鳩山といふ人は、自分から進んで人を集める藝當は出來ないが、不思議に人が集まつて來る。注意人物でも來る者は拒まず、退ぞけ得ない性格的な弱さをもつてゐる。從來、やれガスだ、砂利だ、勳章だ、樺太の山林だと痛くもない腹をさぐられるのは、毎に周圍の人物の飛火を浴びてゐるのだ。が其の周圍を淸算し切らない所に、大きさもあるが缺陷もある。

さういふ鳩山氏だから、書記官長になつた時分、折柄破産の宣告はうけるし、議會の暴力事件で審理中ではあるし、貧乏はするし、代議士は失格するの海原君を見て、捨てゝをけなかつたのは尤もである。月手當五百圓をポケツトから出して、浪人金買ひ係をさせたわけだ。書記官長の所ではいろ〱な浪人や金買ひ等が押しよせる。鳩山氏の性格では其の應待や色分けが出來ない。海原君なら正に適任である。自分が、新聞記者(神戸)出身の浪人者だから、其の方面の系統や色分けが分つてゐるし、追ひ拂ふ藝當も何でもない。それ丈けの仕事を守つてをればいゝのだが、そんな男ではない。いつの間にか、首相官邸隣りの祕書官の官舍が空いてゐるのを幸ひ、そこを浪人引見所に使ひ出した。之が禍の本で、鳩山氏が例の性格の弱さから、出ろともいひ兼ねたらしい。

さすがの鳩山氏も然し内閣の囑託には任命しなかつたが海原君は高級囑託を以て任じ、それで世間へ押し出した。鳩山氏の知らぬ、いろ〱な藝當を鳩山氏の内命であるが如く、諒解あるが如くによそほつてしたらしい。警視廳が海原君をいぢめるのが鳩山氏を引つくゝりたい底意であるといはれるのは其處であらう。

海原君は然し面白い點のある男で、議會暴行事件でもやり出したら先頭に立つて毆る。い丈けで、手の方はしまつてをくといふ利巧さがない。簡單明瞭だ。檢事局の調べに對し

ても包みかくさず私が毆りましたといふ。檢事が、君程の經歷のある人がそんな事をする筈がないだらう。ウソだらうと、かばへば、經歷で毆るんではない、此の腕で毆るんだ、と威張る。

破産の申請、住宅競賣、執達吏出張、そんな場合に彼は決して驚かない。家の中で頑張つてゐて、手をつけさせない。警視廳にいぢめられたり、市ヶ谷へつながれて屁古垂れる樣な生やさしい男ではないから、刑事や檢事が下手にいぢめ樣ものなら威張り散らして白狀などするものではあるまい。

小川平吉氏に於ける春日俊文、山梨半造氏に於ける肥田理吉、天岡直嘉氏に於ける鳴原亮、長島弘、原口與、鳩山氏に於ける海原清平、等々々の因緣を考へて見ればもし疑惑の渦中へ入ることを嫌ふなら周圍の人事に注意しなくてはならないことがわかる。第三者が見て『彼の男が』と理屈ぬきにして或るものを直感する樣な附人のある人が揃つて疑惑の渦中に投じてゐる。政友會の新總裁犬養氏が、未だに生命を保つてゐる理由の一つは人事に細心、禍を殘してゐない所に在る。

昭電と樺太山林

こゝにユーモラスな疑獄といふのは昭和電力事件だ。何時の間にか立消えになつて今日（九月二日）の新聞によれば昭和電力社長增田次郎氏は釋放されてゐる。增田氏の引つぱられたのは、福澤桃介氏の勳三等を運動する爲めに六千圓を天岡賞勳局總裁に贈つたといふ新聞所報であつたが、今日のでは千圓に減つてゐる。併もそれが、貧乏なる天岡氏が友人增田氏からの借金だとわかつた。金を借して引つくゝられてはやり切れまい。引つぱつたのは、賞勳容疑者として、そして昭和電力から內務某前大官といふ男へ贈賄して水利權獲得運動をしたタネが擧げやうとしたが擧げそこなつたのだと傳へられる。有り相なことだ。

も一つ、讀賣新聞の記事によれば、某前大官を目がけて調べてゐる中に某現顯官のボロが出かゝつて來たから慌てゝ引つこめたといふのだ。洗つてをくが現顯官とは×××××××××であり、某前大官とは秋田清（前內務政務次官）である。

抑も昭和電力の認可されたのは若槻內閣當時、安達遞信大臣のハンコによる。其のハンコ代が四十萬圓とか、書いてあつたがウソだらう。それから、何とかいふ川の流域權が賣物になつてゐて、其の方の關係は內務省だから秋田氏に贈賄したものだ相だが、增田社長が釋放される位では贈收賄にならぬことが明らかである。但し會社から金を引き出して運動すると稱した二人の男が詐僞でぶちこまれてゐる。これがサゲだ。

安達遞信大臣の時分、賴母木桂吉氏が政務次官であつた。この二人は凄い腕で、電氣會社から大いにせしめたといふ評判が立つた。辭職と決定してからどし〳〵認可のハンコを押した、といふ風評は遞信部內の常識になつてゐる。但しそれが、金に代へられてゐれば疑獄だが、そんな根跡を殘す程、安達氏や賴母木氏は素人ではない。それだから、檢事局が調べてゐる中に昭和電力認可に四十萬圓ついてゐた、なども與太であらう。たゞ秋田氏を引つかけ損くなつてユーモラス疑獄に終つ

たらしいのも、民政黨の爲めに惜しい。

もし萬一秋田氏が、假りに受け取つてゐたとしても、氏は安達頼母木兩氏と同格な、注意周到、極めて細心に計畫を立て實行する人だから、穴を殘しておく樣な馬鹿な眞似はする筈がない。そこでねらつて掘り上げやうといふのは見當外れであつた。どうも警察政治が救世軍の太鼓の樣に音許りなのは惜しい。但し音丈けで脅すのが目的なら雀おどしの鐵砲で目的は達せられる。

御註文の品にも一つ、樺太山林拂下事件といふのがある。今の所、未だ人物名を擧げるわけに行かないから某大官、顯官、高官と稱せられる人々に就て既述の自由を有しない。樺太廳の會計は、山林を拂下げなければ立つて行かない。年額一千萬圓の金が拂下げの中から豫算に組み入れられる。其の金を得る公然の目的の裏に非公然な利權がある、といふのが政府のねらひ所である。警視廳方面では早くから瀆職があがる〳〵と宣傳するが一方所謂某大官連中にダメを押して見ると馬鹿をいふな、政府の宣傳に乘せられるなといふ。どつちがどうか、早く政府の手で明るみに名前をさらけ出すがいゝ。さらけ出すのが後れれば後れる程宣傳だといふことになる。さらけ出してくれぬ内は、僕も中央公論の註文に應じ兼ねる。名譽毀損で訴へられでもしたら馬鹿を見るから。かういふ『疑獄』は危なくてうつかり筆に調子がつけられない。

以上述べて來た不完全な文章でも、頭の惡くない人にはわかるであらうが、政治をやるには金が要る。政治の金はあぶく錢でないと使へぬ。月給や、恩給や、家賃や、地代や、地道な賣買の儲けやでは迚も政治資金にならぬ。これ程政治に使はれる金は大きい。何かの手で莫大な金をもつ者が政黨の總裁にもなれるし大臣にも政務官にもなれる。利權は金權政治時代の繼續する限り、政友會でも、民政黨でもやらなければならない。やらぬ者は落伍者になる迄の話だ。

早い話しが、政治の公明を政綱の第一に掲げる濱口内閣にしてからが、目の先きにぶら下つてゐる選擧費の出所を發表出來るであらうか。選擧の公正を期する御宣託の手前、法定選擧費の一人一萬圓内外で當選出來るであらうか？　もし眞に政治の公明を期し選擧の公正を期したら、政府黨は二人か三人になつてしまふ。だから、既成政黨卽金權政治の番人である連中が、世間を甘く見た樣な形容詞を濫用するのはやめるがいゝ。天に唾する者だ。

早く、金權政治を打破する爲めには、政府の羊頭狗肉も、宣傳も、政友會の被疑者續出も、前大臣、前大官の市ケ谷行きも大いに歡迎せざるを得ない。やれ〳〵お互に。汝等の努力で汝等の墓穴工事を急ぐことは、尤も歡迎する所だ。（十月九日）

研究會盛衰記

永川俊美

一、山縣の出店　清浦の活躍

議會が開かれたのが、明治廿三年で、研究會はその翌年の廿四年頃から貴族院の中に生れて居た。自由黨だの改進黨だの——政友會だの民政黨だの、衆議院に於ける政黨の起伏、集散はあはただしかつたが、貴族院のこの會派に限つては珍らしい位永續きして居る。ザット四十年にもなるのだからその中には或は榮え或は衰へた時代がある。こゝに研究會盛衰の跡をたづねるに當つて考へねばならぬことは、貴族院の生ひ立ちと、わが政情の變化である。

伊藤公は、貴衆兩院を車の兩輪のやうなものだと言つて居るが、貴族院の外に樞密院までこしらへて念を入れた上にも念を入れて居る。議會開會前から、自由黨系の論客たちは盛んに一院制を主張して居たにかゝはらず、憲法起案者は民論政治に餘程の不安を感じたと見える。それは伊藤公でも山縣公でも藩閥共通の心持ちであつた。だからその頃の貴族院は政府の御用をつとむる機關に過ぎなかつた。けれども民論政治に對抗しては一致する藩閥者流も彼等仲間においては相當の勢力爭ひをやつた。貴族院——その中心勢力であつた研究會がその爭ひの中に卷き込まれて居たことは自然の理ではないか。

それが一轉して政黨は無視すべからざるものとなり、政黨を乘り物として爭ふやうになり、再轉して政黨が藩閥官僚を驅逐するやうになると、研究會の政治的行動もそれに從つて行はれるやうになつた。研究會が世間に認められるやうになつたのは、伊藤公と山縣公とが喧嘩を初めるやうになつてからである。超然内閣主義の伊藤公が政友會を組織するについては、山縣公は非常な不機嫌であつたが、しばらくそのなすところを視て居た。伊藤公は政友會を土臺として大に爲すところあらんとしたが、どうも國務と黨務とがゴツチヤになつた。官紀は紊れるし秕政は續出するし、殊に地方の政治は大分荒廢した。伊藤公と敵役の山縣公の眼は光つた。命を含んだのが當時研究會の總帥であつた勅選議員清浦奎吾氏であつた。もつとも清浦氏は表面には立たなかつたが、その操る絲によつて幕僚が動いた。その頃貴族院の中には研究會、茶話會、庚申會(後の土曜會——同成會)、木曜會(後の公正會)、朝日クラブ、無所屬といつたやうな團體があつたが、この六團體は先づ遞信大臣星亨氏が東京市疑獄事件で醜聞を傳へられて居たので、之を槍玉に舉げた。次で第十五議會に伊藤内閣が北清事變の後始末として酒税、

砂糖税、海關税を增率し葉煙草專賣の增率と合して、二千萬圓の增税計畫を樹て、衆議院の協賛を經て、貴族院に臨んで來たので、之にブツつかつて政府案を否決してしまつた。

伊藤公は貴族院に十日間の停會を喰はして反省を促したが、六團體では頑として應じなかつた。政府と貴族院との衝突になつたので、山縣公や松方侯等元老の斡旋を見たが、之また物にならなかつた。とう〳〵貴族院議長の近衛篤麿公に勅語が降つて增税案に贊成し一段落を告げたが、流石の伊藤公もこの貴族院の硬化には閉口したものである。

その頃清浦氏の下で働いたのは岡部長職子や堀田正養子であつた。其外研究會の幹部としては京橋高典、大河内正質兩子、萬里小路通房、正親町實正兩伯、乃至千家尊福男などが居た。千家男は、後、堀田子等と勢力爭ひをして男爵團木曜會を組織した。

二、堀田正養子　研究會を除名さる

清浦氏の後には堀田、岡部、正親町の三頭政治が行はれた。

無論その時分になると後の貴族院副議長をやりいまは樞密顧問官となつた黑田長成侯が入會し、研究會の金看板となつて居たが、働き手は前に言つた三人であつた。岡部長職子は至極公平な人であり、正親町實正伯はお公卿さんであつたが、そこに行くと堀田子はもと〳〵佐倉藩士で、一頃東京深川區の區長さんもつとめたといふ親分肌の殿様であつた。それに堀田正養子の幕下にはその頃から芽を吹いて居た三島彌太郎子が一肌ぬいだので、名は三頭政治でも、『堀田の天下』といつてよかつた。だから彼が都合があつて出席出來ないと研究會の總會も開かれぬといふ形勢であつた。

第一次桂内閣(明治卅四年)には研究會から清浦奎吾(内相)波多野敬直(法相)菊池大麓(文相)といふところが、閣班に列し、次の第二次西園寺内閣(明治卅九年)には千家尊福(法相)堀田正養(遞相)の二人が登用され、その次の第二次桂内閣(明治四十一年)には岡部長職子が法相にあげられた。もつて明治卅四年頃から十年ばかりの間には如何に研究會幹部が重要視されて居たかが分るだらう。

堀田子は、前にもいつたやうに會内に重きを爲し、親分肌の男であるために、西園寺内閣では遞相に抜かれたが、内閣にお禮心か、研究會操縱に便するため、子爵中の不平組秋元興朝子等と通謀して研究會を割らうとしたので、時の研究會では會の統制を紊るものと認め、總會を開いて除名してしまつた。

どうも千家男にしても、堀田子にしても、研究會内にあつては、勢力があつたが、一度入閣するとオッポリ出されて無勢力になつてしまつた。若槻内閣の時鐵道大臣になつた井上匡四郎氏でも、いまの濱口内閣の司法大臣渡邉千冬氏でも、大臣となると、反對に會内には無勢力になつたやうに思ふ。こゝらが研究會の傳統的精神で、個人は個人、會は會で、研究會はあくまで研究會といふ集團に依つて是々非々の威力を示さうとするのではなからうか。

三、子爵中心の三島内閣時代

研究會の中心が子爵團にあることは前にも言つた。一番初めは勅選級の清浦氏などが牛耳を執り後には伯爵團と子爵團とが、爭つたこともあるが、その主流をなすものは何と言つても子爵團である。子爵團は選擧母體が尙友會で、しかも連記無記名の投票で互選することになつて居るから幹部の思ふやうなものばかり選出される。たゞ子爵團が世間體を憚つたのか、同爵者から有爲の人物を網羅しやうといふのか、尙友會所屬以外の子爵中谷千城、曾我祐準、仙石政剛、松平乘承、鍋島直彬の五人だけは別格として、いつの選擧にも推薦することになつて居た。

こんな具合で、子爵團は研究會内に幅を利かせて居たのであるから、堀田正養子などが飛ぶ鳥も落す勢があつたのは無理もない。

堀田子が凋落すると、次の政權を握つたものは三島彌太郎子であつた。恰度長子相續法に依つて堀田子の財産を承けついだのと同樣である。三島子は清浦氏のやうな勅選が、研究會を引きずり廻すのを喜ばず、隱然清浦子の一敵國となり、第三次桂内閣(大正元年)の内相大浦兼武子や藏相若槻禮次郎氏と善かつた。大浦子からは政治の内所話を聞き、また若槻氏からは政府の財政狀態を聞いて眞ッ先きに堀田親分に報告して居つたが、自分が大御所になつてからは、正金、日銀時代の關係から金策にも凄腕を揮ひ、貧乏華族などには大分米鹽の世話をしてやつた。また長らく研究會に居た關係から、先輩の長所短所も知つて居れば、會員の氣持ちものみ込んで居るので、年寄り連は優遇し、若手には恩威並び行ふた。殊に會員の面倒を見ることが好きで、送り迎えから結婚の世話までやつて人情味たつぷりであつた。

三島内閣時代の表看板は矢張り黒田長成侯であつた。そして牧野忠篤子、酒井忠亮子を初めとして入江爲守子、靑木信光子などの有爵者、波多野敬直、岡田良平、山田春三、有松英義氏等の勅選も相當重く用ゐられた。書記官長格としては、水野直子が働いた。

だけれども第一次山本權兵衞内閣(大正二年)のシーメンス事件當時には流石の三島子も弱つて、同じ薩州の先輩權兵衞伯を彈劾するには餘程の苦痛だつたと見えて頭を抱へて思案投首の態であつた。

四、水野子の策謀で靑木前田擡頭

水野直子は舊結城藩主で小才はあつたが、策動が好きであまり見えすいて居た爲め、三島彌太郎子には信用がなかつた。水野子は深く之を根にもつて、大正七年寺内内閣が減債基金三千萬圓を五千萬圓に還元した際一流の暗中飛躍をやつた。そして、これまで重作失意の境にあつた靑木信光子(舊麻田藩主)や前田利定子(舊七日市藩主)と手を握り、一ケ勅選の硬骨漢といはれた村上敬次郎男などと相呼應して研究會の三島内閣を大に窮地に陷れた。その結果に三島子の片腕とも言はれた牧野忠篤子(舊長岡藩主)が幹部を隱退して前田利定子がその後を襲ふやうになつた。水野子はもはや故人になつたが最近の政界における變り種であつた。その住宅でさへ、東京市の内外に二三ケ所もつて居り、朝早くから夜遲くまでどこをどう飛んで歩くか、之をつかまへることが出來なかつた。それから水野子

のいふことが本心とは裏腹で、どこまでほんとうでどこまでうそかが知人の間にすら分らなかつた。左の手でマッチをつけて火事を起すかと思ふと、右の手ではポンプをもつて火消しをするといふ流儀であつた。たゞその間にあつて自己の地位を作るといふことだけは忘れず、寺内内閣當時には、三島排斥で青木子一派と手を握り晩年まで研究會に勢力をもつてゐた。こんな性格の男であるから凝り出すと大變なもので、大隈内閣當時には邪教を信じて大隈首相や陸相海相さては宮相のところへも、飛んで廻はり氣がふれたことがある。研究會でも見かねて、學習院評議員の件に托して一時議員を辭めて貰つたことさへある。そこへ行くと青木子や前田子は水野子とは多少性格が違ふやうだ。

五、研究會の擅長は清浦内閣の組閣ぶり

寺内内閣の優遇問題以來、研究會は原内閣に對しても、加藤友三郎内閣に對しても、温順しかつた。ことに原首相は、衆議院を普選問題で解散して二百八十名の多數を占めると、こはいものは貴族院だけしかないので貴族院の操縦には大に奮發した。床次竹二郎氏や横田千之助氏等を通じて、殿樣議員の御機嫌を取り研究會から大木遠吉伯を拔いて司法大臣にしたり、小笠原長幹伯を國勢院總裁にしたり徳川議長を華府會議の全權にしたりなどした。えらいところはえらいところで提携すると共に若手の方でも大學の同窓といふやうな關係から諒解を求め横斷的の親善關係を結んだものである。地位が欲しいものには地位、利權が欲しいものには利權、金がほしいものには金をやるといふ操縦ぶりであつたから、貴族院の諸君を増長さしたのは一面から言へば原氏の政治的罪惡であつたと評してもよい。

こんな具合で、不解散の牙城に立てこもり家老や女中から『御前樣』と言はれてい〻氣になつた彼等は、まるで平民どもと人種でも違ふやうな考へになつた。

そこで山本地震内閣が虎の門事件で倒れると、清浦内閣の組閣には傍若無人の振舞ひに出たのであつた。

大正十三年の正月のことである。大命が清浦子に降ると、清浦はその懐刀といはれた有松英義氏を参謀として組閣をするのであらうと考へられて居た。永らく不遇の地位にあつた有松氏は腕によりをかけて山縣一流の超然内閣を畫策し、その時の政友會から床次竹二郎氏、憲政會から若槻禮次郎氏といつたやうな人物を拔いて、所謂擧國一致の人材内閣を作らうとしたが、研究會の幹部は之を喜ばなかつた。そこで清浦子が研究會の大木遠吉伯青木信光子を招いて相談すると、二人は有松氏をけむたがつて組閣本部から退かせることを迫つた。清浦子が研究會の要求を退けて居たならば、彼の如く物笑ひにならなかつたであらうが、根が優柔不斷で、研究會を後生大事に思つて居たものだから、あの馬の顔のやうに長い顔を撫でながら、研究會幹部の言ひ分を御無理御尤と聞いてしまつた。村上海相は海軍元老の推薦に一任し、陸相には福田大將に内交渉までして置きながら田中義一男の横槍で宇垣大將に乘換へし、又藤村義朗男は外務に推す筈であつたが霞ケ關のヒゲ鐵を食

つため遞相の椅子に廻し、遞相候補者の小松謙次郎氏を鐵道に持つて行つたから、鐵相に豫定された大木遠吉伯の行場がなくなり、伯は勇退した。そして、水野、勝田、鈴木、前田、江木（研究會に非ず）といふ顔ぶれで清浦内閣をでつち上げたが、之が端なくも『特權階級打破』『護憲運動』を惹起した基で、貴族院、就中研究會はもうこり／＼といふ目にあはされた。

六、増長のお禮に貴革のお灸

研究會が圖に乘つた頂上は、何と言つても清浦内閣當時であつたが、それは半歳足らずの短命であつた。大正十三年の三派内閣では、護憲運動の結實として貴革問題が叫ばれた。それは當時の政友會が普選の手柄を憲政會に奪はれた焦慮もあつたが、横田千之助氏などが躍起となつて例の貴族院改革の熱いお灸を据えた。研究會の衰退時代は之より初まり、十四年改選前（十三年九月現在）には△研究會百七十四名△交友クラブ四十六名△茶話會三十五名△公正會四十五名△同成會廿四名△無所屬廿四名△純無所屬卅四名といふ研究會の絕對多數が其の後大に變化を來して減少し、その勢力もまた大分輕ぜられるやうになつた。

加藤内閣、若槻内閣では、多少政務官もとり。殊に若槻内閣になつては當時衆議院の情勢から、貴族院に色目を使つて、井上匡四郎子を鐵相に引き入れ、青木水野兩子等の注文も聞いたが、次の田中内閣では組閣に際して『貴族院入るべからず』といふことにした。

七、脫會や内紛で屋臺骨搖ぐ

昭和二年十月十四日には茶話會二十七名、同成會卅一名、公正會六十八名、交友クラブ四十二名、無所屬廿六名合計百九十四名といふ非研究派の一團が昭和クラブを組織して研究會に對立した。もとより昭和クラブには雜多な分子が包含されて居るけれども以つて反研究會の空氣を見ることが出來やう。二年十一月になると研究會からは近衞文麿公を筆頭として、一條、四條、廣幡、中御門といつた公達連が脫會し、一葉落ちて天下の秋を知られたものだ。同時にいまは法相に納まつて居る渡邊千冬子一派が會内において研究會の革正運動を起し、青木、小笠原、前田、伊東、八條といつた常務連は引退した。無論渡邊子も喧嘩兩成敗で引退した。世間の不人氣と、會内のゴタ／＼は容易に恢復することが出來ず、一頃は名前もよく分らぬやうな幹部を拵へて居たが、今度の常務改選を前にして會内伯爵團と子爵團とのもつれが甚しかつた。あらうことか昭和三年十一月御大典當時には、京都において有爵者相撃つの醜態を演じた。やつとのことで、牧野子と松平伯とに一任して新幹部が出來あがつたが、研究會の傳統的統制力は失はれ、その屋臺骨が搖き出したことは否めない。彼の田中前首相に對する優詔問題決議案の經過に見ても、あれが研究會の近情であるかと驚かせた。

研究會がこうなつて來たのは、一面から言へば貴族院政黨化の影響である。なまじつか研究會幹部の命を奉じて居るよりは、民政黨なり政友會に加擔して次の論功行賞にあづかつた方が出世の早道である——と野心家たちは考へるやうになつた。併しそれよりも大きな原因は時の流れである。一部の人たちが專制政治をやり、多數會員を踏み臺にして自分たちだけが甘い汁を吸ふのを見て居られなくなつたのである。世は普選の時代といふに從

式幹部の顧使にばかり甘んじて居られないではないかといふことになつた結果である。

八、新幹部は現内閣にどう出る

研究會の現常務は酒井忠克、酒井忠正（伯爵）青木信光、前田利定、立花種忠、西尾忠方（子爵）、小松謙次郎、藤山雷太（勅選）、山崎龜吉、絲原武太郎（多額）の十名である。この顔ぶれは所謂革正派に對する舊幹部派だといはれる。革正派の渡邊子が濱口内閣に入閣した直後に舊幹部派の復活も皮肉であるが、これは第四十六議會の優詔決議案に現はれたやうな會内の不信を防がうといふ研究會の用意であらう。現常務の中心は矢張り子爵團にあつて、その中でも青木氏と前田子とが統率することになる。青木氏は研究會の三島内閣の後を承けた大御所で、之といふ頭もないが無理せず八方美人で座談に長じよく人の世話をする。乾分や貧乏華族に米鹽の世話までするところは三島子の衣鉢を繼いで居るといつてよい。明治三十年に貴族院に入り十六年目の四十三歳で、初めて常務になつたのが振り出しだから、あまり出世が早かつた方とは言へない。前田利定子は大學を出ると司法官補となつたが文才があり三十一文字も解するので議會では『春雨演說』や『オブラート演說』の名を取つたこともある。之等の人々を中心にして、現常務は研究會を何處へ連れて行くであらうか。世人は一般に現幹部の顔ぶれから濱口内閣に對しては反政府的色彩を取るであらうと見て居た。殊に青木子が政友會の床次氏と親善關係にあるばかりでなく、政友會には貴族院と息の通ふ鈴木喜三郎、水野錬太郎、勝田主計氏等が居るから之とよく現内閣には嚴正なる是々非々主義で進むであらうとの觀測を下した。併し青木子を盟主とする研究會は傳統的の是々非々主義——換言すれば萬年與黨に立ちかへるのではないかと思はれる。政友會總裁田中義一男が病歿し、政友會の前途が見えすけばすくほどこの感が深い。

現内閣の貴族院係りには適任者がないが江木鐵相、渡邊法相の外に俵商相、鈴木書記官長等も志願して居るそうだ。裏門からは若槻氏なども時たま助力するであらうが、表向に話をするのは濱口首相の外にあるまい。往年の妥協政治、待合政治までが復活せねばよいがと思はれる。（昭和四年十月）

銀ブラ上海

新居格

上海に着いた日——何しろ津浦鐵路で二晝夜搖られて來たので——「けふだけは靜養しやう」と同行のYと云ひ合つたが、夕方李さんやN君が來て散歩に出掛けることになつた。

李さんは李學惠と云ふのだが、その名とは反對に學問には惠まれてゐない。その人を使つてゐるM氏に聞くと文字にはあまり明るくないさうである。それでゐて日本語は勿論フランス語、英語、ロシヤ語を巧みに喋べりうる。一つの上海的典型とでも云ふのであらう。

海寧路が乍浦路と交叉する十字街路にわれ〱が來たとき、薄明時の空氣の中に赤い花が急に咲いたやうに眞赤な帽子を冠むつたロシヤ娘が人目を惹く身裝をして黄包車で過ぎて行くのに出會つた。

そのときわたし達は驚かされねばならなかつた。と云ふのは李さんが人通りの多い夕方の町の眞中で突然「オーチエン・ハラショウ」と叶鳴つたからである。

李さんはさう叫んだ後で驚いたわれ〱に微笑を見せながら云つた。

「ロシヤ人の淫賣ですよ、あれは。からかつてやつたのでさ」

これが宿を出て廿間と來ない間の出來事であつた。上海の街はわれらにロシヤの賣笑婦を最初のレビユウとして點景したのである。しかもそれを今年六十の元氣な爺さん李學惠の叫びによつて知りえたのであつた。

賑やかな北四川路に出て蘇州河にかゝつた裏擺度橋を渡り、上海第一の大通南京路に歩みを取つて進んだ。夜の南京路の殷盛は一しほである。大きな商舗が軒を並べてゐる。わけても永安公司や先施公司のやうな壯麗な百貨店が街を挾んで對立し、それらが何れもその建物全體を電飾して夜の闇を立體的に彩つてゐる。自動車はしつきりなしに流れ、人道は人をもつて埋め

られて動くのも樂ではなかつたが、その人波の中に數へ切れないほどの支那のストリートガールが横行してゐるのには驚かされた。しかも彼女等の多くは年取つたやり手婆とも云ふべき女をつれてゐる。菅原英次郎さんの話では、氏が或る時フランスに行く洋畫家を二人案内して四馬路に出かけたさうだ。すると往來を行く氏等三人の帽子を横合からやつて來てひつたくつた。それには畫家達も驚いて「物騒な所だね上海は。一日も早くフランスに向けて出發しなければ」と云つたさうだ。やり手婆が帽子を小脇にかゝへ込んでどうしても渡さないので、菅原さんが一弗やつて三人の帽子を返してもらつたと云ふ。上海の街を夜行く人々は外人でも在留日本人でも無帽の人が多い。街で帽子を取られるからと云ふ譯ではむろんあるまいが、何分の一かはその懸念を持つてゐないとも限らないのではないか。少くとも、わたしはその意味で夜は帽子を冠らずに歩るいた日が多かつたのである。

それはさて置きわたし達は足の向くまゝに競馬場のところまで來た。そしてカルトン・シアタアの前で歩をとゞめた。それはカルトン・シアタアのあたりにカルトン・カフエーがあつてそこにダンスがあるときいてゐたからだ。だがそれは間違ひで、芥川君の文章にあつたカルトン・カフエーがカルトン・シアタアとなつて、そこは映畫劇場となつてゐるのであつた。

そのうち數間の手前で一臺の自動車が止まつて中から美裝した、さもダンス場にでも行きさうな女が二人降りて一つの建物に這入つて行つた。

「あそこがきつとダンスホールだぜ」

と一同は呟き乍らその建物の前に行き、そこの玄關前に立つてゐる堂々たる印度人の守衛に「こゝはダンスホールかね」と訊いたが、彼は「こゝは保險會社です」と云はれて一同は「何のことだい」と苦笑した。

「リツツル・クラブ」と云ふのがその附近にあつて明らかにダンス場らしかつたが、或はクラブではないかとも思ひ、よしダンスホールであつてもパトナアを連れて來るのでなければ斷はられるかも知れなかつたのでそこのドーアを押すことはやめにした。

夜の闇に蔽はれた競馬場を前に、その左手の方に當つて電飾の建物が夜を光で染めてゐた。

李さんはそれを指して「あそこが大世界です。あそこに別嬪ならいくらでもゐますよ」と話した。かなり歩き疲れたので歸りは電車に乗つたが、車掌はわれ／＼五人分の切符代をうけとり乍ら、切符は寄越さうとはしなかつた。

李さんは日本語で「あいつ奴ひどい奴だな、切符をわれ〳〵に渡さないで着服ですよ」と云つて笑つた。李さんも笑ひながら切符を寄越せとも云はず、車掌も平氣でニコ〳〵して着服する。わたし達は全く「支那であるわい」と感嘆した。さうしたことを日常茶飯事にやつてのける車掌もまさに上海の一つの特質と云へないであらうか。

北四川路に取つて返し「ラドウス・タアヴアン」の樓上に這入つて行つた。十時頃だつた。そこのダンスホールには踊り子がもう廿五六名ゐた。ホールの柱と云ふ柱は鏡を貼つてあつた。ダンサアは悉く外人でそれも大方はロシヤ人らしかつた。客はまだ五、六人しか來てゐなかつた。十二時から初まるダンス場だからでもあらう、そしてそのときに客もダンサアも續々集まりつゝあつたのである。ホールはかなり廣かつた。わたし達は片隅に陣取つてカクテルを註文した。われ〳〵の中ではN君だけが踊つた。N君は京都の人ではあるが、京都にもこんな人がゐるのかと思ふほどスマアトで、愉快であつた。上海には商用で來たのだが、上海に着いた晩から踊りたくて仕方がないらしかつた。

二人計り女をわれ〳〵のテーブルに呼んで話した。女は何れもロシヤ人だが英語も話しフランス語も解した。李さんとY君とはフランス語で、N君は英語で話合つた。女は「シャンヘンをぬいて下さらない」と彼等に常套の手を用ゐた。

「カクテルがいゝよ、カクテルは女の飲むものさ」などゝ出鱈目を云つてカクテルをボーイに命じたが、女から「あなた達けちなのね」と彌次られた。

何と云はれても構はない、旅の上海だ、それに北平の「アンテルナショナアル」と云ふダンス場で酔拂つていゝ氣になつて「シャンヘン・ハラショウ」などゝ連呼して少々困つた苦い經驗があるのだから仕方がない。

と、見るとホールのダンスも大分大勢になつて景氣付いてゐた。年寄のイギリス人らしいのがいゝ氣持で踊つてゐる。アメリカのセーラアらしい男が踊つてゐる。この男は左腕がない。腕のない方の上衣の袖をぶらん〳〵させながら愉快に踊つてゐる。いつか映畫で見た「港々に女あり」に現はれるセーラアを思ひ出させるに足りた。

十一時過ぎになつてわれ〳〵は引上げることにしたが、N君だけは「ホテル（彼はアスタア・ホテルに泊つてゐたが）に歸つても仕方がないから、今夜はこゝで踊ります」と云ふので、彼だけをのこしてわれ〳〵は豐陽館に歸り、上海の第一夜を過すことにしたのである。

「ダンスは一つの言葉である」とわたしはどんなに痛感したか分からない。わたしにして若し曲りなりにも踊ることが出來得たなら、わたしはもつと／＼多くの面白い人生の挿話が拾へたかも知れないのであると思はざるをえなかつた。上海滯在中わたしはかなり多くのダンス場を見物した。日本人經營のものらしく、日本のダンサー丈のゐるホールも數軒は見た。「桃山」「ブリユウバアド」「エロス・ホテル」「ゴールデン・スタア」そのうちでブリユウ・バアドが一番上品で、「エロス・ホテル」が一番奇拔だつた。そこの踊り子は總體身體の大きな女達が揃つてゐたが、彼女等の服裝には少々度膽を拔かれた。片方のズボンは黑、片方は白くして水兵のやうな勇ましい格好をして勇ましげに踊る女、アメリカの國旗みたいなけばけばしい上衣を着た女、さてはスペイン風の、云はゞアルヘンチーナが踊の種類によつては着るジプシイ風の裝ひ、その他等、々、々、お、何と云ふ莫連な投げ遣りよ。そして彼等はアメリカの水兵達と湧く水のやうに踊り狂ふてゐた。「ニウ・パアヴイリオン」に於ける所見だが、フランスの小柄な陸戰隊の兵士が踊つてゐた。日本のX艦の砲術長X中尉が踊つてゐた。この人の踊は時には新婚の夫婦が野路でも散歩するやうにダンサアと手をつないで音樂に合せてホールを行進したりしてゐた。音樂が止んで舞踊が一段落ついたとき彼は彼の席につきながら、「あのダンサア、圖々しいなあ、踊りやしないんだよ」と云つた。そのときその言葉に應じて「どちらが圖々しいんだかX中尉」

さう云つてひやかしたのは某新聞の上海特派員H君だつた。

「は、は、は」

中尉は快活に哄笑を波立たせた。

景氣のいゝアメリカの水兵は踊り乍ら唄ひ、唄ひ乍ら踊つた。

「ムーン・パレス」（月宮飯店）にも行つた。ロシヤのダンサアとポルチユガルのダンサアと、支那のダンサアと日本のダンサアとが仲よくふざけ合つてゐる圖を面白くわたしは眺めた。

「大中華跳舞場」と云ふ支那人のダンサアだけがゐる所ものぞいた。そこにゐるダンサアは何れも小柄の女たちがあつめられてゐた。そこでは支那のモダン・ボーイらしいのが大勢踊つてゐた。日本人と思へるものは一人、二人はゐた。かなり綺麗で、かなり廣いホールだつた。けれどそれらとは事變り、マゼスチツク・ホテルの土曜日の夜のダンスの壯麗なのは特記していゝと思ふ。アスタア・ホテルにせよ、パレース・ホテルにせよ、ここに書かうとするマゼスチツク・ホテルにせよ、毎日のやうに（？）チー・ダンスが行はれる。そしてそれ／＼土曜日の夜には華やかな舞踊會があるのかも知れないが、わたしはそのうち

で最も華やかだと云はれてゐるマヂエスチック・ホテルの舞踊會だけを見た。

聞く所によると、マヂエスチックのホールほどのものは歐米を通じていくつもないとのことである。どうも嘘ではないらしい。バンドは舊ロシヤ宮廷付の樂士たちであるとのことだが、それもさうであるらしい。白系ロシヤ人は北はハルビンから流浪の民族として相應支那の各都市に暮らしてゐる。ハルビンは勿論、大連でも、天津でも、北平でも、上海でも、ダンス場の外人踊子の殆どがどんなにロシヤ女であることか。上海あたりのストラアセ・メーチヘンの少くないロシヤ女、マゼスチック・ホテルで踊り、或は唄ふ白系ロシヤ人等は彼等としては今尙ほ最も幸運な暮しをエンジョイしてゐる連中であるにちがひなからう。と云つた理窟めかしいことは止め。マゼスチック・ホテルの舞踏會はまつたくマゼスチックであつた。男は殆どタキシードを着てゐる。女達はけんらんに美裝してゐる。男は上海在留のブルショアたちと漫遊客とであるらしい。そこはパトナアなくしては參加の出來ない舞踏會でその光景はアメリカ映畫でわたし達が見る舞踏會を本物で見るやうなものである。本物だけに一層美しい。支那の連中もそこへ踊りに來てゐる位の連中は上品で且つ美しい人達が多いし、支那服よりも西洋服が多いやうであつた。上品で整つた、洋裝の支那婦人（彼女等はダンスホールのダンサア達とは種族を別にしてゐるかに思へた）は圓卓の上の赤いシエードのある少さなスタンドの光に照らし出されてノーブルにさへ見へた。

圓天井の窪んだ中には大理石の女神の影像が置かれてあつた。（それともそれがフレスコウだつたか一寸ハツキリしなくなつたが）そこから紅薔薇色の、と云ふよりももつと淡いと云ふ意味でヒビスクスの花の色のやうな柔い照明の光線が投げ出されてゐる。その光線を浴びて美裝した男女がヘヂテーション・ワルツを踊り、チヤアレストンやブラツク・ボトムを踊るのである。とは云ふもの丶、實は踊りの種類を見分けることも出來ないわたしは假りにさう言つてみたまでゞ、ほんとうは知らないが、踊りが一體に物靜かで品のよいことだけは分かつたのである。そこのバンドは素敵にい丶のださうだ。踊る男女、踊る場所、それに音樂、それらが其々よくあることがよき情景を描き出すのであらう。二回計りつづけて踊つて舞踊者自身で喝采してゐるからい丶氣なものだ。その合間々々にステーヂダンスがある。白い羽根のやうなもので飾つた帽子を冠むつてピカ／＼した衣裳をつけた本職の踊り子がタキシードを意氣に着込んだこれも本職のダンサアと踊るのである。このときのホールは明るく彼

等には黄燈色の照明が注がれてゐた。獨唱の場合もある。その獨唱はその場から同時に放送されてもゐるのであつた。わたし達は一隅に圓卓を圍んで見てゐた。ネクタイもつけないで長旅で汚れた服で平氣で見てゐるのはわたし位のものであつたであらう。しかも圓卓の上は紅茶の一杯だけである。これには支那人のボーイも呆れたであらう。わたしは活動寫眞の舞踏會を生地のままで見て、生地は寫眞よりも遙かに綺麗で快適なものだとは思つたが、それと共に、白系ロシヤ人が最後のはかない色彩の夢を歐米漫遊客や支那のブルジョア達のために捧げてまどろんでゐるのを憫然として眺めずには居られなかつた。夜を徹して踊り狂ふ彼等である。わたしは眠むくなつたので案内者M氏を促がし、宿の自動車を呼んで三時頃に歸宅した。アスタアホテルのホールもかなり綺麗で特にオーケストラバンドの位置する所は孔雀の羽根を擴げたやうに美々しく作つてあつたのを見たが、ダンス場も相應みたからそれ以上はやめにした。ただわたしに面白く思はれたのは戰亂でもあると上海の街にはダンス場が激増すると云ふ現象である。けれどこの譯をきけば當り前で、各國の陸戰隊は增加する。街の商家は店を閉ぢて所在に苦しむ。そこでダンスが盛になり、ダンスホールが殖へるんだと。上海らしい話である。

或る夜ガァデンブリッヂを渡り、パブリック公園を左にして漫歩した。十時頃でゞもあつたであらう。しつとりした秋の靜夜である。黄浦江に沿ふた道である所爲か冷涼も一層氣持がいい。夏の宵の七時半ごろ一分間に四百五人の往き來のある、しかも二十數ヶ國の人種が入れ亂れた一種の國際的な色彩圖を織り出す場所ださうだが、わたし達の步いた時間は人通りもさまで頻繁ではなく、それもコケットな姿態を見せて氣取つて步るく女達が多かつたのに氣付いた。それらの西洋婦人は步るきながらそれとなく意味あり氣な流眄を投げる。魅惑的なウインクと微笑とを送るのである。それらの女達が何であるかは云ふまでもありますまい。いや步るいてゐる彼等ばかりではない、黄包車に乘つてゆつくり走らせてゐる彼等も同樣の彼等である。わたしは李さんではないから「ハロー！オーチエン・ハラシヨオ」と街頭で呼ぶ勇氣もなく、ウインクに應じて帽子をぬいで彼等に近づく動作も出來ない。ただしづかに觀察してゐただけである。大凡はロシヤ女らしかつた。けれどさうと計りは限りたくなかつた。レビユウのやうに彼等がわれ〳〵の眼の前を橫ぎり流れる。おおさま〴〵な姿、いろんな顏、思ひ〳〵の服裝、それは秋の夜のバンドには不釣合なほど派手でもある。しかし、却つてふさわしく思はれないでもない。われ〳〵の一人、巴里でこん

なことになれたYが向ふ側の人道を黄水仙色の上衣をきた、すんなりした姿わけても脚の線の形のいゝ女に向つて投節のやうに近づいて行つた。何を話してゐるのかこちらでは分からぬが親しげに、元からの戀人同志のやうに話してゐた樣子はバンドの夜の小夜曲とも云つてよからう。女は高層建築の上部を指してやがて彼に別れて歩き出した。わたし達見物人はYを捉へてきいた。

「どうしたい」

Yの話である。近づいて話しかけた。

女は云ふのだ「あたし(アイ)はね(アム)半分(ハアフ)支那人(チャイニーズ)で(エンド)半分(ハアフ)アメリカ人(アメリカン)なの」それから「ねあなた阿片を飲みにゐらつしやらない」と云ふのさ。阿片をのみに行く、どんな所へつれて行かれるのか少々不氣味になつたものだから、「又逢はうよ」「さうあたしはこの建物の上に住んでゐるの、ではまた」さう云つて別かれたのさ。

南京路を曲がつてしばらく來てからの話である。わたし達は少々歩き疲れてパレスホテルの一階のバァに入つた。そしてカクテルをのんで小憩した。もう十二時に程近い。するとわれわれはいかに同じバンドを――何のためにだか知らないが――歩き廻つてゐたことに氣付いた。何しろ疲れる位歩いたのだ。でもそれは銀座を散歩するよりも、どんなにアモラスな色彩に富んだ情景であるか分からないとは云へたやうである。

宿に歸ることにした。そして黄包車を呼んだ。しかしアスタアホテルのNは「僕はもう少し歩いて歸るから」と云ふのでそこでわれ〱は分かれた。

翌日N君が來ての話である。

――Nはアスタアホテルの方へ、カクテルに熱(ほて)つた頰を黄浦江から吹き上げる夜風に撫でさせながらハブリツクパアクの方に歩るいてゐた。そのとき向ふから年の若いグレタカルボに似た北歐型の女に逢つた。氣輕なNの「ハロー」と彼女のウインクとが同時性をもつて閃めいた。

二人が彼女のアパアトでナートアテートになつたのはそれから間もない位であつた。

彼の話では彼女の部屋は立派で美しかつたさうだ。

「あなたはニポニイズでせう」

「さうだ。」

彼は早速の氣轉でポケツトにある日露會話篇の「愛の會話」の章の一つの箇所を指し示した。そこには「私は君に逢へるのを喜ぶ」と書いてあつた。女はそれをNに渡した、一つの箇所を指さしながら、曼珠沙華のやうな色の唇に微笑を浮べた。

「私は每日貴方に逢ふことを喜ぶ」

電氣スタンドのシエードは桃色である。

Nは結婚前で、その淨潔を汚す微塵の意思もない。ただ、豐麗な、そして白蠟のやうな肉體を鑑賞したかつたので××の姿態、そのもろ〳〵のポーズだけを提言した。そしてそれにたいして五ドルが約束された。女は派手な上衣を××だ。ブルーマァを××で、スリツプ×××ベツドに腰をかけたものださうです。ある詩人がいみぢくも表現した美學の中心が無心に岫を出づる雲のやうにほのかな織影を無意識のうちに柔らかな夜の光線をうけてゐた。

それは彼にとつて力強い××ともなつたさうだが、彼は美しい姿態の××××全景を求めたと云ふ。

「あたしのお乳、マスカツトハンブルグのやうぢやなくつて」

カルボに似た女はNに向つて蠱惑の手品を試みたが、彼は食品棚にあるポンテカネーを指しそれを飲んで彼女のアパアトを去つたのだと云ふ。

わたし達は何だがモオリス・デコブラの「天鵞絨の焔」の話でもきくやうに面白かつた。バンドの導き入れるラビリンスこはそんなこともないとはわたしには斷言し兼ねた。N氏は率直な商人で文學者ではないのだから特に架空な色彩を用意して話したとは思はれない。N氏の話は保證の限りではないが、バンドの夜景はわたしも實際の步行者として實證するのである。

郁達夫君とタクシーで半淞園から梅司非而公園へ廻つて歸つたその日である。わたし達はジヨツフル街――同行のYが巴里の街にそつくりだと批評した、小綺麗で光澤のある商店街――を通過したころ、（後で夕刊を見るとさうだが）その通から程遠くない愛多亞路や、新開河一帶でコムミユニストが傳單撒きをやり、口號を大呼して電車を立往生させた。小暴動が發生したのである。その連中の二、三名が倫敦路でつかまつた。それが夕刊の所報では男は懲役四ケ月、女は懲役二ケ月を即日云ひ渡されたとある。何と云ふ手つ取り早い決定であらう。

イスパニヤのバロセロナを評して米人アーヴング・ブローンが「廿世紀と中世紀とが手を携へて步いてゐるところである」

「最新式の競走用車に乘つてる富める製造家の息子があれば、古代そのまゝ泉で汲んだ水瓶を肩にのせて運んでゐる女がゐる。世界で最も廣い大通りの一つ、パラレロに向つて嚴めしい建築物の間にほんの割目に過ぎない狹隘な路次が通じてゐる」

ブラウンの謂つて云ふところは、[illegible]原始性と封建性と最近代性とがしかも極めて複雜に混淆してゐる。人種の多樣性から云つたとてもさうだが、あらゆる色と匂と響と形とをあおまで込み入つて持つてゐる都市もまたとないであらう。コムミユニストのビラ撒きと、グレイハウンド・レースと、マゼステ

ワクホールの華やかな舞踏會と諸葛孔明の發明にかゝるとか云ふ一輪の小車と。

無軌道電車がわたしに興味を持たせ、自用の自動車の多いのと、黄包車の多いのとがわたしを驚かした。明暗の際立つて對立せるところ、なにがしかの危險を常に感じながらそれに云ひ知れぬ面白さと自由さとを持ちうるところ、上海の宿で第一夜を過した翌朝未明、街は灰白色に明けてゆくころ、わたしは短銃の亂射を耳にした。わたしの頭にチャイナタウンの映畫がすぐに浮んだ。ギャング團を警官隊が襲ふたのだ。襲はれた惡漢團がピストルを亂射して應じてゐるのだ。その想像がわたしをベッドからはね起させ、わたしを三階のバルコニイに急がせた。何と云ふ仕合せだ、上海に着く早々面白い場面が見られるぞと思つた。Yは「そんな所へ行つてはあぶないですよ。部屋に入つてゐらつしやい」と云つてわたしを制した。爆聲はするが何もまた誰も見えない。そのうちに支那の音樂が爆聲と共に起つた。後で分かつたが何のことだ、それは人の出發を祝するための爆竹であつたのである。けれど何も知らないわたし達はピストルの亂射と思つた。それはまつたく物笑ひの種ではあるが、しかし上海をわたしは右の想像で受け入れたことを恥じたくはない。上海は物騷か、であるとも云へやう。また、でないとも思へる。そこがすきになれる譯ではなからうか。物騷であればこそ、黄包車に無暗に乘るなと誰でもが教へてくれる。金を澤山もつて歩るくのも危險だが、全然持たないのもあぶないと云つてくれる。けれど晝間は歩るいても夜は歩るくなとは誰も云はない。事實わたしは上海に滯在中毎夜のやうに街を歩るいてしかも夜ふけでなければ宿には歸らなかつた。でも何の危險もなかつた。では晝間は、夜間だつて安心がなるものか、支那の巡査が掻拂ひを追かける時にはよくピストルを亂射するから。

吉林洋行の吉田さん、この青年は上海のことに詳しい。その人に伴はれて路次口の鐵門を入り、薄暗い、多少不氣味な闇の罩めた路を右に折れ、左に曲つたこと幾度だか分からない。闇の澱むところに身をしのばせて忽に飛びつき羽交締にして所持品をまきあげるバグラアがゐるとも話にはきいた。アメリカあたりの惡漢ならピストルをつきつけられても兩手さへ擧げればよささうだが、支那の惡漢はさうした法則(ルール)を無視するから怖いとも思へるのだが、わたしは何の掛念なしに毎夜のやうに夜深の街を歩るいたものだ。多少の用心はするもの、それ以上の出來事は落雷に打たれるのと同じことでそれは仕方がないことだと計り高を括つてゐた。時々は鳥打帽を目深に冠り、兩手をそれぞれのズボンのポケットに入れて、活動寫眞に現はれるアメリカのギャングマンのやうな格好をやつて深夜の街を歩るいたりするのだから、上海の惡い仲間ももしかすると同じ不良と

見たのかも知れない。「大世界」に客をあさる何と云ふのかね、野雞とか廣東珠とかと云ふのであらう。こんな連中でさへがアパッシユまがひの格好には道を開らきまた遠くよけるのであつた。わたしとしてもわたしの好みに反するのでかの地で有名な、誰でも何度かはゆく四馬路には足をふみ入れなかつた。茶館のお茶をついぞ飲まなかつた。フランス租界の八仙橋には擲鏡子とかと云ふ×と×、×と×とが職業としても凄まじい×の遊戯も見られるさうだが、それを見にゆく何の興味も起らなかつた。

わたしの興味は「逸園(カニドローム)」で見たフランス女マダム・スヒイルマンにかゝつてゐる。

江灣の立達學園でそこの學生と勞働大學の學生とを一緒にして講演さした。わたしには初めての試み、通譯は程鮮榮君がやつてくれた。わたしは日本では中止なしには濟まない講演を、思ふまゝに思想的立場を鮮明にしえて濶達な氣持になつて引上けたわたしを菅原君がひどく方面違ひのグレイハウンドレースに案内してくれた。聞けば競犬場(譯呂は惡るいが)は上海に三つある。「逸園」の他に「明園(ルナパーク)」と「申園(スタデアム)」とがそれである。「逸園」が一番後に出來て、最も大きいとのことであつた。雨の夜だつたけれどあらゆる人種の大勢が集まつてゐた。競技場も成程立派だ。芝生が雨に濡れてそれが電燈に照り出されて青々して美しかつた。人造の兎が電氣仕掛で走しる。それを獵犬が目蒐けて走る。そこで競走になる譯である。そのルール、特にダブル・エヴエントに就いての說明もきかされたが、わたしのやうに勝負事のきらひなものはきいてもすぐ忘れてしまふのであつた。競馬にせよ、競犬にせよ、チケツトを買つてこそ面白いのである。

わたしはたゞ單純な見物人として見物しただけで犬の競爭を見たり、スタンドの見物人を見物したりした。スタンドの屋根から吊り下げた草花の鉢植を味なものだと思つた。豫想以上に大規模なグラウンドに實は呆氣に取られもした。支那側では競馬に稅金を取つてゐる以上、犬の方にも同樣に課稅したいので犬の競走も賭博(ガムブリング)だと主張するのだが上海在留の英人は「何を云ふのであるか、これは立派なスポーツである」と抗辯して峻拒してゐるさうである。競馬の方は賭博で、犬の方がスポーツだから面白い。犬の競走もあれば、猫もあつてもよささうだ。[illegible]には猫の競爭もあると聞かされた。犬のそれがあるとすれば、猫の競爭もあつたとて何の不思議もない譯だが、猫の方はありはしない。將來は豫測のかぎりではないが少くとも現在のところはない。ではどうしてそんな噂が生まれたのか。それはカフェー・プラザで、踊り子どもが猫に扮して

(四つん這ひになつたかどうかは知らないが)競走の眞似事をした。所が上海である。誰云ふとなく猫の競走もあるのだと云ひ出した。そしてそれが噂の波紋を巧みに描がいて實在性を振り撒いたのださうである。

「わたしなら四つん這ひになつてかけつこするダンサァの猫の競走を選擇するね」

そんな怪しからぬことを云つて菅原さんを苦笑をさせたものだ。

犬のレースの合間である。わたしたちはスタンドを降りて場内を散歩してチケット賣場のあたりに來た。そのときである笑容いろのシークな洋裝をした如何にもパリジアンヌらしい三十二、三の女を見た。スマートに風を切つて歩るくが、と云つてデリカな風姿は失はない。わたしはその登場者に目をつけた。

彼女は多くの男のむらがるチケット賣場をさして進み、彼等を押しのけるばかりに割り込んで大まかにチケットを買ひ求めてゐるやうだつた。姿のやさしいに似ず、顏の美しいのに拘らず、彼女が目の緣を黑く彩つてゐるところがヴアンピールらしい容子を描き出してゐた。それ故にわたしはます〳〵興味の對象としない譯には往かなかつた。それを知つてかそれとも知らずして云つたのか、菅原さんはそつとその女を指してわたしに教へてくれた。

「あの女は上海の一人の名物なんですよ。それでゐて誰もにははつきりと彼女の素性は分かつてゐないのです。みんなの臆測では金持の後家さんと云ふことになつてゐるんですがね、名ですか、名はマダム・スピイルマンと云つてます。競爭用のグレイハウンドも所有してゐます。あゝして來ては實に人の意表に出たチケットの買ひ方をするのです。思ひ切つたでたらめの買ひ方をするのです。彼女にはレースの豫想なぞは眼中にはなささうです。それでゐてどえらく儲けもするのですから全く問題の女ですよ。」

わたしは菅原さんのさうした說明をきゝながら「逸園」のジヤンヌダークでなければ女ナポレオン、マダム・スピイルマンに興味を深くしてゆくより外なかつた。「逸園」ばかりではない、彼女は「申園」にも「明園」にもかゝさず行くのである。「逸園」が火曜、木曜の夜(時には日曜にも)、「申園」が毎水曜日の夜、そして「明園」が毎土曜の夜にそれ〳〵競走が行はれてゐるとすれば、マダム・スピイルマンの生活のプログラムは一週の夜の半以上はグレイハウンドレースによつて組立てられてゐる譯である。ひなげしのやうに綺麗で華奢な女であつて、しかもどことなく女俠的でもあり、ヴアンピール型も備へてゐる女、彼女は兎にも角にも上海の一つの角度に立つ存在と云はねばならないのであらう。

夜の雨を衝いて歸る自動車の中でも美容いろの服裝とその顏とが深い印象として殘されてゐるのを知つた。

マダム・スピイルマンにたいするわたしの興味は菅原さんの口を通じて上海の文士たちの幾人かに傳へられたらしい。

上海を去る前夜北四川路の「新雅」で上海の文士たちが催してくれた小集に列席して老酒が快くわたしを醉ひに投け入れたころほひ、田漢君だつたか、張資平君だつたか、「新居さん、マダム・スピイルマンをどう思ひましたね」と云つてからかつた。

行きすぎの、たゞ一度見ただけのフランス女ではあるけれど、わたしは上海と云ふ奇妙なアラン・ボウ張りの近代都市を背景にしてはマダム・スピイルマンを何でもなく忘却することは出來なかつたのである。

わたしが上海に住むわたしであれば、女としては差當り興味をもつて調らべてもみたいひとつの生活であるにちがひないと思はれるのである。

豫定のページが盡きたので、[illegible]。上海の夜景がこんなことで盡きる譯はないが、わたしはわたしの選擇に從つてホンの一小部分をスナップしたのに過ぎないのである。

出版部だより

——「踊る地平線」自讃——

十月十五日に發行された吾社出版部の第二彈「踊る地平線」は堂々八百頁の大冊、用紙は最上舶來コットンで總ての點に商賣氣を投いた贅澤本だとの評判が高い。それについて著者谷讓次氏から手紙が來てゐる——。

拜復

只今御手紙有りがたう存じました。

いよいよ「踊る地平線」が出來ますさうで樂しみにしてをります。どうも色々と御世話さまになりまして厚く御禮申上げます。今度はすつかり貴方に甘えて、わがまゝばかり申上げ申譯がありません。然し大いに悔恨の情が見えてをりますからどうか今回のみは御見逃しを願ひたく、社長はじめ社員御一同樣へ貴方からよろしく御とりなしの程御願申上げます。呵々。

さて、早速にも御れがひ申上げたいのですが、昨今、原稿に氣のりが致し沒頭してをりますので、この氣もちを逃してしまひたくないので、こゝ當分外出はむづかしいと存じます。御手數で御座いませうが見本御送り頂きたく御まち申上げてをります。いづれまた御目にかゝつて萬々御禮申上げたく一寸御挨拶まで。

右は説明する迄もなく、餘りに念を入れ過ぎた事に就て、著者から誠に相濟まぬと云つて來たものである。裝幀は木村莊八氏の心血を注がれたもので、全部上等和紙に木版の手刷りといふ全く現代の機械文明に逆行したやうなヒマとカネに飽かせた超犧牲的大出版、正に裝幀藝術の極致を示すものであります。

我が畫壇に寄す

藤田嗣治

一

何にしろ十七年間日本の新聞雜誌も殆んど讀んだ事は無いので誰れ一人送つて呉れる事もなく又送つて貰うと言ふ氣にもならぬ。

しかし日本に置ける雜誌の多い事と其の影響が青年に及ぼす事の偉大なるには一驚した。

若い人が私の知らぬ樣な人々の名前をすべての方面で知悉して居て非常に博學の樣である。しかし何うも只廣い丈けで深さがない樣である。實際の歐洲一流の大家も三流の人も同じ高さで紹介されて居る事もある。隨分間違つて居る、餘りに知りすぎて居る、知り度い知り度いの念にかられて居過ぎる、世の中に知る可き事が餘りに多すぎて私は知り度いと思はない樣にして居る。私とそれ等の人とのすべて根本の立場も異つて居るし、大家の事を云々するのは十七八の青年時代で恰も大家の樣になつたつもりで自分をえらく思ふ時代である。本當に世間で一事業しようと言ふ樣な人であれば世間からかくれて自分でその全力を自分の仕事に投げ込んでやつて居る人で、何故か世間を驚かそうと言ふ事でなく、何故か世間から見出されるのが本當である。

二

大體日本には隨分誤つてる事が澤山あると思ふ。

例へば畫家が文筆を持つ事であらう。專門の批評家と言ふものがないからではあらうか、畫家の批評と言ふものは兎角一面にかたよつて公平を缺く恐れがあり、又畫家が、ならべる文字丈けの畫が出來たためしが無いのである。文章と畫とは全く別

問題でなければならぬ。

分つてる様な事までが實際にぶつかると丸るで出來ぬ事であつて、それ丈けの努力と時間を何故に自分の畫の上にそゝがぬかを不思議に思ふ。

各自の會の上のごたくとか、退會とか、運動だとか、會の雜務だとか、審査だとか、入選だとか、會賞だとかは、決して後世に傳はる様な作品を出す天才は無頓着でそう言ふ事にかゝはらぬ性質のものでなければならぬ。展覽會の事務員にまかせて置けばいゝのである。何故個人で千人一萬人十萬人を敵にして戰ふ丈けの努力を一人で養成しないのか。何故歴史上に出る畫すべてよりも變つた畫を作り出す事につとめぬのか。

セザンヌ始めルノアールもゴーガンもゴッホもめいくの地に土着して世間から離れて別に雜誌にかいた事もなく、會に出しやばつてぐずく議論した事もなく、自分を作る事のために一生奮闘したのではないか。畫家がとつ辯であらうが、文章が下手であらうが當然な事でなければならぬ。

畫家の研究すべき畫の本質に立ち入つて研究せねばならぬ。ようやく近時有島君がマチエとか、マチエールとかを重大なものとして傳へ出したが、日本では全く表面のうすッぺらなもの丈けを見て本質に立ち入らなかつた。表面は非常に新らしく進んでる様で日本の洋畫は本場よりは十五年も廿年も遲れて居る。まして人身攻撃とか、その人の惡口等は全然言ふ可き性質のものでなく、藝術家の自由は尊重せねばならぬ。酒をのまぬ人の凡作よりも大酒家のその作品はいくら増しであらう。ウトリロ、モデリアーニもデーランも皆大酒のみで道路にころがつたり始終警さつの厄介になつたりした。

三

女が好きであらうと無からうとそれも同一であらう。

八方美人の所謂紳士はのぞみ度くない。世紀を代表し世界に冠たるものは人間界の人々から見たら氣ちがいにされ易い行動もある可き筈である。畫家が毎日モーニングコートを着て居られるものではない。着たからと言つてえらくなつた譯でもない。人の言葉が何んでもなくなる事でなければならぬ。餘りに日本は人の事にオキッぺし過ぎて居る。何故に自分と言ふものを考へないであらう。

眞の天才は自分一人で生きて居る、一人で樂しむ事も知つて居る。そうしてソリチユードの中で仕事を眞劍にやつて居る、そうして敵の惡口許り受けて居るのである。自分の希望はこうあり度いもので、これからの青年諸君にもこれをよく理解して貰ひ度いのである。

アメリカ通信

スピードの國アメリカ

本誌特派員 在シアトル　清澤洌

なんといつても自分の國ではない——アメリカに來て何よりもまつさう思ふ。

一

今朝もけさだ。私は出來てきた洗濯物の中から褌をとり出した。いつからやり始めたか忘れたが、私は褌といふものは、日本が産出した最も簡にして要を得た發明なりと信じて、どこに行つても手放さないで居る。……島中君、許して下さい。褌のことなど通信の劈頭に書けるのも日本なればこそだ。私はこの日本の自由を享樂したい。

褌をとり出して私はハツと思つた。糊をつけて、アイロンをかけて、まるでカラーをのべたやうに固くしてあるではないか。面の方ならどんな固いものでも間に合ふだらうがなどゝ野次つてはいけない。これでも體の下方部は相當にデリケートに出來あがつてゐて、薄板のやうな奴を兩股に挾みこめるものではない。

『一體、なんだと思つてこんな薄板にしたんだらう』

私はそれを手で挾んで柔かくしながら一緒にそへてある代價表を見た。

『Band 4』

シヤツとかカラーとか靴下とかといふやうなものを取りさると『バンド四個』がそれに當る。バンドはいゝ。洗濯屋もそれに紐がついてゐるところから、腰に卷くものであることは感得したらしい。それなら薄板は何だと思つたんだらう。

この事を折柄訪ねて來た友人に話すと、かれも流石にそれを解きかねていつた。

『ぼくはランドリーにやつたことなどないから知らんがネ。なんでも女のお産をした後で使ふものがあれに似てゐて、それをバンドとかつていふぜ。それをなぜカラーのやうに固くしたつて？　それは直ぐ肌につけるものでなくていろ〳〵卷いた上にやるものなんだからよ』

私はこれから洗濯物の中でバンドだけにはノートをつけてやることにした。

『これだけは洗ひ放しで柔かくしておいて下さい』

禪を解さない國へ來て、日本でないことを痛感する點について、故國の諸君の同情を得られると思ふ。

二。

話しが身につくものから始まつたのだからその邊から片づけて行かう。十年振りで觀たアメリカを一度で書くには餘まり頭がこんがらがつてゐるから。

船からシアトルへ上陸した晩に、出迎へてくれた人々と一緒に支那飯を食つてしまふと、私達は作れだつて下街に散步に行つた。私は日本における癖でステッキを手にしてゐた。

說明するまでもないことだが、日本ではステッキといふものが日傘と相呼應して、紳士道の二條件でゞもあるやうに流行つてゐる。ロンドンやパリーあたりから出たであらうこのステッキは、日本指しなき後の日本に侵入して、天晴れブルジョアー・イデオロギーの渦を漲たしてゐる。國士型には太いもの、ハイカラ型には細いのゝ區別はあるが、ステッキを愛用する點は即ち一つである。また實際晩の散步などによく

これは要心棒にもなれば、手すさびの道具にもなる。ブルジョアとは天が下、同じ空氣も吸ふまいと思はれるほどの大山郁夫氏あたりまでが、確かステッキを携帶してゐた以上は、元來がブルジョア志願の私がそれを持つてゐるのに不思議はあるまい。

『シアトルには君、西洋人が多いネ』

私はそんな冗談口をきゝながら歩いた。晩の散步といへば日本人だけの雜沓する町に馴れて來た私には、通る者も通る者も西洋人であるのが異國にあるといふ氣持を新らしくした。ある外國生れの日本人の子供が東京に來て『マヽ、東京つてところは日本人が多いのネ』といつたといふ話しを私は想出してゐた。

私がこの西洋人の群の中を……といつても米國には銀ブラに類する散步の方法はない。かれ等は何か用があつて忙はしく氣に通るだけだ……例の『紳士棒』を右手につきながら威風堂々（！）と濶步すると、彼等が不思議にみんな私の方を見るのである。始めは一緒に歩いてゐる誰よりも、日本製の私の方が異色があるので、注意が自然に群鷄の一鶴に集るであらうぐらゐに思つてゐた。また事實、御當人の奧樣たちから何と抗議があらうとも、さう解釋して間違ひもないのである（！）。

ところが群鷄の一鶴を見あげるためには、胸から頭の方を感にたえて眺めればいゝのに、その視線が脚の方に行くのである。脚の形ちではまだ賞金を貰つた覺えもないのにと、その視線の行衛を辿つてみると、豈圖らんや、それは一齊にステッキに落つるのだ。

『ぼくがそれを持つてあげよう。そんなものを誰も持つてゐないので、みんな珍らしがつてゐるんだよ』

新來の客を好奇心の的とすることを氣の毒がつて一人がいつた。

『なに、人殺しかなにかゞ來たと思つてゐるんだ』

仲の一人が交ぜつ返してみんなでドッと笑つた。私はそれから『紳士棒』はトランクの中に仕舞ひ込んだ。

ステッキを使用しない若さが、あれから十年經つた米國にまだあるのだ。

三

私がシアトルに着いて暫らくしてから、パイキ街といふ大通りを、普通寢卷に着るパジヤマを二人の紳士が着て、堂々と濶歩した。男の服裝があの通りエアー・シップの鑵のやうに空氣も入らぬ窮屈さであるから、もつと悠やかなものを男に許せといふ示威運動である。

同じ頃、北カロライナ州のサウンダーといふ記者が、同じやうな服裝で町を歩くと、風俗擾亂の廉で訴へるものがあつて拘引された。その結果がどうなるかと注意してみてゐると、判事はそれを無罪としたばかりでなくて、『このやけつくやうな暑さを避けるために服裝改良を思ひ立つた勇氣は見あげたものである』とつけ加へた。かれも男の一人としてエアー・シップの鑵から解放されたいに違ひなかつた。

同じ運動がシカゴにもあつて、三十名ばかりの寢卷を着た連中がミシガン街を行進したさうで、その寫眞版が新聞を賑はした。いづれは今年の馬鹿げた暑さが、男をエアー・タイトの服裝から解放せしめんとしたに外ならなかつた。

かうした記事を見ながら、私は窃かに微苦笑を禁じえなかつた。私は船から出した通信に、船が横濱を出ると、もう禮儀でも習慣でも、むせかへるやうな『女の臭ひ』がすることを書いておいた。この女のドミネーションに窮屈を感じ出して、衣服の方からこれに反逆を試みようとするものが、米國の男の中にもあるのだ。

十年前の米國の女の服裝は窮屈そのものであつた。コーゼットといふ腰の上を締めつけるものを卷きつけて、女が十人も歩くと結構道路掃除の代りをつとめるほどの長いスカートをはいて、ゾロリ〱としてゐた。

それが今はどうだ。胸の出し放題、手の出し放題などはまだいゝとして、靴から上三尺近くまではまるで制限のない自由地帶だ。肉色の……奇妙にそれが肉色に決つてゐる……靴下（などゝいふ名詞がもう時代遲れだ。靴上とでも改稱すべきものだ）をはいてもよければ、都合で何にもはかずに、擂こぎのやうな足を露出して居つても、少し『モダーンだ』ぐらゐな批評を我慢すれば誰もなんとも云ひはしない。

ついでだから書いておくが、こゝらではスタッキングレスの女は、十八九歲以上のものでは餘り澤山はない。それに白人でも足の皮膚は如何にも非美術的だから、これは流行るまいといふ者が多い。また流行られたら日本の生絲輸出に影響して、經濟困難が、も少し激しくならう。日本人は頭の方ばかり氣をつけずに足の方を、も少し注意するがいゝ。

今のところ、モダーンと非モダーンの區別は、まだ膝こぞを標準として、一寸そこ〱の問題だ。膝こぞから一寸ぐらゐあがつたのがモダーンで、二寸あがつたらアルトラ・モダーン。膝こぞからそれだけ

下れば保守、最保守のメヂユアーになる。中斷の道はそれ故こそにあるか、だ。

いづれにしても米國の女の自由は素破らしいものだ。女に許されない自由なく、男に許される自由はないといつてもいゝほど女は特權階級だ。

四

この女の自由に對して、アメリカの男達の情ない状態はどうだ。かれ等は唐木造りの人形を紙でゞも張りまはしたやうに、いつでもシヤチホコ張つて居らねばならぬ。服裝などは何百年以前から釘づけだ。今年の夏でなくたつて、シヤツを着て、チヨツキを着て、その上にコートだ。それなら暑いに決つてゐる。

それに女が一人でもゐると、彼等は二等卒が聯隊長の前にでも出たやうに氣ばかり使つてゐる。少し人情噺しにでもなると、平凡なことを『レデーの前ですが』などゝ、一ケ年もたまつた家賃の申し譯でもするやうに、いゝ譯しながら話すのが常だ。

かう男が讓歩ばかりしてゐると、女はそれが自分に生れついた特權のやうに思つて、乘り出したがるのは當然だ。私の乘つて來た三島丸の事務長がこんな話しをしてゐた――

いつかアメリカからの歸りに、若い外交官の夫妻が乘船したが、その同じ食卓に顋鬚を胸までたらした容貌魁偉の國士――謂はゞ神風連の一團が陣どつた。男の中の一人の婦人として、この婦人が女王のやうな位置を占めるのは當然である。況んやかの女はアメリカの外交界で鍛へた社交人ではないか。かの女は盛んにその場をとりもつた。

苦々しげに默々として皿をつゝいてゐた國士の一人は、二三日してから、突然テーブルをドンと叩きながら呶鳴つた。

『女郎の奴をして何をペチヤ〳〵喋べりやがるんだ。聞いちやをれん』

フオークやナイフをそこに擲つたまゝ、かれ等は憤然として立つて部屋に行つてしまつた。今まで得意の辯舌を弄してゐた夫人が、急に青菜のやうに悄れたのは當然として、夫の外交官君までふるへ出した。

『あの時ほど困つたことはありませんよ。なんしろ對手は皆な大木のやうな大きな連中ですしネ』

と事務長が縮れた毛の頭をかきながら話してゐた。

私がその國士連と憤慨を共にするものだと思つて貰つては困る。私は女の喋るぐらゐには泰然として忍耐するだけの修養はつんでゐるのだ。が、問題は男の窮屈さだ。殊に『男の國』から『女の國』に來た窮屈さだ。米國の習慣風俗といふものは、女が男を抑へつけるために造つたものではないかと思はれるほど……日本のそれがその反對であるやうに……男に窮屈に出來あがつてゐる。ピヤー樽のやうな頑丈な妻君を傍において、木のやうな亭主君が『女は弱いものだから助けねばなりません』もないもんだ。

洋服や靴を頭腦勞働者の勞働服とだけに見て來た私達が、ベッドを離れる時から寢る時まで、窮屈な洋服をきて、二三百匁を超えるであらう靴を引つかけてゐねばならぬのだから、この初秋に素足でセルの

單衣か何かで何處までも散歩に行ける國の自由さを想出す氣にもならうではないか。

それにして『女の國』における男の反逆などゝいつてもたわいのないもので、今の洋服を、も少し柔らかく、ゆるやかにしようといふ程度である。足を出すのでもなければ手を出すのでもない。胸の邊はもつと包み隱すことに努力してゐる。これで『解放』だの『反逆』だのがすさまじいが、米國の男性の解放運動は、まだこの邊を上下して居る。もしそれ服裝問題なら洋服を日本のやうに勞働服にして、家庭に歸つたら和服姿になつたらどうか。少し及び腰だがアメリカの同性諸君に物申して置く。

五

女と男の太刀打ちでは男の方が旗色が惡いが、男同志の競爭は、競爭組織、資本主義の本家だけあつて、まるで火が出るやうだ。そしてその競爭の中心になつてゐるのは何といつても自動車だ。今アメリカは自動車時代といつてもいゝ。

船からあがつて停車場の前を通ると……その停車場もこの五十萬に足らないシアトルに東京驛に匹敵するほどのものが二つある。鐵道は私設會社の經營だからだ……その屋根の上に大きな廣告が出て居る。『ポートランドに三ドル、バンクーバーに二ドル』と赤字で張り出してある。

『とても乘合自動車が發達して、鐵道の經營が困難になつて行くんです。今は一つの鐵道會社の競爭對手は他の鐵道會社ではなくて、乘合自動車なんです……現に……』

私を波止場に出迎へてくれた北米時事の有馬君はその近くの線路まで自動車を飛ばして連れて行つてくれた。

『こゝにタコマに通ふ遠距離電車があつたでせう。その當時は京濱間の省線のやうに勢力があつたものですが、ステージの發達で、先頃破産してしまひました。この代りに御覧なさい、あのステージの頻々として通ることを』

いかにも東京の電車を頑丈に造り直したほどの大きな乘合自動車が引き切りなしに通つてゐる。それが北はカナダのバンクーバーから南はローサンゼルスまで——鹿兒島から北海道あたりまでの距離を——聯絡して、一日何回となく通つてゐる。太平洋沿岸のものにはまだ寢臺はないが、シーツを横にして安樂に寢られるだけの設備はしてある。

鐵道會社もこの新來の强敵を正面の敵とすることの不利を感じた。そこでシアトルに本據を有して、日本郵船と聯絡をして居るグレート・ノーザン鐵道會社などは、別に補助會社を造つて、鐵道と協力をすることにした。過去二ケ年の間に、同社所屬の百五十臺のバスは一ケ年三百萬人の客を運んださうで、賃金は一マイルにつき二・四センツ——日本金の四錢八厘である。これがもう試驗濟みの好成績で、ニユーヨークを中心に、西に南に蜘蛛の巣のやうな交通網を張りましてゐる。

遠距離は知らず、近距離では鐵道や電車の經營は殆んど望みなく、自動車を外にして交通問題は考へられない。だから道路も自動車本位

で、四十五六萬の人口を有するシアトルと、五十マイルを離れたタコマといふ十二三萬の人口の町をつなぐのに京濱國道のやうなコンクリートの道が三本ある。近い内に、も一つ出來るさうで、道路のためには浪費に近い金を惜まない。

六

『アメリカの人間は、みんな運轉手(シャファー)になつてしまつた。』

さう歐洲のある哲人が嘆息した。これは誰もかれもが自動車を運轉することも意味するし、またシヤフアーなどが持つ特殊の性格に墮したことをも意味する。なにしろこのシアトルといふ米國としては西部の田舍町に、十五萬臺といふ自動車——日本全體の二倍の數があるのだから、町の混雜は想像するに足りよう。一寸した家では夫婦、子供が一臺づゝ持つてゐる。

ある大學の教授が、とてもどうにもならないといつた表情で話した。

『たとへば寄宿舍で女生徒を監督するとしませう。今までは庭の外か、たかだかが下街邊でも氣をつければ、それで監督の義務はすんだものです。ところが近頃は自動車で一二時間走れば、どこにでも行つて來られるのですから監督なんか出來るものではありませんよ』

私は上陸してから各地で、日本の事情について講演を頼まれてやつてゐるが、ものゝ五六十人の聽衆が集まれば、會場の周圍はズラリと——日本なら大官の葬式か何かのやうに自動車が續くのだ。それが多くは熊手のやうな手をした百姓か、勞働者が四五十マイルのところから夕飯すぎにやつて來るのだ。

かうした自動車時代だから、習慣や道德もこれを中心にして回轉してゐるといつてもよからう。外の言葉でいへば自動車といふスピードの怪物が來て、今までの土についた風俗や道德を叩きつぶしたといつていゝと思ふ。

たとへば今、米國では男の無帽主義が流行しだしてゐる。これは自動車に乘り降りするのに帽子が邪魔だからであらう。東京邊でも自動車の所有者は無帽、無外套で出歩いてゐる。また女の帽子の流行は、飯のお鉢を逆さにしたやうな恰好のものだ。これも恐らくは自動車の出入に便利のために違ひない。昔のやうに鍔の長い帽子に、長い留針でもやつて居れば、自動車の屋根に釣りそこねた魚かなにかのやうにブラ下がること確實である。

流行をかへるほどのものが道德をかへないわけはない。これについては何れ後の通信で書く機會があると思ふが、今アメリカで一つの危險が現はれた。男と女の合乘りの自動車がこれだ。

『オい、あそこに行くのは若い男と女の自動車だぜ』

さういふと後から續く自動車は、危險信號を受けたほど警戒するのが常だ。どこに突き當るか分らないし、どう脫線するか知れない。後からみると盲目が踊りを躍つてゐるやうにジクザク進んでゐる。

それもさうだらう。人見知りをしないアメリカの若い男と女だ。まるでハンドルを中心に一人の身體のやうに密着して走つて居る。ハンドルの方がおからになるも不思議ではない。

「運轉する者が、他の同作者の肩に手をかけながら、自動車を運轉することを禁ず」

どこかの市か州かでさういふ規定を出した。醉ひどれの運轉手は、さすがに禁酒以來少なくなつたが、それと同じ危險性を有するものとして出現したのが、若い男女の自動車である。そしてこれ等の自動車があのスピードで走り行く先きはどこなのか。元來家庭に育つて來た女が、家庭から遠く離れゝばそれだけ危險率は增すのだ。酒と戀は昔しから魔物としてある。

七

自動車のスピードが、アメリカのすべての速力を表象する。道を通ると大きく飛行郵便の廣告がしてある。小高いところには飛行機のために探照燈が光つてゐる。私がシアトルへ着いて數日してから、この町とニューヨークの間を毎日郵便飛行が直通して、翌々朝には郵便がニューヨークに配達されることになつた。

が、早いのは飛行機や自動車ばかりではない。タイムといふものがわれ等とは違つた觀念ではないかと思ふくらゐかれ等はそれに敏感だ。

アメリカに着いたら、どうしても懷中時計の硝子を入れなければならないと、私は船から思つてゐた。

時計の硝子がこはれたのは約二ケ月ぐらゐ前からだが、お耻かしいながらかけ代へのものがないので、時計のない不便を思ふて、硝子のないまゝで使用して來たのだ。

「この時計の硝子が入れられませうか」

私はシトアルに着いた日に、ある時計屋の前に立つた。

「一寸、お待ち下さい」

時計屋さんがそれを調べて、三四日後に來てくれといひ出すであらうことを私は豫期してゐた。また東京なら屹度さういふに違ひもないのだ。とにかく直ぐやつては沽券にかゝる！

時計屋さんは眼の前で硝子箱を出して丸い硝子をあてゝ見た。

「これにあふのがありませんから、午後二時にお出で下さいませんか」

「今日の？」

私がかう聞いたのは無理もなかつた。その時は正午で、午後二時までは二時間しかないのだ。東京なら何だかんだで一週間ぐらゐかゝるところを、かれは二時間の間に、卸商から硝子をとり寄せて、立派に間にあはせてくれた。

その翌る日、靴の底を取りかへに靴屋に行つた時には、私は少しく自から警戒してゐた。東京なら靴屋にやつて、それを催促すると「もう直ぐ出來ます」をくり返して、三日や四日かゝることはどうしても覺悟せねばならぬ。併し、時計の例もあることだから、米國なら一日ぐらゐでやるだらう。私はさう思つてゐた。

「寢る時にボーイにでも持つて行つて貰はうか。知人にでも賴まうか」

少し長く、しかも廣い區域にわたる旅行なので、持荷を極端に制限して、靴も一つしか持つて來なかつた私は靴の底のチビたのを、どうしようかに相當迷つてゐた。

『靴の底を代へたいのだが、どのくらゐ待てばいゝんですか』

白人區域の町に出た時に、私は靴屋の店先きに立つて聞いてみた。二時間や三時間なら無論待つつもりでゐた。

『五分間』

店員はサラリと答へた。

靴をぬがせるとかれは直ぐ修繕にかゝつた。二三分の後にはかれはもう私の眼の前にあつた。

『出來ました。お履き下さい』

私は何だか鼻をつまゝれたやうな氣がしたのだつた。日本で『今直ぐお目にかゝります』といふ代りに『五分間お待ち下すつたらお逢ひします』といふ。人に道を聞いて『これから直き近くですよ』といふ代りに『こゝから六丁目の門です』といふ。道には重な辻々に、どこまで何十何マイルと精確に書き出してある。タイムとスピードが米國の特長である。

米國人にいはせれば、繁榮とは速力（スピード）の問題だといふであらう。下らない手續きで一週間かゝつたのを二時間で目的を達する。十時間かゝつた旅行を一時間で先方につく。金の運轉が早い。荷捌きが早い、相談の纏まりが早い。

從つて人力の浪費が少ない、浪費が少ないから少人數で間にあふ。小人數で間に合ふから俸給が澤山出せる。俸給が澤山出せるから繁榮する。『スピードのないところに機械文明と繁榮が存在しうるのか。』かれ等は乾度、スピードといふものに反感をすら持つて居る東洋人に、さうビツクリして聞くであらう。

八

そのスピードのアメリカを去つてから十年、このシアトル方面を去つてからは丁度十五年になる。私は故山に歸つたやうな氣持で、そここゝを見て廻つた。

そこへ一つの抗議が來た。タコマからである。『君はタコマの出身ではないか、シアトルに來ながらタコマに來ないとは怪しからん』といふのである。なにしろアメリカの町と町の競爭は激烈なもので、現に先頃シチー・オヴ・タコマといふ飛行機が、日本に飛ぶといふのでタコマでは町をあげて援助したが、それに一つの條件がある。

『もし同飛行機がシアトルから少しでも見えるところを飛んだら、援助を取消す』

タコマからの抗議が何を意味するかは直ぐ分つた。私は早速友人の自動車でタコマに行つた。十五年以前までは東京の郊外のやうな悪道であつた道が、今は字義なりに鏡のやうになつて、それが眞一文字に平原を貫いてゐる。この邊は山火事が名物で、シアトルに上陸した頃から燃えつゞけて、今のところ何時消えるとも分らない。今年はいやに蒸し暑いと思つたら……それでも夏冬を通して同じ洋服でいゝほど氣候はいゝが……山火事のせいであるさうだ。何週間燃え續けて、州民が殆んど騒がないところに、まだ無限の山林と原野がこの方面に續いてゐることが知れよう。その山火事の煙が一面に平野を蔽ふて我等

の道路を暗くしてゐた。

タコマの町はスピードのアメリカには似合はしくないくらゐ昔のままでゐた。かつてはシアトルと西北の覇を爭つて、シアトルより古いこの町は、地の不利からもう全く田舍町になつてしまつた。サンフランシスコが排日だといふので、日本の貿易を北方にとるため、特に日本人に好意を示して、大阪商船の支店をこの町に設けさせることに成功したが、それも今は大きなシアトルに呑まれた。それでもまだかれ等はホーム・タウンのために對手のシアトルと戰つてゐる。

私の働いた家は皆なそのまゝになつてゐた。あるデパートメント・ストアの前を通つて私は、そこで伊藤公がハルピンで暗殺されたことを夕刊で知つて、窓を拭いてゐた手を休めてそれを拾ひ讀みしたことを想ひ起した。またあるカソリックの病院の前を通つて、當時、キリスト教信者であつた私が、夕方になるとそれから少し離れた野原に出て、紅々と照る夕日の下に跪いて、神樣と故鄕を半分々々に戀しがつて祈りをしたことも憶ひ浮べた。

『スピードのアメリカは何を變化さしたのか』

勞働しながら學校に通つた靑年時の姿を追憶しながら私は直ぐ考へた。

私達がスクール・ボーイをしてゐた頃は、カーペットを叩くことが一番嫌な仕事であつた。木と木の間に針金をつるして、それにカーペットをかけて、針金を丸めた棒で叩くのだ。埃が汗と交つて、人間の土あえが出來さうであつた。聞くと今はもうさうした苦業は誰もする必要はない。どこにも埃を吸ひこむ簡單な電氣掃除器がある。

『そんなことは何でもありませんよ。今そんな面倒なことをさせたら誰も働くものはありやしません。一家の洗濯物は家で洗はないで洗濯屋に出しますが、それは濡れたまゝで十斤幾らと決めて、アイロンだけは家でかけます。御飯を食つた後のお皿は一つ一つ手で洗ふやうな面倒なことをせずに、チャンと機械で洗つて干してしまひます。家庭の冷藏庫も中流以上なら大概もう電氣裝置で、アメリカ人好物のアイス・ウオーターの氷が體裁よくその中で出來ますから、大きな氷を外から運ぶ必要などありません。アメリカ人の臺所は、この十年ばかりの間に、まるで革命ですよ』

長く家庭働きをして居るある婦人が、自分のことのやうに誇りがにから話した。賃銀が高いので、餘程の富豪でなければ女中などは雇へない。雇へないからこれに代る機械や改良やらが、後から後から起つて來る。

『あのミルク瓶の蓋でもですよ。始めは固い丸い紙で押へてあつたでせう。その次ぎは一寸針金で止めるやうにしました。近頃は帽子をかぶせるやうにかぶせてあります。毎日のやうに改良を加へて行つてゐるんですよ。近頃は時計が一つ一つ螺旋をまかないで、あの振子がまはる時に自然にねぢがかゝるやうなものが流行つてゐるんですつてネ』

この婦人、アメリカの家庭の機械化を語つて倦むところを知らない。

「何といふ若さだ」

『私はシアトルの町に立つて、實際的で、精力主義で、樂天的な米國人を見て、十年の年月がこの國民を少しも老いさせてゐないのを痛感した。そこには競爭と個人企業が遮ぎられるところなく發達してゐる。

街を歩くと道の角の電柱に市の商賣別の案内がかゝつてゐる。市の事業としては、よく氣がきくと思ふと、それは個人會社が廣告をとつて金儲けの一手段と分つた。

自動車で通るとシアトル市經營の電力會社が、方々に途方もなく大きな廣告をしてゐる。市經營の會社が大きな廣告をする必要がどこにあらうと聞いてみると、それは私營の會社と大競爭をしてゐるのだとある。私の知つてゐる家でガスからボヤを起した。このことが翌日の新聞に出ると、直ぐ市の電力會社から勸誘員が來て『ガスはその通りお危ふございますから電氣をひいて下さい』と、廣告ビラの一だきもをいて行つた。

ホテルや藥屋などの人の集るところに切手を賣る機械がをいてある。中々アメリカの官廳は親切だなと感心すると、それは全然私營の會社の仕事で、五セント入れて四セントだけしか出ず、一割が會社及びその店の儲けになるのだ。日本なら切手を金儲けのだしにすることなどは、考へたゞけでもお灸でもすえられさうなことだ。

矢張り客の來るホテルその他の待合室に、立派な大理石の手紙や用紙入れが置いてある。大變立派なものだと思ふと、それは廣告會社の仕事で、その置物をそこに寄贈する代りに關係ある廣告をとつて儲けるのだ。

どこに行つても競爭だ。町は町と、個人は個人と、一つの産業は他の産業と、相競爭し、相打つ有樣が最も明らかに感ぜられる。そこに無用な犧牲はある。併しそこに又個人の發意と發明と改良がある。そこには無論、悲慘な落伍者がある。併し新しい社會で、チヤンスの幾らでも多いこの國では、スポーツマンが勝負事に負けたやうな氣易さで、またドン底から起きあがる精神を失はない。この大平原に鋤が入れつくさるまで、アメリカの物質的進歩が止るまで、この國民は恐らくは社會主義に耳を傾けまい。

それなら國民のテンポはこれほど早いのかといふと案外さうではない。日本では半ケ年ぐらゐで飽きられた『マットとジエッフ』や『ヂッグスとマギー』の漫畫が、二十數年來繼續されて、まだ依然全米國民の興味をつないでゐる。日本で一ケ年と持てなかつたクロッス・ウオーヅが、まだこの地方の新聞にのつて、それが相當に人氣を持つてゐる。テンポの早いのは銀座街頭のことで、アメリカのことではない。

アメリカの問題はどこにあるのか。『國民がみんな自動車の運轉手になつた』ところから來る。機械人の特長がアメリカの特長であり、その持つ缺點がアメリカの缺點である。テンポの早い半面をテンポの遲い方面とが、これからのアメリカを試むるであらう。私は今後の通信に、さうしたことを語りうると思ふ。

(昭和四・九・二〇)

世界怪奇實話　？

「女肉を料理する男」其二

牧逸馬

3

半封度の葡萄を紙袋に入れて、パツカアが差出すと、のつぽ(ロング)のリッツ——エリザベス・ストライド——が受取つた。夫婦か戀人のやうに、男がエリザベスの腕を取つて、二人は附近の社會黨倶樂部の方角へ歩き去つた。この界隈で有名な、そして自分もよく識つてゐる賣春婦が、斯うして何處からか見慣れぬ男を引張つて來て、これから其處らの露路の暗い隅へでも隱れやうとしてゐるのだから、パツカアが幾分下品な興味をもつてこの二人の背後を見送つたであらうことは想像し得る。この邊の下層賣春婦の客は、多く隣接工業地帶からの若い勞働者か、テムズの諸船渠に停泊中の船員なのだが、パツカアはその男を、さういふ部類の筋肉勞働者のいづれとも釋らなかつた。カマアシヤル街(ロウド)あたりの店員か下級事務員どころと踏んだ。彼らがパツカア果實店前のバアナナ街を眞直ぐに進んで、社會黨倶樂部——正式には、同黨東端區(イーストエンド)支部會館の看板を掲げてゐた——の在る一構内に消えてから、廿分經つか經たないうちに、その會館の窓下の中庭(コウト)で、このエリザベスが慘屍體となつて發見されたのである。××××を極めた屍體の傍らに、パツカアが葡萄を入れて賣つた紙袋と、葡萄の種と皮とが散亂してゐた。被害者は葡萄を食べながら犯人と談笑して、その商取引を終るや否、直ちに「斬り裂くジヤツク」の狂刃の下に、名の示す如く、兩脚の×を××まで「斬り裂」かれたものであることが容易に推測される。この屍體も、他の凡てのリツパア事件の被害者と同じ

に、×間に加へられた××狀態と其の暴虐は、文明人の思及だも許されない惨愕(テロリズム)の極點に達して、犯人が手を使用して××××したらしい××××諸器官が、鮮血の溜りと一緒に極彩色の畫面のやうに、兩大腿部に×まれて屍體の膝の邊りまで××に××してゐた。そしてそれらを玩弄した痕跡歴然たるものがあり、のみならず、××だけが巧みに××して持ち去つてあつたこと等、これらはすべて前回に記述した通りである。現場は同じバアナア街で、四四番地のパッカア果實店からは、石を投げて屆く距離にある。人鬼ジャックが實に野獸的に、非常識にまで豪膽であり、如何に無人の境を往くやうな猛勢を逞うしたかは、この、犯行の場所を選ぶ場合の彼の病的な無關心だけでも、遺憾なく窺はれやう。たゞ此の九月三十日の夜、パッカア方へ葡萄を買ひに立寄つたエリザベス・トライドの同伴者こそは、警視廳をはじめ全倫敦が、爪を拔き脱つた指で石を捌り下げても發見したいと、日夜焦慮してゐた殺人鬼その人であつたことは、何ら疑念の餘地がないのである。

本事件は、今日に到る迄警察當局と犯罪學者とに幾多の研究資料を呈與してゐる所謂「迷宮入り」である。從つて普通の探偵物若しくは犯罪實話のごとく、「如何にして犯人が逮捕されたか」に其の興味の重心を置くものではなく、逆に、「何うして逮捕されなかつたか」がその物語の中心點なのだ。

前回にも度々詳言したやうに、比較的小範圍の地域に、古來聯絡活動(タイムワアク)にかけては無比の稱ある倫敦警視廳(スカットランドヤアド)が、その刑事探偵の一騎當千をすぐつて、密林のやうに張り渡した警戒網である。それを隨時隨處に突破して、この幻怪な犯罪は當局を愚弄するやうに連續的に行はれるのだ。しかも犯人は、不敵にも堂々と宣戰布告的な態度を持續してゐる。おまけに、續出する被害者の身分まで嚴正に一定され、今また、かうして犯人の顏を實見した者さへ出て來たに係はらず、遂に捕縛の日を見ることなくして終つたのだ。警視廳(ヤアド)の手配が萬善を期したものであつたこと言ふまでもない。事實、當時の倫敦警視廳は、かの大ブラウンやフォルスタア氏を始め錚々たる腕利きが揃つてゐて、空前絶後と言つてもいゝ、一つの黄金時代だつたのである。然らば犯人ジャックが、それ程逃走潜行に妙を得た超人間であつたかと言ふに、事實は正反對で、只かれは、一個偉大なずぶの素人に過ぎなかつた。そして、その素人々々した粗削りな遣り口こそ、却つて其筋の苦勞人の手足を封じ込めた最大の眞因だつた觀がある。が、實際は、斯うなると凡てが運であり、一に機會の問題である。この場合は、その運と機會が、不合理にも終始反對側に微笑み續けたのだつた。

斯うしてバァナァ街の被害者エリザベス・ストライドは、不慮の死の廿分前に、無意識に犯人の顔をパッカアトといふ一人の人間に見せたといふ重要な役目を果したのだが、その爲にこのパッカアが後で散々猛烈な非難を一身に浴びなければならない事が起つた。

が、これは、パッカアにも攻撃されて仕方のない理由と責任がある。

十月二日といふから、バァナァ街事件のあつた九月三十日土曜日の夜から僅に二日しか經過してゐない、月曜日のことだ。

正午近くだつた。パッカアは、再び先夜の男が自分の果物店の前を通行しつゝあるのを認めたのだ。

白晝である。自分の證言が口火となつて、その男こそ「斬り裂くジャック」に相違ないと一層騷然と大緊張を來してゐる最中だ。殊に、あれ程彼の網膜に灼き附いた映像に見誤りがある筈はない。何よりも其の「異樣に長い黑の外套」が眼印しとなつて、パッカアは一眼でそれと判別した。今度は、正午に間もない頃だつたと自分でも言つてゐる。バァナァ街は細民區のイースト・エンドでも鳥渡した商店街の形態を備へてゐて、古風な狹い往來に織るやうな人通りが溢れてゐる。再び言ふ。白晝である。パッカアも何も怖がる事はない筈だ。何故彼は、男を見かけると同時に店を走り出て、大聲を揚げて近隣の者や通行人の助力を求め、兎に角その男を包圍して置いて警官の出張を待たなかつたか——次ぎは、この點に關して、パッカアが係官の前で陳述してゐる彼自身の言葉だ。

「私は、客のない時は、切符賣場式の店の窓口からボンヤリ戸外の雜沓を眺めてゐるのが常です。すると、早目に晝餉(ランチ)に出た近處の賣子などが笑ひさゞめいて通つてゐましたから、かれこれ十二時でしたらう。ふと見ると、あの男が、この間の晩と同じ服裝で店の直ぐ前の鋪道に差し掛つてゐる。彼奴が「斬裂人(リッパア)のジャック」であることは各新聞も指摘し、近處の者も皆さう言ひ合ひ、私も確信してゐた際ですから、私は、通行の群集に混つて歩いてゐる其の男を見かけると同時に、あ！　あいつだ！　と思ひました。先方も私を覺えてゐたらしく、ちらと此方を見ましたが、氣のせいか、それは何事か脅すやうな、實に氣味の惡い眼付きでした。正直に申しますと、私ははつと不意を打たれて、意氣地がないやうですが、餘り喫驚して何うにも足が動きませんでした。その上、丁度其の時私の他に店に人が居なかつたものですから、卽座に店を空けて飛び出す譯にも往かず、其の間にも奴は足早に通り過ぎて行きます。氣が氣でおり

ません。で、私は、直ぐ後から店の前を通り掛つた靴磨きの子供を低聲に呼び込んで、何も言はず、たゞ靜かにその男の後を尾けて何邊の家へ這入るかそつと見屆けるやうにと耳打ちしました。が、その男が振り返つたのです。そして私が、自分の方を見乍ら熱心に靴磨きに囁いてゐるのを見ると、突然彼奴は鐵砲玉のやうに駈け出して、ちようど其處へ疾走して來た電車へ飛び乘つて終ひました。私は、夢が覺めたやうに始めて氣が付いて、店から轉がり出て大聲に騷ぎ立てましたが、その時は既う電車は男を乘せた儘遠く町の向うに消え去つて居たのです。誠に殘念で何とも申譯ありませんが、これが事實であります。その男が一昨日の晩私が葡萄を賣つた客と同一人である事は斷じて間違ひありませぬ。」

要するにパッカアは、白晝、平明な日光と普通の街上群集の中で見たが故に、一層この人鬼に對して、瞬間言ひ樣のない絕大な恐怖を抱いたのである。この事は自分でも「正直のところ餘りびつくりして何うにも足が動かなかつた」と告白してゐる通り、この一種形容出來ない白晝の驚怖感が、刹那彼の神經を萎縮させて、咄嗟の判斷、敏速機宜の行動等を一切剝奪し、呆然として、彼を所謂不動金縛りの狀態に一時佇立せしめたのだと省察することが出來る。これは充分の理解と同情を寄せ得る心理で、何も格別パッカアが臆病な男だつたといふ證據にはならないが、それにしても、次ぎに「丁度その時店に自分の他、人が居なかつた」ため「店を明けて飛び出す譯にも往かなかつた」と言ふのは、事態の逼迫を認識せず、物の輕重を穿き違へた、横著と迄は往かなくても、些さか自己中心に過ぎて可成り滑稽な辯解であると斷ぜざるを得ない。倫敦中が「斬り裂くジャック」の就縛を熱望して爪立ちしてゐることは、パッカアは最も熟知してゐた筈の一人である。しかも彼は、九月三十日以來、犯人の顏を見た地上唯一の人間として、全英の新聞と話題の大立物になつてゐた矢先だ。その手前もある。不意のことで愕いたのは當然としても、もう少し其處に何とか氣の利いた應急策の施し樣があつた筈だと、刑事連をはじめ公衆は切齒扼腕して口惜しがつたが、やがてその忿懣は非難に變つて、翕然とパッカアの上に集まつた。無理もないが、なかには口惜しさの餘り非道い事を言ひ觸らすやつが出て來て、パッカアは「ジャック」の共犯者である。だから故意に逃がしたのか、さもなければ、思ふところあつて始めから出鱈目を言つてゐるのだことの、いや、實はパッカアこそはジャック其人に相違ないことのと、飛んでもない噂まで眞しやかに擴がつたりした。とにかく、これによつてパッカアは、それ程有力な容疑者――と言ふより百パーセ

ントに確定的な犯人――の身柄に偶然接近し得た、最初の、そして恐らくは最後の絶好機會を惠まれてゐながら、その怯懦と愚鈍から見すみすそれを逸し去つたのは、すくなくともこの場合、當然身を挺して警察と公安を援助す可き公共的義務精神の熱意と果敢さにおいて、幾分缺除するところあるを辭めない、つまりあまり望ましくない市民だといふので、何しろ英吉利のことだから色々とやかましい議論が起り、可哀さうに、果物屋の主人公はこのところすつかり男を下げてしまつた。が、結局、あとからは何を言つてもはじまらない。これらバッカアの失態に對する叱責のすべては、言はゞ溢れた牛乳の上に追加された無用の涙にしか過ぎなかつた。機會は、それが絶好のものであればある程、去る時は遠心的に遠く去るものである。そして、多くの場合、再び返つては來ない。「電車が犯人を乘せて町の向うに消えました」とはうまいことを言つた。この騷動中の騷動に頓着なく、犯行はその後も依然として間歇的に頻發したが、犯人そのものの影は、其の時消え去つて以來、いまだに消えたまんまなのだ。

はじめての驚天的犯罪の目的は、×××蒐集にあるといふ説が有力だつた。それも、迷信や宗教上の偏執に發してゐるものではなく、それかと言つて、單に特種の集物狂(コレクトマニア)の現象でもない。立派に營利を目的とする一つの冷靜な企業行爲だといふのだ。××を取つて賣る。××は賣れるのである。××や××生殖器が、或る方面に對して商品としての價額を持つてゐるとは、驚く可きことだが、事實である。しかし、この、「長い黑の外套」を着て闇黑に棲む妖怪は、心願のやうにその兇刃を街路の賣春婦にのみ限定して揮つたのだ。×××奪ふためなら何も賣春婦に限つたわけはなく、普通の婦人のはうがより健康な、より清潔な××を有つてゐて、商品としての目的にも適した筈だから、この××賣買說は、「斬り裂くジャック」の場合當てはまらないと言はなければならない。もつとも、未知の女に接近してこれを殺し、×××奪ふためには、この種の女が一番早道だから、それで自然、特に賣春婦を選んだやうな觀を呈したのだと言へば、一應說明にならないことはないが、ジャックは、たゞ相手の娼婦を殺しただけでは滿足せず、恰も報復の念逆溢して一寸(すん)刻みにしなければあきたらないかのやうに、生の去つた後の肉塊にさへ、その×××××××を盡して私かに快を行つてゐるのだ。殊に前掲ドルセット街ミラア・コウトの自室で慘殺されたケリイ一名ワッツの死屍のごときは、他の凡ての犯行が戶外で行はれたのと異り、これは被害者の寢室が

現場だつたので、怪物が、長く悠々と居殘つて其の變態癖を遺憾なく滿喫し、「血の饗宴」を樂しむだけの時間と四壁を持つたせいか、胸部××は何ら人體の××××てをらず、室内は、まるで××場の腑分室のやうな光景を呈してゐた。事實、この事件は、全犯行を通じて白熱的に最惡のものだつたが、報知を受取つて踏込んだ警官の一行は、その豫想外に慘鼻な場面と、鬱積する異臭に突如直面したゝめ、思はずみんな一個處にかたまつて嘔吐したといふ。その言語道斷な狼藉、徹底した無神經ぶりは、當時の新聞をして「恐怖の滿點」と叫ばしめ、「人性の完全な蹂躪」と啞然たらしめてゐる。

かうなると、もうこれは、自由自在に出沒横行する惡鬼(デイモン)の仕業だと人々は言ひ合つた。じつさい、これに匹敵する殘虐な犯例は、世界犯罪史を通じて鳥渡類を求め難いのだが、就中こゝに留意すべきことは、前々から言ふとほり、この犯人はホワイトチャペル附近の賣春婦だけを殺したといふ一事である。これこそ、この犯罪の動機を暗示する重要な特異性ではないだらうか。そこに、彼の「言葉」といつたやうなものを讀み取ることは出來ないだらうか。じつに犯人ジャックは、この特徴ある犯行をもつて一つの意思を發表し、世間に話しかけたのだ。かれの行爲は、何事か大聲に主張してゐる。この「何事」を檢討するところに、全リッパァ事件の謎を解く合鍵が潜んでゐると思ふ。とにかく、「ジャック・ゼ・リッパァ」なる人物は、何かの理由から、東端區(イーストエンド)の賣春婦を、引いては倫敦全體を、その人心を、社會を、震撼し戰慄させるのが目的だつたに相違ない。

初冬の倫敦には、煤煙を交へた霧の日がしきりにつゞく。明けても暮れても、人は斬裂人(リッパァ)の噂で持ち切りだつた。すると、話しはちよつと後退するが、バアナァ街事件のあつた翌早朝のことだ。

4

刑事部搜査課員を總動員して、フォルスタァ氏が率ゐて現場に出張したあと、聯絡を取るために、大ブラウンが留守師團長格で警視廳に居殘つてゐたところへ、若い女があわたゞしく飛び込んで來た。

ブラウン氏は、現場のフォルスタァ氏から刻々掛つて來る報告電話を受理するのに忙しかつたが、女が何かリッパァ事件に關することを言ひに來たと聞いて、直ちに私室へ招じ入れて面接した。

エセル・ライオンスと言つて、その服裝態度からブラウンが一

眼で鑑別した通り、彼女は東端區を縄張りにする辻君の一人だつた。非道く昻奮してゐて、ブラウン氏を見ると、「何年振りかに父親にでも會つたやうに」いきなり抱き付かうとした。ブラウンは、職掌柄かういふ激情的な巷の女を扱ひ慣れてゐるので、直ぐに得意の下町調（カクネイ）で砕けて出ながら、ライオンスの口からその話しといふのを引き出した。

斷はつて置くが、前夜犯人を見たといふバツカアの證言は、このとき既に、バアナァ街に行つてゐるフォルスタアからの電話で、ブラウンには委細通じてゐたが、朝早くだから、まだ新聞に發表されない前で、一般には何ら知れてゐなかつたのだ。

この事を頭に置いて、ライオンスの言ふところを聞くと、かうである。

昨夜また、バアナァ街に斬裂人（リツパア）が現れたと聞いて、ライオンスは思ひ切つて自分の經驗を述べに出頭したのだが、それによると、彼女は大變な命拾ひをしてゐる。

數日前の深夜、例によつて相手を探してホワイトチヤペルのピンチン街を歩いてゐると、向うから來かゝつた一人の男が、識合ひらしく帽子に手をかけて挨拶した。これは、男のはうから街上の賣春婦を呼び停める場合の、一つのカムフラアジュ的常法である。ピンチン街は、猶太人の小商人の住宅などが並んでゐて、入口が拱門（アウチ）のやうになつてゐる家が多い。この頃の倫敦だから相變らず霧がかゝつてはゐたが、霧の奥に月のある晩だつたので、二人は、その一つのアウチの下に人眼を避けて立話しゝた。

『何處か君の知つてる靜かなところへ伴れてつて呉れないか。』

男はかう言つたといふ。言ひながら洋袴のポケットを搖すぶつて、金を鳴らして聞かせた。この通り金は持つてゐるといふのだ。

こゝでライオンスは、この男の語調には多分の亞米利加訛りがあつたと證言してゐる。各國人を相手にする賣笑婦の言だから、この點は比較的信を置ける筈だが、ライオンスは、確かにその男は「アメリカ人か、さもなければ長く亞米利加にゐたことのある者」に相違ないと、ブラウン氏の前で斷言した。

そして、その交渉を進めてゐる間も、男は、人の來るのを恐れるやうに、絶えず首を動かして、往來の左右に眼を配つてゐた。リツパア事件で、この邊の賣春婦は顫へ上つてゐる最中である。ほんとなら、ライオンスも、かうして夜更けの危險に身を曝さずに家に引込んでゐたいのだが、それでは稼業が上つたりだから怖々は出て來たのだ。しかし、今その相手の樣子を見てゐるうちに、第六感とでもいふべきものが、しきりにライオンスに警告を發し出した。で、尚ほ注意すると、男は、人が通ると必ず暗い方を向いて、顔を見られない用心を忘れない。「ジャ

ツク」を思ひ合はせて加速度的恐怖に捉はれたライオンスが、何とか口實を作つて同行を斷らうと忙しく考へを廻らしてゐるところへ、運よく相識の同業の女が三人伴れで通り掛つた。ライオンスは逃げるやうに男を離れて、その群に加はつて立ち去つたといふのだ。

ブラウン氏は、パツカアの見た人相を隱しておいて、何んな男だつたとライオンスに訊いてみた。

『當方にも色々判つてゐるが、五十位の、背の高い、瘠せた男だらう？　鬚のある――。』

女の心證を確めるために、わざと反對に鎌をかけた。

『いゝえ。三十そこ〳〵の若い人です。身長（せい）は普通で、瘦せてはゐません。がつしりした身體付きでした。いゝえ、鬚はありません。』

パツカアの證言と一致するものがある。

『外套は着てゐなかつたらうな。』

『着てゐました。變に裾の長い、黒い外套でした。』

ブラウン氏は心中に雀躍りした。この時から、「長い黒の外套」が祕かに捜査の焦點となつたのだが、この「外套」は、ライオンスに依れば米國訛りの口を利くといふ。

あのドルセツト街の陋屋に於けるケリィ別名ワツツ殺しの場合のやうな徹底した狂暴振りは、野獸か狂者でない限り、如何に殘忍な、無神經な、血に餓えた人間であつても、人の皮を被つてゐる以上到底示し得ないところと思考される。茲において「斬り裂くジャック」は精神病者に相違ないとの見込みが、まづ必然的に立てられたのだつた。卽ち、病院か家庭の檻禁室を逃亡した狂人か、さもなければ、全快といふ誤診の下に退院を許された者、若しくは、實際一時全快して醫者を離れ、その後再發したものの所業であらうといふのだ。これは實に、都會に猛獸が放たれてゐるやうな、戰慄す可き想像だが、かういふ、早まつて退院を許された狂人の犯罪は、その例に乏しくない。が、これらは要するに素人の臆測で、最初のリツパア事件突發と同時に、警察は早くもこの點に着眼し、全英は勿論、廣く歐洲大陸から南北米にまで照會の電報を飛ばして、精神病院脫走者の有無、退院した狂暴性患者の其後の動勢等を集めたのだつたが、その後たつた一つ、前回に掲げた莫斯科からの通知があつただけで、何ら眼星い手懸りは獲られなかつたのである。と言つて、日夜種々雜多な人間が、滿潮時の大河口のやうに渦を卷き、流れを爭ふ世界最大の貧民窟だ。正確な人口すら解つてゐないのだから、何時どんな「猛獸」が潛行して來てゐないとは限らない。しかし「斬裂人（リツパア）ジャック」が狂人だつたとしたら、この犯罪はもつと氣まぐれであり、より非組織的でなけれ

ばならない。それに、すこしでも精神異常者なら、例へ犯跡は巧妙に晦ましても、何かの事で何時かは尻尾を摑ませる筈である。勿論一口に精神病と言つても、幾多の類型と階梯があるが、種々な場合に現れた事實を総合すると、何うもこのジャックは、狂人どころか普通人、或ひはそれ以上の明識あるものとしか思へないのだ。また假りに精神病者としても、彼は巧みにその病的特徴を隱してゐて、學術的に、果して如何なる種類と程度の患者と認めていゝのか、この點に就いては專門家の意見が區々に別れて、遂に纏まるところを知らなかつた。變態性慾者中の一種の色情倒錯狂で、且つ癲癇性激怒の發作を併有するものに相違ないと、一部の權威ある犯罪學者によつて主張され、動機の説明としては專らこの説が行はれた。精神病理學者として令名あるフォウブス・ウィンスロウ博士は、往訪の新聞記者ガイ・ロウガン氏に語つて、この殺人者は、個々のエロテイックな發作的狂亂の場合以外、平常は極く普通の、穩厚な一市民であらうとの意見を述べてゐる。

「彼は、一つの犯行を濟まして歸宅して、朝になつて、その一時的激情から覺めると、自分が前夜何をしたか、すこしも記憶してゐないに相違ない。」

ウィンスロウ博士は斯う言つた。

が、幾ら著名な專門家の言でも、事實から觀て、これは妙なからず變だと言はなければならない。成程、犯人は一事狂者で、或る一つの迷執に驅られてこの犯行を重ねてゐるといふことは肯定し得るが、しかし、ウィンスロウ博士が想定してゐるやうな、意力の加はらない、言はゞ夢遊病者の如き發作的錯亂者が、明白なる殺人の目的の下に、兇器を隱し持つて夜の巷を逍遙ふだらうか。事實は、それ許りでなく、「ジャック」の行動の凡ては、彼の犯罪が初めから緻密な計畫に成るものであることを餘す所なく明示してゐる。前回に擧げた中央新聞社に舞ひ込んだ、人血で書かれた"Jack the Ripper"の署名ある葉書と手紙を、何者かの惡戯でなく、確かに犯人の書いたものと認めれば——實際また、事件が進むに從ひ、この通信は眞犯人から出たものと信ぜざるを得ない狀勢になつて來てゐた。それ程、そこに書かれた彼の「宣言」は着々忠實な履行に移されて現れて來たから——彼は、自分の求める賣春婦の犧牲者を何街で發見することが出來るか其の適確な「穴」を知り、現實に如何にして接近するか其の「商賣の約束」に通じ、しかも、犯行毎にあれ程見事に警戒線を潜つて消え失せてゐるのだ。こゝで再び問題になるのが、例の彼の「長い黒い外套」である。リッパア事件は、鮮血の颶風のやうに東端區を中心に倫敦全市を席捲した。ジャックは、魔法の外套を着た通り魔のやうに、暗黑から闇黑へと露路横町を縫つて其の跳躍を擅にした。彼の去就の前

には、流石の倫敦警視廳(スカットランド・ヤアド)も全然無力の觀さへあつた。斯うなると、もうこれは、人事を超越した自然現象のやうに思はれて、初めのうちこそ恐怖に戰いて其筋の鞭撻を怠らなかつた倫敦市民も、日を經るに從つて慣れつこになり、他人事のやうに感じ出し、そこはユウマア好きな英國人のことだから、何時しか新聞雜誌の漫畫漫文に、寄席のレヴユウに、舞踏會の假裝に、このジャック・ゼ・リッパアが大持て大流行といふ呑氣至極な奇觀を呈するに到つた。するとまた、この人獸をかういふ風に人氣の焦點に祭り上げるのは風教に大害あり、第一、不謹愼極まるとあつて反對運動が起るやら、兎に角、肝心の犯罪捜査を外れた傍道に種々の挿話を生んだものだが、この、漫畫に出て來る「ジャック」、舞臺や假裝舞踏會の彼の扮裝は、必ずその、あまりにも有名な「長い黑の外套」を着ることに決まつてゐた。それ程、この犯人とは切り離すことの出來ない外套である。彼はこれを、犯行の際は一時脱いで傍らへ置き、「手術」を濟ますと同時に血だらけの着衣の上からこの外套を着て、それで血を隱し、行人の注意を逃れて平然と往來を歩いて歸宅したものであらうと想像するに難くない。さもなくて、血を浴びた儘の姿で、例へ深夜にしろ、何んな短距離にしろ、道中の出來るわけがないからである。そして、この目的のためには、それは確かに「黑く」且つ「長い」はうが便利だつたに相違ない。東端區(イーストエンド)は眠らない町である。男を探す夜鷹と、夜鷹をさがす男とが夜もすがらの通行人だ。場末とは言へ、決して淋しい個處ではない。それに其の時は、每夜戒嚴令のやうな大規模の非常線が張り詰められて、連日の捜査に疲れた警官も倦まず撓まず必死の努力を繼續した。不審訊問は誰かれの差別なく投げられた。些少でも疑はしい者は容赦なく拘引された。その網に引つ掛つただけでも夥しい人數と言はれてゐる。然るに、その間を、たつた今人を殺し、屍體を呵(さいな)み、生血と遊んで、全身繪具箱から這ひ出したやうになつてゐる筈の男だけが、この密網の目を洩れて只の一度も誰何されなかつたのだ。否、誰何されたかも知れないが、追及すべく充分怪しいと白眼まれなかつたのだ。この點が、そして此の一點が、全リッパア事件の神祕の王冠と言はれてゐる。前後を通じて數千數百の人間が、街上に停止を命じられ、痛烈な質問を浴びせられ、身分證明を求められ、即刻身體檢査を受けてゐるのに——眼ざす唯一人の人間だけ遂にこの法の觸手に觸れることなくして終つたとは、何といふ皮肉であらう!

5

「斬裂人(リッパア)のジャック」は、何かの事でホワイトチャペル界隈の賣春婦全部を呪ひ、相手選ばずその殲滅を企てたのだといふの

が、いま一般に信じられてゐるジャックの目的である。憎惡と怨恨に燃えて、その復讐慾を滿たす爲に、かれはあれ程血に飽くるところを知らなかつたといふのだ。その根本の原因は何か？今となつては只、其處に單なる推定が許されるに過ぎない。ジャックは、この附近の賣春婦から惡性の梅毒でも感染し、それが彼の人生を泥土に突き入れたのであらう。すくなくとも、彼はさう感じて、その自暴自棄の憤怒――可成り不合理な――が彼を驅つて盲目的に、そして猪進的に執念の刄を揮はせ、この酷薄な報復手段を採らしめたに相違あるまい。病毒の媒體として最も恐る可き東端區(イースト・エンド)――因みに統計に依れば英國は世界第一の花柳病國である――の哀れな娼婦の一人が、肉體的に、また精神的に、ジャックの一生を滅茶々々にしたのだ。惡疾に侵されたかれの頭腦に於て、一人の罪は全般が脊負ふ可きものといふ不當の論理が、極く當然に醱酵し生長したかも知れない。

その間も、倫敦警視廳へは海外からの情報がしつきりなしに達してゐた。

この少し以前、北米テキサス州で、冬から早春にかけて、リッパア事件に酷似した犯罪が連續的に行はれたことがあつた。尤も、倫敦のほど野性に徹した犯行ではなかつたが、同じやうな××の解剖が屍體に加へてあつた。この被害者は、限定的に、同地方に特有の黑人の賣笑婦だつた。犯人は外國生れの若い猶太人であると言はれてゐたが、勿論自餘のことは一切不明で、矢張り捕まつてゐない。倫敦でリッパア事件が高潮に達した時、テキサス州の有力新聞アトランタ・カンステチユウション紙は、この黑婦虐殺事件の顚末を細大掲げて兩者の相似點を指摘し、ジャック・ゼ・リッパアは、このテキサスの犯人が渡英して再活躍を始めたに相違ないと論じたいが、その當否は兎に角、倫敦でリッパア騷動が終塞すると間もなく、その翌年の初夏、同じやうな惡鬼的横行が今度はマナガ市の心臟を寒からしめてゐる。

マナガ市は、中央亞米利加ニカラガ共和國の首府である。同市に事件が發生すると同時に、倫敦警視廳は早速同市警察に照會して該事件に關する委細の報告を受取つたが、それに依ると、書類の上では、犯罪の狀況、××「斬り裂」き方、犯人を圍る神祕の密度等、すべて「斬裂人(リッパア)ジャック」の手口と符節を合するが如きものがあつて、こゝに當然、ジャックは倫敦に於ける最後の犯行後、大西洋を渡つて中米に現れたのだといふ說を生じた。これは一見附會の觀あるが、再考すれば大いに有りさうな事である。果してニカラガの犯人が倫敦の屠殺者ジャックであつたか何うか――それは、ニカラガでも犯人は捕まつてゐないのだから、肯定するも否定するも、要するに純粹の想像を一歩も出ない。犯罪も斯うまで不思議性を帶びて來ると、そ

こに色んな無稽の挿話が附隨して來るのは當然で、殊に、犯罪者には、愈々となると自己を英雄化して飾らうとする妙な共通心理があるものとみえる。それから當分、ほかの事件で死刑になるやつが、決まつて公式のやうに「この自分こそジャックである」と大見得の告白をするのが續出して、當局を悩ました。初めのうちは公衆も沸いたが、吾もわれもと續々流行のやうに、さう何人も自稱ジャックが現れるに及んで、又かともう誰も眞面目に相手にしなくなつてゐる。

たゞ、テキサス犯人の若い猶太人がジャックではなかつたかといふ說だけは、いまだにリッパア事件の研究者の間に相當重く觀られてゐる。ライオンスも、その夜の男の言葉に米國訛りを感得したと主張してゐるし、あの、中央新聞社(セントラル・ニュウス)へ宛てた手紙と葉書の冒頭語、Dear Boss なる文句は、明白に亞米利加の俗語で、英國では絕對に使はないと言つてゐる。が、例のパッカアだけは、葡萄を賣つた客の言語にも樣子にも、何ら米國を暗示するものは感じられなかつたと言つてゐるが、彼の應對はほんの瞬時であり、それに、聲や語調は意識して變裝(ヂスガイズ)することも出來るから、この點パッカァの證言は餘り當てにならない。

それに、もう一つ、これは後から發表されたのだが、ハンベリイ街廿九番事件の時である。被害者アニイ・チャプマンが、格鬪の際犯人の着衣から捥ぎ取つたのだらう。屍體の眞下、脊中の個處に、一個の釦鈕が落ちてゐた。裏に、H&Qといふ小さな商標が押字してあつた。この控鈕の研究は、警視廳の依賴を受けて倫敦商工會議所が引請けた。そして、日ならずして、H&Qの釦鈕は、米國市伽古のヘンドリックス・エンド・クエンティン會社の製品であることが判明した。この唯一の、そして表面漠として雲を摑むやうな手懸り——殆ど手懸りとも呼び難い——を賴りに、尤も他にも何かあつたのかも知れないが、卽日アンドルウス警部が警視廳を飛び出して、その儘サザンプトンから紐育行きの船に投じてゐる。其筋の努力が如何に涙ぐましいものであつたかは、この一事でも知れやう。が、この釦鈕の調査も何らの結果を齎さなかつたとみえて、アンドルウス氏は、何時歸つたともなく、間もなく空手で倫敦に歸つて來てゐた。

數年後、マナガ市の精神病院で客死した、嘗て相當知名の外科醫だつた英國人の一狂人が、その死の床に於て、リッパア事件とニカラガ事件の眞犯人であると告白したといふ話しが傳はつて來て、忘れかけてゐた世間を、もう一度「ジャック」の名で騷がせたことがあるが、勿論完全な出鱈目に過ぎない。尠くとも當局は一笑に附した。第一、「一狂人の告白」といふのからして、何と、愉快なナンセンスではないか。

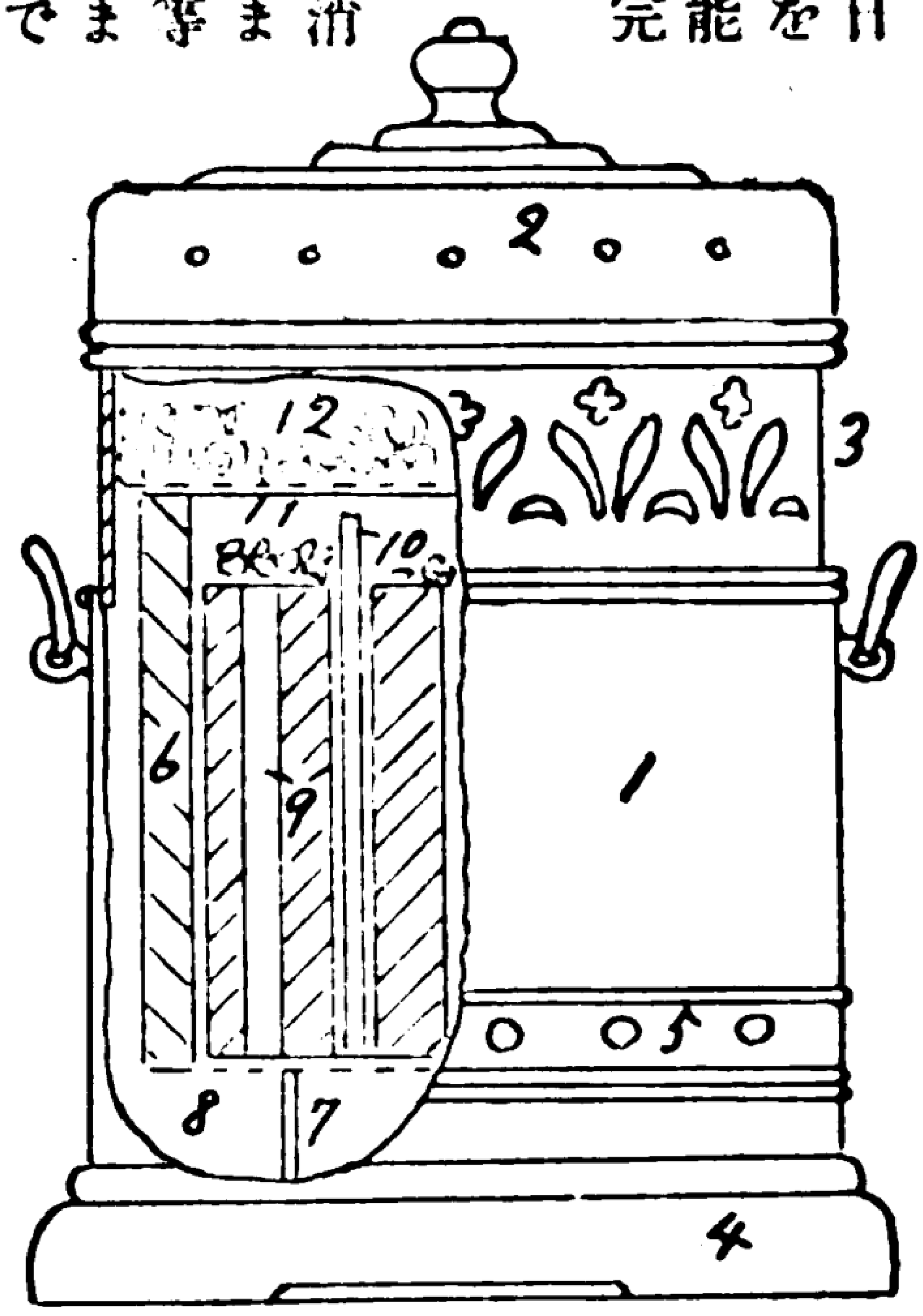
中央公論社代理部案内

東京市丸の内ビルディング五八八區
中央公論社代理部
振替東京七八四七五番
電話丸の内(23)二〇六番

◇代理部への御註文はすべて前金に限ります。御送金にはなるべく一番安全な振替をお利用下さい。
◇御註文の際は郵税をお忘れなく爲替でお送金の節は必ず書留郵便に願ひます。
◇切手代用は拾錢以下の郵便切手で一割増の事。その他は一切お受け致しません。

伊藤式家庭ストーブ

伊藤式家庭ストーブの特徴は、(イ)外觀が從來のストーブの如く、單に外來品の直譯的でなく最初から日本間に置くのに調和よく製作され(ロ)從來の習慣を破つて輕金屬を用ひ、熱の傳導の上に鐵鑄の四倍の能率を示し(ハ)簡單で最も合理的な内部構造による完全燃燒は少からぬ燃料の經濟となり、(ニ)上部の充塡物の物理・化學作用によつて、炭酸瓦斯及共に發生する人體に最も恐るべき一酸化炭素を(煉炭を燃料とする場合は、爲に發生する亞硫酸瓦斯も共に變化消滅し、煉炭特有の臭氣もなくなります。)絶滅してしまひ、加ふるに持ち運びに輕く、使用法が簡單である等凡ゆる家庭ストーブとしての一切の要求を充して居ります。而も熱の調節が自在で、隨つて始めから終りまで一定の温度を得る事が出來、經濟的な點では六寸の煉炭一個(時價十六・七錢)及少量の木炭で、三十五時間乃至五十時間保ちます。



本年度特價 九圓八十錢
荷造費三十錢 送料先拂

古書賣買のお取次

主として地方在住の愛書家諸氏の御便宜を計る目的で代理部の中に「古書案内係」を特設してありますから、どうぞ御遠慮なくどしどし御用命下さい。

古本御購入のお取次はもとより、御賣却希望の古本古文書、和本、錦繪等價格不明の御不用品の評價、賣却のお取次を致します。お問合せだけで御返事致しかねる樣な種類のものならば、一應御送附下されば早速市内一流の專門家に囑して正確迅速に評價して、お返事を差上げます。

規定

A、御紹介には往復端書又は返信料を添附して下さい。
B、御註文はなるべく振替で、前金御送附を願ひます。
C、送品は入金後一週間位と御承知下さい。但古本の事ですから、御紹介後入金までの間に現品の移動があつた時には、再び探し出す爲に相當の時日を要する場合があります。隨つて價格等も時には變動する場合が生ずる事も豫め御承知おきを願ひます。
D、評價御希望の書籍は、書名、著者、發行年月日、發行所、内容の程度等正確にお書添へを願ひます。但古文書、錦繪等の如きは、現品を拜見の上ならでは評價致し兼ねる場合がありますからその旨お含みおき下さい。返送の費用は實費を申受けます。
E、御紹介の宛名は、「中央公論社代理部古書案内係」と明記して下さい。

スプリングコート兼用

新バーバリーレインコート

新バーバリーレインコートは、從來のものに一層の改良を加へた本年の新製品です。

純國産品の故に多額の運賃と少からぬ關税の負擔が無いだけ、それだけ品質にも仕立にも非常に吟味されたものを、特に本誌愛讀者諸氏のために、昨年より一層低廉な特價でお頒ち致します。

これならば晴天の日にはスプリングコートともなり、天候の危ぶまれる日の外出にも安心して着て出られます。



色は茶系統の最も斬新な流行色を選び、寸法は襟下鯨二尺六寸以上約二寸毎に取揃へてあります。

定價 一着 十六圓

尚從來バーバリーレインコートと共にお取次致しました羽二重の純良レインコートも、左の特價でお頒け致します。

折疊んでサックに入れ、又、ポケットに入る輕便さで、色はネズミ、茶、テツ系統の最も斬新なもののみです。

特價 一着 十一圓

送料 東京市内十二錢 内地二十七錢 領土五十五錢

經濟と實用を兼ねた

替ズボン

地方在住の方々のために、最も經濟的實用的な替ズボンを左記の特價で提供致します。

上等黒セル	五圓五十五錢
優等黒絹セル(甲斐絹膝裏附)	六圓七十錢
霜降・黒メルトン	四圓八十錢
上等ウーステッド	五圓六十五錢
黒サージ	四圓八十錢
上等黒サージ(甲斐絹膝裏附)	六圓八十五錢
優等黒サージ(甲斐絹膝裏附)	七圓八十錢

寸法	腹廻 鯨	股下
大	約二・五尺	約一・九尺
中	二・三尺	一・八尺
小	二・二尺	一・七尺

御註文には必ず大中小の御指定を願ひます。

送料 東京市内十二錢 内地十八錢 領土四十五錢

新製ニンニク錠

浩壯

ニンニクの效力は世人のよく知る所、然しその臭氣は十人が九人まで嫌やがります。

效力は認めるが臭むのは擬や、服み度いが服めないと云ふ人はこのニンニク錠浩壯をお用ひ下さい。ニンニク特有の臭氣を無くした所が本劑の特徴で、服んだ後も何等口中に臭氣を殘しません。

原料にはニンニクの原質そのまゝに、數種の滋養劑を配し、肺結核、肋膜炎、氣管支加答兒、喘息、胃腸病、神經衰弱、貧血症、腎臟病による浮腫、寄生蟲の驅除等には驚く程の效力を持つてをります。

定價 十日分二圓 三十五日分五圓

送料 東京市内十二錢 内地十八錢 領土四十五錢

腳氣特效

純良胚子

腳氣はヴィタミンBの體内缺乏によつて起るもので、隨つて迅速にヴィタミンBを補給する事によつて治療も豫防も意のまゝであると云ふのが今日の學說とされてをり、米の胚子の中には多量のヴィタミンBを含んでゐると云はれながら、從來純良な胚子を手に入れる事が出來なかつたために、非常に不味い米糠を服用するのでなければ、高價な製劑に頼るより外に道がない狀態に鑑み、特別な方法で、胚子ばかりを集める事に成功致しました。

腳氣豫防には晒布の袋に入れて毎日の飯と共に炊き込めばよく、腳氣に罹つた場合は、一日十匁以上をなるべく少量の水に浸し、其煎汁を一日數回食間に飲めば、大抵二週間位で全治致します。

定價 半ポンド入 六十錢

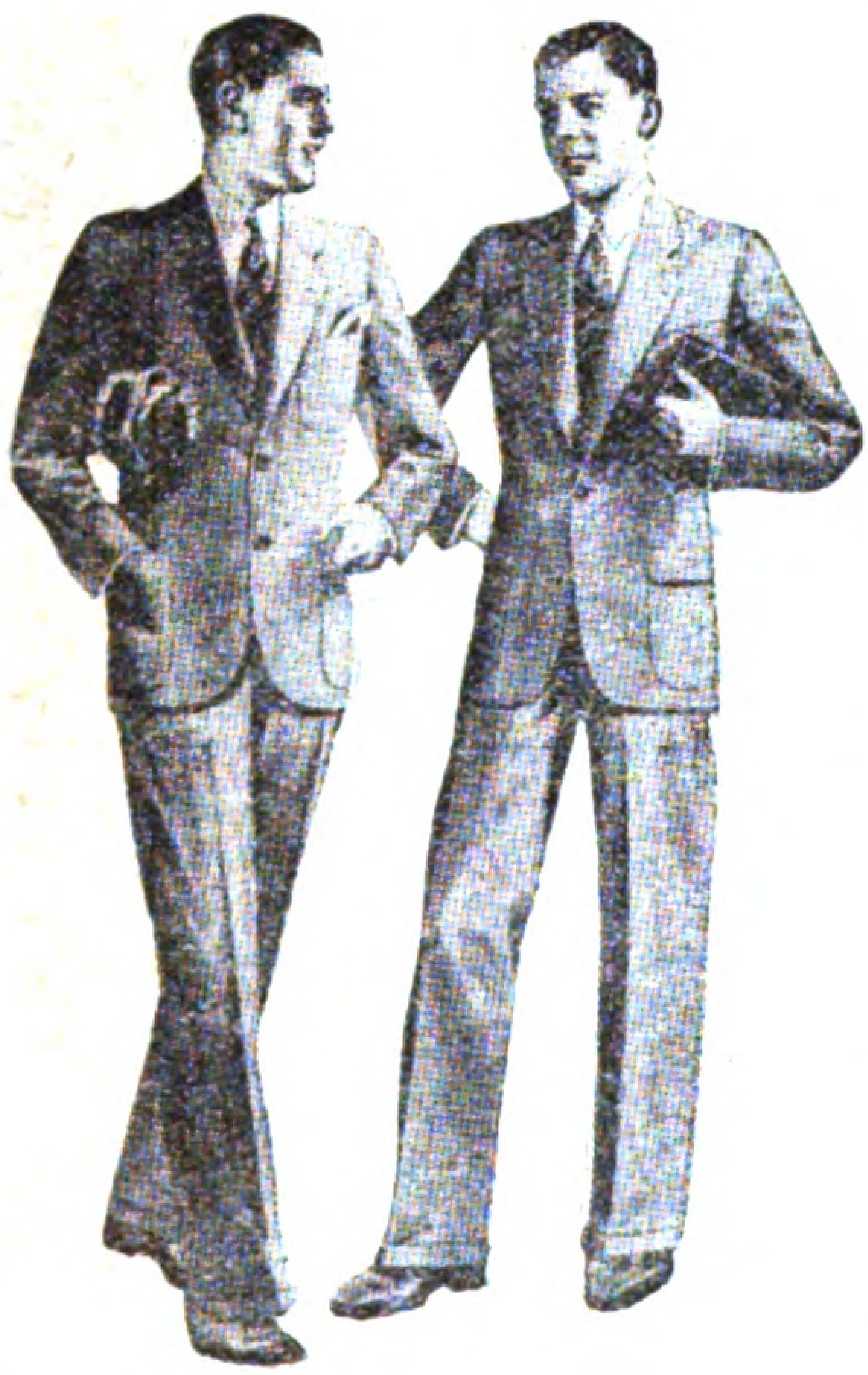
送料 東京市内十二錢 内地十八錢 領土四十五錢

洋服の新調は代理部へ

◇本誌愛讀者諸彦の御便宜のために、左記の特價で洋服の御註文をお受け致します。

◇型は常に最も紳士的な正しい流行を選び、生地の選擇にも必ず品質本意を旨と致しますから、必つと御滿足が得られます

◇見本請求ニハ一種毎ニ郵便切手十錢添附ノ事。



背廣服

A	三十八圓
B	四十五圓
C	五十五圓

オーバー

D	六十圓
E	七十圓



洋服の生地見本は、御承知の通り種類が多く全部取揃へることは經費もかゝり、それに伴ふ不便も少くありませんから、必ずお希望の品例へば「Aノ背廣」「Bノオーバ」と云ふ風にお指定の上、お年令をお申聞け願ひます。

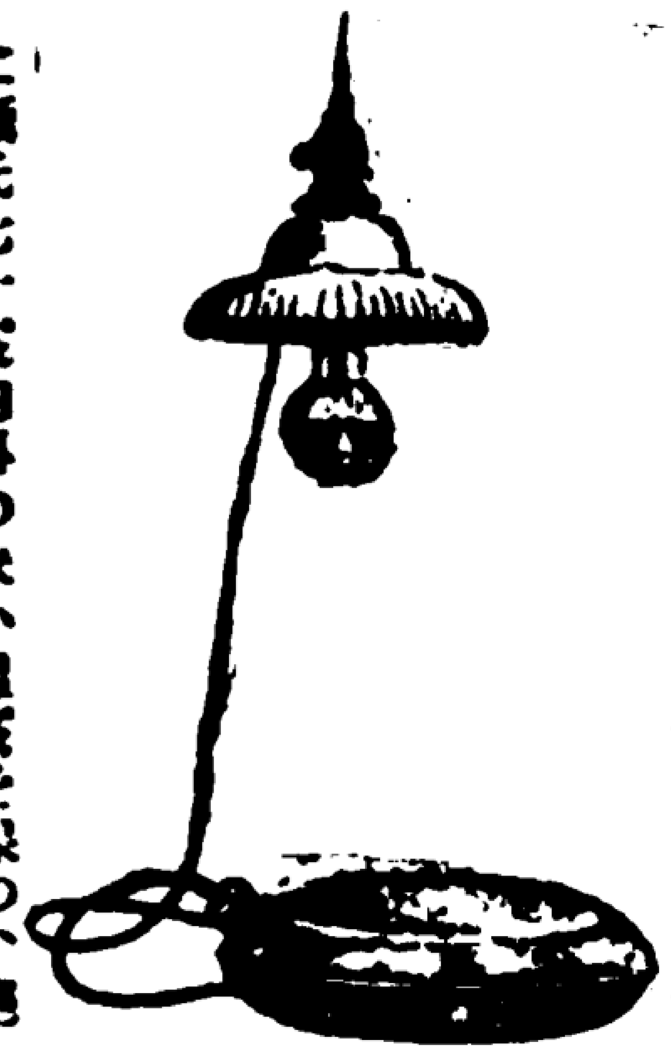
代理部では、その種類のお年令向きなものをお見立てして、明確な圖入りの寸法書を添へてお送り致しますから、これによつて各部分の御寸法をお送りになれば、約二週間で居ながらにして、シツクリとお體に合つた服がお手に入る譯けでございます。

中央公論社代理部

振替東京七八四七五番

最も安全な

電氣湯たんぽ



電氣アンカや電氣フトンのやうに、發火する恐れは絶對に無く、普通の湯たんぽのやうに數時間毎に湯を取換へる手數も要らず、熱湯を用ふる危險もなく、常に攝氏七十度内外の快い温度を保つ、絶對安全、使用法簡便、經濟な、養老に保育に、ぜひ家庭に備へねばならぬ重寶な品です。

定價（二燈用ソケット及びカバーつき）四圓二十錢
送料　東京市内十二錢　内地四十五錢　領土七十五錢

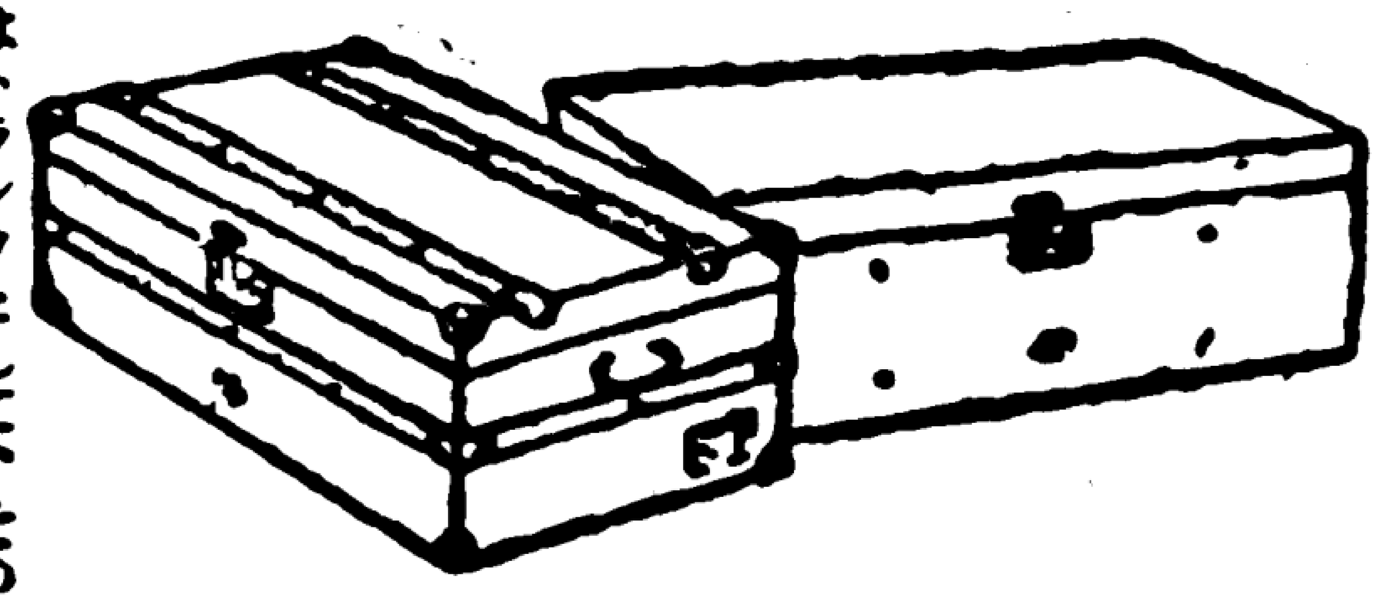
洋服カバー

防水防塵防蟲の效用を具備した澁紙製品で而も洗濯が出來布よりも丈夫です。

改正定價　大一圓　小六十錢
送料　東京市内十二錢　内地十八錢　領土四十五錢

昭和文庫

厚い鐵板張り、タテ二尺七寸、幅一尺二寸、厚サ八寸五分の堅牢な容器で、内部の四方を丈夫な木板で圍み、中にナフタリン樟腦入れを備へ、外面には漆の燒附けを施して立派に仕上げ、絶對に外氣の侵入を防ぐ様工夫された、毛織物又は貴重書類等をしまつておくのに必須な品です。



特製はトランクとして、そのまゝ取り出す事が出來、裝飾や支那鞄より遙かに便利です。

定價　上製九圓八十錢　並製六圓八十錢
送料　東京市内二十錢　地方は運賃先拂
荷造費三十錢

最新艶出布

このフレッシユマン、ダスト、アブソーバーは、特殊の毛織物に機械的工程と化學的處理とを施したものでありますから、器物固有の光色を損ずる事は決してありません。

この布は、從來の艶ふきんと異り、埃りを吸ひ取りしかも美しい艶を出す不思議な作用を有して居ります。

塗器類、殊に蒔繪の器具、ピアノ、オルガン、卓子、自動車等用途は中々廣く蓄音器のレコードを、この布で拭へばレコードの壽命を永くし、音は非常に美しくなります。

定價（金屬製容器入）　一圓
送料　東京市内十二錢　内地十八錢　領土四十五錢

スマドレ ヘヤトニック

このスマドレヘヤトニックは、米國で唯一の日本向の化粧料を出してゐるスマドレ會社の製品でニユーヨーク、ロンドン、パリー在住の日本人間に愛用されてゐるものです。

洗髮後や朝夕に數滴を毛髮の根元に振りかけて、指頭で輕くマツサージしておけば、フケを除り拔毛を止める事は妙であとには得も云はれぬ芳香が永く殘り、使用するにつれて、毛髮は絹の様に軟くなり、日々艶麗の美を增します。

定價　婦人用・紳士用・特大瓶各二圓五十錢
送料　東京市内十二錢　内地十八錢　領土四十五錢

スマドレ シャンプー

理想的洗髮液スマドレ、シャンプーは短時間に地肌からキレイに汚れを落すことが出來、同時にフケを除り爽かな潤のある美しい髮にする一方、ちゞれ毛や癖毛を直す事は全く不思議な程で、スマドレヘヤトニックと共に、ニユーヨーク、ロンドン、パリー等の日本人に愛用されてゐる世界特許品です。

日々忙しい社會に立つて、男子の髮を整へる事が、重要な禮儀の中に數へられる今日、僅かな時間に之を用ひて、何時もさつぱりとした髮で、自他共に氣持ち良く會談する事をおすゝめ致します。

定價　特大瓶　二圓
送料　東京市内十二錢　内地十八錢　領土四十五錢

梅と鈴蘭の香水

本社代理部特製の四季の香水の中、春の梅及夏の鈴蘭の二種は、如何にも香りのすがすがとした紳士用には最もふさはしいものです。

此の外に秋のヘクオトロープ冬のシクラメンを加へて四季何れも常に用意してありますから、お好みのまゝにお註文下さい。

定價（春、夏、秋、冬）各　二圓
（四季組合せ、又八四個）七圓五十錢
送料　東京市内十二錢　内地十八錢　領土四十五錢

オプチサナ

高名製品の偉力は世評の認める所ですが特にこのオプチサナはせきを止めるに著しく效果があります。甘くておいしいので百日ぜきの子供も喜んで呑み、一週間服用すれば效目があらはれ、殊にぜんそくのせき止めには喜ばれてゐます。

御所々から醫家の纏つた註文がありましたが、今後十個以上纏つた御註文には多少の割引をいたします。

定價　二圓　送料東京市内十二錢　内地十八錢　領土四十五錢

アテナ萬年筆

使ひ出せば、間もなく執筆者の手と雷風になじみ、使へば使ふ程いよいよ書きよくなると云はれ、舶來品に勝る國產第一の優秀品です。

定價　三圓五十錢　四圓　四圓五十錢
（同轉吸入式）　三圓五十錢

送料　內地　十八錢　領土　四十五錢

誰にも愉快な

野球競技盤

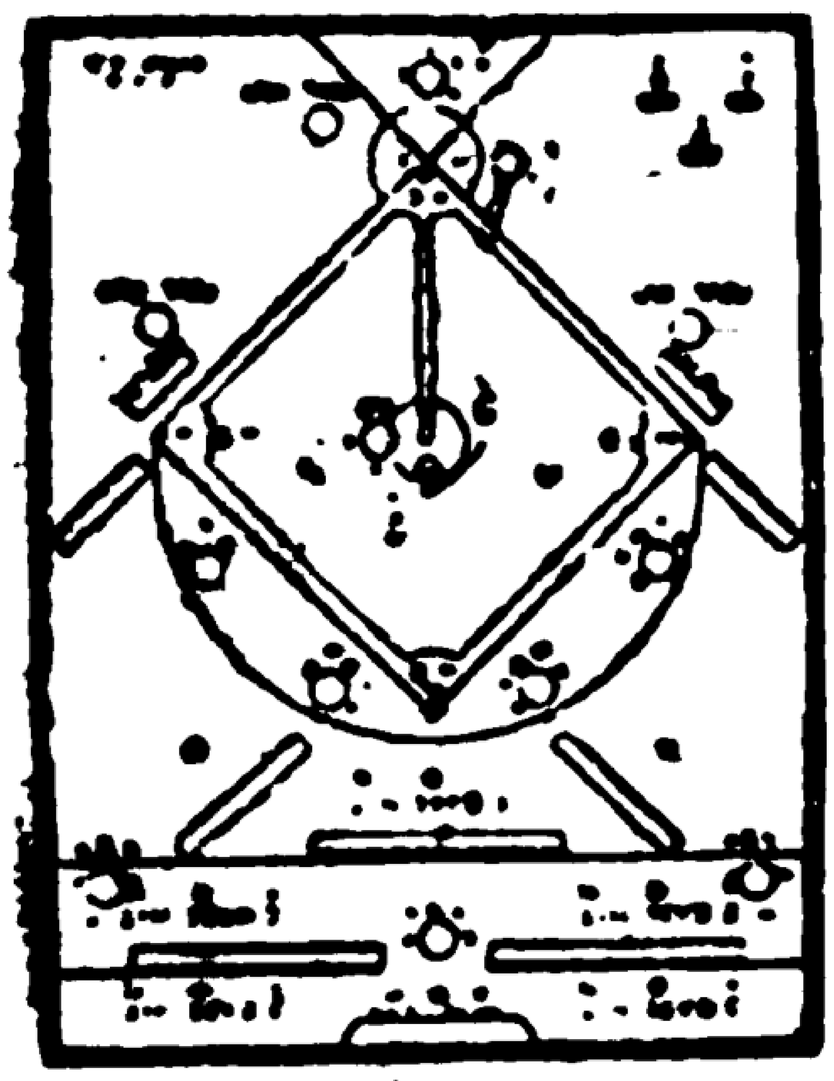
約二平方尺の盤上へ野球の實戰と同じ興味と緊張味を移す事に成功したのが、この高級式野球競技盤です。

盤面は飛行機上から見た野球場さながらで、投手は球にあてた指の力一つに、直球、曲球、軟球、剛球自由自在に出す事が出來、打手も亦選手がボックスに立つた時以上の緊張した氣分で、バットの振り方で本塁打を飛ばす事も出來れば油斷をすれば投手に好く計られて、三振「アウト」にされて了ひます。

實戰に臨む人はもとより、野球の興味が婦人の世界にまで及ばうとしてゐる現今、高貴な新らしい家庭遊戯として、一般の家庭におすすめ致します。

定價　小型　一圓三十錢
　　　中型　三圓八十錢

送料、東京市內十二錢、內地小型は十八錢、中型は二十七錢、領土小型は、四十五錢、中型は五十五錢



ユトマポマード

毛髮の榮養を兼ねた純良なポマードを棒狀輕便な容器につめたものです。使用法は、蓋をとつて、容器から直接に毛髮に塗りつけるだけで、少しも手に脂がつかず使はれた丈の脂は常に表面の網を通つて出て來る裝置の、一抹の無駄もない至極重寶な物に外出前の急がしい髮の手入れや旅行先での使用には一層便利を感じます。

定價　六十錢

送料　東京市內十二錢、內地十八錢

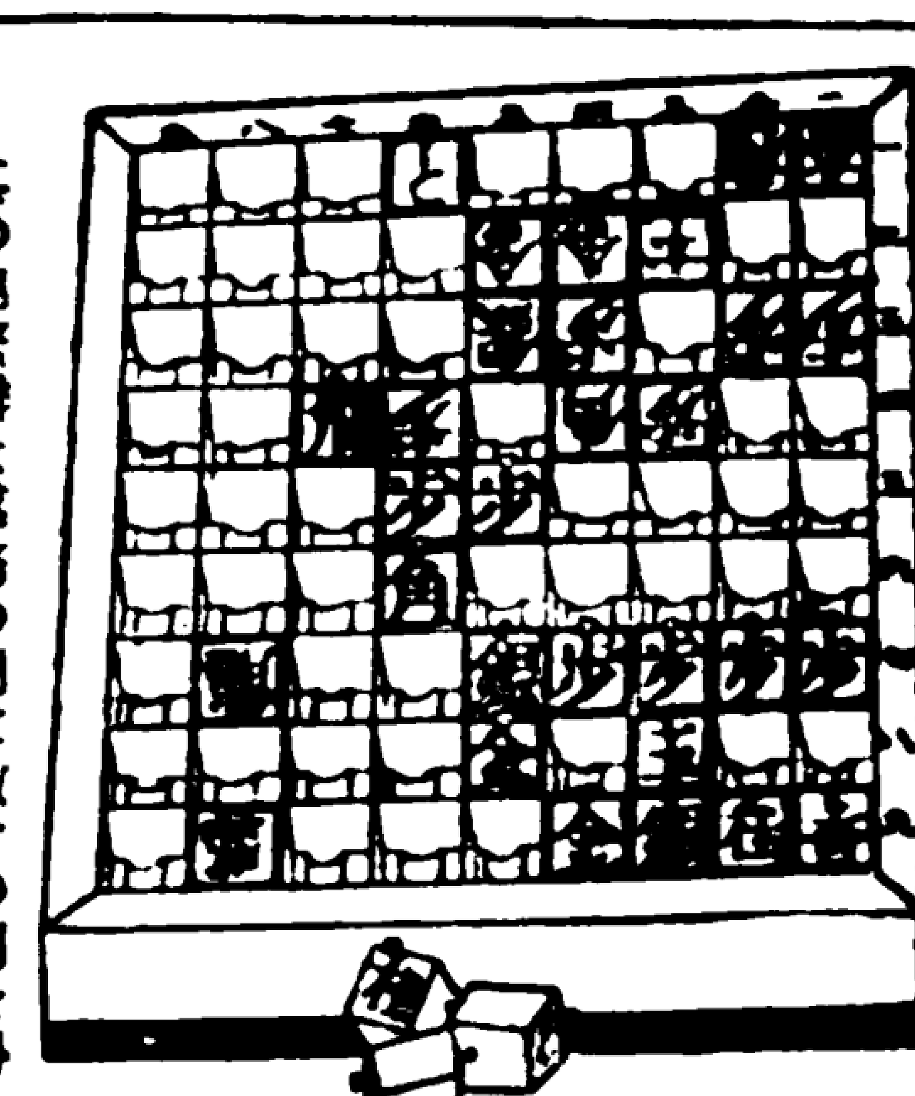
領土　四十五錢

最小型將棊盤

縱三寸七分橫三寸二分厚さ五分の最小型輕便將棊盤です。

木とアルミニュームとで造られてありますから、ポケットに入れて少しも重く感じる事なく、駒には一錢一厘銅貨位の磁石が附けてある爲、婦女子の眼にも可愛らしい程のものです。

駒は標準文字を用ひ、盤には縱横に數字が記されてありますから、新聞を見ながらの研究には一層便利です。



其の他繁雜な業務の間に數分の閑を得て、又は忙しい旅の車中に、或ひは机上に、或ひは寢ばひのまゝで、或ひは病床のつれづれに、仰向けのまゝでも出來る、好棊家にとつてこれ程便利なものはありません。

定價（駒全部附）　一圓八十錢

送料　東京市內十二錢、內地十八錢

領土　四十五錢

除毛劑タキー

顏に危險な剃刀を用ふる時代は過ぎ去りました。このタキーは、手足、腋の下、襟脛等任意の所に塗つて五分乃至十分後に水で洗へば、剃刀で剃つたよりも綺麗にすつかりと除毛する事が出來ます。

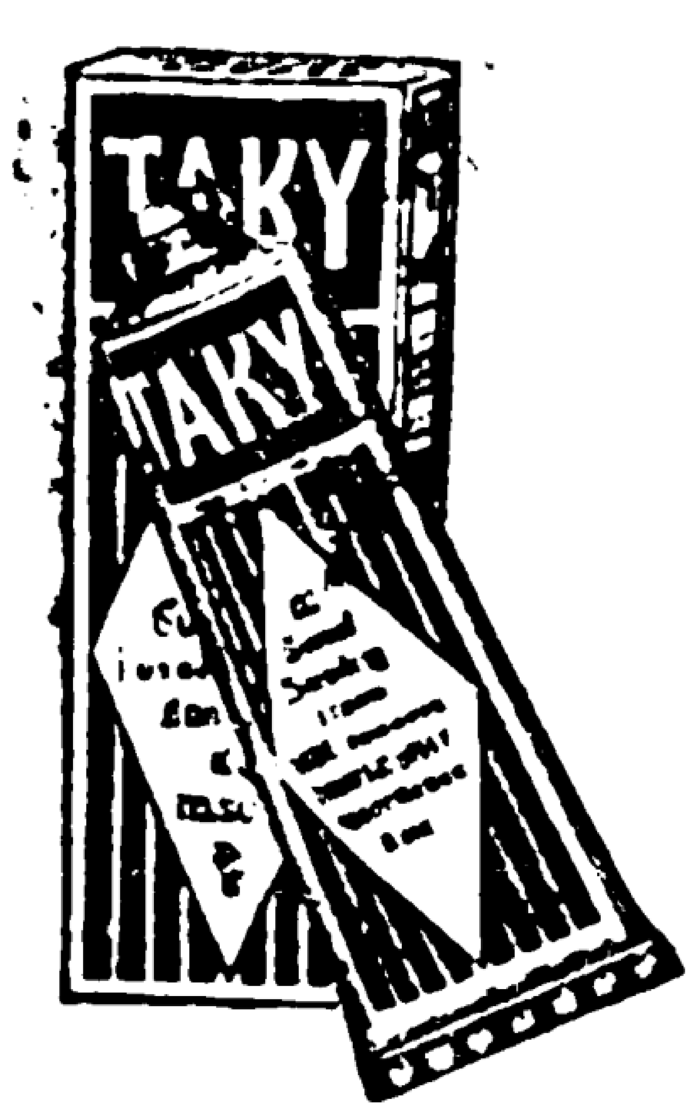
これを何回か繰返へして使用する間に次第に毛が薄色の弱いものとなり、遂には全く發生しなくなつてしまい、又腋臭を除く效果があります。

皮膚に害はないかと云ふ問合せをよく受けますが、一個每に添附の說明書に反した使用法をせざる限り、全く無害で效果は一層確實です。

定價（マスクリーム付）二圓二十錢

送料　東京市內十二錢　內地十八錢

領土　四十五錢



新發明の產兒調節器

新造型オクルサトルは、輸精線繊維質の部分と絕對に永液の通過を妨げるゴム膜壁と把柄から成つてゐる新發明の產兒調節器です。

このオクルサトルに添附の殺菌用錠劑を挿入して使用すれば、錠劑は內部で溶解してカーボニックホームを形成致します。この劑は隙間なく擴り、細菌はみた殺されて了ふもので、オクルサトルの周縁橡部分はこの殺菌錠溶液を吸收して約一ケ月間保存いたします。

オクルサトルは、非常に簡單で且巧妙に工夫されてをり、實際使用中でも本人自身氣が附きません。これは永久的使用に堪へるものですから、二回目からの御註文のために、別に錠劑だけが用意されてあります。

一度お產した人までは　〇番
二度お產した人までは　一番
四度以上の人は、二番を使用

定價（錠劑十二錠附）　六圓
錠劑のみ十二錠　二圓

送料東京市內十二錢　內地十八錢

領土　四十五錢。

慶應より見た 早慶野球戰秘話

神吉英三

一高廿年の覇が破れて、慶應、早稲田の爭覇となり、明治卅九年の秋兩校の試合中止となつた迄を日本球界の第一期とし、早慶兩大學が相對立して、互に間接に、覇を競ひ、リーグ戰が生れ、大正十三年の、其の復活となつた迄を第二期とし、それより今日に到る迄を第三期と私は區分する。

而して最初の期間に於ける野球の變遷や、今日のベースボールと第二期に於ける、それとの比較論、其間に於けるスタープレーヤーの事や野球技そのものゝサイエンチフイックなセオリーなど書き度い事は澤山あるが爰には表題の早慶仕合の私の回顧として、仕合の經過を述べるを主としないで、中止になる迄の仕合に關連した内輪の祕話や、仕合前後の事情や私の當時の感想を思ひ出すまゝに書く事とする。從つて私自身を中心としたものとなるかもしれない事を豫めお斷りして置く。

○最初の早慶仕合　三田山上の校舍と校舍との間の狹いグラウンドから新設の綱町の三千坪のベースボール・グラウンドへ移つて大に得意であつた慶應の野球部は、その最初の仕合に、當時新しく生れた早稲田大學の選手を迎えて一戰を交へる事となつた。明治三十六年の秋も終りの十一月廿日、これが早慶戰の第一回である。當時球を漸く持ち立ての私は仕合の經過に就ては更に頭に殘つてゐないが選手九人以外に澤山もない部員先張と共に毎日々々ローラーを引かされてグラウンドの手入ればかりさせられた事と仕合前にラインの引方が下手だと選手から叱かられてつらかつた事丈けを記憶してる。仕合は十一對九で慶應の勝、兩軍のメンバー及成績は左の通り。

慶應		打數	得點	安打	三振	四球	失策
時任彦一	1B	6	0	2	0	0	2
青木泰一	C	5	0	0	1	0	3
林田峯次	SS	6	1	2	1	0	3
宮原清	2B	5	2	1	0	1	2
吉川清	CF	6	1	3	0	0	0
柳弼五郎	3B	6	2	2	0	0	0
櫻井彌一郎	P	4	2	1	0	1	0
高濱徳一	LF	5	2	1	0	0	0
宮本熊三郎	RF	3	1	0	0	2	0
計		46	11	12	2	4	10

早大		打數	得點	安打	三振	四球	失策
泉谷祐勝	C	4	1	1	2	0	1
猪瀬順	RF	5	0	1	0	0	0
橋戸信	SS	3	0	1	0	2	1
小原益遠	3B	5	0	2	0	0	4
獅々内謹一郎	CF	5	2	2	0	0	0
河野安通志	P	5	3	2	0	0	0
鈴木豐	LF	3	1	0	1	1	1
押川清	2B	3	1	1	2	0	2
森本繁雄	1B	2	1	1	2	1	2
計		35	9	11	7	4	11

最初慶應方ではトテモ相手になるまいとタカをくゝつてゐたが早大が案外強かつたのでウカ／＼すると次回は喰はれるかも知れない大に奮發しなければな

い、と思つた。

○春秋に二回仕合擧行の申合せ 翌年の六月當時の覇者で他の追從を許さぬ程度に高く留まつてゐた第一高等學校を一回に早稲田が先づ破り、翌二回に慶應も勝ち、勝つた同志が四回に三田綱町のグラウンドに對戰する事となり早くも覇權を爭ふ樣になつた。仕合は十三對七で早大の勝。メンバーは左の通り。

慶應		打數	得點	安打	三振	四球	失策
林田峯次	SS	6	1	2	0	0	5
青木泰一	C	3	0	0	0	2	0
時任彥一	1B	5	1	0	0	0	0
宮原清	2B	4	2	1	0	1	2
吉川清	3B	3	1	2	0	2	6
櫻井彌一郎	P	5	1	0	0	0	0
宮本熊三郎	RF	4	0	1	0	1	0
高濱總一	LF	2	0	0	1	2	0
湧川泉次郎	CF	3	1	1	1	1	1
計		35	7	7	2	9	14

早稲田		打數	得點	安打	三振	四球	失策
河野安通志	P	4	2	2	0	3	1
山脇正治	C	6	3	2	0	1	0
橋戸信	SS	6	1	1	0	0	1
森本繁雄	1B	3	1	1	1	2	0
押川清	2B	6	3	0	0	0	2
泉谷祐勝	3B	5	2	3	0	1	2
獅山素一	RF	3	0	0	3	0	0
小原益遠	CF	6	0	1	0	0	0
鈴木豐	LF	4	1	1	1	1	0
計		43	13	11	5	7	6

慶應としては賴りにしてゐた櫻井投手が對一高戰の前より肩を痛めてゐて七回に交代するの餘儀なき破目となり普通部の投手であつた湧川君が代り大敗を喫したのであつた。

當時は負けて居る方から仕合を申込むと云ふ一般の風習であつたが此の仕合をキッカケに每年春秋に定期に對戰する事に申合せが出來た。

○湧川君の肩の發生 櫻井君の肩は夏休みが過ぎて秋になつても恢復しない。柳マネージヤーの苦心は一通りではなかつた。春の初陣に不成績ではあつたが新進の湧川君を立てるより外に方法はなかつた。幸に夏練習の結果湧川君の例の速球に大分重みが付いて來て大チヤンり大學の選手の事をさう呼でゐたも練習に打ち惱む程になつた。

當時の練習は實に猛烈を極めた。柳氏の一徹性は自分が滿足する迄は、選手が疲勞し樣が、少々の怪我位一向お構ひなしで練習さした。信條として、練習により精神の練磨を得さしめ、不識不知の間に機械的に適應の動作が自然に出來る樣にならねば駄目である、それには一に練習二に練習三に練習、練習以外に手がない、と云つた風で、湧川君は特に種々の點に於て鍛はれた。但し選手たるものは肩の養生を第一に爲すべしと云ふので日常の生活にも隨分八釜敷く監督された。今想ひ出しておかしくて堪らないのは、仕合の前々日、湧川君は肩がチト變だと訴へた。柳氏は心痛の餘り、肩の疲勞を休める最上の良法は湯治に當るに限るとて仕合の前夕の如き寄宿舍の大湯殿の天上から四斗樽をブラ下げて吞口からお湯をダラ／＼落下する名案を工風して下に湧川君を坐らしてその肩を打たした。折角のお湯が冷ては利目がなくなると云ふので吾々三四人はお湯に入つたまんまで上り湯の小桶で四斗樽にお湯を運ばせられ、これを二時間餘も續けさせられたのだから驚く。

○四球の連發 仕合當日湧川君の肩の調子は頗る宜しく例の速い球を投げろは投げるは早

大の連中はテンデ當らず、一回目に早大無得點に對して慶軍三點を擧げた優勢さであつた。然しドウ狂つたか第二回目より四球の連發にて八回を通じて（慶大先攻の爲めアルファー付）無慮十有七其間二の死球を加へて都合十九、然も四回と五回の兩回に九個の連續であつた。恐らく、大きな仕合の空前絶後のレコードだと思ふ。私は早大のグラウンド＝其後、確か二回に亘つて改良されて現在に及ぶが、最初は三壘の直ぐ側は高台の草むらであつた＝の三壘側の高台から見物して居たが、心配で心配で終り頃は投手を見る事が出來なかつた。頭を下げて、今度はストライクであれと瞑目して一心に神に祈つた程であつた。若かつた湧川君として之は無理もなかつたかも知れないが、久保田敬一氏のアンパイヤーがコーナーボールなど少しも取らず餘りにストリクトであつたのには相異なかつた。斯くして仕合は十二A對八點で慶應は負けた。メンバーと成績は下表の通りである。

慶應		打數	得點	安打	失策
吉川　清	SS	6	1	3	1
高濱　德一	LF	6	0	0	0
時任　彦一	1B	5	1	0	0
宮原　清	2B	5	1	0	0
林田　峯次	C	4	2	1	2
櫻井彌一郎	3B	5	1	2	3
宮本熊三郎	RF	5	1	0	0
湧川泉次郎	P	5	0	1	2
青木　泰一	CF	5	1	2	0
計		46	8	9	8
早稲田		打數	得點	安打	失策
河野安通志	P	3	0	0	2
山脇　正治	C	4	1	1	1
橋戸　信	SS	4	0	1	1
押川　清	2B	5	3	1	1
泉谷　祐勝	1B	6	1	0	1
獅々内謙一郎	3B	2	3	1	5
小原　益達	・CF	3	1	0	1
鈴木　豐	LF	3	2	1	0
森本　繁雄	RF	3	1	0	0
計		33	12	5	12

三壘打　河野、二壘打　櫻井、吉川。四球　湧川十七　死球二、河野四。三振　湧川四。

當時の新聞の記事によれば、「朝來空合氣遣しく試合中も時々時雨をさへ催して近頃になく寒冷を覺えたりしにも拘らず見物の爲め態々遠近より來場したる者甚だ多く橫濱よりの外人も多數見受たり（中略）慶應方吉川、櫻井等の攻撃猛烈なる事頗る恐るべきものありしも味方のピッチャーが四球を連發して敵方の攻撃を守る事能はずチャンピオン・シップ・ゲームとしては頗る物足らぬ心地せられ早稲田方の攻撃力如何を見る能はず、當日の美事なるヒットは押川、橋戸、山脇に依りて、僅に三つを見たりしに止まりし位なれば試合は慶應方攻撃の時にのみ見られて慶應代り守るに及んでは勝負の問題は只時間なりしと云ふも過言に非らざりし程にて豫期したる如き壯觀を極むるに至らざりし。」

○卅八年春の仕合　湧川君が投手としての生命を無くして、他に投手とてもないので、再び櫻井君をプレートに立たせる事とし、選手一同更に練習に勵んだのである。それに早稲田は四月本場の米國へ出掛けるとの噂もあり、日本最強のチームと爲し度くはなし、且つ是非共昨年の雪辱もせねばならず、慶應に取つては何としても負けられぬ仕合なので、選手の意氣込は大したものであつた。兩軍共に能く守り中々得點するに至らず七回の裏に、櫻井君の安打によりて慶軍一點を先占し一對〇で、勝つた。兩軍のメンバーと成績は左の通り。

慶應		打數	得點	安打	三振	四球	失策
林田	C	4	0	0	1	0	0
高濱	LF	3	0	0	0	1	0
宮原	2B	3	0	0	1	0	1
時任	1B	3	1	0	0	0	0
吉川	SS	3	0	0	1	0	0
櫻井	P	3	0	1	0	0	1
稻葉	3B	3	0	2	0	0	1
青木	CF	2	0	1	0	1	0
宮本	RF	3	0	0	1	0	0
計		27	1	4	4	2	3

早稻田		打數	得點	安打	三振	四球	失策
獅々内	RF	3	0	0	1	1	1
山脇	C	4	0	0	1	0	0
橋戸	SS	4	0	0	2	0	1
河野	P	4	0	0	0	0	1
細川	CF	4	0	1	0	0	0
鈴木	LF	3	0	1	0	1	0
泉谷	2B	4	0	1	0	0	0
森本	1B	4	0	0	0	0	1
陶山	3B	3	0	0	0	1	1
計		33	0	3	4	3	5

○野球技の進歩著し　卅六年早慶仕合が開始されて回を重ねること爰に四回、二年後の此の仕合と前三回のそれとを比較すると大變な進步發達を認められる。殆ど同一の選手が唯一の相手方に對して勝たんと相爭ひたる故、練習と研究が積んで技の進步を早からしめた事想像に難くないが、主として投手の進步著しきものがあつた。最初は兩軍共に良く打つたがその打擊が共に封じられた事と、兩軍共に失策が少くなつたことである。

尤も此失策の多い事は今日の記錄法とは大分違つてゐた。見る人の眼も頭も低級だつたには相違ないが、野手の手に少しでも觸れたものは、ドンナ強打でも、巧妙に止めたものでも、等しく其の球手の失策と計算されたのである。故に若し守の廣い上手な人程、失策が多かつたと云ふ珍現象ともなつたのである。併し遊擊手とか三壘手とかゞ一仕合に五つも六つも失策をしてるのは、その腕の程度がひくかつたことの爭はれぬ證據である。それが失策も少なくなり、所謂緊張した息もつけない接戰を演ずる樣になつたので、見物人としては益々面白くなり人氣は自然に、此の仕合に白熱して來たのである。

○早稻田の洋行土産　洋行して歸朝せる早稻田との初仕合である。慶應は渡米して腕を磨いてる早稻田に敗けてなるものかと、夏中休暇を丸で練習に稼して意氣込素晴しく、仕合の日を待つた。殊に私は初めて大チャンの列に加へられ、中堅手を承つたので一通りならぬ練習をやつた。當時私は普通部の四年生で、普通部選手のキャプテンで三壘手であつた。同僚の小山(投手)稻田(遊擊)兩君は技倆に於て私よりズット上手であつたのに、下手な私が先に大チャンに拔擢されたと云ふ事は今でも其の譯が分らぬ位であるが、生來の無器用者の事とて一通りや二通りの練習で追付く譯のものでないので、全く文字通りの寸分の暇なく、練習を重ねた。お蔭でスタートと走る事は外野手としてさして遜色のない位には後には成り得て多少の自信も持つてゐたが、仕合の當初は全く氣が氣でなかつたのである。不馴の早稻田のグラウンドでの仕合ではあるし、三番目打者として重用されたので益々責任を痛感した。

洋行歸りの早稻田の、海老茶色の薄いラシヤのユニホームは、洋行前に新調したものだと記憶するが、紅赤の毛のアンダーシャツを

用ひ、真赤なオーバースウエターを着て、スパイクを打つた靴を穿きトテモ派出な寧ろキザな其のスタイルには驚かせられた。それに河野君が初めてボデースウキングを爲て投球し、遺憾なく洋行土産を發揮し、それは〳〵大したものであつた。當時は皆カッラギの純白のユニホームに足袋ハダシと云ふ服裝であつた。其後も鬱的と歌はれた早稻田とハイカラと云はれた慶應とは、其の世評と實際とは丸で取り違へた正反對のものがあつた。慶應でスパイクの付いた靴を用ひる樣になつたのは小山君の主張で、ベースボールをやるのにベースボールに用ひる必要缺く可からざる靴を使用しない法はない。第一早稻田と對戰するのに實際、不便、不利、不都合である。足を踏まれたら如何する、危くて對等の仕合が出來ないじやないかと、理窟は正に其の通りだが甑々たる議論があり、實行したのは漸く半年も後の事であつた。

仕合は劈頭、櫻井君の三壘打に依つて三點を先占し、早稻田は櫻井君の好投によりて打撃を封ぜられて僅に二安打に過ぎず、五對〇と云ふ段違ひのスコアーで大勝した。

メンバー及成績は左の如し。

慶應		打數	得點	安打	三振	四球	失策
吉川	SS	5	0	1	2	0	0
高濱	FL	3	1	1	2	2	0
神吉	CF	4	0	0	2	0	0
時任	1B	4	2	1	0	0	1
青木	2B	4	1	1	0	0	2
櫻井	P	4	1	3	0	0	0
林田	C	4	0	0	0	0	1
稻葉	3B	3	0	0	1	0	0
西川	RF	4	0	1	0	0	1
計		30	5	8	7	2	5
早稻田		**打數**	**得點**	**安打**	**三振**	**四球**	**失策**
押川	CF	4	0	0	1	0	0
橋戸	SS	3	0	2	1	1	3
山脇	C	4	0	0	0	0	1
河野	P	4	0	0	0	0	1
森本	1B	3	0	0	1	0	1
獅々内	RF	3	0	0	1	0	2
泉谷	2B	3	0	0	0	0	0
鈴木	LF	3	0	0	0	0	0
立原	3B	3	0	0	1	0	0
計		30	0	2	5	1	8

○河野君の好投と吉川君の美技 第二回戰は十日の後十一月九日三田綱町にて行はれた。第一回戰に能く打つた慶應は、河野君を安く買ひ過ぎ輕んじて餘りに打氣に出たのと、一方河野君其日の出來は上々終始で、アウト・ドロップで外角の膝の處を通されて僅に二安打に過ぎず。早稻田も前回同樣櫻井君のコントロールに牛耳られて三安打に過ぎず、宛然投手戰を演じて九回目迄兩軍とも得點なかつたが、最後に二死後、獅々内君の右翼への安打によりて一點を取られ一對〇で破れた。今でも頭に殘つてゐるのは吉川君が、中堅の私から取次いだ球で押川君を、ホームに好投して間一髮の間に殺した時のその美事な球である。一死後一壘に走者あり橋戸君が投手にバントして、櫻井君が之を二壘に投げたのが如何した變調だつたか珍らしくもトテモ惡投して二壘をカバーした私が其の球を捕ふとする瞬間に何等の不幸ぞ、石に當つた爲めかステキなイレギユラーなバウンドして、他へそれたので無中になつて追ひかけて、取つて吉川君に送つたのであつた。或る記事によると、押川は既に三壘を廻つて、今や本壘を陷入れんとする一刹那、出足早く殿の強い神吉は、吉川の手を經て本壘に投じ難な

くこゝに押川を殺せしは、眞に危機一髪の妙技、神吉父偉なりと云ふべしとあり、失策して賞められたのであるが、當時としての吉川君のあの投球は實に三賞に價し後日の語り草の一つである。然るに武運拙く斯くて折角二死とせしに、獅々内君の一打に依つて萬事休したのである。仕合は全く儚ものである。成績表は左の通り。

慶應		打數	得點	安打	三振	四球	失策
吉川	SS	3	0	0	1	1	1
高濱	LF	4	0	1	2	0	0
神吉	CF	4	0	0	0	0	0
時任	1B	4	0	0	1	0	0
青木	2B	2	0	1	0	1	0
櫻井	P	3	0	0	1	0	2
林田	C	3	0	0	0	0	0
稻葉	3B	2	0	0	2	1	0
西川	RF	3	0	0	2	0	0
計		28	0	2	9	3	3

早稻田		打數	得點	安打	三振	四球	失策
押川	CF	2	0	1	0	2	0
河野	P	4	0	0	1	0	0
橋戸	SS	4	1	0	0	0	0
山脇	C	4	0	0	0	0	0
獅々内	3B	4	0	1	0	0	0
泉谷	2B	4	0	1	1	0	0
森本	1B	3	0	0	0	0	0
田部	LF	2	0	0	1	1	0
不野	RF	3	0	0	0	0	0
計		30	1	3	3	3	0

○あきらめられぬ仕合　決勝戰には何としても勝たねばならぬと意氣込んで早稻田のグラウンドへ乘り込んで行つた。(例の如くユニホームとバットを持つて電車から降りて早稻田迄、テクッテ行つた。ホゥ歯の下駄をはいて）然し何と云ふ武運に拙かつたものか、神代何處迄、吾々を苦しめるのか、一回目に頼む投手の櫻井君は不幸にも向脛に死球を喫して、平常の自由を缺き七回目には捕手、林田君が指を裂いて退くの已むなきに至り、ベンチの後にて見物して居た普通部の遊撃であつた福田君を俄に呼んでユニホームに着換へさせて捕手に補ふの苦しさ、私共の其時の心地は堪えられないものがあつた。併し、試合は例に依つて息もつけない白熱戰で三回目に一點を先占されたが六回目に無死、滿壘の好機を迎へながら何等の拙劣ぞ、漸く一點を得たのみで一對一、九回も終へて延長戰となり、十一回目に取り返しの付かない混亂が生じたのである。

二死後田部君が二壘の後ろへ飛球を打ち上げた。二壘手青木君が取るものと思つた處がドゥ爲たものか少しも動かない、右翼の西川君も取りそうもないので驚いた私は、懸命に飛び込むだが、時既に遲く、遂に安全球にして仕舞つたのである。何と云ふブマに運んだものか。次の打者、泉谷君がボックスに立つた。泉谷君は稍々高目の球は得意とするだが、それが近い處に行くと、空振が多かつた。そして打つ方向としては二壘方面なので私はそれに備へる爲め、右翼に思ひ切つて寄つて且つ大膽に遠く守つて居た。そろ／＼夕もやが降りそうな、薄暗さであつた。バットに音がしたと思つたら遊撃手の吉川君が二壘の方へモーションを付けるのを見て初めて球の方向を見た私は、驚いて追つ掛けたが、間に合はず、走りながら、中堅と左翼との間の後方の生垣を飛び越した處、球はグラウンドの土手と畑の竹垣との間に白くまだクル／＼廻つてるのを見付けたので、大急ぎで、取つてグラウンドの方

へ無茶苦茶に投げた。そしてグラウンドの高い土手へ上らふとして驚いたのは境の畑の竹垣は尖々しい切り立ての尖つた竹槍のやうなので若し私が運が惡かつたらそれに田樂刺になる處であつたと思はず冷汗が出たのであつた。漸くはい上つて見たら、球は巧く投げたと見へて駿足の泉谷君が三壘に止つて居た、（當時のグラウンドルールにオーバーヘンスの取極はなかつた）。そして一點で喰ひ止めたと思ふ間もなく、押川君の三壘ゴロで一壘に刺されたと思つたら壘審判の鵜飼君は一壘の後方にあつてハンケチをサット振つてセーフと宣した。その時の光景はまだまざ〳〵と眼に殘つてゐる。口惜しさ限りなかつたのである。その回、一死、走者二、三壘にある時福田君の遊撃オーバーの小飛球安打に依つて一點を得しも、一壘の走者青木君が河野君に計られて殺され遂々機會は去つた。噫々。

併し三回戰を通じての成績を見ると得點は慶應の七にして早稲田四、安打十五本に對して十三本、失策十五に對して十三、四球櫻井君五河野君九、三振廿三に對して十五にて先づ五分五分、投倆、勢力、能くも如此伯仲したものである。

慶應		打數	得點	安打	三振	四球	失策
吉川	SS	4	0	0	1	1	2
高濱	LF	4	1	1	1	0	0
神吉	CF	5	0	1	0	0	0
時任	1B	4	1	0	0	1	1
青木	2B	4	0	1	1	1	1
櫻井	P	4	0	0	0	0	0
林田	C	3	0	0	0	1	0
福田	C	2	0	1	1	0	0
稲葉	3B	5	0	0	3	0	3
西川	RF	4	0	1	0	0	0
計		39	2	5	7	4	7
早稲田		打數	得點	安打	三振	四球	失策
押川	CF	5	0	1	2	0	0
河野	P	6	0	0	0	0	1
橋戸	SS	4	0	1	0	1	2
山脇	C	5	0	0	0	0	0
獅々内	3B	5	0	2	0	0	1
森本	1B	5	0	0	1	0	0
鈴木	LF	4	0	0	1	0	0
田部	RF	5	1	2	1	0	0
泉谷	2B	5	2	2	0	0	1
計		44	3	8	5	1	5

○龍源寺の合宿　併に時任、林田、稲葉の三氏を送つてチームに大騒動が生じたが神戸の天才兒佐々木君が入野して遊撃手となり吉川君は左翼に控へ、福田君入りて正捕手となり三壘は私が守る事となり新進の意氣が漲つて作から夏にかけて、練習に油が乗り三田山上に合宿して、暑中休暇に選手は郷里へ歸りもせず、炎暑と戰つて練習に練習を重ね、目指すは早稲田と、臥薪嘗膽した。恐らく早稲田に於ても同樣だつたと思ふ。昨年の秋より仕合は毎年秋一度にして三回戰と爲る事に決められ本年は其初回を十月廿八日と取極められた。九月の末に、練習時間の都合や其他で合宿した方がドウモ元氣が一致すると云ふので、三田四國町の龍源寺を借りる事とした。お寺と云へば廣そうであるが本堂は使用を許されぬのでクリの八疊と六疊との二間丈けである。選手九人補欠一人、マネージャー一人都合十一人、丸でスシ詰の態であつた。隨分借家を求めたが適當の處がないので我慢することとした。幼稚舍の賄に出前して貰ふ事とし朝丈けは運ばして晝と夜は食ひに行く不便さであつた。それに一切の間食は禁じられてゐたので（夏練習中も同樣）食後一切の砂糖類を何より樂しみに爲たもので

ある。養分に缺乏するとカロリがなくなると云ふ理窟なのである。體育會の或る部から見舞としてマシマロの菓子を貰つたが、見せられたのみで何時の間にか無くなつたので詮議した處、アシスタントマネージヤが來て毎日々々失敬したのだと分つて、以後其人をマシマロとニツクネームにした滑稽もあつた。又或時、林檎の大籠を貰つた處、夜分になつて綴るのに置く場處がないので帶で室の間の梁からブラ下げた處西川君の頭の上になるので、承知しない、曰く大切な體だ若し鼠が帶でもカジツて籠が落ちたら如何する、お可笑しい樣だが自分の體でないと云ふ責任感で皆隨分注意したものである、グラウンドに於ても亦平常でも。だから鼠に食はれても諦める事にして廊下に出す事とした。

○應援歌の新作　仕合間近になつて、應援隊のリーダー諸君が合宿へ來て、今度の仕合には元氣な調子の良い歌を作り度い、昨秋のは少々冗長過ぎるとの事で、皆で考へた末米國獨立の歌の調が最上との事に一決した。そして文句は櫻井君が筆を取つて一時間に作り上げた。

天は晴れたり氣は澄みぬ
自尊の旗風打ちなびく
城南健兒の血はほどばしり
こゝに立ちたる野球團
ララ、ケイオー、ララ、ケイオ、
ケイオー　ケイオー、ケイオー
勝利を告ぐるトキノ聲
天下の粹ぞと仰がれて
三田山上の秋月高く
輝く選手のそのいさを
ララ、ケイオー、ララ、ケイオー、
ケイオー、ケイオー

皆で合唱した處、トテモ調子が佳いので、大いに元氣付いた。

○第一回戰の私の失策　イザ仕合になつて三壘手としての初陣の私は失策した事、とてもお話しにならぬ位で無慮七つ（十三來た内）。神吉のトンネルボールの嘲笑を受けたのである。何故あんなに慘めであつたかと仕合後、合宿に歸つてから獨り戸棚の中で坐禪して考へた。私が居なくなつたと大騷ぎされた。當分の間、戸棚に入るなと、目の惡い連中からカラカハれたものであつた。

失策の初めは、プレーボールが掛ると直ぐガンと來た。其のゴロを取つて一壘への投球低かつたので高濱君がハンプルし二壘打と爲たので上氣したのが抑もの起りであつた。然し生したのは幸にも、バンドやランエンドヒットのものなども本壘に刺した爲め、三回目に二死者後山脇君のゴロを暴投して二壘へ送つた。山脇君ドウ云ふ隙を見たのか捕手よりの投手への送球の折に三壘へ突貫して來た、青木君が刺さふと投げた球がトテモ低く私は身を持つて防いだが及はず遂に後逸して一點を獻上して仕舞つた。幸に四回目に二死後西川君死球に佐々木君四球に相次で出で、吉川君の安打に依つて一點を取り私の遊撃の總ゴロで一壘に生きる間に佐々木生還して、一點を勝ち越し、遂に九回目迄押し切つて勝つたのである。此日青木君の出來頗る宜しくゆるいアウトドロップで早稻田を散々惱まして無安打に終らしめた。

守備に就てる時應援隊が聲を揃へて、天は

晴れたりと歌ふのを、三壘に位つて、打者に向つて守つて聽く時、失策を重ねてゐる自分を省みて、感慨無量で今でもあの應援歌を歌はれると自然と涙の浮ぶのを覺へるのである。

慶應		打數	得點	安打	三振	四球	失策
神吉	3B	3	0	1	1	1	6
高濱	1B	4	0	0	1	0	0
櫻井	2B	4	0	0	0	0	0
阿部	CF	3	0	0	0	1	1
青木	P	3	0	0	1	0	1
福田	C	4	0	0	1	0	0
西川	RF	3	1	0	1	1	0
佐々木	SS	3	1	1	0	1	0
吉川	LF	4	0	1	0	0	0
計		31	2	3	5	4	8

早稻田		打數	得點	安打	三振	四球	失策
山脇	C	4	0	0	0	0	0
河野	P	3	1	0	0	0	2
橋戸	2B	3	0	0	0	1	1
獅々内	3B	3	0	0	0	1	0
押川	CF	2	0	0	0	0	0
小川	LF	3	0	0	0	1	0
西尾	RF	3	0	0	0	0	1
森本	1B	3	0	0	1	0	1
田部	SS	3	0	0	1	0	1
計		27	1	0	2	3	6

審判、三島(球)中野(壘)　殘壘　慶十　早五。

〇仕合前の試驗勉强　第二回戦の前々日、本科の連中は堀江先生の財政學の試驗があるので、その爲め勉强に夜を徹した。まだ百頁ある五十頁殘つてると、心忙しい事であつた。サンマリーしたものを銘々又サンマリーする騷ぎであつた。

種々な點から比較して、早稻田には負けないとの自信を强めてゐた。河野君の球を打つ程度と青木君が打たれる事とは、其日の出來榮にも依るが總じて一分が良かつた。問題は失策如何に懸つてゐた。殊に私さへ失策やらなければ勝利は疑ひなしと豫想は一定してゐた。私の責任や重大である。

十一月三日二回戦は三田に於て開始された。第一回戦に先ち、兩校の應援隊は、人數を二百五十人と限定し味方のベンチの後方にて一定の場合に一團となると云ふ申合せであつた。

〇早大の應援旗三田球場を埋む　處が當日、早大の應援團は馬上にて指揮せる吉岡君＝吉岡將軍の呼稱茲に始まる＝以下のリーダに作はれて若干有餘、堂々と乘り込んで來た。それのみでない、仕合のキャッチボールを始めてゐると山脇君が私の處へ來て、君、今日は君の近くに變なのが大分居て多少危險だと思ふから注意してくれ玉へ、實は押川君も酒代をネダられて困つてる始末だと、衷心敵友の爲めに心配しての山脇君の注意であつた＝選手お互は隔意のない友人で決して敵視すると云ふ風はなかつた。仕合には血眼になつてお互に勝利を爭つたけれども、試合後には必ず一場に集つて茶話會をやり談笑して分れたのである＝で、フキールヂングの時、行つて見たら案の定、五六十の人が三壘から直ぐ近くの見物席に、(ラインから一間半位しかなかつた)一團となつて手に手に海老茶の早大の應援旗に、短刀を付けたり、懷中に忍ばせて居て、私が近寄るとガタ〳〵音さして威しに掛つたのである。如此彌次らふとするのは先方の策戰で、何でも斯でも私を失策させ樣と爲たのである。第一回戦の味を占めて、私は内心腹を極めて居たが、更に覺悟を極めさせてくれたのであつた。だから、その連中の中へ球を取りに飛び込んだ時など、人も短刀も丸で眼中に無かつたのである。

而てイザ仕合が開始されると、匇ち内野から外野一面に早大の應援旗で眞赤になつた。

仕合前に麻布中學正則中學等から（選手の出身校）應援の申込があつたに對して早大との約定の故を以て斷つた處、青山學院、郁文館中學にては當日早大を應援する事に決めてあると確聞するから約束もさる事ながら再考して貰ひ度いとの熱心なる希望に對しても同樣謝絶した、まさかと思つてた慶應の應援團委員は此の光景を見せられて憤慨したのは無理もない事で、早大側の無責任を責めたが又如何ともする事が出來なかつた。

要するに正直で紳士的であつた慶應側はマンマと早大側に一ぱい喰はされたのである。加之、不幸にも試合に負けたので其の責、應援隊にありと云つた樣な非難も一部に起つたのである。吾々選手としては應援隊の數の如何に依つて試合が左右され樣とは斷じて考へないが、相對して應援する方の身から見ればトテモ貧弱であつたのは事實で、殊に自校グラウンドが敵方によつて占領された形となつた事に關しては、當時として、默して居られなかつたのは無理もない事である。

○仕合は三對〇の敗戰　幸か不幸か三對零で大敗を喫つた。早大側では第一回戰の敗北をもの〻美事に雪辱したので應援隊は狂喜して三田通を何遍も〳〵も練つて步いたので、何んにも知らぬ三田つ子迄も口惜がらせたのであるが、仕合の經過を思ひ出す迄もなく、忘れんとして終生忘れる事が出來ない。卽ち其の三回目に九番打者であつた吉川君が美事な三壘打をカツ飛して三壘に在り、ノウアウトの絕好のチヤンスが來た。次に私がボツクスに立つた。

河野君の球に對しては相當の自信を持つて居た。それは獨り私のみでなく選手一同各自夫々期する處があつた。然しイザ試合となると山脇君の捕手としての補佐振りが實に美事なものがあつた爲め、外角の膝の處を通すアウトドロツプには可なり惱まされたが若しバントする場合には却て樂で、寧ろ一壘側へはお誂へ向の球であつた、而して此ノーアウトにて三壘に走者ある場合には打つかバントすべきか（明治四十四年以降は明瞭に定義付けられたが）は隨分議論があつて研究と練習とを重ねた上、結局選手により銘々別々に定めてあつた、私は打つ筈であつたし又其時打ち度くて堪らなかつた、櫻井キヤプテンは（ベンチコーチ無い當時は一切の指圖はキヤプテンが爲したのである）又打てと指圖したので勇んでボツクスに出た。そして高目のボールを心待ちして居た、よしそれがボールでも打つてやらうと決心して居た。占めたと打つた球は不幸にも右翼への大飛球となつて空しく、次打者高濱君も亦同樣左翼へのフライと終つた。バンドの名手としてチーム隨一の同君が何故此の場合にバンドを爲なかつたか、仕合後の選手會の時大分問題になつたのであるが、それよりも大問題は、足の早い吉川君が何故此の場合でも亦高濱君の時にでもホームへスチールしなかつたかと云ふ事である、トテモ議論が八釜敷かつた水掛論とは知りつゝも今日でも談、一度其の事になれば依然として是非の兩說で盡きないのである。總じて敗ける仕合は凡てがチグハグに行くもので致し方ないが、此の絕好のチヤンスを失した慶軍は

勝神に見放され、次の回、卽ち四回の表にエラ續出、押川君のバンドによつて一點を先占され試合の大勢決し八回目に又押川のヒツトで二點取られ三對零で大敗したが、若しあの時吾々が先に一點を得てたとしたら試合はドウなつてゐたか。勝負の事ではなく、恐らく仕合は續行出來なかつたと、信ずべき筋より後日聞かされたのであつた。仕合中に於ける運、不運は時によつてドウしても否まれない自然の成行である、が、それが兩軍の選手に與へる心的作用は想像以上に大なるものがあるので、バツチングの利かなかつた當時にあつては、〓球も現在のものとは雲泥の相違で飛ばぬ樣に出來て居た〓一のチヤンスをミスする事はやがて仕合を失ふ事の結果になり勝ちで味方の意氣悄沈に引き代へ敵は大に調子付く其の影響が今より甚だしかつた樣に思ふ。

○負けた慶大の理由　敗軍の將、兵を語らずとは金言であるが、豫想を裏切つての此の敗戰には重大なる理由があつた、それは今日迄選手間に、内密に祕められてゐたがモウ差支ないと思ふから書くことゝする。卽ち、投手青木君は君自身でもそれ迄は、意識しなかつたそうであるが非常な病癖があつたのである。否、其時より起きたのかも知れない。それは投球した直後投げた後の姿勢から急にモーシヨンを他に移そうとすると、發作的に右手と右足がツヽて一寸の間、動作が出來なくなり、頭をたれてお化けの樣な妙な格好を爲て動けなくなつたのである。不幸にも此仕合には早稻田のバントが隨分多かつた、最初、橋戸君の時に變だと一壘の高濱君が發見したのである〓以降投手の守備は三壘の私が爲る樣に練習したのであつた〓斯くして投手の無守備の爲めに味方は思はぬ不利に陷つたのであつた。早稻田には幸運にも押川君の適時の安打があつて止めを刺されたのである。仕合を通じて安打は四對四、殘壘は慶十一に對して早六、成績から見れば決して劣つてはゐないので、然も三對〇の開きが出來たのは矢張、勝負であり、そこに野球の面白味が一段と加重されるである。成績表は表の進り。

仕合中止の事情や、中止後の間接射擊的腕競べ、球技の進步など又機を見て稿を改めて書く事とする。

(終り)

慶應		打數	得點	安打	三振	四球	失策
神吉	3B	3	0	0	1	2	1
高濱	1B	5	0	0	3	0	1
佐々木	SS	4	0	0	2	0	2
阿部	CF	4	0	1	1	0	0
櫻井	2B	3	0	1	1	0	0
福田	C	2	0	0	2	1	0
西川	RF	3	0	0	2	1	0
青木	P	4	0	1	0	0	0
吉川	LF	4	0	1	1	0	0
計		32	0	4	13	5	4

早稻田		打數	得點	安打	三振	四球	失策
山脇	C	4	0	0	0	0	0
河野	P	4	2	0	0	0	0
橋戸	2B	4	1	2	1	0	0
獅々内	3B	4	0	0	0	0	1
押川	CF	4	0	1	1	0	1
小川	RF	4	0	0	2	0	0
西尾	LF	3	0	0	3	1	0
森本	1B	2	0	0	1	1	0
田部	SS	4	0	1	1	0	0
計		33	3	4	9	2	2

審判　中野(球)三島(壘)　殘壘　慶十一、早六。

ラグビーの興味

香山　蕃

ラグー Rugger と言ふ言葉が現在我國で間違つた意味に用ひられて居ることは、その言葉の意味がラグビー・フットボール競技者を指して居ることである。其の言葉には競技者の意味は無く、競技其のものを意味するのである。之れに對しては私は既著「ラグビー」（改造社版）に於て始めて競技者の意味に解して載せたとが、今日の誤用の原因となつたと思つて深い責任を感じて居る次第である。當時出版と同時に氣がついて其の修正を依賴したが、今日まで其のまゝとなつて居るので、此の機會に本誌を通じて廣く其の意味の訂正を願ふものである。

此の言葉はイギリスに於ても比較的新しい言葉で通俗語としても用ひられて居るから大抵の辭典には載つて居ない。然し言葉が簡單であるだけ將來日本でも此の言葉の方が新聞雜誌に利用される場合が多いだらうと思ふ。又單にラグビー Rugby と呼ぶこともラグビー・フットボールを指すことに不適當であることはラグビーが單なるイギリスの地名に過ぎないからである。元來ラグビー・フットボールと言ふ名稱の出所がラグビーに在るラグビー・スクールに傳來して居たフットボールに因むで名付けられたものである。

由來イギリスは建國以來フットボール競技が多種多様の狀態で發達して來たが、今から七八十年前此の狀態がこの潮流に合流し始めた。一は手を用ひることを許さぬ派と他はそれを許す派である。此れより先約今より百年前ラグビー・スクールでウエブ・エリス Webb Ellis と言ふ少年が今のラグビー・フットボールのやり方の樣に特色づけたのがそもく＼の動機となつて、同校で盛んに其の方法のもとにフットボールが行はれた。其の後トムブラウン作校記の著者チヤヂラユーグ Judge Hughe の出現が其の基礎で名實ともに確立したのである。彼がチームのキアプテンとなるに及んでラグビー・フットボールを確乎たる競技とし同校に固定せしめたのである。其の後蹴球界のこの潮流が試合の立場から遂に具體的に分裂して手を用ひないと言ふ前者はアツソシエーション・フットボール協會を作り、手を用ひることを許す後者は、ラグビー・フットボール協會を設立してラグビー・スクールの規則を其のまゝ移し、之れに多少の改良を加へて今日のラグビー・フットボールの基礎を作つたものである。

爾來六十年間ラガー・システムに改良と進歩が不斷に續けられて遂に今日の形式に立ち到つたものである。今後も年と共に其の時代に順應する改良は忘れられることがないと思

ふ。

我國に於けるスポーツ熱の勃興は此の十年以來素晴しい勢で發展して來たが、其の中でもラガーの發展こそ實に驚く可き勢を示めして居る。十年前第三高等學校のラガー・チームの一員として慶應義塾へ遠征に來た時などあの綱町のグラウンドには見物人とて僅に其の關係者のみ十幾人位であつた。新聞にも只慶應と深い關係の在る時事が僅に小さく勝敗の結果を報道した位であつた。其の後東大へ入學して二年目東大でも始める事になつたが其の頃、時事の樓上で東都の運動記者諸君の依頼でラグビー・フットボールのいろはを説明した事を思ひ出せば現在の其の發展振りには驚異の眼を以て見ざるを得ない。勿論英國に於てもラガー熱の隆盛なることは休止するところを知らず、協會は其の專屬のグラウンドのスタンドの增築に暇の無い有樣である。然し十年の間に十幾人の關係者が幾萬人のフアンに變つてしまつた日本は驚く可きである。此れ程烈しい變り方は他の競技に於て見ないところである。何が故に此んな烈しい變り方をしたかと考へて見るに之れが單に我國の近代社會相の一現象たるスポーツ勃興熱の潮に乘つて居るからだとばかり見ることは出來ない。私は恐らく私が一目見てラガーに惹き附けられたと同じ氣持で日本の大衆が惹き附けられて行くのでないかと思ふ。其のフアンが一度試合を見て惹き附けられて其れが等比級數的に增して行くのでないかと思ふ。多くの人は、規則は知らないが面白い、然し若し規則がすつかりわかつて居たらどんなに面白いだらうと言ふ。其の時私はいつも答へるのであるが、假令規則を如何に知つて居てもスタンドから見て居て一々審判官たるレフリーが何が故に笛を吹いて審判を下して居るか知らと言ふことは不可能だ。實際競技をやつて居る者すら何が故に罰則を課せられたのやらわからずに居る場合が多い。ましてスタンドから其れを知る由もない。其を知る者はレフリー一人で、神樣だつて知らないだらう。要するに其の見方の大要を知つて居れば其で澤山だと言ふのである。大體私は明治四十何年だか、慶應が三高へ第一回の遠征に來た時、ラガーを一目見て何うしても自分のやる運動は此の運動だと思ふ程惹き附けられてしまつたが、私は其の時までラガーに對する何の豫備知識も持つてゐなかつた。只三高の有志の連中が裏のグラウンドで西洋西瓜の樣な楕圓形のフットボールを持つて走つたり、蹴つたりして居るのは中學の歸りに時々見たが何の興味も湧かなかつた。然し一度其の試合を見ただけでわけもなく惹き附けられてしまつたのである。ラガーが何故我々と云はず一般的に惹き附ける力を持つて居るのかと言ふと、此れは競技其のものに他のスポーツと著しい異つた特色が備つて居るからだと思ふ。例へばラガー程體の活動に極端な自由が與へられて居る運動競技はない。即ち長さ五十五間幅三十七間半と言ふ廣い運動場を一の球を中心にして走ることと組み合ふこと、の連續を約三十分間二回に亘つて續けるのである。色々細かい規則はあつても要するにお互の陣地が五十五間の兩端に十間餘りの幅で隣接して居るが其處へ球を運べばトライと言つて三點得點する。此れを目的として十五人が分業的に

連絡をとつて活躍するのである。此の他に二三の得點方法はあるが主たるものはトライである。

此の競技の根本的要素として走ることの速いことは何を措いても必要なことである、即ち短距離競走がのべつに繰り返へされるのである。又ラガーには一つの規則として球を持つて居る者のみに其の相手方が妨害することを許されて居るから球を持たなければ相手方が向つて來ることはない、從つて球を持てば十五人の妨害を受けることをば覺悟しなければならない。此の妨害はタックルと言つて球を持つた者に組み附いて倒してしまふのである。從つて走ることが速いと同時に體力も相當必要である、即ち廣い野天の道場で柔道を行ふ樣なものである。殊に普通試合中最も多く起るラガー・プレイ特有のエベントたるスクラメーヂ略してスクラムと言ふものは、例へば球を手で前へ投げるゝはいけないとする規則（平行或は後方へ投げるとは構はない）を破つて、過つて若し前に投げた場合に起り得ることであつて、其の球が相手方に有利に展開されるならばレフリーは笛を吹かないがさうでない場合は笛を吹いてプレーの進行を止めて其地點でスクラムを命ずるのである。

其の場合雙方八人づつが前列三人第二列二人第三列三人と重隊になつて雙方の前列三人づゝがお互に向き合つて頭を突込んで組み合つてるのを各第二列第三列と其の尻を押して揉み合つてる場合他の一人が雙方の最前列の横から投げ入れる球を、押し合つて味方へ足でかき出すのである。が此のスクラムで押し合ふことが殊に體力の優秀を要求するのである。紙數に限りがあるから不滿足な說明しか出來ないが、要するに此のスクラムと言ふものは廣い面積の土俵で八人づゝが四つに組んで押し合ふのである。そして球を味方のものとして其れを後方に陣する者の手に依つて有利に展開せしめ樣とするのである。斯の樣にラガー程あばれ廻れる競技はない、然し其のあばれ廻る中にも秩序整然たる連絡の軌道が存在して居るのであつて、ラガーが決して奔放な競技でないことは如何に速いランナーも一人で勝手なプレイをやつては絶體に效果のないことで分る。恰も其れは軌道から脫線した快速力の機關車と同じである、何の役にも立たない、十五人が合理的の連絡作業に依つて始めて成功するものである。其のために單獨のファイン・プレイと言ふものの存在性が極めて薄い、一のトライも殆ど十五人の協力に依つて得られると言ふところに、合理的に結論が得られ滿足が得られるのである。而も如何なる試合でも勝つても負けても勝負が終れば矢盡き刀折れの最後まで戰つた氣持の滿足が與へられる。十五人總てが一定の時間中連續的に活動を續けること、勝敗が時間的に決定されることは、總てに於て緊張を以て終始するといふ結果になるのである。此等の點がその苦心附けるものの主たる力をなすものでないかと思ふ。

殊に近代社會世相は何事もテンポの速いことを要求する。而して大衆的な要求する時代に在つて、ラガー程其の相に合致したスポートは外にない、何故ならば前に述べた樣にラガーは一定の時間中スプリントとストレングスの眼まぐるしい連續プレイである。プレイ

ヤー自身の息をつく暇もないと同じ様に其の間フアンの息をも殺してしまふ、而もラガー程多人數な團體競技はない、競技其のものが大衆的である。是もラガーの目覺しき發展が偶然でないことを知るのである。

而も斯の如く近代社會人が彼等のスポーツ慾の完全なる滿足を此のラガーに求めて居るが、近來此のラガーが更に社會運動の直接闘爭に利用す可く目を附けらるゝまでに至つた事は、其れが假令彼等の氣まぐれであつてもラガーが單なる世相のスポーツの一部を占めたるに過ぎないと見ることは出來ない。ラガーの存在が社會的の意義に日一日と深い關係を有して來ることを物語るものである。

數年前東京帝大のラグビー・フットボール學内大會に參加したチームはボート、陸上、柔道及其の他の運動部を初め有志團體の諸チームなどで、未だ一般的にラグビー・フットボールの存在をすら知られない時にしては實に盛んなものであつたが、其の中にも特に異彩を放つたのは思想團體の參加であつた。即ち新人會、セッツルメント、或は天神山チームなど、殊に天神山には左翼の有名なる某文士等の卒業生も加はつて居た。大會最後の日の大コンパには夫々チームのキャプテンを初め有志がこぞつて各々勝手な熱を吹いてメートルを上げて居たが、新人會の或る者のテーブル・スピーチにはラグビー・フットボールは實に愉快なものである、我々は此の猛烈なる運動競技が、殊に多數の敵を突破して勇進することは、來るメーデーに於て警戒線を突破するに最も利用價値のある運動であると半分冗談半分眞面目で氣焔を吐いて居た。

又一方應を異にして二三年前當時警視廳に在勤して居た或る友達が、私に警視廳の巡査にラグビー・フットボールをやらし度いと思ふ。これはラグビーの連絡のある協力と、押すスクラムの方法が何々大會の群集を整理するに非常に便利だらうからなどと言つて居た。

最近或る左翼の人の見方としてラグビー・フットボールがチームの十五人のメンバーに補缺を許さないところ即ち十五人が途中負傷其他で缺けるところがあつても補充を絕體に許されないで、最後まで戰はすところに強い爭闘心の養成に資するところがあるとして、左翼無產階級の運動に利用價値を認めて居ると述べて居た。

社會運動者並に社會運動取締者が共に見る外觀的のラガー競技の利用價値の考察に就ては其れがどんな見方であらうと我々は其れを論ずる必要はない。只我々は如何なる階級にも如何なる團體にも、ラガーを普及せしめることがラガーを社會的に、單に存在の大をなさしめると言ふ誇りよりも、ラガーを行ふ者には必ずラガーを内面的に蟠居するラグビー・スピリットに依つてあらゆる社會を淨化することが出來ると信ずるからである。

此のラグビー・スピリットはラガー其のものから生れ出るものであつて、此の最も自由な活動の、而も類のない猛烈な體力の闘爭を許す競技であればあるだけ、各自の自制心を極度に、競技其れ自體が要求して居るのである。若し假りにスポーツマン・スピリットに缺けたプレーヤーが一人でも混ざつて居る時は競技の性質上肉體的に危險が及ぼされ易い。

從つて競技は不可能である。試合が激烈になつた場合肉體的に如何なる激しい爭闘が行ふても其處に何等の私心なく、只々競技其ののゝ爭闘であつて、決して感情の爭闘を挾むことのないことの保證の出來ない者が一名でも加はることは許されない。若し假りに居たとしたらラグビー界から葬り去る程ラガーは卑怯未練を嫌ふものである。又ラガーの最も特徴とする自己犠牲の精神が自然に養成されることである。一の球を生かすために己を殺すことが此のラガー・マッチには最も必要とするのである。此れ在つてこそ「吾々」は勝てるのである。假令敗れても悔ゆるところなく破れるのである。

先にも述べた樣に勝は決して一人で得られない、十五人の協力で然も常に球を生かすために如何なる犠牲をも拂ふことに依つて得られるのである。球を有利に展開せしめるためにあらゆる努力と犠牲を拂ふのである。此れは競技其のものが自然に敎へることである、從つて自己の功名心を沒却してチームのために働く精神は十五人と言ふ人數が多いだけラガー程強く養はれるものは少ない。此の精神が如何なる社會に在つても人類が共同生活團體を營む以上最も必要とするものであつて最も缺乏して居るものでないだらうか。

又ラガーは三十人がたつた一人のレフリーに依つて審判されることである、而も其の審判には絶體に服從す可き義務を有して居る、一人のレフリーが廣いグラウンドで而も三十人のプレイヤーの行動を知るとは出來ない、レフリーの眼は極端に言へば僅に球を中心とした附近に過ぎない、從つてレフリーの眼から離れた或は其の陰のプレイヤーの行動は其の審判者の眼にかくれて居るから規則を破つた行爲が行はれてもレフリーには知られずに終ることが出來る。卽ち規則を破り得ることが容易である。然し其れをしも破らずレフリーをして球に安心して注意力を集注せしめるところにラグビー・フットボールが自然に生む美點が存在する。

斯の如き中でレフリーの主觀のみを基礎とする判定に全部信頼し切つて勝敗の鍵を委し彼の一言が最後の決定として、假令其れが誤審であつても易々諾々として服從するところを特徴とするのである。

一度雙方のチームから依頼した審判官に對して其れが誤審であつても、人間である以上止むを得ずとし其れに不平を抱かず是認することを敎へるのである。此れについて一九〇五年ニウジーランドのラガー・チームが英本國へ遠征したが三十幾回の試合で只一つ對ウエールスに惜しいことに三對零で敗れたのみで殘りは全部勝ち放して歸つた。其の後歐洲大戰が始まつて、かつて遠征軍のメンバーの一人だつた者が出征したが或る戰で重傷を負つて此の世を去らうとする時に、初めて其の往年のウエールスに敗れた三點の一のトライは事實はトライでなくて其の球をウエールス軍の一人が手を着ける前に自分が先に手を着けたがレフリーは知らなかつたと言つて息を引き取つたと言ふことである。彼が死ぬ間際までレフリーの誤審に對して恐らく誰にも話さなかつたのであらう。其れは彼が息を引き取る苦しみの中に最後の言葉として殘したことで明であるが、試合の後に其れが抗

義でもなければ又意見の公開でもないならば其の時の事情を誰かに話しても別に構はない樣なわけであるが、其れを此の世を去る最後まで默して居たことにラグビー精神をよく體得して居た眞のラガー・マンであつたことがわかるのである。之れをもう一歩進んで言はずして何故死な・かつたと言ふ人があるかも知れない然しニウジーランドからはるぐ本國へ遠征して三十幾回の中只一回の敗北に而も其れがたつた一のトライであつた時に、其のトライが明かな誤審であつた時、其れをしも默して死ねと言ふことは人間を離れた神に近いものに要求する言葉ならいざ知らず人間に向つて言ふ言葉としては無理である。彼は人間としての最大限度の服從を甘じて忍んだものと見ることが出來る。此の他にラガーの特徴とするところの職業選手に對する觀念、及び金錢に對する見解等他のスポーツと趣を異する點も大に論じ度いが、紙數上此の程度に止める。

ラガーはスポーツの一のエベントとして飽くまで人間の運動興味を滿足せしめる競技に過ぎない、然し其れに存在するスピリットは競技其のもの丶性質上自然に流れ出るものとするも、其れを我々は見逃すことは出來ない。我々は我が日本の社會人が若し此の精神に浸潤したるもの丶みで構成されて居るとしたらさぞ愉快な社會が生れるだらうと常に考へて居る。

歐洲大戰に於て英國が八月四日對獨宣戰を布告した時、平素ラグビー精神で養はれて居たプレイヤー達は如何なる行動に出たか、彼等が犠牲的精神に培れた其の結晶は遺憾なく現實に社會面に表現したことを見よ。宣戰布告されるや否や全英國の殆ど全部の名あるラガー・マンと言ふラガー・マンは、銃を肩に劍を腰にして恰も試合開始のキック・オフの時の樣に一齊に軍隊へ志願し一週間を出ずして殆どラガー・マンは例外なしにカーキ色の服を着てしまつたとは戰爭中に出版されたラグビー・フットボール國際選手追悼錄の序文に乘せられた記事である。多數の選手達は殆ど戰場の露と消え果てた事であつたが、其の追悼錄が出版された時はまだ戰爭中で　其の序文に現今まだ平和の曙光を認むる能はざるもラガー・マンは最後まで戰地に踏み止り、タイム・アップまで、弓矢の盡くるまで、奮鬪する事を確信するものである。この事たるやラガー其のものが敎へるところであつて、斯の如き出來事は未だ英國の歴史に見ざる所であると述べて居る。　宜なる哉彼等はラガーに培はれた人達である、戰場に於ける彼等は實にベスト・ファイティング・マンであつた、從つて其の生命の犠牲もおびたゞしいものであつた。此の追悼錄の著者も有名なラガー・マンであつただけに其の序文の最後に、今は泣く可き時でない此の悲しき而も誇りある追悼錄中に今名を留めんとする戰死者達も吾人の泣き悲しむ事を欲するものでない、若し涙を流すならば其れは悲でなくて羨みの涙でなければならない、國王のため帝國のため、正義のための光榮ある死を誰が羨しく思はざる者があらうか、彼等の光輝ある忠節の手本は英國民族の存在する限り、永久に生きるものであらねばならないと述べて居る

新著月評

最も權威ある批判であり推薦である

藤井甚太郎著　日本憲法制定史

吉野作造

日本憲法の制定を促したる主たる原動力は矢張り國民の間に廣く醞釀されてゐた公議輿論の思想であると云ふ解釋を執れば、その公議輿論の淵源の探究は固より遠く維新前後の形勢に遡らればならず、從てまた日本憲法史も筆を幕末に起さねばならぬは當然だ。この點に於て藤井甚太郎君の新著「日本憲法制定史」は、名に應はしい立派な結構の上に組み立てられて居るが就中幕末並に維新直後の憲政思想の展開を詳叙せる點に於て最も優れたる特色を示すものと考へる。

日本憲法制定の由來に關する在來の普通一般の說き方は斯うだ。德川幕府を倒した後の我國の政體は皇室自ら天下の中心となり民と共に此國を治むると云ふに在る。所謂維新の宏謨は五條の誓文にも現はれて居り、之に基いて明治九年九月元老院に賜へる國憲制定の詔勅があり、次で明治十四年十月の國會開設の大詔煥發を見て、遂に二十二年の憲政發布となつたのだ。卽ち二十二年如何なる憲法の發布せらるるやの根本旨義は遠く既に維新の當時に定まり、その定まつた精神が其儘健全に成長して現行憲法となつたのだと云ふのである。二千年の歷史を僅々一二頁の間に述べると云つた風に出來るだけ簡潔に骨の骨だけを書くなら右の如く云へぬこともない。併しそれでは現在の我々に取つて何の役にも立たねば又何の興味も惹かない。日本憲法の現實の姿は、決してそんなものではないのである。

手短かに云へば日本憲法は命を奉じて伊藤博文の起草せるものである。然らば伊藤の憲法思想の何であつたか、又彼れの思想の構成に多大の影響ありし當の時代の背景は如何ありしか、就中政治家として彼の實際經驗の如何等は、最も愼密に研究されなければならぬ問題だ。彼は當時の廟堂大官の中では最も進

新刊紹介

東西素描大成・第四卷（安田・小杉・和田・山本編）　主として支那の花鳥動物畫家のそれを收む。氣品高きクランカルな味をとる。（菊倍版二十葉、豫約品、東京牛込喜久井町三四・アトリヱ社）

一自由人の放浪記（石川三四郎著）　金がなくては病氣見舞もできず、立派な汽船美事な鐵道があつてもそれが一般民衆の人情をふみつけるために使はれる世の中では、自由人の放浪も又一つの戰ひである。本書は其の美しい記錄。（四六版七一六頁、定價二・五〇、東京麴町下六番町一〇・平凡社）

勞働宰相マクドナルド（澤田謙著）　勞働運動家、政治家、及び人間としての彼を描く。讀者は本書に於て、強い理想家強い現實家、冷徹白水の如き理性の人、熱烈赤焰の如き情熱の人、強剛鋼鐵の如き意志の人、男性的信念の人としての彼を知ると共に、英國の勞働黨政治史を茲に見るであらう。筆致は潤達流暢（四六版三九一頁、定價一・五〇、平凡社）

大統領フーヴァー（高松梅吉譯）　原著者はフーヴァーの學校友達で後に新聞記者になつたアーウインである。フーヴァーは九歲で孤兒になり十四歲で給仕になり、苦學して大學を卒業した。續いては就職難の路に一介の技手ともなつた。その彼が米國大統領になるまでの波瀾重疊の生涯を描ける好個の讀物。附錄として稲原勝治氏の「大統領としてのフーヴァ

歩的思想を有するものとせられてゐた、けれども憲法論勃興當時の彼れは矢張り孰れかといへば反動派の代表と認めねばならぬ。之等の點藤井氏の本には說いて未だ詳しからざるの憾あるも、要するに我國憲法の制定が政界に於ける二大傾向の葛藤の結果として促進されたものなることは、疑を容れぬ事實である。

私の考では、本邦憲法制定の沿革を說くには四つの時期を劃せねばならぬと思ふ。第一は維新より明治七年民選議院建白迄である。此時期は幕府を倒して新しい政治を施くと云ふ意氣込みであつただけ人々は普ねく公議輿論の政治主義に傾倒し、百事草創の際とて實際の經驗に之を徵すると云ふ暇もなかつた事とて、官民共に淺薄ながら過分の禮讃を之に捧げて何の不都合も見出さなかつた。第二は民選議院建白より西南戰爭までである。民選議院の建白は公議輿論思想を政治上の實際問題化し、始めて施政の衝に當れる者をして大に反省する所なきを得ざらしめ、殊に民選議院論は新に野に下れる者の政府對抗の武器として採用される事となつたから、それだけ政府は自らその反對の立場に立て籠らざるを得なくなつた。それでもまだ政府は全然反動的地位を執らず、出來るだけ在野黨と交讓妥協して時局收拾に協戮せんことを期したのであつた。第三は西南戰爭より十四年の大詔煥發までである。此時期に於て民間政黨と官憲とは國會開設乃至憲法制定の問題を中心として正に敵味方に分れ大に火花を散らしたのである。外形上此時期は憲法制定史中の最も光彩陸離たる部分と謂つていゝ。而して此時期の葛藤がまた後年の憲法內容の決定の上に多大の影響を與へたるべきことも言を俟たない。第四は大詔煥發から憲法發布までである。憲法制定だけから云へば此時期は單なる準備期であり、其限りに於て伊藤博文並に其配下の一擧一動は大に注目の要あるが、其外には格別注意すべき事柄はない。尤も憲法法典といふを離れ廣く憲政の準備時代として之を觀れば、此時期に於ける官憲の猛烈なる彈壓、之に伴ふ民間政客の滑行的陰謀、其他外交問題を機緣とする民間政治運動の再擡頭の如きは、最も注意すべきものであらう。

藤井氏の著は右の四期を通じ即ち幕末より憲法發布に至るまでの憲法制定に關渉ある凡ゆる問題に觸れ、その經緯を順序よく我々に示して吳れるのであるが、就中第一・第二期即ち西南戰爭以前の部分に就ては最も詳細を極めて居る。其代り私の所謂第三・第四期の

アー」を收む。(四六版六〇八頁、定價二・〇〇、外交時報社)

戀愛論(十川杏村著) 一文化生活としての戀愛生活を組織的に批判し、學としてのエロテイクの建設を企圖せるもの、興味あり有益である書(四六版四〇二頁、定價一・〇〇、東京麴町一ノ五・第一書房)

産兒調節論(山本宣治著) 本書の內容は、産兒制限を中心とした文化批評であり、而して著者獨特の痛烈味を以て社會の萬般に亙り當るを幸ひ薙ぎたをした八つ當りである。(四六版三五七頁、定價一・五〇、東京本郷湯島切通坂町一九・ロゴス書院)

ロシヤ大革命の前夜(大竹博吉監輯) 原著者は革命的地下運動の代表的鬪士でありボルシエヴイキ派の革命家であるシユリヤプニコフ。當時の客觀的狀勢を描いて興深い(四六版三七七頁、定價二・〇〇、東京麴町內幸町一ノ五・ロシア問題研究所)

敢然頂角を往く(二荒芳德著) 「私有財産制度果して是か非か」「天皇の觀念」「カフエー偶感」「新日本の自主的建設」其他謹嚴なる識見を隨處に閃めかして居る說論集である。(四六版三二七頁、定價一・五〇、東京京橋南鍋屋町一二・實業之日本社)

麥の花(難波專太郎著) 歌集(四六版二〇六頁、定價一・五〇、京城蓬萊町四ノ一一・眞人社)

カール・マルクス(服部辨之助譯) ラスキ原著、マルクスの生涯及思想に關する積極的な批判的學術的一評論である(四六版一〇八頁、定價・七〇、東京麴町內幸町一ノ五內幸

敍述は頗る簡に失し幾分均衡が取れぬ觀あるを憾みとすべきであらう。尤も第三期に就ては自由黨史の如き既に就て其詳細を知るに苦まざる著述もある。藤井氏の如き新しい學者から新しい解釋に基く詳叙に接せんことは私共の冀ふ所だけれども、兎に角此部分は他に賴り處もあるから姑く我慢するとして、第四期に就ては從來餘り研究されても居らず且之に關する著書論文も甚だ尠いのであるから、是非この著者を煩し近き將來に於てもつと詳密なる研究に接したいものと思ふ。藤井氏は之等の點を調べらるるに幾多の便宜も有つて居らるる筈だ。第一・第二期を詳述された程度に第四期を明にされたら、それこそ日本憲法制定史は完璧に近きものとなるであらう。

先きにも述べた如く、第一・第二期殊に維新直後に於ける公議輿論思想の實際的展開の敍述は正に本書の特色であり其の最も光彩ある部分である。事實この著者は尾佐竹博士と共に此時代の史實に關する二大權威であるから、本書が其部分に特色を示すに不思議はなきも、たゞ讀者と共に本書を手にして深く銘記したきは、永い封建の壓制から解放された當時の先覺が所謂輿論政治の根柢の公明正大なるに如何に感激心醉したかと云ふ點である。故に實際の政治經驗が明治十年後に至り爲政者をして自ら反動的立場に據らざるを得ざらしめても、それでも彼等は正面から公議輿論そのものに反對することは出來なかつた。板垣等の民選議院論に對する政府側の對抗武器が尙早論であつた如く、十二三年代の國會論に對しての政府の對策は矢張り漸進論であつた。民間の理想から云へば、その主張は政府側の反動的思想に依つて大に枉げられたことになる。併し乍ら官憲の方から云へばやりたくもないものを無理にやらされたのだから其意にあらざる大讓歩と謂ふべきであらう。斯かる大讓歩を強いてまで遂にその理想の一部を實現せしめたとすれば、明治前半期の輿論政治思想の由來は蓋し一朝一夕の事ではない。之等の點は從來人多く漠然之を唱へて而も其の詳細は餘り知られて居なかつた。藤井氏の本書は最も此點に詳密なるの一事に於て亦大に其價値を推賞さるべきものであらう。而して其擧ぐる所の材料が普通に多く得難きものなるの點に於て、本書には實に二重の價値を歸せらるべきである。

同書の隨所に現はれた著者の歷史解釋の基本見識に就ては、必ずしも同感を表し得ざるものあるやに考へらるるも、之は問題外だが

ビルディング・理想社出版部)

平野國臣傳(春山育次郎著)　微賤の一濱人より身を起し、絶えず闇黒祕密の間を潜伏微行して君國のために勤勞せる幕末憂國の志士平野二郎國臣を詳細に取扱ふ(菊版六三一頁、定價 三・八〇、平凡社)

太平洋問題(米田實著)　太平洋に於ける列强の地位形勢政策並びに太平洋に現はれつつある重要な諸問題に關する的確な解説である(四六版三一七頁、豫約非賣品、東京・大阪・朝日新聞社)

英國勞働黨のイデオロギー(河合榮治郎著)　自由主義的傾向をもち且マルキシズムより合理的なりとして是をとく。附錄として「ラムゼー・マクドナルド」を改む(四六版一〇九頁、定價 ・五〇、東京京橋第一相互館・千倉書房)

文學理論の諸問題(平林初之輔著)　文學の舊理論崩壞の過程を辿り、新理論未だ全たからざる新舊文學交替期に於て、何が最も問題とされねばならないかを讀者は玆に發見するであらう。(四六版二九七頁、定價 一・八〇千倉書房)

産業合理化(小島精一著)　最近世界經濟の大勢である産業合理化運動の技術と効果とを獨占資本主義の現段階に照應せしめつつ、組織的に檢討せるものである。敢て熟讀をすすめて憚らぬ(菊版三七六頁、商學全集第九卷千倉書房)

ら茲には述べない。（九月九日記）

本庄榮治郎編 日本交通史の研究

増井幸雄

本書は、京都帝國大學經濟學部に於ける本庄氏擔任の演習から生まれ出た京都經濟史研究會の紀要第一册として公刊されたものである。それは、日本交通史の體系的著述でもなく、又交通研究者の立場から書かれたものでもない。日本經濟史の中で交通に關する部分の諸事實に就いて經濟史研究者の立場から書かれたものであり、云はゞ經濟史研究交通篇とも云ふべきものである。從つて、本書を紹介し批評することは日本經濟史研究者の手に於て最も適當に試みられ得る所であつて、筆者の如きは其の任に在らざるものと思惟する。併し私は、一個の交通研究者として、過去に於ける交通の發達過程を知らむが爲めには常に經濟史家の研究に依頼しつゝあるものであり、之に求める所多大なるものあるが爲めに、茲に自分の立場から本書を讀んで得た印象の一二を記して見たいと思ふ。

私が本書の目次を見て先づ第一に氣付いたことは、研究の主題が殆んど徳川時代に於ける交通制度中の或るものに偏して居るといふことである。論文九篇中、本庄氏の「徳川時代の交通概說」、大山氏の「姫街道の研究、附氣賀の關所に就て」、平松氏の「大井川步渉越制度」、和田氏の「番船と清酒取引の慣例」の四篇を除く以外は總べて助郷の制度に關聯する研究であつて、全體の上から見て陸上交通に偏し、特に助郷制度に偏して居る。徳川時代の交通に關しては、制度や政策の研究特に陸運に關するものは從來相當に文獻が發表されて居るが、水運及び交通器具に關する方面では未だ種々に幾分の疑問となつて居る點が殘つて居るのであつて、本書中に此の方面に關する詳細なる研究をも交へて欲しかつたと思ふ。勿論、本書は最初から體系的に企てられたものではないから、一方に偏することも已むを得ない所であるが、併し何時か此の方面の研究をも發表されむことを切望せざるを得ない。

次に、通讀の際に氣付いたことは、大部分の論文の叙述が頗る實證的たることである。而もそれは、研究が一般論としてゞなく、個々の地方に於ける制度や事實に限られて居る關係上、資料として地方的のもの、從つて從來世人の眼に觸れなかつたものが多數に採り入れられて居る。此の點は、經濟史家の眼から見れば頗る珍重に値するものであらうと想像される。併し、何分にも此の方面に素人たる私から見れば、其の大部分は餘りに實證的たるが爲めに、一方には文章の流暢なるものあるにも拘らず、可なり讀み辛かつたことを告白せざるを得ない。資料の原文その儘の引用の餘りに多いのは、專門家たらざる讀者にとつては可なりの負擔である。資料を註に廻して本文を簡單にしても實證性や正確性を傷けることはないであらう。

內容に關して望蜀の感を懷いた點を述べると、本庄氏の論文中に、菱垣廻船及び樽廻船を定期航海であるとしてあるが、此の點に就いて今少しく詳細なる說明を欲しかつたと思ふ。交通を取扱ふ者の間では定期航海とは定所的且つ定時的の航海と解せられてゐる。私が從來渉獵し得た文獻には何れも是等の廻船を定期航海であると記してあるが、それが定所的であることは明かにされて居ても、それが果して定時的であつたか否かは明かに示されて居ない。今、本書を見るに、此の點は本庄氏の論文にも示されて居らず、又、是等の兩廻船の共に行つた所謂番船を取扱ふ和田氏

の論文にも示されて居ない。（尤も、和田氏は是等の廻船を定期航海だと云つて居ないから當然の事ではあるが。）私は、是等の廻船を一種の定期航海、又は定期航海の先驅とは考へ得るが未だ之を純然たる定期航海の濫觴であるとは斷言し得ない立場に居る。此の廻船が一定のスケヂユールに依つて定時的に運航されたものであるか否かの點を明示されむことを切望する。

それから、兩廻船が互に競爭した旨は本書にも（十九頁）又他の多くの書物にも書かれて居るが、此の點が私には明瞭に了解されて居ない。酒問屋が雜貨の問屋たる十組問屋から分離して樽廻船にのみ積荷を託し、十組問屋では菱垣廻船のみに託することになつたとすれば、樽廻船と菱垣廻船との間に競爭は行はれ惡いやうに思ふ。雜貨の荷主が密かに樽廻船に「洩れ積」するに至つたとしても、それが廻船問屋側の運動に基づいて居ない場合には競爭の結果であると云はれない。後年に至つて兩廻船が積荷の種類の分別を協定するに至つたことも、當事者間の競爭による紛議又は不利を除去する爲めとのみは云はれないやうに思ふ。謂ふ所の兩廻船の競爭とは、運送業者としての營業上に於ける積荷爭奪の競爭の意味か、それとも單に存立を競ひ勢力を競ふといふのみの競爭の意味か、其の邊の事情を明かにして頂きたいと思ふ。

最後に、極めて些細なことではあるがもう一つ附け加へて置きたい。同じく本庄氏の論文中に、江戸に十組問屋と稱せらるゝ荷主の組合が生まれ、大阪にも十組問屋が興され、東西連絡して海運同盟を組織したとあるが（十八頁）、交通を論ずる者や海運に携はる者の間では、海運同盟と云へば海運業者間の同盟と解せられて居るから、若し十組問屋が廻船問屋の同盟でないとすれば、右の用語は適當でないやうに思ふ。

以上、私は著者達に對して異なる立場から不足を云つたり註文をつけたりするのみで、未だ此の書から得た利益を擧げることを爲さなかつたが、私は各篇ともに確實な史料に依據する是等の實證的な諸研究論文によつて、從來漠然と了解して居たに過ぎない事柄も明確に且つ詳細に知り得た所が少くなかつたことを、玆に公言しなければならない。本庄氏の論文によつて徳川時代の交通狀態を簡明に知り得たこと、大山氏の「助鄕と農民の生活」、黑羽氏の「草津宿の助鄕に就いて」、黑正氏の「助鄕に基く農民の紛爭」等によつて助鄕制度の内容と其の弊害とを詳しく知り得たこと、而も此の弊害を幾分か緩和する制度が少くも一部の地方には存在したことを井野邊氏の「大垣藩の百匹傳馬制度」によつて知り得たこと、黑羽氏の「明治政府の助鄕政策」によつて陸運會社の創設に至るまでの事情を知り得たこと、和田氏の論文によつて番船制度の詳細なる内容と清酒取引上の慣習とを知り得たことの如きは是れである。卷頭に珍らしい史料の寫眞版三葉と一葉の地圖とを載せ卷末に昭和二年度及び三年度に於ける、日本經濟史文獻一覽を載せてあるのも、共に私を益する所が少くなかつた。（改造社）

羽仁五郎著 轉形期の歷史學

三木　清

これは動ける魂の記錄である。廣い受容力を有する著者は、また深い不安の心をもつて、社會の轉換期における歷史學そのものの運動を眺め、この運動の諸形態を叙述した。この叙述は、我々の時代の歷史的特殊性に相應して、主として批判の、しかも破壞的批判の形をとつて現はれざるを得ない。この書の

内容をなすものは何よりもブルジョア歴史學の種々なる觀點よりなされたる批判である。

著者を絶えず指導して、この論文集を一個の統一あるものとしてゐるのは、歴史學の諸方法そのものの辯證法的發展の思想である。一定の歴史的方法は、その行程に於てそれが最初に有したる革命的性質を次第に失つてゆき、やがて反動的性質のものにまで轉化するに到る。文獻學的歴史と雖ももとは革命的なものであつた。しかしそれは必然的に反動的なものとならねばならなかつた。文化史的歴史もまた同じである。このやうな見解は、この書物の代表的論文と見らるべき「歴史學の方向及び方向轉換」の中で、豐富なる材料、殊に我が國における近代歴史學の發展に關係して、鋭くまた明快に展開されてゐる。歴史學の辯證法的轉化の思想は、また、他の方向に於て、國民主義的、民族主義的、等々、の個別性、特殊性を中心的な見地とする歴史學に關する著者の批判のうちにも、そして反對にランケやヘーゲルなどの意味に於ける、若くはウエルスの意味に於ける世界史的な歴史學についての批判のうちにも含まれてゐる。著者は前者の問題を「個別特殊性の幻想」といふ注目すべき論文の中で論究し、「世界史の可能性と必然性」に於ては特にウエルスを問題として取扱つてゐる。

到る處唯物史觀を根柢とする歴史學への道が掃除される。それは「事實の選擇と解釋」といふ基本的な問題から、唯物史觀と發展段階の理論」といふ高次の問題にまでひろがつてゐる。著者の意圖はブルジョア歴史學の諸方法のうちに含まれたる辯證法的矛盾が恰も唯物史觀に於て統一を見出し、かくて解決されてゐることを示すにある。「事實の一定の選擇は事實の一定の解釋を強要し、一定の事實の解釋は一定の事實の選擇を必然とするといふ矛盾の統一は、近代的プロレタリアートとの理論的意識に於てのみ可能である。」この種の見解がこの著作を通じて流れてゐる。

固よりこの書は性急なる讀者の要求に適すべきものでない。それは著者が「全力を擧げて戰ひ、進んで來た」道程の記録である。我々はそこに著者自身に於ける發展を見るのであつて、既に到達された立場に於ける著者の思想の統一ある展開を見出すことを斷念せねばならぬ。それがこの書のなだらかな卒讀を妨げてゐる根本的な理由であらう。しかし同時に我々は著者が讀者に對する親切からこの書を一層讀み易きものにするために努力されることを求めても差支ないであらう。文章の構造がむづかし過ぎる。一般に讀者のための配慮が缺けてゐる。書かれる言葉に直さなければならないやうに思ふ。

わが國の現在の學問の段階に於て批判がそれ自身なほ積極的な意味を有することを思へば、主として批判に終始するこの書の價値も甚だ僅少ならぬものがあるであらう。この書の出現によつて打撃を蒙つたのは、何よりも、今なほ流行せる文化史的歴史學であらう。唯物史觀に向けられてゐる、極めて常識的な疑ひ、非難、等々のものもここに一掃さるべきである。もしそれ著者が今日わが國に於て勢力を有する社會史的、乃至、社會學的歴史學に對する一層深入りした、一層徹底せる批判をこの書のうちに加へられたならば、この書の意義は更に大なるものがあつたであらう。唯物史觀を政治的見地にまで擴大していつて、それによつて歴史學に更に廣き展望を與へることも著者の今後の仕事に屬する。極めて力強きスタートは切られた。我々はこのよき處女作を出されたる著者の多幸を思ふ。（鐵塔書院）

「西部戰線異狀なし」を讀む

絶對的な戰爭もの

櫻井忠溫

けふ鎌倉から來たKが私にかういつた。

「西部戰線異狀なしといふ本を同じ車室で三人も讀んでゐたが面白いと見えるねえ。獨逸語の本を讀んでゐるのかと思つたら、その本だつた。表紙の大きな獨逸文字が若い者に喜ばれさうだね。併し西部戰線異狀なしといふ標題は何のことか知らぬが、餘りパツとしないぢやあないぢやないか」

僕は面白いと思ふこの標題だけで恐ろしい魅力を持つてゐると思ふ。何だか迫つて來るものがあるぢやないか。眠つたやうなある日──戰線異狀なしと報告された日、眠るやうに一人の兵が死んで行つたといふ結末の一節から取つたのだらうが、西の方ニユースなしといふ報導の裡に死ぬるものは死んでゐるといふ──人間の死するなんかニユースにならないといつたやうな戰爭の物凄さが出てゐるぢやないか。これを單にある時代の報告書と見ちや間違つてゐる」

「馬鹿に感心してゐるねえ。それぢや讀んでみやうか」

「戰爭物として絶對的なものだと思ふ。無論評がいゝからだが、日本物の戰記なんか相撲にならんよ」

Kとこんな會話をしたことであつた。

私がこの書を讀んだ時、「これが果して戰爭後にしかも十年も經つた今日書いたものだらうか」といふ疑ひを持つた。

私の經驗からいふと、日露役後七年に或る戰爭物に筆を取つたことがある。ところがどうしても戰爭が戰爭にならぬので、數百枚の原稿を燒いてしまつたことがある。

「西部戰線異狀なし」が戰場を離れて十年後に書いたものとするなら、「時が來れば戰爭なんていふものは忘れてしまふものだ」といふのはウソだ。作者は「砲彈から逃れた」やうにいふが、どうして、まだ砲彈の中に浸つてゐるのだ。よくもこんな生々した記錄を十年後に物し得たものだ。戰場で消えた砲彈が再び紙の上に蘇つて來たのである。

戰爭といへば砲彈が飛ぶの、小銃彈がはねるの、躓くやうに前への

ゐるの、板を倒したやうに後方に仆れるの、と大抵いふことが極まつてゐる。「肝腦は地に塗れ、鮮血は野に漂ふ」といつたやうな安價な形容詞がお極り文句になつてゐる。「火藥の煙が舌の上ににがく感じられた」といふ作者の一語さへ使ひこなせなかつたものである。

戰爭はいつでも砲彈が飛ぶのであり、小銃彈がはれるのであり、人が死ぬのであつて、別にお目新しいところを御覧に入れるわけには行かないのである。戰爭となればいつでも肝腦は地に塗れ、鮮血は野に漂ふのである。併しこの作者の描く戰爭場面は一幕毎に趣向が變つてゐる。――用意か不用意か知らぬが――時には塹壕の上の死骸に蝶が戯れてゐたり、雲雀が戰線の上を飛んで敵味方に音樂を奏したり戰爭のことなんか忘れてゐる人には出來ぬ藝當だと思ふ。十年後に書いたのぢやあるまい。今日まで伏せてゐたのでないかと思ふのも無理はない。彈の降る中で書いても、かうは行くものではないと思ふ節々が多分にある。

作者は戰爭を他愛もないものだと考へてゐる。「サンと輕かしてくれさへすりや、戰爭なんて惡いものぢやない」「うまいものを食はしてくれりやいゝさ」と思つてゐる。戰爭のサカ〳〵した氣分をうまく扱つてゐる。

私が戰場にあつた時、ある日彈のふる中で支那人の畑から茄子をむしつてゐる兵があつたので、どうするのか、と聞いたら、今晩のおかずにするのだといつた。「戰爭」が泣き出しさうなノンビリした光景である。戰爭をかうした方面から覗いてみると、作者が突擊してもちやんと敵の壕からコーンド・ビーフやコニヤツクの一瓶もせしめて來ようといふ不敵な心の出るのも當然すぎる話である。

作者は如何さまよく「食ふ」ことを書いてゐる。何かといへば食ふ話になる。敵味方の飛行機が空中で命がけの勝負をやつてゐるのを見物しながら、ビールを賭けたり、家鴨を盜みにパリ〳〵と塀を越して行つたり、「豆を食ふと屁が出る」などゝノンキな顏をして居たり、とても色氣のない兵隊さんだ。こんな獨逸兵が憎めないぢやないか。だから獨逸兵はフランスでシヤンパンの穴藏へもぐり込み、ポン〳〵栓を拔いて、腰がぬけるほど醉つ拂つた筈である。

兵隊がどれも〳〵大したことをして死んだり傷いたりするわけのものではない。ポツクリ死んだり傷いたりするのもある。作者も歩いてゐる内にポツクリやられた。そしてドン〳〵安全な方へ逃げて行つた。「兩足を射ち飛ばされてゐても矢張り驅け出したらう。股だけでも驅けたらう」作者はかうしたことをえらがりもせず、洒蛙々々と書きなぐつてゐる。何しろ色氣のない兵隊さんだ。勳章なんか貰いたくない、生きて歸りや何よりだと思つてゐたらう。そこをアケスケに書いたところにほんとうの戰爭物だといふ評判を取つたのだといふ話である。

「千九百十八年の夏ほど最も多くの血を流し、最も多くの苦みを嘗めた時はなかつた。戰場に在る者は僕等の方が戰爭に負けたんだといふ事を知つてゐた……」

私はこの一節で泣かされた。獨軍は二十六個國を向ふに廻して戰いつゞけた。併し結局「僕等の方が負けたんだ」と思はなければならな

かつた彼等の心中は察するに餘りある。私は昨年西部戰線を訪れた時ランヌでガクリと横倒しに河馬のやうな死骸を横へてゐる獨逸のタンクを見て覺えず眼が熱くなつた。そして獨軍の敗戰を痛快がつたフランスの記念碑を見てフランス人がイヤになつた。

作者が休暇で戰線から歸省した時、戰友の母親が「あの子が死んでゐるのに、なぜあなたは生きてゐるのです。息を引いた時はどんな風でした……」とたづねられた時、彼はガーンと頭を砲彈で打たれたやうになつた。

「休暇を貰つて來るんぢやなかつた。今まで戰場にゐて呑氣な人間であり、希望も何もなくなつてゐたのだに」

彼はかう思ふと、痙攣するやうに身が震へた。

この一場面を同じく休暇で戰場から歸つて筆を取つた英國のヤン・ヘイの「最初の十萬人」の中の「歸つてみたらチヤツプリンで大騷ぎさ。我々は戰地でクヨクヨしてゐるに及ばん。戰爭をよそに活動に夢中になつてゐるやうぢや、戰爭は立派に勝つよ。もう國へ歸るこつちやない」といふ一節と對照すると、どちらを勝たしてやりたかつたか、考へ直す人もあるだらう。

「フランス女に氣をお付けよ、性が良くないから」(母)

「僕達の隊のゐるところには女なんかゐませんよ」(作者)

私はこの會話を讀んで、歐洲戰爭中、相手を眞劍に「敵」と思つて戰爭してゐたらうかといふ考へが起きた。書中どこにも敵を憎んだ言葉を見出し得ない。そして「何のために戰爭をしてゐるんだ」と思つてゐるやうだ。捕虜に對しても「このおとなしい人達をたゞ一つの命令で僕等の敵にした」と思つてゐる。戰爭を遊戲氣分に取扱つてゐる心持が見える。道理で獨逸兵も佛蘭西兵も塹壕から飛び出して握手したりする筈である。親類同志友達同志の喧嘩のやうなうるほひがある。

ヤン・ヘイは「最初の十萬人」によつて勳章を貰つたりしたが、ルマルクが若しこの書を戰爭中に書いたのだつたら、獨逸は勝つてゐたかも知れぬ。併しもつと早く敗けてゐたかも知れぬが。

作者に戰爭を呪ふやうな氣持が見えるなら、之れは戰爭後に考へついたことで、砲火の下でそんな贅澤な考へは起きやうもない。もつとノンキ坊であるべき筈なんだから。

譯者は名だゝる人だけに「さすがだ」とうなづかされる。兵隊言葉を巧みに使つた點も「さすがだ」と思はしめる。ベランメイがよく利いてゐる。これなら塹壕を中にしてフランスの錠前屋や蘇格蘭の船大工と顏を合はしてゐても、うつりがいゝ。「後備の老兵」として油と藥の匂ひの中で譯しただけに、一層油が乘つたのでなからうか。

譯者の巧妙な筆に釣り込まれた私はもう一度獨逸の戰線を歩いて見直したいやうな氣になつた。首のないのが塹壕を飛び越して行つたりする幻が眼の前に現はれるかも知れぬ。

歐洲戰爭から十年といふ日が流れた。「時は勝手に過ぎ去つた」もうその戰爭も人の頭から消えて行つた。そこへ突如としてルマルクが顏を出した。そして歐洲爭よりももつと大きな意味で大砲を打ちかけて來た。

ルマルク君！ 私——ある時代の戰爭記錄者の一人である私は譯者を通して、君に私のこの心持を傳へたいと思つてゐる。

（昭和四、一〇、一一）

遙に想像以上

千葉龜雄

「西部戰線異狀無し」が本國で出版されて、素晴しく賣れ出すと、ひどい攻撃が二方面からやつて來た、一つは軍國主義連中から。もう一つは宗教家團體から。一體ドイツ國民ともあるものが、ドイツ戰線の内幕を、こんなに細密に、不愉快に暴露するわけは無い。怪しからん。それが愛國主義者と稱する軍國主義群から。この作物は、信仰をからかつたり、神を冒瀆したり、まるで宗教に對する敬虔な觀念が無い。怪しからんぢやないかと。これが宗教團體からの手きびしい抗議。何せ、けんけん、ごうごうを極めたものだ。

しかし、ルマルクは平氣である。英譯によると、彼はドイツの國民がなぜ今日こんなに苦しまねばならぬかの原因を、大戰を知らない新らしいジエネレイションに語る爲に此作物を提供したものである。戰爭と、一時代の運命と、眞正の同胞愛を語らうとしたのだと云ふ。あの恐ろしい戰爭が終つてからもう十一年、世界の民衆は、胸に手を置いて、あの大戰が與へた運命を、決算すべき年代に丁度達したのである。この本に書かれた内容が戰爭に對する、現代ドイツの正直な結論であり、世界の欺かない感情であればこそ、今ごろ出たこの「戰爭物」が、こんな素晴らしい恐慌的賣行きを、世界各國に見せて居る次第であらう。云はゞ新らしい時代の眼で見直した、世界大戰だ。今年のノオベル賞をこの著作に與へやうとする輿論の起つたのも、藝術的價値もあらうが、一つは戰爭内面のきはどい暴露による、平和主義推進の副效果を目あてにするのであらう。ロシヤの作家エレセイエフの「戰爭にては」は、日露戰爭の際の、露軍の腐敗を無慈悲に暴露して居るが、世界的軍國主義の典型たる前獨帝の戰線で、大切の軍隊が、國家的興奮などはこれほどもなくみなこんなみじめな氣持ちで戰爭して居やうとは誰が思はう。けれども、これが近代人の正直な氣持ちである。それがこの作物の持つ一つの價値。

けれども、暴露のみが作家の意識した目的ではない。大戰を通じ、近代戰爭なるものの内容が、藝術的に浮彫りにされて居るのが他の一つの價値である。個人としてではなく、兵士の戰線生活を、一つの全體として團集として描いた手法にも、作家の意圖の清新さが見られる。私は英米新聞などで此書の紹介を讀んだ時は、馬鹿にして居た。いくらよい作物か知らぬが、高々、戰爭を身近く體驗した歐米だから騒ぐのだらう。そう云つた意味の戰爭の體驗を、報告的に書いたものだらうと。が、讀んで見ると、豫想がよい方へ外れた。題材が大戰を中心にしたのは云ふまでも無いが立派に構圖があり。それが完全に板について居る。戰爭のおも

て香板たる血みどろな風景が、とてもキギツドに、細かく、生き生きして色彩を帶びて描かれ、どうかすると平べつたく無味單調になり勝ちな材料が立體的に、びしびし、迫眞力をもつて喰ひ込んで來る。それは作家の明朗な手法にもよるが、それ以上、巧みな構成の取合せによる。不思議な三人のフランス女、休暇で歸つた故郷、父、母、病院、戰友の母入院者の妻等等いはゞ、戰爭と味の違つた部面を戰爭の悲慘面とうまく交錯してカメラのやうな自由なポオズをつくり、複雜した感情を釀し出させる、メカニズムの技倆は手に入たものだ。それに照明彈の下の死生觀だの塹壕の前に戲れるシトロン蝶だの、銃殺される軍馬の悲劇だの、二度と體驗されない異常な光景が、凄慘な、もしくは、骨に泌むやうな美しい表現で現はされて居るのも忘れ難い。讀者は讀み初めの退窟さを少々我慢するがよい。その中に、うろうろ素的な風景が顏を出して來る、そこへ來ると、も讀み殘すわけに行かない。ぐんぐん貪ぼるやうに讀んで行くので、最後の一字まで讀み終るならば、あゝと云つて册子を卓上に置く。恐怖、あはれみ、詩、諷刺、作家が讀者に語り、讀者に印象し、讀者に投げ掛けた疑問なり、告白なりは、どんなに深く讀者の頭腦に、情緒に考察に、永遠に釘のやうに打ち込まれて行くか。讀んで悔ゐず、讀まるべき作物である。

秦君が、兵營の電燈下で、この作物を飜譯し、校正したのは、この作物にふさはしいし、また皮肉でもある。何を飜譯し、校正して居るかを上官が知つたなら、どんな苦笑が太い眉毛の下に浮んだか。秦君の譯文のなだらかさ、私が何の苦もなく、この立派な「日本文」を讀み得た喜びを默謝するのは今さら愚かか。英譯はひどいや、秦君の原文譯が四百三十頁で英譯が二百三十頁、それもよいとして、この作の暗色を救ふ、艶つぽい場面、たとへば入院兵の妻の來た部分その他などが根こそぎ省略してあるのだから問題にならない。

紙面に血・紙背に呻き

水野廣德

秦豐吉氏譯「西部戰線異狀なし」(In Westen Nichts Neues)は其の書名の警拔なる點に於て既に先づ讀書界の注意を喚ぶに足るであらう。

本書は歐洲大戰に從軍し西部戰線に奮鬪したる獨逸人エリヒ・マリア・ルマルク氏の實戰記であつて、今春初めて出版せられて以來僅に數個月間に獨佛英米等に於て、既に百數十萬部を賣り盡したと云ふ近來の快著である。歐洲大戰終つて茲に十餘年、其間同戰爭に關する各國人の著書は恐らく汗牛充棟も啻ならずであらうと思ふ。併し本書の如く斯く短時日の間に偉大なる衝動を世界に與へたるものは蓋し稀であらう。

從來出版されたる歐洲大戰戰記の多くは高級將校の手に成り、そこには多かれ少かれ、幾分の自己宣傳の臭味と軍人式の偉がりがある。之に反し本書は丁年に滿たざる一若年兵士の思ひ出記で、そこに何等の己惚

もなく何等の氣取り味もなく、あるがまゝの事實と有るがまゝの感想とが飾らず、偽らず、衒はず、憚らず、有るがまゝに露骨に卒直に描寫表現せられて居る。その讀者の心臟を抉ぐるが如き直筆と、肺腑を刺すが如き眞情とが、本書をして歐米の紙價を高からしめた所以であらう。

評者としての僕は本書の原文を讀まない。讀んだのは桑氏の譯書である。隨つて批評も亦譯書を基礎としてである。僕は是まで内外人に依つて書かれたる幾多の戰爭本を讀んだ。併しながら本書の如く大なる興味と深き感激とを以て各の頁に對したことは稀である。僕は他用を廢して迄も四百餘頁を一氣呵成的に讀了した。そして頁を繰り行く間に勇壯、痛快、悲哀、悽愴、憎惡、憤激、惻隱、失笑、同情、共鳴等、人間の有ゆる感情が走馬燈の如く腦中に去來して、時には息詰まる樣な焦燥の中に鳥毛立つ戰慄をさへ感じ、時には又あまりに露骨なる眞情の表白に失笑をさへ禁じ得なかつた。恐らく顏色は七面鳥の如く變化して居たであらうと思ふ。

僕は陸軍々人としての塹壕生活の體驗はない。併し水雷艇の乘員として海戰に臨んだ經歷はある。敵軍の下を潜る時の氣持は陸と海とで變りはあるまいと思ふ。塹壕に突擊を待つ時の昂奮は水雷襲擊に向ふ時の夫と大差はあるまいと想ふ。敵彈亂飛の中に對陣する塹壕生活と機雷亂置の上を乘廻はす水雷艇生活との間に心理上の相違があるであらうか。

且又戰後北佛の戰跡を尋ねて、野の果より丘の頂まで目の及ぶ限り、幾重にも／＼張り亙されたる百足の如き赤銹た鐵條網、その背後にはポピイ血に咲く綠の野をば無殘に掘り返へしたる白き長き幾段の前進壕、更に其の背後には鐵とコンクリートとで固めた掩護陣地、痘痕の如く大地に穿たれたる無數の砲彈穴、あちらにもこちらにも幾千と數へ切れぬ十字架の墓標の集團、跡形もなく打ち壞されたる村落の廢墟、幹ばかり殘れる樹林、地面に逆立せる飛行機、小川に轉落せるタンク、路傍に遺棄せられたる彈藥の長列、風雨に曝されて白骨と化せる戰死者の屍など、此戰爭の大と激と慘とを見たる僕は本書に對して充分の理解を持つことが出來ると自信する。從つて陸戰の體驗なき僕が本書を批評することは、或は僭越の叱りはあるかも知れぬが、盲人が象を評すとの誹だけは免れ得ると信ずる。

著者の文は必ずしも艶麗とは云へぬかも知れぬ。流暢とは云へぬかも知れぬ。心理の描寫や感想の表現などは動もすれば日本人には難解の個所さへある。併しながら其の記するところの總ては事實である。其の述べるところの總ては實感である。中にも戰線に於ける敘述の如きは、重傷に苦しむ戰友の血をインクとし、敵兵を刺し貫きたる銃劍をペンとして描かれたるもので、萬死を冒して初めて綴り得たる文字である。紙面には死者の碧血が滲み出て、紙背からは傷者の呻めき聲が聞へる。

日露戰爭後我國の軍人に依つて多くの戰爭記が著はされた。僕も二つばかり書いた。是等の著書の何れを取つて本書と比較するも、その事實を描寫する眞實さに於て、又その感想を表現する卒直さに於て、我に大なる遜色があることを拒み得ない。是れ必ずしも彼と我と筆の力の優劣

のみに由るものでなく、一は又彼我の國情と環境との相違にも基因するものである。

由來敵愾心の強き我が國人は一種の愛國心に拘はれて戰渦の英雄を作りたがる。一般社會も亦飾られた忠勇美談を無批判に無反省に好愛する。同時に我國の「其筋」なるものは、苟くも軍隊の威信を損じ戰爭の尊嚴を汚す樣な事實の忌憚なき發表を斷じて許さない。日本の官憲や軍憲が此種の記事に對して如何に神經過敏なるかは、本誌新年號の創作「氷河」が禁賣になつたことに依つて窺ひ知ることが出來る。斯樣な國に於て偉大なる戰爭文學が芽を出す筈がない。本書の著者ルマルクが日本に生れざりしことを慶祝する。

本書を一貫せるものは眞實なる事實の描寫と率直なる感想の表白とである。首尾を通じて一點の虛僞も一片の虛飾も認められない。戰線を描いては冒頭から結末まで戰友の死の連鎖劇である。併しそこには日本の戰記なれば兵隊の死に臨んで必ず無くてはならぬ「カイゼル萬歲」や「獨逸帝國萬歲」やの叫びが唯一聲も聞かれない。此の萬歲を唱へざる不忠な獨逸の兵隊は、兵營に於ては暴虐なる上官を暗打して袋叩きにしながらも、國民兵として後れて徵集せられたる喧まし屋の校長を古參兵たる元の生徒がサン／＼意地目ながらも、さて戰場に引出されては、炊事係と食物の分配で喧嘩をしながらも、司令部の家鴨を竊み出して空家でこつそり料理しながらも、步哨の目を掠めて裸體で敵國の女の家へ忍びながらも、親閲を受けた後で××××は俺達と同じ樣に糞をするのかと尋ねながらも、また塹壕に敵と對陣しては自分達は何の爲めに誰の爲めに戰爭をして居るかを疑ひながらも、更に負傷して野戰病院に送られては、軍醫の無責任と不親切とを猛烈にコキ卸しながらも、彼等は勇敢に戰つて壯烈に死んで居る。誰が獨逸の兵隊を弱しと言ひ得るか。

茲には軍國思想に殺ひ矯められた冷酷氷の如き「市太郎」の母親を波止場に見ない代りに、停車場に息子の出征を送つて、生別死別の悲しみに泣き崩れた、己を僞らざる人を欺かざる母性愛の豐かな母親がある。けれども獨逸の母親が卑怯であつたと誰が責め得るであらうか。彼と是と是非の問題ではない。唯何れが人の子の母としての眞情であらうか。

著者は泥炭掘出身の強健な兵隊をして、

「さうしたらおれはさうだな、巖丈一點張りと云ふ猛烈な女に食らひつくね。本當の臺所女中つて奴さ。何でもかう、しつかりと捉へて抱き甲斐のありさうな奴だね。それからあとは寢床へ飛び込むのよ まア考へて見ねえ、いゝか、彈條のぴん／＼する寢床へ、本當の軟かい羽根蒲團だ。さうしたらおれはもう、一週間ズボンなんかはかねえぞ。」

と叫ばしめ、異性に飢へた戰場の若い軍人の心情をば少しの飾り氣もなく率直に表白して居るかと思ふと露國俘虜の乞食にも劣る悲哀な生活を見ては、

こんなおとなしい人達を、唯一つの命令が僕等の敵にした。同時にこのおとなしい人達を命令一下僕等の友達に變へることが出來るであらう。何處かの或る卓子の上で、一片の書類が僕等の誰も知らない二

三人の人によつて署名されたばかりに、この幾年間僕等の最高の目的であつたものは、實はこの世の中のあらゆる侮蔑と、この世の中の最重の刑罰に値する事に外ならないのだ。

と權力の專横と戰爭の罪惡を呪ひ、更に又自ら刺し殺したる敵の屍體と共に同じ砲彈穴の中に一晝夜を過しては、

「おい戰友、今日は他人の身、明日は我身だ。けれども、もし幸ひ僕が助かつたら、僕はこの我々二人を打ち碎いたものに對して鬪はう、それは君の生命を奪つたものだ。……それから僕には……やつぱり生命を奪はうとしてゐるのだ。戰友、僕は君に約束する。戰爭は二度と再び有つてはならない。」

と戰爭に對する憤激と憎惡とを暴發さして居る。日本の戰爭本の何處を搜がしたら、斯樣な思想的な文字を發見し得るであらうか。

要するに我國には軍人精神鼓吹や、好戰心理養成やの戰爭教科書はあるけれども眞の藝術としての戰爭文字はまだ現はれない。戰爭の眞實を知らんと欲する人は必ず本書を讀むべきである。

＊　＊　＊　＊　＊

¥1.50

少しも無駄がない

毎朝の髭剃にバレーを使へば研いて剃る迄唯の五分間
時間がかゝらず手間が省ける、シカモ一枚の刃が半年
保つから費用は僅かで少しも無駄がない

＊　＊　＊　＊

剃刀で研器を兼ねる

"VALET"
Auto Strop
Safety Razor

バレー自働研安全剃刀

B型　一三・五〇　以上各種
C型　一・五〇　二・〇〇　三・三〇　四・八〇

替及利用ナイフ（刃一枚付）・九〇

販賣所　大百貨店著名洋物雜貨金物店等
取次所　中央公論社代理部



Onoto the Pen

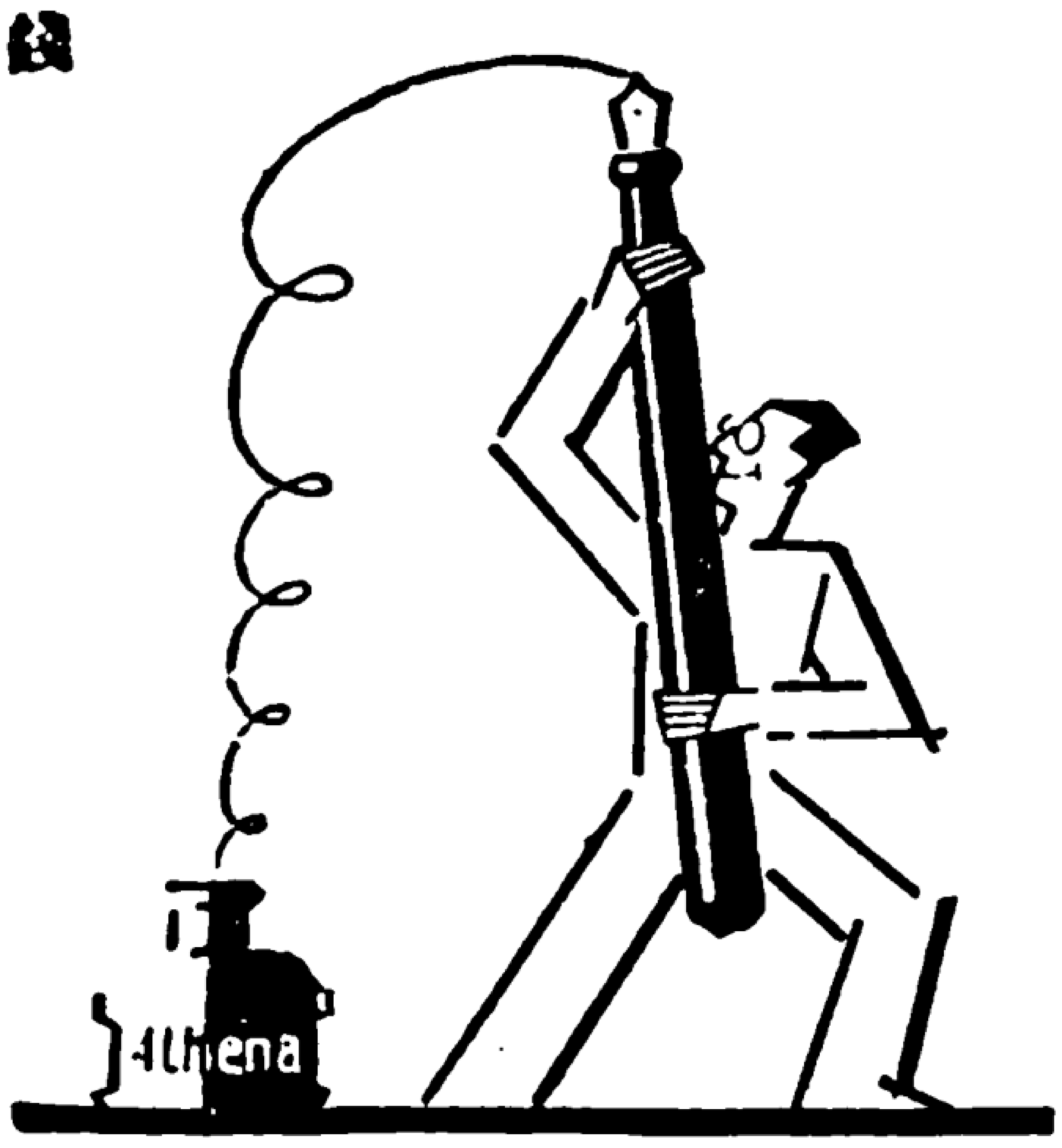
驚嘆すべき耐久力

オノトペンの尖端には驚嘆すべき耐久力がある
アテナインキを適宜に補給すれば天空を快走する如く
縱横無礙一氣に數千語が書上られる

使へば使ふ程書きよくなる

オノト萬年筆　七圓五拾錢以上
アテナ萬年筆　參圓五拾錢以上
萬年筆用アテナインキ　參拾五錢

送料各十八錢（カタログ進呈）



東京日本橋通

大阪　神戸　京都　名古屋

丸善株式會社

横濱　福岡　仙臺　札幌

東京—神田・芝三田・早稻田・丸ビル

世界の流行界に於ける
ナンバーワンの代表品！

KNOX HATS

高級優秀

ノックスハット

超流行の最近型

一九二九年度　秋・冬帽新製品



中山帽子（フェルトハット）が
入荷致しました。

一流百貨店、帽子店、洋品店
にて御愛求を希ふ………

KNOX HATS

米國紐育市
ノックス製帽會社

素人の小說（貝殼追放）

水上瀧太郎

敢て小說に限らず、藝術作品は、玄人の手に成つたものよりも、素人の手に成つたものゝ方が面白いといふ說は屢々聽く。詭辯に似て、一面の眞理を語る說である。

玆に玄人といひ素人といふ、その限界が何處にあるか、截然と區別する事は難事であるが、それを職業とするかしないかで分るのもひとつの方法であり、又制作技術の習練の程度に從つて分るのもひとつの方法である。どちらにしても、今は素人でも、やがては玄人となる者もあるし、一方には永久的素人もあるに違ひない。

それはそれとして、玄人の作品よりも素人の作品の方が面白いといふ說の主たる要素は、玄人の制作の熱情誠實を離れて、職人的技巧の末に走り、型に陷る誘引が多分にあるのに反し、素人は純眞なる處女性を有し、素朴單純なる表現の中に、新鮮感眞實感を保つ事が容易であるといふ事實に歸する。よく新聞や雜誌の懸賞小說などに當選して、いゝ氣になつた作者が、商賣雜誌からの執筆註文が殺到すると、忽ち墮落した作品を書き、素人のよさを失つて、玄人の惡いところばかりを學び、遠からずして行衛不明になつてしまふ實例は頗る多い。卽ち、玄人の作品よりも素人の作品の方がいゝと云ふ說が、一面の眞理を語るわけなのだが、あく迄もそれは一面の眞理で、無條件で肯定し難い事はいふ迄もない。

最近、最も廣く讀まれた小說は、鶴見祐輔氏の「母」だと云ふ事である。一版が幾冊なのか知らないが、既に二百版を超えたといふ噂だ。各地の圖書館の調査によつても、借覽者の數は群を拔いて居るさうだ。人氣が湧いたといふ見極めがつくと、忽ち戲曲化して、帝國劇場專屬の女優が演じ、又他の脚色によつて、新派の役者がおつかぶせて演じた。鶴見氏は申す迄も無く素人であるが、それ程の人氣がどうしてあるのか、氏が若手の政治家として人氣がある爲か、作品が多數者の心に觸れるものを持つてゐる爲か、多分兩者の入りまじつたものであらうと想像しながら、私は相當の好奇心を持つてゐた。鶴見氏程の世間人が、その知識と經驗から得た社會觀を、小說の形式の中に生かして表現出來るならば、今日の日本の玄人の小說家が得意とする身邊小說や心境小說とは全然違つた重量のある作品となるであらう。よしやそれが技巧上には缺點だらけだとしても、素人の手に成るよき藝術品に屢々備はる氣魄、情熱、眞摯、新鮮感の豐かなものであるかもしれない。萬にひとつの期待ではあるが、卷を手にした時、全く知らない相手と勝負事をする時のやうな、興味と緊張を感じた。

卷頭の序文がはりの「母としての日本婦人」と「この小說を書いたわけ」といふ添物は、此の長編を讀むのに、いゝたよりとなつた。

想ふに鶴見祐輔氏は、現代的進歩主義者で、自由思索家で、理想家で、歐米崇拜家で、フエミニストで、通俗の意味に於けるリファイレド・ジエントルマンに違ひ無い。それ等の資格は、すべて今日の通俗小說の讀者に喜び迎へられるものである。いつたい、通俗小說の作者にとつて、フエミニストであると云ふ事は、何よりも強い武器である。現代通俗小說家が愛用する他の要素――ちやんばらや變態性慾よりも、女性おだて主義は、讀者をうつとりさせるのに有效である。何故ならば、通俗小說を讀む人の大多數は女だからである。若しも女性が小說を讀む事を嚴禁したならば、今日謂ふ所の通俗小說は、あれ程跋扈する餘地を與へられなかつたであらう。世界中で一番遠慮無く女のはびこる亞米利加は、世界一の

通俗小說國である。あの國では、男は働く事、儲ける事に沒頭してゐて、本を讀むひまが無い。本を讀むのは女で、女の方が學問知識に於てはまさつてゐると云はれてゐる。少々かけねはあるが、嘘では無いやうだ。殊に小說を讀むのは女である。我國に於ても、雜誌の中で一番發行部數の多いのは婦人雜誌で、その婦人雜誌は女の好奇心を滿足させる猥褻記事と、女の好む通俗小說で埋められる。すべての事件の裏面には女がゐる。如何に多くのよき素質を持つ作家が、數をもつて迫る女の讀者の誘惑に負けて、調子を低くし、又いかに多くのぼんくら作家が、無批判なる女の讀者の爲に――女の讀者の爲めにのみ不當の名聲と過當の物質的報酬を得てゐるか、考へる迄も無く實例はざらにある。

その女を相手にして、大概の女の一生の最後の運命である「母」を主題としたのは第一の成功であつた。

鶴見氏はまぎれも無い歐米崇拜家で、恐らくは日本婦人よりも遙かに知識藝能の豐かなものとして彼の國の婦人を上位に置く人であらうと思ふが、それにも拘らず、現代に於ては一般に日本婦人の缺點と目され勝な忍從苦艱に堪へる特性を、母としての一大特質として認め且稱讚してゐる。私は此の明快なる序文に同感を惜まない。おもふに明治年代から今日迄、日本人は餘りに日本の女の特質と、その職分と、地位に盲目であつた。歐米の女といへば、無闇に偉いものに思ひ、そのうはべ丈を見て天國に住む者のやうに考へ、同時に日本の女は地獄に苦むもの、如く斷定する連中が多い。これは基督教傳道師のいだいた謬見と、その商賣上のかけひきを、そのまゝ拜借した耶蘇の一味の感傷主義である。婦人矯風會的非難觀である。少しく餘事にわたるけれども、たとへば、西洋の結婚は當事者双方の自由選擇によつて、好いた同志が結合されるに反し、日本の結婚は親や他人の意志によつて取運ばれるから不合理だといふ非難の如きは、此種皮相觀の一例である。西洋に於ても、男女の交際は無制限に自由では無く。今日の日本程無拘束では無い。娘の夜歩きの如き、カフエはひりの如き、ダンス・ホオル通ひの如き、寧ろ西洋の方が窮屈であらう。又双方が好きな人を自由に選ぶと云つても、それは形の上の話で、實際は一切の男女關係がさうである如く、手近いもの同志がいつしよになるので、選擇の自由は字義通

そりには働かない。ついでにつけ加へて置くが、基督教傳道師や矯風會連は、日本の公娼を非難する事は頗るきびしく、それは正しく同感であるが、同時に西洋の多くの都會の夜、途上行列をつくる辻君の群に言及する事を避けるのは狡猾であり、卑怯である。自分達の議論を都合よくする爲に、我國の事といふと何でも彼でも猛烈に攻撃する偏見に陥つてゐる。東西の婦人を比較する場合にも、屢々同一の例を見せつけられる。

しかし、何と云つても、日本の女が西洋の女に比べて、陰と陽との關係にある事は否めない。しとやかに坐つて、無表情を禮儀と心得、女大學の重荷に壓迫された姿を示してゐる事は確かだ。とはいへ直ぐに、だから日本の女は不幸だといふ斷定を下すのは、餘りに婦人參政權論者好みである。

そこで、日本の女を西洋の女に比べて、何がこつちの強味かといふと、鶴見氏が主題とした「母」としての女である。その外の何ものでも無いと斷言してもいゝ位だ。鶴見氏はいふ。「日本の女性は決して失つてはならない多くの美しき清きものを持つてゐる。その輝ける一つは、母としての情操である。云々」又曰く。「日本の女性は、母となつたときに、實に莊嚴な玉座に坐つてゐる云々」更に又曰く。「世界の國々の女性たちは、それぞれ色々の特色を持つてゐる。しかし、母となつたときには、日本の女性に及ぶものはないと、私はいつでも考へてゐる。さうして、そこに日本の女性の榮光があると考へてゐる。」これらの言葉は、現代の急進的婦人——現狀に滿足してゐないで背々してゐる婦人達には喜ばれないであらうが、將來の事はその時になつて見る事にして、少なくとも今日の大多數の日本婦人には、寧ろ媚るが如き甘さをもつて受入れられるであらう。小說「母」が、さかんに版を重ねるのも故ある事である。

小說「母」は、日本女性の最大美點であり、又最大の強味である母の典型を示さうとこゝろざしたものであらう。決して或個性を如實に描く事が目的で無く、類型としての母を描けば足りるのであらう。作者は最初に「純精なる藝術品としての小說を書かうとするのでは無く、一個の時論記者として、自分の議論を小說の形に托して天下に送る」のだと云つて

ゐる。

しかし、小説作者としての鶴見氏は自身卑下する通り素人に違ひ無いが、子供の時から小説を好んで讀んだと云ふ丈あつて、讀む方ではまんざら素人では無さゝうである。したがつて、「今迄の小説の型や約束に少しも拘泥しないで、勝手な形式で、物語を記し、勝手なところで議論をする」といひながら、何時の間にか習得してゐた在來の小説の形式を離れる事は出來なかつた。第一章の「日は輝く」の如きは、そのかきかた丈は、本格小説のゆき方を學んでゐるのである。此の一章丈をきりはなして見ると、その構成法も、描寫法も、寫實主義の流を汲んで、かなりくろつぽいところを見せた。尤も、寫實主義は寫實主義でも、自然派以前卽德富蘆花草村北星時代のものである。往年自然派の批評家が、皮相寫實と呼んだところのものである。

いつたい小説のかきかたには、大別して物語體と描寫體とがある。前者は筋を運ぶのには都合がいゝが、場面々々を生彩ある迫眞感をもつて展開するには後者に據らねばならぬ。鶴見氏も玄人らしく、先づ描寫體で行く意氣を示したのであるが、到底それ丈の筆力をもつてゐないので、何時の間にか物語風を主とするかき方に變つた。それは卷頭の斷り書のやうに、勝手なところで物語をし、勝手なところで議論をするといふやうな意識的のものでは無く、話の筋が進むにつれて描寫體ではやりきれなくなり、知らずしらず物語風を主とする形式に變つて行つたやうに見える。そこに素人の素人たるところがある。

扨て「母」の女主人公朝子は、熱海の細工物を商ふ家の子に生れ、五月の日の輝く山路で、偶然出あつた東京の客に見染められて、その妻となる。相手の男大河澄男は一種の近代型で、一擧一動氣障な奴だが、作者は氣障男を描く積りで書いてゐるとも思はれず、存外好意を寄せてゐるらしくも見える。又此の小説の讀者の大多數なる現代婦人にとつては、寧ろ好ましい型の人間であるかもしれない。彼は帝國大學の法科を出、父の遺産を繼ぎ、父の關係してゐた銀行に入り、私

費で留學し、外國殊に亞米利加崇拜家で、文學好と自信し、とりわけ佛蘭西文學の情調を懐しみ、熱海の宿でモオパッサンの紀行文「海の上に」を讀み、見知らぬ女に馴々しく聲をかけ、いきなり「お寫眞を一枚撮らして下さいませんか」といふ程押も強く、「弱き心は、美しき娘を得ることなし」といふ英語の諺を自分自身にいひきかせながら、猶豫なく懐のヴエスト・ポケツト・コダツクを出して「よく撮れたら、お送りします。下手だつたらご免なさい」と、一寸節をつけて言つた——と言ふ人物だ。しかもこれが日露戰爭以前の事なのだから、不良型紳士のはしりと見ても差支ないやうだが、作者は彼が善良なる坊ちやん育ちの正直者である事を確認してゐる。

何れにしても、此のおつちよこちよいの亞利利加崇拜型の男は、一にも押、二にも押で、忽ち細工屋の娘を獲得する。子供が生れ、進と命名される。こゝに一人の「母」が出來上つたわけだ。

時は恰も日本國民が、急激なる發展を遂げんとする明治三十年代の事である。新婚の三年目に、日露の國交斷絕し、進が數へ年四つの時、日本海大勝利の歡喜が到來する。その號外を手にして、國民的感激の極父親澄男は天皇陛下の萬歲を叫んでわつと泣き、母の朝子は我子をひしと抱いて啜り泣く。何も解らない進も、兩親の泣いたのを見て、火のついたやうな聲を出して、わつと泣いた。」

斯ういふ場面を綴出して、特殊の時代相を描き、「その四つの折の泣き聲を、彼はおぼろげながら、大きくなるまで憶えてゐた。精神分析學者が言ふならば、それは進の潜在意識のうちに英雄的情操を織り込んだのだ」と御談義をつけ加へたが、かういふ場面は一篇の構成の上に何等の有機的關係を持たない無駄である。

通俗小說の常道を踏んで、萬事都合よく運んで來た新婚の甘つたるい生活は、又簡單に破れてしまふ。澄男が道樂をはじめたのである。だが、こゝで作者は澄男をただの道樂好の男として描かない。吾々が見ると、少しばかり新しいきもののを着た輕薄才子に過ぎないが、作者は一生懸命になつて、此の男の存在價値を高めようと努力し、その道樂も、夫婦の

性格の相違に歸した。賑か好きの金持のお坊ちやんと、貧しい家に育つた朝子の寂しいかげのつきまとふ性格とを對照させ、離反のやむを得ない原因とした。それはよき解釋に違ひ無いが、それを演繹して「外國文藝の教養の乏しい朝子には、澄男のユウモアが解らなかつた、時としては皮肉と間違へて沈んだり、冷笑かされたかと思つて怒つたりした。それが澄男に堪らなくつまらなかつた。さうして、自分のユウモアにどつと笑ひ崩れてくれる話し相手が欲しくなつてきた。」と說明してゐるのは、あまりに皮相である。多くの外國崇拜家と同じく、此の作者も西洋人のユウモアをひどく高尙なものと考へてゐるやうである。長い間外國住居をした同胞の多くが、日本人にはユウモアが無くていけないと云ふ。成る程、日本人のやうに背々した心根のものには、亞米利加人のやうに呑氣きわまるユウモアは乏しいかもしれない。だが、日本には日本流のユウモアがある。極く洗練された、ひりゝと辛い味を含むユウモアがある。それは都會的教養が無いとわかりにくく、ヤンキイ式のヂヨオクに類するものとは些か趣が違ふ。鶴見氏に、日本流の洗練された洒落がわかるかどうかは知らないが、少くとも鶴見氏の描いた大河澄男にはわかるまい。彼はユーモアを寶物のひとつに數へる男であるが、自分では洗練された洒落の積りで、他人にとつては駄洒落に外ならぬやつを、臆面もなく連發して相手を惱ます人物としか受けとれない。

更に作者はつけ加へて、澄男を詩人肌の豪放なる派手好みとし、朝子を打算的分析的な科學者と見立てた。しかし、それは作者の讀書の知識で、すべての人を詩人的氣質と科學者的氣質に分る事が出來るといふ說の不用意なる使用に過ず、此の場合の二人に强ひてあてはめるのは、あまりに不自然である。

作者の說明は當を得てゐないが、兎に角澄男は遊びはじめる。朝子の第一の惱みであり、又日本の多くの女の惱みに違ひないから、女性の讀者は朝子に同情して澄男を憎むであらう。しかし、果して幾人の女の讀者が、遊びの場所に於る澄男の氣障な樣子に義憤を發するかは推測しがたい。あまりに氣障だから見本として引き出す事を許して貰はう。

「さつきからお待ち兼ねですよ。」

と待ちの字のところに力を入れて、たしなめるやうにいふ。

「俺を待つ奴があるとは、近頃珍しい。抑々それは男か女か。」

と芝居の臺辭めいた口調でわざと、とぼけ乍らきくと、

「なんです、ご存じの癖に。」

とピシヤリと、平手で輕く肩を叩く。

「あいたい。あいたい。といふは君にあらず他に思ふ人あり！」

と輕口を叩き乍ら、光る程拭き込んだ廣い梯子段を、トトトントトンと小走りに走り上つて、金の衝立を左に手際よくするりと廻つて、半分開いた襖のうちに、ぬーつとはいると……

どうです。このいやみつたらしく重苦しい無駄を喋る男に、ユーモアがわかるかしら。トトトントトンと小走りに上つて、衝立を左に手際よくするりと廻る景色を想像して見て貰ひ度い。しかも驚く可き事には、これが氣障男に對する作者の揶揄でも、ユーモアでも無く、寧ろ氣の利いた新型の通人を表現する爲の描寫らしい事である。

これ程氣障では、いくらい丶男でも、金があつても、女には好かれまいと思ふのだが、曾て客に惚れた事の無いといふしつかり者の藝者に惚れられる筋になつてゐるのは、しあはせ極まる男である。

事のついでに指摘して置き度いのは、鶴見氏の書く會話に、むやみに「お」の字のついてゐる事である。これは昔は華族女學校出身者に限つたものだつたが、近頃はふんだんにつかはれる。お稽、お習字は女學生の一般語となり、お餅、お空は童謠作者によつて普及された。鶴見氏は「おしばらく」「お着物」「お學校」など、ごていねいを極め、遂には「お喧嘩」といふのさへ飛出して來た。又、役人などが新橋や赤坂で遊ぶ時はさういはせるのかも知れないが、普通東京では、大河澄

男ならば「おーさん」とはいふだらうが、「おーさま」とはいはない筈だ。さまづけは名古屋流だ。治子といふ筆者の口から、自分のみうちを「お父さま」「兄さま」と云はせるのも變だし、「お旦那さま」もをかしい。

さて、心ある者の目から見れば、はなつつまみの筈の澄男が大もてにもてるので、朝子のなげきはしげくなる。由來悲劇の主人公には、敵役と味方役を配して、時には悲しませ、時には喜ばせるのが定法である。そこで作者は澄男の妹の月子といふ上流婦人型の無智の代表者を出して朝子をいぢめさせ、一方には亞米利加じこみの婦人運動者長谷川治子女史なるものを登場させて、朝子の力だのみとする。もう一人澄男の親類の木下一郎といふ學者も出現し、これは作者の代辯者となつて、事毎に道理づける役廻をつとめ、且心中朝子に戀してゐるといふ脇役である。

さるほどに、お坊ちやん育ちの澄男がいゝ氣になつてゐるうちに、親讓りの銀行はつぶれてしまひ、つゞいて病氣にかゝつて死んでしまふ。あまりに突然の死であるが、こゝらであの世へやつてしまはないと、「母」の母たる見せ場がなくなるわけであるから、筋立の上からいへば極めて當然の事で、些かも異存は無い。時に、長男の進は十一歲、長女の春子は八歲、次男道男は滿一歲にもなつてゐなかつた。

忽ち貧乏になり、良人を失ひ、三人の子供を抱へて、朝子は「母」として人生に直面した。我が子を偉い人間に育てる事、それが「母」の義務であり、又此の小說の主題である。誰しも、漠然と偉い人になり度かるものであるが、鶴見氏は人一倍功名心が强さうである。編中至る所で、偉い人になれと說いてゐる。何か、あまりに功利的に思はれて、もつといゝ人になれといふ教をきゝ度く思ふ。だが、少年進は父の遺骸の前に額づいて祈る「僕は勉强します。勉强して僕はきつと、日本で一番偉い人になります。僕はきつと、偉い人になります。」

偉い人になる徑路はどうかと云ふと、恐らく鶴見氏は、小學校から優等で、ませてゐて、第一高等學校に入り、雄辯家で鳴らし、帝國大學に進み、銀時計を頂戴し、代議士となり、大臣となる一路を胸裡に藏してゐるのであらう。

朝子とてもその通りの理想を持つてゐるに違ひ無い。雄々しくも子等の爲に、華族のやしきに奉公する。こゝでは、昔はやつた立志小說の定石を學んで、その家の若樣と進とが對立する。勿論若樣は馬鹿で我儘だ。進は負ぬ氣の少年だ。二人が「お喧嘩」をし、年少ながらも進は勇敢に若樣となぐりあひ、取組あひ、遂には敵を池の中へ放りこんでしまふ。おまけに、剛情な進は、次の日になつても謝罪しない。あやまれと云はれても斷じてあやまらない。母の朝子も息子の態度を是認して、「あなたは男です。決して故なく人に讓つてはいけません。どんな位置身分のある方でも、どんなに大勢の人に向つても、自分の道理のあるときは、一歩も引いてはなりません。どこまでもお戰ひなさい。」と賢母振を見せて勢をつけ、やがて此のやしきを見捨てゝしまふ。

親子は、亞米利加じこみのオールド・ミス、女權論者の長谷川治子女史の家に引移る。富裕なやしきが住みにくかつたから、つましい此の家は住みよく、愉快な日のつゞくのは通俗小說のおさだまりである。

更にその通俗小說的色彩を濃くするものは、亡夫のかたみを持つて、生前良人が馴染んだ藝者濱子を訪問する場面である。喜多村と河合で大向を唸らせやうといふ場面だ。

その間、木下一郎をかりては作者の理想を述べ、又子供の教育の爲には田舍の方がいゝといふ議論の爲か、偉い人にならうならうとしてゐる少年進を、一時學校嫌ひにして、母親の生地熱海へ赴かせたり、何の關係もなく外國の學者で政治家だといふ人物や、その娘などを引張出して、作者の西洋崇拜症を露出させてゐるなどは、緊密なる可き小說の構成組織を弛緩させる無駄であつて、調子に乘唸ぎた素人の悲しさを示すものである。

小學生のくせにクロムウエルの傳記などを讀んでゐる可愛氣のない進は、たゞ偉くならうならうとこゝろざしてゐるのだが、註文通り中學の入學試驗を受けて一番で合格する。此の早熟なこどもに對して、作者は異なる場所で異なる人間に、同じほめ言葉をいはせてゐる。ひとつは中學一年生の進がラムのシエクスピア物語を讀んでゐるのを發見して驚く長谷川

女史が「えらいのね。一年生の癖にもうこんな本を讀み出したの。あの兒は、どの位偉くなるか判りませんよ。朝子さん、今は苦しいでせうけれど、あなた先は樂しみよ。進さんはきつと總理大臣になるね。」と云ふのだ。もうひとつは、急性の病苦に惱む母の看護をする進を見て、藝者濱子が、「奧さま、もう私は、これで安心いたしました。もうこれで、大河家のお後は立派に立ちます。あの偉い若様が、あなたについておいでになります以上は、どんなことがあつても、奧さまはお困りになることはありません。大河さまのお邸は、この若様の御代に、きつと先代より、もつと立派にお榮えなさいます。若様は、きつと、きつと、總理大臣におなりになります。」と云ふのである。偉い人卽ち總理大臣といふ單純正直な目標は、何となく作者のひとゝなりを示すものゝ如く想はれ、おのづから微笑が湧く。私共には、かう云ふところに、作者が期待せざる多分のユウモアが感じられるのである。

いろいろの事を經驗して、朝子は次第に人として完成して行く。そして作者は此の婦人をかりて、日本女性の古い型を乘越てゆく、ひとつの理想型を見せようとしてゐる。これはたしかに面白い企てゞある。たゞその書方は、いかにも新聞記事的で、藝術的描寫になつてゐない爲、深い印象を殘さないのは殘念だ。先づ吾々はどうして殘つてゐたのか不思議に思ふのだが、熱海に所有してゐた土地が賣れて、相當の金が朝子の手に入る。それをもとでにして、一軒の店を構へ、菓屋を開業する。其處に歐洲戰爭が爆發する。玄人小說家が兎角閑却しがちな政治經濟方面の知識が役立つ筈なのだが、これも亦新聞記事的の說明にとゞまつて、よき效果をもたらさなかつた。

先づ到來した不景氣で、朝子は窮地に陷り、おまけに腦貧血を起したりして、氣の毒な事になるが、その上にも難境に追ひやつて、亡夫存生中目をかけた男の入智慧で、亡夫の同級生で、生前「あんな厭な奴はないね」と云つてゐた山路進一郎を頭取とする銀行から金を借るはめになる。こゝで完全に通俗小說、卑俗小說のおきまり型に陷つたのは、此の山路が朝子の苦境につけこんで、その操を奪はうとするのである。女の無智を利用し、契約の更改などゝいふ都合のいゝ手も

用ひられる。

だが、通俗小説の主人公は決して悲境の底に沈みきりに沈まないのを通例の運命とする。朝子一家も一時はどうなるかと思はれたが、戰爭が長引き、日本が思ひもかけない戰爭景氣に見舞はれると、忽ち手持の獨逸藥の値が出て大儲をする。山路の銀行にも返濟し、且たんかを切つて溜飲をさげる。

その上此の女成金は、儲けのちいさい藥屋を未練氣も無くやめてしまつて鐵屋になり、熱海で親代々の商賣をしてゐた弟を呼寄せて、支配人にする。「大正五年の夏には、もう朝子の身代は、押しも押されもせぬ程、太つてゐたのである。」尤も、ウイルソンの平和勸告書に誘發された暴落を喰ひ、朝子の弟が山路にだまされて、五萬圓の約手を書き、二進も三進も行かなくなつたところを、藝者瀧子に救はれるなど、いふ場面もある。だが、結局交戰國が平和拒絶の通知を發したといふ號外が出て、又相場が刎ね返したのをい、機會にして、朝子は商賣に見切をつけ、郊外に居を移してしまふ。進は中學の四年になつた。

けれども、やつと安心したと思ふと、朝子は腎臓病で死んでしまふのである。「母さまは、もうよく眼が見えません。この部屋も暗い。しかし、母さまの心は明るいのよ。お父さまは明るいことがお好きだつたのよ。あなたも明るい人間になつて頂戴……明るい五月……明るい日本……」それが臨終の言葉だ。

鶴見氏は素人作家である。そして、玄人作家の陷り易い缺點を知り、素人の割込む餘地のある事を認めてゐる。けれども、こゝに注意すべき事は、「母」を讀了して、素人に特有の組立ての下手、會話の下手、描寫の下手はしかたがないとあきらめるが、これらの缺點を打越して、素人の强味を示す可き特質の乏しいと云ふ事である。氏が自負する思想の宣傳にどれ丈役立つのか。全篇に張る總理大臣病が卽ち英雄主義だと云ふのか。偉くならう、偉くならうといひくらして居るのが、明るく朗かな心持なのか。少年進の如きは、寧ろ片意地な偏屈人だ。出て來る人間の殆んどすべてが、本質に於ては

ひどい事大主義者で、又無反省であるかのやうにも疑はれる。さうだ。無反省こそは、此の小說全篇を貫くひとつの特色であらう。だが、明るく朗かなる事が、無反省から來るのならば、ほがらかなる事もわざはひである。同じく作者の自負する博い知識も、誰でも知つてゐる程度の新聞的事實で、それが此の小說に何等の重味をも加へてゐない。又人間の觀察に、些かも高貴な精神のうかがはれないのも物足りない。一例をとれば、大河澄男は「つむじのぎりぎりからつま先まで江戸つ兒だつた」と云ふが、彼の言語動作は完全に田舍者である。表現されたる彼のいやみと氣障も、一作者の意識した仕事では無いやうである。

ゆくりなくも思ひ出すのは、いつか或る文人の話した事だ。その人は地方講演に頼まれて行つて、偶々鶴見氏と同じ演壇に立つた。自分の番をすませ、氣樂な氣持で、しんうちの鶴見氏の演說を聽いてゐた。なにしろ、學生時代から名だゝる演說つかひであるし、その後日本語でも英語でも雄辯家の名を馳せてゐる人だから、さぞかしうまいものだらうと思つてゐたところ、果してうまい。聲がよく、流暢で、いきがつゞいて、抑揚があつて、美辭麗句が續出し、適度の諧謔があり、熱があり、正に一流の辯士だつたさうである。それにも拘らず、その人は、長く聽いては居られずに、樂屋へ逃込んでしまつたといふ。席にゐたゝまれない氣がしたのださうである。何故か。うまいにはうまいのだが、きいてゐても羞しくなるやうな一種の調子がある爲だといふ。いやみなのか、氣障なのか、辯者自身には氣のつかない臭味があるのでは無いだらうか。それは恰も小說中の人物、大河澄男が待合の玄關で女將や女中と取かはす會話のやうな、トトトントンと小走りに梯子段を上つて、金の衝立を手際よく左にするりと廻る時の姿につきまとふ雰圍氣が、むらむらと身邊に立ち迷ふのでは無いだらうか。ところが、演說が終つて、辯士が樂屋へ下つて來ると、聽衆の中の特別崇拜者なる青年が、どやどや後にくつついて來て、先生々々と叫びながら、感激して縋りつき、中には感極まつて泣く者もあつたさうである。往年竹久夢二氏にあこがれた女學生、近年西條八十氏を慕ふ文學少女のやうに、地方の政治青年の中には、鶴見氏と共に國を

憂ひ、鶴見氏の爲ならば水火の中へも飛び込まうと云ふ多感の人物が多いさうである。さういふ人々は、西洋芝居の幕外の獨白の如く抑揚のある、美辭麗句をつらねた演說に感傷の淚をしぼるのである。何といふ幸ひであらう。それに引きかへ、氏の演說のうまさを充分認めながら、ぢつと聽いてはゐられなかつた人の如き感覺を持つ者は、何たる不幸であらう。言葉を換へていへば、そこに素人作家の强味があり、こゝに文人作家の弱味があるともいへるのである。

何といつても、此の小說は大衆の喜び迎へるものである事は疑ひない。作者が知名の政治家で、殊に雄辯家の名をうたはれる流行兒であり、且小說の主題は萬人向のものである事旣に述べた通りであるから、數百版を重ねることも故ありといはねばならぬ。だが、吾々の期待する素人小說の美點は何もない。ありきたりの通俗小說の亞流に過ぎない。最も望ましい素人の處女性が無い。純眞新鮮の感が無い。素人は素人でも、大分悪ずれのした素人である。それは恐らく、氏が小說家としては素人でも、文筆業者としては文人に近い事から由來してゐるのであらう。ふた昔も前の「美文錦粹」に培はれた文章は達者であるが、レデイメエドたる事を免れない。往年島崎藤村先生が、短篇小說「弟子」の中に用ひて、名印家描寫だとうたはれたセンテンスをその儘借用して、「彼女は腦中耳だつた」などゝやつてゐる程擦れてゐる。辯士として、あまりに聽衆をあつかひこなし過ぎてゐる事が、小說創作の場合に惡疾として祟つてゐるのだ。

私は「母」を繰返して讀んで、ひとつの確信を得た。最近藝術作品の價値問題に關し、往々にして藝術品の價値の高下は、それを享樂する人間の數の多いか少ないかによつて定まると云ふ說が、全然のたはごとであると云ふ事である。（昭和四年十月二日）

編輯者雜記

×

五百號記念號は豫期以上の歡待を受けて面目を施した。これ皆大方諸君の熱心なる支持と同情と後援との賜物だ。重ねて感謝の意を表しておく。

×

中で返すがへすも遺憾な事は應募原稿中一の採錄すべきものがなかつた一事だ。新人發見を志して大なる期待をかけてゐただけに吾等の失望は一倍であつた。また期待をかけられてゐただけに江湖の失望もいかばかりか測り知られないものがあるだらう。できるなら雜誌の半分——否全部をも新人のために開放したい意氣込みが徒勞に歸した譯だから。

×

それについて色々の意見が聞かれる。何にしても中央公論にそれほどの期待をかけられたことは嬉しい事だ。が、中で本誌がペテン式にやつたやうに言ふ人のあるのは心外だ。懸賞金一萬圓とか何とか言つて當選者無しで引込めたりするのとは譯が違ふ。相當の稿料を拂ふと約束したのだから、相當の原稿が見當つたら、なんで引込める必要があらう。常識で考へたつて判ることで、餘りに人を誣ふるといふものだ。

×

「そんなら能く見なかつたのだらう。でなくて、何が何でも四千もの原稿の中に一篇も載るものが無い筈がない。」といふ人がある。さういふ人は多分投書した人で、他人のは知らず、この俺のが……といふ自信と自惚とを有つてものを云つてをられるらしいからそれは論外としても、誰にだつて一應は起る無理のない疑問である。ところが、實にところがだ。中央公論の名譽のためにもこんな事は言ひたくないのだが、誤解を恐れてはつきり言ふ。探しても探してもこれはと思ふ物終ひに無しだ。

×

實に、それは校了の直前までも、いかに吾等は四五篇の珠玉を搜し出さうとしたことか。それは吾々の責任であるよりも、實に吾々の熱烈なる希望であつたからだ。それでも無い、これを吾々はどうしたらいゝと言ふのだらう。重ねて茲に言明する。吾々は赤誠を披瀝して新人を歡迎する。新人出でよ、新人出でよ。その代り淺薄な獨りよがりや、舊人の摸倣はやめ給へ。

×

火蓋を切つた中央公論社の處女出版は豫想以上に成功した。大方の支持と同情とに因るのは云ふまでもないが、「西部戰線異狀なし」もよかつた。內容が十二分の自信を以て推薦できる性質のものであつたからでもあらうが、反響は素晴らしい。豫期以上に感激したといふ絕對的讚辭が四五日の間に二千餘百通舞込んだ。嘘だと思ふ人があらば讀んで見るがいゝ。讀んで欺されたやうな感じが一分一厘でも起るなら、僕等は殺されてもいゝ。

×

編輯者雜記

文字通りに鼎の湧くやうな此盛況は、一面中央公論社の歴史と信用との賜物でもある。吾々は四十四年未だ曾て一度だに不信用な眞似をしたことがない。熱心な支持と同情のあるのもそこだ。が、一般讀書界が囮本洪水に飽きてゐる爲めでもある。やたらに蒸返しばかりの全集物に飽きてゐる爲めでもある。書棚を飾る書物に飽きて讀むに堪へる書物に飢えてゐた證據でもある。既成文壇衰へて新興文壇未だ成らず、全集物徒らに氾濫して、讀過感激の書一つもないといふ間隙に乘じて「西部戰線異狀なし」が出たのだから、大旱に雲霓を得たより以上だつたのは當然だ。單行本の賣行きとしては近來のレコード破りだと書店の驚いてゐるのも無理ではない。

×

それにしても自重して、この讀者支持者の愛顧に背かないやうに、そして良い物をどしどし出して行きたいと思ふ。

×

第二彈「踊る地平線」は十五日に發賣した。

ジョージ・タニと新世界飯誕の名において已に既に諸君に知られた定評ものだ。今度こそは装幀も注意して見るも立派な本になつた。同じく文壇革命の文學として極力推薦したい。第一彈に劣らぬ歡迎を受けるであらう。

×

本號プロ派の驍將小林多喜二氏の小說は二百枚以上、本誌の意の在るところは一日御諒解下さることと思ふ。創作欄を擧げて推奬するに足るだけの力作である。

×

前號からの高橋龜吉氏の「財閥調べ」はバカに評判がよい。が、どれこれと言つてゐるよりも目次をブラリと御覧下されば判ると思ふ。本誌がどこまで編輯に意を須ゐてゐるか、そして何處まで積極的編輯陣を張つてゐるかといふことは。

×

更に一附、中央公論社を支持せられよ。必ず必ず恩顧に酬いる時あらん。

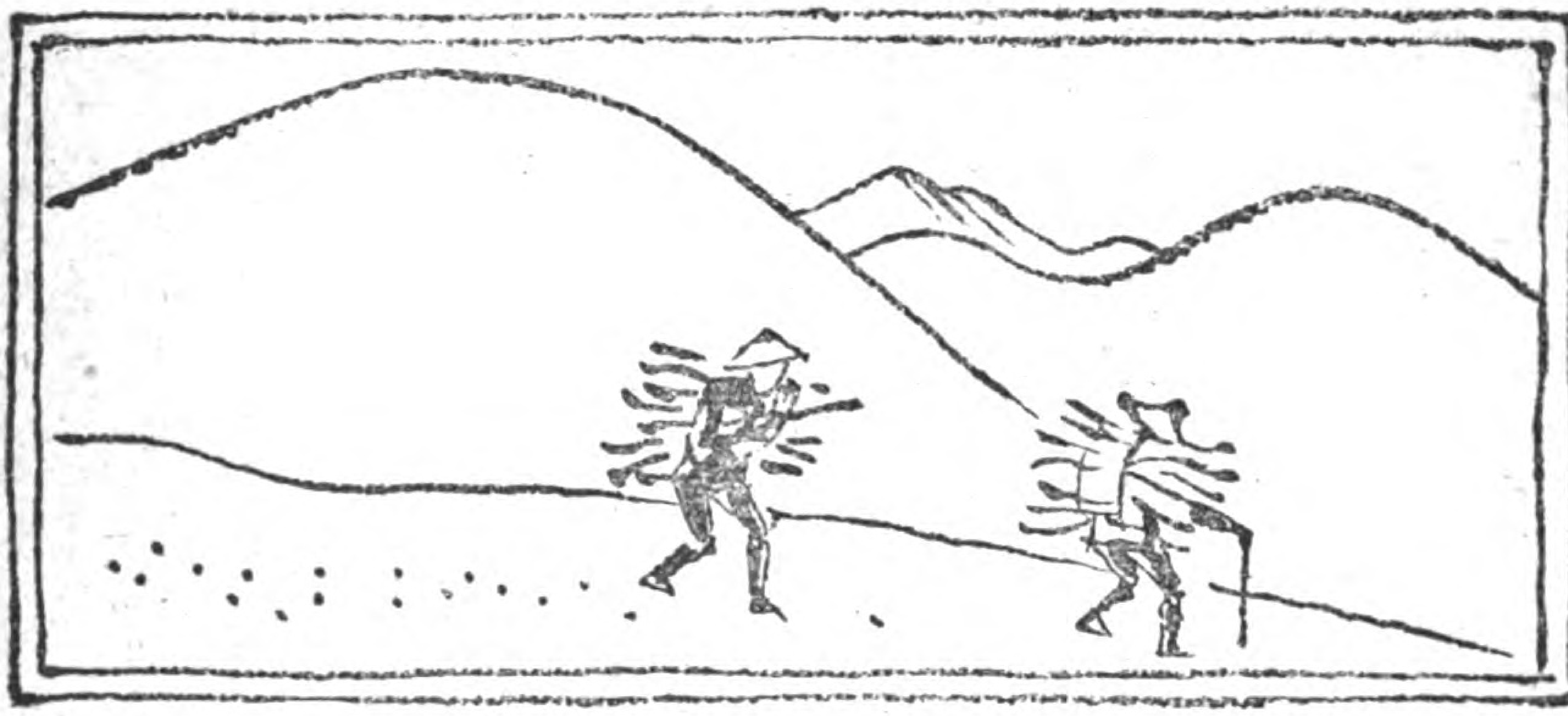
○應募原稿の返送に關する附言

郵券添付なき向にして返稿を希望さるる方は、此の際、郵券封入を以て至急申込まれたい。來る十一月五日までの右旨御申込に限り、御希望に應ずる事とし、それ以後は、當方の自由處理を諒せられたい。

御申込の際は左の條件を明記下さる樣御願ひする。

一、住所變更の場合は、新舊住所の併記
一、應募原稿の種別、標題、投稿月日、
一、筆名を用ひられた方は、本名と共に併記

（出來るだけ敏速に御希望に副ふ事にするが多少の時日遲延は、之また御諒恕を請ふ。）



不在地主

小林多喜二

この一篇を、全國津々浦々の「小作人」と「貧農」に捧げる。
「荒木又右衞門」や「鳴門秘帖」でも讀むやうな積りで、仕事の合間々々に寢ころびながら讀んでほしい。

一

「ドン〱、ドン」

泥壁には地圖のやうに割目が入つてゐて、倚りかかると、ボロ〱こぼれ落ちた。——由三は半分泣きながら、ランプのホヤを磨きにかかつた。ホヤの端を掌で抑へて、ハアーと息を吹き込んでやると、煙のやうに曇つた。それから新聞紙を圓るめて、中を磨いた。何度もそれを繰返へすと、石油臭い匂ひが何時迄も手に殘つた。

のめりかけてゐる藁屋根の隙間からも、がたぴしやに取付けてある窓からも、煙が燻り出てゐた。出た煙はぢゆく〱した雨もよひに、眞直ぐ空にものぼれず、ゆ

つくり横ひろがりになびいて、野面をすれ〳〵に低がつて行つた。

由三は毎日のホヤ磨きが嫌で、嫌でたまらなかつた。「えッ、畜生、こッたらもの殺つてしまへ！」――思ひ出したやうに、しやつくり上げる。背で、泥壁がボロ〳〵こぼれ落ちた。何處かで牛のなく幅の低い聲がした。と、すぐ近くで、今度はそれに答へるやうに別の牛が嘶いた。――霧のやうに細かい、冷たい雨が降つてゐた。

「由ッ！　そつたらどこで、何時迄何してるだ！」――家の中で、母親が怒鳴つてゐる。

「今、えぐよオ。」

母親はベト〳〵した土間の竈に蹲んで、顔をくッつけて、火を吹いてゐた。眼に煙が入る度に前掛でこすつた。毎日の雨で、木がしめッぽくなつてゐた。――時々竈の火で、顔の半分だけが、メラ〳〵と光つて、消えた。

「早ぐ、ランプばつけれ。」

家の中は、それが竈の中でゞもあるやうに、モヤ〳〵けぶつてゐた。眼のあき所がない。由三は手さぐりで、戸棚の上からランプの臺を下した。

「母、油無えど。」

「？」――母親はひよいと立ち上つた。「無え？……んだら、△さ行つて來い。」

「ぜんこ？」

「ぜんこなんて無え。借れて來い！」

由三はランプの臺を持つたまゝ、母親の後でウロ〳〵してゐた。

「行けッたら行け！　この糞たれ。」

「ぜんこよオ！」――背を戸棚にすりつけた。「もう貸さね――えわ。」

「貸したつて、貸されたつて、ぜんこ無えんだ。」
「駄目、だめーえ、駄目！……」
「行けッたら行けッ！」
由三は毆ぐられると思つて、後ずさりすると、何時もの癖になつてゐる頭に手をやつた。周章て、裏口へ下駄を片方はき外したまゝ飛び出した。——「えッ、糞婆！」
戸口に立つたまゝ、由三はしばらく内の氣配をうかゞつてゐたが、こつそり土間に這ひ込んで、片方の下駄を取出した。しめつぽい土の匂ひが鼻へチカにプーンと來た。
雨に濡れてゐる兩側の草が氣持惡く脛に當る細道を拔けて、通りに出た。道の側らには、節を荒けずりにした新らしい木の香のする電柱が、間隔を置いて、何本も轉がさつてゐた。——もうしばらくで、この村に電燈がつくことになつてゐた。毎日「停車場のある町」から電工夫が、道具をもつて入り込んできた。一本々々電柱が村に近くなつてきた。子供達はそれを何本、何本と毎日數へ直して、もう何本で村に入るか、云ひ合つた。皆は工夫達の仕事をしてゐるところに、一日中立つてみてゐた。
「お前え達のうちに姉のゐる奴ゐるか？」
子供達ははにかみ笑ひながら、お互に身體を押し合つた。
「此奴にゐるんだよ。」——一人が云ふ「な！」
「ん、ん。」
「んか、可愛いか？——晩になつたらな、遊ぶに行ぐつてな、姉さ云つて置けよ。えゝか。」
と、皆は一度にヤアーと笑ひ出してしまふ。——子供達は何時迄もさうやつてゐるのが好きだつた。日が暮れさうにな

つて、やうやく口笛を吹きながら、棒切れで道端の草を薙ぎ倒し、なぎ倒し、村道を村に歸つてきた……。

通りを三町程行くと、道をはさんで荒物屋、郵便局、床屋、旋具店、種物屋、文具店などが二、三十軒竝んでゐる「市街地」に出る。――由三は坊主頭と兩肩をチユク〱に雨に濡したま丶走つた。

軒下に子供が三、四人集つて、「ドン〱」をやつてゐた。由三はランプの壺を持つたま丶側へ寄つて行つた。

「ドン〱、ドン!」

「ドン〱、ドン!」

「中佐か?――勝つたど! 少將だも。」

相手は舌で上唇を嘗めながら、「糞!」と云つた。

「ドン〱――ドン!」

「ドン〱、アッ一寸待つてけれ。」――何か思つて、クルリと後向きになると、自分の札の順を直した。

「ドン〱ドン!」

「ドン〱ドン!」

「中將!」

「元帥だ!――どうだ!」――いきなり手と足を萬歳させた。

「あ――、お前、中將取られたのか?……」――側の者が負けたもの丶手元をのぞき込んだ。「あと何んと何に持つてる?」

「默つてれでえ!……負けるもんか。」

「オ、由、汎さ入らねえか?」――勝つた方が云つた。

「入れでやるど、え、べよ。」

由三はやりたかつた。然し今迄一度だつて「ドン〱」を買つて貰つたことがなかつた。——由三はだまつてゐた。

「無えのか?」

「由どこの姉、こんだ札幌さ行ぐつてな。」

一人が軒下から、雨の降つてゐる道へ向けて、前を腹迄位まくつて小便をしてゐた。

「誰云つた?」

「誰でもよ。んで、白首になるツてな!」

「んか、白首にか!」

「白首か! さうか!」——皆はやし立てた。

由三はそれが何のことかハッキリ分らなかつた。分らないが、いきなりヒネられでもした後のやうに、顔中がカッと逆上せてきた。

「夕焼、小焼に日が暮れて……」——女の子が三、四人聲を張り上げて歌つてゐるのが、遠くに聞えてゐた。

由三は急にワッと泣き出した。

「泣くな、え、このメソ!」

グイと押されて、ランプの壺を落してしまつた。少し殘つてゐた石油が、雨に濡れた地面にチリ〱と異色の波紋をつくつて廣がつた。——皆は氣をのまれて、だまつた。

「あーあ、俺でもないや、俺でもないや。」——少し後ずさりして云ひ出した。

「俺でもないや。」

「うえ、お前えだど。——お前えでないか！」

「俺でもないや。」

「俺でもないや、あーあ。」

「母さ云つてやるから！」——由三は大聲で泣きながら、通りを走り出した。

途中で片々の下駄を脫いで、手に持つた。走りながら、「母さ云つてやるから！」何度もそれを繰りかへした。

母親はすぐ裏の野菜畑の端で、末の子を抱えて小便（おしつこ）をさせてゐた。鷄が畠のウネを越えて、始終キヨト〳〵しながら餌をあさつてゐる。

「ほら、とツと——なア。とツと、こ、こ、こ、こ、こツてな。——さ、しツこするんだど、可愛（めんこ）いから……。」そして「シー、シー、シー！」と云つた。

子供は足をふんばつて、「あー、あー、あば、ば、ば、ば……あー、あー」と、燥やいだ。

「よし〳〵。さ、しツこ、しツこ、な。」

母親はバタ〳〵する兩足を抑えた。

その時、身體をびツこに振りながら、片手に下駄を持つて、畑道を走つてくる由三が見えた。それが家のかげに見えなくなつた時、すぐ、土間で敷居につまづいて、思ひッ切り投げ出されたらしく、棚から樽やバケツの落ちる凄い音がした。と、同時にワアッと由三の泣き出すのが聞えた。

「犬餓鬼！　又喧嘩してきたな。……さ、しツこもうえゝか？」

小指位のちんぽの先きが、露のやうにしめつてゐた。

「よし〳〵、可愛（めんこ）い、可愛（めんこ）い。」

由三は薄暗いペト〳〵する土間に仰向けになつたまゝ、母親が見ると、急に大きな聲を出し、身體をゴロ〳〵させて泣き出した。

S――村

由三は空の茶碗を箸でたゝき乍ら、「兄ちや歸らないな……」と、唇をふくれさせてゐた。

兄の健は、島からすぐ市街地の「青年訓練所」に廻つたらしく、夕飯時に家に歸らなかつた。――健は今年徴兵檢査だつた。若し、萬一兵隊にとられたら、今のまゝでも食えないのに大變なことだつた。「青年訓練所」に通へば、とにかく兵隊の期間が減る、さう聞いてゐた。それだけを頼みに、クタ〳〵になつた身體を休ませもせずに通つてゐた。

母親は背中へヂカに裸の子供を負つて、身體をユスリ〳〵外へ出てみた。――子供は背中でくびれた手足を動かした。その柔かい肌の觸がくすぐつたく、可愛いかつた。

「えゝ子だ、えゝ子だ。」母親は身體を振つた。――一度、かういふ風に負ぶつてゐて、子供をすつぽり、そのまゝ畑へすべり落してしまつたことがあつた……。

野面は青黒く暮れかゝつてゐた。――背が粟立つほど、底寒かつた。

健達の、このS村は、吹きッさらしの石狩平野に、二、三戸づゝ、二、三戸づゝと百戸ほど散らばつてゐた。それが「停車場のある町」から一筋に續いてゐる村道に、繩の結びこぶのやうにくッついてゐたり、それよりはずウと畑の中に引ッ込んでゐたりした。丁度それ等の中央に「市街地」があつた。五十戸ほど村道をはさんで、兩側にかたまつてゐた。

平原を吹いてくる風は、市街地に躍りこむと、ガタ〳〵と戸をならし、砂ほこりをまき上げて、又平原に通り抜けて行つた。――田や畑で働いてゐると、ほこりが高く舞ひ上りながら、村道に沿つて眞直ぐに何處までも吹き飛ばされて行く

のが見えた。

どつちを見ても、何んにもない。見る限り廣茫としてゐた。冬はひどかつた。電信柱の一列が何處迄も續いて行つて、マッチの棒をならべたやうになり、そしてそれが見えなくなつても、まだ平であり、眼の邪魔になるものがなかつた。所々籬をならべ立てたやうな、ポプラの「防雪林」が身體をゆすつてゐたり、雜木林の叢が風呂敷の皺のやうに溜つてゐた。

S村の外れから半里ほどすると、心持ち土地は上流石狩川の方へ傾斜して行つてゐた。河近くは「南瓜」や「唐黍」の畑になつてゐたが、畑のウネとウネとの間に、大きな石塊が赤土や砂と一緒にムキ出しに轉がつてゐた。石狩川が年一度、五月頃氾濫して、その邊一帶が大きな沼のやうになるからだつた。――畑が盡きると、帶の巾程の、まだ開墾されてゐない雜草地があり、そこからすぐ河堤になつてゐた。子供達は釣竿を振りながら、腰程の雜草を分けて、河へ下りて行つた。

河向ふは砂の堤になつてゐて、色々な形に區切られた畑が、丁度つぎはぎした風呂敷のやうに廣がつてゐた。こつちと同じ百姓家の歪んだ家根がポツ、ポツ見えた。

「移民案内」

「內地の府縣に於ては、自作地は勿論、小作地と雖も新に得ることは仲々困難であるのに反して、北海道に移住し、特定地の貸付をうけ、五ケ年の間にその六割以上を開墾し終る時は、その土地を無償で附與をうけ、忽ち五町歩乃至十町歩の地主となるを得、又資金充分なるものは二十町歩土地代僅か八百圓位で未墾地の拂下げを受け得べく、故に勤勉なるものは移住後概して生活に困難することなし……。」(「北海道移住案內」北海道廳、拓殖部編)

「……數年を經て、開墾の業成るの後は、穀物も蔬菜も豐かに育ち、生計にも餘裕を生じ、草小屋は柾屋に改築せられ、庭に植えたる果樹も實を結ぶなど、其の愉快甚だ大なるものあらん。この土地こそ、子より孫と代々相傳えて、此の畑は我が先祖の開きたる所、この樹は我先祖の植えたるものなりと言ひはやされ、其の功は行末永く殘るべし。」(「開墾及耕作

の栞」北海道廳、拓殖部編)

「…實際、我國の人口、食糧問題がかくまでも行き詰りを感じてゐる現今、北海道、樺太の開墾は焦眉の急務であると思ひます。そのためには個人の利害得失などを度外視して、國家的な仕事——戰時に於ける兵士と同じ氣持を持ちまして、開墾に從事し、國富を豐かにしなければならない、かう思考するものであります。」(某氏就任の辭)

「立毛差押」「立入禁止」「土地返還請求」「過酷な小作料」——身動きも出來ないやうに縛りつけられてゐる內地の百姓が、これ等に見向きしないでゐることが出來るだらふか。——それは全くウマイところをねらつてゐた。

S村は開墾されてから三十年近くになつてゐた。ではS村の百姓はみんな五町歩乃至十町歩の「地主」になつてゐたか?

そして、草小屋は柾屋に改築されてゐたか?

「誰も道で會はねばえゝな」

健達の一家も、その「移民案內」を讀んだ。そして雪の深い北海道に渡つてきたのだつた。彼等も亦自分達の食料として取つて置いた米さへ差押えられて、軒下に積まさつてゐながら、それに指一本つけることの出來ない「小作人」だつた。

健は兩親にともなはれて、村を出た日のことを、おぼろに覺えてゐる。十四、五年前のことだつた。——重い妹を負ぶつて遊んで來ると、どこか家の中が變つてゐた。健は胸を帶で十分に締められて、鷄の子のやうに首だけを苦しくのばしてゐた。

「母、もうえゝべよ。」と云つた。

母は細引を手にもつて、浮かない風に家の中をウロ〳〵してゐた。父は大きな安坐をかいたまゝ、煙草をのんで、別な方を見てゐた。——母は健を見ると、いつになくけはしい顏をした。

「まだ外さ行つてれ!」

父はだまつてゐた。

健はずれさうになる妹をゆすり上げ、ゆすり上げ、又外へ出た。――半分泣いてゐた。それから一時間程して歸つてくると、家の中はガランとして、眞中に荷造りした行李と大きな風呂敷包みが轉つてゐた。父と母が火の氣のない大きく仕切つた爐邊にだまつて坐つてゐた。薄暗い、赤ちやけた電燈の光で、父の頬がガク〳〵と深くけづり込まれてゐた。

「早く暮れてければえゝ……。」――獨り言のやうに云つた。父だつた。

暗くなつてから、荷物を背負つて外へ出た。峠を越える時、振りかえると、村の灯がすぐ足の下に見えた。健は半分眠り、父に引きづられながら、歩いた。暗い、深い谷底に風が渡るらしく、それが物凄く地獄のやうに鳴つてゐた。――健はそれを小さい時にきいた恐ろしい伽話のやうに、今でもハッキリ思ひ出せる。

「誰とも道で會はねばえゝな。」――父は同じことを十歩も歩かないうちに、何度も繰りかへした。

五十近い父親の懐には「移民案内」が入つてゐた。

道廳で「その六割を開墾した時には、全土地を無償で交付する」と云つてゐる土地は、停車場から二十里も三十里も離れてゐた。假りに、其處からどんな穀物が出やうが、その間の運搬費を入れたゞけで、とても市場に出せる價格に引き合はなかつた。――それに、この北海道の奥地は「冬」になつたら、ロビンソンよりも頼りなくなる。食糧を得ることも出來ず、又一冬分を豫め貯へておく餘裕もなく、次の春には雪にうづめられたまゝ、一家餓死するものが居た。――石狩、上川、空知の地味の優良なところは、道廳が「開拓資金」の財源の名によつて、殆んど只のやうな價格で華族や大金持に何百町歩づゝ拂下げてしまつてゐた。「入地百姓――移民百姓」は、だから與れるにも貰ひ手のない泥炭地の多い釧路、根室の方面だけに限られてゐる。

「開墾補助費」が三百圓位まで出るには出た。然し家族連れの移住費を差引くと、一年の開墾にしか從事することが出來

なくなる。結局「低利資金」を借りて、どうにか、かうにかやつて行かなければならない。――五年も六年もかゝつて、やうやくそれが畑か田になつた頃には、然しもう首ッたけの借金が百姓をギリ／＼にしばりつけてゐた。

何千町歩もの拂下げをうけた地主は、開墾した曉にはその土地の半分を無償でくれる約束で、小作人を入地させながら、いざとなると、その約束をごまかしたり、履行しなかつた。

健の父は二年で「入地」を逃げ出してしまつた。「移民案内」の大それた夢が、ガタ、ガタと眼の前で壊れて行つた。仕方のなくなつた父親は「岸野農場」の小作に入つたのだつた。

「日雇にならねえだけ、まだえゝべ。」

村に地主はゐない

何處の村でも、例外なく、つぶれかゝつてゐる小作の掘立小屋のなかに「鶴」のやうに、すつきり地主の白壁だけが際立つてゐるものだ。そしてそこでは貧乏人と金持がハッキリ二つに分れてゐる。然し、それはもう「昔」のことである。

北海道の農村には、地主は居なかつた。――不在だつた。文化の餘澤が全然なく、肥料や馬糞の臭氣がし、腰が曲つて薄汚い百姓ばかりゐるそんな處に、ワザ／＼居る必要がなかつた。そんな氣のきかない、昔型の地主は一人もゐなかつた。――その代り、地主は「農場管理人」をその村に置いた。だから、彼は東京や、小樽、札幌にゐて、たゞ「上り」の計算だけしてゐれば、それでよかつた。――S村もそんな村だつた。

岸野農場の入口に、たつた一軒の板屋の、トタンを張つた家が吉本管理人の家だつた。吉本は首からかぶるジャケツに背広をひつかけ、何時でも乘馬ズボンをはいて歩いてゐた。

「この村では、俺を地主だと思つてもらはにやならん。」

初めて來たとき、小作を集めてさう云つた。

S村――田の所有別分布。

二百町歩――S村所有田

百五十町歩――大學所有田・「學田」

百二十町歩――吉岡（旭川）

五百町歩――岸野（小樽）

二百町歩――馬場（函館）

二百十町歩――片山子爵（東京）

三百町歩――高橋是清（東京）

外ニ、自作農五戸、百五十町歩。

「巡査」と「△の旦那」

市街地には、S村青年團、S村處女會があつて、小學校隣接地に「修養倶樂部」を設け、そこで色々な會合や芝居をやる。――會長は校長。副會長には「在郷軍人分會長」をやつてゐる△荒物屋の主人。巡査。それに岸野農場主が名譽相談役となつてゐた。――健達の通つてゐる「青年訓練所」も、その「修養倶樂部」で毎晩七時からひらかれてゐた。

巡査は一日置きに自轉車で、「停車場のあるH町」に行つてきた。――おとなしい、小作の人達にも評判のいゝ若い巡査だつた。途中、よく自轉車を道端に置き捨てにして、劍をさげたまゝ、小便をしてゐた。それが田に働いてゐる小作達に見えた。暇になると、小作の家へやつてきて話して行つた。――然し一度岸野の小作達が小作料のことで、町長へ嘆願に出掛けたことがあつてから、小作人達のところへは、ブツつり話しに來ないやうになつてしまつた。そのことでは隨分噂さが立つた。「岸野から金でも貰つたべよ。」と云つた。

前、殊に親しくしてゐた健の母親はうらんだ。

「随分現金だな。」——然し石田さんに限つて、そんな「噂さ」はある筈がない、と云つてゐた。

石田巡査はそれから△と吉本管理人と村道を、肩をならべて歩くのが眼につき出した。

——△の荒物屋からは、どんな小作も「店借り」をしてゐる。

一年のうち、きまつた時しか金の入らない百姓は、どうしても掛買ひしか出來ない。それに支拂は年二回位なので、そこをツケ目にされた。現金なら五十錢に賣り、しかもそれで充分に儲けてゐるものを「掛」のときには、五十七、八錢にする。どの品物もさうする。小作人はそれが分つてゐて、どうにも出來ず、結局そこから買はなければならない。——△は三年もしないうちに、メキ／＼と「肥えて」行つた。

蜘蛛の巣を思はせるやうに、どの百姓も皆△の手先にしつかりと結びつけられ、手繰り寄せられてゐる。

村に「信用購買販賣組合」が出來てから、△との間に問題が起つた。——今迄とは比らべにならない程安く品物が買へるので、小作人は「組合」の方へドシ／＼移つて行つた。と、△はだまつてはゐない。——若し「組合」の方へ鞍替するやうな「恩知らず」がゐたら、前の借金がものを云ふぞ、と云ひ出した。人のいゝ小作達は、さう云はれて、今迄あんなに氣儘に借金をさせて貰つたのに、それは本當に忘恩なことだ、と思つた。

△は小作人が金で支拂へないと、米や雑穀でもいゝと云つた。——百姓が町へ行つて、問屋に賣る値段で、それを引きとつてくれた。それで△は貸金の回收をうけると同時に、それを又賣りして、そこから利ざやを——つまり二重に儲けてゐた。

在郷軍人分會長、衛生部長、學務何々……と、肩書をもつてゐる△の旦那のやうになりたい、それが小作人の「夢」になつてゐる。——小作人達は道で、△の旦那に會ふと、村長や校長に會つた時より、道をよけて、丁寧に挨拶した。

「青年訓練所」では、△の旦那が「修養講話」をやつた。

夜　道

健達は、士官の訓練が終つて、△の「修養講話」になると、疲れから居睡りをし出した。「青年の任務」「思想善導」「農民の誇」……何時もチットモ變らないその講話は、もう誰も聞いてゐるものがなかつた。

外へ出ると、生寢（なまね）の身體にゾクッと寒さが來た。霧雨は上つてゐたが、道を歩くと、ヂュク／＼と澱粉糀がうづまつた。空は暗くて見えなかつた。然し頭を抑えられてゐるやうに低かつた。何かの拍子に、雨に濡れた叢がチラ／＼ッと光つた。

「もう一番終つたが？」――後から七之助が言葉をかけた。

健はたまらなく眠かつた。「えゝや、まだよ、人手がなくなつてな。」

誰かワザと大きくあくびをした。

「健ちやは兵隊どうだべな。」

「ん、行かねかも知らねな。……んでも、萬一な。」

「その身體だら行かねべ。青訓さなんて來なくたつてえゝよ。」

默つてゐた武田が口を入れた。――「徴兵の期間ば短くするために青訓さ行ぐんでたら、大間違ひだど！」

初まつた、と思ふと、七之助はおかしかつた。

「あれはな、兵隊さ行ぐものばかりが色々な訓練を受けて、んでないものは安閑としてゐるべ、それぢや駄目だッてんで、あれば作つたんだ。兵隊でないものでも、一つの團體規律の訓練をうける必要はあるんだからな。」

「所で、現時の農村青年は輕チョウ浮ハクにして、か！……」

七之助が小便をしながら、ひやかした。叢の葉に、今迄堪らえてゐたやうな小便が、勢よくバチャ／＼と當る音がした。

「ん。」——武田が眞面目にうなづいた。

恐らく、どんな勞働者よりも朝早くから、腰を折りまげて働いてゐる百姓が、都會の場末に巣喰つてゐる朝鮮人よりも慘めな生活をしてゐる。それでも農村の青年は「一擧チョウ浮ハク」だらふか。——これ以上働かして、それでどうしやうといふのだ。——健は、出鱈目を云ふな、と思つた。

「七ちや、小樽行きまだか。」

「ん、もうだ。」

「もうか？」

又、七之助とも離れてしまはなければならないか、と思ふと、健は淋しかつた。——健の好きなキヌも札幌へ出て行つてゐた。製麻會社の女工に募集されて行つたのだつた。然し、それが一年しないうちに、バァーの女給をしてゐるといふ噂さになつて、健の耳に戻つてきた。

……話が途切れると、泥濘を歩く足音だけが耳についた。田の水面が、暗い硝子板のやうに光つてみえた。

七之助はとりどめなく、色々な歌の端だけを、口笛で吹きながら歩いてゐた。七之助も何か考へ事をしてゐる。

「三吾の田、出が悪いな。」——七之助が蹲んで、穗をむしつた。

「三吾も不幸ばかりだものよ。」

——三吾が自分のでもない泥炭地の田を、どうにか當り前にしやうと、無理に、體を使つた。そして二度「村役場」と「道廳」から表彰された「農夫として、その勤勉力行は範とするに足る」と云はれた。岸野が道廳へ表彰方を申請したのだつた。

その額椽を、天井裏のない煤けた家の中に掛けた日から、二タ月もしないうちに、三吾は腰がへりも出來ない程の神經

痛にかゝつてしまつた。痛みは寢ると夜明け迄續いた。三吾は藁束のやうにカサ〳〵に乾しからびて、動けなくなつてしまつた。——毎日「表彰狀」だけを見てゐた。

それは然し、三吾ばかりでない。——東三線の伊藤のおかみさんは、北海道の冷たい田に、あまり入り過ぎたので、三月も腰をやんで、それからは腰が浮かんで、何時でも歩くときは、ひどい跛のやうに振つた。

吉本管理人の家へ、何かで集まることがある。彼等はどれもみんなガン丈な、太い骨節をし、厚い掌をしてゐるが、腰が不恰好にゆがんでゐたり、前こゞみであつたり、——何處か不具（かたわ）だつた。みんなさうだつた。

市街地の端から、武田が別れてアゼ道に入つて行つた。

「健ちや、武（たけ）やつぱり[ム]さ行つてるとよ。」

口笛をやめて、すぐ七之助が云つた。

「んか…………」

「お前え、それから岸野がワザ〳〵小樽から出てきて、とツても青訓や青年團さ力瘤ば入れてゐるツて知らねべ。」

「んか？」

「阿部さんや伴さんが云つてたど。——キツト魂膽があるツて。」

「ん？」——健にはそれがハツキリ分らなかつたが——何か分る氣持がした。

「熱ツ、熱ツ、熱ツ!!」

健は足を洗ひに、裏へ廻つた。濕つた土間の土が、足裏にベタ〳〵した。物音で、家の中から、

「健かアー——？」と母親が訊いた。

「うゝ。」——口の中で返事をしながら、裾をまくつて、上り端に腰を下した。——家の中から、ムレた煎藥の匂ひがきた。

由三はランプの下に腹這ひになつて、兩脛をバタ〳〵動かしながら、五、六枚しかついてゐないボロ〳〵の繪本を、指を嘗め〳〵頁を繰つてゐた。

「姉、こゝば讀んでけれや。」

由三は爐邊でドザを刺してゐた姉の肱をひいた。

「馬鹿ッ！」

姉はギクッとして、縫物をもつたまゝ指を口に持つて行つて吸つた。「馬鹿ッ！　針ば手さ刺した！」

由三は首を縮めて、姉の顏を見た。——「な、姉、この犬どうなるんだ？」

「姉なんか分らない。」

「よォ——」

「うるさい！」

「よォ——！たら！——！んだら、惡戯するど！」

健は爐邊に大きく安坐をかいて坐つた。指を熊手にして、ゴシ〳〵頭をかいた。

家の中は、長い間の焚火のために、天井と云はず、羽目板と云はず、ニヤ〳〵と黑光りに光つてゐた。天井に渡してある梁や丸太からは、長い煤が幾つも下つてゐて、それが下からの焚火の火勢や風で搖れた。——ランプは眞中に一つだけ釣つてある。ランプの丸い影が天井の裸の梁木に光の輪をうつした。ランプが動く度に、その影がユラ〳〵と搖れた。誰かゞランプの側を通ると、障子のサンで歪んだ黑い影が、大きく窓を横切つた。ランプは始終チイ〳〵と音をさせて、油を吸ひ上げた。時々明るくなつたかと思ふと、吸取紙にでも吸はれるやうに、すウと暗くなつた。

「さつきな、阿部さんと作さん來てたど。」

「ン——何んしに？」
「なア、兄ちや、犬ど俺どどつち偉えんだ。——犬だな。」
「道路のごとでな。今年も村費が出ねんだとよ。」
「今年もか——何んのための村費だんだ。馬鹿にする。又秋、米ば運ぶに大した費用だ……。」
「兄ちや、犬の方強えでアな！」
「んで、どうするツて？」
「暇ば見て、小作人みんな出て直すより仕方が無えべど。——村に金無えんだから。」
「犬だなア、兄ちや……。」
「うるさいツ！」いきなり怒鳴りつけた。——「又小作いぢめだ！　弱味につけ込んでやがるんだ。放つてけば、どうしたつて困るのア小作だ。んだら、キツト自分の費用でやり出すだらふツて、待つてやがつたんだ。——村會議員なんて、皆地主ばかりだ。勝手なことばかりするんだ。」
　S村で、以前、村役場に對して小作爭議を起したことがあつた。北海道は町村が澤山の田畑を所有してゐて、それに小作を入地させてゐた。それで、よく村相手の爭議が起る。——然しS村の村會議員が全部地主であつたゝめに、役のこともあり、又やがては自分達の方への飛火をも恐れて、頑強に對峙してきたゝめに、慘めに破れたことがある。
「明日吉本さんの處さでも集つて、相談すべアつて。」
　おはぐろの塗りのはげた母親の、並びの悪い齒の間に、飯が白く殘つてゐた。
「…………。」
　健は鹽鮭の切はしを、せツかちにジユウ、ジユウ燒いて、眞黑い麥飯にお湯をかけて、ザブ〳〵かツこんだ。

風が出てきたらしく、ランプが輕く搖れた。後の泥壁に大きくうつてゐる皆の影が、その度に、あやつられるやうに延びたり、ちゞんだりした。

由三は焚火に兩足をたてゝ、うつら〳〵してゐた。

「母、いゝ、いたこッて何んだ。——山利さいたこ來てな、今日お父ばおろして貰つたけな、お父今死んで、火の苦しみば苦しんでるんだとよ。」

「本當か？」

「いゝ、いたこッて婆だべ、いたこ婆ッてんだべ。——いたこ婆さ上げるんだッて、山利で油揚ばこしらへてたど。」

「お稻荷様だべ。」

「お稻荷様ッて狐だべ。んだべ！」——由三が急に大きな聲を出した。

「ん。」

「んだべ、なア！」——獨り合點して、「勝ところの芳な、犬ばつれて山利さ遊びに行つたら、とオても怒られたど。」

「さうよ。——忽體ない！」

「山利の母な、お父ば可哀相だつて、眼ば眞赤にして泣いてたど。」

「んだべ、んだべ、可哀相に！」

「な、兄ちや、狐……」——瞬間、爐の火がパチ〳〵ッと勢よくハネ飛んだ。それが由三の小さいへようたん形のチンポへ飛んだ。

「熱ッ、熱ッ、熱ッ！！……」

由三はいきなり榾木を投げ飛ばすと、後へひつくりかへつて、着物の前をパタ〳〵とはらつた。泣き聲を出した。「熱ッ

熱ッ!!」

「ホラ、見れ!　そつたらもの向けてるから、火の神様に罰が當つたんだ。馬鹿!」

姉のお惠が、物差しで自分の背中をかきながら、――「その端なくなつてしまへば、えゝんだ。」と、ひやかした。

「えゝッ、糞ッ!　姉の白首!」

ハヽ、べソをかきながら、由三が喰つてかゝた。聞いたことのない惡態口に、皆思はず由三をみた。

母親がいきなり、由三の小さい固い頭を、平手でバチ〳〵なぐりつけた。

「兄ちや、由この頃どこから覺べえて來るか、こつたら事ばかり云ふんだど!」

お惠は背中に物差しをさしたまゝの恰好で、ハヽ、フイに顏色をかへた。それが見る〳〵こはばつて行つた。

と、お惠は、いきなり、由三を物差しで毆ぐりつけた。ギリ〳〵と齒をかみながら、ものも云はずに、物差しがその度に、風を切つて、鳴つた。――そして、それから自分で、ワアッ!と泣き出してしまつた。

明日は三時半頃から田へ出て、他の人より遲れてゐる一番草を刈り上げてしまはなければならない。――健は、然し、寢れなかつた。表を誰かペチャ〳〵と足音をさして、通つて行つた。健は起き上つた。ランプの消えた暗い土間を、足先きで探ぐりながら、臺所へ下りて行つた。水瓶から、手しやくで、ゴクリ〳〵のどをならしながら、水を飲んだ厩小屋から、尻毛でピシリ〳〵馬が身體を打つてゐる音が聞えた。

夜着をかぶると、間もなく、ねぢのゆるんだ、狂つた柱時計が、間を置きながら、ゆつくり四つ打つた。

二

「S相互扶助會」發會式

正面の高いところに「、、、、」の寫眞がかゝつてゐる。——「修養倶樂部」の壁には、その外「乃木大將」「西郷大先生」「日露戰爭」「血染の、ボロ、〳〵になつた聯隊旗」などの寫眞が、額になつてかゝつてゐる。演壇の左側には、拂下げをうけた、古ぼけた舊式な鐵砲が三挺組合せて飾つてある。——

乃木大將の話は何度きいても飽きなかつた。

演壇には「S相互扶助會」發會式の順序と、その兩側に少し離して、この會が主旨とする所の標語が貼り出されてゐた。

> 海田山林の開發より
> 心田を開拓せよ！

> 強靭なる獨立心と
> 服從の美德と
> 協同の精神へ！

會が終つてから、「一杯」出るといふ先觸れがあつたので、何時になく澤山の百姓が集つてゐた。「停車場のあるH町」からも來てゐた。大概の小作は、市街地の旦那やH町の旦那から「一年」「二年」の借金があるので、一々挨拶して歩かなければならなかつた。

挨拶に行くと、米穀問屋の主人は大樣にうなづいた。

「今年はどうだ？」
「えゝ、まア、今のところは、えゝ、お蔭樣で……」
小作は腰をかゞめて、一言々々に頭をさげた。――それが阿部や健たちの居る處から一々見える。健も借金があつた。こんな時に、一寸挨拶して置けば、都合がよかつた。それに若し今年兵隊にとられるやうな事になれば、病身の父や女の手ばかりの後のことでは、キツト世話にならなければならない。――健はフトその側を通りかゝつた、といふ風にして挨拶した。――挨拶をしてから、然し自分で眞赤になつた。健は「模範小作」だつたので、Ａの旦那も心よく挨拶を返へしてくれた。
會場の中は、自然に、各農場別に一かたまり、一かたまり坐らさつた。お互が車座になつて、話し込んでゐる。――小作達は仲々かう一緒になれる機會がなかつた。無骨な、日燒けした手や首筋が、たまにしか着ない他所行きの着物と不釣合に、目立つた。裂目の入つた、ゴワ〳〵した掌に、吸殼をころがしながら、嫁のこと、稻の出揃のこと、青豌豆のこと、小豆のこと、天氣のこと、暮しのこと、旦那のこと……何んでも話し合ふ。
――かういふ會の時は卷煙草を吸ふものだとしてゐる小作が、持ちなれない手つきで、「バット」を吸つてゐた。
夜遊びに、町へ自轉車で出掛けたり、始終村の娘達と噂さを立てゝゐる若いものは、その仲間だけ隅の方に陣取つて、人を馬鹿にしたやうな大聲を出して、しきりなしに笑つてゐた。女の話をしてゐた。伊達に眼鏡をかけたり、黑絹の首ハンカチを卷いたりしてゐる。然し靑年團の仕事や「お祭り」の仕度などでは、娘達とフザけられるので、それ等は先に立つて、よく働いた。
子供達は「鬼」をやつて、走り廻つてゐた。大人達を飛び越え、いきなりのめり込んだり――坐つてゐる大人を、まるで穀のやうに押しわけて、夢中で騷いでゐた。時々、大聲で怒鳴られる。が、すぐ又キヤツ〳〵と馳け出す。……煙草の

煙がコメて、天井の中央に雲のやうに、層をひいてゐた。

「阿部さん」

「小樽さ行ぐごとに決つたど。」

阿部と一緒に七之助がゐて、健を見ると云つた。

「工場さ入るんだ。――伯母小樽にゐるしな。……んでもな、健ちや、俺あれだど、百姓嫌になつたとか、ひと出世したいとか、そんな積りでねえんだからな。――阿部さんとよく話したんだども、少しな考へるどこもあるんだ……。」

「ん……。」――健は分つてゐた。

「村ば出れば、案外、村が分るもんだからな。」

阿部が何時もの低い、ゆるい調子で云つた。――農場で何かあると、それが子供を産んだとか、死んだとか、といふことから、小作調停、小作料の交渉まで、キツト皆「阿部さん」を頼んだ。足を使つてもらつた。――四十を一つ、二つ越してゐた。荒々しい動作も、大きな聲も出さない、もどかしい程温しい人だつた。

何時でも唇を動かさないで、口のなかだけでものを云つた。

「阿部さんは隅ッこにゐれば、一日中ゐたッて誰も氣付かねべし、阿部さんも默つて坐つてるべ。」――七之助がよく笑つた。

村では、四人も五人も家族を抱えて働いてゐる四、五十位の小作人の方が、遊びたい盛りのフラ／＼な若い者達より、生活のことではずッと、ずッと強い氣持をもつてゐる。――小作爭議の時など、農民組合で働いてゐる若い人は別として何處でも一番先きに立つて働くのは、その年の多い小作だつた。――阿部はその一人だつた。

阿部は旭川の農民組合の人達が持つてくる「組合ニュース」や「無產者新聞」を、田から上つた足も洗はないで、床を

低く切り下げて据付けてあるストーヴに、いざり寄つて讀んだ。丹念に、一枚の新聞を何日もかゝつて、一字々々豆粒でも拾ふやうに讀んでゐた。壞れた、絲でつないだ眼鏡を、その時だけかけた。

彼が畔道を、赤くなつてツバの歪んだ麥桿帽子をかぶり、心持腰を折つて、ヒヨコ／＼歩いてゐるのを見ると、吉本管理人ではないが、「あんな奴が楯をつくなんて！」考へられなかつた。

模範青年

「見れ、武田の野郞、赤い徽章ば胸さつけて、得意になつて、やつてる、やつてる！」

七之助が演壇の方を顎でしやくつた。――阿部はだまつて笑つてゐた。

「な、健ちや、青年同盟だ、相互扶助會だなんて云へば、奇妙にあのガキ／＼の武田と女たらしの、ニヤケ連中が赤い徽章ばつけて、走つて步くから面白いんでないか。――健ちやみだいな模範青年やるとえゝにな。」

健はひよいと暗い顏をした。

「笑談だ、笑談だ！　ハヽヽヽヽ。」

――健は役場から模範青年として、表彰されてゐた。その頃は、まだ丈夫だつた父親が「表彰表」をもつて、どうしていゝか自分でも分らず、家のなかをウロ／＼したことを覺えてゐる。――健も自分の努力が報ひられたと思ひ、嬉しかつた。

ところが一寸經つて、健と小學校が一緒だつた町役場に出てゐる友達が、健に云つた。――近頃農村青年がともすれば「過激な」考へに侵かされ勝ちで、土地を何百町步も持つてゐる地主は困りきつてゐる。ところが、丁度村に來てゐた岸野と吉岡が、町役場で、そのことで相談したのを給仕のその友達が聞いたのだつた。

「表彰でもして、――情の方から抑さえつけて、喜んで働かして置かないと、飛んでもなくなる。」吉岡がさう云つた。

「少し張り込んで、金箔を塗つた立派な表彰狀を出してさ、授與式をワザと面倒臭く、おごそかにすれば、もう彼奴等土百姓はわけもなくころりさ。」――さう云つたのが岸野だと云ふのだつた。

――まさか!?

校長を信頼してゐた健が、そのことを直ぐ校長に話してみた。

「そんな馬鹿な、理窟の通らない話なんかあるものか、「お前さんが親孝行だし、人一倍一生ケン命に働くからさ。」と云つた。――健だつて、それはさうだらふ、と思つた。

阿部だけは、地主やその手先の役場の、とても上手い奸策だと云つた。

「もう少し喰えなくなれば、模範青年ツて何んだか、よく分るえんになる。」

――皆ねたんでゐる!――健はその當時はさう思つた。

然し、健は父親の身體が變になり、働きが減り、いくら働いても（不作の年でも!）それがゴソリ〳〵と地主に取り上げられて行くのを見ると、もとはちつともさうでなかつたのに、妙に投げやりな、底寒い氣持になつた。切りがない、と思はさつた。――「何んだい模範青年が!」――阿部の云つたことが、思ひ當つてきた。

それから健は、誰にでも「模範青年」と云はれると、眞赤になつた。

「武　田」

會が始まつた。

「開會の辭」武田が出た。如何にも武田らしく演壇に、兵隊人形のやうに直立して、演說でもするやうに、固ッ苦しい辭で始めた。聞きなれない、面倒な熟語が、釘ッ切れのやうに百姓の耳朶を打つた。

――……この危機にのぞみ、我々一同が力を合はせ、外、過激思想、都會の頽風と戰ひ、内、剛毅、相互扶助の氣質

を希ひ、もつて我が村の健全なる發達を圖りたい微衷であるのであります。

——……なほ、此度は旭川師團より澁谷大尉殿の御來臨を辱ふし、農場主側よりは吉岡幾三郎氏代理として松田省一氏、小作方よりは不肖私が出席し、こゝに協力一致、與村圓滿の實をあげたいと思ふのであります。

七之助は聞きながら、一つ、一つ武田の演説を滑稽にひやかして、揚足をとつた。

「武田の作ちやも偉くなつたもんだな。——惡たれだつたけ。」

健の前に座つてゐる小作だつた。——「餘ッ程、勉學したんだべ！」

七之助が「勉學」といふ言葉で、思はず、プウッ！　とふき出してしまつた。

「大した勉學だ。——△と地主さん喜ぶべ。圓滿々々、天下泰平。」

健とちがつて、前から七之助にはさういふ處がある。洒落やひやかしが、百姓らしくなく、氣持のいゝ程切れた。

「地主代理」

地主代理は思ひがけない程子供らしい、細い聲を出した。それに話しながら、何度もひよい〱鼻の側に手を上げた。それが百姓達には妙に「人物」を輕く見させた。七之助は、そら七ツ、そら十一だ、そら又、……と、數えて笑はせた。

——地主と小作人は「親と子」といふやうに、そんなに離れたものでなしに「頭腦と手」位に緊密なもので、お互ひがキツチリ働いて行かなければ、この日本を養つて行くべき大切な米が出來なくなつてしまふ。他所では、此頃よく「小作爭議のやうな不祥事を惹起してゐるが、この村だけはそんな事のないやうに、その意味でだけでも、この新に出來た組合が大いに働いて貰ひたい。……地主代理は時々途中筋道をなくして、ウロ〱しながら、そんな事を云つた。

「んだら、もう少し小作料は負けて貰いたいもんですなァ——。」

誰か滑稽に云つた。——背後を振りむいて、どッと笑つた。

「佐々爺」

かういふ會があると、「一杯」にありつける。何時でも、それだけが目當てでくる酒好きな、東三線北三號の「佐々爺」がブツ／＼こぼした。

「糞も面白ぐねえ。──早く出したら、どうだべ。」

「んだよ、んだよ、な、佐々爺」──七之助が面白がつた。

「飽き／＼するでえ！」

佐々爺は何時でも冷酒を、縁のかけた汁椀についで、「なんばん」の乾したのを嚙り、嚙り飲んだ。──それが一番の好物で醉ふと淋い案外透る聲で、猥らな唄の所々だけを歌ひながら、眞直ぐな基線道路をフラ／＼歸つて行つた。──佐々爺が寄ると、何處の家でも酒を出した。酒が生憎なかつたりすると、佐々爺は子供のやうに、アリ／＼と失望を顔に表はして頼りなげに肩を振つて歸つて行つた。

佐々爺は晩出たきり、朝迄歸らない時がある。醉拂つて、田の中に腐つた棒杭のやうに埋つたきり眠つてゐた。探がしに行つたものが揺り起しても、いゝ氣に眠つてゐた。

「女郎の蒲團さもぐり込んだえんた顔してやがる！」

ところが、佐々爺は村一番の「政治通」だつた。「東京朝日」「北海タイムス」を取つてゐるものは、市街地をのぞくと、佐々爺だけで、濱口、田中、床次、鳩山などを、自分の隣りの人のことよりも、よく知つてゐた。今度床次がどうする、すると田中がかうする。──分つた事のやうに云つて歩く。自分では政友會だつた。

阿部に「爺さんは、どうして政友會かな？」と、きかれて、「何んてたツて政友會だべよ。──政友會さ。百姓にや政友會さ。景氣が直るし、仕事が殖えるしな。」と云つた。

「この會、政友會さ肩もつツてたら、うんと爺ちや應援すべな。」

七之助がひやかした。

「政友會ば？——んだら、勿論、大いにやるさ。勿論！」

「廣く農村にも浸潤されなければならない」

次は「渡邊大尉」だつた。

軍帽を脇の下に挾んで、ピカ／＼した膝迄の長靴に拍車をガチヤ／＼させて、壇に上つてくると、今迄ガヤ／＼騒いでゐたのが、抑えられたやうに靜かになつた。が、すぐ、ガヤ／＼が返つてきた。——子供達は肩章の星の數や劍について、しやべり出した。口爭ひを始めた。——百姓は、たまに軍人が通ると、田の仕事を忘れて、何時迄も見送つてゐた。兵隊のことになると、子供と同じだつた。

「農村に於ける軍人的精神」——それが渡邊大尉の演題だつた。軍隊に於ける嚴格な秩序、正しい規律、服從關係を色々な引例をもつて說明し、これこそが外國から決して辱かしめられた事のない日本の强大な兵力を作つて居るものであり、そしてこの精神は、ひとり軍隊内ばかりでなく、廣く農村に浸潤されなければならない。殊に外來惡思想がやゝもすれば前途ある青年を捉え、この尊い社會秩序を破壞せんとするに於ては、益々健全なる軍人精神が、實に農村に於てこそ要求されなければならないのである。——さういふ意味のことを云つた。

武田達は終るのを今か今かと待つてゐて、さきがけをして拍手した。

「阿部さん。」

後から小作が聲をかけた。——「外來何んとか思想だかつて、あれ何んですかいな。さつきから、どの方も、どの方も仰言るんですけれどねえ。」

「さア……。」阿部は一寸考へてゐた。「この村にそんなもの無えんでせう……。」

それから別のことのやうに、笑談らしく、「んでも、あんまり小作料ば負けてけれ、負けてけれッと云へば、地主様の方で怒つて、過激思想にかぶれてゐるなんて、云ふかも知れないね。」――云つてしまつてから、口のなかだけで笑つた。

武田は又上ると、會の性質、目的、入會條件、事業等について説明した。餘興に入り、薩摩琵琶、落語、××新聞から派遣された年のとつた記者の修養講話――「一口話」があり、――そして「酒」が出ることになつた。

「馬鹿に待たせやがつたもんだ。」

「犬でもあるまいし、な！」

胃の腑の中に、熱燗の酒がヂリヂリとしみこんで行くことを考へると、日燒けした百姓ののどがガツガツした。――誰でもさう酒に「ありつけ」なかつた。

「今日は若い女手は無えんだと。」

「んとか？」

「又、良え振りして、武田のしたごッだべ！」

それでも、女房達や胸に花をつけた役員などが、酒をもつて入つて來ると、急に陽氣になつた。

武田が脚梯子をもつて來て、皆から見える高いところへビラを張りつけた。

酒一斗　　校長先生
金三十圓也　　岸野殿

ビール一打　　　　　　　　囚　殿
ビール一打　　　　　　　　吉岡殿
手拭百本　　　　　　　　　H町長殿
金十圓也　　　　　　　　　相馬殿

右本會設立ヲ祝シ、各位ヨリ御寄贈下サイマシタ。有難ク御禮申上ゲル次第デアリマス。

幹　事

「ホオーッ！」
「豪儀なもんだ。矢張りな。」
「有難いもんだ。」
盃と銚子がやかましく、カチャ〳〵と觸れ合つた。
——役員や招待された人や講演した人達は、吉本管理人の宅へ引き上げた。そこで水入らずの「酒盛」を始めた。H町からは、自動車で酌婦が七、八人やつてきた。——皆は夜明け近く迄騷いでゐた。酌婦達はその夜歸らなかつた。
阿部や健達は一足先きに表へ出た。星が高い蒼い空に、粒々にきらめいてゐた。出口から少し離れた暗がりで、二、三人、竝んで長い小便をしてゐた。——側を通ると、

「オ、阿部君！」

ガラ〳〵聲で、作だつた。健と七之助は頭を下げた。

寄つてきて、阿部に「どうだ、この魂膽は――直ぐ、あつちさ通信頼むど。」――聲を低くめて云つた。

健は默つて、皆の後をついて行きながら、兎に角、近いうちに阿部を訪ねてみやう、と考へてゐた。

三

節は悲しかつた

「んで？……」

「…………」

節は一言も云はなくなつてしまつた。

健もだまつた。だまつたまゝ歩いた。

晝のうち熱れてゐた田から、氣持の悪いぬるい風が、ボー、ボー、と兩頬に當つて、後へ吹いて行つた。歩いて行くのに従つて、蛙が鳴きやみ、逆に後の方から順々に鳴き出した。

「どうした？」

「…………」

「え、？」

「…………」

だまつてゐる。ひよいと見ると、闇の中で白い横顔がうつむいてゐた。

「川の方さでも行ぐか？」

「…………」

川の方へ曲がると、矢張りついてきた。悪戯をして、一寸つッついても、何時でも身體をはづませて、クツ〳〵と笑ひこけるのに、顎をひいて、身體をコッちりさせてゐる。女に默られると、もうかなはなかつた。——途中の家々では窓をあけて、「蚊いぶし」をやつてゐた。腰巻一つの女が、茣蓙の上へ、ヂカにゴロ〳〵してゐるのが見える。——暑苦しい晩だつた。

河堤に出る雜草を分けて行くと、細身の葉が痛く顏に當つた。何處かで、ヒソ〳〵聲がする。——そんな組が二つも、三つもあつた。二番草も終つて、こゝしばらく暇だつた。

堤に出ると、すぐ足の下の方で、話し合つてゐる大きな聲と一緒に、ザブ〳〵と馬を洗つてゐるらしい音がした。踏みの悪い砂堤に足を落し、落し出鼻を廻はると、河原で焚火をしてゐた。——夜釣りの魚を集めてゐるらしく、時々燃えざしを川の眞中へ投げた。パチ〳〵と火の粉を散らしながら、赤い弧を闇にくつきり引いて、河面へ落ちると、ヂユンと音をたて、消えた。水にも映つた。

「奇麗だね。」

今度は健がだまつた。そのまゝ沈默が少し續くと、

「怒つたの？……」と、節が云つた。

やつぱり節だ。——短い言葉に節がすつかり出てゐる。健は急に節がいとほしく思はれた。健は怒つてゐるやうに、無骨に、女の肩をグイと引き寄せると、いきなり抱きすくめた。はづみで、足元の砂がヅス〳〵ツと、めり込んだ。節は何時ものやうに、歯をしめたまゝの堅い唇を、それでも心持もつてきた。女の唇からは煮肴の、かすかに生臭い匂

ひがしてゐた。

「何食つてきたんだ。口ふけよ。」

節は眞面目な顔をくづさずに、子供のやうに、袖で口をぬぐつた……。

二人は草を倒して敷いて、その上に腰を下した。こつちの焚火が映つて、向ふ岸の雜木林の明暗が赤黑く、ハッキリ見えてゐた。

「健ちや、阿部さん好き？」

「……阿部さんのどこさあまり行ぐなッて云ひたいんだべ。」

「…………」

「んだども、ま、阿部さんや伴さんど話してみれ。始めは、それァ俺だつて……」

「良え人だわ、二人とも。んでも……この前の會のことで、ビラば一枚々々配つて歩いたべさ。あれでさ……」

――「相互扶助會」が本當は何のために建てられ、黑幕には唯と誰がゐて、表面如何にももつともらしく裝つてゐても、裏には裏のあること、それ等が「小作人よ、欺されるな。」といふ標題のビラにされてゐた。

「……あんなにしてやつたのに、ビラば配るなんて恩知らずだッて、怒つてるッ。」

「誰だ？」

「…………」

「お前か？――んだべ。」

「……誰でもさ。」

「こけッ！」

二人ともかたくなり黙り込んでしまつた。

「な、節ちや。」――調子が變つてゐた。「節ちやは、あれだらふ。俺、模範青年になつてる方がえゝんだべ？」

健は節を「お前」と云つたり、「節ちや」と云つたりする。「節ちや」といふ時は、何か眞面目なことを心に持つてゐる時に限つてゐた。――節はそれを知つてゐる。

「健ちやだもの、滅多なことしねッて、わし思つてるわ。んでも淋しいの……。皆が皆まで健ちやば見損つた、見損つたッて云ふかと思へば……。」

「節ちや、さう云つても、磯部の農場で阿部さんや作さんさ誰だつて指一本差さねえんでねえか。」

「それァんだわ。良え人ばかりだもの。……んでも阿部さんば煙ぶたがつてるわ。」

「小作で無え人はな。――俺達第一小作だからな。」

「變つたのね……。」

「模範青年の口から、そつたら事聞くと思はないッてか？」

健はかへつて、それで自分を嘲つた。――「模範青年、模範青年！」

節は不意に顔を上げた。

焚火が消えると、四圍が暗く、靜かになつた。時々川の面で、ポチヤツ――ポチヤツ、と水音が立つた。魚が飛び上るらしかつた。

「今に分るさ……。遲くなつた、歸るか、ん？」

健は腰をあげて、前をはろつた。しめッぽい草の匂ひが、鼻に來た。節はしばらくじッとしたまゝでゐた。――「ん？」

と、うながすと、やうやう腰を起した。

「歸るウ？」

健は雜草を分けて、歩き出した。

向ふを、「こゝは御國の何百里……」の歌を口笛で吹きながら、誰か歩いて行つた。

「口笛、武田でねえかな。――曲るど。見つけられたら、良(え)え模範青年だからな。」そして大きな聲で笑つた。

「もう、模範青年、模範青年ッてのやめてよ。」節は悲しい聲を出した。

――節は悲しかつた。健と會ふときは、何時でも何かの期待でウキ／＼する。然し自分でもハッキリ分らなかつたが、何んだか物足りない氣持を殘して、何時でも別れてゐた。健の何處かに冷たさがあると思つた。それが悲しかつた。

村に入る角の「藪」を曲がると、その向ひ側の暗いところから、女が誰かにくすぐられてゞもゐるらしく、息をつめてクッ／＼と笑ひこけてゐるのが聞えた。が、二人の足音で、それがピタリとやんだ。草を掻き分ける音が續いた。

「な、節ちや。――此頃こんなに皆フザけてるんに、警察でなんで默つてるか知つてるか。」

外の人は何故かう面白さうにして、夜會ふんだらふ。――それを今見せつけられて、節はこみ上つてくる感情を覺えた。

「地主の連中があまり嚴しくしないでけれッて云つてあるんだとよ。」

無感動な男(ひと)だ、何を考へてるんだらふ！――節は聞いてゐなかつた。

「活動もあるわけでなし、そば屋もなしよ、遊場もねえべ、んだから若い者が可哀相だんだとよ、どうだ？」――さう云つて、自分でムフ、、、、と笑つた。「有難い地主さんだな……。」

「ところがな、阿部さんが云ふんだ。――阿部さんッてば、お前すぐ嫌な顏すべ。――阿部さんが小樽の工場にゐた時なんて、工場の隅ッこさ落ちてる絲屑一本持つて外さ出ても、首になつたりしたもんだどもな、女工さんの腹ば手當り次第に大(で)ッかくして歩いても、それだら默つてるんだとよ。」

「まさか？……」

「だまつて聞け。——それがな、かういふ理由だんだと。そんなのを禁ずればな、お互ひ氣が荒くなつ……」みんな云はせないうちに、節がブツと吹き出してしまつた。

「この糞ッたれ！」

健はそのまゝ口をつむんだ。然しすぐ又口を開いた。

「な、仕事が苦しいべ、んだから何んかすれば直ぐ勞働組合にひッかゝつて行くんだ、さうさせないためにするんだ——。」

「まア／＼考へたもんだね。——んだら、わざ／＼管理人さん達の肝入りで出來た處女會はどうなるの？」

健は後向きになつて、急に大きな聲を出した。

「さうさ、裏が裏だから、表だけは立派にして置くのさ。やれ節婦だ、孝婦だッておだておけて、——抑えて置くのよ。そこア、うまいもんよ。」

「分らないわ。」

停車場のあるH町から通つてゐる幌のガク／＼した古自動車が、青白いヘッドライトを觸角のやうに長く振りながら、一直線に村道から市街地に入つてきた。入口から、お客を呼ぶための警笛を續け樣にならした。それが靜かな市街地全體に響き渡つた。——△の雜貨店から、ガラ／＼と戸を開けて周章てゝ誰か表へ飛び出した。

二人は市街をよけて、畔道へ入つて行つた。

「だん／＼こッたら事ばかし仕てゐられなくなるど。」

別れる時健が云つた。

節はだまつて唇をかんだ。

健が家へ歸つて床に入り、ウト〳〵しかけた頃、表のギシ〳〵する戸が開いた。

「惠か？——又だな……。何處さ今頃迄けづかつたんだ？」

暑苦しいので寐れずにゐた母親が、眼をさまして聲をかけた。お惠はだまつたまゝ上つてきた。寢床のそばで、暗がりに伊達卷を解くシユウ〳〵といふ音だけがした。

四

「嘘とけツ！」

同じ石狩川でも餘程上流になつてゐたが、雜穀や米を運ぶために、稀れに發動機船がボン〳〵と音をさせて上つてきた。その音は日によつては、ずウと遠く迄聞えた。「ホ、發動機船だ。」何處にゐる小作でも、腰をのばしながら音をきいた。

由三は村道を一散に走つた。帶の結び目が横へまはつて、前がはだけ、泥のはぢけた汚い腹を出しながら、ムキになつて走つた。——發動機船の音をきいたのだ。他の子供も畔道を走つてくる、それが小さく見える。やがて村道で一緒になり、一緒に走り出した。

皆は堤の突端へ竝んで腰を下ろし、足をブラ〳〵させた。河はくねつて、音もたてず、流れ一も見せずに流れてゐた。——深かつた。

音はしてゐても、なか〳〵發動機船は姿を見せなかつた。そして、ひよッこり——まるつきりひよつこりと、青ペンキの姿をあらはした。青空に透きとほるやうな煙の輪を、ボン〳〵順よく吹き上げながら、心持身體をゆすつて、進んでゐるか、ゐないか分らない程の速さで上つてきた。舵を後に引いてゐた。と、皆は手と足を一杯に振つて、雀の子のやうに口をならべて「萬歲！」を叫んだ。

舵機室と機關室から、船の人が帽子を振つて何か云つた。皆は喜んで、又「萬歲！」を叫んだ。

「な、あのバタ〳〵ッてのな。」――由三が隣りの奴の手をつかんで、自分の胸にあてた。「な、胸ドキッ〳〵ってゐべ、これと同じだんだとよ。――あれ船の心臓だとよ。俺の姉云つてたわ。」

「んか――？」

「噓こけッ！」――三人目が首を突き出した。「あれモーターッてんだ。」

「モーター？　モーターッたら、灌漑溝の吸ひ上げでねえか。えーえ、異ふわ、覺だ振りすなよ！」――由三は負けてゐない。

「んだ、んだ！」端の方が同意する。

――小さい口論の渦が卷く。

突然Ｓ村で煙火が擧つた。

眞夏の高い青空に、氣持よく二つにも、三つにもこだまをかへして、響き渡つた。

「ワアッ！」

由三達はワン、聲をあけて、跳ね上つた。

「さ、遲れたら大變だと！」

皆はもと來た道を走り出した。遲れたのが、途中で下駄を脫いだ。

岸野農場の主人が、奥樣と令孃同伴で、農場見物にやつて來ることになつてゐた。――それが今日だつた。

東京にゐる、爵位のある大地主も、時々北海道へやつてきて、小作人や村の人達を「家來」に仕立てゝ、熊狩りをやつた。

――Ｓ村では、村長を始め△の旦那、校長などは大臣でも來たやうに「泡を食つて」ゐた。

地主、奥樣、御令孃

自動車二臺が眞直ぐな村道を、砂塵を後に煙幕のやうにもうもうと吹き上げながら、疾走してきた。岸野農場の入口には百十七、八人の小作が、兩側に竝んで待つてゐる。町へ一日、二日の「出面」を取りに行つてゐるものも休んで出迎えた。

暑かつた。皆は何度も腰の日本手拭で顏をぬぐつた。

「もう少しな、俺達の忙がしい時にな、來てもらつたらえゝにな。」

「働いてるどこば見てければな。」

「ん、ん、んよ。」

「奥樣は何んでも女の大學ば出た人だと。」

「大學？――女の？　ホオ！」

「とオても偉い、立派なひとだとよ。」

「女、大學ば出る？　嘘云ふな。女の大學なんてあるもんか。……まさか、馬鹿ア、女が……。」

「んだよ、何んぼ偉いたつて！」

一かたまり、一かたまり別な事を云つてゐた。

「な、旦那もう少し優しい人だら一生ケン命働くんだともな。」

「働いだ事無えから分らないさ。」

「今度あまり急で駄目だつたども、こんな時あれだな、皆で相談ば纏めて置いてよ、お願ひせばよかつたな。」

阿部はみんなの云ふのを聞いてゐた。――阿部には、今度「見物」に來るといふことをワザと管理人がその前の晩にな

つて知らせた魂膽がハッキリ分つてゐた。二年程前、それで管理人が失敗してゐた。皆が普段からの不平を持ち寄つて、岸野の旦那が來たとき、それを嘆願した。その事から大きな事件になりかけた事があつたからだつた。——で、今度は管理人に出し拔かれてしまつた。

自動車の後の埃の中をベタ〳〵な藁草履をはいた子供達が、四五人追ひかけてゐた。のろくなると、皆は鈴なりに後へブラ下つてしまつた。——自動車は農場の入口の管理人の家の前で、ガソリンの匂ひをはいて、とまつた。

袖を輕く抑えて、着物の前をつまみ、もの慣れた身腰で、ひらりと奥樣が降り立つた。

「まア、とてもひどい自動車なこと！」——上品に眉だけをひそめた。

續いて、一文字を手にして、當の主人が白絣に絽の羽織で、高い背をあらはした。その後からクリーム色の洋裝した令孃が降りた。後の自動車には、出迎えに行つた村長、校長、管理人、それに11町の警察署長が乘つてゐた。

小作達は思ひ、思ひに腰をかゞめて挨拶した。

「ハ、まア、よオく御無事樣で……」

佐々爺は手拭で顏をゴシ〳〵こすりながら、何べんも頭を下げた。もう身體中酒でブン〳〵匂つてゐた。人集りに出るときは、佐々爺は何時でも酒をやらないと、いゝものが云へない癖があつた。

「お前達も達者で何よりだ。——ま、一生ケン命やつてくれ。」

皆は一言、一言に小腰をかゞめた。佐々爺は、小さい赫ら顏を握り拳のやうにクシヤ、クシヤにしながら、追從笑ひをした。

「本當に、ご苦勞ね。」

奥樣は廣々とした田を見渡すと、輕く息を吸ひ込んだ。

「貴方、この邊は全部？」――夫に聲をかけた。

「ん。」

「そオ――――」――「廣いのね。」

小作の女房や娘達は、たゞ奥樣と令孃だけに見とれてゐた。後にゾロ〳〵ついて行きながら、着てゐるものが何かお互ひに云ひ合つた。が、北海道の奥地にゐる小作の女達には、見たことも、觸つたこともないものだつた。柄のことでも同じだつた。古くさい、ボロ〳〵な婦人雜誌の寫眞でだけしか、さういふ人のことは知つてゐなかつた。――然し、何より「自分達の奥樣」がこんなに立派な人だといふことが、皆の肩幅を廣くさせた。

「馬鹿、お前からして見とれる奴があるか！」

作が女房の後を突いた。

岸野は畔道にしやがんで、

「どうだい、今年は？」と、稻の穗をいぢりながら、吉本管理人にきいた。――昔の地主などゝちがつて、岸野は田畑の事には緣が遠く、たゞ年幾らの小作料が手に入るかしか知つてゐなかつた。

「えゝまア並です。二番草の頃は、とてもよかつたんですが、今年の始め頃にかけて蟲が出ましてね。殊に去年は全部駄目と來てゐるから、今年はどんなに良くても小作はつらいんです。――餘程疲弊してるんで……。」

「ん……で、どうだい樣子は……？」

「え、今のところは……矢張り秋になつてみないと。」

――お互に聲が低くなつてゐた。

「ん――と、氣をつけて貰はないとな。」

「それア、もう！」

「ん。」

岸野は正直に云つて、時々後から不意に田の中へ突きのめされはしないか、といふ脅迫めいた恐怖を感じてゐた。何かの拍子に何度も何度もギヨツとした。一町も行かないうちに、汗びつしよりかいてゐた。然し表面だけの威厳は持つてゐなければならない。苦しかつた。

「この前のやうに、嘆願書をブツつける事はないだらうな。」

「その點こそ、今度は大丈夫ぬかりませんでした。」

「ん。」それで安心した。——然し後は口に出しては云はなかつた。應揚にうなづいて見せた。持つてゐた穂を田の中に投げると、小さい波紋の輪が稻の莖に切られながら、重り合つて廣がつて行つた。

「ね、お百姓さんつて、何時でもこの水の中に入つて働くの？」

「さうで御座います、お嬢さん。」

二つ三つ田を越したところで、丁度同じ年位の娘が頰かぶりの上に笠をかぶり、「もんぺい」をはいて、膝ッ切り埋つて働いてゐるのが見えた。顏に泥がハチけると、そのまゝ袖でぬぐつてゐる。

「あれぢや足も手も——身體も大變ね！」

「えゝえ、その何んでもないんで御座います。」——追從笑ひをした。

「あたし學校の參考に稻を二、三本頂いて行きたいんですけれど……。」

云ふと同時に、女房達が爭つて稻を取りにかゝつた。——吉本管理人は、これアうまい、と思つた。

「矢張り何んてたつて、大したもんだ。」

女房達は小腰をかゞめながら、稲を差出した。令嬢は、

「有難ふ。」と云ひながら、フト差出された女達の手を見た。手？　だが、それは手だらうか！——令嬢は「ま！」と云つて、思はず手の甲で口を抑えた。

一通り田畑を見てしまふと、「いとも」満足の態で、一行は管理人の家へ引き上げた。

「伴さん」

晩には小作人全部に「一杯」が出るので、皆はホク／＼しながら二三人づゝ、二三人づゝ歸つて行つた。

「なア、えッ阿部君！　汗が出たァど。」

伴がガラ／＼聲で、百姓らしくなくブッキラ棒に云つた。

阿部は何時ものやうに默つて笑つた。健はこはゞつた顔で、少し後れてついて行つた。それに伴や阿部付の人達が四五人一緒だつた。——後から來る人達は、地主や奥様達のことを聲高に噂し合つてゐた。

「あいつ等の着てゐるペラ／＼した着物なんて、俺達がみんな着せてやつてゐるんだ位、もう分つてもえゝ頃だな。」

前を歩いてゐた小作が振りかへつた。

「伴さんにかゝると、かなはないね。」

伴もそれと一緒にウハヽヽヽヽと大聲を出して笑つた。

伴は何んでもズバ／＼云つてのける癖があるので、地主から一番「にらまれ」てゐた。管理人が遠廻しに、小作權を坪幾何の割で買取つてもいゝとよく云つてくる。——何時でも態のいゝ追ひ出しを受けてゐたが、反對に少しおとなしくしてくれゝば、「管理人」にしてやるがといふ交渉もあつた。が、その度に伴のあたりかまはない「ウハヽヽヽヽ」に氣をのまれて歸つて行つた。

「な、え、オーーイ、勝見さんよ、ボヤ、ボヤしてると、キンタマの毛ツこひん拔かれてしまふべよ。」

大きな聲で前のに云ふと、又ウハヽヽヽと笑つた。

「ハヽヽヽヽヽ。」――向ふでも笑つてゐる。

默つてゐた阿部が、「伴さん、晩に管理さんのとこさ行ぐ時、一寸寄つてけねか？」と云つた。

「ん、ん。」

伴は着物をまくつて棒杭のやうな日燒けした、毛むじやらの脛を出して、足をいたづらにブラ〳〵させたり、石を蹴つたりして歩いてゐた。

「のべ源」

「どうだ、健ちや。」後からのツぽの「のべ源」が聲をかけた。

「あのどつちでもえゝ、一晩抱いて寢たらな。」

「何んだ、お前今迄かゝつて、そつたら事考へてゐたのか。」

健は、初めて、ムカツ〳〵と云つた。

「それんか他にあるか。」ニタ〳〵笑つた。

のツぽの「のべ源」をS村の小作達は、時々山を下りて來る「熊」よりも恐ろしがつてゐる。飲んだら「どんな事」でも平氣でした。馬鹿力を出すので、どの小作だつてかなはない。「のべ源」の亂暴をとめやうとして、五、六人泥田に投げ込まれてしまつた事がある。それに女に惡戲した。

醉がさめると、手拭で頭をしばつて、一日中寢た。割れるやうに痛んだ。

「俺ァ何ァんもしねえど、俺ァ――俺だけァ何んもしねえど！」

きまつて、さう云ひながら唸り續ける。

健とは不思議に氣が合つた。——毎日の單調さ、つらい仕事、それで何處迄行つても身體の浮かない暮しをさせられてゐれば、誰だつて若い男は「のべ源」になる。ならずにゐられるものでない。皆、心の隅ッこに「のべ源」の少しづゝを持つてゐるんだ。健はさう考へ、「のべ源」には他の人のやうな惡意は感じてゐなかつた。——どの村にも、實際ぐうだらはゐたし、居る筈だつた。

——然し、何時迄グウだらを繰り返へしたつて、どうなるものか、健は此頃はさう思つてきてゐた。グウだらが惡いんぢやない、グウだらにさせるものがある。それを誰も知つてゐない、さう思つた。

「な、ま、え、さ。今晩飲めるんだ。」

「源、酒の……」

「のべ源」は、分つたよ、分つたよ、といふ風に頭を振つた。作は「どうしたい。」と、ひやかした。

「模範青年さんにかゝるとね。」頭をかいて、眼を細くした。

「模範靑年ッて誰だ!?」

健は不氣嫌に云ふと、そのまゝ默つてしまつた。

阿部は口の中だけで笑つてゐた。

「野にゐる羊」

女達は酒盛の用意のため、三時から管理人のところへ出掛けて行つた。嫁取りだとか、法事だとか、何かのお祝ひだとか、さういふ事だと、お惠達は誘ひ合つて、喜んで出掛けた。——管理人の家の炊事煙突が、めづらしくムク〳〵煙をはいてゐた。裏口から襷をかけて、大い腕をまくり出した女達がザルを抱えたり、籠をもつたり忙がしく出入りした。

令嬢は輕い頭痛を覺えてゐた。——汽車の窓から見たり、色々な小說を讀んだりして、何か牧歌的な、うつとりするやうな甘い、美しさで想像してゐたチヨコレート色の藁屋根の百姓家！　それが然しどうだらふ？　令嬢は二三軒小屋をのぞいてみた。——眞暗な家の中からは、馬糞や藁の腐つた匂ひがムッと來た。ワアーーンと飛び上つた金蠅の群が、いきなり令嬢の顏に豆粒のやうに、打ッかつた。令嬢は「アッ！」と聲をたてた。腹だけが大きくふくれて、眼のギヨロッとした子供が、爐の中の灰を手づかみにして、口へ持つて行つてゐた。上り端に喰ひかけて茶碗と、鰊の殘つてゐる皿が置きッ放しになつて居り、それに蠅が黒々と集つてゐた。隅ッこに、そのまゝに積み重ねてある夜具蒲團の上から、鷄がコクッ、コクッと四圍を見廻はしながら下りて來た。……管理人のところへ歸つてから、濡らしたハンカチを額にあて、令嬢はしばらく横になつた。

夜になると「ランプ」がついた。令嬢は本當のランプを見るのが始めてだつた。都會のまばゆい電燈になれた眼には暗い。まるで暗い。然しランプの釀し出す雰圍氣は、始めて令嬢を喜ばせた。

「素敵だわ！」

小樽や東京にゐる友達に、繪ハガキで是非ランプのことは云つてやらなければならないと思つた。

日が暮れかゝると、小作人がボツ／＼集つてきた。土間にムシロを敷いて、高張りの提灯を幾つも立てゝゐた。令嬢を見ると、小作の人達は座り直して、丁寧に挨拶した。教會に通つてゐる令嬢には、百姓は「野にゐる羊」のやうに純眞に思はれた。父が經營してゐる小樽のS工場の傲慢な職工達とは似てもつかない、と思つた。

「それだけ、それだけで終つてしまつた」

武田が仲間の二三人と一緒に、少し早目にやつて來た。岸野に會つて、普段から種々お世話になつてゐる幾分もの御恩報じとして、この機會に自分達で角力大會を開いて御覽に入れたいと思つてゐる、と云つた。岸野は滅多になく、顏形を

くずして喜んだ。

岸野は上氣嫌だつた。——庭先の、少し高い所に立つて、小作に向つて簡單な「訓示」を與へる、とすぐ奥に入つてしまつた。吉本が是非さうしなければならないと云つてゐつた。

「で、順々に一人づゝ、奥でお會ひするさうだから。」

さう云ふと、皆の中から、

「吉本さん、吉本さん!」と、中腰をあげて、作が呼んだ。

「色々と地主さんに聞いて貰はなけァならない事もあるし、又皆に話して貰はなけァならない事もあるし、是非一つこゝで……。」

「それァ出來ないんだ。」

皆は急にガヤ〱話し出した。

「ア、皆さうやつちや駄目だ。——靜まつてけれ!」

吉本が一生ケン命制した。「今度のお出は、そんな面倒なことは一切拔きにしたものだから、それは又何時かの機會にして貰ひたいんだ。——賴む!」

「さうだ、さうだ、作さん、酒席でもあるしな。」

小作のうちで、さう云ふものもゐた。

「どうだ! 健ちや、分るべ。」

めづらしく阿部も興奮してゐた。

「一杯食はせやがつたんだね。——阿部さん、會つた時やつたらえゝでせうさ。」

「會つた時？　一人と一人でか？——駄目、駄目！　ちり〳〵ばら〳〵だからな。」

「…………」

健は何か不服だつた。「お會ひ」するのは、ただ顔をみて「まア、しつかりやつてくれ」といふだけだつた。——ぢや、その機會をつかもう、健はさう思つた。

二枚重ねた座蒲團の上に、物なれたゆるい安坐をかいて、地主が坐つてゐるのを見ると、外で見たときとはまるで異つた——岸野の存在がその部屋一杯につまつて、グイと抑えつけてゐるやうに感じた。——健を見ると、輕く顎だけを、それも顎の先だけを、分らない程に動かした。

「田口健です。」吉本が取次いだ。

「ウ——これか？」

一寸管理人を見て、それから側に坐つてゐた奥様と令孃へ、「これが農場一の模範青年なんだぜ。」と云つた。

「まア、しつかりやつてくれ。——これからはお前達が一番頼りだんだからな……。よし〳〵。」

さう云つて顎だけを動かした。——管理人はもう次ぎを呼んでゐた。

それだけ、それだけで終つてしまつた。

健は身體中汗をグッショリかいてゐた。健は阿部と顔を合はせられなかつた。カアーッと逆上せてゐた。——氣おくれした、意久地のない自分を、紙ッ片れか何かのやうに、思ひッ切り踏みにぢつてしまひたかつた。

「のべ源」はもう醉拂つて、眼を据えながら、誰か相手でも欲しさうに見廻はしてゐた。

「健ちや、健ちや、健ッたら！」

健は返事をしなかつた。

「健よオ！　何そつたら不景氣な面してるんだ。」
健はだまつたまま、暗い外へ出て行つた。

五

土方

大陸的な太陽が、ムキ出しな地面をチリ、チリ燒いてゐた。陽炎が白熱した炎のやうに、ユラ〳〵立つて、粗雜に敷設されたトロッコのレールが、鰻のやうに歪んで見えた。――土の熱いムレッ返へしが來る。土方は皆褌一つで働いてゐた。身體は掘りかへして行く土より赫黑く燒けて、土埃のかかッた背中を、汗が幾つにも筋を引いて、流れてゐる。鮮人は百人近くゐた。
急カーヴへ來ると、いきなりトロッコの外側が浮き上る。浮き上つた片方の車輪が空廻りした。――健達は五六人數入れ前を、ここへ稼ぎに來てゐた。仕事は危なかつた。
それは空知川から水を引いて、江別、石狩に至るまでの延々二十何里といふ大灌漑溝を作るための工事で、一旦それが竣成すれば、その分派線一帶にかけて、何千町歩といふ美田が出來上る。北海道の產米がそれで一躍鰻上りに增えるのだつた。
村長を看板にし、關係大地主が役員になつて、「土功組合」を組織し、北海道廳から「補助金」や「低利資金」の融通を受ける。拓殖銀行は特別低利で「年賦償還貸付」をした。北海道拓殖のためだつた。――その工事は「監獄部屋」に引受けさせる。土方を使へば、當り前一日三、四圓分位の勞働を五、六十錢でやる。(嘘ではない！)で、頭が二重にも、三重にもハネられた。

大地主は只のやうな金で、その金の割合の何十倍もの造田が出來た。造田さへされれば、低利資金位は小作料だけでドシドシ消却出來た。

——健にも分る。これだけのことを見ても、結局の背負ひどころは誰か。——小作人と土方！　それがハッキリ分る氣がした。

「アッ！」誰か叫んだ。

トロッコが土煙りをたてながら、顚覆した。裏返へしになつたトロッコの四つの車輪だけが、惰勢でガラガラと廻つた——乘つてゐた土方は土の下になつてしまつた。然し、誰もそれにかまつてゐない。——日雇ひに行つてゐる健達は思はず立ち止つて、息を殺した。

「次のトロッコが矢張りな、見るに見兼ねて、少しグズグズしてたッけア、止つちやいかん、止つちやいかんッて、棒頭が怒鳴つてたど。」

健達は今度S村附近に陸軍の演習があるので、その宿割を受けてゐた。

「兵隊さんだけには、白い飯食べさせなかつたら、恥だからな。」

母親に何度も、何度も云はれて、稼ぎに出てゐた。然し村から稼ぎに行つてゐるものは、三日と續かなかつた。途中でやめてしまつた。

「ま、俺達途中でやめれてからええが、土方達はどうする……。」

歸り道は、身體中痛んだ。肩がはれ上つて、ウミを出した。

「土方人間で無えべ。——土方と人間が喧嘩したつて歌あるんだからな……。」

「佐々爺云つてたども、北海道の開拓はどうしたつて土方は使はねば出來ないんだつてよ！」

「んだかな。」

「馬鹿云ふもんでねえよ！」

健はムカ〳〵した。

「飯場さ入る時な、皆ば裸にしてよ、入口でヒー、フー、ミー、ヨーッて數えるんだ。——窓って窓は全部釘付けよ。」

健は明日からもうやめた、と思つた。——兵隊にだつて、俺達と同じ黑飯を食はしたつて構ふもんか、要らない見栄なんてしない方がいいんだ、と思つた。

次の朝三時頃、表から仲間が呼んだ。

「俺アもうやめた。」

行けば行けると思つてゐたのに、眼がさめると、身體が痛くて匍ふことしか出來なくなつてゐた。

「何んだつて!?」——母親がむつくり頭をあげた。

健はものも云はずに又蒲團をかぶつた。

「健——これ健ッ、もう二日我慢してけれ、な、もう二日！」

「續かない、身體痛たくて、痛たくて！」

それつ切りだまつた。耐え性なく、それに眠かつた。

母親は思ひ切り惡く、何時迄も枕もとでクド〳〵云つてゐた。それを、うるさい、うるさいと思つてきゝながら、何時の間にか又眠つてゐた。

「ハツ、兵隊さんだな」

裏の畑のそばで、由三が叫んで、

「日本勝つた、日本勝つた、ロシア負けたア……」
「日本勝つた、日本勝つた、ロシア負けたア……」
枝切れで蟻穴をつッついてゐた。
「赤蟻、露助。黑蟻、日本。――この野郎、日本蟻ばやつつける積りだな。こん畜生、こん畜生！」
ムキになつて、枝の切れッぱしで突ッつき出した。
「こら、こら、――こらッ！」
遠くで銃聲がした。由三はギクッと頭を擧げた。――續いて又銃聲がした。由三は枝ッ切れを投げ捨てると、いきなり表へ驅け出した。眼をムキ出して驅け出した。
「ハッ、兵隊さんだな！」

「何するだ、稻か、稻か！！」

晝頃、宿割をきめるに軍人と役場の人がやつてきた。健達は「青年訓練所」から演習の見學のために、一日だけ參加しなければならなかつた。――軍人と辛苦をともにして、如何な難事にも耐える精神を養ふのだ、といふのだ。危い、危い、健は然し今ではもう行く氣がしてゐなかつた。ト――云ふことだけは立派だ。「難事に耐へる！」だが、何んの難事に耐へるのか。「×」を見ろ！　いくら食えなくても、×××はチッとむしてゐなければならない、といふことの××ではないか！
朝から、遠くで銃聲がしてゐた。飛行機が高く晴れ上つた空に、爆音をたてて飛んだ。向きの工合で、翼が銀色にギラギラッと光つた。小作人達は所々に立ち止つて、まぶしさうに額に手をかざして、空を見上げてゐた。――子供は夢中だつた。
健は由三にせがまれて、外へ出た。チリ、チリと暑かつた。だまつてゐても、腋の下が氣持惡くニヤ〱と汗ばんだ。

由三は今やうやく出來かけてゐる口笛を吹きながら、手にぶら下つたり、身體にからまつて來たり、一人で燥いでゐる。

市街地に入ると、郵便局の前に毛並のそろつた軍隊の馬が、つながつてゐた。小さい鞄を腰にさげた兵士が頼信紙に何か書いてゐた。

「ええ馬だな。――俺アの馬ど比らべてみれでア！」

由三は馬の側を離れないで、前へ廻つたり、後へ廻つたり、蹲んで覗き込んだ。

「兄ちや、來年兵隊さ行けば、馬さ乗るんだべか。ええなア！」

街にはどの家にも宿割の紙が貼らさつてゐた。――市街地を出ると、銃を肩にかけ、胸のボタンを二つ程外して、帽子の下にハンカチをかぶつた兵隊が三人、靴底の金具をヂャリ／＼させて、ゆるい歩調でやつてきた。

「S村つて、これですか。」――市街地を指さした。片手に地圖を持つてゐた。

由三が健より先きに周章てて答をひつたくつた。

「んですよ。」と云つた。

それだけで、それが由三には大した名譽なことに思はれた。

銃聲は東の方から起つてゐた。それで基線道路から殖民區域七號線へ道を折れて入つた。少し行くと、處々道に見慣れなく新らしい馬糞が落ちてゐた。

「あらッ！　あらッ！　あら、なア！」

由三が頓狂に叫んだ。田圃を越して、遠く、騎兵の一隊が七、八騎時々見え、かくれ、行くのが見えた。――もう、由三は夢中だつた。河堤に出ると、村の人達が二三十人かたまつて、見物してゐた。由三は健の手を離れて、先に走り出してしまつた。見てゐると、人の脇の下を潜り、グン／＼押しわけて一番前へ出てしまつた。

百人近くの兵隊が銃を組んで休んでゐた。ムレた革と汗の匂ひが、皆の立つてゐる處までしてゐた。――日陰になつてゐるところには、上半身を裸にして、仰向けに寢てゐるものが二三人ゐる。どの兵士も胸の中にがつくり頭を落したり、横になつたり――皆ぐつたりしてゐた。然し顔だけは逆上せたやうに、妙に赤かつた。それが氣になつた。汗が上衣まで通つて、背の出張つたところ通りの形にグッショリ濡れてゐた。

「どうしたんだべな。」

「追われて來たんだべよ。――見れ、弱つてる!」

不意に、あまり遠くない處で銃聲がした。雜木林から吹き上げられたやうに、鳥の群が飛び立つた。續いて銃聲がした――と、上官らしいのが列外へ出て、何か號令をかけた。ガチャ〱と金具の音が起つた。が、皆はどうにもならない程、疲れ切つてゐた。

「グヅ〱しちアいかん! グヅ〱しちアいかん!」

上官がカスれた聲で怒鳴つた。

「やつぱり兵隊つて、ええものだね。――ラッパの音でもきいたら、背中がゾク〱してくるからな。」

健の隣りで話してゐる。――「青島」で右手がきかなくなつてから、働くことも出來ず、半分乞食のやうな暮しをしてゐる「在郷軍人」だつた。

「戰爭だつて、考へたり、見たりする程おッかねえもんでねえんだ。ワアッて行けば、何んしろ……。」

皆に聞えるやうに、聲を高めた。

兵隊は歩きづらい砂地を、泥人形のやうな無恰好さで、ゾク〱歩き出した。だまりこくつて、空虚に眼を前方の一定のところにすえたきり、自分のではない、何か他のものの力で歩かせられてゐるやうに、歩いてゐた。病人を無理に立たた

せて、兩方から肩を組み、中央(まんなか)にして歩かせた。が、他愛なく身體がブラ下つてしまつた。頭に力がなく、歩く度にグラ〳〵ッと搖れた。

皆はゾロ〳〵堤を引き上げた。雜木林の中から、その時だつた、突如カヽ聲が上つた。帽子の色のちがつた別な一隊が、附劍をして「ワアツ、ワアツ！」と叫びながら、さつきの兵隊の後横へ肉迫してゐた。――不意を喰つてしまつた。立ち直る暇もなく、そのまま隊伍を潰して、横へそれると、實りかけてゐる田の中へ、ドタ〳〵と入り込んでしまつた。見てゐる間に、靴の下に稻が踏みにぢられてしまつた。

「あ、あツ、あ――ゝあツ、あツ！」

田の向ふに一かたまりにかたまつて見てゐた小作人が、手を振りながら夢中に馳けて來るのが見えた。健達も思はず走つた。――百姓達には、それは自分の子供の手足を眼の前で、ねぢり取られるそのままの酷たらしさだつた。

「何するだ！」

「何するだ！　稻！！　稻！！」

然し兵隊のワアツ、ワアツといふ聲に、それはモミ潰されてしまつた。士官は分つてゐて、×××やめなかつた。――もう彼等は棒杭のやうに、つツ立つてしまふよりない！

やうやく「休戰ラッパ」が鳴つた。

兵卒達はそれでも稻を踏まないやうに、跳ね〳〵田から出てきた。

士官は汗をふきながら、プリ〳〵して、

「後で主計が廻つてくるんだから、その時申告すれァいゝんだ。」

それは分つてゐる！　然し損害を受けただけを申告すれば、その度に「これを種にして儲けやがるんだらふ。」「日本國

民として、この位の損害をツザ〳〵申告するなんてあるか。」と云はれる、帝國軍人のためだ、と云つて、申告しない百姓さへあるんだぞ。」そんな事も云ふ。――貧乏な、人の好い小作人はどうすればいいか？――小作料を納める時になれば、地主はそんなことを考慮さへもしてくれない。

兵士達はそれ等の話を氣の毒さうに、離れてきいてゐた。――矢張り小作人の伜達がゐるんだらふ、健はそのことを考へてゐた。

田を踏みにぢられた隣りの農場の小作が、壞れた瀨戸物でもつなぎ合せるやうに、田の中に入つて行つて、倒れた稻を起しにかかつた。――健にはそれは見てゐられなかつた。

「下稽古かも知れないど」

兵隊の泊つた朝、由三は誰よりも先きに起きた。――吃驚したやうに、パッチリ眼を開いて、家の中をクルッ〳〵ッと見廻はすと、ムックリ起き上つてしまつた。前の日に磨いて立てかけて置いた銃や劍や背嚢の前に坐ると、獨言を云ひながら、ちよッぴり〳〵いぢつた。魚が餌でもつッつくやうに。

母親が起きてきた。――母親は吃驚して、いきなり由三の耳をひねり上げた。

「これッ！　大切なものさ手ばつけて、おがしくでもしてみれッ！」

健は眼をさましたまま、寢床にゐた。――前の夕方、健が納屋から薪を取り出してゐたとき、すぐ横で、井戸の水をザブ〳〵させながら足を洗つてゐた兵隊が話してゐるのを聞いた。

「ここの家とドイな……」

「うん、ま、御馳走はないな。――」

「それでも……」

あと一寸聞えなかつた。息をつまらせて笑つてゐる。

「シャンだからな。」

「それに……な、色ッぽいところある。」

「あれか、鄙にもまれなる……」

「……埋合せか。」

聲を合せて笑ひ出してしまつた。

健は暗がりの納屋の中にゐて、一人でカァーッと赤くなつた。

健は昨日からのお惠の燥いだ、ソワ〳〵した態度にムカ〳〵してゐた。

兵隊が起きると、由三は金盥に水をとつてやつたり、下駄を揃えてやつたり、氣をきかして先き〳〵と走り廻つた。

お惠は日焼けのした首に水白粉を塗つてゐた。塗つたあとが、そのまゝムラになつて殘つてゐた。

飯はお惠が坐つて給仕した。すると、由三が口を突がらした。

「兵隊さんに女(めつけア)なんて駄目だねえ。——俺やるから、姉どけよ！」

兵隊は苦笑してしまつた。

母親は又昨夜のやうに、御馳走のないことをクド〳〵繰りかへした。

晝過ぎから土砂降りになつた。六時頃、兵隊は身體中を泥だらけにして歸つてきた。——ものも云へず、一寸つまづいただけで、そのまま他愛なくつんのめる程疲れ切つてゐた。——母親はそれを見ると、半分もう泣いてゐた。×××とられるかも知れない健のことが直ぐ考へられた。

その晩は最後であり、それにゆつくり出來ると云ふので、健は母親に云ひつかつて、裏で雛鶏を一羽つぶした。△から

は、兵隊さんに出すのだから—と云つて、やうやく酒を一升借りて來た。

醉つてくると、兵隊は色々「兵營」の面白いことを話してきかせた。由三は「眠くねえわ、眠くねえわ、」と眼をこすりながら、何時迄も起きてゐた。

「坊、大きくなつたら兵隊になるか。——ハ、、、、。」

「僕も百姓ですよ。」と一人が云つた。「僕の從弟が內地の聯隊にゐたとき、自分の村で小作爭議が起り、それがドエライことになつてしまつた事があるんです。半鐘は鳴り、ドラはなり、何千人ッて云ふ小作人が全部まァ……暴動ッて云ふかね、それを起したんですね。どうにもならなくなり、地主連が役所に賴み、役所が聯隊に賴み、軍隊出動といふ處までトウ〳〵行つてしまつたわけです。——が、何んしろその兵隊さんの親、兄弟、親類が村にゐるときてゐるし、それに自分等も村にゐたとき、每日々々地主に苦しめられてきてゐる。——どうにも出來ない。とても苦しかつたさうですよ……。」

「ハァねえ——。」母親はワケも分らず、うなづいた。

「あんまり御馳走してくれるんで、思ひ出したんだけれども、——お馳走するどころか、そんな風で案外これァ敵かたきでないかと思つてネ。」

と云つて、大聲で笑つた。——ここの後はどうです、僕の村あたりだと、每年のやうに小作爭議が起りますよ。何處だつて村は困つてゐるし、又困つて行く一方ですからね。——ネ、何時か僕等が附劍して、この村へワァッて、やつて來ることでもあるんぢやないかと思つてネ……。」

「まさか!」思はず皆で笑ひ出した。

後で、フトこの話を健が阿部にした。

「それァ××だよ。」と阿部が考へ深さうに云つた。「あんまり內地で、所々に農民騷動が起るんで、××××だつてその

下稽古かも知れないど……。」

次の晝頃、ラッパの音が聞えると、皆村道に出て行つた。

お恵は髪を奇麗に結び直して、由三を連れて出た。畔道を縄飛びをする時のやうに、小刻みに跳躍しながら走つた。

村を出て行くラッパの音は、皆を妙に興奮させた。それを聞いてゐると、何か胸が一杯になつた。足並の揃つたザックザックといふ音と一緒に埃が立つた。二日でも自分の家に泊つた兵隊が通ると、手を振つてゐる。

「あら〳〵。俺れァの兵隊さん！」

眼ざとい由三が見つけると、姉の手を引張つた。

心持こつちへ顔を向けて――その顔が笑つてゐる。お恵は耳まで眞赤になつた。そして手を擧げた。が、胸のところしかおがらない……。

ラッパの音が遠くなつた。

そして行つてしまつた。

皆は兵隊の殘して行つた革の匂ひと埃の中に、何時迄も立ちどまつて見送つてゐた。――「行つてしまつた。」

六

「あれはロの二つあるダニだよ」

「お茶ば飲みに來ないか。旭川の人も來るし、二三人寄るべから。」

前から作や阿部のところに、四五人集ることのあるのは知つてゐた。健は始めてだつた。

仕事を終つてから、藁屑のついた着物を着かへて出掛けた。由三は獨り言を云ひながら、壁へ手で犬や狐の恰好の影をうつして遊んでゐた。

「兄ちや何處さ行ぐ？――由も行ぐ。」

出口までついて來て、駄々をこねた。

もう秋めいてゐる。夜空に星が水ッぽい匂ひをさせて一杯にきらめいてゐた。實りの薄い稻の輕いサラノ\した音がしてゐた。

政府の「米買上げ」と不作の見越しで、米の値は「鰻上り」に上つてきてゐる。然しその餘澤の一ツこぼれさへ百姓にはこぼれて來ない。――今時米を手持ちしてゐるのは誰だらう。百姓でだけはない。みんな一番安い十一月、十二月に俵の底をたたいてしまつてゐる。――どんな百姓でも「米買上げ」が自分達には「クソ」にもならないことだけは知つてゐた。

「んでも、政府さんのする事だもの、やつぱし深い考えあるんだべよ。」と云つてゐる。

健がムキになつて「買上げ」をコキ下したとき、佐々爺が手に持つてゐた新聞をたたいて、

「え、え、え、東京新聞も碌ッた見もしねえで、何分るッて！　お前えみだいた奴の、小さい百姓の頭で何が分るッてか。お前えより千倍も偉い。學問のある東京の人が考えて、考えて決めた事だんだ。――東京新聞ば讀め！　東京新聞ば讀んでからもの云ふんだ。ええか！」

今年はこの後若し雨にでも降られれば「事」だつた。

――阿部の家の前の暗がりで、不意に大きな欠伸をした。家の中から誰か犬の名を呼んでゐる。小さい窓を大きく影が横切つて、すぐ入口の戸が開いた。阿部が顔を出した。

旭川の人はまだ來てゐなかつた。

八人程集つてゐたが、若いものは健一人だけで、皆家をもつてゐる農場でも眞面目な年輩の小作ばかりだつた。それは意外だつた。健は漠然と若い人達ばかりと思つてきたのだ。——然し、その人達を見ると、やつぱりこれが本當だと思はさつた。太い、ガツシリした根が、眼には見えない農場の底深くに、しつかり捕えられてゐるのを感じた。

「作」のことで、やつぱり話が出てゐた。

吉本管理人は、いくら用を見せて頼んでも、決してそのまま磯部に知らせてやつてはくれない。裏では、吉本を本名で呼ぶものはゐない。「蛇吉々々」と云つてゐる。管理人だから默つてゐるけれども、誰かに不幸があつたとき、地主が小作人に送つて寄す「香奠」から頭を割つかいた。勝手にすつかり書き直して、それから小作のところへ香奠を持つてきた。道路や灌漑溝の修繕工事をすると云つて、日雇賃を地主から出さして置いて、小作人を無償で働かし、それをマンマと自分のものにしてしまふ。小作料の更新をするぞ、とおどかして「坪刈り」にやつてくる。然し本當は嘘で、自分の家に何百羽と飼つてある鷄や鶩鳥や七面鳥のエサにするための口實でしかなかつた。

この「蛇吉」はH町のある料理屋の白首を妾同樣にして通つてゐた。

「地主さんより上ヮ手だ。——地主さんはさう惡くないだ。吉本よ、蛇吉よ！」

小作人のうちではさう云つてゐる。

「あれアダニだよ。」

「口の二つあるダニだ。」——健は自分で赤くなつて云つた「一つで地主の血ばとつて、もう一つで小作から吸ふんだ。」

「ん。」

「地主からなら吸ふ血があるべども……」

健が云ひかけると、みんな云はせないで、「それさ。そこさ。たれが大切などこさ。」――作がガラ〳〵な大聲をたてた。

「×××××、彼奴ば一番先きにヤルんだ。」

「血書」

「健ちや、××よかつたな。大した儲けだな。」――近所の小作だつた。紙捻りを煙管の中に通してゐた。「石山の信ちやと
られたものな。」

「ん、ん、可哀相なことした。」

「ところが、信ちや喜んでるんだとよ。――兵隊さ行つたら、毎日芋と南瓜ばかり食つてなくてもええべし、仕事だつてこの百姓仕事より辛い筈もなし、んだら一層のこと行つた方ええべッて……。」

「まさか……。」

「んでもよ、働き手ば拔かれてしまふべ、行けるんだら親子みんなで行きたいッてよ。」

「ドン百姓からばかし×××やがるんだものな。一番多いさうだ。」

「嘘か本當かな。」――阿部が云つた。「こんなこと聞いたど。村長が徴兵檢査に行つたもののうちで、採否の分らねえやうなものに、こつそり血書ばさせて、村の名譽にしやうとしたつて……。」

皆一寸だまつた。「へえ！」

「んかな……。」

「まさかよ。」

「俺あさうだつて思ふんだ。」――阿部は何時もの癖で、自分の手の爪の先きを見ながら、隅の方でゆつくり云つた。

「村長一人の考へからでもないんだ。絲をひいてる奴がゐるんだ。――農村青年の思想惡化だなんて、彼奴等靑くなつて

るんだから夢中よ。——此頃の北海タイムスや小樽新聞の農村欄ば見れ。ヤレ農村美談だ、ヤレ何々村の節婦だ、孝子だ、ヤレ何青年團の美擧だ、ヤレ何の記念事業だツて、ムキになつて農村の太鼓ばたたいてゐるんでねえか。——所が、實際の農村はとうだ。——彼奴等は死物狂ひだんだ。何時迄も百姓ばチツとさせて、何時迄も勤勉に仕事ばさせて置くためには新聞でこい、雜誌でこい、紀元節でこい、徴兵檢査でこい、青年訓練所でこい、機動演習でこい、學校でこい、みんなその日常のためにドン／＼使つてしまふんだ。仲々それも一寸見は分らないやうにやるんだから危いんだ。——水も洩らさない。何んにも知らない百姓は、んだからウヤ／＼と、そのからくりに引懸つてしまふんだ。」

「面倒だて！」——作は日燒けした顔を大げさにしかめたが。「仲々な！」

「はがゆくてもよ、豆粒みたいによ、俺達のどこさよ、一人々々よ、××して來るんだな。」

「何アんでも一人ぢや脆いもんぢや。」——畑か田のことより知らない。齒の拔けてゐる四號の茂さんが（！）そんな事を云ふ。

農民組合の荒川さん

表で犬が吠えた。

「荒川さんだべ。」——阿部が立つて行つた。

「や、失敬々々。」

さう云つて、ズックの靴をドサリと投げ出した。痩せ形の、少し左の肩が怒つてゐる二十二三の人だつた。髮を長くしてゐた。

「ご苦勞さまでしたな。」

「イヤ、イヤ。」

荒川は上つてくると、「ヤア。」と云つて、元氣よく皆に頭を下げた。そして眞黑に汚れた手巾で、顔から首をゴシ〳〵こすつた。

「作は悪いね。——今年はこれア大したことになるね。」

「岸野さんがドウ出るか……。」

「どう出るかつて？——」後は笑談のやうに笑ひながら、

「そんなこと岸野の農場で十年も小作をしてゐれば、もう分つてもいい頃だらふ——なア！」

皆笑つてしまつた。

聞き易いテキパキした調子で、時々笑はせながら、色々のことを話してくれた。

——秋田には「青田を賣る」といふことがある。それは新らしい小作××で、立毛差押や立入禁止など喰らひさうに思ふと、小作人は先手を打つて、夏頃に、出穗を豫想して、青田のうちに商人に賣つてしまふのだつた。金にして持つてしまへば、こつちのもの。——どうだい、やつてみないか、と荒川が笑談のやうに云つた。

近邊の農村を廻つて歩いてゐると、農村の生活水準がだん〳〵下つて行くのが分る。益々下がつて行く。いくら村長や警察署長が「農村の美風」をかづいて、ムキになつたつて、食えなくなれば、どうしても地主様に「××ひ」しなければならなくなる。

それに、かうなつて來ると、困るのは水吞百姓ばかりでなしに、なまぢッか十町、二十町歩位の田畑を持つてゐる「地主」で、反當りで計算してみても、灌漑費、排水費、反別割、其他の税金、生活費用を見積ると、そこから上る六、七斗の小作料では引き合はなくなつてきてゐた。——田に修繕を加へて、少しでも上り高を多くしやうとすれば、どうしてもそれを拓殖銀行へ抵當に入れて「年賦償還」の貸付を受けなければならない。だが、さうすれば、今度は益々引き合はな

くなる。大地主の存在がヂリ〳〵と壓迫してゐた。小作人より苦しんでゐた。その癖、俺は地主様だといふ氣持を、どうしても無くしない。どんなにヒッつぶれても、小作人達と同じ人間にされてたまるもんか、さう思つてゐる。健の家と川を隔てゝ向ひ合つてゐる越後から移住してきてゐる廣瀨がそれだつた。——首がギリ〳〵に廻らなくなつてゐるのに、土地も自分のものでなくなつてゐるのに、自分の子供が由三達と遊ぶことを嫌つた。

「なんぼ成り下がつたつて……。」

荒川は硫黄分でインキのやうに眞黒になつてゐるお茶を飲みながら、内地の農民の話をした。——内地では、小作××で「ドンツキ」をやる。小作人が×××無理矢理ひつぱつてきて、逆さにつるして灌漑溝の水につけたり、上げたりやる。然し北海道のやうに、小作と一緒に村に住んでゐる地主がゐないので、「殘念ながら、ドンツキは出來ない。」

「若しか岸野ばしたら、どうだべ。」——一人がいたづらに云つた。

「岸野か、さうだな……。」

「そんな手荒なこと、なんぼ岸野さんだつてな……。」

荒川はだまつてきいてゐた。

「あれだら、仲々我ん張るど。」

「あの面だものな！」

「そんな事……馬鹿だな……。」

「なんぼ岸野だつて、こつちは兎に角人數は多いんだからな。」

「ハヽヽヽヽ、今度いくらでも實驗できる時來るさ。」

荒川は愉快に笑つた。——

荒川は何時でも警察に尾行をつけられたり、何回も刑務所へブチ込まれたりしながら、この方の××をしてゐた。――健もそれは聞いてゐた。然し、どうしてこんなに呑氣さうに、愉快でゐることが出來るんだらふ。――健にはそれは分らなかつた。

ロシア××前と後とで、ロシアの百姓はどういふ風に變つたか、それが百姓本來の要求にどんなにピッたり合つたか。――さういふ話をきくと、自分達が實際にやつてゐる生活のことで、しかも誰もがそれと氣付かなかつたことが、ハッキりしてきた。

次の朝は早いし、家が遠いので、健は中座した。

「小便たまつた。」

阿部がついでに外へ立つた。

「阿部さん、俺も一生ケン命やるから、何か用でも出來たら、させてけないか、」

健は興奮を抑え、抑え、阿部の顔を見ないで云つた。――たつたそれだけのことで、言葉が顫えさうでならなかつた。

「さうか、さうか！　頼む！」

上氣した頬に、冷えた夜氣が心よかつた。――秋だつた。歩きながら、彼は何か聲を出したかつた。

「待つてろ、待つてろ、俺だつて！」

何度も獨言した。

やもめの「勝」

道路を折れると、やもめの「勝」の家だつた。長い雨風で、ボロ／＼に腐れ切つたヨロ／＼の藁小屋で、風が強いと危いので、丸太二三本を家の後へ支え棒にしてゐた。――四五年前に夫に死なれてから、一人で稼いでゐた。それから一年

に一人づゝ、お互ひに少しも顔の似てゐない子供を三人生んだ。誰が父親か分らなかつた。――色々な男がこつそり勝の家へやつてきた。勝はそれで暮しを立てゝゐた。――村の娘等は少し年頃になると、(例へばキヌなどのやうに)札幌、小樽へ出て行つてしまふ。自分の母親達のやうに、泥まみれになつて、割の悪い百姓仕事をし、年を老る氣にはなれない。それで村の若い男は幾つになつても、仲々嫁は貰えなかつた。と云つて、又金を懐にしてワザワザH町まで出掛けて行くことの出來ないものは、日が暮れると、勝のところへやつてきた。

ひよいと見ると、勝の家から誰か男が出てきた。出口の幅だけの光を身體の半面にうけて、それがこつちから見えた。

――武田だ！ 偉いこと云つて！――健は武田のさういふ處を見たのが愉快でたまらなかつた。

今に見ろ、畜生！

七

七之助の手紙

畑から歸つてくると、母親がプリプリ怒つてゐる。

「見れでよ。切手不足だつて、無え金ば六錢もうんだくられた。」

手紙は七之助から來てゐた。――健は泥足も洗はずに、爐邊へずッて行つて、横になりながら封を切つた。

朝五時に起きて、六時には工場に行つてゐる。油でヒンやりする、形の無くなつた帽子をかぶり、背中を圓るくし、辨當をブラ下げて出掛けて行く。俺の前や後にも、やつぱりさういふ連中が元氣のない恰好で急いで行く。――工場では、ボヤボヤしてゐられない。朝の六時から晩の五時迄、弓の弦のやうに心を張つてゐなければならない。

俺が來てから、仲間の若い男が二人機械の中にペロ〳〵とのまれてしまつた。ローラーからは、人間が大巾の雜作のやうな挽肉になつて出てきた。一人の方の女房は、それから淫賣をやつて、子供を育てゝゐるといふ評判をきいた。もう一人は青森の小作の三男ださうだ。背がゾッとする。

工場は大きな機械の廻る音で、グワン〳〵してゐる。始めの一週間は家へ歸つても、耳も頭もグワン〳〵して、身體がユキ〳〵し、新聞一枚讀めなかつたものだ。――俺はこのまゝ馬鹿になつてしまふんではないか、と思つた。今は慣れた。

此前キヌと會つた。キヌは岸野の經營してゐる「ホテル」にゐる。――岸野は雜穀、海産、肥料問屋、ホテル、××工場、精米株式會社を經營し、取引所會員、拓殖銀行其他の株主、商業會議所議員、市會議員をやつてゐる。他に何千町歩といふ農場や牧場も持つてゐるわけだ。

岸野が賣殘して年を越したゝめに、檢査に落ちて、どうにもならなくなつた鰊粕を、俺達の農場の方へ送り込んで寄こして、それを檢査品と同じ値段で賣つてゐることは、知つてゐる筈だ。然しあの岸野にしたら、こんな事ものゝ數でもない。

キヌが云つてゐたが、ホテルには二十人近く女給がゐる。――岸野が一週間に二度位廻つて行くと、必ず自分の室から女給を呼ぶ。そして肩をもませた。皆は自分に順番のくるのをどうすることも出來ず、たゞ待つてゐるばかりだ。嫌なら出て行け、然し出て行ける「金の持つてゐる」女なら、最初からそんな處に來る筈がない。みんな家の暮しのために、村から出てきた、云はゞ俺達と同じ仲間なのだ。――中には、落着いて髮を直しながら、ドアーから出てくるものもある。然し大抵外へ出るなり、ワッと泣き出してしまふ。見てゐられないさうだ。岸野は來る度にキマッてさうした。

百姓達は、岸野が一體どんな事をしてゐるのか、ちつとも知つてゐない。――こゝに來て、それが始めて分つた。阿部さんに紹介されて來た人達は、こゝで勞働問題などを研究してゐる。俺は何も分らなかつたが、すゝめられて出てゐる。出てよかつた。俺は色々のことをそこで知つた。

百姓のことでは、特別に皆から聞いた。百姓といふものは、今のこの世の中では何處迄行つても、――行けば行くほど慘めになるものだ、といふ事を知つた。

假りに百姓が自分の田畑を持つてゐて、小作料を拂ふことも要らず、必要なものは全部自分の家でこしらへ、物を賣ることも、買ふこともなかつたら、それは幸福かも知れない。――然しこんな處が世界の何處を探がしたつて、無いことだ位は分りきつたことだ。

都會にゐればよく分ることだが、大工場では生活に必要な品物をドンドン作り出してゐる。それが大洪水のやうに農村を目がけて、その隅々も洩らさずに流れ込んで行く。さうなつて來れば、もう土間にランプを下して、繩を編んだり、着物を織つたりしてゐたつて間に合はなくなつてしまふ。追ッ付くものでない。――北海道では何處だつて、出稼ぎは別にして、冬の内職などするものがなくなつてしまつてゐるではないか。

百姓は、だからどんなものでも買はなければならなくなる。――で、要るものは金。百姓が金を手に入れる道はたつた一つしかない。出來上つたものを賣ることだ。――ところが、世界中で一番ものを下手糞に賣るものは百姓だ。

俺ちやも知つてゐるだらふが、村で都會の商品市場がどう變化してゐるか、かう變化しさうだから賣るとか、賣らないとか、秋にそんなことを考へて賣つたりする百姓が一人でもゐるか。どうして、どうしてだ。

三年前に、青豌豆の値が天井知らずに飛び上つたことがある。知つてるな。和蘭が不作のために、倫敦から大口の注文があつたからだ、とあの時は皆云つてゐたさ。ところが、今度小樽へ出て聞いてみると、さうでないんだ。その事もあるにはあつた、が小樽の大問屋で、大貿易商である展が、高く賣り飛ばすために、買ひ集めてしまつてから、さう吹傳したさうだ。――山の方の百姓はそんな事は知るもんでない。

次の年、どの百姓も皆青豌豆、青豌豆と青豌豆を作つたものだ。そして一年の丹精をして、大成金を夢見て、さて秋か

來たときどうだ！　ガラ落ち！——和蘭が大豐作だと云ふ。然し本當はそれも七分の嘘。落すにいゝだけ落して、安く安く買ひ集めたのは大問屋だつた。そのカラクリは仲々分るものでない。——首を縊つた百姓、夜逃げした百姓が何人あの年ゐたか。都會が凡ての支配權を握つてゐるのだ。

かういふ世界へ百姓が首をつん出して、うまく行く筈がない。山の中にゐて、市場の景況もあつたものでない。——工場などでは、昨日原料を仕入れば、明日にはもう賣り出せるやうに品物が出來上る。それが一年中切れ間もなしに續けられるし、賣れ工合によつては、自由に出來高の加減もその日〳〵のうちに出來る。ところが百姓はどうだ。——原料を一回仕入れて、その第一回目の品物が出來上る迄に一年！　この融通のきかなさ！　これだけでも分る。

工場に入つて驚いたけれども「機械」だ。假りに一人の男が毎日毎晩働いて、一年もかゝる位の分量の仕事を一日位でしてしまふ。——そんな機械でばかり工場が出來上つてゐる。俺達はたゞ機械のそばについてゐて、手だけ動かしてゐればそれでいゝ。ところが、その眼で農村を見れば、まるで居睡でもしたくなる程のんびりと昔風でないか！——追ひ付けるものでない。

都會にゐる地主でも、そんなワケで、地主だけではとても眼まぐるしいこの社會に、太刀打ちが出來て行かない。地主でも、百姓からは出來るだけ澤山の小作料を搾ればいゝといふ風に、放ッたらかして置いて、ドン〳〵別な仕事をやつてゐる。——丁度、岸野のやうにだ。——だから、例へて云へば「人魚」のやうなものだらふ。

上半分だけは「地主」だが、下の半分は「資本家」になつてゐる。ところが、下の部分の資本家の方が、ドン〳〵上の地主の部分を浸して行く傾向ださうだ。——だから、今時の地主は地主自身、小作人が可哀相だとか、もう少しこの社會に當てはまるやうに改良してやりたいとか、そんな事に少しでもかまつてゐられない。逆に自分の方がおかしくなる。小作からは取れるだけ取つたら得、皆さう思つてゐる。

もう小作人は地主樣を當てにして、何んとかして下さるだらふ、と待つてゐたら、百年經つたつて、待ちぼうけを食ふのが落ちだ。――研究會の人が農村について云つた。今の×××の中の組織――しくみが變らない以上、どんな事をしても農民は駄目になつて一方、勿論この忙がしい都會の制度に當てはまるやうに直して行くこと、例へば百姓がチリ〳〵バラ〳〵に仕事をすると、どうしたつてヒドイ眼に合ふから、まア協同組合、協同耕作、協同經營そんなものでも作つて、中に入る猾るい商人に儲けさせない方法もある、然しそれも程度もので、ウマク行く筈がない。――だから、何んと云つたつて、ドン〳〵小作××をやつて、小作人の生活を向上させて行くことだ。これより無い。――要するに、×××のやうに勞働者と百姓だけで×××××××××、どうしてもウマク行かない。――皆この意見だ。云はれて見れば、どれもこれも胸へピン〳〵來るではないか。

農村に一國の政治、經濟の中心地があつたことがあるか。享樂、外交、流行、藝術の中心地であつたことがあるか、――考へるさへコッケイだ。昔五つか六つでしかなかつた「都會」が短い間にどんなに急激に殖えたか。――人口から云つても、もう半分以上は都會に集つてしまつてゐる。これだけ見ても分る。然し「都會」と「農村」は何處まで行つても敵、味方ではないのだ。たゞ、今の世の中のしくみがさうさせてゐるので、で、そのやうに見えてゐるだけだ。

岸野のことでは面白く話してくれた。――假りにS村から年五千圓上がるとすると、彼奴はそれをまづ拓殖銀行に預金する。(一番上品に、知らん振りをしてゐるが、「銀行」といふのこそ、百姓の××をしめる親方の總元締であることを見てゐる百姓が一人でもゐるか!)――すると、その金は拓殖銀行から、又農業資金として、年賦貸付になつて出て行く。それを直接借りるのは自作農か△のやうなものだ。△が時々H町へ行くのは何んのためだか、知つてゐるか。あれは銀行から、年一割位で金を借りて、それを今度は困つてゐる小作に、月三分か四分で貸してやるためなのだ。――だから△は他人の金を右から左へ持つて行つたゞけで、三分にして年三割六分、全く無償で二割六分(二割六分!)も儲けてゐるの

だ。——その金が、先きにS村から小作料として取り上げた金であつてみれば、同じ小作は同じ金で、二回も搾り上げられてゐることになる。

岸野はその外に拓殖銀行から株の配當金を受取る。その金が矢張り、何處からでもない、農村から掻き集めて來た金でないか。三重！　又、その金の一部は（例へば）俺達の工場に投資されて、俺達をしこたまコキ使つて、それをS村にウンと高く賣りつけたとしたら、其處で又同じことが起る。これで一體、同じ小作人は何重に搾り上げられることになるのだ。——彼奴等の仕事はみんなかういふやうに關聯があるのだ。

それに、このウマイ事を何時迄もウマク出來るやうに、岸野は商業會議所議員になつたり、市會議員になつたりする。イザとなれば警察とも道廳とも、すつかりウマク行く。その職責を持つてゐれば、又それを使つて、逆に、自分の仕事に都合のいゝ事が出來る。

假りにS村がどうも思はしくなくなつた、とする。さうすれば、岸野は自分の黨派の議員をケシ立てゝ、S村に鐵道をひかせる。停車場をつける。さうすれば、附近の地價が上る。宅地にしてしまへば、收入では大したちがひだ。——まづ、こんな工合だ。

百姓はまだ〱色々かういふ事が分つてゐない。

まだ〱分らないだらふ。然しな、健ちや、どんなに難かしくても、長くかゝつても、俺達が一番先きに立つて、やつて行かなければ、誰もやつて行くものはないのだ。——阿部さんからの話だと、村にも旭川の農民組合から人が來て、會をやつてるさうだ。健ちやも出るやうにして、お互ひに呼びあつてしてゐたら、どんなによいかと思ふ。

キヌは村へ歸るやうなことを云つてゐた。よく分らないが、歸らなければならなくなるだらふ、と云つてゐた。——よく話をきいてみれば、あれだつて可哀相なものだ。あれが惡いばかりでない。百姓の生活だよ。これから村がダン〱底

へ落ちこんで行くと、キヌのやうな女は、殖えらさる一方だ。
健ちやのことはよく聞きたがるが、節のこともあるらしいので、知らせてゐない。
「小樽」と「S村」——上ッ面から見たゞけでも、前に云つたことがハッキリ分る。——製罐工場、拓殖ビルデイング、一流銀行、××工場、運河、倉庫、公園、大邸宅、自動車、汽船、高架棧橋（コール・ピーヤー）……それ等が、まるで大きな渦巻のやうに凄しく入れ亂れ、喚めいてゐる。その雜沓する街を歩いてゐると、世界の何處に、あの泥だらけの、腰のゆがんだ百姓といふものがゐるか、と思はせられる。草、山、稻、川、肥料、——農村はこれだけ！——だが、小樽の人は本當の百姓を眼の前で見たことが、一度だつて無いかも知れない。
又書く。
たゞ俺達は何時迄も「百姓」「百姓」ッて誤魔化されてゐないことだ。——これだけが大切なことだ。みんなに、よろしく。

こんな意味のことが書かれてゐた。——健は飯を食ひながら、丁寧にそれをもう一度讀み直した。それから、それを持つて阿部のところへ出掛けて行つた。

八

「百姓×にやつた」

雨が二週間以上も續いた。
初め硝子の管のやうに太い雨が降つた。雷が時々裂けるやうな音を立てた。——何時も薄暗い家の隅までが、雨明りで

明るく見えた。

それが上らず、そのまゝ長雨になつてしまつた。皆が當にしてゐた雲の切れ目も無くなつて、飽き〳〵する程同じ調子で、三日も四日も續いた。五日目になると、小作はあはて出した。居ても立つても居られない。どこの家でも百姓が軒下に立つて、グチョ〳〵に腐りかけて、水浸りになつてゐる外を見てゐた。

「何んて百姓つて可哀相なもんたべな。」

佐々爺は東京新聞にも讀み飽きてしまつた。若いもの、邪魔になりながら、ゴロ〳〵してゐた。——「可哀相に、手も出ない。——はがゆくつて、はがゆくつて！」

稻が實を結びかけてゐた大切な時を、雨は二十日間降つてしまつた。所々ボツン〳〵と散らばつてゐる小作の家は、置き捨てにされた塵芥箱のやうに意久地なく——氣拔けしてしまつた。

一回仕入れた原料が出來上る迄に一年かゝる。——七之助はそれに驚いた。然し、それどころか！　その一年目にやうやく出來上るものさへ、かうではないか。——これぢや、あのめまぐるしい都會の色々な産業や工業から時代おくれになつて、農村が首をしめられ、落ち込んで行くのは分りきつたことだ。

「百姓嫌やになつた。」——健は集つてきた友達に云つた。

仕方がなくなつて、紙に線をひいて、皆で軍人將棊をやつた。——母親は、風呂敷のやうに皺ッぽい、たるんだ乳房を赤子の口にふくませながら、小さい切窓から雨の外を、うつろに見てゐた。こめかみを抑えて「あ——あ、雨の音ば聞いてれば頭痛くなる。」

「S村の小作が、身欠鰊みたいに、ズラリ並んで首でもつる時來るべ。んだら見物だ。」

然し誰も笑へもしない。

五、六人で傘をさして、近所の田を見るに出た。誰かゞついでに「蛇吉」に寄つてみやうと云つた。何かと話して置けば、工合がいゝことがあるかも知れない。――ワザ〳〵なら、誰がこつたら管理人のどこさ來るッて、皆さう思つてゐる。

吉本は坐つたまゝ、障子をあけて、黄色ッぽくムクンだ大きな顔を出した。小作達だと分ると、瞬間イヤな顔をした。

「何んだな。」

(猫撫で聲だぞ!)

「ハ、別に……。」

お客がゐた。――H町の警察署長だつた。健達はそれと分ると、理由なく尻ごみを感じた。然し吉本の方が何か周章てたやうに、

「用事か? 今こつち、一寸……。後で駄目かな。」

「イヤ、その、この雨だもんで、ハ、その田ば見てきました……。」

「ん――、今度のでは考へてる。――後にしてけれ。」

「あまり作がヒドイので、豫め岸野さんの方へ、一つ……。」

健が云ひかけたのを、ウルサさうに、

「ん、ん、ん!」と抑えてしまつた。「お前等の指圖でやるんでないんだ。――分つてる。」

警察署長と管理人!――何かあるな、健は歸りながら氣になつた。――S村では、まだ時々駐在所の巡査や校長へ、芋や大根や鶏を「初物」だと云ふので、持つてゆく。所が、××偉い旦那さん達が、裏では村の金持や有力者と、ちアんと結びついてゐる。そんな事を、然し健がどんなに小作に話してやつても、分りッこがなかつた。

夜になると、近しくしてゐる小作が、よく二三人づゝ、落ち合つた。――「一人で家にゐたら、氣が馬鹿になる」

「どうしたら、えゝべな。」

「岸野さんどう出るかな……。」

不貞腐れて、時々酒に酔拂つてくる小作も出來た。——辻褄の合はないことを、一人で恐ろしく雄辯にしやべつた。

「あゝいふのは犬ツて云ふんだ」。

三井の砂川炭山へ、馬を持つてトロ引きに出てゐたもの、H町の道路普しんに行つてゐたもの、灌漑溝の土方へ日雇に行つてゐたもの、山林の夏出しに馬をやはり持つて行つてゐたもの……それ等が九月中旬過ぎると、みんな歸つてきた。

實が黑く腐つてゐても、穫入れて「米」にしなければならない。それから一ケ月位の間、小作は朝三時頃から夜の七時、八時頃迄働き通した。——收穫は「五割」減つてゐた。

五割！　では、小作は一體何のために働いたんだ。

健は稻のいがらッぽい埃りで、身體をだるまにしながら、

「やめた、やめた！」カッとして、そのまゝ仕事を放り出して、上り端に腰を下してしまつた。

「惠、少し踏め！」

お惠は兄の劍幕を見ると、イヤ〳〵立ち上つた。——臺所にゐた母親は默つてゐた。

「半分だ。——えゝもんだな、一年働いて半分しか穫れなかつたら、丁度小作料だべ。岸野さそのまゝそつくりやつても足りねえ位だ。——百姓がよ一年働いたら、一升位な、たッた一升位氣まゝに自分の口さ入れたつて、罰も當るめえ……。」

「昨年もあゝだし、岸野さんも何に云ひ出すか分らねえべ。」

母親は鼻をぐぢらせた。——「お前どころでねえ、五十何年もよくやつてきたもんだて、百姓ば！」

「何時かえゝぐなるべ、今度こそえゝぐなるべッてな。——んで、最後に、お氣の毒樣でしたか、えゝもんだ！」

母親は默つて、鼻をぐぢらせた。

田から上つた稻を一粒々々の米にする。ところが、その米が殘らずそのまゝ岸野に持つて行かれてしまふ。――それがハツキリ分つてゐる。分つてゐて、その米を一生ケン命籾にし、穀をとり、搗いて白米にしてゐる。何んて百姓はお人好しの馬鹿者だ！

武田がひよつこり顏を出した。

「精出るなア。」

「何によ。――見れ、この籾。」――母親は莚の上にたまつた籾を掌でザラ〳〵やつて見せた。――「今、叛謀でも起したくなつたツて話してたとこだ。」

武田はとつてつけたやうに、大きな聲で笑つた。

「な、健ちや、少し相談したいことあるんだが、仕事終つてからでも、俺の家さ寄つてけねえかな。」

健はだまつてゐた。

「今度の不作で、なんだか騷ぎでも起りさうでよ。村の不名譽でもあるし、相互扶助會としても工合が惡いし……。」

「君のとこ幾ぼとれた。」――健は冷たく、別なことを云つた。

「やうやく半作よ。」

「小作料納めたら、どうなる？」

「ん――。食ふもの無くなるよ。んでも、そこばさ、何んかウマクやつて行くことば考えたらツて思ふんだ。」

吉本にでも頼まれて來たな、と健は思つた。

健は皮肉に云つた。――「伜さんがこんな事云つてたが、本當かな、來年の春、Ｈ町の議員選擧で岸野さんが出るから、

地盤ば荒されないやうに、今年だけは小作人ば誤魔化した方がえゝッて蛇吉が云つてるッて。えゝ？俺達食ふか、食えないことば、そんなことでどうにも都合するんだナ！」

「……」武田はだまつた。「まさか。」

武田は話を別な方にそらして、歸つて行つた。撥の悪さをかくすやうに、暗い表で、

「明日も天氣だ。」

と云ふのが聞えた。

「あゝいふのば、犬ッて云ふんだ。」――畜生犬！

――他の農場では小作料を下げたとか、下げるとか、そんな噂さがすぐ岸野農場にも入つてきて、その度に皆をアヤフヤに動かした。

常任の交渉委員、作、佐々爺、武田が吉本管理人のところへ何度も足を使つた。

「蛇吉の野郎、こんなに事情が分つてゝ、それで一から十、岸野の肩ば持ちやがるんだ。――今中さはさまつて、野郎チタバタしてる！」

歸りに健のところへ寄ると、佐々爺、武田の前で、ズバ〳〵云つた。

もう岸野の返事だけだつた。それだけで決まる。――それを待てばよかつた。

さうだ、十年も經つてゐる

夜が長くなつた。

土間の竃所で、手しやくで飲む水が歯にしみた。長い間の無理な仕事で、小作の板のやうになつた腰が、今度はズキズキと痛んだ。母親は由三に錢をくれると云つては、嫌がる由三をだまして腰をもませた。――夜は靜かだつた。馬鈴薯を

爐の灰の中に埋めたり、鹽煮にしたりして、それを食ひながら、腹這ひになつて色々な話をした。由三も皆の中に入つて、眼だけをパッチリ見張りながら、頬杖をして話を聞いた。好きだつた。――母親は昔のことをよく覺えてゐた。

床に入つても、身體が痛んで寢つけなかつた。曉方まで何度も寢がへりを打つた。――過ぎ去つてしまつた生涯が思ひかへされる。――こんな「北海道」に住むとは思はなかつた。一働きをして、金を拵えたら、內地へもどつて、安樂に暮さう、まア、二三年もゐて――皆さう思つて、津輕海峽を渡つてきた。だが、もう十年も經つてゐる。今更のやうに自分の身のまはりを見廻はす。さうだ、十年も經つてしまつてゐる。――さうか。そんなら、死ぬだけは內地の村で死にたい。

誰か、內地の村に行つてくるといふものがあると、同じ「國宗」のものが集つてきた。村に殘つてゐる自分の本家や別家の人達に、事づけを賴んだり、何かを屆けてもらつたり、村の樣子をきいてきて貰つたりする。

誰も何時かキット內地に歸る、そのことばかり考へてゐる。――追はれるやうにして出て來た村を、今では不思議な魅力をもつて思ひかへした。

夜が長くなると、夜中に何度も小便に起きた。半分寢言を云ひながら、戸をあけると、身體がブルン／＼ッとすくむ。――秋の、深い冴えきつた外はひつそりとして、月が蒼々と澄んでゐる大空に、高く氷のやうにかゝつてゐた。――若い女でも、出口にそのまゝ跼んで、バヂャノ＼と用を達した。

「もツきり」

收穫が終ると、百姓の金を當てにして、天氣さへ良ければ、毎日のやうに色々な商人が廻つてくる。寫眞を澤山さげた佛壇を背負つて、老人が鐘をならしながら表へ立つた。太物をもつた行商もきた。越中富山の藥屋が小さい引出しの澤山ついた桐の箱をひろげて、ベラ／＼饒舌りながら、何時迄たつても動かなかつた。馬の繪をかいた樂ッ臭いちらしを子供達にくれて、無理矢理に要らない藥袋を置いて行く。――然し「長い」北海道の冬が待つてゐることを考へれば、襦袢の切

れもうつかり買ひない。

正月を少しでも矢張り正月らしく送りたいために、小作人のうち又働きに出るものは出た。――娘達は、大根や馬鈴薯や唐黍などを荷車につけて、H町へ、朝暗いうちに、表をゴトゴトいはせて出掛けて行つた。自分達は荷馬車の上に乘つた。提灯を車の側にさした。聲のいゝ女は流行歌をうたつた。H町へつくと丁度夜が明けかける。

朝市に出るものは出、一軒々々裏口から「おかみさん」と云つて廻つて歩くものは歩く。そして晝頃、空になつた荷車にのつて、今度はキャッキャッとお互ひにふざけながら歸つてきた。――賣つたゞけの金で襦袢や腰卷の切れを買つたり、餅屋に寄つて「あんころ」などの買喰ひをした。

「のべ源」はH町で青物を賣つて、少しでも金をつかむと、電信柱に馬をつないで、停車場前の荒物屋に入つて、干魚を裂きながら、コップの「もッきり」を飲んだ。

大概の百姓は歸りに寄つて、「もッきり」をひつかける。――店先には百姓の馬車が何臺もつながれてゐた。牝馬が多い。たまに牡馬が通ると、いなゝきながら前立ちになり、暴れた。荒物屋の中から、顔を赤くした百姓が飛び出して來て、牝馬を側の方へ引張つて行つた。

「のべ源」はこゝで醉ひつぶれると、そのまゝ白首のゐる「そば屋」へ行つた。――女達は「のべ源」を知つてゐた。――そして、イヤがつた。醉ふと、丸太のやうな腕で女をなぐりつけた。女が襖の足を拂ひ、チャブ臺をひつくりかへし、障子を倒して階段を芋俵のやうに轉げ落ちたことがあつた。

「のべ源」の馬はひつそりとした通りに、次の朝までつながれッ放しになつてゐた。

「來　世」

毎年の例で、小樽から「偉い坊さん」を呼んで、S村龍徳寺で、四五日間說教が開かれた。――龍徳寺の前には、岸野

や吉岡などの大地主や、[redacted]、吉本などの寄附金の「芳名錄」の札がズラリと立つてゐる。岸野は「金壹千圓也」出してゐた。——小樽から坊さんを呼ぶのも、重に岸野のつていだつた。

年寄りはその日を、子供がお祭りを待つより待つてゐた。

その日、年寄りはしまつて置いたゴワ〳〵な手織の着物をきて、孫娘に手をひかせて出掛けた。——畔道を曲つた鑄釘のやうに歩いて行つた。健の母親も決して缺かしたことがない。

「……現世は苦しい——嫌なこと、悲しいこと、淚のにぢむやうなこと、淋しいことで滿ち〳〵てゐる。だが、これも前世ィからの約束事、何事も因果の致すところぢや、さう思ォ——て、しのばにやならない。——お釋迦樣はさうおつしやツてゐなさる。」

坊さんはさう云ふ。年寄達は一句切れ、一句切れ毎に、「南無阿彌陀佛」を繰りかへす。

「……その代り、あみだ樣のお側にお出になつたとき、始めて極樂往生を遂げることが出來る。あ——あ、お前も人間界にゐたときは苦しんだ、然し何事も佛樣の道を守つて、一口も不平を云ふことなく、よくこらえて來た、もう大丈夫ぢや、さ、手を合せて、かういふ風に合せて、たつた一言、ナムアムダブツ、さう稱へれば大安心を得ることが出來るのぢや。蓮華の花の上に坐ることが出來るやうになるのぢや……。」

「有難いお言葉ぢや。」

「あ——あ、有難や、有難や。」

「ナムアムダブツ。」

「ナンマンダブ、ナンマンダブ……。」

——百姓は心の何處かで、自分でも分らずに「來世」のことを考へてゐる。——長い間の生活がああんまり「苦し」過ぎ

てゐた、それがそして何時になつたつて、どうにもなるものぢやなかつた。——あの世に行きさへすれば、年が寄つてれば、もうそれしか考へられない。

「何事も、何事もチッと、チ——イと堪らへることぢや！」

坊さんはそれを繰りかへす。

キ　ヌ

健はキヌが歸つてきたことを知らされた。

「やッぱし小樽だ、あの恰好な！　大家の御令孃さ。見なれないんで、犬の野郎吠えるべ。——村の青年團もこれア一もめもめるべよ。」

健は笑ひもしなかつた。

キヌのことは別に頭になかつた。——戻つてきたから、どうなる、どうする、今更そんなことでもなかつた。

「キヌちや戻つてきたッ……？」

節がそれだけを健に云ふのに、吃つた。——眼が健の顏色を讀んでゐる。

「馬鹿！」

健は節の唇を指ではぢいてやつた。

節は一寸だまつて、——と、

「さう？　——まア、嬉しい！」

急に繩飛びでもするやうに跳ねて、かけ出して行つた。——後も見ずに。

健は二三日してから、嫌な噂をきいた。——キヌが妊娠してゐる、相手は大學生だとか云つてゐた。それでホテルにも

居たまらず、「こつそり」歸つてきたのだつた。

父はキヌを家に入れない、と怒つた。――キヌは土間に蹴落された。ベトベトする土間に、それでも手をついて、「物置きの隅ツこでもいゝから」と泣いて頼んだ。

まだ色々なことが耳に入つてきた。

――キヌはそんな身體で、無理をして働いた。手が白く、小さくなつたものは、百姓家には邪魔ものでしかなかつた。――自分で飯の仕度をして、それを並らべてしまふと、隅の方に坐つて、ヂッとしてゐる。皆がたべてしまつて餘りがあれば、今度はそれを自分でコソコソたべた。――健は矢張り聞いてゐるのがつらかつた。

遲くなつて、健が伴のところから歸つてくると、母親が顏色をかへてゐた。

「キヌちや首ばつツたとよ！　――來てけれッて。」

健はものも云はずに外へ出た。

外へ出ると、「やつたな！」と思つた。――月の夜だつた。キヌとのことが、チラッと頭をかすめて行つた。

キヌは納屋で首を縊つてゐた。健が行くと、提灯をつけたものが七、八人ゐた。――父親が探がした時、知らずに打ち當つたと云ふので、下がつてゐるキヌの身體が眼につかない程ゆるく搖れてゐた。提灯の火だけでそれを見てゐると、寒氣がザアーッと身體を走つた。

「ハ、やうやく村の恥さらしものに片がつきました……。」

父親が血の氣のない顏で云つて歩いてゐた。

健には、キヌの死んだ事が何故か、キヌといふ一人の人間だけのこと、それだけのことでなく思はれた。――もッと別なことが、色々その中にある氣がする。

S村と小樽、これをキヌが考へさせる！

九

「なア、お内儀さん達よ――」

岸野から返事が來た。

伜のところへ、吉本から人が呼びに來た。――それと、健がキヌの葬式に出掛けて行く途中會つた。

「聞かなくても分つてるんだ。」と伜が云つた。

「岸野のこッた。――歸りに寄る。」

勝の家の前で、父の一人々々ちがつた兄妹が田の引水をせきとめて、鮒をすくつてゐた。身體をすつかり泥水に濡らして臍のあたりについてゐる泥が白く乾いてゐた。

「愛子ォ。」――男の子が呼んだ。

「何アに。」

「愛子あ――とて、あれきあんだれき、ありやのあり糞！」

女の子は負けてゐない。「源一けんとて、けりきけんだれき、けりやのけり糞！　やあ、げり糞、げり糞！」

愈ゝだ！　健は恐ろしいやうな、心臟のあたりをくすぐられるやうな氣持になつてゐた。

――吉本管理人は伜の顏をみると、

「見ろ！」と云つて、眼の前に手紙を投げて寄こした。「あんなことを云つてやつたから、見れ、かへつて片意地にさせてしまつた。――んだから、馬鹿だつて云ふんだ。」

狸奴！　俺達の云つた通りのことを、貴様が正直に書いてやつたと誰が思つてる！　手前が自分の立場が可愛くて、小作人が飛んでもないことやらかしてるツて、有る事、無い事、嘘八百並べてやつたんでないか。順序が順序だから、手前えのやうな奴を中にはさんだんだ！――

作は手紙を懐に入れると、吉本に挨拶もしないで外へ出た。

「騒いだりしたら損だど。――分つてるべ、ん？」

出かけに吉本が云つた。――返事もしない。

かうなれア立場としては吉本は、可愛相なほどオロ〳〵だ、様ア見ろツ！

作の家には五、六人集つてゐた。――健も居た。健は作に會つてから、葬式どころでないと思つて、顔だけを出すと、直ぐこつちへ廻つてきた。――自分も變つたな、と思つた。キヌだつて分つてくれるさ、と思つた。

作が歸つてきた。皆作を見た。

瞬間、鋭い緊張がグイと皆を抑えた。

「ウハヽヽヽヽ」

戸口に立つたまゝ、何んの前觸れもなく、作は大聲で笑つた。そして懐から手紙を出すと、「こゝまでお出で」をするやうに振つてみせた。

「駄目ツ！」ぶツつり切つた。

皆はつられたやうに、「駄目か！」「やツぱり！」「んか。」「駄目か！」口々に云つた。――肩から力がガツクリ抜けた。

「で、こんなものモウどうでもいゝこつた。――第二だ。」

作は皆の眞中に大きく安坐をかいた。

阿部は眼鏡を出してきて、ゆつくり手紙を讀んだ。
「第二だ、これは俺達のうちから代表を選んで、岸野に直き〳〵會つて、詳しい話をするために小樽へ出掛けることだ。」――
喧嘩はまだ早い。後で大丈夫だ。」
「したども、伴さん一番先きに喧嘩してえんたな。」――年輩の小作がひやかした。
兩手で頭を大げさに抑えて、伴がウハヽヽヽヽと笑つた。
「さうした方順序だし、えヽ。」
「えヽべ。」
「んでも、伴さんみたいに喧嘩早い人は代表には駄目だネ。」
「これでも斷引になれば、斷引はうまいんだよ。」――伴がてれた。
何故そんな無駄な廻り道が必要なんだ、健は自分だけではさう思つた。――分り切つたことでないか。
「喧嘩ッてなれば、矢張り乘るか、そるかだ。――やれることだけは、やつて置かねば駄目だ。」――阿部までさう云ふ。
心配してゐた女房達が、懐へ子供を抱き込んで乳をふくませたり、背中にくヽりつけたまヽ、お互があヽだ、かうだ、と話しながら、二三人づヽ、二三人づヽ集つてきた。――子供が喚いて、背中で母親の尻を蹴る。――入口がやかましくなつた。
かう集つてみると、小作の女達は「汚な」かつた。畑から抜いてきた牛蒡のやうに、黒くて、土臭かつた。――然し、そのどの顔もたつた一つのこと、「食えるか」「食えないか」で、引きつッてゐる。
「な、御内儀(おかみ)さん達よ、」
伴が一言づヽ、顎をしやくり〳〵、何時ものを云ふときの癖で、眼をつぶつて――「聞いて貰はふ。――この一年の間、

寢る眼も寢ず働いて、そのお蔭で、有難いお蔭で、今食ふや食はずになり、――どうか生かしてだけは置いてくれッて頼んだ事だ。それをどうだ！　この手紙を見てくれ。――馬鹿野郎だとか、氣狂ひだとか、監獄へブチ込んでやるぞ、とか――な、地主と小作は親と子だつて云ふ。眞赤な嘘だ。眞赤な嘘でないか。これで親も子もあるもんか。」

「まア。」

「まア、まア！」

女達はそれだけしか云へない。

子供が急に大きな聲を張りあげて泣き出した。いきなり平手で、馬鈴薯のやうな子供の頭をパシッ〳〵毆ぐつた。「默ッてれ、この餓鬼ッ！」――母親がムキになつて怒つてゐる。

佐々爺と武田が「返事」のことで、ひよッこり顏を出した。佐々爺は東京新聞を振り上げながら、

「どうしたんだ？　どうしたんだ？　え丶？　どうした？」

と、カス〳〵な聲を絞り上げた。

「俺の命でもとる氣か？」

交渉委員が小樽へ出發してから三日經つて、ハガキが來た。阿部だつた。

――誠意をもつて會つてはくれない。朝七時に、門から玄關まで山があつたり、池があつたりする立派な邸宅を訪ねると、三十分も待たしてから「店」へ行つたと云ふ。その店までは歩いて行つて四五十分もか丶る。そこで又二十分も待たして置いてから、ヌケ〳〵と、工場の方です、と云ふ。教えられた道を迷つて、曲がりくねつて、行き過ぎたりして、あげくの果てに工場が見付かる。見付かつたつて、何處からどう入つて行つて、どう云へば會えるか分らない。何人にも何人にも頼んで、その度に百姓は冷汗を流す。そして云ふことは同じ。ホテルに行つてる！

ホテルへ行けば商業會議所、泣きたかつた。——晩の十一時過ぎにやうやく家で會つてくれた。音もしない自動車に乘つて、醉つて歸つてきた。

「俺の命でもとる氣か、一日中尾行をつけて！」と、最初に怒鳴りつけられた。

佐々爺はカラ駄目だ。——旦那樣の云ふことはお尤もでへえ、ドン百姓ツてものは我儘で、無理ばかり云つて、とか、まるでワケが分らない。

「小樽でグズ〱してると、警察へ突き出すぞ！」終ひにさう云つた。

次の日はそれでも三時間程會つた。

「こんな事はお前ばかりでなくて、お前等の後をツツついてゐる不穩分子がゐるから、きいてやるワケには行かない。」

不穩分子といふのは「農民組合」のことださうだ。

とう〱駄目だ。話にならない。——駄目と分つたら、直ぐ歸る。

健は始めて作から賴まれて、小作人の家全部を廻つて歩いた。——今度のことはモウ成行きがきまつてゐる。さうなつたら一人でもハグれないやうにするためだつた。——一廻り、廻つて來ると、健は他愛なくなる程疲勞した。

「ん、ん、ん！」

ときいてくれる隣りでは、何しに來やがつた、といふ顏をした。

「困るには困るども、隱當で無えべもしな。——後がオツかなくてよ。」

そんなことも云ふ。

「岸野さんだら、一度ウンとやつて置く必要あるんしな。

そして何處でゞも、「へえ、健ちやが、健ちやがこんな事するやうになつたのか？」と、不思議がられた。

その度に健は耳まで赤くして、ドキマギした。

然し、たつたそれだけの事をしたゞけで、健は何か大きな自信と云つていゝものをつかんだやうに思はれた。

「納屋にあるのか？」

健が裏で、晩に食ふ唐黍をとつてゐた時だつた。

「健ッ！　健ッ!!」——母親の叫び聲が家の中でした。

その聲にたゞ事でない鋭さを感じて、健はグイと襟首をつかまれたと思つた。

家の中にかけ込んだ。かけ込んで——見た。

吉本管理人！　劍！　巡査だ！　役場の人！　鞄！　一瞬々々のひらめきのやうに、いきなり健の眼をくらました。

「氣の毒だが、小樽からの命令で、小作米を押さえるから。」

吉本は戸口に立つたきりの健に、憎いほど落着いた低い聲で、ゆつくり云つた。

——健はだまつて裏へまはつた。皆はゾロ〳〵ついてきた。母親はオロ〳〵して、吉本や特に親しかつた巡査の後から同じことを何度も云つた。

「お母さん、どうも仕方がないんだ。」

巡査はうるささうに云つた。

十

「小作調停裁判」

又順序をふんだ！

かうなると、健の方がヂリ〳〵した。――「小作調停裁判」を申請するといふのだ。

「分りきつた無駄足を何故使ふんだ。」健はハッキリさう思つた。――何んと云つたつて、阿部も伴もやつはり年寄りだ、とさへ思つた。

然し、たゞ、今迄とはちがつて、兎に角「表へ出る」。所謂社會的な地位のある人は、案外表へ出ることを嫌ふ。そこを衝いてみる必要がある――阿部も伴もその事を考へてゐた。

差押へを受けてから、小作人もちがつてきた。「モウ親も子もあるもんか。」――一番おとなしい小作さへ口に出して云つた。――小作は毎日々々の飯米にさへ困つた。納屋には米俵がつまさつてゐる。何十俵も積まさつてゐる。何十俵といふ米俵が積まさつてゐて、そして飯が食えなかつた。

「少しでも手をつけると罪人だぞ。」

巡査が時々廻つてきた。まるで岸野から言傳つて來たやうだつた。――小作人は「罪人」と云はれると、背中がゾッとした。

H町からの歸り、母親と由三が薄暗くなつたのを幸ひに、所々の他人の畑から芋や唐黍を盗んだ。――前掛けの端を離すと、芋、唐黍、大根が一度に板の間にゴトン〳〵と落ちた。

「兄ちやさも、恵にも云ふんでねえど！」

家のなかに上ると、母親はさすがにグッたりした。――とう〳〵盗棒をしてしまつた、と思つた。

「……んでも盗棒させるのは、岸野さんだ。……えゝワ、えゝワ！――何アに……。」

横坐りになると、そのまゝ何時迄もボンヤリした。

「母、俺ら學校の歸り何時でも取つてくるか？　――由何んぼでも、見付からないやうに盜れるワ。」

「馬鹿！」――母親はいきなり叱りつけた。

食えなくなつた小作達は、默つてゐても、伜のところへ代る〲集つてきた。小作調停のことは、それで思つたより早く纏つた。

武田と佐々爺は「何んとか外にないか」「何んとかなア……」と云つてゐた。

伜が代表になつて村長へ「口頭」で、小作調停裁判を申請した。村長は「遲滯なく」そのことを旭川地方裁判所へ提出した。それが「受理」されると同時に、小作米の差押へが解除された。――小作人達はどうかした拍子に「かなしばり」がとけた時のやうな身輕さを感じた。――「やれ、やれ。」

小作米は直ぐH町の「農業倉庫」に預け入りして、「倉荷證券」にした。それは何時でも現金にすることが出來るやうになつた。

「小作官」

道廳から「小作官」がやつてきた。黑の折鞄を抱えた左肩を少し上げて、それだけを振つて歩いた。伜の家に上がると、眞座敷のホコリとズボンの膝を氣にした。窮屈に坐つた。話をきゝながら、「朝日」を吸つた。――何本も何本も續けて吸ふ、しばらくもしないうちに、白墨の杭のやうに、爐の灰の中に殼が突きさゝつた。

阿部が伜に代つて、初から順序をつけて詳しく話した。

「ムー―、それア、岸野さんにチイ―ト無理なところがあるね。」

「何がチイ―トだい！」

歸つてから、伜が小作官の眞似をして、皆を笑はせた。――「あつたらヘナ〲に、百姓のこと何分るッて！」

調停委員には「實情に通じた」その土地の「名望家」が選ばれた。——相馬農場の老管理人、H町々長、S村の校長など。

判事が「調停主任」になつた。

「心細いな。小作人の本當の氣持が分つてやつてる人無えんだものよ……。」

健が廻つて歩いてゐる小作の家でさう云ふと、

「んでも偉い立派な人達だもの——ためになるやうにやつてけるべ。」

健はがつかりした。

第一回の呼出狀が來た。

裁判所へ出ると云ふので、作はさう度々着たことのない着物をきて出掛けた。

「何んも似合はねえな——どうだ、似合ふか?」

「熊が着物ば着たえんたとこだ。」

「熊? ——可哀相に! ハヽヽヽ」

「さう云へば、百姓つて良え着物きたこと無えんだもの——似合ふワケ無えさ。」

出掛けに作が云つた——

「これが駄目になつたら、最後だど!」

誰と誰が戰つてゐるか

恩を賣つた犬畜生奴! よくもこんな處さ持ち出して、赤恥かゝしやがつたな。勝手にしろ!——裁判所の眞ん中で、岸野がいきなり俺達を怒鳴りつけたんだ。

やつてみろ！　足腰たゝない位たゝきのめしてやるから！　――これが、いくら地主であらふと、小作人に云ふ言葉か――俺はこの四十三の大人になつて、面と向つてこんな事を云はれたのは初めてだ。

三日のうち五度會つた。そして五度怒鳴り散らされた。――俺達は鳴怒られるために旭川まで出掛けて行つたんぢやない、調停して貰ふためにだ。

ところが、「調停委員」は一體どんなことをしたと思ふ。――まア、まア岸野さん！　それ位だ。こんなものが調停なら、誰れにでも出來る。

後で、「農民組合」の辯護士が云つてゐた。

「調停××」なんて名前はえゝが、こんなものは、これから益々起るおそれのある小作爭議をば體よく抑えて、大きくしないうちに揉み消しにして――結局地主ば安全にさせて置かふとするための××だ。ところが、一寸見がいゝために、何も知らない百姓はその人の好さから、あ――有難いものが出來たと大喜びなんだ。そこが又×××してあるところだつて。」

んだんだ。今度でそれがよッく分つた。――今年は全道みんな不作だ。何處でも小作爭議が起りさうだんだ。――それで何處かで、皮切りでもされゝば大變だ。んだから、外の地主も俺達のば何んとかして、うむやむにしてしまひたいので調停委員の後さこつそりついてるんだとよ。

小作官などは「この事件を無いことにしてくれゝば、岸野さんからお前等に慰勞金を出させてもいゝんだが、――社會のためにも、その方がいゝんだ」と云つたものだ。

聞いたか？　――みんな××だ。

もう殘つたものは俺達ばかりよ。――かうなつたら、皆！　意久地なく默つて首ば縊るか？　もう一日だつて食えねえ

んだからな。それに岸野は腕づくでも取つてみせるッてゐんだ。――それとも死にたくなかつたら、最後までやるか？――もう、このどつちかに來てゐるんだ。どつちかだ。んで、どつちだ！

――伜は自分でも泣いてゐた。

次に組合の荒川が「爭議團」を×つて、即刻戰鬪の準備をしなければならないことを、皆に話した。「鐵は赤いうちに！」

寒い雨が降つてゐた。――もう冬が近い。そしてそれが知らない間に氷雨になつてゐた。――さすがの（實際、さすがの、と健には思はれた。）小作人もあり〳〵と興奮の色を顏に出してゐた。

「そんなことまでやるのか！　畜生奴！」

皆は雨の中を歸つて行つた。出口で傘をさすと、急に雨の音がやかましくなつた。どざだけをかぶつて、肩を濡して行くものもゐた。雨に聲を取られないやうに、大きな聲でお互話しながら歸つて行つた。

阿部、伜、健、荒川、その他小作人三人、組合員二人――これだけが、二日の間に三時間位しか寢らずに、「岸野小作爭議團」結成のために馳けずり廻つた。ビラを書いたり、謄寫板の原紙を書いたり、刷つたりした。――健は始めての色々な經驗で興奮してゐた。

人數が纒つて來た。――今迄健が捨石のやうに廻つて歩いてゐたのが、案外役に立つた。

佐々爺や武田は訪ねて行くと、譯の分らない議論を吹ッかけた。爭議團のものが分らないで、つまると、

「そんなんで地主さ楯つけるか？」

と、嘲笑（わら）つた。

武田が吉本管理人と相談し合つて、小作人の切崩しをやつてゐる噂さが入つてゐた。

荒川が鐵筆で頭をゴシ／＼やりながら、

「かうなつたら佐々爺とか武田、それに『のべ源』あんなもの氣をつけなけァ駄目だ。――何んしろ金でやつてくるんだからな。」

やもめの勝が、芋と唐黍を子供にも背負はせて、伴の家にやつてきた。

「――!?」

健はグイ／＼とこみ上つてきた氣持をどうすることも出來ない。

「なんぼなんでも、涙が出て、とても食えないよ。」

阿部も「分る！　氣だけで澤山だ！」と、何時もの阿部らしくもなく周章てたやうに押し戻した。

どんな事にでも直ぐ感激する伴は、何時迄も鼻をグズ／＼させてゐた。

「な、どうだ、阿部君よ、勝たんばならないな！」

「驚いた！　こつちから持つて行つてやらなけァならない位の處から、持つてくるなんてなァ！　矢張り、あゝなると本當のことが、默つてゝも分るんだな。」

健は身體に鳥膚が立つ程興奮を感じた。

伴の家では、伴のお内儀さんや阿部のお内儀さんも出て來て、てきぱきと家の中の細かい仕事を片付け、――暇々には、小作の家を廻つて歩いて「女は女同志」その方からも結束を固めてゐた。

死んだキヌの妹は自分から手傳ひに來てゐた。伴のおかみさんと氣心がよく合つて、氣持いゝ程仕事をしてくれた。ビラ書きを手傳つたりした。――顔はキヌとそのまゝ似てゐたが何時でもツン／＼してゐるので、何んだ此奴と思つて、

健は嫌ひな女だつた。――然し、こんな時に節が出てきてゐてくれたら、と思ふと、淋しかつた。が、あの可愛い節は、一日でも早く健が昔の健にかへつてくれるやうに、と祈つてゐるときかせられて、健はがつかりした。

小作爭議に入つてから、Δの旦那は爭議團に關係してゐる小作には絶對に「掛賣り」をしないと云つた。結局それは、小作には品物を絶對に賣つてくれない事と同じだつた。それに今迄の、何年もの間の「掛」をたつた今拂つてもらはふと、おどかした。

「社會主義者どもの尻馬に乘つて、日本の偉い遺風にキズをつける大不忠者！」

店先きで怒鳴りつけられた。

「在鄕軍人の小作であつて、若し爭議に關係するものがあつたら、×××對して申譯がないと思へ！　軍人たるもの、面汚しだ。」

同じことを「青年團」や「青年訓練所」のもの達にも云つて歩いた。

「んでもΔさん、食えないんだもの、どうも仕樣無えしな……。お前さん達なら、それでえゝかも知れねしどもな。」

小作もΔに云はれると、矢張りマゴ〳〵した。然しどうにも食えなかつたのだ。

健は然し、Δがそんな「偉い」ことを云つて歩いてゐながら、吉本管理人とちァんと結び合つてゐること――吉本と爭議のことで、H町の料理屋で會つたことを知つてゐた。

「恐ろしいもんだな。」

「恐ろしいもんだよ。――何處で、どう關係があるか、表ばかりの云ふことや、することを見てるたんぢや分らないんだ。」

荒川が健から聞くとさう云つた。「絲を手繰ると、飛んでもなく意外な奴が、實は一緒になつてるもんだよ。」

學校では由三達が市街地の子供からいぢめられた。（あの「溫厚な人格者」の校長が「健は殊にさう思つてゐたのだ！）時間がある毎に、小作爭議のことを「不祥事だ」「不祥事だ」と云つた。「若しお前達の親や兄弟で、あんな惡いことをするものがあつたら、やめさせるやうに一生ケン命お願ひしなければならない。」

先生の云ふことなら、どんな事でもそのまゝ信じこむ由三は、家へ歸ると健に泣きついた。――由三は學校へ行くと、いぢめられるので時々休んだ。そして健のところへ來た。手紙を屆けたり、ビラを配るのに手傳つた。――「××さ行ぐより、ウンとえゝわ。」

お恵は髮に油をテカ〳〵つけたしやれ男とブラ〳〵してゐた。

「兄ちやば皆偉いッて云つてるど。」

健が遲く歸つてくると、腹這ひになつて、講談本を讀みながら、見向きもしないで、ヘラ〳〵した調子で云つた。

「この恥さらし！」

「んだから偉いんだとさ。」

健はだまつた。

彼は自分の妹や母親のことでは、どの位阿部や作に肩が狹いかわからなかつた。

十一

「千回もやつてくれ」

第一回の「岸野小作爭議演說會」が、H町の活動小屋で開かれた。――各農場相手に生活をしてゐる町民や、他の農場

の小作達も遠いところから提灯をつけてやつて來た。

「割れる程」入つた。

健は初めて「演壇」に上がつた。壇へ上がると、カッと興奮してしまつた。途中で、何を云つたか分らなくなつてしまつた。分らなくなると、周章てるだけだつた。――時々、拍手と「分つた〳〵」「もうやめれ！」「その通り！」そんな野次の切れ端しを覺えてゐるだけだつた。下りて裏へ行くと、キヌの妹が

「上出來だよ、健ちや！」と云つた。

演說會は大きな反響を起した。――それから一週間もしないうちに、他の農場では爭議を起されないうちに、(申譯ばかりだつたが）小作料の輕減を行つた。

然し岸野からは、「お前等が假令千回演說會を開いても、蚤にさゝれたよりも、痛くも、かゆくもない。もつと元氣よくもつと〳〵やつてくれ。」と云つてきた。

吉本はざま見ろ、といふ風に、それを持つてきた。

三度演說會を開いた。――然し「殘念ながら」何度開いても、それが具體的にどうなるわけでもなかつた。どうにかしなければならない。事實荒川や阿部達も行き詰りを感じてきてゐた。――あせり出した。

方向轉換

筆不精なばかりでなしに、手紙など、いふものを書いたことのない健が、思ひ出して、フト七之助に手紙を書いた。そして今度の爭議のことを知らせてやつた。

すぐ七之助から返事が來た。

――小樽の勞働組合のものに、そのことを話した。そしたら××へ出て來い、と云ふのだ。地主は小樽に居る。そんな處で

いくら騒いだつて、岸野には百里も離れた向ふ岸の火事よりも恐ろしくない。都會の勞働組合が應援して、××にやらなければ、この爭議は決して×つことは出來ないだらふ、と云つてゐる。一刻も早く爭議團が出て來るやうに、話すことだ云々――

所が、このたつた一枚の葉書が、思ひがけなく、行き詰つてゐた方向に大きなキッカケを與へた。

さうだ、それだ！　――氣付かなかつた。

爭議團は活氣づいた。――新らしい編成が行はれた。

「爭議團小樽出張委員」、農場に殘る「連絡委員」の決定、――この爭議を岸野農場だけのものにせず、他農場も一齊に××やうに、たゆまず××、××すること、――小樽に於ける情勢の刻々の變化に應じて、報告、示威、示彈を兼ねた演說會を開くこと、これには農民組合S村支部が主に當ること――等が定められた。

健は小樽へ出て行きたかつた。然し連絡委員として殘らなければならなかつた。――仕事が急に忙がしくなつた。

「農業倉庫」に入れてある米を、倉荷證券で賣り拂つて、爭議資金に充てることにした。

爭議團小樽出張委員作、阿部外十三名は、組合旗、流し旗をたてゝ小作人に送られた。小樽に出るといふことが分ると、吉本や武田は周章てゝ、遠まはしに調停めいたことを云つてきた。

雪は四、五日前から降つてゐた。滿目たゞ荒凉とした平野には、硝子クズのやうに鋭い空ッ風が乾いた上ッ皮の雪を吹きまくつてゐた。

十二

手を握り合つて！

省略

十三

「女は女同志」

省略

十四

「解散！　解散!!」

省略

十五

事態が變つてきた

省略

「もう五つ――」

爭議團は小樽の勞働者達に見送られて、――一ケ月以上の「命がけ」の（作は、あとで思ひ出すと、背中がゾッとする、とよく云つてゐた。――よくまアやつてきたもんだ。）鬪爭の地を後にした。

あと九ツでHの停車場だ！　――もう七ツだ……もう五つ――四つ――三つ、となると、皆は云ひやうのない氣持に抑えられた。近くなればなる程、小作人達はムッつり默りこんできた。

――作の厚い、大きな肩が急に激しく搖れた。と、ツッと泣き出してしまつた。雪焼けした赫黑い顔に、長い間そらな

かつた鬚が一面にのびてゐた。――作は自分の肱に顔をあてた。そして聲をかみ殺した。

嬉しかつた！　たゞ嬉しい。それをどうすればいゝか分らないのだ。

女達は思はず前掛で顔を覆つてしまつた。

十六

「毎日々々、一月も考へた。」

「ねえ、健ちや……」

節は餘程云ひ難いことらしかつた。

「……お父な、嫁にでも直ぐ行ぐんでなかつたら、都合さ稼ぎに出れッてるんだども……！」

――とう／＼さう云つた。

「俺……俺一緒にならない。」――健は苦しかつた。

「……!?」

暗かつたが、節の顔が瞬間化石したやうに硬はゞつたことを健は感じた。

「……考へることあるんだ。俺小樽から歸つてから毎日々々、一月も考へた。……考へたあげく、とう／＼決めることにしたんだ……俺は、旭川さ出る積りだよ。」

「……何しに？」

「うん？」

「何しによ？」

「後で分るよ……」

「…………」

――節は健のうしろにまはしてゐた手を、何時の間にか離してゐた。

健は固い決心で旭川に出て行つた。キヌの妹が見送つてきてくれた。

彼は、そして「農民組合」で働き出した。

（一九二九・九・二九）



三人法師

谷崎潤一郎

下

わたしは河内の國の生れで、楠の家とは一族になります篠崎掃部助と申すものの一子、六郎左衞門と申すのです。親にあたつてをりました者は正成のためには隨分と重く用ひられて一大事の相談にもあづかり、萬事を取りしきつてゐましたので一門のあひだにも名を知られ、世間にも聞えてゐましたが、正成が討死しましたときに一所に腹を切りました。そののち正行が跡を繼いで遺族のものを疎略なくあつかつてくれましたから、私どもも大切に勤めてをりますうち、その正行もやがて討死するやうなことになりまして、四條繩手のたたかひの折には私も一所に討たれましたけれども、どう云ふ譯か不思議に敵の眼に付かず、首を搔かれなかつたので、少しの息の通つてゐましたのを知つてゐる法師が見つけ出して、或る所へ擔いで行つて、看病をしてくれましたおかげで、死ぬ筈の命が助かつたのです。さてそれからは今の楠正儀が世繼ぎをいたし、私の親をまさしげが扱つてくれたと同じやうに大

事に扱つてくれまして、互ひに頼みに思ひながら暮らしてゐましたが、世間の噂では、その正儀が足利殿へ降參をするとか、するらしいとか申しますので、以ての外のことだと思ひ、これ〳〵の噂がありますけれど、まさかほんたうではないのでせうね、それともさう云ふお考へがあるのですかと、楠に逢つて尋ねますと、あまりにお上のなされかたが恨めしいと思ふことがある、それで實はそんな考へにもなつたのだと申すのです。わたしはその言葉をききまして、君をお恨み申すのなら我が身を捨てて遁世なすつたらいいでせう、さうしてこそお恨みと云ふことも道理にきこえますけれど、足利殿へ出仕をされて朝廷へ弓をお引きになるのでは、君の御運がお盡きになつたのをお見限り申したのだ、身を立てるために降參をしたのだと世間の人は申すでせうから、ゆめ〳〵そんなお考へは思ひ止まつて下さい、いつたい此れ程のことをおきめになるのだつたら、お役に立たない迄も私と云ふ者がをりますのに、何のお話もなかつたではありませんかと云ひますと、それはさうだが、御分に話したらどうせ氣に入るまいと思つて隱してゐたと申されますので、さあ、そこのことです、私に氣に入らないことがお分りになるなら、諸人の嘲りと云ふことにも氣がおつきになるでせう、一代ならず宮方のおんために討死をして名を後代に揚げようとはなさらず、御分の代になつて未練のふるまひをなさると云ふのは、くちをしいではありませんか、ぜんたい何のお恨みがあると云ふのです、今の拜領をどなたの御恩だとお思ひになります、君、君ならずとも、臣を以て臣たりと云ふ古の人の言葉もあります、どうぞ考へ直して下さいと云ひましたけれど、その後とう〳〵上洛をされて、東寺で管領に對面されたと聞きましたので、もうかうなつては君の御運も盡きたのだ、私一人の力でははかばかしい働きも出來ないし、さうかと云つて一所に降參をする氣にもなれないし、これこそ善智識だと思つて、その折遁世してしまひました。

それから河内の國篠崎の故郷をあとに立ち出でましたとき、三つになります女の子一人と、男の子一人と、都合二人の子に、妻なる女がをりましたのを振り切つて出ました折の心地は、さすがに多年のよしみと申し、名殘りをしさはどれほど

か知れませんでしたけれど、きれいさつぱり世を捨てるのだと思ひきはめて、やがて關東へと修行をこころざし、松島の寺に三年をりまして、次ぎには北國を廻りましたが、とても自分のやうな半出家の者は國々を歩いてどのやうなたふとい智識にも逢ひ、結縁をも願ひ、そのあひだには名所舊蹟を見て胸のうちを慰めよう、それにまた、どうせいつまでながらへられる憂き世の中ではないのだから、歩き倒れて死ぬところまで行つてみようと決心しまして、西國をさして上りますうちに、不思議な縁で河内の國を通りましたので、今頃ふるさとの篠崎はどんな有様になつたであらうと、昔の館の堀のほとりへ立ち寄つてうかがつてみますと、築地はあつても屋根は崩れてをりますし、門はあつても扉は外れてをりますし、庭には草が深く繁つて、家と云ふ家はあとかたもなく壊れてしまひ、わづかにあやしい賤の庵が二つ三つ殘つてゐるだけで、それさへ雨風をしのげさうにも見えないのです。私はそぞろに眼もあてられない思ひがして、涙を流して通り過ぎようとしましたが、ふとそのあたりにいやしい身なりをした一人の尉が田を打つてゐますのを見て、これに聞いたら以前のことを知つてゐるだらう、尋ねてみようと思ひまして、もし、尉どのよ、ここは何と云ふ所ですかとききますと、尉は着てゐた日笠をぬいで、篠崎と申す所ですと答へるのです。では何と云ふ方の御領分ですかと、かさねてききますと、篠崎殿の御領分ですと云ひますから、さては私の一族のことを知つてゐるなと思ひましたので、田の畔に腰を休めて、それとなく話しかけましたところが、尉も鍬を杖につきながら、ここの御領分を持つていらしつたお方と云ふのは、もとは篠崎掃部助どのと申して何事にも人にすぐれていらしつて、楠殿も大切に思し召し、御一族のうちでも取り分け頼みになすつていらしつたのですが、その御子息の六郎左衛門どのと云ふお方の代に、楠どのが京方へ降參なすつたのをお恨みになつて遁世なされたぎり、何處へおいでになつたのやら今におん行くへも分りませぬ、當時は北國にいらつしやるとも聞きますし、御他界なされたとも云ひますけれども、これと申すたしかな便りがあつた譯ではないのです、と、さう云つて涙をながしますので、私も涙をおさへながら、そしておん身は身内の人ですか、それとも御領分の人ですかと云ひますと、此

の尉は年頃御領分の中に住んで百姓をしてをります者です、六郎左衛門殿が御遁世なされてからは、當所は荒れて、宮仕へをする者が一人もなくなつてしまひましたから、わたくしなぞは數へも入らぬ詰まらぬ身分ではありますけれど、御姿や御公達のおんありさまを拜みますにつけ、あまりおいたはしう存じますので、自分の仕事を打ち捨てて、此の五六年のあひだ御奉公をいたしてをります、六郎左衛門殿の御遁世の折、三つになつていらつしつた姫君や幼い若君を振り捨ててお出ましになつたので、二人のお子を、母御がとかく苦勞をなすつてお育てになつていらつしやいましたが、此の上臈さまもおかぬ別れの思ひをなすつて、そのおん歎きが積つたせゐでもありませうか、とうとう病人におなりになり、去年の春ごろからおわづらひになつて此の程ぢゆうは食事を絶やしていらしつたのが、あへなく御他界なされてから今日で三日になるのです、それにつけても御公達のおん悲しみはどれほどでせうか、はたで見てをりますわたくしでさへ眼もくれ心も消えるばかりに思はれます、あれ、あすこを御覧なさいまし、あれに見えるあの松の下にお埋め申してあるのですが、をさない方々は毎日お二人して泣く泣く茶毘所へお參りになります、けふもお供をいたしませうと申しましたら、いや、けふは供をしてくれずともよいと仰つしやいましたので、かうして人なみに田を打つてをりますものの、これとてもわたくしの身のためではありませぬ、御公達のおん行く末を考へましたら、おいたはしくてなりませんので、あの方々のお世過ぎのために田を打つてをります、そんな譯で此の尉のことをお打ちお打ちとお呼びになつて、お打ちでなければ夜も日も明けぬやうに頼りになさるものですから、わたくしもどんなに有り難く勿體なく思つてをりますことか、今日もお歸りがおそいのを案じてあの松の方ばかり見守つてゐますので、田を打つことも一向に身にしみませぬ、と、さう云つてさめざめと泣くのでした。わたしはあまり不便に思ひ、かう云ふ賤しい男でもこれほどのなさけは知つてゐるものを、自分は何と云ふ邪慳なことをしたのだらう、この私こそその六郎左衛門入道なのだと名のつてやらうかと思ひましたが、いやいや、それでは長の年月の修業が無駄になつてしまふと考へ直して、まあ、ほんたうに有り難い事です、何處の世界に尉殿

のやうな志の人があるでせう、ああ、お氣の毒な、世の中にこんな哀れなことがあるでせうか、そのいとけない人たちのおん歎きを思ひやつては、何とも申しやうもありませぬ、愚僧も實はそれほどの事迄はありませんけれども、それによく似た思ひをしたことがあるのです、何より頑是ない人の父や母におくれたのほど悲しいものはありませぬと申して、ころもの袖を顔にあてて泣きますと、さてはお僧も昔さう云ふ思ひなさいましたのですかと、一所になつて聲も惜しまず泣くのです。暫くたつてから私は、尉どのよ、此れから後もきつと見放さないやうになさいよ、どんなにどんなに父御や母御が草葉の蔭でうれしく思つていらつしやるか知れない、いづれは尉殿の子息に報いて來て、末は必ずめでたいことがあるに違ひありませぬ、かへすがへすもそのをさない人達をいとほしんで上げたら、佛神三寶も尉殿をお守りになるでせう、ではもう日も暮れますから、これでお暇しますと云つて、立つて行きますと、はるばると送つて來て、ねんごろに語りつづけたりしまして何につけても泣いてばかりゐますので、私も涙をせきあへずに、尉どのよ、もうよいほどに歸つて下さいと申したら、やうやう戻つて行くのでした。それから少し歩いてみますと、成る程とある松の木の下に人を茶毘した所がありますので、じつとこらへて一旦は通り過ぎましたものの、又心を返して思ひますのに、發心をして家を出た時こそ妻子を振り捨てて行つたけれども、今は死んでから三日にあたつてゐる、その茶毘所を見ながら行き過ぎてしまふと云ふのは無道ではないか、知らなければ仕方がないが、たまたま法師の身となつて通りかかつたのに、陀羅尼の一遍も囘向しないのは邪慳と云ふものだ、その上佛の利益にも背き、亡者の恨みもあるであらう、これは歸つた方がいいと悟つて、戻つて來て見ましたら、木かげに二人の幼い者がうづくまつてゐるではありませんか。あれこそ我が子よと思ひながら、上臈たちはどうしてこんな所にいらつしやるのですかと尋ねますと、その返事はしないで、ああ嬉しいこと、今日はお母さまがお亡くなりになつて三日目になるものですから、今わたしたちはここでお骨を拾つてゐましたら、ちやうど折よく御僧がお通りになつたのです、ほんたうに嬉しうございます、恐れながら、お經を遊ばして下さいますなら御利益でござい

ますがと、搔き口說きますので、その時の思ひはさらに夢ともうつゝとも、たとへやうもありませなんだが、辛くも氣を取り直してその幼い者たちをつくづくと見ますのに、姉は九つ、弟は六つになつてゐまして、さすがに下臈の子供には似ず、すがたかたちもいたいけなさまをしてをります。親子恩愛の道ですから、すぐにも抱きついて父よと名のらうと思ふ心は百たび千たびも起りましたけれども、いやいや、そんな弱いことでは今までの難行苦行が無になつてしまひ、佛道に入ることも出來なくならうと、怺へに怺へてゐましたつらさを、どうぞ思ひやつて下さいまし。さて子供たちのすることを見てゐましたら、玉の手箱の蓋の方を姉が持ち、懸子の方を弟が持つて、誰が敎へたのか、竹と木の箸で骨を折つてをります樣子に、なほさら言葉のかけやうもなくてただ泣かされてしまひましたが、はるばる時がたつてから、上臈たちはまだ幼くていらつしやるのに御自分たちで骨を拾つておいでになるのは、大人の方がいらつしやらないのですかと云ひますと、わたしたちのお父さまは遁世をなされてお行くへが分らず、そののちは下男のぢいやが一人で世話をしてくれるのですけれど、今日は供にも連れて參りませんでしたと云つて、それきりあとは物をも云はずに涙に咽んでゐるのです。わたしは陀羅尼を讀まうにも聲さへ出ず、なまじ故鄕へ立ち寄つたのがくやしくなつて我が身を恨めしく思ひましたが、さうしてゐましては果てしがないので、やうやう讀み終つた時でした。時雨がさつと降つて來まして、木の葉の露が涙のやうに落ちましたのを、姉が見ながら、妾に物を敎へて下すつた方と云ふのは京のお人で、つねづね申されましたのには、和歌の道はどんな恐ろしい鬼神をも和げ、なさけに疎い人をも動かし、佛も受納して下さる、女の身として和歌のたしなみがなかつたら淺ましいことだと仰つしやいましたので、わらはも七つになりました歲から、型のやうな文字を連ねます、それで唯今も此のやうなのを一首思ひつきましたと云つて、

草木までわれを哀れとおもひてや
涙に似たるつゆを見すらん

と、口ずさむではありませんか。それを聞いては強い覺悟も失せ果てて、露霜ならばとうに消えてもしまひさうな心地がしまして、もうもう今は包み隱してゐられようか、私こそはそなたの父の六郎左衛門入道だよと云はうとしたものの、なかなか、此處が大事なところだ、折角年ごろ思ひ立つて世を捨てた身の、今日と云ふ今日、子と云ふ首枷を擔つてなるものか、そんな了見を起すと云ふのは腑甲斐ないにも程があると、自分で自分の心を耻ぢしめて、それから申しますやうは、よくもお詠みになりました、まことにお道理至極の歌です、神や佛もさぞかし哀れと思し召すでせうし、お父さまやお母さまも草葉のかげでどんなに感心なさるでせう、わたくしのやうな卑しいものでも涙がとめどなく誘はれて來るくらゐですから、やがて心ある人がお聞きになつてお胸の中を思ひやらずにをりませうか、只今此處を通り合はせてこんなお痛はしいところを見ますのも、思へば前の世の約束かも知れませぬ、それにつけてもお別れしにくう存じますけれど、いつそお暇申しますと云つて立ち上りますと、仰つしやる通り、一樹の陰に宿りますのも、一河の流れを酌みますのも、皆他生の緣と聞いてをります、又いつの世にお目にかかることが出來ませうやら、かへすがへすもお名殘り惜しう存じます、殊更お經を遊ばして下さいましたのは何とお禮を申してよいか言葉にも盡されませぬと、姉がさう云つて袂を顏に押しあてて泣きますので、弟の方も、まだ聞き分ける歳頃ではないのですが、姉に取りすがつて身もだえしながら泣くのです。その時ひとしほ心も消え、眼もあてられない思ひがしましたのを、これしきの事は腹を切るのも同じことだと觀念しまして、歩き出しますと、いつ迄も此方を見送つてをります樣子に、私の方でも振り返り振り返り行きましたところが、子供は母の骨を箱の蓋に入れて、それを持つたまま我が家の方へは歸らうとせずに、違つた方角へ行くものですから、又氣にかかつて戾つて來まして、そなたたちは何處へおいでになるのですと聞いてみましたら、これからほうにん寺と申す御寺へ參ります、そこの御寺に都から尊い上人がお下りになつていらしつて、七日の御說法がありまして、今日はもう五日になります、みんながお參りに行きますから、わたくしたちもお參りをして、御聽聞申し、此のお骨を納めようと存じます、と、

さう云ひますので、さてもさても、幼いのによくお氣が付かれます、母御が彼の世でどれほどおよろこびになるでせう、そしてほうにん寺と申すのは此處からどのくらゐあるのですか。どのくらゐあるか、まだ行つたことはありませんが、大勢の人のあとについて參らうと思ひます。それならどうしてお供の人を連れておいでにならないのです、あまり無用心ではありませぬか、明日でもぢいやをお連れになつてお參りなさつたらよろしいのにと云ひますと、姉が答へて、此のおひだぢいやに連れて行つておくれと申しましたら、いとけない方がそんなことをなさらずともようございますと叱られましたものですから、今日までお參りが出來ませんでしたと云ひますので、さう云ふ譯ならわたくしがお伴ひ申しませう、そして上人をも拜み、結緣をも願ひませうと、一所について行きますと、その道すがらも姉はいろいろと物語りしまして、お父さまが生きていらつしやればちやうど御僧と同じお年頃なのですが、どう云ふ罪の報いであらうか、淺ましいことに、お父さまには生きながら別れ、お母さまには死に別れてしまひました、せめてもう少し成人してからのことならば、おん面影が身に添うて淋しい時の心の友ともなりましたらうに、恨めしいお父さまのなされ方ですと、又しても泣きながら口說きますのを、弟が聞いて、お父さまは佛におなりなさつたのだといつもお母さまが仰つしやつたではありませんか、そんなにお泣きになるものではありませんと、いぢらしいことを申しますものですから、それを聞かされ私の心は後先も分らぬ闇にとざされ、行く手の道も眼に見えぬやうな氣がしました。そのうちにだんだん御寺が近くなりますと、なるほど大勢の參詣人が後から後からとつづいて來るのです。それと申すのは、何でもその御寺は聖德太子の御建立で元弘建武の動亂の折に所領も何も失つてしまひ、お堂もすたれてゐましたのを、今度楠の世になりまして所領を元の通りに返し、破れたお堂を修理した上に、京都から妙法上人に來ていただいて供養をすることになりましたので、その噂を聞き傳へて諸所方方から集まつて來る貴賤の人が袖をつらね、道俗男女が市をなすばかり。御寺の境内は申す迄もなく、近所の木の下かやの下までもおびただしい人數が充ちあふれて、輿、ちりとり、鞍を置いた馬などが幾千萬と云ふ數を知らず、およそ其の

日の群集と云つたら、此のあたりの三箇國の人人が寄つて來たのだと申すことでした。さう云ふ混雜の折柄ですから容易に子供たちは中へ這入れさうもありませんので、どうするだらうと見てをりますと、お頼み申します、これは上人にお目にかかりに參つた者ですと、聲をかけながら人ごみの間を押し分け押し分け進んで行くのですが、諸神諸物も憐みを垂れて下さるのか不思議なことに、その子供たちの通るところは自然と人波が左右に分れて道を開いて行くのです。それからなほも見てゐましたら、二三人ばかり人を隔てたあたり迄來まして、姉が手箱の蓋を、上人の御前にさしおいて、三度禮をして、掌を合はせてうづくまりますのを、上人はしげしげと御覽になつて、そこにおいでの幼い人は何處のお方ですかとお尋ねになります。はい、これは楠の一門の、篠崎六郎左衛門の子供でございますが、父になります者は、わらはが三歳の時、楠殿と仲違ひをしまして、世を遁れて、今に行くへが知れないのでございます、此の程はお母さま一人に添ひながら、浮世を明かし暮らしてをりましたのに、有爲無常のならひの悲しさは、そのお母さまにさへ先立たれて、今日で最早や三日になります、お骨を拾ふ人もございませんものですから、弟と二人で拾ひまして、此の箱の中に入れましたけれど、何處へお納めしていいのやら分りませんから、上人にお願ひ申さうために此れまで持つて參りました、どうぞいかなる所へでもお納めなされて、お母さまが早く淨土へ行かれますやうに回向をなされて下さいましたら、ひとへに御利益に存じます、と、さう述べる言葉を默つて聞いていらしつて、暫く上人は物も仰せられずに、限りなく御落涙なされるので、聽聞の人までが、遠くにゐる者も近くにゐる者も、一度に袖を濡らすのでした。すると姉はまた袂から一つの卷き物を取り出して御前へ置きます。それを上人がお取り上げになつて聲高らかにお讀みになります。その文句に耳を傾けてゐますと、それ人間のさかひを聞けば、閻浮の衆生は命不定なりとは申せども、成人するまで親に添ふ人の子多く候ものを、如何なる宿執の報いに依つて、我等三歳の時父には生きての別れ、母には死しての別れとなりぬらん、今は早や賴む方なくなり果てて迷ひの心は晴るる日もなく、思ひの煙は胸を焦がし、悲しみの涙乾く間もなし、我が身のやうなる人しあらば、發

ひの道を語り慰なすべもあるべきに、まどろむ隙もなき程に夢にだにも逢ひ奉らず、身に添ふものはあるかなきかのかげろふばかり、僅三月を過したるだに思ひは千年萬年を暮らすに似たり、ましてや行く末の悲しきことはいかばかりぞや、露の命、幾秋をか保つべきとも覺え候はず、かやうに孤兒となり果てんよりは、ただ願はくは、我等二人をあはれみ給ひ母諸共に一つ蓮のうてなに迎へ給へ、と、さう書いてある後に、こざかしくも年號や日附けまでも記して、奥に下のやうな歌が添へてあるのです。

見るたびに涙ぞまさる玉手箱
　ふたおや共になしと思へば
玉手箱蓋と懸子の黒髮を
　いふ方もなき身をいかがせん

これを上人は讀みも終らずに、衣の袖を顏に押しあててお泣きになりました。道場の内に一杯になつてゐる聽衆が、貴賤、上下、道俗、男女の分ちなく、袂を絞らない者はありませんでした。これを聞いたり、見たりしまして、その場で髻を切つて刀と一所に御前へ差し出して、早速御弟子になる者もあります。さうかと思ふと、又此方では一人の女性が笠の下から髮を切つて、上人に參らせ、發心をする者もあります。その外われもわれもと遁世をする人の數はどのくらゐあつたことでせうか。その時の私の胸の中はただもう察していただくより外はありませぬ。折角ここまで來たものですから御説法をも聽聞したいのは山々でしたが、かうしてゐては今に絆に繋がれる、これはあぶないところだと、はつと氣がつきますと眼をつぶつて心を鬼にして、合戰の場で千騎萬騎の中へ斬り入り一命を捨てるのもこんなではないかと思ひながら、急いでそこを立ち去つたその折の覺悟の程と申すものは、六年前に初めて篠崎を出ましたよりももつと一生懸命でした。それからはるばると逃げて來まして、とある木の下に休みながら考へましたのは、座禪をしても悟りを開くのはなかなかむつ

かしい、所詮高野山は弘法大師の入定なされた所だし、諸佛群集の靈地だから、あの御山に勝る所は此の世にあるまい、これはあの御山へ上るに限る、そして奥の院のほとりにでも柴の庵を結んで一大事の修行をしようと、さう思案を定めまして、その心をたよりに此の御山へ參りましたが、そののちは更に他念がなく、我をも知らず、人をも知らず、まして故鄕の事をも知らず、寢ても覺めても念佛三昧に月日を送つてゐましたので、あなたがたにお目にかかるのも今日が始めてのやうな譯なのです。さう云へば今年の春のころ、河内の國から此の御山へ參つた人が噂をするのを聞きましたら、子供たちの身の上を楠が知つて不便に思ひ、あの時六つになつてゐました男の子を取り立てて、篠崎の跡を繼がせるさうです。姉の方は比丘尼になつたと申しますから、これも心安うございます。

——二人の僧は此の話を聞いて、まことに有り難い御發心です、殊勝に存じますと云つて貰ひ泣きをしたが、互ひに法名を名のり合つて見ると、今の僧は玄梅と云ひ、樊噲入道はげん松と云ひ、荒五郎入道はげん竹と云ふのである。そこで三人は一同に手を打つて云つた。これは不思議な御緣です、三人ながら名前の上に玄の字の附いてゐる修行者なのです、のみならず下の字までが松、竹、梅になつてゐます、さうしてみるとわたしたちは今の世ばかりの契りではなかつたのでせう、たとひ同じ智識から名前を授けていただいてもかう云ふことはめつたにありませぬ、ほんたうに珍しい廻り合はせではありませんか、長いあひだ此の山にゐながら、さうとも知らずに過してゐたのはくちをしう存じます、これから後は心を一つに持ちたいものです、樊噲どのも、あの女房に逢はれなかつたら、どうして發心なさることが出來ましたか、いづれもいづれも色こそ變れ思ひも寄らないはずみから道心を催すのです、あながちに惡をも嫌つてはなりませぬ、惡は善の裏なのです、戀をも厭つてはなりませせぬ、戀は心の細いところから起るのです、かの一大事は心の細い人でなければ思ひ立つことは叶ひませせぬ、と、さう云つて語り合ふのであつた。（をはり）

定價			
定價	一冊	六冊	十二冊
	八十錢	四圓八十錢	九圓六十錢
送料	參錢	送料共	同

毎月一回 一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます

△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます

△御購讀は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割増の事

△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和四年十月十八日印刷
昭和四年十一月一日發行
（禁轉載）

編輯兼發行人　島中雄作
印刷人　竹內喜太郎
東京市牛込區榎町七番地
印刷所　日清印刷株式會社
東京市丸ノ內ビルヂング五八八區
中央公論社
電話丸ノ內二〇六番
振替東京三四番
同　長野三二〇五番


新マツダ
六個入
ホームカートン
御進物用に
電球御保存用に
殊にお子供衆のおもちゃに
電球は「ホームカートン入り」で
お買ひ下さい
新マツダ・ランプ
内面艶消
新マツダ
もちよく明るく
電氣がお徳

GHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co, Published Monthly
Terms of Subscription : Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

